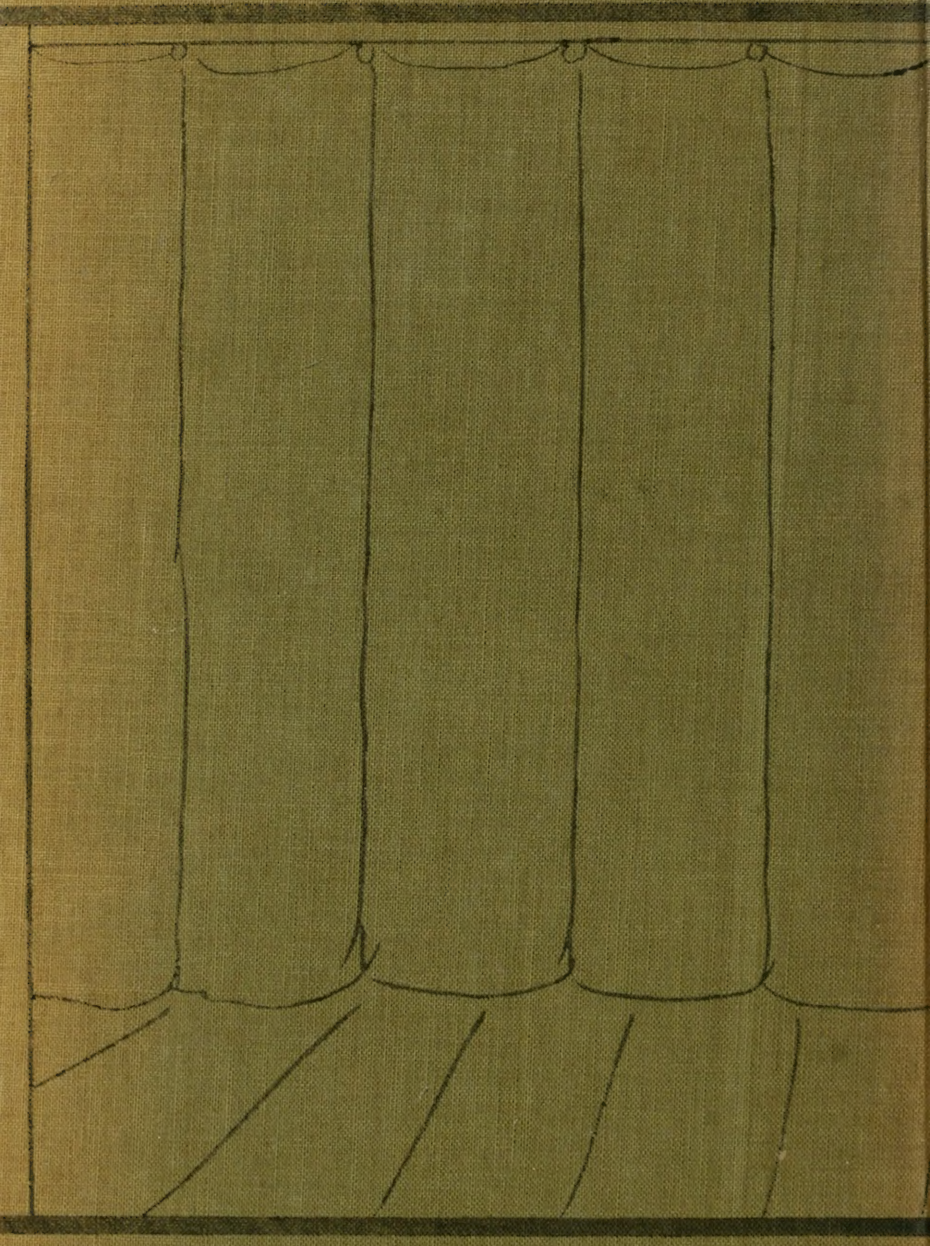




日本戲曲全集
第三十六卷

岡鬼太郎
高安月郊
山崎紫紅
伊原青々園
長谷川時雨

岡田八千代
野上彌生子
大村嘉代子
木村富子
弘津千代

現代篇第四輯

東京 春陽堂版



「散書紅のかしく」かしく内奥座敷の場



「八代目團十郎」澤田の八代目團十郎•中井の父海老藏•野村の蝦十郎



「あじろ舟」鴈治郎の網代津之助



「釣天井」中村扇雀の大工與四郎



「甕破柴田」猿之助の三上太郎盛重
福助の侍女常夏



「吉田御殿」天樹院（律子）花井繁之丞（勘彌）竹尾（菊江）



「みだれ金春」秀調のお房・宗十郎の氏清・松蔦の繁野



「玉菊」福助の嫁おふみ



「玉菊」歌右衛門の玉菊・壽美藏の與之助



「高野物狂」猿之助の高師四郎●兒太郎の春滿



伊原青々園



岡鬼太郎



山崎紫紅



高安月郊


長谷川時雨


野上彌生子


岡田八千代


大村嘉代子


木村富子


弘津千代

日本戯曲全集　第三十六巻　目次

岡鬼太郎篇

山崎紫紅篇

伊原青々園篇

岡田八千代篇

野上彌生子篇

岡鬼太郎篇

散書紅のかしく（二幕三場）

役名

かしく　元柳橋の藝者
お多　かしくの母親
小道具屋市兵衛
七郎助　金貸
小半　柳橋の藝者
梶の長兵衛　御用聞
お民　茶店の女房
お大　同じく娘
清之助　福島屋の伜
六三郎　清之助弟
お園　仕立屋の娘
惣次　駕籠舁
吉十　同じく
留吉　講中の男
九助　寺男
外に駕籠舁、參詣の男女

序幕

目黒不動瀧泉寺境内の場

徳川時代の或年、六月廿八日の晝巳刻頃

本舞臺後へ下げて、正面上寄りに高き石段、此の下に大きなる瀧壺、岩組の上より、獨鈷の瀧の男瀧女瀧を落し、瀧壺の外、下の方に藁葺の休み茶屋、軒先に、「しら玉、ところてん」と書いたる旗を竿に附けて出し、其處の柱には「せうちう、本直し」と書いたる木札を打付け、店には、鹽煎餅、駄菓子、心太の箱、燒酎の徳利など並べてある、店先と上手には床几を出して、招ぎ猫の火入を置きあり、石段の側には鷹居の松の大木、石段瀧壺の兩側平舞臺には、所々に杉の立樹、此の後、上下とも總て樹木の張物、日覆よりは大木の枝の切出しを下して、石段瀧壺の上を見切り、總て目黒不動境内石段内の體よろしく。薄く風の音、蟬の聲、寺鉦にて、幕明く。

ト、上手の床几に、講中の男留吉（四十位）、浴衣姿、赤脚に脚絆草鞋穿きにて休み、側に「京橋明王講」と

染出したる小旗を附けて雨掛を置き、心太を食べてゐる、これと並んで寺男九助(五十位)、竹箒を持つたまゝ腰を掛け。

九助　幾ら講中の用でも、京橋から目黒まで、此の暑さに往き還りは、應へるだらうね。

留吉　これでも、六つ前から起きて支度さ、隨分せつこら來たやうでも、やつぱり日中だ。

九助　下町へ行き着く時分には、丁度片蔭がなくなるね。

留吉　今日も亦暑くなりさうだが、斯うなると、お前さんなぞは占めて了ふね、お山の中は日の目は遠いし、風は不ン斷だし、掃除と云つた處で木の葉は落ちず。

九助　インヤ、下町の人は一概に然う思ふが、處がなかなか然うでねえ、好くしたもので、夏は夏で又、此の常磐木の落葉と云ふ奴が、絶えずあるでね。

留吉　成る程ね、何になつても樂はさせねえかエ、(ト、心太を食べてしまひ)ヤ、何うにか腹の中から、少しは涼しくなつたやうだ、おい、おかみさん。

(ト、懷の財布から錢を出して見せて、心太の盆の上に置くと、茶店の娘お大(十六七)、前へ出て來り。)

お大　毎度有難う存じます。

(ト、禮を云ふと、お大の母親お民(三十六七)、店の内より。)

お民　何卒御緩りお休み下さいまし。

お大　もう御參詣も、一時あひで御座いますから。

(ト、此の間に、留吉は身繕ひして。)

留吉　思召しは有難いが、午前までには、漕ぎ着けにやアならねえ。

九助　此のお大坊が留めても、留まらずかエ。

留吉　此の炎天ぢやア、色氣も出ねえ。

お大　ホ、、、、、。

(ト、これにて、留吉は雨掛を擔ぎ、笠を持つ、九助も一緒に立上がる。)

お民　何うも有難う御座います、又お願ひ申します。

お大　お氣をおつけなすつていらつしやい。

留吉　イヤ、お世話樣。

(ト、少し足早に、留吉は東の歩みを向うへ、九助は上手へ入る、茶店の二人は後を片付ける、此の中、土地の者と見える若い男と女の二人、石段より下りて來る、花道を向うへ入る、又これと一緒に、女一人上手より東の歩みを向うへ入る、此の間にも。)

お民　お掛けなさいまし、お休みなすつて行らつしやいまし。

(ト、口癖のやうに云ふ、やはり蟬時雨、寺鉦の音、花道より、元柳橋の藝者かしく(二十四)、帷子駒下駄、

日傘を翳して出て來ると、續いて後より、駕籠舁惣次（三十五六）、吉十（三十位）の兩人、ぶらぶらと附いて出で。）

惣次　ねえ、おかみさん、お歸りに乘つて行つてやつて下さい、此方も丁度歸りなんですから。

吉十　お願ひ申しやす。

（ト、これにて、花道よき處に止まり。）

かしく　イエ、折角で御座んすが、わたしはつい此の近所の者、毎月御縁日に來る信心參り、乘物なぞに乘つては、罰が中りますよ。

吉十　ナニ、不動樣が駕籠舁の邪魔をなさるものか、そんな因業な事を云はねえで、功德に乘つておくんなさい。

惣次　思召しで好う御座います。

（ト、尙も執念くかしくに附いて、舞臺へ入る。）

お民　お休みなさいまし、お茶を召上がつていらつしやいまし。

お大　オヤ、青山のおかみさんで御座いましたか。

お民　よくマアお早く。

かしく　後で又御厄介になりますよ。

（ト、言葉少なに上手へ行きかゝる、其の後先に立ち塞がつて。）

惣次　オイオイ、何とか云つて行きなせえな、幾らでも好いからと、口を酸くして、へゝ、お賴み申してゐるぢやア御座えませんか。

吉十　ねえ、青山のおかみさんェ、目黑からは、餘り御近所でも御座いませんね。

惣次　オウ、合棒、邪が非でも、乘つて行つて貰はうぢやアねえか。

吉十　大の男が、鼻面を揃へてお賴申すんだ、それが滿更分らねえ御人體でもねえ、ねえおかみさん。

惣次　何とか返事をして下さいまし。

（ト、忌に云ふ、お民は見かねて前へ出で。）

お民　モシ、お前さん方、爰は不動樣の御境内、そんな大人しくない事をお云ひなさんな。

（ト、優く云つても、目に角立て。）

惣次　エヽ、默つてゐろ、茶代の一文も、餘計に貰はうと思やがつて、惡く胡麻を摺りやアがるな。

吉十　サア、乘るのか乘らねえのか。

惣次　キツパリと早く。

惣次
吉十　返事をしてくれ。

（ト、これにて、かしく當惑の科、此の時、向うより金貸七郎助（四十位）、帷子姿駒下駄を穿き、扇子を持つて駈出で來り。）

七郎助　ヤイ、待て待て、大聲を揚げて、うぬ等は晝日中何をするのだ。

（ト、直ぐ舞臺に入り、駕籠舁兩人を睨み付ける。）

吉十　何をすると、お前は何だ、それを聞いて何うする氣だ。

惣次　エヽ、要らざる口を出しやアがるた。

（ト、目交ぜして、惣次は息杖、吉十は空手にて、双方より突然に掛かるを、七郎助は種々に交はし。）

七郎助　エヽ、草鞋虫め等、踏み潰されるな。

（ト、一寸立廻り、兩人を散々に痛め付ける。）

惣次　野郎、覺えてゐやがれ。

（ト、惣次吉十は、上手へ逃げて入る。）

かしく　マア好い處へ、七郎助さん。

七郎助　オウ、お梅さんか、誰だか些とも氣が着かなかつたが、御境内で雲助染みた野郎の大聲、相手は女、此奴は默つてゐられねえと、持つたが病のお節介、突然驅付けて威してやつたが、それでもマア、好い鹽梅に、口ほどでもなく逃げて行きやした。

かしく　晝日中、飛んだ馬鹿な目を見る處を、お蔭ですつかり助かりました。

七郎助　何の、知らない仲ぢやアなし、改まつた御挨拶では痛み入るが、時にお前さん、女一人で目黒までお參りとは、餘つ程の御信心だね。

かしく　エヽモ、昔からの不動樣信心、毎月缺かした事は御座いません、

七郎助　わしも大の信心で、正五九には麻布から必々とお參り申すのだが、先月は鬼の霍亂で、つい御無沙汰になつてしまひ、此の炎天の六月に、態々やつて來ましたのさ。

かしく　それで圖らず、今のお世話。

七郎助　これも不動樣の、お引合はせかも知れませんねえ。

（ト、顔を見合はせて互に笑ふ。）

お大　マア、おかみさん、お怪我がなくつて。

お民　旦那、何うも有難う御座いました。

（ト、二人も共々喜んで、禮を云ふ。）

七郎助　何の、こんな事は男の役、禮を云はれる程でもねえが、それは兎に角、お梅さん、マアお參詣をして來やせう。

かしく　眞に來早々、思はぬ暇入り。

七郎助　それぢやア一緒に。

（ト、側へ寄ると、一寸身を引き、よろしく科。）

かしく　アノ、わたしは、女坂から參りますゆゑ。

（ト、これにて、七郎助も一寸科。）

七郎助　成る程ね、それぢやア此方は男坂、兩花道と出掛けやせうか。

お民　行つていらつしやいまし。

お大　お靜かにいらつしやいまし。

（ト、鳴物よろしく、かしくは石段の前を上手へ入る、七郎助は宜く思入、石段を上がり掛けると、此の時、普束の歩みより、前の駕籠舁兩人小走りに出で來り、普通の調子にて。）

惣次　ヤイ野郎、今はよくも己達を酷い目に遭はしたな。

吉十　女は何うでも、サア、これからは手前が相手だ。

（ト、七郎助の右左から詰めかける、七郎助振り返り。）

七郎助　エヽ、執念深え、何時まで一つ事を云つてゐるのだ、仕事の邪魔になつたと云ふなら、おれが代りに酒手を遣らう、野暮を云はずと、サア早く行け。

（ト、紙入から額銀を二つ出すと。）

惣次・何だ、酒代だ、（ト、吉十と顔を見合はせ、頷いて七郎助の側へ寄り）へエ、それぢやアこれを二人に、（ト、そのまゝ受取り、小聲になり）何うです旦那、細工は流々。

吉十　巧い寸法に行きやしたね。

七郎助　コレ。

（ト、茶店の二人へ思入、惣次、吉十も四邊へ科。）

吉十　それぢやア旦那。

惣次　お辭宜なしに、戴いて參ります。

（ト、大きな聲、頭を下げ下げ、兩人は又上手へ入る、七郎助は石段を上がつて行く。）

お民　ねえ、お前、つひぞ見掛けない駕籠屋だが、御境內へ來てまで、酷い事をするねえ。

お大　又暴れるかと思つたら、酒手を聞いて、直ぐ猫のやうになりましたねえ。

お民　何でもお金の世の中だよ。

（ト、やはり鳴物にて、向うより、呉服屋福島屋の伜清之助（三十位）と、弟六三郎（二十五）の兩人、何れも帷子薄羽織、雪駄穿きにて出で來り。）

清之助　駕籠に乘つてゐても、町中は隨分暑いのに、此處へ來ると、歩いてゐるのに、汗が一度に引つ込んでしまふ、怖ろしいものだねえ。

六三郎　お山の方から、氷のやうな風が來ますね。

清之助　何しろ、あの瀧の茶店へ行つて、お茶でも一口飲みませう。

（ト、話しながら舞臺へ入る。）

お大　お休みなすつていらつしやい。

お民　お掛けなさいまし。

清之助　姐さん、お茶を一つ下さい。

六三郎　ア、好い風だ。

（ト、瀧の前の床几に掛けて、四邊を見廻す。）

お民　入らつしやいまし、お暑いのに好く御參詣で御座います。
清之助　ねえモシ、わたしは平常を知りませんが、今日は御縁日だと云ふのに、大分靜かで御座いますね。
お民　はい、間の月では御座いますし、お暑い盛りだもので御座いますから、お近い方は最早、五つ半頃までに、大抵お參りで御座います、（ト、盆に鹽煎餅と茶を載せて出しながら）旦那方は御遠方からで御座いますか。
清之助　エヽ、赤坂の田町から來ましたが、宅の年寄が病氣なので、方々へ御信心をして歩きます。
お民　それは嘸御心配で御座いませう。
六三郎　兄さん、マアお參りをして來ませう。
（ト、少し急き立てる。）
清之助　お前は相變らず性急だね、（ト、立上がり）では又歸りに。
お民　白玉も心太も御座います、何卒御緩り。
清之助　はい、有難う。
（ト、兩人は石段を上がつて行く、これと摺れ違ひに、以前の七郎助下りて來て、上手の床几に腰を掛け。）
七郎助　おかみさん、家には直しがあるのだね、少し貰はうか。
お民　はいはい、宜しいのが御座います、（ト器を出しながら）先程は、旦那様のお蔭で、無事に濟みまして、結構で御座いました。
（ト、直しを盆に載せて出す。）
七郎助　彼奴等も、二言目には、酒代酒代と云ふが、飲ける口には、全く夏も冬もありはしないて。
（ト、チビリチビリ飲み始める處へ、かしく上手より出で來る。）
ヤ、お梅さん、御緩りだつたね。
かしく　お札を戴いてゐたものですから。
七郎助　主の爲にか、イヤ、旦那様はお仕合せだ、マア、爰へ來てお掛けなせえ。
（ト、片端へ寄る、かしく是非なく並んで掛けると、お六は駄菓子と茶を持つて來る、此の間に。）
何うですお梅さん、芥ッ臭え下凡ッ茶より、此奴を一口お附合ひなさらねえか、直しは滿更甘黒でもないやうだ。
かしく　はい、有難うは御座んすが、此頃御酒は一向に、それでなくても女だてら。
七郎助　晝日中、往來ッ端でとお云ひなさるのか、ナニ、ほんの一ッ猪口のお附合ひだアね。
かしく　折角ですが、御酒はフッツリ。
七郎助　昔は隨分浴びなすつたと、人の噂に聞きやしたがね。

かしく　サア、それゆゑに、（ト、一寸思入）今では止めて居りますのさ。

（ト、少し煩さうに云ふ。）

七郎助　堅いで通つた白鼠、あの旦那に實意を見せてか。

かしく　エヽ。

七郎助　福島屋の一番番頭石部の金吉が、柳橋の婀娜者を、イヤ、人は誰しも見掛けによらねえ、ね、お前さんに酒が一滴も飲めねえやうに。

かしく　何卒惡く思つて下さいますな。

七郎助　それでも先刻の駕籠屋共の、災難を免れた祝ひだ、切て眞似ばかりでも受けて下さいな。

かしく　ほんに先刻は御深切で助かりました、何れその中お禮には。

（ト、煩がつて、密と茶代を盆に置く。）

七郎助　禮に來て下さらうと云ふ譯か、イヤ、それこそ御深切は忝いが、どうで一遍上がつたお家、近々にこちらから、伺ふ用がありませうよ。

（ト、少し忌に云ふ、かしく思入あつて。）

かしく　其の御用の事は、兄から聞いて存じて居ります、必と御迷惑にならぬやう。

七郎助　然う先ッ潜りをしずともさ、市兵衛さんと三つ金輪で、話し合にする法もあり、マアお互に、餘り野暮は云ひますまいよねえ。

（ト、双方よろしく科、處へ石段を下りて、清之助六三郎の兩人出で來る。）

かしく　オヤ、福島屋の若旦那。

六三郎　オウ、お前はかしく。

清之助　エヽ。

（ト、これにて、六三郎もかしくも科。）

六三郎　久しくお目に掛かりませんでしたが、此頃では。

かしく　青山の權太原の、然る方に緣付いて居りまする。

六三郎　然うで御座いましたか。

（ト、互に他所他所しく云ふ、清之助は最前の床几に掛けながらも、何不審の思入、お大此の間に茶を酌んで出す、七郎助はジロジロと六三郎を見ながら、續いて直しを飲んでゐる、此の時、上手より以前の駕籠屋兩人、酒に醉ひたる科、石段の前を通らうとして、今床几の方へ行き掛けてゐる六三郎に、よろよろとつい突き當る。）

惣次　ヤイヤイ、何を不思議な面をしやアがる、往來中に立ち擴かつて、ぼんやりした野郎だなア。

六三郎　はい、飛んだ麁相を致しました。

（ト、よろしく科、吉十は七郎助を見て。）

吉十　ヤ、これは旦那、お蔭ですつかり食べ醉ひました、

一稼ぎ稼いで腹はへつてゐる、暑さは暑し、あすこの茶店で焼酎をグウイと引つ掛けたら、今度は些と懐が涼しいんだ。

惣次　ヤイ、野郎。

（ト、これは又、六三郎に向ふ。）

吉十　もう其奴は止せよ、旦那に又少し戴かうぢやアねえか。

（ト、これにて、七郎助は急に立上り。）

七郎助　此奴等は、大抵にして置かねえと、爲にならねえぞ。

吉十　幾度でも毆られ賃が出ると極まりやア、萬事其處はお指圖通りだ。

惣次　そつちの息子に係り合つて惡けりやア、此方の年増だ、ねえ旦那、成る程こりやア美い女だね。

（ト、かしくの顔をヂツと覗く、かしくムツとしたる科。）

かしく　モシ、お前さん方、堅氣の子息さんや女を捕まへ、片つ端からぐヅツて掛かるは、餘りと云へば無法な仕方、田舍と云つてもお江戸の續き、好い加減にしてお置きでないか。

（ト、癇癪の氣味に云ふ、皆々かしくの顔を見る。）

七郎助　マア好いやな、お梅さん、酒の上での無理難題は、誰にでもある事だ。

吉十　おつう高慢を云ふ女だな。

惣次　今度は一番眞劍に、おれツちの腕を見せてやらうか。

（ト、摑み掛かられ、避け切れず、二三度交してグツと押へ。）

かしく　エヽ、モ執念い。

（ト、ドンと突き飛ばすを、木の頭、惣次蹌踉けて濫壺へ落込むを見て、皆々へ一寸科、吉十は尻込む。）

下戸の知らない水の味、ホヽヽヽヽ。

（ト、靜かに笑ふ、一同顔を見合はせる。此の模様宜く、寺鉦に風音などあしらひて、幕。）

大詰

青山權太原かしく内の場

前の場の翌月、七月七日の夜戌刻頃

本舞臺眞中に常足の二重家體、正面上手に佛壇、此の下に戸棚、續いて葭戸の出入り、此の後は上り口の土間、下手へ向つて格子戸の出入りあり、葭戸の此方は、前へ折曲げて壁と窓、上手も同じく、前へ折曲げて壁、續いて葭戸の出入り、此の外ズツと奥へ緣側を附け、

突當りの壁の處より、上手へ折曲げて、此の縁を續ける、上手縁外の平舞臺には、秋草など生ひ茂り、此の中に古き井筒、小さき青葉の立樹などあり、爰に七夕の笹を立て、下手は他所の古びたる板塀、上手は古き竹垣の外に、空地樹木などある張物にて見切り、總て青山權太原かしく内の體よろしく、遠く尺八の音など聞えて、幕明く。

ト、二重には、片隅に寄せて長火鉢を置き、此の側に、前の場のかしく、單衣引掛け帶、これと並んで、柳橋の藝者小半(二十三四)、同く單衣姿、何れも團扇使ひ、此の下に、かしくの母親お冬(四十四五)、煙草盆を横に置いて、煙草を喫んでゐる、三人の前には、酒肴を並べたる廣蓋、縁側には、今戸燒の火入に蚊燻しがしてあり、佛壇近くに燭臺が點いてゐる。

小半　アヽ、久し振りに、本當に醉つてしまつて、赫々として仕樣がない。

（ト、持つてゐる盃を置く。）

お冬　それ程飲けもしなかつたぢやありませんか。

小半　何うして、阿母さん、かしくさんが自分は飲まないで、他にばかり勸めるんですもの。

かしく　わたしが醉つたらお慰みに、隱し藝でも出すんだがね。

お冬　目の据わる藝道なんかは、眞平だよ。

かしく　それでも、商賣を止めてから、最早半年の上も、折角取置にしてあるものを。

（ト、笑ふ、小半も笑つて。）

小半　あの隱し藝なら、一生藏つて置きッ放しの方が好いよ、ねえ阿母さん。

お冬　然うですともさ、飲めないお酒を勸め酒に、無理に飲んだが始まりの惡い癖、あの癇癪には、隨分困らされましたが、今の旦那が出來てから、悉皆眞面目のお附合で、好い鹽梅に出なくなりましたよ。

かしく　もう、昔の棚卸しは、止しておくんなさいよ、時に棚卸しと云へば、お店の用で此の暑さに、遙々と京大阪まで出掛けた旦那、本當に、煩ひでもして下さらなければ好いがねえ。

小半　お前さん、又始めたね、醉はない醉はないと云つても、久し振りで飲んだ所爲か、やつぱり幾らか醉つてゐるよ。

かしく　愚痴ぢやなけれどコレマア聞かしやんせさ、往き還りともで、三月の上も掛かると云ふのだもの。

小半　それでも好いやね、何樣な美い京女を見ても、浮氣をするやうな林右衞門さんではなし、歸りには商賣柄、

西陣の丸帶でも、ウンと船に積んで、お土產に持つて來ておくれだらうよ。

お冬　本當に、あのお堅い番頭さんに、何うしてこんなお梅のやうな者が、お氣に入つたか、人は全く合緣奇緣で御座いますねえ。

かしく　福島屋の六三郎さんが、吳服屋仲間の參會で見えた時、附いておいでの林右衛門さん、其の大一座が緣となり。

小牛　それでも好くマア、斯うなるまで、お店へ知れずにゐますねえ。

（ト、お冬に云へば。）

お冬　大旦那も總領の若旦那も、堅いで通つた福島屋のお店、表向きに別に世帶を持つまではと、四十近いにまだ親掛かりの番頭さん、隱せるだけはと仰有るので、こんな邊鄙な山の手に、婢も置かず、マアマア今少しの辛抱と、斯うして密と暮らして居ります。

小牛　根がお武家だけ、阿母さんと云ひ、かしくさん、心も口も堅いから、林右衛門さんは幸福さね、（ト注いである酒を、グッと乾し）ところで些とは涼しくなつた、もうお納めと致しませう。

（ト、廣蓋を一寸傍へやる科。）

お冬　もう駕籠も來るでせうよ。

（ト、お冬は火鉢の側へ行きて、湯呑に茶を注いで小牛に出す。）

かしく　牛ちやん、泊つておくれでないか。

小牛　淋しいのかエ。

かしく　旦那も每日居る譯ではないのだが、江戶を離れて了つたと思ふと、もう何だか、一生逢はれないやうな氣がして、しかも選りに選つて、七夕樣の日に別れるなぞと。

お冬　何だねお前、緣起でもない。

かしく　ねえ、阿母さん、今頃は何處まで行つておいでだらうねえ。

小牛　お止しよ、お前さん、まだ今朝立つたばかりぢやないか。

お冬　平常眞面目な仲だけにねえ。

（ト、お冬は娘の氣を酌んでやる、小牛もシンミリとなり。）

小牛　柳橋で鳴らした八幡屋のかしくが、散々飲んだお酒までも愼んで、こんなに思ひ込んで居るとは。

かしく　わたしやア、何うかしたんだねえ。

（ト、よろしく科、折から下手より、駕籠舁兩人、駕籠を擔いで出で來り。）

駕籠の一　ヘエ、駕籠が參りました。

（ト、格子の外から聲を掛ける。）

お冬　はい、御苦勞樣。

小半　では此方も出立としませう、寢坊だものだから、お見送りもしないで、遲く來た上御馳走にまでなつて。

お冬　飛んだ事を、却つてお土産まで戴いて。

かしく　遠い處を心に掛けて、よく尋ねておくんなすつた。

小半　では、かしくさん、ぢやアないお梅さん。

かしく　暇が出來たら是非その中。

（ト、これにて小半駕籠に乘る。）

お冬　駕籠屋さん、氣を着けて上げて下さいよ。

（ト、門へ出て、帶の間から金を出して遣る。）

駕籠の二　へエ、承知致しました。

（ト、駕籠屋は祝儀を戴き、舁き上げて、花道を向うへ入る、二人は見送る。）

お冬　以前の交誼とは云ひながら、忙い中を此の暑さに、何と云ふ嬉しい人だらう。

かしく　阿母さん、又何だか淋くなつたね。

（ト、元の處へトンと坐つて、手酌で飲む。）

お冬　お前もうお酒はお止し、話し話し飲む中は好いが、理に落ちると體に障るよ。

かしく　大丈夫、別に疳の立つ事もないのに、何で昔の癖なんぞが出るものかね。

お冬　それでも、モウ御飯にしよう、然うして早く締まりをして。

かしく　今夜は早寢としませうかねえ。

（ト、云ひながらも、尚續けて飲む、お冬は次の室より蟆足の膳を持つて出る、薄く風の音、上手にて蟲の聲、此の時向うより、かしくの兄分小道具屋の市兵衛（三十七八）、單衣日和下駄、小田原提灯を提げて先に立ち、續いて前幕の七郎助、單衣駒下駄にて、連れ立ち出で來り、空を見上げて。）

七郎助　山の手の淋いも好いとして、此の空模樣では、歸りは愈降られるかね、惡い辻占だ。

市兵衛　一雨あつたら、グッと涼しくなるでせうが、何だかゴロゴロ來さうですよ。

七郎助　何處ともなしに、草いきれがするやうだ。

（ト、舞臺に入り。）

市兵衛　御免下さい、わたくしです。

（ト、格子を明けて、提灯を消す。）

お冬　オヤ、市さんですか。

（ト、立つて行く。）

市兵衛　日の暮れるのを待つて、お客樣をお連れ申しました。

七郎助　阿母さん、其の後は。

（ト、ヅンヅン上がつて内へ通る、かしくは一目見てジッと科、お冬は膳や廣蓋を片寄せる。）

これは大層御馳走樣ですね、旦那の立ち振舞の後祝ひとでも云ふ譯かね。

（ト、閒は寸坐る、お冬はジッと顔を視て。）

お冬　あなたは日外おいでなすつた。

七郎助　左樣です、七郎助で御座いますよ。

市兵衞　旦那のお留守になるのを待つて、連れ立つて參りましたが、別に大して面倒な事では御座いません、ナニ、御心配をなさいますな。

七郎助　オイオイ、市兵衞さん、幾ら以前がお前さんのお主筋でも、此の用談を相手の前で、然う安く云はれちやア、家業に障る、モシお梅さん、此の中目黑で逢つた時、駄目を押して置いた後、市兵衞さんにも係り合つて、何とか形を附けて貰はうと、ヤイヤイ云つても埒が明かず、其處で今夜は否應なし、直掛合に上がりましたよ。

（ト、此の間に、お冬は二人に茶煙草盆を出す。）

かしく　先月までの證文面とは、確に覺えて居りますが、内證で都合をしたお金。

七郎助　貸した金ゆゑ取りに來ました、（ト合方になり）旦那に引かされた時の身始末に、實意を見せて手助けと、旦那に隠して算段した、飛んだ貞女の小百兩が、唯一度の内金で、殘りがまだまだ七十兩、期限が切れて四五日經つのに、音沙汰なしとは氣が強え、とサ、其處でこなたの兄貴分、請判の市兵衞さんに、打つ突かつての掛合さ、幾ら金貸が商賣でも、利息さへ取れば好いと、ばかり云つてもゐられねえ、市兵衞さん、お前さん此の妹御に、話は委くしておくんなすつたらうね。

市兵衞　何で捨てゝ置きますものか。

七郎助　それなら一體何うして下さる、お困りだらうお氣の毒と、お察し申して待つてゐたら、赤ッ面にはならずに濟まうが、それでは此方の顔が立る、と云つた處で世の中は、理窟ばかりのものでもなし、其處は互の人情づく、ねえお梅さん、あの無法者を取つ締めた目黑此の方可なり實意の七郎助、諒みと默なら、今が今でも證文を卷いた上、世間を廣く下町住ひ、春は江の島夏は箱根と、隨分したい三昧に、暮らさせて上げまいものでもない、工面に盡きた七十兩と、何方が出來ない相談か、胸に手を當てジックリと、思案して見ておくんなさいまし。

（ト、態と柔く云ふ。）

市兵衞　サア、其の事も目黑この方、筋は通してゐる吾、御註文はよく分かつてゐますが、目ッ張りッこで然う言ひ出しては、何うやら物に角が立つ、お前さんは些との間、あの奥座敷で足でも伸ばし、わたしの行くのを待つ

てゐて下さいまし、阿母さん、有合はせで何卒一口。
お冬　ハイハイ、丁度手の着かないお肴が御座います、七郎助さん、御退屈でも何卒あちらで。
市兵衛　涼みながら、少しの間。
七郎助　さうならそれで。野暮は云ふまい、藪ッ蚊でも追ひながら、好いお返事を待つとしやせう。
（ト、七郎助はかしくに思入、お冬に案内されて、緣側傳ひに、上手奥の座敷へ入る、市兵衛は科あつて。）
市兵衛　わたしが仲に入つて居りながら、行届かない此の成行、七十兩が百兩でも、それは金銭唯の貸借、證文を書替へると、強て頼めばあの男だとて、首を取るとも申しますまい、とは云ふものゝ、此の相談が聴かれなければ、旦那の事を洗ひ浚ひ、福島屋へ打ち撒けて、子飼からの辛抱を、水の泡にさせてやると、此方に感へる威しの種、サ、其處で忌味な無理難題、そんな無法な奴とも知らず、同じ所の御簞笥町で、顔馴染なのを幸と、つい持込んだ金の工面、飛んだ者をお世話申して、此の市兵衛今となり、面目次第も御座いません。
（ト、よろしく詫び入る。）
かしく　何詫びる事が御座んせう、以前は以前、今は今、赤の他人の親子の者を、古主と云つて大事に掛け、藝者勤めの五年の間も、ほんの兄より妹より、親身にしての世話介抱、まだ半年の附合でさへ、旦那までがお前の親切を、つくづく喜んでゐて下さいますよ。
市兵衛　然う仰有つて下さるほど、今度の始末の埒の無さ、尚更以て申譯が御座いません。
（ト、此の時、お冬は葭戸の向うより、二本の燗徳利と箸を載せたる膳を持つて出で來り、廣蓋の肴を器に取分け、一本の徳利は火鉢の側に、一本は銅壺に入れながら。）
お冬　七郎助さんの樣子では、お金よりも、此のお梅が欲い口振、それをキッパリ斷ると、何うやら旦那のお證に。
市兵衛　エ、又それを言ひ出しましたか、初めて此方へ上がつた時、目に留まつたとか、見染めたとか、小面の憎い贅澤文句、勝手にしろとは思つたものゝ、案の外なる執念さ、若黨上がりの出來星道具屋、市兵衛風情には工面も附かず、彼奴を抑へる智慧もなし、阿容阿容と今夜連れ立つて、聞くさへ業腹な話の取次、お察しなすつて下さいまし。
かしく　父さんが浪々の末あの世の人、切迫詰まつて、お前を見と世間を繕ひ、柳橋から左褄、馴れても辛い恥かしい、其の朝夕を辛と今、地味に暮らして喜ぶ間もなく。
お冬　又もや斯樣な破滅になるとは。
かしく　阿母さん。

お冬　お梅。
市兵衛　お二人様、お免しなすつて下さいまし。
（ト、三人よろしく科、お冬は裔と涙を拭ひ。）
お冬　マアわたしは彼方へ行き、精々御機嫌を取つて居ませう、市兵衛さん、お前さんは、お梅と何卒好い様に。
市兵衛　ハイ、（ト、顔を上げ）初手に家來が主人の兄と、拵へ事をしたからが、道に背いた大間違ひ、（ト、氣を變へ）イヤ、今となつてはそれも愚痴、何とか思案を致しませう。
（ト、これにてお冬は銅壺の德利を出し、膳に載せ、縁側を上手へ入ると、此の時少しく雷鳴、稻光する、市兵衛ハツとして。）
ア、、惡い時に鳴り出したな、大抵斯うとは思つたが。
かしく　ほんにわたしに輪を掛けた、お前さんの雷嫌ひ。
市兵衛　エ、もうこれぢやア、思案も工夫もありやアしねえ。
（ト、稻妻と雷を怖れる科、此の時、向うより前の場の六三郎、仕立屋の娘お園（十八）の手を引き、何れも草履穿きにて駈出で來り、直ぐ格子先に立ち。）
六三郎　小道具屋市兵衛さんの妹御、お梅さんと仰有る方の、お宅は此方で御座いませうか。
（ト、小聲に云ふ、かしくは聞き耳を欹て。）

かしく　はい、何誰樣で御座いますか。
六三郎　モシ、お梅さん、田町の福島屋で御座います。
かしく／市兵衛　エツ。
（ト、思はず顏を見合はせる。）
市兵衛　今時分福島屋からとは、何うした事。
かしく　マア騷がずと、わたしが逢つて見ませうよ、お前さんは七郎助と。
市兵衛　憎い鷹には餌を飼へか、そんなら後で。
（ト、市兵衛は蚊燻しの火入と、佛壇の線香を兩手に持ち、心を殘して上手へ入る、かしくは立つて葭戸を明け。）
かしく　福島屋さんと仰有るのは。
六三郎　オウ、かしくさん、わたしは、六三郎だよ。
かしく　マア若旦那、今頃どうして、斯様な田舍へ。
六三郎　折入つて、急に頼みたい事が出來したので、漸く尋ねて。
（ト、云ふ中にも、頻に後を振り返る、かしくは外を窺ひ、お園を見て、偕はと科。）
かしく　生憎少し取込も御座んすが、（ト、思入）マア好う御座んす、お頼みの事も伺ひ、都合によつては此方から、お願ひ申す事もあり、（ト、内に入り）サア、ズッ

とお上がりなさいまし。

（ト、これにて六三郎お園、内に入りてよろしく坐る。）

若い時分とは云へ、今頃若いお連れと、何で一緒に。

六三郎　サア、面目ないが、これは、店の仕事をする仕立屋の一人娘、お園と云つて懇意の仲、不圖した事から言ひ交し、何卒一緒と思ふ中、此の人は跡取りとて、此頃養子の相談纒まり、佛月(ほとけづき)と云ふ今月が明け次第、直ぐに祝言、二三日中には、結納の日も極まると聞いては、居堪らず、日の暮れ紛れに家を抜け出し、漸う尋ねて逃げて來ました。

かしく　シタが、何うしてわたしの家へ。

六三郎　それはアノ、出入りの者に頼んだ所で、親父や兄の物堅いのを知つてゐるゆゑ、到底相手になつてはくれまい、と云つて、外に便らう目途(あて)もなし、思案に餘つてゐる中に、思ひ出したはこなたの事、滿更店に縁のない人でもなし。

かしく　エヽ。

（ト、吃驚。）

六三郎　時々仲間の附合で、出掛ける先の噂から、お前さんを世話する人も、薄々聞いて知つてゐたれど、それは內證互の事と、噯にも出さばこそ、自分も忘れる程であつたに、目黒でフツと出會つてから、思ひ着いたのはこなたの勝氣、以前が武家とか云ふだけに、確りとした操ての氣性を、これ幸と便りにして、面目ないが尋ねて來ました、何卒力になつて下され、其の代り、と云ふも異なものなれど、他人の事なら話もしよい、何ぞの時には身に引受けて、必と恩返しはわたしがしまする、サアお前からも好く頼んで。

お園　アノ、厚皮(あつかは)なお願ひなれど、一緒になれねば、生きてゐられぬ女の操、お馴染もないわたしでは御座んすが、何卒(どうぞ)不便と思召して、力になつて下さいまし。

六三郎　かしく殿。

お園　此の通りで御座います。

（ト、二人一緒に手を突いて頼む、かしく思入あつて。）

かしく　好う御座います、以前は座敷のお客筋、今はわたしのお主筋、と云はず語らぬ其の中にも、不思議と繋がる縁の糸、七夕樣に涙は禁物、マア一粒でも降らせぬやう、氣を大きくしておいでなさいまし。

六三郎　それでは。

六三郎／お園　願ひを。

かしく　くよくよするだけ、損で御座んす。

（ト、少し自暴(やけ)氣味に云ふ、此の中雷鳴段々烈く、雨の音サツと、稲妻も強く光る。）

お園　アレエ。

（ト、六三郎に縋る、お冬は先刻の膳に德利を載せて持ち、緣側傳ひに急ぎ出て來り。）

お冬　何うも怖ろしい雷樣、男の人達でさへ、蚊帳を吊つて入つた位、御挨拶はマア後でとして、お客樣も何ならあつちで。

（ト、膳を置くなり、競々と葭戸の向うへ指しする、此の時七郎助、後より密と來て窺ふ。）

かしく　ほんにそれは好い思ひ着き、奥の二人が歸るまで、狹いなれども納戸へでも、わたしも後から。

お冬　サア、暑苦くとも、わたしの蚊帳で。

六三郎　では、御挨拶はあちらにて。

お園　お言葉に甘えます。

お冬　サアサア、こちらへ。

（ト、お冬を先に、六三郎、お園の三人、葭戸を明けて奥へ入る、かしくは焦燥しながらも、ジッと坐つてゐる、稻妻雷雨烈く續く、此の時、七郎助は態と酒に醉ひたる科、緣側より内に入り。）

七郎助　コレ、お梅さん、唯一人で何うしなすつた、今何の氣もなく覗いたら、目黒で一寸見覺えの、あの福島屋の二番目子息、爰の林の字とは、敵藥ではないのかね。

かしく　エ、。

七郎助　敵藥でないにしても、他人の娘を誘拐した子息と、それを庇護ふかしくのお梅、福島屋へ驅け付けて、林の字の行跡と二階込みに、サテ斯う斯うと打ち撒けりやア、褒美の金は、イヤ、相手が名代の三莊太夫、淸兵衞とつらぢやア、望み次第は覺束ねえが、ねえかしくさん、其の代り二人三人、四人五人と、係り合は一纏めにガチヤガチヤだ、飛んだ見世物の口上だが、御思案は御損で御座いだ。

（ト、側へ寄つて、そつとかしくの背中を敲く。）

かしく　ほんに思案も分別も、もう斯うなつては要らぬ沙汰、わたしの心一つにて、何處も彼處も圓く行く。

七郎助　ウム、然う氣の着いたは互の仕合せ、これも不動樣の御利益と云ふものだ。

かしく　では、市さんを歸した後。

（ト、少し色氣を含んで云ふ。）

七郎助　イヨウ、そんなら愈得心か、イヤ、然う料簡が極まつたら、懷の證文も、右から左へ返してやらうし、林の字が歸つて來ても、別れてやれば無事息災、白鼠も尻尾を出さずに濟むと云ふものだ。

（ト、何も寄り添ふ折からに、又烈き雷雨。）

かしく　それにしても此の大夕立、鎭まるまでは奥の蚊帳で。

七郎助　オツと合點、では市兵衞が出掛けたら。
かしく　行く末々の寢物語。
七郎助　間違ふまいぞ。
かしく　あい。
（ト、密と顏を背ける、七郎助は喜んで、又上手より奧へ入る、此の時、烈く稻妻、雷折々強く鳴る。）
一旦勤めはしたものゝ、元はわたしも武士の娘、日蔭の身でも主ある體、年の行かないあの子でさへ、女の操と先刻の言葉、（ト、よろしく思入、又雷鳴）エヽ、もうひどい。
（ト、膳の上の德利の酒の殘りを、小半に出したる最前の湯呑に明け、尙片隅の廣蓋にある德利も、逆さにして注ぎ、グイグイと飮み。）
とは云へ自分の心一つで、二方三方納まるもの。
（ト、云ふ中にも、火鉢の側に、最前お冬が置いて行きし、新規の德利のあるに氣づいて、此の冷酒をも、亦立て附けて湯呑で呷る。）
然うかと云つて、あれほどに、留守を案じて吳々も、心を着けて下すつた、旦那の顏を潰しては、よしやお店の方の首尾が、繕へるにしても、やつぱり不實。
（ト、思入、此の時、又烈き雷鳴稻妻。）
エヽ、氣が違ふ。

（ト、よろしく科、七郎助は又も緣側より密と窺ひ、思はず双方顏を見合はせて氣味合、やがてかしくはグツタリと思入、雷雨稻妻烈く、鳴子にて此の道具下手へ廻る。）

同じく奧座敷の場

前の場と同じ夜の戌刻半頃

本舞臺少し上寄りに、常足の二重家體、正面上手に床の間、此の下襖の出入り、下手は前へ折曲げて壁、續いて障子、此の外は家體端まで緣側、折曲げて上手へもやはり緣側にて、此の本緣は、前の場の上手に在りし緣側と、曲尺の手に續いてゐる、床の間の上は、前へ折り曲げて壁、それより障子、平舞臺上手は、前の場の續きなる古き竹垣にて境を見せ、此の後は樹木の張物、下手は前の場の井筒の處になる、上下の見切りは、打返して植込みなどの張物、總て前の家體の續き、かしく内奧座敷の體よろしく、雷雨稻妻烈きまゝに、此の道具留まる。

ト、緣側には、以前の火入に線香の煙立ち昇り、床の間の片隅には、灯の點いた行燈が載つて居り、座敷

には一杯に小綺麗な蚊帳を吊り、中に、煙草盆を枕にして、寝蓙の上に市兵衛が寝轉んでゐる、稲妻しきり、大きく落雷の音、市兵衛はハッとして、やがて起き上り、

市兵衛　アヽ、甚い音だ、何處か其處等へお下がりなすつたと見える、(ト、手拭にて汗を拭き拭き) ウム、それにしても七郎助、業突く張りと云ふ者は、此の怖ろしさにもシヤアシヤアと、又あつちへ出掛けて行き、忌味な事でも云つてゐるだらうが、アヽ、自烈てえ、おれが以前の身なら、唯置く奴では無えけれど。

(ト、宜く科、處へ下手の椽側傳ひ、七郎助はヤニヤニしながら出て來ると、蚊帳の内より。)

オウ、七さん、お前さん何處へ行つておいでなすつた。

七郎助　餘りひどく鳴り蹙められ、膽が顫へて顫へばかり立つてゐたが、こなたは又落着いて、好く寢てゐるね。

(ト、閾際に坐つて、持つてゐる煙草入から煙管を出す。)

市兵衛　幾ら一杯飲んだからとて、此の大夕立に眠られますかエ、折角の七夕に、さりとは野暮な雷樣だ。

七郎助　ウム、野暮な雷、お前さんには、マアマア然うかも知れねえて。

(ト、何もニヤニヤしながら、線香の火にて一服喫む、此の時雷鳴遠くなる。)

何しろ蚊帳の中は、鬱陶しくつて堪らねえ、鳴りも大分鎮まつたやうだから、何うだね市さん、蚊帳を外して、些と廣々としようぢやないか、風が滅法涼しくなつた。

市兵衛　然うですかエ、頭痛はする、體はグッショリ脊汗だ。

(ト、漸うに椽へ出る。)

七郎助　サア、手を貸した。

(ト、これにて七郎助、市兵衛兩人、立上がつて蚊帳を外しに掛かる、此の時、下手の椽傳ひ、かしくは拔身の脇差を提げて、フラフラと出で來り、七郎助を見るなり、ズッと寄つて、後より斬らうとする、前を向いてゐたる市兵衛は、不圖看付けて。)

市兵衛　オウ、お梅さん。

(ト、云ふ聲に、振り返つて吃驚。)

七郎助　オウッ。

(ト、飛び退く時に、蚊帳の一隅外れる、かしくは急に斬付けるを、市兵衛支へて。)

市兵衛　エヽ、短氣な、何をおしなさる。

(ト、引留めるを振り拂つて、又七郎助に斬つて掛かると、七郎助は逃げながら、一方の蚊帳の釣手を踏み落して倒れる、市兵衛もこれに足を取られて、一緒に

轉ぶ、かしくも同じく倒れながら、乘し掛かつて、我が身を重しにグッと突くと、アッと云ふ聲、七郎助跳ね起きて。)

七郎助　オヽ、人殺し。

(ト、蚊帳を潜つて上手へ逃げる、かしくは何も追はうとするを、市兵衛は慌てゝ引留め。)

市兵衛　マ、待つて下さい、お梅さん。

(ト、苦しき聲に、かしくは驚き。)

かしく　ヤ、お前が怪我を。

(ト、躊躇ふ隙に、七郎助は庭へ飛下り、垣根を越えて裏へ逃げ込む、此の時、雷雨止みて、七日の月の光り薄く映す、遠く尺八の音。)

市兵衛　ナニ、お騷ぎなさる事はない、高が間違ひ、怪我過失。

かしく　それだと云つて、(ト、脇腹の大傷を見て仰天)ヤア、こりや此の脇差を力任せに、エヽ、取逆せて手が狂つたか。

(ト、此の聲にて、お冬、六三郎、お園の三人、正面の襖を明けて駈け出で、此の體に皆々驚き。)

お冬　こりやマアお前。

(ト、市兵衛を抱き起す。)

六三郎　何うした事で。

お園　此の有樣。

(ト、右左より差覗く。)

市兵衛　仔細と云つては外にない、此の市兵衛が淺慮から、七郎助を連れ込んだのが、一生の過誤、現在お主の娘御を、分別顏して勤めのお世話、それからして不料簡、此の災難も間違も、もう其の時から萌んだと、思へば免れぬ人の運、お梅樣、阿母樣、こんな事にさせましたも、皆わたくしの不束から、何卒免して下さいまし。

かしく　エヽ、それは何をお云ひだ、身寄便りもない親子の、たつた一つの頼みの綱、お前を力に暮して來たに。

お冬　お前、何で短氣な刃物三昧。

かしく　何卒堪忍しておくれ。

(ト、お冬はかしくに、かしくは市兵衛の前に泣く。)

六三郎　何にしても、早く手當を。

お園　何うぞ仕樣は。

(ト、うろうろするを押止め。)

市兵衛　イヽヤ、關つて下さるな、倒れた機にお互が、折り重なつて突いた疵、家來の身として市兵衛が、お梅樣に無理難題。

かしく　エッ。

市兵衛　サ、威しに拔いた此の脇差、我が手で怪我、と言ひ立てたら、妾で命を捨てたとて、何誰にも、よもお咎

めは御座いますまい、サア、市兵衞が恩ある中、町年寄にでも、早く、早く。
お冬　とは云へ、見す見す、人を害めて。
かしく　何で阿容阿容生きられよう、お前の後から。
（ト、脇差を取上げるを、六三郎、お園、兩方から押へる。）
　エヽ、何卒放して。
お園　イエイエ危い。
六三郎　短氣な事を。
市兵衞　エヽ、聞分けの無い、無駄死になりますがや。
（ト、よろしく止める、かしくはワッと泣く、此の時下手の縁傳ひに、御用聞梶の長兵衞（四十位）單衣姿、七郎助を連れて、急ぎ足に出で來る。）
長兵衞　コレ、兄殺しのかしくと云ふ女は、これか。
（ト、云ふに吃驚、一同顏を上げる。）
市兵衞　オウ、田町の親分。
長兵衞　梶の長兵衞だ。
かしく　エヽ、七郎助、それではこなたが。
七郎助　よくも命を狙つてくれた、其の手數の返禮だ。
（ト、聞いて市兵衞は頭を掉り）
市兵衞　エヽ、七郎助、何を云ふ、此の市兵衞が不忠のお詫びに、われと我が手で覺悟の生害。
（ト、これにて、長兵衞思入あり。）
長兵衞　六三郎の兄に頼まれて、心當りを探した末、目黒で逢つた女と云ふを手掛かりに、突き留めて來た門の口、怪い擧動の此の男を、捕へて聞けば女だてら、兄殺しと云ふ大事な訴へ、コレ、七郎助と云つたな、必とこれに相違はないな。
七郎助　ヘエ、何僞りなぞを申しませう、下手人は其の女。
市兵衞　エヽ、吐かすな、戀の叶はぬ意趣晴らしに、お梅樣を下手人の、兄殺しのと出放題、何のおれが兄であらう、以前勤めたお家の若黨、
七郎助　イヽヤ、然う抜けられては、七郎助の訴へた事が嘘になる、こなたが入れた借用證文、請判の名の肩書に、兄とあるのが確な證據だ。
市兵衞　ウム、（ト、思入）面白い、そんな一札があるなら見よう。
七郎助　エヽ、口の減らねえ、いけ剛情な。
（ト、紙入より證文を出して擴げる。）
市兵衞　ドレ。
七郎助　臨終の際の念晴らしに、ソレ、目を明いてよく見ろよ。
（ト、證文を鼻の先に突付ける隙に、市兵衞は、落ちたる脇差を取つて、七郎助の腹に突き込む、皆々驚く。）

市兵　有る事無い事、よくも訴人をひろいだな。
（ト、抉ろ、七郎助これにてドゥとなつて苦む、長兵衛思入あつて。）
長兵衛　仔細は大抵分かつたやうだ、科によつたら意趣遺恨の相對と、中立てゝやるまいものでもないが、女は兎に角、係り合は免れねえぞ。
かしく　愼んでゐたお酒を過ごし、何やら彼やら、心の亂れ、其の上ひどい雷樣、落ちたとばかり驚きの、氣絶の中に七郎助の。
お冬
市兵衛　エッ。
（ト、驚く、かしくはハラハラと涙を落し。）
かしく　憎さも憎し、もうこれまでと、今朝出立の旦那への、お餞別にと出した一腰、家重代と云つた爲、町人風情に勿體ないと、置いて行かれた、コレ、此の脇差で、突いたは親子が頼みの市兵衛、慘らしい目に遭はせて置き、自害するにも儘ならぬ、今となつては是非がない、包み隱しは致しませぬ、お引きなすつて下さいまし。
長兵衛　ウム、神妙だ。
（ト、繩を掛ける。）
かしく　阿母さん、隨分達者で、旦那へも何卒よろしく、六三郎さん、お園さん、お引受け申した事も最早これまで、とは云へ斯樣な災難で、此の世に別れる者もある、若い身空で一時の、離れ離れの辛さなぞに、必ず短氣をお出しなさんすな、阿母さん、人は素直に生きられるだけ生きるのが、天道樣への御奉公、何卒、何卒、傾つて下さいますな。
お冬　それでもお前。
お園　かしくさん、（ト、縋りながらも）エヽもう髮も此のやうに。
（ト、鬢の毛を片手に掻上げて、顏を見ろ、七郎助落入ろ、かしくはツッと科。）
かしく　此の世からなる鬼神の心、嘸や姿も。
（ト、ホロリとする。）
お園　わたしが一寸。
（ト、我が櫛を取りて、後から、かしくの髮の後れ毛を梳き上げると、下座のメリヤス「いもせの鏡」になる。）
〽返す返すも頼みてし、いふにいはれぬ我が涙、濡れて墨散る延紙の、あからさまには人知らず、思ひまゐらせそろかしく。
（ト、皆々愁ひの科よろしく、四つの鐘聞える。）

長兵衛　サア、夜が更ける、立て。
お冬　そんなら、これが。
市兵衛　此の世の別れ。
六三郎　生き別れ。
お園　何卒達者で。
長兵衛　上にはお慈悲があるぞ。
（ト、これにて一同ハアと泣く。）
かしく　皆さん堪忍して下さいまし、阿母さん、吳々御無事で。
お冬　コレ。
（ト、縋りかけるを、木の頭。）
長兵衛　立て、立て。
（ト。靜かに云ふ、四つの鐘のつゞき、市兵衛は、六三郎に押へられながら落入る、かしく立ち身にて別れの歎き、お冬とお園は右左より見上げる。此の模樣よろしく、庭に月影暗く虫の聲靜かに聞えて、幕。）

敵討龜山話（三幕八場）

役名

石井兵衞
石井兵助
石井源次郎
石井半三郎
萩原司馬
無手助　下部
お時　兵助妻
富士太郎　兵助伜
三木十右衞門
赤堀水右衞門
岩下大八
野口傳內
細江順庵　醫者
村路　水右衞門母
儀兵衞　無手助父
お露　無手助妹
小藤　關の宿の女
お六　同
外に、力士、呼出し奴、馬士、腰元、中間、山伏、百姓、順禮、駕籠舁、川越し人足、盆踊の男女など大勢。

序幕

遠州濱松鳥井畷の場

徳川時代の或年、七月下旬の夜

本舞臺一面の平舞臺、下手より上手へ斜に田畑の中遠見、先の方には大きなる蓮沼、田には稻の育つてゐる様、遠見の裾には一列に大木の松の並木、上下の見切も同く樹木、總て遠州濱松鳥井畷、夜の體よろしく、盆踊の囃子あちこちに聞えて、幕明く。

（ト、上手より、職人と見える町の若者平次、乙藏の兩人浴衣姿、ブラブラと話しながら出て來る、平次は竹杖を突いてゐる。）

平次　どうも此の暑さ中りと云ふものは、悉皆體を弱らせると見えて、年に一度の書入れの踊にまで、指を咬へて、

斯う引込んでゐなければならぬとは、ア丶、われながら
　哀な事だ。

乙藏　食ひ過ぎの揚句に指を咬へるなぞは、因果の道理だ、おれのやうに、始終劍術の道場へでも通つてゐて見ろ、行く行くは槍一筋の武士になるとも、一生霍亂なぞには罹りッこ無え。

平次　昔から云ふ生兵法は大疵の基、餘計な喧嘩でもしないやうに、氣を着けるが好い。

乙藏　お主も其の息切れで、踊の娘ッ子の臀なぞは、追廻さねえ方が好い。

平次　こいつはお互に御道理樣だ、ハ丶丶丶丶。

乙藏　ハ丶丶丶、サア確りと歩びねえ。

平次　月の出潮で、踊が段々景氣付いて來た。

（ト、二人は何も話しながら下手へ入ると、踊の囃子賑やかになり、上手より、盆踊の男女二十人ばかり、紅模樣の揃ひの浴衣手拭、輪になりて踊りながら出で來る。）

唄へ揃た揃うた踊子が揃た、稻の出穗よりまだ揃た。
　へ掛けてよいのは衣桁に小袖、掛けてたもるな薄情。

（ト、此の人數、興面白く、段々と下手へ入る、此の時花道より、濱松の家中石井兵衛（五十四五）紋付の羽織に帷子、駕籠に乘り、中間五助、丸に四目菱の紋付けたる提灯を持ちて先に立ち、若侍萩原司馬（十七八）羽織袴姿、駕籠傍に附いて出で來り、直ぐ舞臺へ入ると、上手寄り松の木蔭より、岩下大八（三十位）、頭の扮裝、揃ひの手拭にて深く面を包み、同じ手拭にて巻きたる脇差を一本隱して挿し、酒に醉ひたる町人の體にて蹌踉き出で、フラフラと中間に突當ると共に、提灯を素早く蹴落す。）

司馬　おのれ、無禮者。

五助　何を爲やがる、

（ト、双方より押へにかゝるを摺拔けて、五助を倒し、上手へ逃げる時、駕籠の側へ小柄を落す。）

司馬　素町人、待て。

（ト、追駆ける後に五助も續くと、此の隙を窺ひ、並木の松蔭より、野口傳内（三十位）、大小着附、覆面の眞黒扮裝にて走り出で、手槍にて駕籠の後側よりグッと突くと、内には聲なく槍を押へる、傳内狼狽へ手元へ引くと、槍は穂先を切落されてある、それを見て一寸思入、下手へ逃込む、駕籠舁は並木の蔭へ隱れる、處へ司馬駆け戻りて、フッと下手を窺ひ。）

曲者。
（ト、行かんとするを、駕籠の内より。）
兵衞　コリヤ、司馬、騒ぐな、（ト、前側の戸を明け）何事もない、早く行け。
司馬　スリヤ、お障りは。
（ト、差覗き、心ならぬ科、不圖足下に落ちゐたる小柄を拾ひて思入、懐に納める。）
兵衞　駕籠の者は居らぬか、乗物遣れ。
（ト、駕籠の戸を自身に締める、司馬四邊を見廻して。）
司馬　駕籠の者、駕籠の者。
（ト、呼ぶと、小蔭より陸尺は怖々出で來る。）
ソレ。
（ト、云ふ時、下手より、踊の囃子段々近く聞えて來る、五助は此の中戻り來りて提灯を拾ひ、塵を拂ひなどして、無言のまゝ、戰々と先に立つ、司馬は四邊に心を配りながら、後に引添ふ、駕籠は並木の道を上手奥へと進む中、以前のとは別の踊の連中、淺黄模様の揃ひの浴衣手拭にて、十四五人ばかり、下手より一列になりて、踊りながら出で來る。）
唄（盆にや御座れよ盆中に御座れ、死んだ佛も盆にや來る。

（ト、此の模様よろしく、鳴子にて、道具靜に廻る。）

濱松城下石井兵衞住居の場

前の場の翌日の明け方

本舞臺眞中に常足の二重家體、正面上寄りに床の間、續いて下手に襖の出入り、下手後へ下げて、家體の續きを見せたる外側の拵へ、此の下に庭の門などあり、一體に茶席風の落着いたる立派の構へ、上下前面とも平舞臺には一面に地絣を敷き、樹木、燈籠、飛石などを置き、四目垣に瑠璃一色の朝顔が咲いてゐる、上下の見切は板塀生垣の類、總て濱松の家中石井兵衞住居奥座敷の體よろしく、薄く風の音にて道具留まる。

ト、一體に薄暗き裡に蟲の聲、床の間の前には、二枚折の銀屏風が裏向きに立てゝあり、茲へ腰元お町（十七八）、襖を明けて出で來り、抹茶茶碗煎薬の入れたるを、密と屏風の外より差入れ。
お町　お薬を持つて參じました。
（ト、靜かに云ひて、其のまゝ元の處へ入ると、これと入れ違ひに、前の場の萩原司馬、前の儘の着附袴一本挿し、羽織なし、襖を明けて出で來り。）
司馬　申上げまする、只今赤堀水右衞門殿、門弟野口傳內

岩下大八御兩所共々、儀にお聞き及びの旨あつて、密々お見舞にとて、御入來に御座りまする。

（ト、云ふ、これにて屏風の内より。）

兵衞　水右衞門早參られたか、未だ夜中と申し、密めいての入來、庭口よりこれへ。

司馬　ハッ。

兵衞　屏風を退けい。

司馬　畏りました。

（ト、司馬は屏風を取退けて、下手の壁際に移すと、床の間の傍には、丸行燈に灯が點いて居り、其處に前の場の兵衞、顏色惡く、少しく鬢を亂し、羽織袴を脫ぎ、着附ばかりにて机に向ひ、書き物をしてゐたる心、今藥を飮み終りて茶碗を差置く、司馬は此の間に奥へ入る、やはり蟲の聲、兵衞は机の上の蒔繪の文箱に封印し、これを大きなる手箱に納めて、机の側に置く、此の時下手の庭口より、司馬草履にて先に立ち、後より同家中の侍赤堀水右衞門（三十五）、續いて前の場の野口傳內、岩下大八の兩人、何れも大小羽織袴にて、靜々と出で來る。）

兵衞　オウ、水右衞門殿、門弟衆、かゝる未明に。

（ト、一寸科。）

司馬　先づお通り下さりませ。

（ト、これにて三人會釋して座敷に入り、傳內、水右衞門、大八の順にて宜く居並ぶと、司馬も上つて、兵衞と傳內の間に控へる。）

水右衞門　早速ながら兵衞殿、只今申入れたる通り、斯くも未明に密々の御見舞、押掛けがましい儀で御座れど、親子とも又師弟とも、思し召されて常日頃、お目かけらるゝ水右衞門、又其の門下のこれなる兩人。

傳內　夜前町の踊の者より、彼の若林の村外れ、鳥井畷の並木にて、石井様のお乘物に、何やらあつた、と知らせは誠か。

大八　聞き捨てならずと先生に申入れ、直ぐ様こなたへ實否のお尋ね、とは存ぜしが既に九つ、夜半の事。

水右衞門　然もなき事であつた時は、却つて人の物笑ひ、當家に取つても御迷惑と、一旦は思ひ止まりも致したものゝ、何やら心落着かず、東の白むを待ちかねて、傳內を駈けさせ御様子探れば、全く御氣色勝れぬ由。

傳內　白々明けより、下人は勿論司馬殿までが、早常體の內外の有様、偖はと急ぎ立戻り、更めての此のお尋ね。

大八　御病氣か、不然はお怪我か、兵衞殿、御氣分は如何で。

大八 傳內　御座りまするな。

（ト、口を揃へて尋ねる、兵衛思入あつて。）
兵衛　如何にも水右衛門申さるゝ通り、豫て某を親とも師とも、大事にかけてくれ召さるゝ、御邊の前に何をか包まん、志の嬉しさに、侍の恥を忍んで打明かす前夜の始末、三人共に、先づ此の體を見ておくりやれ。
（ト、帷子の襟を寛ぐれば、腹帶したる左の脇腹に、血潮は眞紅に滲んでゐる、兵衛は思はずホッと息。）
水右衛門　ヤヽ、思ひも寄らぬ深手の有樣。
傳内　如何なる曲者。
大八　武藝に秀でし兵衛殿が。
水右衛門　ウム。
（ト、三人目を見合はせる、司馬は顔を上げ。）
司馬　高塚村のお知己より、夜道を急ぐお供先、狼藉者は町人の、唯醉狂と見て油斷せしに、同類ありてお乘物へ、突込む槍にあのお惱み、某お側に在りながら、案山子に劣りし腑效なさ、覺悟は極めて居りまする。
兵衛　イヤ、侍の不覺、誰にか罪を嫁すべきぞ、皆此の兵衛が油斷から、然は言へこれまで永の年月、御奉公に私を存ぜず、他人に怨恨を買ふ程の、强情我慢も振舞はざりしに、何者の暗討ぞ、手練の程より察しても、人違ひなどする輩の所業でなし、然るに遺恨の次第も知らず、阿容阿容此の儘果てん事、今生の無念、あの世までの瞋恚の種、推量あれ方々。
（ト、段々に苦痛の中にも無念の體、水右衛門思入あつて。）
水右衛門　御心中察し入る、それにつけても然程の深手、既に命は無きものと、同くお覺悟ある上は、童賺しの慰めなど、今更となり申すも無禮、此の上は多年の御懇意、何なりと申し置かるゝ儀も御座らば、必ず必ずお隔てなく。
兵衛　オウ、頼もしゝ水右衛門、知つての通り總領の、兵助は先頃勘當、次の二人はまだ幼く、しかも昨朝奴を共に、新居の乳母の里へ行き、一夜を過ごして在合はさず、夜の明け行くを見ると其のまゝ、迎ひの者を遣はしたれど、海上一里の舟渡し、白晝ならでは通行叶はず、陸路も往き來五里餘り、エヽ、身の不覺とは云ひながら、三人の子の一人にさへ、今生の別れを惜みもならず、顔も見ず、他人に縋る兵衛が最期、言葉に甘えて呉々も、頼み入る水右衛門。
水右衛門　二人の御子息、縁者の方々、打寄りて、後々の仕置に如才は御座るまいが、何より大事は敵の手掛り。
司馬　オヽ、御座りまする、證據となるべき此の二品。
（ト、司馬は急ぎ床の間より、袱紗に包みし前の場の槍の穗先と小柄とを取卸し、包を明けて水右衛門の前に出す。）

水右衛門　ウム、證據があるとは重疊重疊、（ト、見て）如何にも見事に切つたる德光。
司馬　圖らず手に入るそれなる小柄。
大八　ハテ、どうやら覺えの。
傳內　エヽ。
（ト、不審顏、大八は小柄を手に取り、思入、水右衛門はジツと視る。）
司馬　ウム、思ひも寄らず大八殿には、それなる品を。
大八　オウサ、存じた段か馴染の模樣、赤銅魚子に金象嵌、柄を斜に宇治の柴舟。
司馬　シテシテ、それは何人の。
水右衛門　小柄の主は水右衛門、拙者の品で御座るかなア。
兵衛
司馬　エツ。
傳內
（ト、三人一度に驚く。）
大八　然し敵は外で御座る、當夏これなる傳內殿、懇望の末譲られて、これぞ師匠の生筐と、片時雜さぬ秘藏の小柄。
傳內　何と。
水右衛門　卑怯者めが。
（ト、水右衛門は刀を拔いて、驚く傳內を一擊に切り倒す。）
傳內　ウム。
（ト、其のまゝ息絕える。）
水右衛門　門弟ながらも憎き奴、かねて家中の廣瀨の息女、お時殿に心を懸け、執念くも言ひ寄る中、娘は何時しか當家の總領兵助殿と馴れ馴染み、事顯れても兩人は、親の情の勘當に、却つて他國に晴れての夫婦。
（ト、此の間に水右衛門、刀を大八に拭はせ鞘に納める。）
大八　傳內殿聞くよりも、イヤ忌々しの何のとて、二人の親を身勝手に、怨みに怨み居つたる故、それで今度の意趣晴らし。
水右衛門　然うであらうよ。
大八　それに相違は御座りませぬ。
司馬　然ほど確の敵ならば、引つ縛り生け置いて、お手達に一太刀づつ。
水右衛門　如何樣喃、お身としては然うあらうが、我が子も同じ大事の弟子を、他人に渡さず討つたるは、切ての情、二つには、兵衛殿への身が言譯、これにて萬事はお免し下され。
（ト、宜し科、兵衛思入あつて、）
兵衛　以前を忘れぬ御身の深切忝い、それにつけても臨終の頼み、（ト、一寸科）司馬はこれより我が亡き後の手當萬端。

司馬　心得まして御座ります。
（ト、愁の科。）
大八　然らば拙者は死骸の始末。
司馬　御免下されい。
（ト、司馬は水右衛門にも挨拶して、大八と二人、傳內の死骸を手舁きにして奥へ入る、此の時夜明けの鷄の聲。）
水右衛門　シテ某へのお頼みとは。
兵衛　聞いておくりやれ、（ト、合方になり）最前も云ふ通り、手許で育つる二人の倅、源次郎は十五歳、半三郎は漸く十二、力となるべき兵助は、不所存ゆゑにあの始末、親類縁者は少くなけれど、氣性合はいで年々に遠ざかる者ばかり、それゆゑ夜前の事あつてより、苦痛の中に諸事萬事、細々書中に言ひ遺す、子供等歸宅致しなば、親の遺言堅く守り、侍の名を汚さぬやう、成人せよと御身より、噛んで含める庭の訓を。
水右衛門　必ず申し傳へるで御座りませう、不肖なれども赤堀監物が倅水右衛門、重代の刀に宿り在します、父祖父の尊靈を、地獄に堕す法もあれ、石井の家名ゆゑならば、報恩のため粉骨碎身。
兵衛　オウ、忝し、書置諸共系圖の一巻、これなる手箱に藏めあり。

（ト、聞いて水右衛門ズツと寄り、手箱を引寄せ。）
水右衛門　家の大事は、スリヤ此の中に。
（ト、手早く箱の蓋を開きて、文箱を取出し、それと見るより封印を引切るに、兵衛は驚き。）
兵衛　コリヤ水右衛門、お身は其の文箱を何とする、子孫に遺す品々の、封印切るとは粗忽の振舞。
（ト、云ふ中にも、水右衛門は構はず文箱の中より一巻取出し。）
水右衛門　俺こそ俺こそ、これぞ正しく赤堀の、家に傳はる木下流、槍術の奥義の一巻、我が父監物物故の砌、腕前優れしゆゑを以て、高弟兵衛に讓られしさへ、一子相傳たるべき秘書の、他家に入りたる口惜さ無念さ、親も親なり、弟子も弟子と、それより自と身持も崩れ、殿の御前も不首尾となりしを、浮世の義理に執成して、歸参させたが、ヤイ兵衛、おのれが一期の手柄話。
兵衛　何と。
水右衛門　二言目には恩に被せ、現在師匠の嫡子に向ひ、ヤレ水右衛門の赤堀のと、祿高自慢の阿爺風、それからしてが氣に食はず、赤堀が傳書の一巻、何時かは我が手に奪返さんと、心を碎く此の年月、天の助けか當春中、兵助めは永の勘當、後は小倅、彼の腕強の我武者もの、無手助と云ふ奴めも、昨夜は新居へ倅の供、留守と聞いた

はこれ幸、かねての手筈で傳内に、遺恨序の唯一突き。
兵衞　ウム、スリヤおのれが手を下させ。
水右衞門　オウさ、然うとも、其の通りだわエ、傳書は無くても天晴れ謀計、槍と智慧とは別の物、ハテ、あの大八を町人に拵へ狼藉させ、小柄を落して司馬に拾はせ、有無を云はさぬ證據呼はり、唯一刀に傳内を斬つて捨てたは、拙者が働き、お身へ寸志の敵討だ、イヤ有難いか、其の返禮には我が家の一卷、今こそ確に落手致した。
（ト、卷物を懷中する。）
兵衞　ウム。
（ト、苦む處へ、大八襖を明けて出て來り。）
大八　ヤイ兵衞、落した小柄も古道具、傳内のでない、先生のでない、懇望も嘘、秘藏も嘘、無理な證據に傳内が、驚く間さへ電光石火、夢中で死んだは濟んだ幸運。
水右衞門　現在の弟子を殺して澄切ごかし、苦肉の計の效あつて、打明け話の世迷言、しかも、臨終の頼みにも、人を疑ひ寶を隱し、系圖で候ふの遺書のと、大事さうには言ひ廻せど、唯た一言傳書とも、秘書とも吐さぬ横道者、其の料簡ゆゑ今此の狀、秘し隱しにした一卷を、阿容阿容われ等の鼻先へ、何卒お取り下されと、差出したる大痴漢、何と膽が潰れたか。
兵衞　殿への執成し、歸參の世話、其の恩義をも打忘れ、我が弟子までも討ち果して、深くも巧みし惡事の段々、聞けば聞くほど人非人、それに今まで言葉を下げ、
水右衞門　コレサ老惚、横に口が裂けたりとて、恥知らずに頤敲くな、歸參の詫びのと大層がれど、貰つた知行は以前の四つ一、それにおのれは槍術の極意の何のと、名を賣り上げ、拙者が分まで詰りは御加增、それが何で世話だ、執成だ、覺悟の上の命の際、他人の寶を元へ納めて、心にかゝる雲霧も、晴れたらおのれも消えて失せ。
兵衞　ウム。
水右衞門　姦しいわエ。
兵衞　おのれ。
（ト、側なる刀を拔くより早く、居ながら水右衞門の眞向に斬付けると、刃先にて少し切れる、途端に兵衞もドウとなる、大八は慌てゝ引据ゑる。）
大八　オウ、先生、先生、血汐が額に。
水右衞門　何さ、些細の擦り傷。
大八　エヽ、往生際の惡い老惚、いつその事に芋刺しに。
（ト、これにて水右衞門、懷紙にて額を押へゐたる手を離し。）
水右衞門　憎さも憎し。
（ト、刀を拔く時、上手植込の蔭より司馬逵覗くた、大八見咎め、手早く最前の小柄を手裏劍に打つと、司

馬は素早く手に受け留め、衝と隠れる。水右衛門刀を兵衛に突付け。）

ドリヤ息の根を。

（ト、云ふを、木の頭。）

止めてくれよう。

（ト、宜く見得、兵衛は大八に押へられながら苦み、無念の體、風の音鴉の聲聞えて、街道筋の道具幕、幕引付けると、直ぐに驛路の鈴、馬士唄。これに水音をあしらひて、賑やかに繋ぐ。）

返し、遠州金谷大井川渡口の場

前の場と同日の夕

本舞臺一面の平舞臺、これに、下手より上手へ少し斜に、川筋と河原とを描きたる地絣を敷き、處々に盛上げたる砂原、此の間に杭、蛇籠などを見せ、下手には筵張りの小屋の片隅、側に一本のひよろ松、總て遠州金谷宿の方なる大井川渡口の體よろしく、知らせにて道具幕切つて落す。

ト、上手奥より、田舍者の白髪老爺と小娘とを脊負ひたる川越し人足二人、下手より les 襦袢一枚の馬士一人、互違ひに出で來りて其の儘入ると、後又上手より、人足の一の肩車にて相撲の呼出しの小僧喜久八（十三四）川を渡りて出で來り、河原に下りると、續いて三段目あたりの角力一ヶ島と御狩矢の兩人、何れも丸裸、浴衣を帶にて括り、頭の上に縛り付け、各自竹杖を持ちこれは徒にて渡つて來た體。）

一ヶ島　ア、、晝寢をし過ごし、置去りを食つたが、俗話しほどにもない大井川。コリヤ睡氣覺ましに、自分で歩いて好い事をした。

御狩矢　淺瀬も深瀬もあつた事でない、よッと氣合を入れるが最期、川の水が颯と左右に立別れる。

喜久八　それでも關取、川の中へ二三度お辭宜を仕掛けなすつたね。

御狩矢　ありや、土俵仕切る癖が出たのだ。

人足の一　待つたで仕合。それでないと、今頃は。

御狩矢　オウサ、大井川土左衛門と改名してゐる。

一ヶ島　幕の内より、こりや墓の内に出世する名だ。

人足の一　イヤ、口の減らねえ。

人足の二　惡い洒落だ。

皆々　ハ、、、、、。

（ト、笑ひ笑ひ、力士と呼出しは下手へ入る。やはり水の音驛路の鳴物にて、花道より前の場の水右衛門、

大八の兩人、大小羽織着流し、編笠を冠り出で來り。)

水右衞門　あれ見い、まだ川越しの時刻は十分、しかも旅人の影もなし、これより緩々參ると致さう。

大八　濱松から此の金谷まで十二里あまり、急げば駕籠も樂では御座らぬ。

水右衞門　夜明けぬ中からあの騷ぎで、ア、、どうやら睡うなつて來た。

大八　今夜は早寢と願ひませう。

(ト、舞臺に入り、大八は不圖振返つて向ふを見るなり、少し慌て氣味に。)

先生、あれは慈無手助、氣の所爲ばかりでは御座りませぬ、疲れながらもまだ參りまする。

(ト、これにて水右衞門も向うを見て思入。)

水右衞門　爰まで一人でキヨロキヨロ眼、追つて來るとは猪口才な、懲らしてくれう。

(ト、冷笑つて大八に囁くと。)

大八　成程妙計、東下りの初旅に、こりや好い話の種で御座る。

(ト、大八は懷の紙入より金を三兩取出し。)

コリヤ人足共、一寸參れ。

人足の一　ヘエヘエ、何か變つた御用でも。

人足の二　お乘物なら直ぐお間に合はせます。

大八　早速蓮臺を申付けるが、別段に一つの頼み、骨は惜まぬ、サアこれだ、(ト、金を渡し) 耳を貸せ。

人足の一　ヘエ、(ト、金を見て) コリヤ大仕事で御座いますね、(ト、話を聞き) フムフム、イヤ、そんな事ならお安い御用だ、爰で行けずば川へ追込み。

大八　コレ、もう近付く、早く致せ。

人足の一　みんな來いやい。

人足皆々　オウイ、オウイ、何だ何だ。

(ト、居合はせる五六人の外に十四五人の人足、上手下手よりゾロゾロと出で來り、耳打を聞いて皆々喜び。)

人足の二　こいつは一番、眠氣覺ましに好い仕事だ。

人足の三　其の酒代なら動かざなるめえ。

人足の四　みんな過るな。

人足の一　殿樣方は些とも早く。

(ト、外々の人足は、水右衞門大八を蓮臺に乘せて、急ぎ上手へ入ると、やはり驛路の鳴物、水の音、花道より、石井方の下部無手助(三十)、一本插し、尻からげ、空脛跣足にて、上手を見込みながら、息せき小走りに出で來り、直ぐ上手の方へ行かうとするを支へて大勢取卷き。)

コレコレこなた、何處へ行く。

(ト、これにて無手助心づき。)

無手助　ウム、川越しの人達だな、何處へ行くと云つて、着の身着の儘の此の裝だ、江戸へは愚駿府へまでも難い。

人足の二　然うして足から血も出てゐるが、川を越すならこちとらが、樂々と渡してやらう、奴殿でも武士の端、先づ蓮臺か。

人足の三　それが億劫なら、脊中でもよし。

人足の四　肩車でもよし。

人足の一　腰車で投げてもよし。

人足の二　お望みならば水雜炊。

無手助　ウム、偖は愈々今の二人は赤堀岩下、願つた通りに到頭首尾よく。

（ト、息込む。）

人足の一　オツとどつこい、追付かせねえが此方の仕事だ。

人足の二　引返す方が利口だ無手助。

無手助　ウム、おれの名までも最早知つたな、よし、それならば云つて聞かせる、餓鬼の時から腕立に、得物要らずで名を取つた、石井の家の無手助奴（やつこ）、濱松暮らしの十三年に、大天龍や今切で、自と覺えの河童流、噓八百間名ばかりで、河原だらけの大井川、何一泳ぎだ、邪魔ひろぐな。

（ト、突然（やには）に前なる人足の三と四とを打倒し、行かうとするを、一と二とが双方より、腕を摑んで引戻し。）

人足の二　成程しぶとい。

（ト、云ふ處を。）

無手助　エヽ。

（ト、一時に振り放す。）

人足の一　ソレ、やつてしまへ。

人足皆々　合點だ。

（ト、これより賑やかなる鳴物にて、人足一同捨臺辭よろしく、棒切の類を持つて無手助に掛かる、無手助は擲り倒して追ひ拂へど、直ぐムラムラと掛かるに業を煮やし。）

無手助　エヽ、欝陶しい裸蟲めら、おれは斬らねが怪我をするな。

（ト、脇差を拔いて、大勢の中を荒れ廻れば。）

人足の一　ソレ拔いたぞ。

人足の二　敲き伏せろ。

（ト、ワヤワヤ云ひながらも、流石に怖れて段々下る。）

無手助　赤堀でも芋掘でも、此の間に早く。

人足の五　何を。

（ト、掛かるを、蹴返し、屹と上手を見込むを、木の頭、無手助拔刀を咬へて突然に上手へ駈込むと、ドーンと高く水音。）

人足皆々　ヤアヤアヤア。

（ト、立寄りて見送る、此の模樣よろしく。鳴物賑やかに、幕。）

二　幕　目

駿州島田石井兵助内の場

前の場より三年後の九月上旬の夕

本舞臺眞中に所作高の家體、正面上より、佛壇、暖簾口、少し破れたる鼠壁、上手に一間の障子家體、下手世話木戸と二重との間は、奧まで通して一二尺幅の土間、此の奧より下手外へ土間續きの勝手元の下屋、世話木戸の外へ拔けられる拵へ、此の勝手表口には繩暖簾、下屋の角に、薄赤の實の生りたる柿の木、此の根方に、同く赤き唐辛子五六本、樹の下には一本の高札が建つてゐる、上手の見切は植込、下手は藪疊などにて、後は野遠見、總て駿州島田宿石井兵助內の體、少し淋しき在鄕樣の鳴物にて、幕明く。

（ト、佛壇の前の處に、石井兵助（二十六）、浪人の窶れたる拵裝、片襷にて、後向きに內職の傘張り、今蛇の目の傘に油を引いてゐる體、側に種々の道具置いてある、下手壁際には、無手助の妹お露（十六七）、田舎娘の拵裝、古き角火鉢に土鍋を掛けて、藥を煎じてゐる、やがて雁の聲、パラパラと雨の音する、兵助は一寸手を止め。）

兵助　オウ、判頭ばらついて來たやうだ、お露。

お露　はい。

兵助　晚の支度が濟んだなら、藥はわしが煎じる程に、もう戻つて、親父の夜食の世話でもしてやつてくれ。

お露　イエもう、お藥も直き煎じ上りまする。

兵助　それでも今日は又いつもに增して、朝から妾の家へ來通し、儀兵衛が嘸かし不自由であらう。

お露　イエイエ、其の御心配には及びませぬ、御覽の通り、體は丈夫過ぎるほど達者な父さん、何でも一人で爲て居ります、それにお手傳ひなぞと云つて、早く戻りでもしましたら、旦那樣のお世話は誰がすると、大抵や大方、叱られる事では御座りませぬ、それよりは旦那樣、あなた、最早お仕事はお止めになされませぬか、まだ七つでも御座りませうが、釣瓶落しとやら云ふ秋の日、どうやら雨も降つて來る、暗くなるのに間も御座りますまい。

（ト、これにて兵助向き直り、火入の火にて煙草を喫みながら。）

兵助　何時に變らぬそなたの深切、石井の家に奉公して、多年忠義の無手助が妹ほどある眞實眞實しさ、親父と二人朝夕に、情溢るゝ親身の世話、忘れは置かぬ。

（ト、宜く科、お露も何時か向き直り。）

お露　何のマア勿體ない、わたくし達のやうな、百姓風情の親子の者を、それでもやつぱり御家來だやと思し召し、此の春から賴つてお出での旦那樣、兄さんが又見えるまでは、何の樣にもわたくし達が、お世話をせねばなりませぬに、我が土地ながら此の邊は、島田の內でも片在所屆かぬ勝で面目ないと、父さんと始終云ひ暮らして居りまする。

兵助　何の何の、尾羽打枯らした素浪人、一つの望を果すまで、生きて居りさへすれば重疊、何を不足に贅を思はう、餘り苦勞にしてくれるな。

お露　兄さんがお供して、去年お見えのお二方も、今年の秋の末頃か、冬の初めまでには、是非もう一度、爰へ來るとのお言ひ置き、今度こそはお主樣御兄弟、わたくし達まで親子同胞、久し振に、必と逢へるで御座りませう。

兵助　それにつけてもあのお時、槍一筋の家に生れ、何苦勞なき一生を送らるゝ身の運を捨て、此の兵助と諸共に流浪の中に舅の橫死、世に出る望も又暫し、絕えて良人が貧苦の道連れ、初めての兒に我が乳の、味も染々知らせ得ず、昔も今も操の爲に、生きながら死ぬ例と云へど、可哀や終に勤め奉公、喃お露。

お露　はい、（ト、萎れて）それに又此頃は御病氣勝ち。

兵助　駿府の町の勤め先、道は十里に足らねども、見舞も思ふに任せぬ仲、宿を通ひの村人の口を藉り、纔に樣子を聞き聞かせ、切て心を安めるばかり、身に過失もありとは云へ、これも敵に怨みの一つ。

お露　眞に眞に水右衞門とやら、何處まで憎い、（ト、思はず强く云ひて、上手障子の內へ思入。）オウ、少しは煎じ詰まつたか知らぬ。

（ト、土鍋の蓋を明けて見て、火を直しなどする事よろしく。）

兵助　嬰兒を抱へて其處此處と、彷徨ひながらも心の樂み、二人の戀には親もなく、家も世間も無かりしが、身を置きかねて無端此の春、爰へ來て知る父の最期、弟兩人家來まで、仇を尋ねて前後四年、東よ京と追廻り、此の兵助をも尋ねてゐると、現在の親の汚名諸共、初めて聞いて身に染みる、不孝の罪の怖ろしさ、アヽ、早く兄弟廻り合ひ、心を一つに不俱戴天の、敵の素首提げんと、思へど天運われ等に拙く、心にもなきあの建札。

（ト、此の時、又バラバラと雨の音、雁の聲。）

恙なく居よ。水右衞門。

（ト、宜く科、お露も顔を背けて涙を拭く、此の時花道より、お露の父儀兵衛（五十六七）、仕事着の半纏股引草履穿き、泥芋、間引菜など入れし籠を抱へて先に立ち、續いて、醫者細江順庵（五十位）、坊主頭、抉り下駄、扇子を頭に翳しながら、急ぎ足に出で來り、儀兵衛は縄暖簾を潜り、直ぐ勝手に入り。）

儀兵衛　コレお露、野面の歸りに、泥の物を少しばかり持つて來た、明日のお菜にして上げてくれ。

お露　あいあい。

（ト、儀兵衛の言葉の中に、お露は勝手へ立つて行き、籠を受取る、儀兵衛は足を拭く、此の間に順庵は高札を讀む。）

順庵　フム、「濱松浪人赤堀水右衛門、右者父兵衛を仇なるに因て、我等其母村路を奪取り、刺殺し候得者、互に親の敵たり、尋來つて速に勝負を可決者也、月日、石井兵助」、如何様、これは物騒な建札だ、評判になるも無理はない。

（ト、獨語を云ひ云ひ、門口より入ると、儀兵衛も此の時、勝手口より渡りを傳ひて、二重へ上り。）

儀兵衛　旦那様、又參りました。

兵助　オウ、儀兵衛、何か又心づけてくれたやうな、今も今とて、お露に禮を、イヤ、禮やら愚痴に取交ぜて、そなた達親子の噂をして居つた處だ、（ト、順庵を見て）時に其の御仁はナ。

儀兵衛　はいはい、此の中一寸お耳に入れた事のある、此の邊でのお醫者様、順庵様と仰有つて、土地には古い馴染のお方、先頃こちらの御病人の事を、お話し申して見た處、それは何より氣の毒な、大望を抱へたお身でありながら、血も續いてゐぬ伯母御を引受け、不手廻りの中で實意の介抱、ア、珍しい事だ、奇特な事だと、大層思ひやつて下された揚句、禮も藥の代も入らぬ、俺の唯診て進ぜようと、御深切に云うて下さる有難さ、今度へ來る道で、丁度逢つたはこれ幸、一緒に行かうと仰有るので、それで突然御案内申しました、伯母御を一つ診てお貰ひなされませ。

（ト、宜く云ふ、お露此の間に藥鍋を下して、火鉢に土瓶を掛ける、兵助は科あつて順庵に向ひ。）

兵助　左様で御座りましたか、手前は石井兵助と申して、御覽の如き痩浪人、なかなか醫者の世話どころでは御座らねど、少々仔細あつて身に引受け、養ひまする義理の伯母、病氣は心にかゝりながら、不如意の爲に買藥さへ、ろくろくならぬお恥かしさ、何卒よろしくお願ひ申しまする。

順庵　イヤ、御主人で御座りますか、申し後れましたが、

手前は細江順庵、本道の眞似事致す田舍醫者、心得顔もお恥かしいが、あの門先の高札から、噂に高き孝子の其許、何彼につけてお世話が屆かぬ、などとあつては村の名折れ、かねて懇意の儀兵衞殿も、佛作つて魂入れずと、肩身を廣くは歩かれまいと、要らざる世話の押掛け見舞、苦からずば、一診させて戴きませうか。

儀兵衞　旦那樣、如何で御座りませうな。

(ト、兵助の顏を見る。)

兵助　當村にて聞えしお方が、醫は仁術の御見舞、願うてもなき仕合ぢや。

順庵　では、お脈體から伺ひませうか。

兵助　ソレ、お露。

お露　はい。

(ト、立つて上手の障子を引明けると、水右衞門の母村路(六十位)、兵助よりは小綺麗にして、蒲團の上に坐り、括り枕に目を伏せて凭り掛かつてゐる、側なる床の上には、兵助の一子富士太郎(四つ)、スヤスヤと眠つてゐる。)

モシ、伯母樣、お醫者樣がお出でになつて、お前樣を診て上げようと仰有ります。

村路　はい、お話は最前から、皆伺つて居りましたが、宿業深いわたくしの體、此の上のお心盡しにあづかりましては。

順庵　イヤイヤ、決して然うで御座らぬ、古き教にも、身を害はぬを孝とさへ說く、サア、サア、お脈を。

(ト、ツツと顏を覗る。)

儀兵衞　サア、伯母御、誰にも、彼にも、な、遠慮は却つて義理になりませぬぞ。

(ト、目顏で云ふ、村路思入あつて。)

村路　宜しきやうに。

(ト、是非なささうに、先づ片手を出す、順庵左右の脈を診、頷いて元の座に復り、茶を出すお露の顏を見て。)

順庵　お露どの、もうあの煎藥は止しにさつしやれ、薰りの樣子では、大方は六鬱湯(りくうつたう)、手前が別に加減をして進せる。

お露　はい。

儀兵衞　大した事でも御座りませぬか。

順庵　暑濕の邪氣より起つたる留滯の病、重病では御座らぬ。

兵助　然して案じる病では。

順庵　必ず御心配には及びませぬ、では儀兵衞殿、藥は後からでも取りに御座れ、伯母御、氣落なぞなさらぬが宜しい。

(ト、力を附ける、村路は頭を下げるばかり、ジツと科。)

兵助　お蔭で安堵致しました。

(ト、挨拶よろしく、此の時少し雨の音、儀兵衛も立上りて。)

儀兵衛　では、わしも安心して戻りませう、旦那様、他事では御座りませぬ、お前様も風でも引かぬやう、吳々用心なされませ、大事の上にも大事のお體。

兵助　安心してくれ、それに決して如才はない、(ト、一寸科)コレ、お露、そなたも儀兵衛と一緒に戻つて、夜食でも早く終やれ、日がな一日、太儀であつたな。

儀兵衛　それでは然うさして戴け、明日も亦ある事だ。

お露　では旦那様、好い頃に召上つて下さりませ、お膳拵へはいつものやうにして御座ります。

(ト、暖簾口から行燈を出して片隅に置き、火鉢の火を直す、此の中順庵と儀兵衛は門へ出る。)

順庵　や、まだパラパラと落ちてゐるか。

(ト、扇子を擴げる。)

儀兵衛　ハア、先生様、秋の扇子は雨傘の代りに持ちますか。

兵助　ハ、、、、これは心着かなんだ、傘をお貸し申しませう。

順庵　折角だが、それは實物では御座らぬかナ。

兵助　イヤ、粗末のならば、自宅のが御座ります。

順庵　これは申し損じた、では、借用して參りませう。

お露　一寸お待ちなされませ。

(ト、暖簾口より、破れたる白張の傘を出して來て渡す。)

順庵　これは憚り。

(ト、直ぐに翳す。)

儀兵衛　そなたも一つに入れて戴け。

順庵　サアサア。

お露　イ、エ、わたしは。

儀兵衛　何の、親が見張つてゐる相傘だ、なア順庵様。

順庵　これは間違が無さ過ぎさうだ、ハ、、、、。

(ト、皆々笑ひの中、お露は傘の端に入りて、主人打連れ向うへ入る、兵助は後を見送り、門の戸を締める、村路は宜しく思入。)

村路　兵助殿、如何に手段と云ひながら、現在敵の村路を、手許に置いて此の春から、眞心籠めし介抱は、骨身に徹り勿體なく、寧そ自害と思ふた事は、指折る程にもあつたれど、折角のこなたの深切、刺殺したと態と醜うは書きながら、殺さぬ心は方便情、人質にするでもない侍氣の立派さに、引かれて今日まで阿容阿容と、厄介かけて

此の有様。
兵助　イヤ最早云うて下さるな、其の遠慮氣兼がわれ等に大毒、深切と見え世話と見えるも、畢竟は裏表、皆身勝手の言はたゞ醉狂、當の敵の水右衛門、相手にこそ怨恨はあれ、何でこなたに辛く致さう、軈て本懐遂しなば、恩怨一つに一家同様。
村路　エ、嬉う御座る、忝い、何卒一日片時も早く、惡人の倅を討ち、母が心の苦みも、休めて下され兵助殿。
兵助　村路殿。
村路　よくよく因果な。
（ト、云ふ時、側に寢てゐる富士太郎、俄にワアと泣出すに驚き。）
オウ、よう眠てゞあつたに、目が覺めてか、堪忍して下され、堪忍して下され。
（ト、抱上げれば。）
兵助　どうぞしたか、泣きやんな泣きやんな、坊ンのお傅は何處へ行た。
（ト、兵助抱取り、搖り賺く、此の中、村路は子供の寢道具を、下手障子の外へ出す、富士太郎はやがて泣き止み。）
富士太郎　母様、母様。
（ト、夢中に呼ぶ。）

兵助　怖い夢でも見たと見える。
（ト、村路と二人ジツと科、村路は堪らず障子を締める、此の時、暮六つの鐘、少し又雨の音。）
オウ、悉皆と暗くなつた、ドレ、御燈でも上げると爲よう。
（ト、やはり鐘の音、兵助は密と子供を蒲團に寢かせ、燧の火にて、佛壇に燈明を上げにかゝる、此の時薄く風の音、下手藪疊の蔭より、兵助の妻お時（二十）、少し亂れたる島田髷、秋草模様の着附の裾を引き、扱帶を締め、草履穿き、ションボリとしたる女郎の扮装にて出で來り、默つて門口を明けると、點けてゐる燈明自然と暗くなる。）
どうやら風が、（ト、見返つて吃驚）や、そなたはお時。
お時　兵助殿、日毎の言傳、心に掛けて好う見舞うて下さります。
兵助　オウオウ、今朝の言傳も屆いたが、（ト、一寸科）シタが、病氣で店も引いてゐると云ふに、秋の夜風の寒い處を、何と思うて遠く來た。
お時　お前と富士の、顔が見たさに。
兵助　オウ、然うか、よく逢ひに來てくれた、其處は寒い、マア爰へ來い。
（ト、宜しく坐ると、お時も側へ來て坐る、兵助はジツ

と視ながら。）

半月餘りの病氣ゆゑ、疲れの見ゆるは道理なれど、それにしても此の面窶れ、苦勞がみんな病の種。

お時　イエイエ、然う案じて下さりますな、渡る世間に鬼はなく、餘り病の募らぬ中、逢つて來いとの主の情、朋輩の深切で、途中も靜かな駕籠に乘つて。

兵助　然うであつたか。（ト、一寸愁）然しお時、渡る世間に鬼はなくとも、現在連れ添ふ良人の酷さ、世の常ならぬ夫婦仲を、別れて女房に勤め奉公。

お時　それは互の得心づく、身の代が用に立ち、お前の暮し、坊ンの病氣、無事に過ぎたはわたしの喜び、もう其の樣な事を云はずと、坊ンを早く抱かして下さりませ。

兵助　オウオウ、然うであつた、美しかつた色艶の、餘り變つた悲しさに、返らぬ愚痴をつい云ふた。

（ト、涙を隱して、富士太郎を抱き起し、渡せば抱き締め。）

お時　オウ、富士よ、眠つてゐやるか。（ト、ジツと顏を視）夫婦彷徨ふ旅の空。そなたの生れは沼津の宿、三國一の出世をせよと、富士と祝ひし効もなく、尙も流浪の此の春から、父樣一人の手に遺し、母は悲しい恥かしい、枕の數の憂き勤め、それも祖父樣兵衞樣の、仇を見ン事父樣に、討たせて天晴れ武士と、歸參を功に夫婦の者があの世此の世の親達から、勘當赦して貰ひたさ、喃、兵助殿、深いやうでも薄い緣、切て此の子をわたしの遺物（かたみ）に。

兵助　エヽ。

お時　父樣が何の樣に、可愛がつても男の事、あのいつぞやのお祭に、兩手に持つて喜んだ、お饅のやうに柔かく、膨れた頰をげつそりと、痩せさせたのも母の業、殊に乳不足で育つ兒は、弱い者との人さんの話し聞くにつけ、明暮案じてゐますわいの。

兵助　オウ、然うあらうとも、手放して置く大事の我が子、年齒は行かず、苦勞にあらう。

お時　あい、（ト、泣き）コレ、富士よ。

富士太郎　ヤア母樣、何處から來た。

お時　オウ、母の涙で目が覺めたか、（ト、子供の顏を袖で拭き）よう此の顏を見て置いて給も。

兵助　エヽ、何を云ふ、死別れでもするやうに、坊ンまで一緒に泣かしてくれるな。

富士太郎　母樣、もう何處へも行く事忌。

お時　あい、そなたや父樣を遺して置き、誰が何處へ行きたからう、一人離れてゐる心はノ、そなたが母を幼氣に戀ひ慕ふやうなものではない、まだ、まだ、遣瀨なけれど世の中は、人の掟によらねばならぬ、惡戯（わるさ）せず

と大人しく、早く大きうなり、石井の名を揚げ、わたしが父様要人様達にも、褒められてたもれ、や。

兵助　泣く事はない、富士、あいと云へ。

富士太郎　あい、其の代り、もう今夜から家に居て。

お時　アヽ、兵助殿。

兵助　可悼い目を。

お時　見ますわいなア。

（ト、兩人聲を忍んで泣く、薄く風の音、此の時、下手より馬士又六（四十位）、空身にて出で來り、勝手の外より。）

又六　兵助殿、お在かナ。

（ト、云ふに兵助は泣顔を隱し、暖簾口へ立つて行き。）

兵助　オウ、又六殿、度々の言傳、今朝もお世話で御座りました。

又六　處が何の世話効もないぢや、こちのお嬶のお時殿は、今朝明け方に歿られた、と云はれて吃驚。

兵助　エッ。

又六　今度はお前樣にあつちから言傳をされた序に、座敷へ通つてお馴染だけ、お線香は上げて來ました。

兵助　そりやマア、何時の事。

又六　今日の午前で御座るよ。

兵助　エッ。

（ト、驅入り見る途端、お時は佛壇の前なる傘の蔭に、掛け煙硝にてスッと消え、燈明の灯明るくなる、子供は置かれてワッと泣く、バラバラと雨の音。）

偖は今のは。

又六　子息どのが、どうぞしたか。

兵助　イヤ、果敢い夢を見ましたわエ。

（ト、涙も出ずに、ジッとなる。）

又六　マア、何にしても一番に、子息やこなたが、體を大事にする事だ、悔みに行くのも明日にさつしやれ、親子の衆が見えるまでは、必と葬式はせずに置くと、旦那殿が云うてよこされた、アヽ、まだ二十だとか云ふに、可哀さうな。

（ト、言ひ捨てに下手へ入る。）

兵助　アヽ、本望遂する喜悦も見ず、若い盛りを苦勞の仕死に。

（ト、云ふ時、障子の内より、ハアと云ふ村路の泣聲聞える、兵助思入あつて、富士太郎の手を取り、佛壇の前へ行き、燈明の灯にて線香を上げ。）

父上大性善入居士、女房お時、成佛得脫、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

富士太郎　父樣、母樣呼んで、母樣、母樣。

（ト、子供は兵助の體の周圍をうろうろする。）

兵助　オウ、富士、泣いてくれ、呼んでくれ、父も今一度逢ひたいわいやい。

（ト、どうとなり、子供を抱き締め、堪へかねてワッと泣く、處へ、花道よりバタバタにて儀兵衛駈出で、門を明け。）

儀兵衛　オウ旦那様、何して御座る。

兵助　儀兵衛か、慌たゞしい、何ぞ出來たか。

儀兵衛　出來たの段か、藥を取りに行く途々、あの順庵様の話には、つい五六日前方から、藤枝宿の六地藏村の道傍に、小屋住ひする男乞食の、右の膝頭に人面瘡とて、人の顔した希代の腫物、可哀さうやら珍しいやらで、四邊の評判、聞いて自分も後學の爲と見に行つて、膏藥一貼置いて來たが、其の乞食の人相が、不思議や今方脈を診た、あの伯母御に生寫し、何でも元は遠州あたりの侍で、槍術指南の家筋とか、しかも額に刀疵。

兵助　何と。

儀兵衛　サ、若しあの建札の相手ではあるまいかと、順庵様の密々話、旦那様、確に敵と思はれますかな。

兵助　ウム、遠州の侍、額に疵、あの村路殿に生寫しとは、疑ひもなき水右衛門、唯殘念なは今此の時、兄弟一緒に在合はされど、一時免せば一時の、不孝重ぬる親の敵、お時、喜んでくれ。

（ト、思はず佛壇に掌を合はす。）

儀兵衛　エ、奥様が。

兵助　オウ、お時の身にも仔細がある、村路殿から聞いてくれ、其處で頼むは倅と、彼の人。

（ト、少し小聲に、上手障子の内へ思入。）

儀兵衛　大事の人質。

（ト、頷きながら、富士太郎を抱き取る、兵助は帶引締め、佛壇の下の戸棚より大小取出し、確と挿す、此の中にサアと少し强く雨の音、村路は障子を細目に明けて差覗く。）

エ、、又降つて來た、が、宵月のある折からに、忍んで行くには結句幸、隨分心を落着けて、確りとおやりなされませ。

兵助　案じてくれるな。

儀兵衛　病人ならば、手にも立つまい。

（ト、云ふ中、兵助表へ出る。）

モシ、顔を隱して。

（ト、擴げてある内職の傘を窄めて差出すと。）

兵助　これは何うやら。

儀兵衛　ハテ、本望遂げれば、此の様なもの千本萬本。

兵助　ウム。

（ト、傘を受取る。）

富士太郎　父樣、何處へ。

（ト、縋る手を、窃と放し。）

兵助　直ぐ戻るぞ。

（ト、尻絡げ跳にて駈出す途端に風の音、兵助傘を半開きにして、一散に行く向うより、前の森の司馬、振分の荷を持ち旅扮裝、菅笠を傾け、空を見ながら足早に出で來り、花道よき處にて、双方思はず行當るを、木の頭、兵助は關はずに駈けて入る、司馬は舞臺に入つて振返り、儀兵衛は一心に向うを見送る、村路はジッと愁の科、此の模樣よろしく、雨に風音を冠せて、道具廻る。）

同藤枝六地藏村の場

前の場と同日の夜

本舞臺後へ下げ、上下へ通して常足高の草原、前面は斜に流して平舞臺につゞける、高處の上寄りには、古びたる乞食の蒲鉾小屋、前後の口には筵を下しあり、小屋の下寄りに、石佛のなくなりし臺石、其の側に石の線香立轉がつてゐる、草原には細い立木二三本、これに、鴉瓜の赤き實五つ六つ搦んでゐる、正面は暗き森上下は樹木の見切、藪疊など、總て駿州藤枝六地藏村夜の體よろしく、薄き雨音に、遠く木魚の音聞えて、道具留まる。

（ト、上手より、十四五の女の兒と、十ばかりなる男の兒の順禮、單衣の着附、笠を冠り、手を引合ひて淋しさうに出で來り、無言のまゝ花道を向うへ入ると、薄く風の音、下手より、前の場の兵助、傘を窄めて顏を隱し、忍び足に出で來り、小屋の内の樣子を窃と窺ひ、刀を拔きて、小聲になり。）

兵助　水右衛門殿、赤堀殿。

（ト、呼べど、内には返事なし。）

イヤサ赤堀、水右衛門お居やるか。

（ト、左に持つたる傘の先にて、入口の垂をポンと跳上げ、傘を投出し、屹と構へる。）

水右衛門　何誰で御座ります、わたくしは、左樣な者では。

（ト、前の森の水右衛門、月代の延びたる頭髮、肩入のある黑の着附、病氣の體にて、小屋の内よりジツと兵助を透かして見て、吃驚。）

ヤア、兵助か。

兵助　オウ、おのれは正しく赤堀水右衛門、斯く云ふは、如何にも石井兵衛が總領兵助、艱難辛苦の四年越し、漸くおのれの所在を知つた、サア尋常に勝負せよ。

（ト、迫り付くを、手を擧げて押止め）

水右衞門　急くな兵助、サ、、、、、心逆るは道理なれど、唯一言云ふ事あり。

兵助　ヤア、此の期に及んで何の一言、サア立て〳〵立會はぬか、エ、、怯れたか極惡人。

水右衞門　イ、ヤ怯れぬ、卑怯は云はぬ、然りながら、某が兵衞を死なせ、木下流の傳書の一卷、奪ひ囘せしは武士の意地、此の方にこそ遺恨はあつた。

兵助　ウム。

（ト、息込む。）

水右衞門　が、それはそれ、直ぐ樣遠州を立退いて、上方中國其處此處と、彷徨ひ廻つて仕官の望、此の度は江戸へ出でんと、志したる道中にて、不圖煩ひし希代の業病人面瘡、コレ、此の通りの惡疾にて、蓄へ薄き浪人の身は、驛々の宿にも嫌はれ、果は淺ましの野臥り姿、倒れし儘を此の空き小屋に舁入れられ、土地の人の情にて、纔に飢渴を免るゝ赤堀、お身の爰等に居るをも知らず、命惜さに足を止め、看出されしはこれ天命、互に武士の意地は一つ、怨は同じ、サア兵助、存分にせよ、立派にせよ。

（ト、膝行り出て、薦に包みし大小を、兵助の足下に差出す。）

兵助　ヤア、敵はぬまゝの似而非覺悟、現在討馬が見屆けしに、手こそ下さね企を以て、恩ある者を討たせたる、其の罪科は十倍百倍、譬としても其の儘に、一思ひには殺されぬ、サア拔け、拔け、立會へ。

水右衞門　イヤ、拔くまい、立會ふまい、然じ勝負と焦慮立ちても、行歩叶はぬ腰拔病。

兵助　何と。

水右衞門　エ、、起居さへ儘ならば、尋常に名乘り合ひ、心貫流の太刀先に、大業物の切れ味見せうに、（ト、無念の科）ア、、それも繰言、サア斬れ兵助、疾く討つて無念を晴せ。

（ト、覺悟の體。）

兵助　ヤア、身動きもせぬ腰拔を、据物切りに打ち放して、それが何の武士の手柄、何の手向、後日天下の胡盧、サア、一尺なり五寸三寸、躍り上り飛上つてなり、拔いて掛かれ、エ、、恥を知れ水右衞門。

（ト、氣を揉み焦慮つて詰め寄る處へ、バタバタにて、前の場の順庵、坊主端折り、竹笠を冠し、下駄穿きの儘、下手より急ぎ出て來り、透かし見て。）

順庵　オウ、兵助殿爰にか、子息が大怪我。

兵助　エッ。

（ト、思はず振返る隙に、水右衞門は小屋の內より、

竹杖に仕込みし刀を居合腰に拔いて、兵助の左の脇腹
　に切付けると。)
アツ。
　(ト、蹌踉く處を、立上つて左の肩先より斬下す。)
おのれ、卑怯者、聲をも掛けず。
　(ト、切つて掛かるを遣り違はし、又一刀右の肩を斬
　ると、兵助ドウとなり。)
ウム。
　(ト、苦しむ、順庵思はずヂツと視る、此の時雨止み
　て三四日頃の月影薄く、正面の雲間に映る。)
水右衛門　ヤイ、迂濶者め、苦しいか、痛いか、イヤサ悲い
か、うぬが此の森濱松から、我が母村路を引攫ひ、無手
助めが在所へ伴ひ、身を落着け、高慢臭い立札に、親の
敵と逆に、押掛けさせう猿智慧の、噂を聞くより傍痛く
探つて見れば母親を　刺殺したとは眞赤な僞り、生かし
て置いて人質とし、一擧兩得水右衛門を、釣出す餌とは、
甲羅に似せた、蟹侍の穴だらけ、泡はそつちに吹かす氣
で、お話し染みた人面瘡、一杯食つたは、ヤ、芽出たい、
芽出たい。
兵助　ウム、スリヤ此の方の様子殘らず。
水右衛門　オウさ、聞いての上だ、知つての上だ、餘り小
胸が惡いゆゑ、金で俄に抱込む順庵、醫は仁術と押掛け
て、親切ごかしに心を許させ、此の六地藏の村外れに、
非人のゐたのを丁度幸、今朝から代つて間に合ひ乞食、
それが心底業病で、唸つてゐると無手助の、親父の口か
ら云はせたは、おのれを爰へ誘き出し、今度は母を奪回
す、裏の裏行く我が計略。
　(ト、此の間に、側なる墓石に腰を掛け、順庵に大小
　を取らせて挿す、順庵は我が手拭にて、水右衛門の足
　を拭き、自分の下駄を穿かせ、而して、線香立の石を
　轉がして、同じく腰を掛け。)
順庵　醫者は醫者でも藥箱、持たぬが病の慾張り仁術、ホ
ンの一服施して、他から貰ふ藥禮に、突袖の手の出し序、
提灯持は出來心、惡く思つて下さるな。
兵助　エ、、何から彼から僞り表裏、飽くまで卑怯な欺し
討。
水右衛門　ハ、、、、、、、吐かしたり減らず口、僞り表裏
は互の事、おのれが智慧の足らぬゆゑ、身で身を滅す石
井兵助、流石親父の跡目ほどある。
兵助　其の頬桁を。
　(ト、立上つて斬らうとするを、交して蹴倒し、足下
　に踏まへ。)
水右衛門　ヤイヤイヤイ、生憎達者な膝頭の、口よりそつ
ちの小僧の鼻、明かして見せれば此の通り、(ト、脊藥

を剝し捨て）コレ、掻き傷一つも無え御足だわ。

兵助　エ、、斯う云ふ折りに弟や無手助、切て一人在合はさば。

水右衛門　ぐどぐどと世迷言、母の無難を知らせの役、此の順庵の見えるまでと、大小投出し繋いでゐた、其の間に討てば好い事を、下らぬ意地や名聞から、義者張り返つて討たぬが痴呆。

順庵　名を取らうより得を取れと、心づかぬがこなたの死病、もう手後れで是非が御座らぬ。

順庵
水右衛門　ウハ、、、、。

（ト、憎々して笑ふ、此の時月影消えて暗くなる、處へ下手より、前の幕の岩下大八、覆面尻端折り、提灯なしの駕籠を吊らせて出で来り、透かし見て。）

大八　お聲は先生。

水右衛門　オウ、こつちは上首尾。

順庵　どうで御座りました。

大八　後から直ぐにと思つた處、何か一人の小侍、あちこちするゆゑ少し見合せ、其奴の飛出た後から首尾よく。

水右衛門　其の侍とは、（ト、考へ）マア好いわ、此奴の外は、無手助あたりが一の腕利、知れたもの、サア兵助、人質こつちへ取戻せば、何斟酌も要らぬ此の方、サア、勝負してくれ、立會はしてくれ。

兵助　おのれ。

（ト、思はず飛上つて斬付けるを、大八支へて渡合はせると、駕籠舁はワツと下手へ逃げる。）

お時　女房、助けてくれい、今一度不思議を見せてくれい。

（ト、よろぼひ〳〵、聲を揚げて、切り結ぶ。）

大八　エ、、何の囈言。

（ト、突放して置いて腰を蹴ると、兵助は鎮齋と小屋の内へ轉げ込む、途端に前の莚の垂が落ちる、大八外から刀を突込むと、内にてウムと一聲、これと一緒に駕籠の内より。）

村路　アツ。

（ト、叫ぶ、順庵驚き、垂を上げて差覗くと、前の場の村路、懐剣にて喉を突いてゐる。）

順庵　ヤア、こりや生害。

大八　何、母御が。

（ト、駈寄つて吃驚。）

村路　コレ、水右衛門、そなたの代りに命を捨て、親子の衆に心の諫言。

（ト、ガツクリとなる、大八順庵顔を見合はせる。）

水右衛門　苦勞してやる效もなく、死に急ぎをする子不孝阿母。

大八　と云つて此のまゝ置かれもせず。

順庵　どうしたもので御座りませうな。

水右衞門　兵助が好んで置いた厄介人、元の裏口へでも舁かして行け、大八は返り討の次第を認め、あの高札に貼出し、後から早く岡部の宿へ。

（ト、大八の覆面の裂にて、刀の血を拭ひ、鞘に納める、大八も刀を納める。）

順庵　そんなら愚老は後々まで、存ぜぬ知らぬで精々名醫。

大八　駕籠屋、駕籠屋。

（ト、呼べど、見えぬに。）

道中稼ぎの大膽者も、今の騒ぎに慴えたと見える。

順庵　イヤ、これが突然では、誰でも吃驚致しまするて。

大八　吃驚序だ、順庵擔げ。

順庵　エツ、此の死骸を。

大八　何さ駕籠を、片棒は、闇を幸、拙者が承知だ。

順庵　エヽ、飛んでもない、兵助宅までは半里餘り、何で素人のわれわれに。

大八　文句を云ふな、迂濶に頼めぬ大事な旅人、侍でさへ擔ぐと云ふに。

順庵　だと申して。

大八　荒業片手の田舍醫者、薪でも貰つて擔ぐと思へ。

順庵　薪と思つてこれを焚いたら、手もなく隱亡、アヽ、善い後悪く、悪い後は、やつぱり悪さう。

大八　何をぐづぐづ、覺悟が付いたら早く致せ、コレ、駄賃を出さう。

順庵　さればなア、佛の世話を醫者がするとは、逆樣なれど頭の役目、それなら慾と二人連れ、ドレ、三枚で急ぐとしませう。

（ト、此の時、雨の音、順庵は以前の竹笠を冠り、身支度する、水右衞門は仕込みの竹杖を、刀と一緒に腰に挿す。）

大八　それでは先生。

水右衞門　オウ。

（ト、これにて、大八、順庵は、村路の駕籠を擔いで下手へ入る、水右衞門は兵助が捨て置きたる傘を拾ひ取る、と、五つの鐘。）

濡れに由縁の岡部の宿、あの飯盛のお餘りでも、貰つて今夜は打臥せらうか。

（ト、悠々平舞臺へ下ると、此の時、上手より前の幕の無手助、續いて、兵助の弟石井源次郎（十八）、同く牛三郎（十五）、これは前髮、何れも旅拵へにて出で來り、無手助は人影を透かして、手早く笠を脱いで手に持ち、水右衞門に窺ひ寄る、これと一緒に花道より、前の場の司馬、笠も荷物もなしにて、小走りに、躓き

顯き出で來り、直ぐ舞臺に入り、これにて一同暗闘模樣、司馬は先づ無手助に探り當て、續いて兄弟の者に障る、水右衞門は誰にも當らず、徐々と拔けて、花道附け際へ行く、此の時、司馬再び無手助に探り當て、互に透かし見て。)

司馬　無手助でないか。

無手助　オウ、司馬樣か、思ひ掛けなく。

司馬　シテ、御兄弟は。

源次郎　どうやら。

(ト、此の聲に、水右衞門衞と花道へ行く。)

源次郎
半三郎　怪い。

(ト、これにて、水右衞門傘を半開きにして身を屈めるを、木の頭、舞臺の四人はジツと窺ふ、此の模樣よろしく、水右衞門を勤める役者の替風の幕、幕引付けると、水右衞門ポンと傘を開いて。)

水右衞門　イヤ、危い事哺。

(ト、ニツタリとあつて見得、双盤樣の鳴物にて悠々と向うへ入る、留めの木にてシヤギリ。)

大　詰

勢州龜山出羽の森の場

前の場の翌年、四月下旬の朝

本舞臺一面の平舞臺、正面は森の中に廣き池のある中遠見、此の池の片端を舞臺へも續けて、上手舞臺端まで紆行つたる小流、八橋樣の小橋を架け、汀には杜若が美しく咲いてゐる、舞臺には一杯の藤棚を出來へ、花の盛り、地絣の上には花屑澤山散れてゐる、下手には葭簀を天井にしたる掛茶屋、緋の毛氈掛けたる床几二三脚出してあり、勢州龜山出羽の森の體よろしく、上手奥より宮神樂の鳴物聞えて、幕明く。

(ト、土地の百姓太兵衞(五十位)、小ざつぱりしたる扮裝にて、山伏立源(三十五六)、と連立ち、上手より橋を渡り出で來り、四邊を見ながら。)

太兵衞　イヤモどうも、常は龜山名所で大威張の出羽の森も、昨日今日は神明樣の御普請祝ひで、あつちへ悉皆と人氣を取られて了つた。

立源　誠に、折角の藤や杜若も、力持や蛇使ひ、三つ目小

俗の見せ物には敵はぬと見えますな。
太兵衛　近郷近在は固より、關、庄野あたりからさへ、お參りやら見物やら、これでは羽黒様も上つたりだ。
立源　祈り伏せようにも相手は神様。
太兵衛　コリヤ、迂濶り法螺も吹けませぬなア。
立源・太兵衛　ハヽヽヽヽ。
（ト、二人は笑ひながら、茶店の裏を下手へ入る、やはり宮神樂にて、上手より、槍術指南の濱田祐軒實は前の場の赤堀水右衛門、撫付の頭髮、大小羽織袴、槍持を連れ、續いて前の場の岩下大八、同じ羽織袴、少し離れて後より、關の宿の浮れ女、小藤（二十位）、お六（十八九）、小婢おかの（十五六）の三人附いて出る。
大八　何と小藤女郎、あの賑はひを見たら、遙々と關から出て來た効があつたであらう、午からは又緩々と案内して、森の中の羽黒山の、天狗殿でも拜ましてやらう。
小藤　それよりも爰の花盛り、見事なもので御座んすなア。
大八　何、花盛り、天狗からの思ひ着きか、ヤ、これは大した御洒落だ、ハヽヽヽ。
おかの　それもお洒落で御座りますかエ。
（ト、皆々笑ひ、水右衛門と大八は上寄りの床几に、女達は下の床几に掛けると、茶店の娘お蝶（十六七）、それと見て。）
お蝶　これはおいでなされませ、只今お茶を差上げまする。
お六　モシ、大八さん、お前は小藤さんにばかり愛想が好うて、わたしには唾も掛けなさんせぬ。
大八　これはお六、粹にも似合はぬ、小藤女郎は、ソレ、（ト、態とらしき科）爰等が師弟の禮で御座る。
小藤　又大八さんの憎體口ばつかり。
（ト、此の間に、お蝶茶を出す事よろしく、水右衛門は煙草を燻らせながら。）
水右衛門　イヤ、憎いと云へば、何處と無し小癪に障る三木十右衛門、今拜殿に見えてゐたが、彼奴、われ等が舊冬仕官の時より、事毎に胡散の目を向け、槍術の指南番たる某を、折がなあらばの見え透く底意、此の怨み何時かはと、面見る度の忌々しさ。
大八　では御座れども、兎に角相手は家老職、滅多な事を。
水右衛門　エヽ、何を弱腰な、奉公の日は淺けれど、主君の機嫌はもう大方、此の祐軒の口次第、彼奴遠からず。
（ト、一寸科。）
大八　イヤ、然うなれば天下に敵なし、思ふが儘、小藤女郎もやがてはお部屋、嬉しいか。
（ト、顔を見ると、小藤は嬉しく恥かしき科。）
小藤　其の様な事、知らぬわいなア。

大八　あんまり知らぬ顔でもないが、其の時には此方も共共、喃お六。

お六　それこそ本當に、知らぬわいなア。

（ト、串戯のやうに云ふ。）

大八　こりや人前を憚りをるわエ。

（ト、皆々笑ふ。）

水右衞門　サア、一休みしたら、宅へ戻つて、緩々と神酒でも一器。

小藤　飲ませたが最後、動く事では御座んせぬぞエ。

大八　稽古休みの道場へ、今夜は底々と寢かしてやらうよ、ハ、、、、。

（ト、一同床几を離れる。）

水右衞門　參れ。

槍持　ハツ。

おかの　お世話で御座りました。

（ト、後から茶代を置いて行く。）

お蝶　有難う御座ります。

（ト、鳴物になり、水右衞門先に、槍持、大八、少し離れて、小藤、お六、おかの三人、これは藤の花を見返りなどしながら、皆々向うへ入ると、下手茶店の後より、頰冠り百姓姿の前の場の無手助、ツカツカと出る、これと一緒に上手より、龜山の家老三木十右衞門（四十五六）大小上下姿、續いて前の場の萩原司馬、大小羽織袴にて立出で、何れも向ふを見送り、顏見合せて。）

無手助　御家老樣、あれこそ確に赤堀水右衞門。

十右衞門　紛れは無いな。

司馬　樣こそ變れ、人相骨格額の傷、決して相違は御座りませぬ。

無手助　大井川で逃して以來、前後五年の辛苦の效、今日こそ彼奴の面を見た。

司馬　御兄弟無手助諸共發足の、跡に殘りて唯一人、お家の始末、其の後は、敵の行方味方の在所、其處よ此處よと尋ね侘び、漸く出會ひし藤枝にても、不知案内の闇路に迷ひ、時後れ、頼みの蔓も切れたる心地。

無手助　然し主從一緒に落合ひ、到頭敵を附込んだは。

司馬　浮木に會ひし盲の龜山。

十右衞門　槍を立てさせ、女を伴ひ、増長我慢の濱田蘭軒、お家の爲にも此の期を外さず。

司馬　足弱連れの歸り途、先へ廻つて。

十右衞門　オウ、兄弟の者へ少しも早く。

無手助　サア本望の。

十右衞門　急げ。

無手助　ハツ。

無手助
司馬　時が來たわエ。

（ト、兩人頷き、向うを見込み、引返して急ぎ下手へ入る。）

十右衛門　神明宮へ御代參の、折から見當る仇敵は、神の御利生、彼等が一心、いでや手配を。

（ト、振返ると、上手より、槍持と股立の侍兩人、續いて、黑馬を口取が引いて出る、十右衛門ヒラリと跨り。）

血こそ引かねど叔父甥の、われもこれより。

（ト、揺り直るを、木の頭、十右衛門向うを見込んで屹と見得、神樂の鳴物勇ましく。此の模樣よろしく、村里の道具幕、幕引付けると、早間の同じ鳴物にて繫ぐ。）

返し、龜山城外の場

前の場と同日の午頃

本舞臺一面の平舞臺、上下は城の石垣にて見切り、正面には草土手ある石垣、これに松の立木、總て龜山城見附外の體よろしく、鳴物打揚げると、幕外へ大薩摩の太夫と三絃二挺出る。

大薩摩　へさるほどに、石井兄弟主從は、倶に天を戴かざる、君父の敵水右衛門、漏らさじものと押取り込め、火花を散らし打つ太刀の、風にざわめく城の松、色の千歲を十返りの、其の龜山の大手先、名を末代に措みつゝ、命の限り戰ひしは、目覺ましかりける有樣なり。

（ト、大薩摩の切れ、バタバタと大きくツケの音、知らせの木にて、道具幕切つて落すと、何もバタバタにて、上手より、萩原司馬、前の場の拵へ、襷鉢卷精々しく、刀を附けながら、繰引に引いて來るを、同く前の場の岩下大八、羽織を脫ぎて、袴の股立したるまゝの拵へ、刀を拔いて追つて出で、舞臺眞中にて、双方よろしく見合ひ。）

大八　エヽ、口ほどにもない小童、逃ぐるとて逃がさうか。

司馬　名乘り掛けて討つ身の、何の逃足、當の敵の水右衛門に、要らぬ助太刀さすまい爲、それによくこそ爰まで來た。

大八　其の舌の根を。

（ト、兩人烈き立廻り、やがて司馬危くなる處へ、前の場の無手助、今度は常の奴姿、一本挿尻からげ捻り

鉢卷、前の幕の兵助の一子富士太郎（五つ）を、扱帶にて脊負ひ、丸太の棒を抱へて、上手より走り出で來り、斯くと見て割つて入り。）

無手助　久しく摂だ岩下大八、憎い上にも重なるは若旦那の怨み、委細は後で嚴廃めを締め上げて、首のある中背開いた。

大八　エヽ、冥途の供に後れるな。

無手助　何を。

（ト、司馬と二人双方より打つて掛り、究竟、無手助は大八の利腕を打ち、刀を落す處を司馬切り付けると、アツと倒れる。）

止めは後で若旦那に。

司馬　ソレ。

（ト、兩人バタバタにて、上手へ駈込むと、鳴子廻し。）

同　大手先の場

前の場と同刻

本舞臺一面の平舞臺、正面に城の大手の門、濠石垣の拵へよろしく、上手の見切は前同樣の石垣、早めたる合方、水音にて道具留まる。

（ト、眞中に前の場の拵への濱田兩軒實は赤堀水右衛門、駁立襷掛け、以前の槍を構へ、下手に前幕の石井源次郎、同じく元服の石井半三郎の兩人、白裝束仇討の扮裝、立並んで刀を差付け、上手には前の場の三木十右衛門、これも以前の槍を持つて、何れも立ち身。）

水右衛門　ヤア、見も聞きもせぬ汝等兩人、敵などとは血迷ふたか、龜山殿の御指南番、無禮ひろがば免さぬぞ。

源次郎　ヤア、云ふな赤堀、われ等兄弟幼くして、父御最期の其の折は、此の源次郎は十五歳。

半三郎　半三郎は漸く十二。

源次郎　敵の顏も見覺えず、怨みを呑みつゝ過せし年月。

半三郎　而も去年は兄上まで、情なや又おのれ等が手に暗暗と御最期と、聞きたる時の其の無念さ。

源次郎　サア尋常に名乘つて。

源次郎
半三郎　勝負。

水右衛門　オウ、然う放言くなら云うて聞かす、おのれ等が親兵衞めは、遺恨によつて他手に掛けた、若黨者の兵助は、我が痴呆から求めて往生、然し相手は赤堀何某、斯く云ふ今の某は、當龜山の御扶持人、槍術師範の濱田兩軒、處もあらうに大手先で、討たうなどとは無作法者めが。

十右衛門　アイヤ、禰軒、豫て汝が素性を怪み、十の八九を探りし上、石井兄弟招き寄せ、殿にも大方お耳に入れ、今日立會と云ふ際の、臨機の計らひ、三木十右衛門承りをる、サア、濱田禰軒、唯今よりお暇下さる、有難くお請け致せ。

水右衛門　ウム、スリヤおのれの作略にて。

十右衛門　御身に討たれし兵衛の妻は、某が妻の姉、仕宜によつては、義理ある仲の助太刀をも致す所存、サア、一本立の赤堀殿、才覺自慢腕自慢の、お身の最期を見物致さう。

水右衛門　斯くなる上は、赤堀水右衛門が木下流の一世の手並、おのれ等一々喉吭に覺えて置け。

（ト、槍を扱いて突いてかゝり、兄弟の者と烈しき立廻り、やがて半三郎は、右の高股を突かれる、これにて三人屹と見得、此の時、バタバタにて花道より、前の場の無手助司馬の兩人、驅出で來り。）

無手助　大八は息の音止めた、サアお二人。

十右衛門　半三郎、手疵は淺いぞ。

司馬　エッ、お怪我をな。

（ト、司馬も無手助も驚く隙に、半三郎又飛びかゝる、されど兄弟危くなるに、司馬飛込むと、これも亦突立てられて刀を落す、處を無手助横合より、丸太を揮つて、水右衛門の槍を打落す、水右衛門素早く刀を拔いて、又打つて來る丸太を切る、途端に源次郎踏込んで、水右衛門の右の肩口を斬り、半三郎は左の脇腹に斬付ける。）

無手助　出來た。

（ト、思はず大聲、水右衛門は立ち身にて苦しみ、バッタリ倒れる、兄弟立寄り。）

源次郎　父上の敵。

半三郎　兄上の仇。

（ト、双方より止めの刀。）

無手助　ソレ坊ン樣。

（ト、手早く脊の富士太郎を下すと、司馬は自分の脇差より小柄を拔き取り。）

司馬　企の種のこれなる小柄。

（ト、富士太郎に持たせると、無手助は其の手を持添へ。）

無手助　ソレ、覺えた通りに。

富士太郎　オウ、父樣祖父樣の敵。

（ト、同く止め。）

十右衛門　オウ、天晴れ手柄の兄弟主從。

司馬　そちらは叔父上甥の殿。

無手助　こちらも同じ二人の叔父樣、甥の坊ん樣。

十右衛門　芽出たく歸參の。

（ト、云ふた、木の頭。）

便りを待つぞよ。

（ト、此の模様よろしく、時太鼓などにて。）

——幕——

赤星重三郎（二幕六場）

役名

水澤頼母
お照　頼母の娘
赤星重三郎
妙源　僧
作吉　寺男
伊兵衞　番頭
南郷力丸
羽田の大助
藥師の八藏
お六　百姓の女房
松吉　拔參り
船頭四五人

序幕

大森村頼母浪宅の場

九月十八日の夕七つ半頃

本舞臺上寄りに常足の二重家體、麁末なる本緣附き、上手に續けて障子家體、下手には少し低く葺下しの勝手元、二重中程に暖簾口、此の上手に佛壇と押入、二重の前の平舞臺は秋草の生えたる庭、下手には網戶の木戶、柱には「☴ 周易坎兌堂」と記せし木札を掛けあり、木戶より折曲げて下手藪のあたりまで、低き生垣を續け、此の垣の內に桔槹の井戶、後の方に竹竿を掛けたる物干の柱建つて居り、此のあたりの草の中には、薄や鬼灯唐辛子の赤き實など交り、下手には、女竹の小藪、正面は藪を越して畠を見たる背景、上下は樹木と竹との見切り、總て大森村水澤頼母浪宅の體よろしく、遠く團扇太鼓の音など聞えて、幕明く。

（ト、二重には、頼母の娘お照(十七)、袷姿窶れたる扮裝にて、父の羽織の綻びを、疊紙の上にて縫つてゐる、處へ向ふより、近所の百姓の女房お六(四十位)、平生着にて、風呂敷包を手に載せ、急ぎ加減に出で來り、直ぐ舞臺に入り、木戶を押明け入りながら、）

お六　御免下さいまし。

（ト、小腰を屈める、お照顏を上げて。）

お照　オヤ、お六さんで御座いましたか、サア、何卒。
(ト、針止をして羽織を片寄せ、端近く出る。)
お六　今頃上つて濟みませんが、先生樣はお宅でゐらつしやいませうか。
お照　はい、此のお涼しさで、最早床の上に居りますが、何ぞ急に。
お六　ちよつくら占て戴きたい事があつて、それで今時分、急いで參つたので御座いますが。
お照　左樣で御座いますか、それでは早速、
(ト、立上る時、上手障子の内より、賴母の聲。)
賴母　イヤ、お話は聞えた、こちらへ參つてお目に掛からう。
(ト、障子を明け、尾州家の浪人水澤賴母(五十五六)少しく病に窶れたる體、袷姿にて立出で、緣近くに据ゑたる机の側に坐ると、お照は件の羽織を着せ掛ける。)
お六殿、夕暮になつて俄のお出では、何ぞ差迫つた心配事でも。
お六　イエ、惡い事では御座いませんが。
お照　マア、兎も角も、これへお上りなされませ。
(ト、疊紙を折つて針箱の上に載せ、片隅の火鉢の上瓶から、澁茶を酌みて出しなどする、此の間に賴母はお六に向ひ。)

賴母　お話の樣子では、何か占ふ御用の樣ぢやが、早速に承らうか。
お六　はい、(ト、少し膝を前め) 大した事でも御座いませんが、實は此の間から、家の伜に緣談が始まりまして、其の返事を、何れ緩り考へてと、つい煮え切らず延び延びにしてゐました處、今日になつて、先方から急に返事を急ッ付いて參つたもので御座いますから、サア、何方にしたものか、吉凶の處を先生樣にと、それで御判斷を願ひに上りました。
賴母　成程、緣組は人間一生の大事、思案の上に御思案は御道理、然う云ふ譯で御座らば、隨分信を取つて占て進ぜませう、(ト、机に向ひ) 御子息は或然二十三で御座つたな、先方の娘御は。
お六　十八になりますよ。
(ト、聞いて賴母は頷き、算木筮竹を取つて式の如くに易を立てる。お六は此の間に、持つて來し包より、目笊に入れたる栗の實を、お照の前に差出し、小聲になりて。)
お珍しくも御座いますまいが、見料代りに持つて參りました、何卒お茶請にでも上つて下さいまし。
お照　何時も何の彼のと戴くばかり、これでは却つてお氣の毒でなりませぬ。

（ト、これも小聲に挨拶し、栗を勝手元へ持つて行きて笊を明け、附木を入れて片隅に置く、お六は疊みたる風呂敷を膝に載せ、賴母の方へ向き直る。）

賴母　お六殿、良い卦が出ました、難い事は申さぬが、澤地萃の變爻澤雷隨、萃は集まり物事の繁昌する象、萬事に吉とある、又隨は少女の長男に隨ふ意、我動きて彼悅ぶと申せば、こちらさへ料簡を定めて掛かれば、此の緣談は軈て芽出たく調ふで御座らうが、其の前に氣を着けぬと、二人妾に相逢ふと云ふ象もある、親御達の手心も肝腎で御座るぞ。

（ト、穩和と云ふ。）

お六　アヽ、然うで御座いますか、お蔭樣で漸く判明致しました、早速歸つて家中を悅ばせませう、何うも有難う御座いました。

（ト、禮を云ふ、お照は日笊を返しながら、盆に移せし栗を賴母に見せ。）

お照　父樣、これを戴きました。

賴母　オウ、何よりの物を澤山に。

お六　本當のお印で御座いますよ。

（ト、笊を包んで門へ出る。）

賴母　お連合や御子息には、又聞で悉皆と御得心は參るまい、明朝でも又お目に掛かつて委く申さう、仕事の出掛けになりと、一寸お寄りなさるが好い。

お六　御深切に有難う御座います、では先生樣、お大事になさいまし。

お照　お匆々で御座いました。

お六　飛んだお邪魔を致しました。

（ト、お六は勇々と向ふへ入る、賴母は算木筮竹を片付けながら、獨語。）

賴母　諺に云ふ易者身の上知らず、他人の緣談に吉凶を說き語れど、我が一人子の緣は何うなる事か、許嫁の婿はあれど、訪れもならぬ今の身の上。

（ト、思はずお照と顏を見合せると、お照は密と顏を背けて、兩人愁ひの科。此の時向ふより、羽織袴大小姿、前髮の赤星重三郎（二十位）、行手を見ながら出で來り。）

重三郎　今の內儀の話の樣子では、愈御主人に相違は無い、イヤ、何卒然うであつて呉れゝば好いが。

（ト、舞臺に入り、木戸の外に立ちて、占易の札を一寸見て內に入り。）

卒爾ながら、些とお尋ね申したう御座ります、（ト、お照と顏を見合せ）オウ、お照樣では御座りませぬか。

お照　然う仰有るは。

重三郎　以前尾州にお住ひ頃、御奉公申して居りました、

赤星重三郎に御座りまする。

（ト、聞くより頼母は差覗き。）

頼母　オウ、重三郎か、ヤ、思ひ掛けない。

重三郎　頼母様で御座りましたか、好うこそ御無事で。

頼母　オウお照、赤星ぢや、其方が好きの重三郎が参つたのぢや、サ、これへ通せ。

お照　マア私とした事が、久し振ゆゑつい見違へて。

頼母　サア重三郎、ヅッと上れ、見る通りの茅屋、家内はこれ限り、遠慮は要らぬ。

重三郎　然らば御免下さりませ。

（ト、下手より二重に上り、慇懃に座に就く。）

頼母　ア、、好くぞ尋ねて來てくれた、が、何うして爰が分つたな。

重三郎　サ、何から申上げうやら、お話は山ほど、（ト思入あり）お前様御浪人なされてより、足掛三年と承りまする、私は其の前年、身の過失よりお暇戴き、江戸表へと志しましたは、御承知の通りで御座りますが、途中遠州金谷宿まで参りし時、俄の發病に歩行も叶はず、難儀の場所へ通り合せしは、土地に道場を構へゐる剣道の指南濱島何某、兎も角もとて深切に、其の家へ伴ひ行かれしが縁となり、醫藥の世話の離れし後は内弟子同様、中條流の教へを受け、二歳餘りを送りましたが、初念の如く、久々にて將軍家お膝下の模様も見たく、且は身の落着も定めたく、乃ち今春出府致し、芝高輪の知己を尋ね参りし處、月日經つ中居所變りて、其の行先も分明ならず。

頼母　ホイ、シテ其の後は。

重三郎　あちこちと、都會珍しさに彷徨ふ中、風も身に沁む秋の空、何うやら友達戀しく、居馴染みし土地も戀しく、冬の來ぬ間に、再び金谷の師匠の許へと、心を極めし折も折、不圖宿の者の茶話に、尋ね人などならば、今大森に評判の易者、坎兌堂と云ふ御浪人、それへ參つて占て貰つてはと、勸めの言葉が耳に止り、頼母様は豫て易學に明るきお方、それに、私までが聞き覺えに知つた易の卦の名、大方坎の字は水、兌は澤、若やと存じ。

頼母　ウムウム、流石は重三、好う考へた、喃お照。

お照　本當に好く中つた事で御座りまする。

頼母　わしの易より確々。

（ト、三人顔を見合せて笑ふ。）

重三郎　イヤ、蟲が知らすと申すはこれか、其の坎兌堂こそ、十が九つ御主人様、水澤をお名乗りなさるゝ頼母様に、相違は無いと思ひ込み、思ひ立つまゝ俄のお尋ね。

頼母　逢へば昔の主從。

重三　御親子。

お照　盡きせぬ御縁で。

重三郎／お照　御座りましたなア。

（ト、何れも喜ぶ、お照はこれより茶を出す事などあり、重三郎は四邊を見廻し思入。）

重三郎　時にお照様、奥様が最前から、お見えにならぬやうで御座りますが、何處ぞへお出でなされましたか。

お照　母様は去年の暮、悲いお身におなりなされました。

重三郎　左様で御座りましたか、（ト、思入）見れば賴母様にも、何うやらお勝れなさらぬ御様子、大した事では御座りませぬか。

賴母　深切に好く言うてくれる、浪人の身の便りなく、親子二人が淋く暮す朝夕の折々に、話し出すは其方の噂、常日頃は人一倍物優いにも似ぬ氣短から、些細の事より家中の若者と爭ひ、是非なく我が方を立去りし後は音信なく、今は何處に暮らし居るか、此の方も讒者の爲に尾州家を浪人して、一家三人、江戸の親類へ便る途中、そちの話とは反對に、圖らずも人を助けしが緣となりて、暫しとばかり此のあたりに足を留め、それより何時か、賴まるゝまゝに、土地の子供の手習師匠、一時は氣樂に日を送りしが、去年家内に先立たれて此の方、散々の貧と苦勞に疲れ果て、寺子の面倒も見切れぬ故、表店を引拂ひ、爰に移りて易者の世渡り、近所の衆の情にて、幸ひ餓ゑ凍えもせねど、不便なは此のお照、若い身空に世帶の世話、重三郎、察してくりやれ。

（ト、宜しく科、重三郎は染々とお照を視ながら。）

重三郎　今は十七の花の盛り、私が御奉公中は、まだ私も子供同様の料簡なし、信に主從の見境もなく、友達か何その様に、御一緒に遊びましたが、外々にてお目に掛かつて見ますれば、斯く美しうお育ちなされた効もない水仕の業、お悼はしう存じまする。

（ト、三人顏を見合せて愁ひの思入、此の時下手藪の後より、土地の質屋新井屋の番頭伊兵衛（四十位）、羽織着流し、小き包を持ちて出で來り、直ぐ木戸を入り。）

伊兵衛　はい御免下さいまし、新井屋で御座います。

（ト、椽はずれに腰を掛ける。）

お照　オウ、伊兵衛殿。

賴母　イヤ折惡う、今は客來。

（ト、親子は忸怩顏を見合せ、重三郎の手前を愧る科、伊兵衛それと察しながら。）

伊兵衛　成程、お客様で御座いますな、然し、餘り序もない處を、態々廻つてお寄り申しました私、遲くなつて最早彼此日の暮、氣が急きますゆゑ、これで早速申上げますが。

お照　サ、それは然うでも御座んせうが。
賴母　折角の珍客、成るべくならば明日の事にでも。
（ト、當惑の體を見て、重三郎穩と氣輕く。）
重三郎　イヤお二人とも、其の樣にお心遣をなされまするな、何御斟酌には及ばぬ私、（ト、伊兵衛に向ひ）見れば商人衆、何れ商賣の用と見えるが、某は當家の身內も同樣、遠慮には及ばぬ、何う云ふ事か云つてお見やれ、仕宜によつては、話し相手になるまいものでもない。
伊兵衛　左樣で御座いますか、それは丁度好い處へ伺ひました、私は、此の大森の入口に、質屋渡世を致して居りまする、荒井屋と云ふ店の番頭、伊兵衛と申して、こちら樣とは可なりお馴染の者で御座いますが、舊臘の御不幸やら、御主人の御病氣やらで、質物の外に、形もお預かり申さず三兩五兩と、幾度にか御用立て申しました高が、何時か積つて十三兩、御本人一判證文一枚で、今日まで御融通を致しましたは、近所の人からお師匠樣とか先生とか、立てられてお在のお武家を、こちらも立てゝのマア男氣、然しそれも期限は切れる、利息は溜る、些と此頃では貸し下されの、と申しては、失禮かは存じませんが、餘り果しが御座いませんゆゑ。
（ト、尙も言ひ續けようとするを制めて。）
重三郎　最早よい、分つた、確と其の通り相違ないな。
伊兵衛　お二人を前に置いてのお話、何で間違が御座いませう。
重三郎　然らば其の儀は、某が埒を明けて遣はさう、（ト、紙入より小判を取出し）此の方に當家の御主人に高恩ある者、今日圖らずお尋ね申して、斯樣な話を聞くと云ふも詰りは緣、お二人に對しては、信に差出がましけれど、外には話の纏まり樣もなき一條、サ、如何程になるか受取つてくれ。
賴母　コレ重三、それでは餘り心苦しい。
重三郎　イヤ、一時お立替へ申して置きまする分の事。
（ト、再び伊兵衛に向ひ）サ、勘定致してくれ。
伊兵衛　ではお辭儀なしに戴きます、（ト、金を數へて）これは十五兩御座いますな、利分が三分二朱と、質物の利上を丁度に戴き、殘りの三分と一朱は、そちらへお戻し申し上げます、（ト、風呂敷の中の大きなる革財布より剩餘を出し、次に懷の紙入より證文を出して返し）確に頂戴仕りました、（ト、小判を紙入に入れて內懷に納め）斯うして置いて下さいますと、主人の手前、又何時でも御融通が致し好う御座います、何うもお世話樣で御座いました。
お照　重三郎殿、何とお禮を申さうやら。
賴母　面目もなき此の爲體。

伊兵衛　何のお二人樣、以前お世話になつたと云ふお仁が、昔を忘れぬ御恩報じ、結構な事では御座いませんか、（ト立上り）お若衆樣、お蔭樣で大きに助かりました、何うも有難う存じます、何誰もお邪魔を致しました。

（ト、伊兵衛は元氣よく、元の路を下手へ入る。賴母思入あつて。）

賴母　折角の深切と云ひ、只今お仕宜、心ならずも迷惑を掛けて了うたが、何時此の返濟がならうやら。

お照　私も亦それが氣懸り。

重三郎　ハヽヽヽ、何を仰有ります、一旦の過失とは申しながら、根が荒氣ゆゑの身の不始末、御主人の御難儀も、存ぜぬまゝに他所にして、今日の今まで御無沙汰の、切てお詫びの萬分一、些細の事がお役に立つたは望外の仕合、これを寸志の手土産とも思召し、お心安く。

（ト、此の時塒に歸る鳥の羽音バタバタと樹木の梢に聞え、舞臺少しく暗くなる、重三郎外を眺め。）

思はぬ長座に、秋の日の最早薄暗がり。

お照　今行燈を。

（ト、お照は手早く暖簾口より行燈を持つて來る、此の間に。）

重三郎　イヤ、今日はこれにてお暇致しまする。

賴母　最早戻りやるか、（ト、科あつて）夕飯なりとゝ云ひたけれど。

お照　恥かしい今の有樣。

賴母　心に掛けて尋ねてくれたに、待遇とては澁茶一碗。

お照　それさへあるに、太いお世話に。

重三郎　イヤ、其の樣に最早仰有りまするな、再び金谷へ立歸りまする前、必ず今一度お訪ね申し、及ばずながら後々の事何や彼や。

賴母　そちも浪々の身の上なるに。

重三郎　其のお心遣は御無用、お目に掛かつて重三郎、辛と重荷を下しました、（ト、下り立ち）左樣ならば御機嫌宜う。

お照　最早足下が暗くなりまするが。

（ト、送つて出るお照をジツと視て、少し小聲に。）

重三郎　お照樣、二人互に手を取合ひ、遊び廻つたもつい先頃。

（ト嘯くやうに云へば、お照は恥らひて俯向くを、差覗き。）

僅見ぬ間に此の美しさ。

お照　エヽ。

（ト、顏を見合はすを、木の頭、双方宜しく科。）

重三郎　必とお力になりませう。

（ト、シンミリと云ふ、賴母は何心なく內より見送る、

此の模様宜しく、道具下手へ廻る。）

大森橋橋際の場

前と同じ日の夜六つ頃

本舞臺一面の平舞臺、上手より斜に前へ少し橋を覗かせ、此の後には最早店を終ひたる葭簀張りの掛茶屋、下手には繪心に折曲げたる黒塀の内に、二階家の外れを見せ、障子には灯が映してゐる、塀の切戸口には、「するが屋裏口」と書いたる小き札を打ちあり、橋の下の水は、太神柱裏より茶店の蔭に消えてゐる、正面の背景は並木にて、其の根方は、下寄りほど高く斜に描き、木の向ふは畠と處々に田舍家の遠見、舞臺端下寄りには、正面の並木に準つて斜に土坡を置き、それに續けて草を描きたる地絣を前の方へ布き、人は橋より斜に黒塀の後へ出入りする街道の様、總て大森橋際夜の體よろしく、風の音にて、道具留まる。

（ト上手より抜參りの小僧松吉（十四五）、スタスタと橋を渡り出で來り黒塀の向ふを下手へ入ると、入れ違ひに塀の後より、前の場の伊兵衛、下の方に「あらゐ屋」と書いたる小田原提灯を提げて、振返りながら出で來り）

伊兵衛　春先でもある事か、寒さに向つて抜參りとは、イヤハヤ子供は向ふ見ずだ、（ト、舞臺中程に來り）向ふ見ずと云へば、最早宵闇の暗がり、流石に月が無くなつたので、駿河屋にも今夜等は飲み客がないと見える。

（ト、橋の方へ行かうとする時、下手より後を跟けて來し藥師の八藏（三十五六）、袷に三尺帶草履穿き、突然に衝と寄つて、伊兵衛の懐に手を突込むに吃驚し。）

エ、何をする、此の人は。

（ト、其の手を拂つて身を振向ける。）

八藏　何をするものか、其の懐に用があるのだ。

（ト、又手を入れようとするを突退け。）

伊兵衛　泥棒。

（ト、逃げにかゝるを引戻して。）

八藏　エ、、喧しい、素直にしろ。

（ト、掴みかゝるを又振り放して一寸立廻り、八藏はやがて紙入を引出し、武者振り付く伊兵衛を突放してポンと蹴上げると、脾腹を打たれて、ウムと其のまゝ悶絶する。）

眼を眩しやがつたか、イヤお誂えだ。

（ト、紙入を明けて見て莞爾。）

思つたよりやア大出來だ、此奴ア確に兄貴から御褒美だ

わエ。

（ト、紙入を懐に入れ、引返して下手へ行き掛かる、此處へ舞の後より、出會ひ頭のやうに、前の場の赤星重三郎ヌツと出で。）

重三郎　コレ、何處へ行く。

（ト、云ふに八藏はギヨツとせしが、前髪の優男と見て高を括り。）

八藏　見れば綺麗なお侍、往來中で人を捉へ、頭から何處へ行くとは何の事だ、おらアお武家に知己は無え。

（ト、弱味を見せず、行き過ぎようとするを突戻し。）

重三郎　氣の強い男だノ、したが、爰が此の儘通れると思ふか。

八藏　何だと。

重三郎　天下廻り持ち、金は世界の融通物、其の懐の紙入を出せ。

八藏　ヤ大方そんな事だらうと思つたが、マアお生憎だ、止しに爲ませうよ。

重三郎　大慾は無慾、爲にならぬ、コレ素直にしろ。

八藏　エ、、口眞似を爲やアがるな。

（ト、突然に懐の匕首を拔いて掛かるを、搔潜つて二三度交し、利腕を確と取り、靜くをジロリと、舌打して、痛癪の科。）

重三郎　エ、面倒な。

（ト、突放して置いて拔打に、只一刀に八藏を切り倒し、其の着物にて靜に血を拭ひ、刀を納め、先づ紙入を取り、それより伊兵衛が落せし風呂敷包より、革財布を出して、紙入もこれに押込みて懐中し。）

此の中には、こつちの渡した金もある筈、（ト、思入）此の追落しを打ち放し、圖らず手に入る三四十、明日とも云はず今夜の中、出直せしと見せ、時刻を圖り尋ね行き、喜ぶ顏を。

（ト、元來し道へ向き直る途端、駿河屋の裏口を明けて、羽織着流しの南郷力丸（三十四五）、密と此方を差覗くのと、思はず顏を見合すを、木の頭、重三郎ハッと氣を變へ醉ひたる科、少し蹌踉き、上手の方へ行きて橋の親柱に凭りつゝ尻目遣ひに思入、力丸は顏を引込まして思入、伊兵衛は息を吹回して手足を動かす、此の模樣よろしく、風の音にて道具元へ戻る。）

元の浪宅の場

前と同じ夜の五つ頃

舞臺總て最初の場の通りにて、夜の體よろしく道具留まる。

（ト、二重には行燈が點り、側には針箱が片寄せてあり、其の前にお照、最前の栗を盆に載せ、側に小丼を置き、切出し小刀にて其の皮を剝いてゐる、庭には蟋蟀の聲あちこちに聞える、お照は何時か手を止めて。）

お照　後のお月見も最早濟んで、蟲の聲さへ冷え冷えと、肌寒うなつて來たにつけ、父樣のお藥世帶の事、何うしたものと朝夕に、胸を痛めてゐた處へ、夢見たやうな重三殿のあの深切、別れの時の言葉通り、何卒此の上、力になつて下されば好いがなア。

（ト、宜く科、此の時障子家體の内より、賴母の咳の聲聞えると、一寸それへ思入。）

お六殿のお蔭で、久し振に父樣の好物なお菜が出來る、（ト栗を始末し）時に最早五つでもあらうが、此のあたりの近頃の物騷さ、ドレ勝手元の戸締りでもして了ひませう。

（ト、立つて勝手へ行き、栗の丼を片付け、それより下駄を穿きて門口へ出ようとする時、下手の奥より井戸の後を廻り、手拭にて頰冠りしたる羽田の大助（三十位）、袷平絎尻端折り跣にて出で來り、後に續いて僧妙源（四十位）、坊主頭に黑布を冠りて顏まで包み、無地の着附に卷帶尻端折り、素足一本挿しにて、同く忍び出で來ると、下手の方の蟲の音ピタリと止まるに、お照一寸耳を欹てる、妙源は大助の腕を引いて足を止めさせ、囁き頷き、兩人ジツと内の樣子を木蔭より窺ふ、と、此の中蟲の音又靜に淋しく聞え出す、お照は勝手口の戸を外より持ち來りて、嵌めようと裏へ廻る隙を狙ひて、大助は突然に後より飛び掛かれば、

アレツ。

（ト、手早く振り拂ひ、又押へるを潜り拔け、勝手元へ駈込まうとするを、大助が追縋れば、お照は盆の上の小刀を夢中に取つて立向ふを、妙源横合より飛び掛かつて、手拭にて口を覆ひ、刃物を打落して、井戸のあたりへ抱へ出す、お照は荒れ狂ふを大助押へて、腰に挾みし細引にて、後手に縛し上げる、此の間に妙源は、素早く家内に入りて四邊を見廻し、佛壇の下の戸棚を明け、丸に洲濱の紋のある連尺附けし葛籠を引出すと、大助は駈け來りて、これを井戸端へ持つて行く、此の時障子の内より。）

賴母　お照か。

（ト、云ふ聲に、妙源は灯を吹消す。）

お照居るか、灯は何うした。

（ト、障子を明ける、此の中に大助は、葛籠の中の着物二三枚引出して無理にお照を押込み、蓋を爲ようと

して、衣類をも亦詰め込み、而して愈蓋をして脊負ひ上げる途端に、物干竿を窩籠にて拂ひ落す、大助は狼狽へて下手へ逃げ込む、二重にては妙源、竿の音にハツとすると共に、大脇差をスラリと引拔く、賴母偖はと枕刀を押取り、肩入れの寢間着袷の姿にて立出で。）

曲者ッ。

（ト、透かして踏出す足下へ、妙源は我が足の先なる針箱を蹴付ける、賴母これに躓き倒れながらも一刀引拔き、横に拂ふを飛上つて、妙源眞向より打下す刃を、一度は交せど、二度の太刀を受け損じて、賴母は脊より肩先へ掛け、刃先下りに斬付けられ、アッと苦む、此の時向うより、前の場の赤星重三郎、暗き道を透かし見ながら、足早に出で來る、其の足音に妙源は庭へ飛出し、逃げんと行きかゝる向うへ、重三郎は入つて來る、妙源交して木戸口を出る後より。）

重三郎　何者ッ。

（ト、聲を掛けて附いて出るを、妙源無言のまゝ振返つて右へ斬り下すを、潜つて素早く左の腕を摑むと、向き直つて又左より斬り付ける、途端に妙源の左の袖は縫目より切れて、其の人は前へ轉び、重三郎は後へタジタジとなつて踏止まるを、木の頭、妙源は密と起上り、拔刀を提げたまゝ忍び足にて向うへ入る、重三郎は袖を摑んで家の中へ科、蟲の音上手にのみ少し聞え出し、風の音淋く、幕。）

大詰

矢口村眞應院客殿の場

九月廿日の夕七つ過ぎ

本舞臺一面の平舞臺、正面は塗骨の障子、外には向うを上げて緣板を附け、其の先に庭の背景、上手は間より斜に襖の出入り、續けて床の間、下手は正面寄りの方を障子の出入り、續いて前の方は白壁、上下も同じく白壁にて、疊建具とも破れや雨斑點などあり、見るから空屋同樣の荒寺、總て矢口村眞應院（日蓮宗）客殿の體よろしく、寺鉦などあしらひて、幕明く。

（ト、前幕の妙源、白の鉢附卷帶にて片膝を立て、同じく前幕の大助、素袷に三尺帶胡坐をかき、酒肴を置きて飲食しながら、兩人差向ひに將棊をさして居る。）

大助　こいつア些と考えものだぞ。

妙源　よく些とづつ考へるな、下手の考へ休むに似たりだ。

大助　斯うだに因つてと。

妙源　何うする意だ、氣が永げえな。
大助　急かずと急かずと、大事な處だ。
妙源　自烈てえな、碁は牛の如く、將棊は早馬の如しと、好いか。
大助　おやア好し、其の早馬を張つて。
（ト、手に在る桂馬を打つ。）
妙源　此奴も智慧の無え奴だな、手前の王が危えのに、桂馬の褌で、今更金氣を欲しがるとは、何の狀だエ。
大助　何の狀と云へば、薩師の八の野郎め、最早此の土地も一同におさらばと云ふ際になつて、質に詰まらねえ死に方をして了やがつた、おらァ未だに譯が分からねえ。
妙源　死んだ者は仕方が無えや、（ト、駒を動かし）とサア何うだ、王手だ。
大助　王手も仕方が無えが、辻斬かなア、只一太刀とは、餘ッ程の手利だぜ、兄貴と何うだ。
妙源　已にも彼樣斬れるかと云ふのか、あの晩の技倆を忘れたか、こつちの相手は浪人だ、それでもバツサリ。
大助　浪人よりやア病人だらう。
妙源　安く云ふなエ、これでも金谷の濱島の直門、中條流の免許取だ。
大助　然うよなア、大森の和中散、あれも免許だ。
妙源　又交ぜやがる。
（ト、笑ひながらも互に手前で飲む、此の中、下手障子の向うにて幽かに女の泣聲が聞える。）
大助　兄貴、又泣いてゐるぜ、何うしても諾と云はねえさうだ。
妙源　大人しい面をしてゐやがつて、強情な女だなア、然し兄貴も意氣地の無え、態々引攫はせるくれえなら、早く腕づくにでもして了やア好いに。
大助　處が娘は武家氣質、力づくにすれば、舌でも噛んで死に兼ねえ。
妙源　死んだら死んだで好いぢやア無えか、世間に娘は幾らもあらア。
大助　お前は思ひ切りが好いなア。
（ト、話の中、寺男伴吉（三十位）、田舎者の扮裝、下手の障子を明けて出で來り。）
伴吉　モシ和尚樣、今庫裡の方へ、お客樣が見えやした。
大助　ナニ、客が來た。
（ト、思はず妙源の顏を見る。）
妙源　珍しい事があるものだな、男か女か、何樣な人だ。
伴吉　左樣さ、馬鹿に綺麗な若衆のお侍だ。
妙源　前髪だと。
伴吉　然うだよ。
妙源　フム、それで何と云ふのだ。

伴吉　永々無縁になつてゐた荒井と云ふだが、此頃些と心懸りな事が出來たで、急に法事をして貰ひてえと。
大助　兄貴好いか、此の寺にそんな檀家があるか。
妙源　無住寺の番人に來た己だ、檀家の事なんぞ知るものか。
伴吉　でも和尙樣、先方へ然うは云へますめえ、何うしやせう。
妙源　面倒臭え、お上人樣はお留守だと云へ。
伴吉　イヤそれは不可え、居ると云つた。
妙源　馬鹿だな此奴は、法事なんぞ持込まれて堪るものか。
伴吉　寺で法事を嫌ふと云ふは無え、それに其の人は、御回向料は如何樣にも致しますと云ふだ。
大助　それぢやア兄貴仕方が無え、經の少しも讀んで、お布施の十兩も取つて遣んねえ、お前だつて、坊主の方に地があるのだ。
妙源　氣樂を云ふなエ、十兩お布施が取れるものか、ダガ先ア好いや、折角だから小遣取りにジヤブジヤブやらう、爰へ通せ。
伴吉　有難え、それでおらも若干に有付ける、何しろ此の夏奉公に來てから此方、十寄明神の神主の家の猫の弔えが、唯一つあつた限りだ。
（ト、伴吉は下手へ入る。）

妙源　彼奴も慾張つてゐやアがる、（ト、盤を見て）大助、手前到頭負け將棊を胡魔化して了つたな。
大助　人間何で助かるか分からねえ。
（ト、兩人は笑ひながら、將棊盤や酒肴を上手の襖の向うへ運ぶ、好き頃下手の障子を明けて。）
伴吉　これへお通り下せえまし、和尙樣が今お目にかゝります。
（ト、これにて、前幕の赤星重三郎、美々しき着附袴大小姿、小さき包を持ちて出で來り。）
重三郎　これはなかなか廣いな。
（ト、座に就いて四邊を見廻す、伴吉は上手の襖の方へ入る、と、入れ違ひに、妙源法衣を着て珠數を持ち、殊勝らしく出で來りて上手に坐り。）
妙源　荒井氏とやら、好うこそ、拙僧が當寺の住職妙源に御座ります。
重三郎　手前は荒井重太郎、數十年來の古い檀家で御座るが、先住在世の頃、一家を擧げて中國へ立越え、それが爲、存じながらついつい無緣同樣の御無沙汰と相成り、誠に申譯も御座らぬが、非業の刃に殪れたる父と妹の淺ましの姿、此頃每夜某の枕邊に立現れ、不孝者よと怨恨の數々、餘りの事の氣懸りさに、久々にて墓參の上、佛事供養を營みたく、態と出府致しまして御座ります。

妙源　ハレヤレ、お武家様が非業の御最期とは、無御無念な儀で御座つたらうか、これも前世の約束事、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

（ト、珠數を爪繰る、此の話の中、伴吉は上手より出て、重三郎に茶を薦め、下手の障子より出て行く。）

重三郎　就いては二人が遺物の衣類、これを形代に、御回向を願ひたう存じまする。

（ト、包を解く。）

重三郎　父の片袖。

妙源　御奇特な事で御座る、ではお遺物を。

（ト、前幕にて引切りたる妙源の着物の片袖をグイと出す、妙源ハッとせしが、直ぐ落着いて然あらぬ顏。）

妙源　成程これが父御のお遺物、シテ妹御のは。

重三郎　兩袖身衣帶まで揃へ、丸に洲濱の定紋の、葛籠に入れて一昨夜、既に當寺へお渡し申した。

妙源　何と云はるゝ。

重三郎　廻り諄くは云ふだけ無駄、痛苦の浪人水澤賴母を、闇討にして娘を奪ひ、逃去る曲者、其處へ折よく行き合せ、引裂き取つたる證據の片袖。

妙源　其の片袖が何う致しましたな。

重三郎　袂に在つた反故紙は、眞應院樣とある拂ひの受取。

（ト、紙片を出して見せる。）

妙源　ヤ。

重三郎　これを便りに此の荒寺、突止めて昨夜樣子を探れば、おのれ等同類三人、勾引したる娘を捕へ、寄つて集つて無理難題。

妙源　ウム。

重三郎　但知らぬと言張るなら、本堂方丈位牌堂、片端から踏込まうか。

妙源　ウム。

重三郎　白狀致すか。

妙源　サ其の儀は。

重三郎　家搜爲ようか。

妙源　サア。

重三郎
妙源　｝サア、サア、サア。

重三郎　もゝんがアめ、早く尻尾を出して了へ。

（ト、ガラリ惡黨らしく云ふ、妙源、其の樣子をジッと視て。）

妙源　手前も只の鼠でなく、然う何も彼も知つたからは、禪寺染みた問答無益、頭は丸く見せ掛けても、極樂嫌えな腥坊主が、拂子代りの刃物の引導。

（ト、懐より短刀を拔いて、鼻の先へ突付けると、莞爾笑ひ。）

重三郎　何うで斯うした化物の、策とは初手から合點で、一人出て來た破落侍、そんな秋刀魚はお口に合はねえ、手前餘ッ程目が悪いなア。
妙源　何うしたと。
重三郎　相手を見てから物を云へ、（ト、合方になり）産湯を捨てた江戸の地を、武士の意氣地の喧嘩から、又捨鉢の短氣者、何處を我が身の尾張やら、遠州かけて五六年、歸る故郷で圖らずも、大森宿に故主の親子、其の災難を目の前に、見ちやア此の儘濟まされねえ、然し此方も厄雜だけ、無禮討とは云はねえから、五分と五分とで掛つて來い、サア板前の庖丁鹽梅。
妙源　ウム面白い、今切れ味を。
重三郎　オウ。
（ト、兩人立上り、重三郎は刀を拔きて、双方身構へ、これより一つ二つ切り結んで、屹と見得、途端に正面障子の後より。）
力丸　双方待つた。
重三郎／妙源　ヤツ。
力丸　二人とも先ア待つてくれ。
（ト、襷を掛け、袷着流し、大脇差を提げたる南郷力丸、靜々と出る。）

重三郎　ヤ、お前は南郷。
妙源　力丸兄貴、若や相手を。
力丸　知つた段か、豫々話した今牛若。
妙源　フム、そんならこれが赤星兄イか。
力丸　重三郎と云ふ色若衆よ。
（ト、二人の間に坐る、兩人は刃を引き。）
重三郎　兄貴が爰に居ようとは、お祖師樣でも御存じあるめえ、然うして住持と云ふ此の男は。
力丸　此の春入つた無住寺、確に坊主に違ひは無えが、やつぱり金谷の身内の一人、おれが爲には弟分。
妙源　赤星の兄イ、見知つて置いておくんなせえ。
重三郎　おれが爲にも、そんなら兄弟。
力丸　不思議な處で。
妙源　不思議な對面。
重三郎　兄貴、譯を聞かしてくんなせえな。
（ト、合方になり、重三郎妙源は頷き合ひて刃を納める。）
力丸　親分日本左衞門が、濱島庄兵衞と本名現し、金谷の領主小笠原の、悪家老共を追つ拂ひ、町人百姓の苦を救はうと、男鯨山に立籠る、其の入用を集める爲、おれは海での稼ぎ方、此の中から舟の間隙を爰にゐるが、今隣で聞いたには、お前は何かあの易者と。

重三郎　三世の因、(ト、思入)二世の緣。
(ト、極り惡さうに云ふ。)
力丸　ウム。
重三郎　爰へ來てゐるあの娘は、恥かしながらおれが女房、和尚に殺られた浪人は、おれが爲には舅親父だ。
妙源　フム、其奴は兄貴、拙かつたなア。
(ト、思はず力丸の顏を見ると、これに冠せて。)
力丸　イヤ危え事だ、此頃流行る易者の家に、綺麗な娘がゐるのを見て、丁度近々船路の旅、江戸土產に一つ引つ擔げと、誰が言出したと云ふでもなく。
(ト、目で知らせれば、直ぐ呑込み。)
妙源　兄貴は止せと云つたのだが、引揚げ際の仕事了えに、弟分の大助やおれが餘計なお節介、お前の舅に女房と聞いちやア、此奴ア一番凹んだなア。
(ト、頭を押へる、力丸科あつて。)
力丸　マア仕方が無え、勘辨してくれ、知らねえ中は他人と他人、赤星とても同じ晩、大森橋の橋際で。
重三郎　エツ。
力丸　若や然うぢやア無かつたか。
(ト、顏を見る。)
重三郎　ウム、あの裏木戸から誰かは知らず。
力丸　見合す顏も暗紛れ。

重三郎　黑塀の內のは兄貴であつたか。
力丸　闇から闇へ行つたのは、坊主の子分の藥師の八藏。
妙源　フウ、然し何うして彼奴が兄貴に。
重三郎　サア、荒井屋と云ふ質屋の番頭、伊兵衛を威して物した物を、故主の爲と又取りした、相手が此方の二卷とは、お互樣に謝つたなア。
(ト、言譯らしく云ふ。)
妙源　イヤそれで帳消し、貸借なし、寧そサバサバして了つたが、兄貴、先刻お前が名乘つて來た、荒井と云ふのは質屋の名前か。
重三郎　一寸出來心に借用した。
妙源　お前亡者に利を取られるぜ。
重三郎　亡者と云やア、これで幽靈の御法事も立消えだ、ハヽヽヽヽ。
(ト、皆々も笑ふ。)
力丸　然う極つたら根も葉も殘さず、やがて一緒に遠州灘。
重三郎　乘ッ切る金谷の兄弟。
妙源　謝り賃に早く逢はせようよ。
(ト、云ふ時、正面の障子を明けて、大助が、最前の德利盃を膳に載せて捧げ持ち。)
大助　高砂や、此の仲直りに輪を掛けて。
(ト、前へ出る。)

力丸　何だ大助。
妙源　手前まだ挨拶もしねえぢやねえか。
大助　何しろ芽出てえ。
（ト、膳を下に置くを、木の頭。）
力丸　イヤ氣の早え奴だなア。
（ト、皆々笑ふ、此の模様宜く、道具廻る。）

同位牌堂の場

前の前と同じ日の夕七つ半頃

本舞臺一面の平舞臺、正面中程より斜に上手へ長く鼠壁、それより續けて低き窓、塗骨の障子、外には雨戸を締めあり、窓の向うには、少し離れて座敷の障子、下手は正面の壁の角より鈍角に少し鼠壁、續いて一間の板戸の出入りありて、横に三角なる舞臺、上下の見切りは同じく鼠壁、奥の壁際には一面に位牌を飾り、總て眞應院位牌堂の體よろしく、道具留まる。

（ト、前の幕のお照、先のまゝの扮裝、亂れ髮、薄暗き中に、細引にて後手に縛られ、其の繩の端は、轆がされたる大太鼓の環に繋がれてゐる、直ぐ下座の獨吟になり。）

〽秋更けて、冷え行く蟲の聲細く。
（ト、お照惜々と顏を上げ。）
お照　父樣は何うなされてぞ、重三殿は尋ねてか、物音さへも止められて、便り叶はぬ座敷牢。
〽宿る葉末の風さへも。
お照　泣くにも泣かれぬ身の上ぢやなア。
〽濡るゝ由緣か白露の、玉の中なる男郎花。
（ト、前の場の重三郎、着流し一本挿し、灯を點けし手燭を持ち、下手の板戸を明けて、靜々と出で來り。）
重三郎　お照樣。
お照　エツ。
重三郎　私で御座ります。
お照　オウ、思ひ掛けない、何うして爰へ。
重三郎　お前樣に逢ひたさに。
（ト、手燭を置きて、お照の縛めを解きにかゝる。）

へくねる妾を何と夕闇。

（ト、獨吟の揚げ、重三郎縄を解き、ジッと寄添ひて科、お照は何の氣も付かず、膝に取付き。）

お照　重三殿、よく尋ねて來て下さりました、こなたの見えた一昨日の晩、此の寺の惡者共に勾引され、

重三郎　本當に然うで御座りましたな、私はあの折丁度引返し、心ばかりのお貢をと、入る門口、逃げ行く曲者、後にて見れば賴母樣には、思ひ掛けない。

お照　エツ、あのお怪我でも。

重三郎　サ、お怪我どころか、お悼はしい深手のお惱み。

お照　エツ。

重三郎　其の夜果敢くおなりなされました。

（ト、愁ひの科。）

お照　スリヤ父樣には、ハア。

（ト、思はず聲を揚げて泣き伏す。）

重三郎　サ、其のお歎きはお道理なれど、悔んで返らぬ不時の災難、（ト、お照の脊を撫で擦り）私とても一旦は、驚き狼狽へましたれど、それでは濟まず、近所の人の手を藉りて、兎も角も後々の取付片け、それにしてもお照樣、お前樣のお行方をと、尋ね索めた效あつて、當寺に隱れし敵を突止め、捕へて見れば、其の者共の頭分、お前樣に心を掛けし南鄕と云ふは昔の恩人。

お照　エ、。

重三郎　予分を其の場に討つに討たれず、と云つて目前の仇敵、其處で急速にお前樣を、此の重三郎の妻、賴母樣を舅と言立て。

お照　エ、。

重三郎　繋がる緣の親の敵、一昨日の夜の曲者、藥師の八藏とやら云ふ相手を、討たせてくれと申したるに、誠夫婦に相違なくば是非に及ばず、手活にするも思ひ止まらう、予分一人を見殺しは殘念なれど、これとても道次第、隨次第、勝負を他所に見ようとある、其の南鄕も男の意地。

お照　それではこなたを、わたしの良人と。

重三郎　サ、妻と云はねば、夫婦でなければ、討ちかねる恩と仇、お照樣、猶豫ならざる今此の場合、お馴染效に重三郎を、力にさせては下さりませぬか。

（ト、これにてお照ジッとなり。）

お照　外に便りもない身の上、父樣の野邊の送りも問ひ弔ひも、こなたを賴みにせねばならず、妻よ良人と云ふ事も、假にならば仔細なけれど、儘ならぬは主ある此の身。

重三郎　何と仰有る。

お照　同じ家中の河野の御子息、それこそ親が許しの良人、

やがて二人を一つにと、父樣のお言葉を、樂み暮す程もなく、こちらは流浪の離れ離れ。
重三郎　それでも今のお身の上では。
お照　サア、到底も望みは叶ふまいと、思ひはすれど言ひ約束、今度の事を知らせた上、河野樣のお返事聞かねば、假の女夫の呼び名さへ、誠は心に濟まぬ譯。
重三郎　私がお氣に叶ひませぬか。
お照　然うでは無けれど、女が大事の心の操、重三郎殿、何卒其の南鄕とやらに話を仕變へ、相手を討たして下さりませ、父樣の修羅の妄執、晴らさせて下さりませ。
（ト、手を突いて賴む、重三郎ジツと視て。）
重三郎　切迫詰まつた計略が、成らねば外に思案は無い、一旦緣の斷ち切れし、以前の主と現在の、大恩人と比べれば、一つにならぬ此方の義理。
お照　成程それも然うかは知らねど、重三殿、一昨日尋ねて下されて、世に賴もしいあの深切、それを今更心强う、惡者達に義理立てとは。
（ト、少し怨みがましく云ふ、重三郎も面白くなく。）
重三郎　心强いとは其方の事、こつちは金と命を投出し、便りにならう力にと、思ふ義理から誠の戀。
お照　エヽ、そんならこなたは心底から。
（ト、當惑の思入。）
重三郎　抱き抱へした娘御の、其の手も肩も黒髮も、古い馴染と思ふにつけ、此の美しさを此の儘に、他手に掛けるが惜くなり、敵の首を結納代り、二つ返事に喜んで、聽いてくれると思ひの外、掉首は横に振付けられ、味な文句を聞かされるとは、つひぞ覺えぬ赤ッ恥。
お照　モシ重三殿、わたしの今の言譯が、氣に障つたら勘忍して。
重三郎　そんなら得心して下さるか。
お照　それぢやと言うて、今の入り譯、これはつかりは。
（ト、縋るやうに云ふと、重三郎打頷き。）
重三郎　好う御座います、分りました、最早無理にとは申しますめえ、忌なものなら賴まねえ。
（ト、段々荒く、終ひにキッパリ捨鉢に云ふ。）
お照　エツ、そんならこなたはわたしを怨んで。
重三郎　ナニ、吝ッ垂な爲をするものか。
（ト、苦笑、此の時下手の奥にて、御用と一聲、突然にバタバタと云ふ物音、續いて、御用だ、御用だと云ふ聲がする。）
何ッ、御用だと。
（ト、立上る、途端に大助、板戸を明けて飛込み來り、持つたる刀を重三郎に渡しながら。）
大助　兄貴。お前の刀だ、サ、出立が急になつた、裏から

一緒に渡し場まで。
（ト、手早く上手の窓の締りを明け、自分は先へ飛出す。）
重三郎　卷添へを喰つちやア互の難儀、兎に角一緒に。
お照　連れて逃げて下さりますか。
重三郎　捨てちやア置けねえ。
（ト、刀を挿して身繕ひする、折から最前の伴吉、十手を持つて飛込み。）
伴吉　おのれも同類、赤星逃げるな。
重三郎　ウム、手前（てめえ）は先刻の寺男、化け込んでゐやアがつたな。
伴吉　大森六郷矢口を掛け、此の界隈での御用聞だ。
（ト、打つて掛かるを引つ外し、二三度交して脾腹を當て、ドゥとなる處を、太鼓に繋げる細引にて後手に縛し上げ、憎々しく。）
重三郎　逆らふ奴は此の通りだ。
（ト、お照を尻目に、十手にて伴吉の肩口を力任せに一つ打つて、それを投出し。）
こいつを幾に足藝で、題目太鼓でも敲いてゐろ。
（ト、言ひ捨てに、衝とお照の側に寄り。）
サア來いお照。
（ト、グイと手を取るを木の頭、お照ハッとする。）

最早斯うなつちやア、仕方があるめえ。
（ト、引立てゝ窓の方へ行く、伴吉は歯嚙みをする、此の模様宜しく、野遠見の道具幕を引き、田舍めきたる鳴物、後には變つて水音にて繋ぐ。）

返し、羽田沖の場

前の場と同じ日の夜五つ半過ぎ

本舞臺一面の平舞臺、上下正面とも、一面に青い海原の景色、舞臺には波布（なみぬの）を敷きて、眞中に、舳を上手に向けたる親船一艘あり、此の道具三方飾りとして前の場より蓋廻し、手早に漾く背景を並べ、浪の音高く打揚げ、道具幕切つて落す。

ト、南郷力丸、前の場とは違ふ袷、續いて妙源、丸に淵濱の紋付いたる茶地の袷、次に大助、これも前とは違つたる扮裝にて、貫盆を提げ、何れも積荷の向うより出で來りて、宜く居並ぶ。
力丸　何うだ二人、狐狸の棲家を離れ、隣知らずの一軒世帶、久し振で伸う伸うしたらう。
妙源　些と支度は無理だつたが、何うせ金谷へ歸り掛け、伸した羽田の沖合へ、斯う漕出せば此方のもの。

大助　思ひ立つ日を吉日と。
力丸　姿もキッパリ祝ひ酒、綴り飲んで話すと爲ようよ。
（ト、話の折、バタバタと足音して、前のまゝなる扮裝のお照、荷物の蔭より駈出で來るを、少し派手なる染物の袷、脇差を提げたる重三郎、追つて出て引戻し。）
重三郎　エ、性懲りも無え、敲ッ切るぞ。
（ト、突き据ゑて皆々へ科。）
大助　兄貴何うした、夫婦仲が太く惡いな。
（ト、聞いてお照は身を顫はし。）
お照　エ、又しても無體な言葉、義理は義理、操は操、親の敵の片割に、何で此の身が任されう。
（ト、泣く、南郷思入あつて。）
力丸　コレ重三、最早大抵に思ひ切れ、樣子を見れば何うやら他人、サ、他人も同じ素ッ氣なさ、目に餘つて氣の毒だ、ヤレ敵だの無體のと、斯う拗んぢやア脈は無え、おれも意味は云はねえから、手前もサッパリ忘れて了へ。
（ト、これにて重三郎思入あり。）
重三郎　面白ねえ、堪忍してくんねえ、今から主も故主も無え、七面倒な大小捨て、長脇差の一本立ち、使るは濱島庄兵衞親分。
力丸　其の左衞門を筆頭に、忠信利平、辨天小僧と、又もや揃ふ五人男、
妙源　非道な領主や家老共を、懲らしてやる日が待ち遠しい
大助　早く金谷へ上りてえな。
（ト、皆々科、此の中お照は妙源の着物に目を着け、側なる重三郎の脇差を拔くより早く。）
お照　父樣の敵。
（ト、妙源に飛び掛かるを、重三郎引戻して行手を遮り、一寸立廻り、確と押へ。）
重三郎　又騷ぎやアがる、靜にしろ、敵と云ふのは藥師の八藏、爰にはゐねえわ。
お照　イ、ヤあの晩覆面の、一人は確に出家と知れど、手出しならねば今までは、堪へてゐたが最早叶はぬ、葛籠に在つた父樣の、御紋服を着てゐるも、逃れぬ證據の憎々しさ。
（ト、振り放す手を再び押へ。）
重三郎　目庇を強く見て置いたか、成程敵は其の男、藥師と云つたは僞だが、生憎な事には手利の妙源、女だてらに、無駄な話だ。
お照　エ、。
重三郎　侍商賣止めにして、姿は假着の重三郎も、腹は悉皆もう町人、助太刀はお斷り、脇差を借りられたので義理は濟んだ。

(ト、刃をポンと打落し、其の手を摑んで惜さうにジッと視る。)

お照　エヽ口惜い、とは云ふものゝ親も子も、斯くなり果つる運の末、(ト、重三郎の手を振り放し)南無阿彌陀佛。

(ト、海へ飛込まうとするを。)

大助　コレ。

(ト、慌てゝ留めにかゝるを潜り抜けて、又飛ぶ處を又押へようとする時に、大助の帯際を、重三郎無言に押へる、此の間にお照は船の舳へ、ドーン、水音高く飛込む。)

ア、ツ。

(ト、云ふ時、重三郎は手を放し、南鄕、妙源と思はず顔を見合せる、遠く四つの鐘の頭を打込む。)

重三郎　二人に絡む足手纏ひ、邪魔は何うやら自然と失せた。

力丸　ウム。

(ト、氣味合、此の時正面より二十日(はつか)の月差昇りて、舞臺明るくなる。)

重三郎　月の出汐に。

(ト、云ふを木の頭。)

濱唄　〽急げ早漕げ濱松船頭、風の便りおや氣が濟まぬ。

(ト、靜に水音、鐘の聲、皆々科、船少し動き始める、此の模様よろしく、幕。)

(大正十年九月上旬稿)

釣天井（三幕七場）

役名

本多上野介正純
河村靱負　本多の家老
武井九郎右衛門　同
上原甚藏　同　家臣
多賀直記　同
彦坂良助　同
井上主計頭正就
伊丹康勝
源右衛門　大工棟梁
與四郎　同　弟子
奧平信昌の後室
奧平千福
奧平帶刀　奧平の家臣
石場彌一郎　同
重澤又次郎　同
堀伊賀守利重
藤左衛門　庄屋
お早　藤左衛門
おさき　下女
外に、井上の臣田澤小平太、伊丹の臣井出新助、奧平の腰元柴、同乙、同由良、同春木、旅の町人爲造、同赤助、武士大勢、小姓一人、手先一人、百姓二人、人足大勢。

序幕

野州野木宿新關の場

元和五年十月上旬の午過ぎ

本舞臺一面の平舞臺、正面には荒削りの材木にて出來へし柵矢來、上手も同く柵矢來にて、此の間を通る樣になつて居り、下手は青竹の矢來、此の矢來三方の後は何れも樹木、枯尾花などの背景、總て野州野木の宿新關の體よろしく、山颪の風の音、遠く驛路の鈴の音など聞えて、幕明く。

（ト、下手矢來の奧より、土地の百姓兩人、後を見返りキョトキョトしながら出で來り、急ぎ足にて上手木

戸の向うへ入ると、又少し風の音、木兎の聲、日覆より枯れたる木の葉を散らし、上手より旅の町人爲造（二十七八）、赤助（三十位）、何れも布子脚絆草鞋の扮装、菅笠を持ちて出で來り。）

爲造　赤さん、何だか無氣味ではないか、刀に掛けても通つて見せるの、俄作りの關所ぐらゐ、踏み破るに譯はないのと、あの樣に澤山の荷物を持つて、一體あれは何であらうな。

赤助　形は手もなく引越しだが、大勢の侍が、彼樣殺氣立つて附いてゐる處を見ると、何うも唯事ではないらしい。

爲造　それに關所關所と二三度も聞えたが、まさか此處等の事ではあるまい。

（ト、四邊を見廻す。）

赤助　外のものと違つて、然う急に無闇と出來る筈もないが。

爲造　何しろ、餘り好い心持ではない。

赤助　間違のない中、サア早く行かうよ。

（ト、二人は話しながら、花道の方へ行きかゝるを、下手より小手臑當の武士四人ツカツカと立出て遮り。）

武士の一　コレコレ町人、待て。

爲造／赤助　ヘツ。

（ト、吃驚、後へ下がる。）

武士の二　イヤ、何もその樣に驚くには及ばぬ、少し尋ねる事があるのだ。

武士の一　只今あれにて聞いたには、其方どもがこれへ參る途次、何か澤山の荷物を運ぶ武士があつて、關所を踏み破る、とか申して居つたとの事だが、それは何の邊で見掛けたな。

爲造　ハイ、（ト、赤助と顏を見合はせ）何でも此處から五六丁ほど、手前の森蔭で御座いましたが、餘り氣味が悪いので、駈け拔けるやうにして先へ參りました、それで何うも委しい事は。

武士の三　よいよい、（ト、頷き）シテ、同勢は何れ程居つたな。

武士の四　正直に申せよ。

赤助　ハイ、荷物を擔いだり挽いたりしてゐる人足の外に、お侍が、左樣で御座います、ざつと三十人ばかりも、附いておいでゝ御座いましたらうか。

武士の一　確とそれに相違ないな。

爲造　目分量では御座いますが、大抵間違は御座いません。

赤助　處でお武家樣、關所關所と云ふ其のお關所とは、一體何所等で御座いませうな。

武士の一　此處の事だ、此處が新關だ。

僞造
赤助 } エヽ。
武士の二　今朝俄に出來の新關だが、然し、此の街道を通行の旅人共には、係合のない事だ、安心して早く通れ。
赤助　ハイハイ、有難う存じます。
僞造　これで無事に、江戸へ參られます。
（ト、花道の方へ行かうとするを、押止め。）
武士の四　コレコレ、此の畠道の方を參れ。
武士の三　高が三四丁の廻り道だ。
僞造　ハイ、畏りました。
（ト、赤助と顏を見合せ、逃げる樣に兩人は下手へ入ると、後やはり驛路樣の鳴物にて、上手より奧平の家臣石場彌一郎（二十五六）、足拵へ旅裝束にて先に立ち、續いて奧平家の定紋附けたる小旗を樹てし釣臺に、小松の鉢植を載せたるを人足に舁かせ、次に蜻蛉に擔ぎし薦包の長持、夥多の障子襖を横に合せて載せたる釣臺、竹束や樹木を一ツに積みたる荷車などを從へ、何れも警固の侍旅裝身輕に扮裝ちて、これに引添ひ出で來り、一氣に花道の方へ行かうとするを。）
武士の一　アイヤ、何れも暫く。
（ト、四人一度に立塞がる、これにて彌一郎衝と出で。）

彌一郎　何事で御座る、その許達は天下の往還に立塞がつて、往來（ゆきき）の者を何と召さるゝ。
（ト、これにて、下手矢來の蔭より、本多の家臣上原甚藏（二十七八）、小手臑當にて、同じ扮裝（こしらへ）の武士二三人を從へ出で來り。）
甚藏　其のお返事、明白に仕らう。
（ト、前へ出る。）
彌一郎　シテ、其許は。
甚藏　某は野州宇都宮の城主本多上野介正純家來上原甚藏、主命によつて、奧平家の印の旗を押立てられしそれなる荷物、此處限りお止め申す。
（ト、これにて、彌一郎一寸思入。）
彌一郎　如何にもこれなる諸道具は、前の宇都宮の城主、奧平千福所藏の品々、某は近習役石場彌一郎、今更めて申すまでもなく、主人事昨日を以て下總古河へ所領替へ、就いては城内に遺し置きたる道具一式、取纏めて今日只今持ち歸る、それを何故の支へ立て、近頃以て麁忽で御座らう。
甚藏　イヤ、麁忽とはそなたの事、城内の諸道具受取り渡し、一旦滯りなく相濟みし後となつて、立會の者の目を拔き、俄に建具疊の類、又庭上の竹木まで、容赦なく取り去り伐取、曉かけて理不盡に持出ださるゝは奇怪と、

知らせの者のあるまゝに、乃ち朝來急々に關を据ゑ、下野下總の國境、而もわれ等が主人の領地、此處野州都賀郡野木の地に、件の荷物を引止め申す、身一ッになりてお通りなされい。

彌一郎　ヤア、身一ッになりてとは、案外なる過言、去年過ぎ行かれしわれ等主人奥平家昌在世の頃、或は出來へ或は育て、丹精ありし諸道具、樹木、それを世繼ぎの當主人が引取り申すに何の不審、飽くまで非理を申し張るるに於いては、武士の意地、其の大小の柄頭車輪に掛け、押碎いても通り申すぞ。

甚藏　ウム、此の街道の一筋道、横に車を押さうでな。

武士の一　見事通るか。

彌一郎　何を。

（ト、これにて、双方の侍一度に刀に手を掛け、屹となる折から、上手より奥平家の用人奥平帶刀（四十位）ツカツカと立出で。）

帶刀　彌一郎殿先づ待たれい、皆も騒ぐな、（ト、制し置き）偖其許は上原殿とな、某は奥平の用人同苗帶刀、われ等宰領のこれなる品々は、只今彌一郎申せし通り主家の所藏、然るに本多殿、何御趣意あつてか其の行手に矢來を構へ、事々しくも關所など申さるゝ條胡亂千萬、上野介殿には、此度亡父正信殿と親子の知行、合せて忽ち十五萬五千石の大大名、天下の耳目を側てしめたる御出世に、何此上のお望あつて、僅の建具植物類。

甚藏　何と。

帶刀　當方とても、幼君に一萬石の御加增あつて、野州より隣國下總古河の城へ、引移る身には御座れど、我が物は我が手に始末致すが作法、世の禮儀、見苦しき古道具など殘し置きてこそ、非禮無法との御口上も承らめ、お手數掛けず片付け申すに御故障は、些と筋違ひかと存じ申すが、それとも強てと言はるれば、後へ引かれぬ車の揖、イヤ、今日より隣國の好誼、穩便にお通し下され。

甚藏　言葉を下げてのお掛合、お役目の表然うも御座らうなれど、拙者共、主人上野より承りをる處によれば、城内品々の扱ひ、決して左樣では御座らぬ、後へ引かれぬ車の遣り場、不本意ながら拜見致さう。

彌一郎　エヽ、理非を分かたぬ無體の止め立て、論は無益、者共通れ。

侍皆々　心得申した。

（ト、口々に返事して、奥平方皆々荷を進めんと息込み、本多方も一同身構へると、此時向う揚幕の内より、本多上野介正純（四十位）、大音にて。）

上野介　イヽヤ、通す事罷りならぬ。

（ト、呼ぶ。）

武士の一　あのお聲は。

武士皆々　君のお出で。

（ト、是にて双方の侍一寸控へると、鳴物にて、花道より上野介、着附袴陣羽織、黒馬に乘りて長槍を横へ小手臑當の武士七八人ばかり從へ出で、花道よき處に止まり。）

上野介　斯くあらんと察せしゆゑ、關を構へて相待ち居つた、奥平の御家來、お身の名は。

帶刀　用人役奥平帶刀、シテ、上野殿には、何の仔細御座つて關所の構へ、事に因つては大身とて、容赦は致しませぬぞ。

上野介　オウ、天晴れお使、さりながら、德川のお家の掟諸侯の心得、奥平家にては、それ存知の者一人もないか。

帶刀　ウム。

（ト、科(こなし)。）

上野介　心得なくば、云うて聞かさう。

（ト、本舞臺へ來り、馬より下りて床几にかゝる。）

帶刀　サア、上野介殿、承らう。

（ト、帶刀、彌一郎も床几に掛ける、上野介ジロリと見て。）

上野介　不足顏の白々しさ、（ト、合方になり）既に神君御在世の頃よりして、諸侯御預かりの城中の諸道具、城附きの分は總て在來の通りたるべく、又、城內の竹木一切伐取るまじき御定め、誰知らぬ者もなき處に、何の筋あつて此の大法には背かるゝぞ、先づ其の仔細より承らう。

帶刀　如何にも御掟は存じ罷在る、さりながら、只今これへ引取り參りしは、城附きの諸道具ならず、奥平の手にて調へし家財の少分、竹木と申さるゝも、家中の者共が各自手掛けし前栽の慰み物、これ以て城附きとは申されず。

上野介　云はれな帶刀、城內に建て付けし障子襖は、誰が手入れにせよ替へたるにせよ、固より其所に在るべき品の有る分の事、家中諸侍が植ゑたりと云ふ木竹の類も地着きの物、餘人は知らず現在我が父正信が、某倶共定めたる御法の性根、言葉巧みに言ひ廻すとも、いつかな叶はぬ。

帶刀　ハ、、、、、、一國一城の主にも似合はしからず、百姓町人の公事沙汰めいたる御法呼はり。

上野介　ウム。

（ト、屹となる。）

帶刀　イヤ何、上野介殿、奥平の當主千福は、父に別れて便りなき身、それを育つる祖母の、御娘龜姫君は、畏くも當將軍家には姉君に在します、われ等共の御使として、

日頃目に觸れ手に馴れたまひし御調度の何や彼や、受取り參る此の途中、餘りと申せば沒義道な萬。

上野介　エ、、何が沒義道、信昌の後室加納殿のお身の來歷、今更めて承るに及ばず、正純よつく合點なれど、法は人によつて曲げられず、道は難きに方つて倚正しからねばならぬ、途上の問答互に退屈、千萬言の言葉纒ひも、詰まる所は、應か否かの唯二字、此の上野介、不承知で御座る。

帶刀　ウム、役目の表、刀に掛けて、とサ申したきでは御座れども、僅の事にて隣國同志の爭ひも無分別、奥平帶刀言葉を改めて申入るゝが、今此の荷物の眞先に舁かせしは、幼君千福君三歲の折、手植にせられし五葉の松、奥平の家紋に因みし常磐木の緣と共に、千代までもと育てられたる後室が秘藏の一鉢、切てはこれを今日の土産に。

上野介　成り申さぬ。

帶刀　些細の鉢植。

上野介　賛い事を。

帶刀　地上を離れて伸び來しもの。

（ト、何も云はんとするを遮り、獨語のやうに。）

上野介　幼君の手植とて、庭上に榮えしを、鉢に移して持參の小松、城内よりの知らせに明白。

帶刀　ウム。

（ト、思はず立上がるに、奥平方一同も息込むと、本多方も屹となる。）

上野介　巧僞は拙誠に如かず、帶刀修行が足らぬ、甚藏、荷物一切屹と受取れ。

甚藏　ハツ。

彌一郎　何、此のまゝに。

（ト、又息込むに抑へて。）

帶刀　ハテ無作法な。

（ト、よろしく科。）

上野介　小松の外に、息の根までは。

帶刀　ウム。

（ト、双方顏を見合はすな、木の頭。）

上野介　止め申さぬ、ハ、、、、、、。

（ト、これにて、奥平方皆々無念の科、此の模樣よろしく、道具廻る。）

下總古河城内奥庭の場

前と同じ日の夕刻近く

本舞臺眞中に風雅なる四阿、此の周圍には立派なる築山泉水、散りかゝれる紅葉二三本、返り花の少し冊い

たる櫻の樹一株、何處々に霜除をせし植物などあり、正面は奥庭續きの中遠見、上下は植込にて見切り、四阿の上の方に毛氈掛けたる床几一脚、總て下總の國古河城内奥庭の體よろしく、琴の音など聞えて、道具留る。

（ト、四阿には奥平信昌の後室加納殿（四十七八）、切髮被布姿、茶煙草盆などを側に置きて腰を掛け、矢の字の腰元柴、乙、由良の三人控へてゐる。）

柴　申し御後室樣、何うやら夕風が、お寒うなつて參りました。

乙　お居間へお越し遊ばしませぬか。

加納　オウ、よう心着けてたもつた、まだ昨日今日の此の庭前、散りがての紅葉、櫻の返り花、見る程のもの目に珍らかに面白う、つい初冬の夕暮近く、うか／＼と時を過ごしました。

由良　ほんに、宇都宮のお庭ほどには御座りますまいが、變つた眺めは又一入。

加納　とは云ふものゝ、偖永らくの野州の住居、泉水築山何や彼や、此處の庭に見るもの毎、石一ッにもあちらの事が思ひ出されて、名殘が多い。

柴　然う御意なさるれば、わたくし共も、まだ居馴染まぬこちらの御殿。

乙　當分は何とやら。

由良　落着きかねるで御座りませう。

（ト、よろしく科、後室は頷いてゐるところへ、若侍重澤又次郎（二十四五）、うつ向き勝に下手より出で來り。）

又次郎　申上げまする。

加納　オウ、又次郎か、樣子は知れたか。

又次郎　帶刀殿を初めお使の面々、只今歸城相成りまして御座りまする。

加納　首尾は何うぢや。

又次郎　まだ如何樣とも承りませぬが、委細は帶刀殿直々に。

加納　其の返事待ちかねてゐる、が、コレ又次郎、そなたの樣子では、一同首尾ようは戻らぬな。

又次郎　ハ。

（ト、返事に困りたる體。）

加納　よい／＼、わしにも萬一の覺悟がないでもない、帶刀を直ぐ此處へ。

又次郎　ハツ。

（ト、立たうとするを急に止めて、腰元に向ひ。）

加納　イ、ヤ、柴、そち達は帶刀をこれへ、又次郎は奥へ

行て、伊賀殿にこれへと申しや。
又次郎　ハッ。
加納　早う。
又次郎　畏まりました。
（ト、これは上手へ、腰元三人は下手へ、何れも急いで入る。）
加納　相手は名に負ふ本多上野、親勝りの強者、直ぐには行かぬと大事を取り、曉かけて事をせさせ、思ひ上りて高々の、鼻明かさうと思うたに、面白からぬ使の樣子、何とした事であらう。
（ト、獨語の處へ、後室の孫與平千福（七八ツ）、羽織袴一本挿し、後より腰元春木（二十二三）、刀を捧げて上手より出で來り。）
千福　祖母樣は何時迄此處にお出でなされます、お風邪でも召さぬ中、早うあちらへお出でなされませ。
春木　憚りながら、若君樣が太う最前から、お尋ね遊ばしてゞ御座りました。
（ト、これにて後室は、千福を自分の座蒲團の上に掛けさせ、頭を撫で。）
加納　いつも好う此の祖母を可憐がつて下さる喃、わしが身に覺えて云ふは異なものなれど、多くの人の上に立つ者は、情が第一、其の優い心掛を、必ず忘れて下さるな、そなたの祖父樣は、豫々話して聞かす通り、長篠の籠城で、一天下に名を轟かした信昌殿ぢや、亦父上も上樣より、お鑑識を以て、街道押への大役を承り、宇都宮に在城の侍、祖父は信長の一字を賜はり、父は家康の一字を名乘る、その譽ある家昌が、幼きそなたを遺し置き、去年此の世を去られしより、口惜や上野めに、大切の役を代られ。
（ト、思はず知らず昂となる。）
千福　祖母樣、それ故わたくしも、學問武藝に精出して、大きうなつたら又必と、あの宇都宮へ歸つて見せます、叔父上にも、よう願うて置いて下さりませ。
加納　オウ、健氣なそなたの心掛けが、祖母に取つての命の綱、當公方家へも、必と好う話して置きまする、祖母に如才は御座らぬわいの。
（ト、此の時上手より、羽織袴の堀伊賀守利重（四十位）、靜々と出で來り。）
利重　オウ、和子も爰にか、お迎へによつて罷出でました。
加納　伊賀殿これへ、（ト、床几に掛けさせ）昨夜密に遣はしたる宇都宮への使、只今歸着と聞きましたる故
利重　首尾よう致したで御座りませうな。
加納　されば、（ト、思入）　春木、爰は好い、帶刀に早うと云や。

春木　畏りました。

（ト、刀を千縞の側に置き、急ぎ足に下手へ入る。）

利重　かの城内には、まだ本多の家臣共ばかり、何れ容易う濟みましたで御座らう。

加納　然うであつてくるればよいが。

（ト、此の時下手より、前の場の石場彌一郎、衣服を改め沈み勝ちに出で來る。）

そちは彌一郎、帶刀は如何召された。

彌一郎　今日のお返事、憚りながら。

（ト、進み寄りて一封の書き物を出す、加納思入れあつて、利重に見よと科、利重受取り。）

利重　帶刀が自筆の書面、ウム、（ト、手早く披き默讀して）彌一郎、今日のお使仕損じたな。

彌一郎　面目もなき爲體、それ故に帶刀殿、歸城と共に一書を遺し、只今割腹されて御座りまする。

加納　何、帶刀が切腹とな。

利重　御覽なされませ、（ト、文を後室に渡し、獨語のやうに）思ふに增したる上野の鋭さ、自身早くも野州に乘り着け、軍裝せし家來を以て道を遮り、我慢の振舞。

加納　テモ案外なる無法人、家財の如きは兎も角も、若が手植の小松まで奪取りしとは情知らず、人の心の優さは鳥獸木竹にさへも掛かるが誠、それに何ぞや本多づれが天下の法の掟のと、思ひ遣りなき酷らしの取捌き。

彌一郎　其の御不興あらせじと、無念を忍び言葉を卑くし、切めて小松の一本はと、心盡しの效もなく、果は互の力づくと見えたる所を取鎮め、兩家の無事を、一命に賭けて濟ませし帶刀殿が苦衷の程、憚りながら、御推量下さりませ。

利重　飽くまで無情き本多上野、思へば過ぎし慶長年中、縁者大久保忠隣に罪ありとて、われ等をも強て連累とし、所領二萬石召し放し、此の奥平へ預けしも、正信親子が自儘の計らひ。

加納　掟に表裏なしとは云へ、徳川二代秀忠が姉の賴みと思ひなば、情を見する少しの隙、裏には裏のあるべきを、眞向より只一挫ぎに肯き入れず、重役には犬死させ、恥に恥を與へし上野。

彌一郎　聞くに堪へざる廣言我慢。

加納　昔思へば長篠にて、良人諸共甲州勢に一泡吹かせ、美濃の領地の名をその儘に、後日に至りて女ながら、加納殿とも世に唱はるゝ東照公の一の娘、今に見よ、報はいで置かうか。

（ト、持ちたる文を思はず引裂く。）

利重　秀忠公關ヶ原の合戰に、神君の御怒りに觸れさせたまひし砌、謀計の仕損じは父正信、何卒父を御成敗、君

には御免し賜はりたしと、親の命を差出して、主に阿り（おもね）、好い顏せし、似而非忠臣の上野は、智慧才覺の束ね木偶、人の心は有ち申さぬ。

千鶴　祖母樣、それではもう、私の松の木は、此のお庭には植ゑられませぬか。

加納　オウ和子、待つて御座れ、遠からず又宇都宮の城のお庭に、喃伊賀殿、彌一郎、大きな松を。

（ト、立上がつて三人顏を見合はすを、木の頭、氣を變へて千鶴に。）

植ゑさせまするぞ。

（ト、手紙をじろと懐に入れる、利重、彌一郎も科、此の模樣よろしく、幕。）

二　幕　目

野州宇都宮城内奥殿の場

元和八年四月中旬の宵

本舞臺眞中に、立派なる常足の二重家體、正面に床の間、襖の出入りなど、例の茶座敷風の拵へ、家體上の方には庭木戸、葉柳の立木、石の井筒あり、側、臺の上には、前の幕の小松の少し大きく育ちたる鉢植、此の外石燈籠飛石、竹床几など、燈籠の近くには、大輪の牡丹二株ほど咲いて居り、下手に植込み、總て野州宇都宮城内奥御殿の體よろしく、靜かなる鳴物にて、幕明く。

（ト、床の前に刀掛、煙草盆、褥など並べてあり、側には行燈が點いて居る、爰へ上下姿の若侍彦坂良助、襖を明けて出で來り、下手に控へると、家老河村靱負（四十二三）、同じく武井九郎右衛門（四十四五）の兩人、上下姿一本挿しにて出で來り平伏する、處へ續いて前幕の本多上野介正純、羽織袴一本挿しにて出で來り、座に着くと、小姓一人後より刀掛に刀を掛け置きて、良助共々直ぐ奥へ入る。

上野介　九郎右衛門、歸着早々密々の急用とは、如何なる儀ぢや。

九郎右衛門　相役靱負も同席の前、言葉を飾らず、眞直に申上げまするが、其の密事は。

靱負　何事で御座るな。

九郎右衛門　お家の大事に御座りまする。

（ト、よろしく科。）

上野介　フム、本多の家の大事とな。

九郎右衛門　直々言上仕る以前、先づ靱負殿に伺ひ申さう

は、此の月四月十七日、二代將軍秀忠公、東照公七回忌の御法會修行とあつて、日光山へ御參詣、其の下向の十九日、當宇都宮御一泊との御觸れ出しはお家の規模、乃ち假御殿造營の心入れは然る事ながら、お座敷出來の後となり、僅十人の大工を留めて、別にお湯殿の御普請、怪しの切組。

靱負　何と。

九郎右衛門　サ、某今日御供の列より離れ、一日先に立歸り、御待遇の樣子其處此處と見廻り中、人も多きに老職ともあらう其許河村靱負、作事の見張り指圖萬端、唯一人にて取仕切り、將軍家お成りまではと、用人近習の面面まで、側近に寄らせぬと聞いたる一棟、これ偏に上を敬ふと他所目に見えても、某には得心ならず、思ひ當る節もあるまゝ、靱負が差配のお湯殿ならば、同じ老職の名を列ぬる武井九郎右衛門、足踏込むに仔細あらじと、立入つて湯槽の隅々床の模樣、天井までも。

靱負　ウム。

（ト、双方氣味合、合方になり、九郎右衛門は上野介に向ひ。）

九郎右衛門　我が君、何者の言葉をお用ひあつて、斯かる普請の思し立、御父佐渡守樣より、武功機略の譽高く、天下に聞えし本多のお家、これを限りになされうとは、淺ましゝとも情なし、縱何分の御不足はあるにせよ、此の度は當國にて、御高恩の權現樣七年の御法會なり、又當將軍には、我君を忠心無二と思し召し、心許しての御宿なり、斯かる大事の折柄に、空怖ろしき御企は、一入に罪深く、倘更に世上の動亂・百千年の後までも、御名の汚れと思し召さぬか、靱負、お身や主君の御胸元に刃を當つるか。

（ト、我を忘れて、段々に强く云ふ。）

靱負　流石九郎右衛門殿、早くも覺つて忠義一途の御諫言、われへの異見、道理至極、さりながら、爰をよう聞かれい、（ト、膝を進め）算ふれば早三年以前、我が君當地へお入りの折から、奧平家との道具の一條、幸ひ君の御威光にて、掟の表一旦は事濟みしかど、女儀の事とて其の後の加納殿、兎角當家に尻目使ひして、事あれかしの面憎さ、それを側より唆り立て、誠空事一々江戸への注進の、訴狀の書き人は堀伊賀守、己れが罪は得覺らず、筋なく主君を怨み奉り、寄食人の追從我慾にあらゆる惡聲。

（ト、云ふを遮り。）

上野介　もうよい、靱負、贅う云ふな、詮ずる所は孫可愛さ、他人の出世妬ましさに、公方の姉風吹き散らし、何時かは再び宇都宮を我が手に戻さん後室の作略、これは

男に先立たれて淋しくも老い行く女、其の相續は、所領に離れ肩身を狹う憔悴く男、何れも浮世の廢れ者が、僻み嫉みの耳こすりが、終には徹つてわれは疎まれ、遠からず嵐のあらう江戸の雲行。

九郎右衛門　スリヤ、疾くに探つて覺悟の某、亡父正信の武功を思し、將軍家此度日光御社參の折を以ての一宿を、本多へ情の最後の外聞、而も其の日の御待遇に咎め立てして多分は國替へ、ヤイ、九郎右衛門、天下の老職、伊井酒井、土井の徒にも、心置かるゝ本多上野、其の手に乘つて闇々と、爭で奈落に投げられうや、こなたへ最後の情のお宿を、其の儘彼方の最期として、分別顏の大名共に、一泡吹かして笑うてくれるわ。

九郎右衛門　然らば飽くまで、御手段を。

靱負　思し返しはモウ御座らぬ、實は某もお諫を犯し、二度三度御諫言申上げしが、果は手を束ねて死ねと云ふかと、實ならぬ御氣色、お覺悟の程は今見る通り、善悪ともに主命に從ひ申せし靱負が心中。

上野介　予が心も察してくれ、爲しても罪、爲さいでも罪、今となつて此の上野に惜むべき名があると思ふか。

九郎右衛門　此の上は力なし、罪の根本、あのお湯殿を。

（ト、衝と立上らうとする裾を押へて。）

靱負　お湯殿をとは、取毀たんとか。

上野介　ウム、おのれ飽くまで妨ぐるか。

九郎右衛門　お家の大事には替へられませぬ。

（ト、又立つ處を引戻せば振り拂ひ、尚も行かんとする九郎右衛門を引抱へ、靱負は突然に脇差を拔いて、其の脇腹をグザと刺す、此の時郭公一聲聞える、上野介はジツと思入れ。）

上野介　一夜過せば十九日、心を籠めし風呂の湯加減。

靱負　お身の怨みも。

（ト、九郎右衛門に云ひながら、刀を拔いて上野介と顏を見合はすを、木の頭。）

上野介　フ、ハ、、、、

（ト、物凄き笑ひ顏、郭公又一聲聞えて、此の道具廻る。）

同じく竹林村庄屋内の場

前の場と同日の夜

本舞臺眞中に新らしき常足の二重家體、本緣附き、正面は上手に床の間、此の下襖の出入り、床の間より前へ折曲げて障子、外は後へ下げて、緣より行かれる窓のある家作り、下手には同じく後へ下げて、屋根に茅

葺を冠せし黒の土藏の横を見せ、前側の處に簀戸附きの冠木門、兩袖は生垣、藏の側には青葉の立木あり、上下の見切は燐植込など、總て野州河内郡竹林村庄屋内の體よろしく、薄き風の音にて、道具留まる。

（ト、下手行燈の側には、手炙りの火鉢に鐵瓶を掛けたるを置いてあり、下女おさき（二十二三）、後ろ向きに煙草盆、茶道具など扱つて居り、直ぐ下座の獨吟になる。）

獨吟〽思ふ事、ある夜は更けて月影も、曇り勝ちなる木下闇、迷ひの路の關越えて。

（ト、これにて娘お早（十八）、島田福美しき袷の裾を曳き、襖を明けて密と出で。）

お早　コレおさき、もう四ツ半にもなるであらうに、わしや案じられてならぬわいな。

おさき　お嬢樣とした事が、又氣短なおむづかり、やがて見えるで御座りませう。

お早　御殿の御用濟んだゆゑ、後は定めの十日限り。

獨吟〽今夜逢ふとの約束を、結ぶのかみの走り書き。

（ト、懐より男の文を出して宜しく科。）

お早　必とあるに僞りも。

獨吟〽ないて別れのそれならで、待つに怨みの鐘の聲。

おさき　積もる想の晴れるも今の間。

（ト、此の時又薄く風の音、おさきはフツと下手を窺ひ。）

オウ、お嬢樣、かのお人が。

お早　エ、何處に。

獨吟〽算へし指を折り餘す。

（ト、下手より大工の與四郎（二十五）、着流し平ぐけ草履穿き、頬冠りの手拭を取りながら、密と出で來り。）

與四郎　お早樣か。

お早　オウ、ほんにお前は與四郎殿。

獨吟〽一つ心を交す手の中。

（ト、獨吟の上げ、與四郎木戸を押明け、走り入りてお早に縋る、お早も手を取りて嬉しき科。）

おさき　申し與四郎殿、お嬢樣が宵の程より、何のやうにかお待ちかね、サアサア早くお座敷へ。

與四郎　では御遠慮なしに。

（ト、立戻つて外を窺ひ、木戸を締めて座敷へ上り、お早上手に、與四郎は下手によろしく坐り。）

此間御門番の七兵衞殿に手紙を頼み、十日過ぎての明くる日たら、丁度幸ひ上都合と、今夜のお約束はしましたが、思ふに任せぬお作事の都合。

お早　では、御普請は濟みませぬかエ。

與四郎　サア、其の御城内の御普請も、此の度のお宿となる假の御殿は疾うに出來、それで一旦、大勢の仕手方の者にはお暇が出たれど、手紙にも一寸書いた通り、棟梁の源右衞門殿初め、わし等大工上下十人、後へ殘され、思ひも寄らぬ。

お早　エヽ。

與四郎　何さ、これも手紙で知らせた通り、公方樣のお肌の觸る大事なお湯殿、念の上にも念を入れ、毛筋程の手落もなきやう出來させい、と御家老の河村樣から嚴い仰せ、サア、多くの中から唯十人選り出されたは、大きな手柄と、棟梁初め一同が、有難くお請けして見れば、如何にもこれは大事な御普請。

（ト、よろしく科。）

おさき　お骨が折れたで御座んせうなア。

（ト、此の間に茶煙草盆など出す。）

與四郎　イヤ、わしとした事が、幸の思ひで來ると早々、面白くもない仕事の話、マア摘んで云へば、其のお湯殿の御普請に掛かつたのが、便りをした直ぐ明くる日、それから用が忙く、上樣日光御社參の昨日の夕方、定めの通りの仕事は濟んでも、明後日御出立になるまでは、われわれはまだ籠の鳥。

お早　エヽ、それでどうして、今夜爰へは。

與四郎　サ、其所で今の辯解話、かうなる事とは知らぬゆゑ、お前の父御が、十八日には今度の事の寄合で、一晩留守になると聞き、折角約束した一夜、それを外して又何時と、儘に逢はれぬ互の仲、何うがなしてと、七八日も前から智慧を絞つた末、誠虚事取交ぜて、又門番に袖の下、漸う無事に拔けて來ました。

おさき　それでは今夜は、お急ぎで御座んすかエ、折角新茶に新麥粉菓子、澤山上げる意でゐたに。

與四郎　其の御深切は嬉しいが、いつものやうには居られぬ體、夜中の八ッには人頭調べ。

おさき　まア、嚴しいお取極め、モシ、お孃樣。
お早　あい。
おさき　何を其の樣に考へてお出でなされます、今の話の樣子では、モウ一時と少しの間。
お早　サア、それがわたしは本意ないわいの、嚴しい親の目を忍び、月に一度か多くて二度、危い怖い思ひして、辛と顏見る其のお人が、來ると早々氣忙い。
與四郎　それだと云つて、相手は御領主、然しそれもモウ明日限り、後は自由な元の大工、なアおさき殿。
おさき　眞にお泊りは十九日、云はずと知れた十八日の、今日を幾日だ幾日だと、お孃樣のお癇癪、募れると直ぐから、それはそれはなア申し。
（ト、お早の顏を覗くと。）
お早　エヽ、もう其の樣な事。
（ト、恥かしき科。）
おさき　サア、御機嫌が直つたら、少しも早く緩りと、エエモ、難い逢瀬ぢやなア。
（ト、おさきはお早へよろしく科、行燈を横向きに片寄せ、襖を明けて奥へ入る。）
お早　與四郎殿。
與四郎　何で御座ります。
お早　その何で御座りますが、わしや氣に入らぬ。
與四郎　と云つて、お前は、此の竹林の庄屋樣の大事な娘御。
お早　それでも、斯うした仲になれば、互に心は女房良人何卒一日片時も早く、晴れて添ひたいわたしが願、お城の御用が濟んだなら、一度ゆつくり逢つた上、二人が一生の身の納まり、よう考へて見て下さんせ。
與四郎　あの棟梁の源右衞門殿が、些と血筋に當るを便り、武州から流れ込んで來た宿無し、兩親には死に別れる、兄弟はなし、身寄は不實、眞の木から落ちた何とやら、其の心細い身の上を、不便と思つてこなたの情、爰の建て増しの出來た時、不圖馴染んだが緣の初め。
お早　果敢い首尾はして來たれど、添ひ通さうと思へばこそ、女の身にて大膽な、其の言ひ約束を何處までも、わたしは徒爾にせぬ心、父さんが不承知なら、江戸へなりと二人一緒に。
與四郎　生れ故鄕の此處を捨てゝも。
お早　乞食しても男の爲、わたしは意地が立てたいわいな。
與四郎　それ程までの眞實心。
お早　可愛と思うて下さりませ。
與四郎　お早殿、コレ、お早。
お早　あい。
（ト、思はず莞爾、此の時上手緣側の障子の外へ、お

早の父藤左衛門（五十位）、紋付の羽織着流しにて、密と出で來り。）

藤左衛門　お早ゐるか、お早、お早。

お早　エッ。

（ト、吃驚。）

藤左衛門　オウ、お客來か、マ、、、、コレ娘、騒がずと下にゐやれ。

（ト、よろしく坐る、お早與四郎も是非なく畏ると、合方になり。）

此の度公方様がお成りについては、明日の今日とて、豫豫から極めてあつた寄合も、存外早く用が濟み、歸つて見れば奥座敷に、誰やら人の密々聲、サ、話の様子は知らねども、コレ、其所にゐるは源右衛門の家の若い者、たしか與四郎と云つた喃、折もあらうに、主人の留守の夜遲く、若い娘と差向ひ、何う言譯をする意だの。

與四郎　ハイ、お出入り先のお娘子に、疵を附けたは私の過誤、今更申譯の致し様も御座りませぬ。

お早　父さん。免して下さりませ。

（ト、これにて、藤左衛門思入れあり。）

藤左衛門　イヤ、二人とも神妙な言分、出來た事は云うて返らぬ、と云つて了へばそれまでなれど、爰をよう聞けよ、わしが家は、知つての通り苗字帶刀御免の家柄、竹林の植木藤左衛門と云へば、少しは人にも知られた者故、娘の不爲體、まアよいわでは濟まされぬ、それに又相手も惡い、とサ、斯う云へば、頭から與四郎を見下すやうなれど、生若い職人の、しかもまだ親方に寄食人、植木の婿には何うもならぬ、ぢやによつて、出來たでもよし出來ぬでもよし、わしは何事も知らぬ昔、聞かぬ昔、そちらも今日限りさつぱりと忘れてくれ、喃お早、コレ與四郎、何うぢや御座るの。

（ト、シンミリ云ふ。）

お早　自分が惡事をして置きながら、唾を返しては濟みませねど、モシ、父さん、與四郎殿と切れる事だけは、何卒堪忍して下さりませ、一生のお願で御座ります。若し此の念が屆かずば、死なうとまでも思ひ詰め、辛と叶うた其の後も、切ない逢瀬に果敢ない悦び。

藤左衛門　スリヤ、濟まぬ赦してと云ふ言葉の下から、別れられぬと言ひ張るのぢやな。

お早　妹に家督を讓り、娘一人捨てたと思うて、お腹も立たうがわたしの願ひ、モシ、拜みます、打つなり敲くなりして、それで堪へて下さりませ。

（ト、手を合はせて泣く。）

藤左衛門　與四郎、こなたは何とする氣だ。

（ト、これにて與四郎屹と思入れ、獨語のやうに。）

與四郎　どうで一度は此の破滅に、なるとは二人が豫ての覺悟、娘御の今の言葉を聞く上は、男の口から苟且にも、不實の云へた義理ではない、（ト、藤左衞門に向ひ）重重の此の不爲體、濟まぬは固より合點なれど、これも世に云ふ惡縁とでも思召し、何卒わたくしにお孃樣を下さりませ、瘦腕ながら世帶を持ち、汗になつて働いたら、大事の娘御、暑い寒いの目にも遭はせは致しますまい、圖太い奴とのお憎しみも御座りませうが、言ひ交したは命づく。

お早　父さん。

與四郎　旦那樣。

お早　何卒叶へて。

與四郎
お早　下さりませ。

（ト、二人は平伏す、藤左衞門少し屹となり。）

藤左衞門　斯うした事の起つたも、親の手落と優しく云へば、附上がつた二人の返答、命にかけても切れぬとは、好う云うてくれた、よい覺悟だ、したが與四郎、今が今でも此の親が、得心して娘を遣つたら、家一軒有つて、女房まで何うしてこなたは養ふ氣だ、手前勝手の間に合はせ、見え透いた事を云ひなさるな。

與四郎　其のお腹立も、一應は御道理で御座りますが、私もまだ若い者、心掛け次第では、何の他人の二人前、稼げぬ事も御座りますまい、それに差當つての目當と云ふは、明後日お城のお暇が出れば、御褒美として一人に百兩。

藤左衞門　エヽ。

與四郎　サア、それだけあつたら、世帶ぐらゐ持てぬ事も御座りますまい、それでも爰等にゐられては、見つともないと仰有るなら、生れ故郷へ立歸り、棟梁株になつた後、お目にかゝりに參りませう。

藤左衞門　コレ、與四郎、嘘も方便と下世話に云へど、立派な工手間を戴いて、名聞になる今度のお作事、御用濟みのお芽出度に、お肴料は出もしようが、何の所由に一人づゝ、大工風情に其の大金。

與四郎　エヽ。

（ト、ぎつくり。）

藤左衞門　瘦せても枯れても庄屋藤左衞門、子供欺しの百兩で、娘をおのれに遣るものか。

お早　コレ、父さん、お腹をお立てなさらずに、落着いて委く樣子を、コレ、與四郎殿、よも間違では御座んすまいな。

（ト、これにて、與四郎思入れあり。）

與四郎　鑿と鐵槌を持つて生れた職人、錢金の有難味は根

ッから知らぬ與四郎が、如何に此の場の苦し紛れ、一寸免れがしたいとて、何でそんな嘘僞り、委細を云へば、河村樣から、大事な仕事の禮心、褒美は必と小判で百兩。

藤左衞門　いよいよそれに相違ないな。

お早　本當の事で御座んすな。

與四郎　相手は領主の御家老樣、金に間違は御座いますまい。

藤左衞門　ウム、源右衞門初め、お城に殘つた大工の一組、外出は固より、女房子へまで便りもなく、何時戻るかと家內の心配、これには何ぞ仔細があらう。

與四郎　エヽ。

藤左衞門　大勢の大工の宅へ手紙一本言傳一度、なしの礫と噂の中で、そなたは何うして今夜來た。

與四郎　ウム。

藤左衞門　エヽ、薄氣味の惡い男、大事の娘に添はすは偖措き、もう門端も踏まされぬ、お早、おのれは座敷牢だぞ。

（ト、屹と云ふ。）

お早　コレ、與四郎殿、何うした譯か、何も彼もさつぱりと打明けて、早う父さんの機嫌を直し、添はれるやうにして下さんせ、コレ、何を放心、與四郎殿、早う話して下さりませ。

（ト、おろおろして與四郎の膝を押し動かす。）

藤左衞門　エヽ、關ふな娘、惡いは惡いと觀念して、男らしい最前の謝りやう、而も腕一本で通つて行くと、立派に云つたが見所と、少しは賴もしく思ふ側から、根が職人の他國者、跡は野となれ目の前限り、出放題をよく吐かした、サア、出て行つてくれ、夜が更ける。

（ト、云はれてハツと心着き。）

與四郎　それでは、今の話の筋道、納得が行かぬ中は、

藤左衞門　もう聞かずとも好い、娘を遣らずに濟めば重疊、サア、來い、お早。

（ト、立上り、泣いてゐる娘の手を取るを、與四郎は慌てゝ押止め。）

與四郎　よろしう御座ります、一旦受合つた男の意地も、お早樣には代へられませぬ、殊にお前樣は御領分の庄屋樣、御領主好かれのお役柄。

藤左衞門　御領主樣に拘はる事だの。

與四郎　ハイ。

お早　案じる事では。

與四郎　イヤ、ある段か、天下の大事。

藤左衞門・お早　エヽ、ツ。

（ト、仰天、與四郎と三人四邊を見廻し、よろしく科、

笛の合方。）

與四郎　たとひ親子兄弟でも、漏らしてならぬ一大事、深い樣子は知らねども、要を云へば御領主樣、何かお怨みの筋あつて、公方樣に仇する企、サ、それを一人で胸に藏め、此度御普請のお湯殿に、仕掛けの智慧は御家老樣。

藤左衞門　オウ。

與四郎　われわれ十人生擒同樣、此の內密の仕事に掛かり出來上つたは昨日の夕方、それでも明日上樣のお泊りまでは、身動きならぬと、マア、道理のお吩咐、守り通すが道なれど、モシ、旦那樣、男づくにも意地づくにも、辛抱ならぬは逢ひたさ見たさ、よし見付けられて、切り刻まれるまでもと思ひ、五日前から、裏門際の土臺を夜夜掘り下げて、石で隱して今夜の拔け穴、首尾よく潜つて來て見れば、御用の都合でお前樣の歸りが早く、娘御にも忽ち憂目、エヽ、あちらへも立たず、こちらでは恥、かうなる運なら寧の事、御門の內で見咎められ、死んだが優しであつたもの。

（ト、身悶えして男泣きに泣き出す、藤左衞門頷へながらも、扨はと思入れ。）

藤左衞門　それで悉皆と樣子が分つた、が、その怖ろしい中を拔けて來て、こなたは後を何うする氣だ。

與四郎　八つ前後には、毎夜々々の人頭調べ、それまでには密と歸つて。）

お早　イエイエ、申し與四郎殿、今お話しの樣子では、御領主樣のお企、成る成らぬに關はらず、明日は天下の大騷動、サ、係合ひのお前の身に、何う安心がなりませう、命を的に漸うと、折角拔けて出たお城、もう二度と行つて下さりますな、モシ、父さん、與四郎殿が其樣な危い橋を渡るのも、お金欲しさ、わたしの欲さ、アレ、可哀想に男泣き、もう百兩も十兩も、お金は天下の融通物、何にも云はず、わたしを遣つて下さりませ、與四郎殿、もう何處へも行つて下さんすな、御詮議があるならば、今宵の中に何所へなり、連れて逃げて下さりませ、明日さへ過ごせば又何とか、身の振り方も附きませう。

與四郎　好く言つて下された、實意なら發明なら、與四郎如きが及ばぬこなた、如何にも今の詞の通り、爰で此の儘身を隱すが、上分別とは思へども、お檢めの折、一人でも姿が見えねば、棟梁初め一同の難儀、それも仕損じてなら亦仕方もなけれど、出來るだけは穩便に、濟まして明日を待つが順當、私一人の身勝手から、餘の九人の命にまで、係はるやうでは罪の上塗り、旦那樣、かうまで詰まつた今夜の經緯、どうか御不承下さりませぬか。

藤左衞門　好う御座る、然う聞いては娘も不便、こなたも不便、悪いやうにはしますまい。

與四郎　エッ。
お早　そんなら、添はして。
藤左衞門　然し明日を過ぎての相談、それまでは喃與四郎、今こなたの云ふ通り、九人十人の命の沙汰、隱せるだけは隱すが人情。
與四郎　ア丶、今の不便だとの一言で、嬉淚の止め度が御座りませぬ、お早樣、今までの苦勞を話の種にするのも、遠い事では御座りますまい。
お早　好う思ひ詰めて云うて下さんした、忝う御座りまする。
（ト、これも嬉泣きに泣く、藤左衞門ジッと思入れ。）
與四郎　それではこれから安心して、早く戾つてゐるとしませう。
お早　エ丶、どうでもお城へ。
藤左衞門　智勇兼たる御領主御家老、御用濟みの職人は。
與四郎　エ。
藤左衞門　イヤ、決して麁末にはなさるまいが、一人でも見えぬとあつては、一同へのお祟り、サア、今夜は戾るが一の思案。
（ト、與四郎を城へ遣りたがる心、與四郎は氣を取直し。）
與四郎　これから晴れて逢はれる二人。
お早　エ。
（ト、兩人顏を見合せる時、鐘の聲。）
與四郎　オウ、ありや九つ。
お早　それでは此の儘。
藤左衞門　少しも早く。
與四郎　ハイ。
（ト、平舞臺へ下りる袂を、お早が押へるを、密と拂つて科、藤左衞門と顏見合はせ、氣を變へて木戶へ出る途端に、羽織着流しの手先一人、下手より出て何氣なく。）
手先　與四郎だな。
（ト、云ふに吃驚、突飛ばして行かうとするを。）
何を逃げやがる。
（ト、押へられて一寸立廻り、隙を見合はせ與四郎は、懷より鑿を取出して、手先の胸元を突く、お早は poを寛ひて。）
お早　モシ、與四郎殿。
藤左衞門　コレ。
（ト、云ふ聲に、與四郎ハツとするを、木の頭、與四郎は一散に向うへ入る、後に藤左衞門はよろしく思入れ。）
今夜の中に御本陣へ。

お早　エ、。

（ト、心遣ひの科、藤左衞門の顏を見る中心着きて吃驚、其の手に取付く、此の模様よろしく、風の音にて、道具元へ戻る。）

元の宇都宮城内奥殿の場

前の場と同じ夜の九つ過ぎ

本舞臺總て以前の通りの奥御殿にて、行燈の代りに今度は燭臺が二挺、家體上下に置いてあり、一體に薄き月明りの工合、鳴物よろしく、道具留まる。

（ト、二重眞中に前の場の本多上野介正純、黑の羽織着流しにて、褥の上に坐り、下手庭先には、縞の羽織着附の大工の棟梁源右衞門（四十五六）、敷石の上に突膝をしてゐる、此の側には、前幕の上原甚藏一本挿し上下姿、庭草履を穿き、これと並んで同じ扮裝の多賀直記（二十四五）、共に竹床几に掛け、控へてゐる。

上野介　コリヤ、源右衞門、其方最前より種々に云ひ拵へ、弟子を庇ふは殊勝なれど、城内隈なく尋ねさせても、見當らぬといふ與四郎、おのれ同勢九人の頭として、胡亂の返答、聽入れられぬぞ。

甚藏　サア、確りと申上げい。

源右衞門　へエ、全く殿樣の仰せられます通り、監督の私若い奴等の不所爲を、存ぜぬ知らぬとばかりでは、誠に申譯にも相成りませぬが、四つ頃手前が見廻りましたら、チヤンとお小屋に居りまして、何だか今夜は蚊が甚くて、寐付かれないと申しながら、寐間着でそこらの藪ツ蚊を、敲き出して居つた與四郎、それから一同床に就き、今朝から何も御用のない身の氣安さに、ぐつすり眠つたと思ふ途端に、例のお調べ、もう其のやうな時刻かと、飛起きて見れば丁度九つ、鐘の音、顏を並べて見渡しますと、一人不足。

直記　それ故の御不審ぢやぞ。

源右衞門　サ、幾度も同じお返事ながら、吃驚仰天、仕手方一同お役人共々に、其所の隈々此處の蔭と、捜して見ても皆目知れず。

上野介　エ、、姦い、其方此度お待遇の一條、露塵ほどの手落があつても、互の身の上とは、存じて居らうな。

源右衞門　仰せまでも御座りませぬ、御領主樣の御身の大事、とサ、此の十日の間と申すもの、石佛の樣になつて、固く掟を守つたわれわれ。

上野介　それに何故此の不始末、エ、、彼奴逃出でしに極つたが、諸門の固め、夜中の見廻り、脫漏なく申付け置

きたるに、ウム。
（ト、口惜しき思入れ。）
甚藏　然う御座る故、與四郎め、まさかに御城外へとは思ひませねど。
直記　見えぬと申すが心がゝり。
上野介　エヽ、なまじひ不便をかけたが過失、昨日の中に彼奴等一同。
源右衞門　エッ。
上野介　一同嚴しく縛し上げて、身動きさするな。
直記　ハッ。
（ト、此の時下手より、前の場の彥坂良助、羽織袴にて出で來り。）
良助　申上げまする。
甚藏　何事で御座る。
良助　お尋ねの大工與四郎、只今お作事場裏の森の際にて、引捕へまして御座りまする。
甚藏　何。
甚藏）
直記）與四郎が。
源右衞門　お小屋の近所に。
上野介　愈怪しき彼が擧動、（ト、科）これへ引け。
甚藏　取逃すな。

良助　ハッ。
上野介　源右衞門めも、小屋の内に縛め置け。
良助　ハッ。何れも。
（ト、聲を掛けると、皆附袴股立ちの侍兩人出で來りて、源右衞門の袖を摑む。）
源右衞門　小僧同然の與四郎、何を寐恍けて居りましたやら、御普請出來の御祝儀に、何卒お慈悲のお取計らひ。
（ト、甚藏直記の顏を見る。）
甚藏　早く立て。
源右衞門　ヘエ。
（ト、よろしく覺悟の思入れ、良助附添ひ、引立てられて下手へ入る。）
上野介　千丈の堤百尺の室、螻蟻突隙の禍、上野が一生の手ぬかり、然し彼奴まだ生若き丁稚上り、城内に居つたとならば、よもや大事を、（ト。よろしく科、屹となり）直記、九人一度に斬らして了へ。
直記　ハッ。
上野介　與四郎めは何して居る。
直記　ハッ。
（ト、急ぎ下手へ入る。）
上野介　さるにても、憎い奴めが。
（ト、苛々して、強ひて煙草を喫みにかゝる處へ、下手

より前の場の與四郎、繩にかゝりて、少し髪を亂し、着附袴股立の侍一人、其の繩尻を取つて出で來り、石の上に引据ゑると、甚藏は與四郎の後に廻る。)

上野介　大工與四郎とは其方か。

（ト、これにて、與四郎よろしく科。)

與四郎　お殿樣で御座りましたか、如何にも私が與四郎めに御座りまする。

上野介　尋ぬることがある、僞るな。

與四郎　ハツ。

上野介　甚藏屹と白狀させい。

（ト、きつぱり云ふ。)

甚藏　コリヤ與四郎、餘事は尋ねぬ、其方夜中に唯一人、小屋を離れて何處へ參つた。

與四郎　ハイ、それは斯樣で御座りまする、御承知の今日の俄の蒸暑さで、袷に汗の氣味惡さ、それに藪蚊は出初めまする、餘りの事の寢苦しさに、迂潤迂潤お小屋を出ましたが、一人歩きを仕馴ぬ廣場、奥の林へ迷ひ込み、漸く拔けて出た處は。

甚藏　ウム。

與四郎　見たこともない小山の下、サア、コリヤ殿樣の御殿近くか、見咎められては大事と、慌てゝは何方角知れず、うろうろする中多くの人聲、偖はと夢中で隱れた木の上、息を殺して居りますと、やがて、中間やお侍の聲も段々遠退いたので、生き返つた心地、やつとお小屋へ戻る處を、押へられて此のお繩。

甚藏　ウム、一應は聞えたが、左程迷ひしお奥の森陰、戻りに道がよく知れたな。

與四郎　ハイ、それも散々うろつき廻つて、汗びつしより。

甚藏　そのまゝの姿で行つたか。

與四郎　ハイ。

甚藏　よし、それならばさうとして、與四郎立て。

與四郎　ハイ。

（ト、合點の行かぬ科。)

甚藏　林の向うの小山とは、お作事小屋から見える裏山、日映しは薄く風冷えて、常には人の出入りもなく、卯月半の苔青き、道の足跡檢め見よう。

與四郎　エツ。

（ト、ぎつくり。)

甚藏　淺慮い事を、ハヽヽヽヽ、ヤイ、與四郎、サア、何處へ行つた、何處から拔けた、何しに失せた、きりきり申せ。

與四郎　ウム。

上野介　コリヤ、云はぬか、おのれは責めても殺しても、洩らした大事は包まれぬ、眞直に云へば助けるが、云は

ぬとならば憎さが百倍、責め殺すが合點か。

甚藏　叉云はぬとて、薬が聞かずに置かうか、性根を据ゑい。

與四郎　ウム。

（ト、宜しく科、爰へ前の多賀直記、急ぎ足に下手より出て來り。）

直記　殿、只今九人の者共、殘らず斬り捨てまして御座りまする。

與四郎　エツ、九人の者とは、（ト思入れ、屹となり）云はねば殺す云へば助けると、武士に似合はぬ出放題、云つても殺し云はずとも、どうで殺されるに極まつた身の上、おれ故仲間の九人まで、もう斬られたとあるからは、固より覺悟の大工の與四郎、町人ながら未練は無え、今すつぱりと云つて聞かせる。

甚藏　ウム、好い覺悟、白狀ひろげ。

與四郎　耳を浚つてよつく聞け、（ト、合方になり）家老からの話には、主人が他人の讒言で、江戸の方の首尾が惡く、事によつたら十五萬石、何う成り行くか分らぬ無念さ。親の代から引續く、武功の家を阿容阿容と、取潰されるを待つには及ばぬ、遺恨晴らしに一泡吹かす、其の魂膽は今度の湯殿、重しを載せ置き切つて落し、天下の武將も只一挫ぎの釣天井。

甚藏／直記｝ヤツ。

（ト、初めて聞いたる二人は吃驚、與四郎は尻目にかけ。）

與四郎　何を吃驚、（ト、上野介に向ひ）十人殘した大工を威し、忌と云へば卽座に討首、得心ならば小判の褒美と、無理押付けの難題も、御領主故と思へばこそ、仕事が濟んだら助かると、親や兄弟女房子のあるは尙更思へばこそ、淸く承知をしたものを、それに普請が出來るともう、僅の事の卷添に、何にも知らぬ棟梁初めを、理非も糺さず殺すとは、人の皮被た虎狼、サア、其の棚積の種蒔きの、おれをこそ思ふ存分にしろ。

上野介　イヤ、死物狂ひの言ひたい三昧、噛み得ぬ犬の高吠と、弱い者は聲で騷げ、それでせめての胸が晴れゝば、耳は聞き役、聞いてもくれるが、コリヤ、素丁稚、廓の外を何所へ行つた。

與四郎　城下外れの女の家へ。

甚藏／直記｝ウム。

與四郎　職人一匹男一匹、全く外に料簡なく、逢ひさへすればと拔けて出たが、おれも天命、そつちも天命、女の親に問ひ詰められ、返事に困つて仕掛を明かした。

上野介　何と。

（ト、流石に驚く。）

與四郎　而も領主の息の下、外へは洩れる氣遣なしと、思つて歸りはしたものゝ、おれを城内へ戻したがつた、阿父の心も疑ぐれば、やつぱり此の身を邪魔物扱ひ、厄病の神で敵の讐、若や訴人を。

上野介　ウム。

（ト、これにて與四郎、いよいよ覺悟の體。）

與四郎　もう何も彼も破れかぶれ、云ふ事はねえ、聞きたがる事もあるめえ、天下を騒がす大普請が、唯一つの楔から、引つ繰り返るも道で無え報い、天道様は見通しだなア。

（ト、ジツと科。上野介は、思はず刀を取つて立上がり。）

上野介　如何に小人の思慮なしとて、一國一城の主が、身命に代へての大事を、塵芥の如くに踏み躙つたる下司下郎、寸斷寸斷に切り刻んでも腹は癒ぬ、徳川二代の將軍の喉首に當てんずる、本多が家の重代の業物を、此の丁稚めが血汐に汚さん口惜さ、ヤイ、おのれ打明かした相手を云へ、サア、云へ、云はぬか。

（ト、庭下駄を穿いて下り、與四郎の側に立つ。）

與四郎　まさか、饒舌りもしまい相手、饒舌るとなつたらもう遅い、今頃は老中方の耳へ筒抜け。

上野介　人非人めが。

（ト、立蹴に蹴ると、與四郎の額口破れる、兩人見合つて屹と見得。）

與四郎　公方様より此地の御領主、こなたの息が幾らでも、餘計に掛かつてゐる與四郎、爲悪しかれとは思はぬが、それ程大事な用を吩咐け、誰彼なしに命を取る、無慈悲な心と分つては、今更ながら業が沸える、地獄の底から怨んでやるぞ。

上野介　頬桁敲くな。

（ト、刀を抜いて與四郎の縄目を切り解き、ハツと思ふ處を斬り伏せる。）

甚藏　憎い奴で御座りましたな。

上野介　其方等は固より、九郎右衛門にさへ隠し置いたる企を、這奴の口から。

（ト、思はずグツと止めの刀、此の時上手木戸口より、河村靱負、前の場とは違つたる着附上下にて出で來り。）

靱負　我が君。

（ト、顔を見る。）

上野介　聞いたか。

（ト、宜しく科、靱負は鉢植の松を見て。）

靱負　新關以來生け置きし、後家めが孫の行末を占ひの、此の小松。

上野介　榮えさするか。

（ト、ポンと松を二つに切るを木の頭。）

ウム。

（ト、兩人顏を見合せ無念の思入れ、甚藏直記もジッと科、此の模樣よろしく、靜かに、幕。）

大　詰

宇都宮城內書院の場

前の場と同じ四月下旬の晝

本舞臺一面の平舞臺、上の方晝心に床の間、折曲げて襖、正面下手とも同じく襖の出入り、此の前一體に高麗緣の疊、總て宇都宮城內書院の體よろしく、鳴物なしにて、靜かに、幕明く。

（ト、正面の襖より、前幕の本多上野介正純、上下姿、續いて下手の襖より、同じく前の幕の上原甚藏、多賀直記、彥坂良助、此の外六七人の侍、何れも上下姿にて立出で、一同宜しく坐ると、鳴物になり、向うより、德川家の使者井上主計頭正就（四十四五）、同じく伊丹康勝（三十五六）、上下姿にて出で來り、花道よき處に止まると、）

甚藏　將軍家よりのお使者、何卒これへ。

直記／良助　お通り下さりませう。

（ト、皆々一度に頭を下げる。）

正就　罷り通る。

（ト、康勝と目禮。二人は直ぐに本舞臺に入り、床の前に坐る。）

上野介　當城の主本多上野介正純、お出迎ひ申上げて御座りまする、御兩所にはお役目御大儀。

正就　存じの通り、某は老中奧掛り井上主計頭正就。

康勝　副使として伊丹康勝。

正就　上野介殿、御不審の筋で御座るぞ。

上野介　某に、（ト。後を見返り）退座致せ。

皆々　ハア。

（ト、甚藏初め一同、元の下手へ入る。）

上野介　シテ、御不審の次第は。

正就　數の條々、一々にお答へなされい、（ト、容を改め）先以て上野介、此程將軍家日光御社參の砌、當城內に御

一宿の筈とあつて、萬端の用意、種々の心勞、お上に於いても此段は神妙に思召さるゝ、就いては其節、即ち去んぬる十四日の夕間暮、御先供の土井大炊頭利勝、當城下まで到着せしに、町村方ともに火を濕し、供廻りの中に急病人これあつて、服藥せんと致せしも、心に任せず、御用先にて人命の沙汰、此の仔細は。

上野介　大炊頭供廻りに、不自由させし分の事についてか、そは將軍家御着の際に、萬一失火の過失など御座つては、無上の緩怠、互の混雜と、心を配り、當日は、町々村方二里四方、晝より一切の火氣を嚴しく禁じ置きました。

康勝　第二には、上樣御宿の設けにとて、御殿を新に建てられたる心入れ、これも亦疎には聞えねど、其のお廊下の戸の隅々に、皆潜戸を附けたるは心得ず、外より人の出入を自在にせんが爲との取沙汰。

上野介　ハテ、事々しき御尋ね、天變地異は時を選まず、若し御泊りの一夜の中、大地震などの災禍御座らば、引戸の不便御過失も如何、少しは分別致し置くべきでは御座るまいか。

康勝　イヤ、それのみか第三には、假の御殿の床高く、稍立ちながら其の下を、通行叶ふ程に出來へられしは何が故。

上野介　さまでの事に、御不審立てらるゝと、夢聊存ずればこそ、床の高きは濕氣を厭ふ爲ばかり、今は仲呂の半過ぎ、春去れば卯の花くだし、と古歌にも詠む。

（ト、事も無氣に云ふ。）

正就　如何にも明白なる申開き、然りながら、尙此の外に御書を以て御尋ねの三個條、謹んで返答召され。

（ト、懷中より奉書を取出し、披き見ながら。）

其方、泉州堺表より、當春密かに鐵砲百挺を買ひ調へ、剩へ新居の御關所を、世の常の手道具なんどの如くに仕立てゝ通り過ごさせ、遂に一言御屆けに及ばざる條、罪輕からず、此の儀は如何。

上野介　ヤ、存じ寄らずとて此の上の御座らうか、鐵砲の五十七十、亡父正信以來所持罷り在る、今春自儘に買入れしとの取沙汰は、泉州からか、其の邊からか。

正就　ウム。

上野介　鐵砲鍛冶との突合せは、上野介些と迷惑に存じ申す。

（ト、冷笑ふ。）

正就　然らば證據は追つての事とし、次に問はうは、先つ頃、當城外廓の石垣二三個所修理致すとのみの屆を以て、本丸其の他、三日月堀のあたりにまで手を入れしは、御法に背きし致し方、それにも確としたる返答御座るか。

上野介　正就殿、御身は如何思召す、其許が主計頭を名乘らるゝは、加藤虎之助淸正の武勇にも劣らじと、上樣よ

りの褒美の賜物、武士の心掛は御存じ知られん、爰に一城の主が城の修復、二三個所と申せしからとて、四個所五個所は叶ひませぬか、しかも本丸と云ひ濠と申すは存ぜぬ事、たとへ存ぜしにせよ臨機の處置、武士の居城を圍ひの石垣、今俄に風雨雷霆の災禍ありても、御屆濟むまではと、手を束ねて空しく眺めをるべきものか、サ、況や火の無き煙の噂、御検分にお任せ申す。

正就　然らば最後に一個條、其方當地へ入國の節、手少なの程を思召されて、一百人の根來組同心、上様より附け置かれしを自儘の成敗、多人數を殺害せし段、上を恐れざる致し方、サ、此の返答は如何で御座る。

上野介　城の石垣修復の砌、彼等同心、われらは御直參の者共なり、本多が臣下同様の働きさせられんは心外なりなど、然もなき事に我意を言ひ張り、作事の妨げ致すにより、已む事を得ず、其の中の頭分五人、法の通りに行ひ申した。

康勝　イヤ、上野殿、更め申すまでもなけれど、彼等同心の家筋は、元皆紀州根來山の衆徒にして、三河御陣の節軍功を顯し、神君のお覺えも淺からざりし御直參、それを濫りに成敗とは、麁忽にては御座るまいか。

上野介　濫りで御座らぬ、根來組にもあれ、御直參にもあれ、本多が助けせよとある、役目の表を打忘れ、城内に在つて自儘の振舞、打捨て置きては武名の廢れ、差圖はわれ等が手裏に御座る、

（ト、屹と云ふ、これにて兩使は目を瞬む。）

如何に御兩所、最前よりの御不審の段々、何れも人の噂を種、然はなきも偽所由なき咎め立、われ等神君に駿府に扈從し奉りし其の前後、關ヶ原の合戰に、當將軍秀忠公、戰機を外して、父君の御機嫌害ねられし時の御救ひ、或は亡父佐渡守共々大阪攻めの謀計を立てたる苦心、或は福島の家取潰しに、一身の嘲り譏りを顧ざりし御奉公、又東照公の御遺骸を日光山へ御改葬の取賄ひ、正純不肖なりとは申せども、徳川のお家に盡せし寸功の數々、現に奥州筋の押へとして、當宇都宮をも預け賜はるものを、たとへ何人の讒訴内通ありたりとて、然までもなき事草へ立てゝの御取糺し、何時かは斯くと存ぜしものから、さりとては、上野、お怨みに存じ申す。

正就　御述懐承つて笑止至極、御心中推量申せど、これも役目、其許此の度の御待遇を仕損じ、上様には俄に壬生へ御宿り替への不始末、（ト、詞を改め）然るに依つて、本多正純、宇都宮の城地召上げられ、出羽の國由利に於いて、新地五萬五千石を下さるゝ、謹んでお請け申されい。

上野介　何、羽州へ三ヶ一の捨て知行、イヤ、お請け申す

まい、狸後家めが舌の劍に突き鑿められ、父の名までを下す上は、一萬石も要らぬ、饑からぬ程に千石ばかり、握飯の料に頂戴致すと、立歸つて言上せられい。
康勝　然は申されな、われ等とても木竹で御座らぬ、上よりの內命には、御殿の外にまだ一個所。
上野介　ヤ。
康勝　斟酌致して控へ居る。
上野介　ウム。
（ト、科、此の時奥の方にて、ワッと云ふ多くの人聲、轟々と云ふ響。）
正就　あの物音は。
（ト、これにて上野介宜しく思入れ、處へ下手より、最前の彥坂良助急ぎ出で來り。）
良助　お使者の手前恐れながら、此の度の御新殿、御失火に御座りまする。
（ト、云ひ捨てゝ引返す。）
康勝　何、假の御殿が。
正就　時も時、所も所。
上野介　オウ、靱負。
（ト、思はず云ふを、木の頭、三人氣味合、奥の方段段物騷がしく、上野介は其の方へ思入れ、此の模様よろしく、道具廻る。）

同じく假御殿裏湯殿の場

前の場と同刻

本舞臺眞中に、大きなる總檜造りの新しき湯殿、上手は同じ檜造りの母屋に續きし拵へ、湯槽流板の上には、大きなる角材天井板など一面に落ち散りて、下は見えず、正面の羽目のあたりよりは、火と煙吹き出てゐる。此の下手は土塀の內の植込み、上手の見切りは何れもそれぞれの續き、總て城內假御殿裏湯殿の體よろしく、早めたる鳴物にて、道具留まる。

（ト、湯殿の內に前の森の河村靱負、散らし髮着流し、刀を拔いて眞中に立ち、入口上手には正就の家來田澤小平太、下手には康勝の家來井出新助、何れも十人程づゝの侍を從へて押つ取り卷き。）
小平太　ヤア、御詮議のある怪しき湯殿。
新助　火を掛くるとは、不屆奴めが。
靱負　熱湯嫌ひの秀忠殿、折角の湯殿を覗きもせず、途から切れて逃げ歸つたとは云ふものゝ、心を籠めし折角の新普請、おのれ等如き瘦侍の、其の泥臑一寸でも踏込んだら、微塵にするぞ。

小平太　何を。

新助　それ。

（ト、一同掛らうとするを、靫負は入口に防いで、手當り次第に、十人ばかりを斬り伏せ斬り伏せ、殘りの者をも追捲くる、此の中に火は段々と床の方より燃上がる。）

靫負　ウム、人も湯殿も齊しく灰に。

（ト、刀を腹に突込むを、木の頭。）

我君、おさらば。

（ト、火焔の中に立ちながら、刃をきりゝと引廻す、一同は聲々に罵り騒ぐ、此の模様よろしく、鳴物賑やかに、幕）

新てるて姫（一幕）

役名

お浪　曲馬乗
お勇　同
おたよ　同
半次郎　衣裳方
勝藏　囃子方
銀八　木戸番
市作　同
喜平次　曲馬興行師
武藏屋利右衛門
七兵衛　緣日商人
才太郎　同
庄藏　同
お赤　同
香具師傳吉
お留　傳吉女房
重助　寺男

九品寺境內の場

德川末期の或年十月初旬の申刻頃

本舞臺下寄り後へ下げて、高二重の鐘撞堂、此の外は一面の平舞臺にて、正面の奥深く下寄りに寺の門、此の左右には古き土塀を廻らし、內側に多くの櫻の大樹、舞臺上手寄りには、後へ下げて斜に、曲馬の小屋の表側、此の前通りに、松の大木二三本立ち並び、舞臺端近くの上手に杉の大木、鐘撞堂の前には、二抱へもあろ黃葉の銀杏の大木、根方には落葉少し散つて居り、尙、門より舞臺中程までは眞直に、あとは曲尺の手に上手へ折れし敷石の、土布を敷きあり、總て江戸近郊荏原の古刹九品寺境內の體よろしく、薄く風の音、寺鐘にて、幕明く。

（ト、銀杏の根方に、緣日商人ドッコイ〳〵の才太郎（四十位）同く手遊屋の庄藏（三十四五）同く甘露糖屋のお赤（六十位）香具師の傳吉（四十四五）傳吉の女房お留（三十四五）の五人車座に蹲み、皆々俯いて賭事をしながら、小聲にゴヤ〳〵云つてゐる、中に才太郎は、銀杏の落葉を掻き集めて、これに腰を卸し、

胴を取つてゐる、なれども、人々の體(からだ)にて、外からは、何をしてゐるのか一向見えず。

庄藏　占めた、今度こそ鰹だ。

お留　どつこい、海老だよ。

傳吉　オツトツトトトト、鯛になりやアがつた。

お赤　ア、、わたしも亦外れた。

お留　わたしやア忌だよ。

才太郎　オイ〳〵お留さん、一旦賭(は)つた錢を、引ッ込ましちやアいけねえ。

お留　いけるもいけないもあるものか、わたしやア忌だよ。

才太郎　そんな亂暴な話ッてな無え、幾度だつて外れりやア仕方がねえ、其處が勝負だ。

お留　オヤ、筋を云ふね、成る程そりやア勝負事だもの、負けりやア取られるに極まり切つた話さ、だがね、お前さんの其の針先は、折角旨いところで止まると思ふと、鼻息だけでもフラ〳〵と、隣の筋へかゝる位は又動くから忌なんだよ。

才太郎　何だつて。

お留　幾ら名前がドッコイ〳〵でも、洟ッ垂らし小僧の小遣を、捲上げるのと同じ様に、ドッコイ〳〵と、然う搯(ず)らかされて堪るものか。

傳吉　さうよなア、フラ〳〵した針先が、止まると見えても止まらねえのは、少しオツリキだ。

才太郎　オイ傳さん、女の云ふ事はまだしもだが、幾ら夫婦の情愛でも、毎日毎晩かうやつて、顏を合はせる仲間の者の商賣道具へ、お前さんまでが一緒になつて、ケチを附けるなア大人氣ねえ。

お赤　マア才さん、そんなに大きな聲をおしでないよ。

庄藏　マア好いやな、二人とも靜かにしなせえ、納所坊主にでも聞えると、又煩(うるせ)えや。

才太郎　然うか、ぢやア先ア贅くは云はねえが、何ぼおれだつて、屋臺もねえ地べたの上へ甕を置いて、何う針先のごまかしやうがあるものか、貧乏揺りをして見たところで、まさかに地面は動くめえ、おらア生憎地震の子ぢやアねえからな。

お留　オヤ、異(けつ)な臺辭(せりふ)だね、お前さんが地震の子なら、わたしのとこの商賣だから、直ぐ見せ物に買つて上げるよ。

才太郎　何だと。

（ト、大きな聲をして立上ると、皆々も一度に立つ。）

傳吉　もう好いやなお留、手前も些と口が過ぎらア、向後一緒になつて勝負をしさへしなけりやア、それで好いんだ、

お留　ヘエ、お前さんまでが、わたしの言ひ種(ぐさ)に不足かエ、他人の前で女房を凹ましやア、何處が好いんだ、大した御器量な御亭主様だ。

傳吉　何を云やアがる、もう一遍云つて見やがれ。
庄藏　コレさ、何うしたもんだ、こんな所で夫婦喧嘩も見得ぢやアねえ、サア〳〵、一同爰等で清く切上げよう、なア甘ろうとの小母さん。
お赤　それが好い、サア〳〵、庄さんの云ふ通り、笑つて別れよう、ねえ傳さん。
傳吉　何うでも好しさ。
才太郎　其方が好けりやア此方も好しさ、年中店を並べる同志だ。
（ト、云ふ處へ、仲間の世話人ブツキリ飴屋の七兵衛（五十位）上手より出で來り。）
七兵衛　まだやつてゐたのか、お燈明錢は、確に庫裡へ納めて來た。
（ト、皆々の顔を見廻す、才太郎は、ドツコイ〳〵の道具を片付ける、お赤は、帶の間より、反古紙に包みし錢を出して。）
お赤　飴屋の小父さん、掃除錢も集まつてゐるよ。
（ト、手渡しする。）
七兵衛　イヤお世話樣、歸りがけに門番へ渡してやらう、皆は裏から歸るだらう。
傳吉　畠道を行きやア、三丁がとこ近えからね。
（ト、別れ別れにならうとする處へ、上手小屋の背後より、江戸の下駄屋武藏屋利右衛門（六十二三）糸織の羽織着附、雪踏穿きにて出で來り。）
利右衛門　モシ、一寸物を伺ひたう御座いますが。
才太郎　エ。
（ト、これにて皆々一寸立止まる。）
利右衛門　誠に附かぬ事を伺ひますが、御緣日はもうお終ひなので御座いませうか。
七兵衛　エ、、幾らお十夜中の開山忌でも、何うも斯うした田舍ですからね。
お赤　遠方へ歸る御參詣が多いんで、毎日七つまでには終ひますよ。
利右衛門　左樣で御座いますか。
七兵衛　處で何か、緣日商人に、用でもおあんなさるのかエ。
（ト、もぢ〳〵する。）
利右衛門　ヘエ、あの、あすこに御座います曲馬の小屋の。
七兵衛　あすこの人に、ア、然うですかエ、まだ皆ゐるでせうが。
利右衛門　左樣で御座いますか、それで、アノ、曲馬の太夫さんと云ふのは、女で御座いませうか。
（ト、これにて、一同ジロ〳〵と利右衛門を見ながら、才太郎庄藏お赤は上手へ、傳吉お留は下手へ入る。）

七兵衞　フム、何か尋ねなさるんだね。
利右衞門　ハイ、少々尋ね人が御座いまして。
七兵衞　さうですかエ、あの曲馬は、どうせ緣日の高小屋物だから、見せる御本尊は、皆若い女だが、座頭は中でも滅法美しいのさ。
利右衞門　ヘエ、それで何で御座いませうか、其の太夫の中に本名をお浪と申すのが居りませうか。
（ト、力を入れて尋ねる顏を、ヂッと視て。）
七兵衞　ゐますよ、本名にも藝名にも、お浪と云ふ名たつた一つで、それが今云ふ座頭の別品さ。
利右衞門　エッ、居りますか、アノ、お浪と申しますのが。
七兵衞　一枚看板の賣物でね、一の谷の敦盛や、小栗の照天姫なぞと來ちやア、宮地の役者なんぞにや一寸無しさ。
利右衞門　そんなに綺麗で御座いますか。
七兵衞　お前さん、何か係り合の仲だと見えるが、江戸から逢ひに來なすつたのだね。
利右衞門　ハイ、全く左樣で御座いますが。
（ト、小屋の方を見る。）
七兵衞　まだ皆ゐるでせうよ、行つて御覽なさい。
利右衞門　左樣で御座いますか、それでは急いで參つた效(かひ)が御座いました（ト、思入れ）時にあなた、お詞に甘えて、種々な事を執念く申して濟みませんが、其の太夫さんに、あなたのお計らひで、何とかして、一寸逢へないもので御座いませうか。
七兵衞　左樣さね、お浪坊なら、あの小屋の天下樣で、何も跡片付けの用なんぞしちやアゐまいから、一寸ぐらゐなら、逢へない事もありますめえ、訊いて見て上げても好い。
利右衞門　それは何うも御深切樣に、有難う御座いますが、嚴(わかいし)か御座いませんでせうか。
七兵衞　あの曲馬を有つてゐる老爺は、なか〳〵の妬き手だから、若い男でも尋ねて行つたら、唯事ぢやア逢はせますめえが、お前さんの年配なら。
利右衞門　大丈夫で御座いませうか、勿論御祝儀ぐらゐは心得ますが。
（ト、懷から紙入を出すを、押止め。）
七兵衞　何ね、そんな事は後で結構さ。
利右衞門　イエ、失禮では御座いますが、あなたにも心ばかり。
七兵衞　イヤ、飛んだ事だ、マア〳〵一寸待つておいでなせえ、直ぐ訊いて來て上げるから。
（ト、云ひ云ひ、上手小屋の裏へ入つて行く。）
利右衞門　誠に相濟みません、有難う存じます、それでは何卒(どうぞ)。

（ト、後影を見送りながら、よろしく科、此の時、下手より夕日の光りスツと映し入り、銀杏の葉を明るく照らす、寺鉦の音、やがて鐘樓と銀杏の樹の間の處より、寺男重助（六十位）古き筒袖半纏に腹懸股引、素足に藁草履にて、竹箒を擔ぎ出で來り、利右衞門の樣子を胡散臭さうに眺めながら、銀杏の根方へ、其處等中の落葉を掃き寄せる、利右衞門は、やはり小屋の方へ氣を取られてゐる、其處へ、小屋の後より、膨ら雀の髷、派手な縞物の着附の、突丈なるをゾロリと着て、淡紅色の扱帶、素足に下駄を突ッ掛けたる、曲馬の太夫お浪（二十五）自墮落な風にて出で來ると、七兵衞は後より來て。）

七兵衞　爺やん、オイ、重助さん、遲くなつて濟まねえ、サア掃除錢だ、此方へ來ねえ。

（ト、最前の反故包の錢を持つた手で招く。）

重助　ハア、然うかね、毎度濟まねえ。

（ト、其の方へ行く、七兵衞は外してやれと云ふ心にて、一寸科、鐘撞堂の向ふ下手へ入ると、重助も頷いて後より入る。）

お浪　あなたですか、わたしに何か用がおあんなさると云ふのは。

（ト、云ふ顏を見て、利右衞門は思はず進み出で。）

利右衞門　オウ、お浪だ、お前よく達者でゐてくれたなア。

（ト、目を數瞬く、お浪は合點の行かぬ顏をして。）

お浪　お前さんは。

利右衞門　わたしは、（ト、一寸躊躇ひかけて）わたしやアね、お前の本當の親父だよ。

お浪　エ。

（ト、ヂッと視る。）

利右衞門　お前が丁度七歲の時、據ない譯があつて、泣きの淚で別れた親だ、お前にだつて、些とは見覺えがあるだらう、能うく顏を見ておくれ、お前が七歲の暮だつたのだよ。

（ト、側へ寄つて顏を出し、自分もヂッとお浪を視ると。）

お浪　然うですかねえ。

（ト、ばかり、あとは默つて、利右衞門の樣子を見てゐる。）

利右衞門　今突然に、こんな事を云つたつて、藪から棒で得心も行くまいし、何處の氣違ひ老爺が何を云ひに來たかと、聞く氣にもなるまいが、委く話せば證據もあるし、思ひ當る事もあるだらうし、譯は悉皆分かる筈だ、（ト科）何うもこんなに日の暮れ方に來て、忙なからうが、四半時とは手間は取らせない、何處か一寸、御本堂か閑

山堂のお縁先でゝも。

（ト、云ふを押へて。）

お浪　マア待つて下さい、わたしはあの小屋に出てゐる、見せ物の女で、あなたのやうな立派な旦那衆に、親だの血族(みうち)だのと云はれる身分ぢやありませんよ、何かお間違ひぢやありませんか。

利右衛門　サ、突然(だしぬけ)だから、然うお思ひも道理(もつとも)だが、わたしは武藏屋利右衛門と云つて、以前は照降町で、相應に暮らしてゐた下駄屋渡世、それが、二度も貰ひ火で丸燒になつて、到頭箸一本の餓乞食、家内はそれを氣病みで死ぬ、切迫詰まつて、一人ッ兒の大事なお前を、大門通りの金物屋へ養女にやると、二年ばかりの後に、其の家も亦微祿して、終ひには、一家殘らず行方知れず、手放してからもう十八年。

（ト、懐から手拭を出して、涙を拭くと。）

お浪　マア一寸お待ちなさい。

（ト、云ふと其のまゝ、ズツと小屋の方へ行つて、古い床几を一脚持つて來て、今居たあたりに置き、腰を掛け。）

お浪　兎に角お掛けなさいましな。

（ト、云ふに利右衛門は喜んで、涙を拭き拭き、腰を卸し。）

利右衛門　何しろ、今云ふ通りの永の間、たつた一人の實の娘の行方は知れず、雨につけ風につけ、何うしてゐるかと思つてゐる中に、わしは仕合せと運が直り、今では人形町に、元のやうな店を張つて、奉公人の二三人も使ふ身になつて見ると、尚戀しいは娘のお前、コレお浪、お前の顔が何卒(どうぞ)見たい、成らう事なら一緒にゐたい、何樣な暮しをしてゐるか、何樣な亭主を有つてゐるか、息のある中、何うにかして、一度は逢ひたい見たいものだと、出入りの者は固より、知つてゐる程の者に、眞事空事打交りにお前の事を話して置くと、ねえお前、

お浪　エ、。

利右衛門　花川戸の甲羅問屋の番頭が、此のお盆に、店へ來ての話に、一昨日芝のお閻魔樣の傍の曲馬小屋で見掛けた、二十二三ぐらゐの、大層美しい太夫で、三荘太夫の安壽の姫と、小栗の照天姫になつたのが、何うもお前さんの面差(おもざし)そつくり、それに豫々聞いてゐる、左の耳朶(みゝたぶ)の下の大きな黒子が目に着いたので、直ぐ來て知らせようと思つたが、店が忙しいのでつい後れた、と、マア斯う云ふ話さ、お浪、お前のそつちの耳の下に、大きな黒子のあるのが、大事な證據だ、阿母からの親讓りだ。

お浪　それから何うして、今日來たんです。

利右衛門　サア、聞いたのが遲かつたので、駈付けた時に

はもう、曲馬は何處へ行つたやら分からない、散々に手を盡くして尋ねた末が、田舍へ出たらしいと聞いたばかりで、それなり梟、ア、よく〳〵緣のない事かと、落膽してゐると、昨日此のお寺へお參りに來た、裏の踊の師匠の阿母さんが、女曲馬の看板娘で、これから照天姬で出ると云ふ綺麗な子が、外から見えるところに居たのを熟々視たが、左の耳の下に黑子がこれ〳〵と、敎へてくれたのが、今日のお午過ぎ、サアそれこそと、早速駕籠で飛んで來たが、三里の上もありさうな此の田舍、危く又逢はずにしまふ所であつたのに、それでも漸く斯うして逢へた、よく無事でゐておくれだ、見違へるやうに綺麗になつたが、家業柄、嘸辛い事であつたらう。

（ト、嬉淚を拭きながら歎く。）

お浪　さうですか、成る程然う伺ふと、些とは覺えもあるやうだし、證據の黑子も耳にはあり、身の上談だつて、今の親父に每々聞かされてゐますから、あなたが實の阿父さんに、それは違ひありますまい。

利右衛門　違ひない段か、わしが何でお前の顏を見忘れよう。

お浪　だがね、あなた、そんなに今になつて、何故わたしに逢ひたがるんです、頑是ない子供の時に、赤の他人にくれてやるほど氣が强かつたのに、牛にも馬にも踏まれない、（ト、云ひかけて笑ひ出し）踏まれるどころか、馬を玩物のやうにして、其の日其の日を送つてゐる、詰まらない家業の見せ物の女を、何で今更戀しがるんです、エ、お前さん自分が年を取つたので、心淋しくなつたのか、それとも、暮しに不自由がなくなつたので、食ひ潰しの一人や二人は、有つても身上に障らないと、それで呼び戾す氣におなんなすつたのか、一體何うした心持なんです。

（ト、丸で他人相手のやうに、冷やかに云ふ。）

利右衛門　サア、然う云はれると面目なくつて、返事の爲ようもない譯だが、何を云ふにも貧の苦しみ、親子が餓ゑて死なうより、切て子供は人並にと。

お浪　マア待つて下さい、子供を助ける爲か、足手纏ひをなくなす爲か、わたしにやア能く分かりませんが、今の親父、あの曲馬の親方ですね、あれが、金物屋からわたしを貰つて、仕込んだのは九歲の年、そりやア斯樣な家業ですもの、打たれたり抓ねられたり、生疵の絕えた事はなく、無理往生に藝を仕込まれて、女だてら、馬の背中に踏ん跨がつて、馬鹿馬鹿しい芝居の眞似事、唯一通りの面の皮で、出來る仕事ぢやありませんよ、だが、習はうより馴れろとやらで、十七の年からは、座頭の立女形さ、それに、親の光りで睨みも利くし、此頃ぢやア爲

たい三昧、晝夜通しの忙しい時だつて、一日に四疋も乘りやア、大威張りの天下樣で、藝の外の時は、そりやア寢ようと起きようと、誰も何とも言ひ手は無し、こんな仲間は何家業でも、本當に氣樂此の上なしですよ、乞食も三日すりやアで、堅氣の人に、此の味は分りますまい。

利右衛門　それではお前は、今の身分で結構なのかい。

お浪　エヽ、住めば都で、馬糞臭い裏店にゐても、手足は勝手に伸ばし放題、會席こそ食べられないが、店屋物だつて好き勝手さ、人間慾を云ゃア限りはありませんよ。

利右衛門　然しお前、女の身の納まりには、堅氣の方が好くはないか、何時まで綺麗で若くつてはゐられない、わしの手元へ戻した上は、これまでの償ひに、何樣にでも出來る限りの樂はさせるよ。

お浪　それではわたしを、あなたの家へ連れ戻さうと云ふんですね。

利右衛門　永年の養育料を償つて、話し合に賴んだら。

お浪　そりやア駄目でせう、今になつて千兩萬兩積んだつて、鍾馗の喜平次と云つては、香具師仲間に名の通つた確り者の今の親父、金は有るし、小理窟は云ふしで、武藏屋さん、此の娘はお前さんが他人へ遣つて捨てた人間、わたしやア他所の人から買ひましたと、キッパリ云ふに違ひありません。

利右衛門　エ、金で買つたと。

お浪　エヽ、金物屋から、十兩で買つたわたしだと云つて、證文を見せられた事が何度もあります。

利右衛門　然うかエ。（ト、思ひ入れ）然しさうは云つても、わたしがお前を喜平次さんとやらに、金で賣つた譯ではなし、何と云つても親は親だ。

お浪　左樣さねえ、親には違ひありますまいが、子供の時に打遣られたお蔭に、こんな家業になつたわたし、途中三度で打付かつても、誰だか知れないお前さんに、今逢つて今親だと云はれても、わたしやア何うも、親と思ふ氣になれませんね、犬猫だつて宿なしになりやア、我が子を咬へて歩くのが情愛、お前さんが一生懸命に働いて、仕上げる元氣があつたのなら、生みの我が子の一人ぐらゐ、打遣らないでも働けさうなものでしたねえ、わたしやアお芋の尻尾を嚙らされながらも、命がけの藝を覺えましたよ。

（ト、怨みがましくキッパリ云ふに、利右衛門は默つて俯く、處へ、最前より、二人の樣子を、小屋の方から伺ひゐたる曲馬の樂屋の衣裳係牛次郎（二十四）小意氣な男、着附角帶雪踏穿きにて、近寄り來り。）

牛次郎　お浪さん、親方が待つてゐますぜ、もう跡片付いてしまつたんで。

お浪　然うだらうね、今急にわたしに逢ひたいと云ふ人が、江戸から態々見えたもんだから（ト、立上り）では、アノ、あなた、又その中ゆつくりお目に掛かりませう。
（ト、云ふに慌てゝ立上り。）
利右衛門　まだ言ひたい事は澤山ありますが、もう日も暮れ暮れだし、お仲間がもう引揚げとあつては、（ト、思入れ）それでは又今度ゆつくりの事として、それで今の住居は。
お浪　鮫ヶ橋の千日谷と云ふ場末ですが、馬小屋のある家と近所で聞けば、類がないから、一遍で直ぐ分かりますよ。
半次郎　サア〳〵早くしなせえな。
（ト、云ひながら手を引張る。）
利右衛門　では、今日はこれでお別れとしませう、何れ明日にでも尋ねて行つて。
半次郎　用があるなら朝來なせえ、白河夜舟で、御在宿は請合だ。
利右衛門　足を留めて濟みませんでした。
（ト、利右衛門は、悄然と、銀杏の後ろより下手へ入る。）
半次郎　何だエ今のは。
お浪　昔のわたしの親だとさ。
半次郎　へエ、お前の親父、それぢやア取戻しに來たとでも云ふ譯か。
お浪　お手の筋。
半次郎　立派な町の旦那衆らしいから、歸りやア早速お嬢様だな。
お浪　龜の尾に脉のあるお嬢様も馬鹿々々しいや、そんな目に遭はされて堪るものか。
半次郎　それからお婿様の御穿鑿と。
お浪　チヨツ、又お株で、手前勝手な嫉妬が始まつた。
半次郎　取越し苦勞も誰ゆゑだ。
お浪　お姫様、大層お美くつてゐらつしやるからねえ。
半次郎　又逸かさア。
（ト、寄添つて、手を取り床几に並んで掛け。）
半次郎　オイお浪、其の口前だから、家の鍾馗も目尻を下げて、お前の云ひなり放題だ、おらア番付指を咬へて見てゐるんだ。
お浪　贅澤をお云ひでない、小僧の癖に、人がつい飲ひ醉つてゐた時に、無理往生な事をしてさ、それを此方が薄見ッともないと思つて、默つてゐてやりやア好い事にして、ずる〳〵べつたりに巫山戯て置きながら、親父の事で妬くなんて、それは外道の逆恨みだよ。
半次郎　おれは小僧で外道かエ。

お浪　お黙りよ、一つ年上の女房は、金の草鞋で捜しても無いものなんだよ、男の二十四はまだ小僧さ。
牛次郎　其處で、外道の方は何うしてくれるんだ。
お浪　さうさね、外道にしちやア、些とばかり好い男さ。
牛次郎　ヘン、親方にやア首ッ丈の癖にして。
お浪　親方とお前さんとは、技倆(うで)が違ふよ。
牛次郎　そんならおれを何故パイにしねえ。
お浪　年寄ばかりも、氣が變らないからね。
牛次郎　人を甘く見切つてゐやがらア。
お浪　首の繋がつてゐるのは、誰のお蔭だエ。
牛次郎　切り首を投出すと、早速馬に蹴飛ばされるか。
お浪　此の人は、又下らねえ無駄を云ふよ。
（ト、眼の下に見て遇(あしら)つてゐる處へ、曲馬の囃子方勝藏（三十二三）同じく木戸番銀八（四十位）同じく市作（三十四五）何れも着流しに三尺帶又は平絎などの拵へにて、小屋の後より出で來り。）
銀八　オウ、木乃伊取りが木乃伊になつて何うするんだ。
市作　太夫さん、親方は火の玉だぜ。
勝藏　サア、此の緞臺を明けて下せえ、何時までも片付かなくつて、働く者は極敗(こつぱい)だ。
（ト、床几を自暴に引張り取る、これにて二人は立上がる。）
牛次郎　勝さん、異(おつ)な事を云ふね。
勝造　さうかね。
牛次郎　働く者は極敗(こつぱい)だとか云ひなすつたが、誰か働かねえで給金を取つてゐる者が、此の小屋にゐるのかエ。
勝造　大事な親方の物を、盜み食ひする泥棒猫はゐるやうだが、遊んで食つてゐる人間は、お蔭様でマア無えやうだ。
牛次郎　ヘン、何を云やアがる。
勝造　ヘンとは何でえ、おれの方の囃子の音にやア、そんなのは無え、（ト、お浪を見て獨語のやうに）此の日の暮れる薄ッ寒い寺の地內で、好い加減にしろエ、なア銀パ。
銀八　さうよなア、人間ノッペリとは生れてえものだ。
勝造　太夫さん、お前さんは好い腕だね。
お浪　どの腕がね。
勝造　左様さ、兩手に花だから、右も左もか。
お浪　又妬き仲間の後詰が出て來たが、何でも好いから默つておいで、もう四五年も經つて、此方の云ふ目が出なくなつたら、其の時は枇杷葉湯だ、霍亂の防ぎに、澤山施しに出して上げるよ。
銀八　怖ろしい鼻息だ。
牛次郎　面ア見やがれ。

銀八　何を。
（ト、突然(やには)に半次郎の頭を擲り付ける。）
半次郎　ヤイ、何をしやがる。
銀八　伸(の)さ張(ぱ)つた事を云やアがるな。
勝造　締めつちまへ。
半次郎　何だと。
（ト、これにて勝造銀八は、半次郎と擲り合ひ摑み合ひの立廻り、市作も時々手を出すをお浪が止めると、其處を勝造が突飛ばし倒れる隙に、三人は半次郎を打倒す。）
半次郎　ヤイ、此奴等ア、殺せ、サア殺せ、殺してくれ。
勝造　好うし、望み通りにしてくれらア。
（ト、大の字になつてゐる半次郎を三人が、又打ちにかゝるを、お浪、起き上りて押止め。）
お浪　お前さん達は何をするんだ、間違ひが出來たら何うする意(つもり)だ。
（ト、爭ふ處へ、親方の喜平次（五十五六）絹物(やはらかもの)の着附に羽織、素足に駒下駄、遊人の親分樣の扮裝(こしらへ)にて、小屋の方より出で來り。）
喜平次　コレ〳〵、好い加減に止さねえか、仲間喧嘩は見ツともねえ。
（ト、目で止めると、三人は呑み込んで後へ下がる、お浪は半次郎を引起して床几に掛けさせる、半次郎はグツタリとなる。）
お浪　お前達は亂暴だね、何の根も葉もない事で。
喜平次　やかましいやい。
（ト、喜平次は突然、平手でお浪の横顔を打つ。）
市作　親方、お止しなさい。
銀八　太夫さんの知つた事ぢやアねえ。
勝造　半公、手前衣裳屋にしちやア、些と伸さ張り過ぎるぜ。
喜平次　サア歸るんだ、夜半にならア。
（ト、顏を押へてゐるお浪の左の手を取ると、お浪は默つて引ツ張られる。）
勝造　太夫さん、顏を何うかしやアしませんか。
喜平次　大丈夫だ。
お浪　本當に癇積持ちだねえ。
（ト、色ツぽい目で喜平次を見る、此の時、半次郎は床几の上で苦がつて唸つてゐる、喜平次立止まつて。）
喜平次　お前達、少し仕置が荒過ぎたな。
銀八　だつて、今日は構はねえつて云ふから。
お浪　何だつて。
（ト、聞き咎める。）
喜平次　餘計な口を敲くなエ（ト、銀八を睨め付け）お

浪、あんまり野方圖が過ぎようぜ、手前は大事な貴物だし、小せえからおれの手塩にかけた奴だから、大抵な事は大目に見て置くが、それを好い事にしやアがつて、半の野郎め、（ト、半次郎に科）お浪、手前おれを何うする意だ。

お浪　何うするつて、サアとなりやア、戦場萬馬往來のお前さんだもの、わたし見たいな餓鬼にやア、到底も歯は立たせない癖に。

市作　親方、早く歸つて寢つておくんなせえ、先刻の煮込みぐらゐぢや、もう續かねえや。

銀八　太夫、半次が聞いて、倫唸つてゐやすぜ。

喜平次　何處まで世話を焼かせやがるんだ、オイ、誰か馬を一匹持つて來い。

（ト、云つて置いて、床几の半次郎を覗く、お浪はまだ喜平次に手を取られてゐる、此の頃舞臺は大分暗くなる。）

半次郎　ウム、お浪、切ねえ、何うかしてくれ。

喜平次　大束な事を云ふなエ、苦しけりやア苦しいやうに、神妙に唸つてゐろ、今馬の背で連れて歸つてやる意だ。

銀八　親方、此奴を乘せるのかエ。

市作　此の様子ぢやア乘れますめえ。

勝造　衣裳附がお馬と來りやア、それこそ曲馬だ、危えもんだ。

喜平次　だと云つて、歩きやアしめえ。

（ト、云ふ處へ、小屋の後より、曲馬乘りの女お勇、（十八九）同じくおたよ（十三四）の兩人、何れも襟附きの着附、下駄穿き、お勇は鼻唄に義太夫を語りながら、一匹の裸馬を曳き、おたよはカンテラに灯の點いたいを持つて、出で來り。）

お勇　スツクと立つたる男振、見紛ふべくもアラ嬉しや、小栗様にておはすかと、照天は足も地に着かず。（ト、皆々の處へ來て）オヤ、半さん、何うお爲だ。

おたよ　唸つてゐるのねえ。

（ト、覗き込む、喜平次お浪の手を放し。）

喜平次　お浪、手前其の病人を巧く乘せてやれ。

お浪　大丈夫か知ら。

喜平次　門前の小僧だ、何うにか獅嚙み付いてゐりやア、落ちもしめえ。

お浪　さうさねえ。

喜平次　馴染効に、手前端綱を取つて、介錯してやれ、サア、みんな手傳つて、此奴を乘せろ。

半次郎　障つてくれるな。

（ト、又唸る。）

勝造　口の減らねえ野郎だな。

銀八　ヂッとしてゐろ。
（ト、勝造、銀八、市作の三人して、半次郎を、床几から馬の背に乗せろ、半次郎は俯伏になつて唸ろ、喜平次思入れ。）
喜平次　もう眞ッ暗になつてしまつた、サア、お前達は早く出ねえ。
勝造　それぢやア、此方の事は、太夫に宜く賴むとしよう。
お勇　オウ、滅法寒くなつて來た。
おたよ　わたしやア、お腹が空いて來た。
（ト、お涙の手へカンテラを渡す、これにて一同は、急ぎ小屋の後へ入る中に、銀八、市作は床几の兩端を持つて提げて行く、薄く風の音、近く鳩の聲。）
喜平次　お浪、先刻來た商人の旦那らしい人は、ありやア何だ。
お浪　わたしの本當の阿父さんですと。
喜平次　ナニ、親父だと。
お浪　下町の下駄屋さんださうです。
喜平次　お前、逃出して行きやアしめえな。
お浪　お前さんぐるみ、夫婦養子にしてくれりやアね。
喜平次　手前此頃物凄くなつたなア。
お浪　仕込み手が附いてゐるもの。
喜平次　然うかノ、（ト科）處で其の仕込み手の片棒のこれは、向後どうする氣だ。
（ト、半次を見ながら、馬の端綱を取上げる。）
お浪　何だねそんな、お前さんの小指にも足りない相手を。
喜平次　イヤ然うでねえ。
（ト、云ひながら、窖と綱の先にて馬の前足を拂へば、馬は突然一跳して、前足を揃へて折る、半次郎は落馬してウムと苦しむ、馬又跳るを喜平次押へる。）
お浪　アッ、半さんが敷石の上へ。
喜平次　オウ、逆さに落ちた處を、踏まれたな。
（ト、ヂッと覗き込む、お浪カンテラにて、半次と喜平次とを見て。）
お浪　親方。
喜平次　ウム。
お浪　お前さんが仕込んだだけに、鮮に自由になるね。
喜平次　本當に手前は素直だ。
（ト、空惚けて云ふ。）
お浪　何アにね、人間よりも曲藝の上手な、馬の方がさ。
（ト、云ふ時、銀杏の木蔭より、最前の利右衞門が、窖と二人の様子を覗く、喜平次は、息の絶え行く半次郎を見ながら、四邊へ思入れ、利右衞門慌てゝ引ッ込むと、喜平次は、其の方を透かして窺ふ途端に、お浪と顏を見合はせるを、木の頭。）

お浪　何しろ、お園をしませうね。

（ト、半次郎を見て思入れ、此の時、正面門の上の方に、夕月の影淡く出で、上手より鉦の音、衆僧の讀經の聲聞えて、舞臺暗きまゝ。）

――靜かに　幕――

女夫曾我

役名

大磯の虎
曾我の十郎祐成
同　五郎時致
柚野　里の娘
柴　同
糸　同

井出の里の場

本舞臺一面に所作舞臺を置き、正面は富士を見たる背景、舞臺少し下寄りに、一本の切出しの松の大木、此の上の方に捨石一つ、少し後へ下げて上下に千草の切出し、舞臺上下の見切りは、所々に草の花をあしらひたる秋の野原、總て駿州富士の裾、井出の里の體よろしく、上手の正面には長唄の山臺、下手には少し斜に常磐津の山臺を出し、薄き風音にて、幕明く。

（ト、直ぐ長唄になる。）

長唄〽さるほどに、大磯の長者が娘虎御前は、幾年馴れし祐成に、別れて後の悲さを、何に慰む方もなく、翡翠の飾り剃り下し、花の袂に似もやらぬ、墨の衣の袖よりも、短き人の一と盛り。

（ト、好き程に上手より、白の着附に墨染の法衣、水色の頭巾を冠りし大磯の虎、水晶の珠數を持ち、草履穿きにて出で來り。）

虎　露とのみ、消えにし跡を來て見れば、尾花が末に、秋風ぞ吹く。

（ト、我が詠み出でし歌を、繰返して口ずさむ心にて言ふ。）

常磐津〽誠うき世の習ひぞと、思ひ捨てゝもなかなかに、日脚冷たき富士の裾、井出の野末に訪れて、曾我殿原が亡き跡を、知らせ給はば教へてと、尋ぬる聲の優しさに。

（ト、虎、科ありて、下手を見込み手招きすれば、模様物の着附に帶を結び下げにし、片褄からげし里の少女、柚野、柴、糸、の三人、心々に晒布の手拭を持つて出で。）

柚野　申し、お前は、祐成時致二方の、由縁にても在すかや。

柴　年まだ若う美しい、尼の御身の唯一人。
糸　テモ悼はしのお姿や。
袖野　もしや噂に聞き及ぶ。
常磐津〽十郎殿の御馴染、彼のお方にておはすならし
（ト、餘の二人と顔を見合はせると。）
柴　井出の館の在りし跡。
糸　其處よ、此處よ、委う教へ。
三人　まゐらせん。
長唄〽人の情の嬉さに、忍びも敢ぬ涙の色。
（ト、虎はよろ／＼と下がりて、捨石に腰をおろす。）
常磐津〽偖は君よの、あれあのあたりこそ、敵工藤左衛門殿の。討たれたまひし假屋の跡〽一ト際高群薄の、茂みが中の彼處にて、兄なる殿は御き最期〽さて又これなる一ト本の、老木の松の葉重ねや、枝を重ねし此の下に、御二方の亡き骸は、世にも淋う隱されたり。
（ト、糸、柴、袖野の順にてよろしく振りあり。）
常磐津〽よく／＼御覽ぜ、敵味方の、倶に命は野末の露の、そも果敢なき物語、御笑止さよと里人も、そゞろに袖をぞ濡らしける。
（ト、三人は領き合ひて、下手へ入る。）
長唄〽虎は涙の隙よりも、立寄り見れば淺ましう、僅徒と生ふる野の草に、跡は定かに見えねども、地に伏し轉に高き土こそは、亡き其の人の塚ぞと、地に伏し轉び伏し沈み、歎くに就けて思ひ出す〽後にて聞けば同胞が、鎌倉殿の富士野の御狩、見物せんと駒を驅り、行くや湯本の矢立の杉、門出祝ふ心とて、射れば芽出たう兄弟と、十郎殿は一の枝、弟の殿は二の枝に、見ん事射立てたまひしが、これも定まる約束か、一二の枝の隔てのまゝ、二人處を隔てつゝ、過ぎさせたまふ悲さよ。
常磐津〽綯る思ひは李環の、苦き糸の亂れ心。形なけれど幻に。
（ト、これにてドロ／＼、舞臺少し暗くなると、虎は恍然と、切出しの草の後に倒れる。）
常磐津〽うつし世の、姿は曾我の兄弟、
（ト、舞臺元の明るさになると、バタ／＼にて下手より、縞子地に蝶の縫模様の着附、丸絎の搾への、曾我五郎時致、素足にて駆け出るを、着附羽織袴姿の同十郎祐成、後より續いて追つて出で、入れ交つて兩人屹と見得。）
五郎　敵に會ふも暫しの後。
長唄〽實にや三千年に、一度花咲き實るなる、西

王母が園の桃、優曇華よりも珍しや。
常磐津〽其の優曇華を拜みて手折れと云ふなれば、
それに譬ふる怨敵は、拜みて討てや。
五郎　兄者人。
十郎　オウ面白し。
常磐津〽本懷、今夜を過ごすまじ。
長唄〽思へば昔兄弟が、五つや三つの頃よりも磨き立てたる心の刃、十八年の月と日の、今日まで如何に永かりし。
十郎　鬼王道三に形見を渡し。
五郎　曾我二宮の方々に。
十郎　暇は告げぬ。
五郎　いざさらば。
常磐津〽此の袖濡らす五月雨の、雲間も知らぬ夕こそ、神や佛の導きなれ、よしや祐經、何千騎の中に隱るるとも、逃がしはやらじ。
長唄〽二人が此の世の思出には、刃向ふ者共追つ散らし、太刀の目釘の續かん限り、命限りの働きして、名を後代に留むべし。
常磐津〽大父の敵御寮にも、友切の味振舞はんと、勇みに勇む五郎が念力、力足踏み行くあとへ、
(ト、五郎は上手へ駈け込むを、十郎續いて追はんとする時、ドロドロにて、舞臺少し暗くなる。)
常磐津〽これも宿世の緣にや、まだ十七の春淺き虎が色香のこぼれ梅。
(ト、十郎が眼の前へ、着附前帶遊女の拵への虎立出でゝ一寸止めると、舞臺元の明るさに戻る。)
常磐津〽やがて櫻の盃に、唇觸れて初戀に、醉ふた此の身の嬉さは、逢ふ夜の度に言ひ交す衾の中の睦言の、それも三年の月や雪、積るは思ひ解くるは下紐、ほんに女子の果報ぞと、喜ぶかひもなやましの、枕の上の時鳥。
(ト、虎は十郎を相手に、色模樣よろしく。)
虎　あの夏山に鳴く鳥も。
常磐津〽心しあらば、物思ふ身には聞かせそ、一ト聲も。
十郎　其の一ト聲を別れにて。
常磐津〽強面の情、言の葉も、散り散りなれや非出の秋、あらいとをしの我が夫と、呼ぶも現か幻か、深き契りの影消えて、殘るは袖の露ばかり。
(ト、これにて又ドロドロ舞臺暗くなりて、十郎は足早に下手へ入り、虎も後より追つて入ると、下手にて、最前の里の少女の聲聞える。)
柚野　あの聲は虎御前。

柴　祐成殿を呼ばふ聲。
糸　いとしやなア。
長唄〽既に其の日も夕さりて、鐘の音寒く聞ゆれば、松の葉摺れもいとゞ尚、哀を添ふる草の原、虫の聲々、いろ〳〵の花も手向よ。
(ト、虫の音聞え、三人は下手より出で來りて。)
袖野　あれ〳〵、尼御前は草の中に。
柴　伏し沈みて、おはすよの。
糸　こなた〽御座れ。
三人　日も暮るゝ。
長唄〽あら恥かしの迷ひやな、戀しと思ふ心より今目前二方の、姿を見しは斷ち難き、輪廻の羈、さりながら、切めて少しの慰めと、これをいよいよ觀念の、便りとなして同穴の契りの誠を果すべし。
(ト、虎は最前の尼姿となりて、松の立木の蔭より出で。)
虎　一つ蓮に座を並べ。
常磐津〽今生後世の二世の緣、
虎　必ず誤まり申すまじ。
常磐津〽盡きぬ名殘を、さらばやと、心強くも夕月に、任せて返す踵の跡。
三人さらば。
常磐津〽誠の道に久しくも
長唄〽遺しけるこそ。
常磐津
長　唄〽殊勝なれ。
(ト、虎は上手へ行きかゝる。三人の少女は下手に並びて見送る形、此の模樣よろしく、薄く風音、低く鐘の音をあしらひて、

――静かに　幕――

五段目（一幕）

役名

斧定九郎
猪與市兵衛
早野勘平

山崎街道の場

本舞臺一面の所作舞臺、正面上下の見切とも、柔かく明かるき夏の野山の景色、此の前正面少し上寄りに、繪模様に拵へたる切出しの掛稻、前に百緑(ひやくろく)の捨石、掛稻の上手には、同く切出しの藪疊下手には、やはり切出しの松の立樹一本、これより下に、長唄連中の山臺、上手床の下に、竹本連中の山臺、總て假名手本忠臣藏五段目山崎街道の道具らしき飾付よろしく、雷鳴夕立の鳴物にて、幕明く。

（ト、直ぐ竹本の淨瑠璃になる。）

竹本〽餓ゑたる者は食を選まずと、譬に洩れぬ水無月(みなづき)や、二十九日の闇の夜を、切れ切れに裂く稻妻に、連れて轟くはたた神、眞(ま)ッ黒(くろ)姿の定九郎。

（ト、上手より、黒羽二重の單衣に白博多の帶、朱鞘の大小、吊張(きれは)りの綺麗なる蛇の目の傘を翳したる斧定九郎、いつもの通りの尻端折にて出で、舞臺眞ン中に止まり。）

定九郎　此の街道を稼ぐ追剝でえす、今こそ斯様な業體なれど、以前は鹽冶(えんや)の一番家老斧九太夫が一子定九郎、親に似ぬ兒の色白に、生まれ付いたる効もなく、心を懸けたおかるめは、愛嬌もなく跳付けの、果は館のドサクサ紛れ、あの勘平めと淨瑠璃の御厄介。

竹本〽主を見眞似の此の方が鬱憤(うつぷん)の、遣り場はお極まり酒と色。

定九郎　身を持崩せば、親馬鹿が。

竹本〽躾(しつけ)の惡さは棚へ上げ、倅ばかりの罪科(つみとが)の様に勝手な野暮理窟、おのれは強てのどめ込みで、祇園島原撞木町(しゆもくまち)ゴンと撞く鐘(ね)の音に、かあいくもない明鴉。

定九郎　呆れた籠破りだが、元はと云へば主人が阿呆、物も知らぬに安請合。

竹本〽大事の役目を引受けて、事を壞して我が身は切

腹、其の相伴に家來は散り散り、亂離骨灰。

定九郎　其處で立派な道樂者、此の定樣が、追落しになるくらゐは何とお立會。

竹本〽あんまり無理でも、コレマ、御座るまい。

定九郎　ヤ、何彼と云ふ中、雨も上がつた、ドリヤ一網張ると爲ようか。

（ト、傘を窄めて、捨石に腰を掛け、火打て煙草を喫み始める。）

大薩摩〽夫れ一陰の起る所、金風生じて鷹初めて擊つとかや、命の際にも穢は啄まぬ鳥さへあるに、牙磨ぎて、土掘る猪の一文字、木の根草の根踏み拉き、息を限りの鼻嵐、飛びつ轉びつ駈けたるは。

（ト、鳴物になり、昔の儘の形にて、喉から役の人の顔の直に見えるやうに拵へたる縫ひぐるみの猪、向ふより一散に駈出で、舞臺に入り。）

猪　申し申し定九郎樣、お助けお助け、お慈悲お慈悲。

大薩摩〽慌たゞしくぞ見えにける。

（ト、猪は前足を合はせて、無闇に定九郎を拜む、最前より唯事ならずと思ひ居し定九郎は、飛上がり。）

定九郎　エ、吃驚した、突然に何の事だ。

猪　命を助けて下さいまし。

定九郎　おれの名を知つて、然う云ふこなたは。

猪　此のあたりではお馴染の、ハイ、わたしや猪で御座ります。

定九郎　何だ、猪だ、（ト、後へ下がり、ジッと見て）成程なア、暗闇の牛でないだけ見えはするが、ヘボ茄子の化物のやうな其の猪が、おれに命を助ろとはエ。

猪　話せば短い一通り、お聞きなすつて下さいまし。

定九郎　いやに人懷つこいモヽンヂイだな。

竹本〽もとよりわたしは山崎の、山に生れた山鯨、白い黒いは言はずとも、知れた無慈悲な筒先に、追廻されて、今日の時宜。

猪　オウそれそれ、しかも相手の獵人は、以前お前と一家中、早野勘平と云ふ浪人者。

定九郎　何、勘平、とは希有な、何うして彼奴が。

猪　獵人になつたとお云ひなさるのか。

定九郎　さうよ。

猪　其の譯はね。

竹本〽所は即ち山崎の、渡し場を、一寸左へ百姓の、老父の孫と間違へろ、若い娘へ押掛け聟。

猪　夫婦揃つて食ひ潰しの、申譯に勘平めは、俄仕立のデモ獵師、此の界隈の鹿猿を、狙つて飯の種が島、

竹本〽盲滅法、無鐵砲、何處へ中たるか、逃げるにも、見當の付かぬ危さに、われわれ仲間は大騷え。

猪　恐れ入谷で御座りやす。

（ト、頭を押へる。）

定九郎　ウム、シテ其の老爺の娘と云ふは。

猪　お前もマア、血の廻りの惡い。

定九郎　イヤサ、念の爲だ。

猪　あの腰元のおかる坊。

定九郎　偖は愈、ウム、（ト、口惜き科）シタが、あの上物(じやうもの)の里が、こんな田舍か。

猪　それは野夫(やぶ)にも功の者、人は見掛によらぬが定法、あの美(うつく)しいのが男を連れ、轉がり込んで來てからの、其の仲の好さ、舌たるさ、其の忌らしさと云ふものは。

（ト、これにて猪は、定九郎を相手に、よろしく女の振。）

長唄へ落人の、見る茅の屋根、竹柱、小鍋立なら厭はぬが、當り前垂、片襷、紅は附かねど吹竹に、鬢の油の香を留めて、飯事(まゝごと)じみた勝手元。

猪　思ひ出せば二ア人(ふたり)が。

定九郎　飛んだ艶冶の御家來で。

長唄へお使先とお供先、思はぬ首尾のよしあしや、浪華近くへ東路を、上り始めの戸塚越え、足の疲もお互に、擦り擦られ、それからの、泊り泊りの旅籠屋で、ほんの旅寢の假枕、嬉しい仲ではないかいな。

定九郎　エヽ、考へて見ても腹の立つ、（ト、科）よしよし、此の意趣晴らしには、近々に其の老爺の家へ、押込に入つてやらう、勘平武藝の達人とはついぞ聞かず、鎌倉で伴内が投げられたとか云ふも噂ばかり。コレ猪よ。

猪　アイアイ。

定九郎　書物に曰く、窮鳥懷に入る時は獵師も之を捕らず、今此の眼の前へ、勘平の鐵砲が縱(よし)出ようとも、いツかなお主を撃たす事でない、安心して、サ、もつと話せ。

猪　それで悉皆(すつかり)落着きました、ところでお禮には、オツと幸。

定九郎　何か有るか。

猪　有るぞエ有るぞエ、首振合ふも他生の緣、勘平相手に押込むよりは、日本一もつと巧い事を教へて上げませう。

定九郎　それは感心、何うした案じだ。

猪　今朝此の鼻が、彼奴の家の裏の垣根、萩の根方に、一寸(ちよいと)糞をしてゐた時、聞くともなしに聞いた爺婆の話には腐れ緣の勘平を、知行稼ぎにありつけたさ、それには先立つ金の入用、僅よとばかり、現在の亭主の留守に、娘とは云へ其の女房を、内密で祇園へ五年百兩、今夜は手附を取るとの事、處で御覽じ、アレアレ、向ふから來

る小挑灯こそ、紛れもない舅老爺の與市兵衞、なりや懷に四十と五十抱いてゐるは定のもの、早速の腹癒せ、意趣返しの手附に、マアあれを取つておやりなさい。
定九郎　如何樣、これは好い事を教へてくれたが、あれが確に舅老爺か。
猪　大丈夫、勘平の日とは違ひます。獣は闇も見透しさ。
定九郎　よし、それならばおかるの身の代、戀の叶はぬ意趣晴らしに。
猪　何うも言ふ事に負惜みがなさ過ぎる。
定九郎　何であらうと、取らずに置かうか。
猪　江戸の敵を山崎で討つか。
定九郎　エヽ、惡く洒落るな、鹽冶の屋敷は、お定まりの鎌倉だ。
猪　何は兎もあれ、サア定さん、お約束だ。忍びやせう。
定九郎　定さんなぞと安く云ふな、拜んだ時に何と云つた。
猪　ヤ、大失錯、左樣なれば定九郎樣。
定九郎　ゐのしゝ、來やれ。
竹本〽忍ぶや猪の十六を、老のさかさの六十餘り子ゆゑの闇に突く杖も、直ぐなる心與市兵衞。
（ト、此の文句の中、定九郎と猪は掛稻の蔭に隱れると、與市兵衞はいつもの着附、拵へ物の笠草鞋、小田原挑灯を提げて、向ふより出來り、花道にて。）

與市兵衞　娘の身の代半金が、早速に手に入つた嬉さ、が、それにしても、一生に一度の大金を受取るに、巾着一つ持たずに行つたは貧乏人根性、眞に粗忽な恥かしい事であつたが、幸、一文字屋樣が貸して下された縞の財布、（ト、云ひかけて科）オツと無用心な夜道、コレ小判殿、何程雷樣が鳴らしやつても、臍のところを離れまいぞ、桑原桑原。
（ト、下腹のところを押へながら、舞臺へ入ると。）
竹本〽急ぐ向ふにどつちよ聲。
定九郎　老爺待て。
與市兵衞　エツ。
竹本〽思ひ掛けねば立ち竦む、前にぎよろつく眼のくり球、
定九郎　長口上は御退屈。
與市兵衞　エツ。
定九郎　斯う見とたころが四五十兩、其の懷の金を渡せ、忌と吐かせば命ぐるみ、どつちにしても取らにや置かぬ。
與市兵衞　イエイエ、それはお眼違ひ、此處に持つたは竹の皮に。
竹本〽殘した晝の握飯、暑さ中りをせぬやうと、娘がくれた和中散。
與市兵衞　反魂丹で御座ります。

定九郎　エヽ、馬鹿圖々しい口功者、斯うした時にも年寄は酒蛙つくだから強い嫌ひだ。

與市兵衛　それでもこれは眞實芳文。

定九郎　姦い、コレ此の溫氣に、午からの飯を溫めて置いたらば、懐で甘酒、鞠臭い言譯すなやい、それに又。

竹本　へ男の爲に身を賣つて、金算段の心中立て。

定九郎　其の女めも氣に食はぬ。

長唄　へ人目しのぶの褶衣、着つゝ馴れにし振袖を、引けば柳の腰元が、靡くと見せて其の儘に、夢のやうなる春の蝶、蝶々止まれ菜の葉に止まれ、菜の葉いやなら、おれの小袖に一寸止まれ、止めて止まらぬ色の道かいな、ションガエ。

定九郎　浮氣娘へ面當に、其の身の代は、おれが貰つた。

與市兵衛　そんならこなたは、何も彼も。

定九郎　猫心中の虫眼鏡、天眼通だわ。

與市兵衛　エヽ、それなれば尚の事、思ひやりもある筈ぢや。

竹本　へ親の慾目を離れても、見事生んだり鳶が鷹、何卒出世と思ふゆゑ。

與市兵衛　兄の由縁で遙々と、此の山崎から鎌倉へ。

竹本　へ士を落して奉公の、子芋の肌理の羽二重も、今は仇なれ。

與市兵衛　モシ。

竹本　へなかなかに、御殿模様の縫の糸、金糸銀糸は解れても詰まるばかりの兩袖を、濡らす辛苦の痩世帶。

定九郎　それと云ふも親馬鹿が、近所隣へ子の自慢、武家奉公を名聞に、飛んだ行儀の躾方。

竹本　へお家の掟は畫に描いた、餅をそのまゝ、ぺんたらこ。

定九郎　ぺんたらこ。

長唄　へぺんたらこ。

定九郎　あつちへ、べつたり。

竹本　へこつちへ、べつたり。

長唄　へぺちやぺちやぺちや、不義の法度はありや臼の皮、今宵杵との小手招き。

定九郎　イヨ、通り者だね。

長唄　へいつそ逆せて心中と、浮名を流す稻瀬川、戀の淵には沈みもやらず。

竹本　へ効も涙の繰言は、後の祭の神樂堂。

定九郎　馬鹿を見るのも自業自得。

與市兵衛　それぢやと言うて。

定九郎　まだまだ吐かすか、賢い奴めが。

竹本　へ懐へ手を差入るれば、老の歯茎も必死の力、嚙付

くところを押倒し、掴出したる金財布を、遣らじと縋る眞向へ、二尺八寸拝み打、幹竹割と斬付くる、處へ飛出る以前の猪。

猪　これは危い、荒療治。

竹本〽と、止めるに驚く與市兵衛、仰反り倒るゝ弱腰を、牙に掛稻打越して、難なく跳込む崖の下。

（ト、文句の通り、猪は與市兵衛を、掛稻の後へ打込む。）

定九郎　ヤイヤイ此奴、何をする。

猪　マア、お急きなさるな、向うの畠へ抛込み、命は助けてやりました。自體人間が命を惜むは、畜生の幾層倍、それに勝手な殺生好き、勘平めの鐵砲と云ひ、お前の太刀、兎角に血ばかり見たがるは、猪にも劣つた鬼畜の根性。しかも其の上色事出入、ア、人間にはなりたくない。

定九郎　コレ、變な事を云ふなよ、猪も人間も、食はう食はうで生きてゐる。それには些とお色氣も、無ければ世間が野暮になる、ところで丁度此の金で、祇園へおかるを買ひに行けば、入我我入で親方助け當人助け、身の代金の半分は、直ぐ帳消しになる算盤だ。

猪　理窟は何うでも附けやうさね。

竹本〽互に顔を見合はせて、笑ふ聲音の眞ン中へ、ドンと飛來る二つ玉、双方一度に倒れ伏す、猪撃止めし早野勘平。

（ト、文句の通り、猪は舞臺の眞ン中へ、定九郎は上手へ倒れると、向うより、いつもの拵への早野勘平、化粧蓑、鐵砲を持つて走出で、花道よき所にて、闇い夜道に躓く科、よろしく立止まり。）

勘平　今度こそは確に手ごたへ、先づこれで今日の立ち前になつたと云ふもの、（ト、探り探り舞臺へかゝり）然しなア、此の時候では、肉はもゝんが屋でも下さるまい、が、マア好いわ、皮は剝いでさへ置いたら、巾着か胴亂かに掛けもしようし、肝は藥種屋へ賣れば積の藥。

（ト、此の中、定九郎は息を吹回して、徐々と起上がりながらも、何處か玉に中つた思入れにて、苦しさうにホッと息。）

定九郎　ウム、あの聲は、戀の敵の勘平だな、誰も聞き人がないと思ひ、ゐのしゝの肝を取つて熊の膽にするとは太い野郎だ。

（ト、獨語、勘平は尙も探り探り舞臺へ入り。）

勘平　ア、ア、祿を貰つた代りには、敵討もしにやアならず、と、これが侍商賣の、大晦日の總勘定、かうした今夜の殺生も、天より君に與ふる猪と、思へばさして苦にもならねど、成らう事なら世を樂に、男の側を離れた上、おかると仲好く添ひ遂げたい、最前彌五郎の言葉に

は、亡君の石碑建立の御用金、調達せよとあつたれど、仄に聞けば、御家老大星由良助殿、祇園あたりで九太夫共と、一つになつての遊興とやら、其のやうな金を自身に持ちながら、獵人風情のわれ等へまでも御用金とは、斬取強盜せよとある指圖もおなじ押付け業、ア、下ッ端には何がなる。

定九郎　ぐづぐづ云ふな、ヤイ勘平。

勘平　ヤ、然う云ふ聲は。

定九郎　斧定九郎だ。

（ト、これにて勘平透かし見て。）

勘平　オウ、何うして此處に、不忠者めが。

定九郎　不義者めが。

勘平　何と。

（ト、身構へる。）

定九郎　擬勢を張るなよ、お互だ、怒るな怒るな、腹形が惡くなる、だがな勘平、折角の其の樂みのお相手は、貴樣の留守に祇園町へ勤め奉公とは知るまい知るまい。

勘平　エッ。

定九郎　コレコレ、然う一々肝を潰すな、それも熊の膽に賣られるぞ。

勘平　無駄を云ふな定九、それではあのおれの女房が、あのおれのおかるが祇園町へ、（ト思入れあつて、氣を變へ。）ハヽヽヽヽヽ、惡い串戯だ。

定九郎　ア、薄のろだなア、舅の爺イも婆アめも、おのれ等二人のこつてりさに中てられて、切てはこれまでの食ひ雜用でも取返さうと、我が娘だけに遠慮もなく、何うせ疵物安く手を拍てと、今日百兩で見切つたのだ。

勘平　ヤアヤア、それは眞の事か。

定九郎　男山の八幡を證人に立てゝも。

勘平　ウム。

定九郎　御自慢のおれのおかるも、詰まりはやッぱり親のおかるで、相手嫌はぬ枇杷葉湯、惜いものだな、勿體ないな氣が揉めるだらう、無理アねえ無理アねえ。

勘平　だが然し、こなたそれを何うして知つた。

定九郎　猪に聞いた。

勘平　何を吐かす、（ト、苦笑）オウ、時に猪と云へば、今手ごたへの。

（ト、又急に探り始める。）

定九郎　キヨトキヨトするな、玉はおれに中つたのだ。

勘平　エ、ッ。

竹本　へと吃驚、俄の敗亡。

定九郎　ヤイ。勘平の人殺しめ、（ト、合方になり）一體貴樣と云ふ者は、見掛によらぬ非道い奴だぞ、腕に覺えもない癖に、晝夜闘はぬ飛道具、猪と間違へ人間を、擊

つとはよくよく狼狽へ者、其の頓興な料簡では、世間の義理と外見半分に、主人の仇も討ちかねまいが、鹿猿兎の念だけでも貴様ろくな死にやうは必としないぞ。

竹本〽怨は道理と聞きながらも、悔んで返らぬ身の過誤、勘平は胴を据ゑ。

勘平　こなたが執心のおかるは此方へ、其の上に又命まで、貰ふも因縁、前生からの敵同志、然し定九郎、こなたを撃つたは全く過失。

長唄〽そもや屋敷を後に見て、氣も戸塚はと道行の、夜風も肌に吉田橋、連れは縮緬の富士額、手に手を鳥の噂より、狭い世間の鎌倉を、捨てゝ鍬取る賤が宿、此の山崎に身を忍び。

定九郎　爲う事なしの、其の日稼ぎ。

竹本〽こんな縁が唐金の、獅子の番の差向ひ、鼻突合はす朝夕に、看付ける缺點の泣き黒子。

（ト、定九郎よろしく振。）

勘平　苦勞さすのも誰が業ぞ。

長唄〽屋敷勤めをした故に、機は織れねど御家流、文をやる手の代りやら、讀んでやるのが賃仕事。

勘平　其の手助けの山狩に、飛んだ粗忽もたまの事。

竹本〽かう斯うなつたか因果ぢやと、今のこなたの斷末魔、觀念してとばかりにて、途方難儀に見えけるが。

（ト、勘平當惑の科よろしくあり、此の中、定九郎は、何處も身體に負傷のないに自然と心づきて、驚き喜び猪も此の頃起上がりて、玉に中りし兩足に、切々と唾を付けてゐる、勘平は闇の中とて氣も着かず。）

勘平　それにしても、捨て置かれぬはおかるが身の上、まさかに然うとも思はれねど、舅姑達の此頃の樣子、氣に懸らぬ事もない、何にもせよ、直ぐに戻つて一詮議。

定九郎　其の事袷に單物、此の一張羅が經帷子。

（ト、今にも死にさうな聲を出す。）

勘平　南無阿彌陀佛。

猪　うぬ、人殺しめ。

勘平　エッ。

（ト、鐵砲と蓑を探り取つて、急ぎ下手へ行かうとするを。）

猪　ヤイ、突殺してやる、待ちやアがれ。

（ト、一寸支へる體に障り。）

勘平　ヤ、、こりや猪。

竹本〽ハッと思へど、眞つ暗がり。

（ト、これより、勘平、猪、定九郎と闇闘模樣あつて、よろしく見得、定九郎は舞臺眞ン中にて、財布に手を入れ、ニッタリと思入れ。）

定九郎　久し振の五十兩。
勘平　定九郎か。
定九郎　ウヽン。
　竹本〽息は絶え絶え、舌舐り。
　（ト、定九郎急に又苦き息づかひ、財布の紐を首に掛ける。）
猪　さうだ、昔權現樣逃げるが勝だ、長居は恐れ。
　（ト、跛を曳き曳き、下手へ行くと。）
勘平　些とも早く、女房の顔。
　（ト、後より、鐵砲にて猪を探り當てゝ押退け、入れ交る。）
　竹本〽猪より先へ一散に。
定九郎　ヤ、まるで夢中だ、アハヽヽヽ。
　竹本長唄〽飛ぶが如くに。
　（ト、勘平は急ぎ向うへ入る。猪は後退りして、定九郎に突當り、其のまゝ縋ると、定九郎はこれを庇つて向うを見込む、此の模樣よろしく。幕。）

（昭和二年八月中旬稿）

右の所作事は、一體ならば、竹本と淸元か常磐津かの掛合ひになるべきもので、長唄では些と見當違ひであるが、上場の實際問題が、唄を使ふのを、此の際最も便宜とした爲に、かう云ふ事になつてしまつた。これは所作事でなく、淨瑠璃にした方が、と、お思ひの仁もあらうと、卑怯ながら申譯を一寸。（新橋演舞場開演の前、作者。）

山崎紫紅篇

歌舞伎物語 （四幕八場）

人

越前中納言秀康
土屋左馬助昌雄　秀康の老臣
右　京　昌　吉　昌雄の子
足羽安居丸　小姓
宮　井　久　市　同
本多伊豆守富正　秀康の老臣
速水甲斐守守久
大岡十太夫　代官（實は本多佐渡守正信）
今大路道三　醫師
出　雲　お　國　歌舞伎役者
瓶　　　江　同
名古屋　山三郎　同
奴　傳　介　同
芝居の座元
峰　　　尾　土屋の室
外

場

序　幕　伏見城中庭内——返し　男山八幡社頭
二幕目　土屋左馬助の役宅——四條河原阿國の住居
三幕目　京都清水寺舞臺
大　詰　伏見城中能舞臺——同　見所——亢の舞臺

時

慶長十二年二月より三月。

序　幕

伏見城中庭内

桃の花盛り、所々に幕を引廻す。（慶長十二年二月八日のこと。）庭石に腰を掛けなどしたる武士四人語り合ふ。奥にて囃子の音す。

武士の一　いや各、今日は殿御誕生の祝儀とあつて、我等までへ酒をたまはせられ、その上無禮講の仰せ出し、御兒家を追驅けて桃の花をかつ散らいたわ。

武士の二　右大臣家から送り越された伊丹の銘酒、飲うで飲うで飲續け、一睡を催して、この敷石に寢まり申した

ら、誰れやらむ戲譃を致し居つたよ。

武士の三　はゝゝ、あつたら武士の八幡座へ、紙切を結付けられた辯疏か、我等は生得の下戸なれば、一二杯を下されたら、くる／＼と瞑眩が致いて、侍女衆に水を所望致いたら、なぶらせられて、また冷こいのを飲されたぢや。

武士の四　我等酒も參る、武邊も仕る、御主には怨切つたが、たゞ氣に入らぬは歌舞伎好き、あの囃子の掛聲は、生溫こうて腹が許られる、なでうに歌舞伎を好かせらるるぞ。

武士の一　今に始めぬ偏屈いふぞ、お身染染と見物の致さぬ程に、左樣づれの事を仰有るぢや。

武士の二　舞人は聞ゆる出雲の阿國、いかさま天人の影向か、いや天人にあの笑顏はおざらぬ、鶯の聲を出して、山雀に舞ふさまを、好かぬ男は掠鳥ぢや。

武士の三　四條の河原に小屋を建て、芝居とやらの噂は聞いたが、見るは今日が初めて、いかにも顏も美しく、舞の手も一段と見事な者ぢや。

武士の四　各はきつい執心ぢやの、我等女はいかい嫌ぢや、まいてその女づれの、びらしやらと舞ひひろぐのは疎ましいわい。

（大岡十太夫旅裝にて出づ。）

十太夫　左馬殿は何れに在すぞ。

武士の一　さいふ御身は何者ぢや。

十太夫　是は是は、某は上りの者、苗字は大岡十太夫、江戸にては輕き役を勤め居れど、もと左馬殿とは竹馬の友、久々にて對面なしたく、邸へ尋ね參りし所、御城内に出仕と聞き、猶豫のならぬ火急の旅、對面せぬも殘念なれば推して是れへは參つてござる。

武士の一　なに土屋殿に逢ひたいとや。

武士の二　御家老はあれにござる。

十太夫　いかにも左馬殿が居らるゝわ。

（十太夫行かむとす。）

武士の三　待たれい、庭先なりとて要害の繩張。

武士の四　是までの推參さへ無遠慮千萬、

武士の一　たとへ土屋殿の知邊なりとも、

武士の二　一寸たりとも御身の土足を、

武士の一　奧の方へ入れさせうか。

十太夫　むゝ、いかにも我等が無禮であつた、さらば何卒左馬殿を是れへ御呼寄せ下されたし。

武士の一　左樣に仰せあるからは、いかにも土屋殿へ取次致さう。

武士の二　さらば我等が參らう。

十太夫　なにとぞ御申次下されい。

（武士の二下場。直に土屋左馬助を伴ひ來る。左馬助は十太夫の顏を見て驚倒す。）

十太夫　左馬殿御健勝にて珍重に存ずる。

左馬　貴殿も御無事で祝着に存ずる。

十太夫　さて今回火急の用事出來、泉州まで罷り越す、久しく御意得申さぬからに、御近付にござりまするか。

武士の一　さては此人は御近付にござりまするか。

左馬　いかにも我等が竹馬の友ぢや。

武士の一　さりとは存ぜず無禮の段、ひとへに御詫つかまつる。

十太夫　我等も無禮を仕つた、御介意下されまいぞ。

（武士等は匆々に四散す。左馬助は四方を見遣り、）

左馬　思ひがけぬ本多殿、御先觸もなく、かつは怪しき姿にて、御發向は心得ぬ、先づ御奥へ御通り下さるべし。

十太夫　左馬にも似合はぬこと、人目を忍び某が、輕輩の名を假りて、都へ登り參りしは、外ならぬ天下の爲、恐れ多くも大御所より、御身への密使に擇ばれた。

左馬　誌意とあらば猶のこと、せめて是れへ。

（石上へと招く。十太夫は依然として、）

十太夫　いや／＼何處までも人目は代官の十太夫。

左馬　いかさま怪しめられては詮なきこと、さらば其儘にて。

十太夫　いかにも誌意を聞かせ申さう。

左馬　はあ。

十太夫　先づ第一に問ひたきは、大御所の仰せとあらば、如何なる難事も勤めようかの。

左馬　事新しき仰せかな、もと某は甲州生れ、大御所の御引立にて、斯様の身には罷りなる、今更の御問は、恐れながら御恨みに存じ奉る。

十太夫　むゝ、然らば御邊、秀康公へ附家老となるゝとき、大御所より仰せありたる一々は、定めて、存じ居るであらうな。

左馬　骨に刻みし御戒め、いかで忘却致すべき。

十太夫　天下の爲とあるからは、主の頭も取るべきぢやとありし仰せを何と聞きつる。

左馬　なんと。

（囃子に太鼓の刻み頭。）

十太夫　いま大阪には右府秀頼、父太閤の跡を守り、成年の後には天下の心あり、豐臣恩顧の大小名たち、大御所御存命のうちこそ、表に歸服の樣をも見すれ、御他界あらば天下の大變、根差を固めぬそのうちに、惡木は切つて退くべし、さるに秀康公、一旦太閤の猶子とならせられたる義を思ひ、兎角に豐臣を贔屓せられ、大事あらば秀頼公と一つになり、采取らむなぞと口遊まる、この君

世にあらむ程は、天下の事成り難し、小を捨て大を取るが世の順義、汝に逆事をすゝめ申すぢや。

左馬　驚き入つたる御仰せ、いかにも殿が口ずさみには秀頼公とは兄弟なり御力にならむなぞとは承はれど、大御所と大阪方と、干戈を交ふるその中に、いかでか御父君に背かせ給ふべき、その御懸念は御無用なるべし。

十太夫　我等もさありて欲しいと念じ居るぢや、さるにの、越前殿の御心には、徳川の天下を望みたまはぬのぢや。

左馬　とはまた如何なる證あつて。

十太夫　知らるゝ通り若御所は、越前殿には弟ぢや、兄としてその糸を受くること、心外なりとは思召すらめ、既に大御所と御對顔の節にも、大阪に大事あれば、餘人は知らず、我一人は味方ぞと、廣言ありしと承はる、斯の如くば徳川の、天下に仇は越前殿、兼ての仰は今この時ぞ。

（懐中より薬包を取出し、）

十太夫　これを參らせられい。

左馬　容易ならざる一大事、御仰せとはいひながら、御連枝の命を縮むる大逆。

十太夫　涙を呑んで御使に立つた佐渡が心中。

左馬　御藥を預かる土屋が心根、

十太夫　昌雄、

左馬　佐渡殿。

（佐渡、左馬助と共に嘆息す。折から囃子はキリに近づき、「やんややんや」と口々の賞め詞聞ゆ。）

左馬　人の來らば大事となるべし、見知の者も候ふべきに、あの植込の後方にあたり、いぶせき小屋の候へば、暮るを待ちて立たせたまへ。

十太夫　我は是れより大阪へ立越え、伊賀を過ぎりて歸るべし、ゆめ大御所の仰せばし、背かせたまふ事あらば我が面目も今日を限りぞ。

左馬　是非に及ばぬ、殿御落命の其夕、死出の山路に待受けて、この御詫を申上げるわ。

十太夫　逆縁ながら弔ひは、拙者が營み申さうぞ、

左馬　いや弔ひより御公達を、確と御頼み申すぞや。

十太夫　念に及ばぬ、また御邊の後も、

左馬　なに某が名跡！　主を害ふ我等が行末、その御思慮は辭退申す。

十太夫　萬事は拙者が胸中。

（十太夫下場。左馬續きて去らむとす。あなたより歌舞伎芝居のワキ役者名古屋山三郎、風流なる扮裝、十太夫と引違へて上場。）

山三　御家老樣。

左馬　そちや役者の山三郎か。

山三　御召に依り參上の山三郎奴にござりまする。

左馬　けふは大儀であつた。
山三　はあ。
（奥にて謠の聲聞ゆ。越前中納言秀康、土屋右京、足羽安居丸、宮井久市、太刀持の小姓、外に近侍を從へて上場。）
秀康　謠「遙かに人家を見て花あれば卽ち入る」はゝゝゝ、左馬これにお居やつたか。
左馬　今日の御催し、天氣もまことに美はしく、是れしかしながら我君の、御武運長久の感應、左馬恐悅に存じ奉る。
秀康　いかな英雄豪傑とて、儘にならぬは天氣と戀の道ぢやてな、麗かの天氣、身に取つては大滿足ぢやわい。
山三　御殿樣、御機嫌宜しうござりまするな。
秀康　山三、けふは一段と面白かつた、常の猿樂と事かはり、差手引手も鮮かに、近頃渡來の三味線の色音、いや腸をかきむしるわい。
山三　殿樣ひかせられまするで、歌舞伎の役者一同に、肩の身幅が廣うおじやりまする。
秀康　我等が見物するが嬉しいとか。
山三　御意にござりまする。
秀康　國呼べ。
山三　はつ。
（山三下場。）
秀康　脇几持て。
（小姓脇几を持參し「御脇几」と呼ぶ。秀康これに倚る。向うより侍一人登場。）
侍　左馬殿まで申上ます大阪の御使者速水甲斐殿、お暇に出でられました。
左馬　なに甲斐殿が暇乞とか、さらば廣間にて御對面申さう。
秀康　甲斐が戻るとか、外ならぬ一家の使者苦しうない、是へ呼べ。
左馬　はあ。
（左馬頭にて差圖を爲す。侍は承はりて退出。間も無く速水甲斐守守久登場。）
甲斐　中納言家には是れに御入候ひしか。
秀康　甲斐、遠方大儀であつたな。
甲斐　御手厚き御待遇に預り、忝けなう存じ奉る。日も西山に傾けば、最早御暇仕りまする。
秀康　右府へ宜しう傳へくれい、右京船場まで見送致せ。
右京　はあ。
（右京立つて甲斐の傍に來て目禮し、甲斐を導き去る。）
左馬　我君右大臣家へ御會釋はさることながら、當時大御

所の御代官として、當城を預り居らるゝからは、あまり御近しきは如何な者と存じ候。

秀康　其方は時折異な事を申すの、我かつて太閤の養子となり、その一字をとりて秀康と名のる、大阪城の主は我が爲には弟ぢや。

左馬　仰はさることに候へども、江戸表なる將軍家も、また御弟におはします、表は和平を裝へど心の刄に砥を合はす、怪しき沙汰の取々なるに、御謹なき時は、不測の禍生ずべきか。

秀康　天道は正しきを助く、秀忠も秀頼も、兩人ながら弟なれば、何れを何れと隔てを付けう。

左馬　とはいへ肉身の御父兄弟。

秀康　諄く申すな、兄を差置き弟を、大將軍に立てたまひし父上へは、親に別れし孱弱い秀頼、大事のあらばこの秀康は、譽を並べ死生を共に爲すべしと、豫め申置いたわ。

左馬　それまでに御意あるか。

秀康　秀康は義を忘れ得ぬ。また肉親の親兄にも、左様の識りを受けさせ得ぬわい。

左馬　有難き御意、畏りたてまつる。

秀康　左馬、落涙致したな。

左馬　はあ。

（向うより名古屋を先に、出雲阿國、同舞子數江登場。こなたよりに近侍駿紗にて控ひたゐ黄紙を持って目立たぬ様秀康の後方に控へ居る。）

山三　御殿様はあれにおはします。

お國　お召とは何の御用であらう。

山三　まづ〳〵御座れい。

（三人遙か下りて平伏す。）

秀康　おう、國か、けふは一段と見事であつたぞ。

お國　有難い御言葉、國身にとりまして冥加に餘りまする。

秀康　とりわけて西王母は面白う見た。

お國　そのお言葉に付きまして、異な事を伺ひまする様ながら、拙き舞の中央にて涙を浮めさせたまひしは、如何なる御心にては候ひしぞ、西王母の一曲は度々奏で候へども涙を見たるは始めの終り、あはれ障げも在しまさずば、其道の心得草にもなり候はむ、御物語を願ひ奉りまする。

秀康　こは思も掛けぬ事が目に入つたな、恐らく近侍も知らざる涙を、謠ひつ舞ひつの其中に、見留めえたる賢さは、誠に人の褒美もうべ、希代の名譽かな、幼きより秀康は、二人の父が弓矢を習ひ、少しは人に知られたれども、未だ天下の一人たらざるに、國こそ果報のもの、舞の手業は日本一人、女だてらに天下一の、譽を集の上ま

でも輝かしたる羨ましさ、我身に較べて身は泣いたぢや。
お國　有難や有難や、その御詞は三千歳に、花咲き實りし桃實より、國の爲には嬉しき賜物。
（秀康は近侍の手より珊瑚の珠數を受けとり、）
秀康　言葉のみには止めまじ。其方が掛けたる水晶の珠數、ありや裝束と映りが惡い、粗末ながらこの品は、晴れの軍に某が、襟にかけたる記念のもの、けふの當座にこれを取らさう。
お國　有難う存じまする。
秀康　國、其方は何歳になる。
お國　いつゝ程にござりまする。
秀康　二十五歳か、よき婿人を推擧しようか。
お國　國は生涯不犯に暮らしまする。
秀康　きつい事ぢやの。
お國　出雲の神に祈誓をかけ、歌舞伎を良人と定めました。
（秀康掌を打ち、）
秀康　ゆゝしゝ、ゆゝしゝ、さる心組が誰にも欲しい、瓶江そちもさうか。
（瓶江耻かしさうに差俯く。）
お國　これなる山三が定まる夫にござりまする。
秀康　逸早い事をしたな、瓶江美男を持つと、心掛りな者ぢやぞ。

（右京登場。）
右京　御使者は今の程お立にござりまする。
（折から風激しく吹き來る。秀康空を案じ、）
秀康　暮合近く吹く風に、大阪さして行く舟の、いづこに宿を定むらむ。
右京　仰せの通り速水殿は、今宵は船中にて明かさせらるる事なるべし。
山三　なに舟がゝりを爲されまするか。
秀康　甲斐に用でもあるか。
山三　え、何しに私ごときが。
（山三平伏す。秀康は山三を見て少し考へる氣味合。）
秀康　誠や天は僞りなし、春來つては桃山の、花は變らぬ昔にはある。
お國　人の巧は人を限る、一期を舞に明暮らすも、花の臺の一片にあらむ。
左馬　その花片は美はしき、しるしを年に殘すべし、心無げなる庭造の、枝を撓めて仇花を、散らすを何と御覽ずる。
山三　花の鬘を翳すべく、また桃實をみのらすべく、二道かけて迷ふこそ、心落居ぬ姿なり。
瓶江　闇なき戀路を渡り行けば、光明天の音樂の、遠くに響くを聞きたまはでや。

右京　君の情の厚ければ花に不斷の香ありと、醉ひ心地の致し候。

秀康　境界は人にあり、汝の幸は人の禍、わが望は人によからじ、行先は晴に似たり、唯々日の出づるを待たむ。

（風また過ぐ。張り渡したる幕を吹き捲く。）

――幕――

返し

男山八幡社頭

風激し。（その夜。）

正面なる石段を下り來れる名古屋山三は、中段に止りて四邊の樣を伺ふ。

此方よりは歌舞伎の一座奴傳介、速水甲斐を導きて登場。

傳介口笛を吹く。

山三膝拍子を打ちつゝ段を下る。

傳介　山三樣。

山三　かの手紙は、

傳介　お屆け申した所、速水樣御入來にごわりまする。

山三　なに速水樣の御出とか。

甲斐　名古屋、甲斐でおりやる。

山三　誠に甲斐殿、何から申上げようやら。（傳介に向ひ）其方は社前へ參り、太夫と靱江とがこれへ來らぬ樣に引留めてくれよ。

傳介　畏つた。

（傳介は石段を登りて去る。）

山三　さて甲斐殿、以前は以前、今は歌舞伎ものと成下りたる山三郎、畫の御見を幸に申上げたき一部始終御聞下されたし。

甲斐　珍らしき對顏、あたら武士を捨てたる上、面を河原に曝す山三が、速水への用事とは何。

山三　はゝ、ふと世相を觀じ、狂言綺語に身を任せし名古屋の心中は、たゞ名古屋が知るばかり。それはさて、以前は豐臣が禄を食みたる山三郎、けふ此頃の大阪城の御有樣、何ぞお爲の事あらば、御耳に入れむと思ふ矢先、けふ伏見の城内にて、德川家の軍師と聞えし本多佐渡殿、家老の左馬助と密談の果、藥包みと覺しき物を、手渡して小蔭に忍ぶ。ちらと見たるは某一人、にはかの風に舟繫りと聞いて即座にお知らせ申す。

甲斐　異なる話かな、かの佐渡守は大御所の懷刀と名代の大臣、只一人にて庭蔭へ、忍び入りしなんぞとは、誠しからぬ珍說なり。

山三　珍說故にお知らせ申す。主も祿も無い名古屋なれど

も、越島は南枝に巣をくふ、豐臣家の爲には尤も賴みに思し召さるゝ越前家、その御身には心掛りの藥包、御油斷のなさらぬ樣、御身樣より消息なりと、御遣しは下さるまいか。

甲斐　御身が見たると云ふばかりにて、正しき證も無き事を、他家の我等が何として、申入れがならうぞ。

山三　さ、それ故にこそ御賴み申す、外に證のある事ならは、山三が直に申上げる。

甲斐　いかさま。

（甲斐一考す。）

山三　たゞ何となう、左馬助に御油斷なされなとだけにても。

甲斐　さりとて家老の左馬助殿に、怪しき沙汰ありなんどとも、憚りありて申されまい、歸阪の上にて片桐殿へ、此分の耳打だけを致し申さう。

山三　すりや御消息は、

甲斐　得書き申さぬ。

山三　さて是非もない。

（兩人わかれる。速水は歸らむとし、山三は元の段を上らむとす。十太夫の佐渡守上場、速水と摺違ふ。速水刀の鐺を執る。十太夫振りほどきて行かむとす。阿國、瓶江段を下り來るを、傳介追ひ來り、瓶江の袖を引く。阿國急ぎて段を下り山三に突當る。山三段を飛下りて甲斐と十太夫の間に搦む。十太夫は元來し道に歸らむとす。折から甲斐の下人提灯を持つて登場、十太夫を甲斐と誤認し「お迎ひ」と叫んで鼻先へ火を出す。十太夫提灯を拂ひ落して、逃れ行く。甲斐は「正しく」と氣込む。）

——幕——

二幕目

城内土屋左馬助役宅

左馬助住居の裏座敷、本家へ續きたる壁に窓あり、下手には枝折戸立つ。下部藤内庭に水を打つ。腰元の小染は緣の上に佇む。

（同じ年三月の初）

藤内　此頃はいつにない御不機嫌ぢやの。

小染　淸水御參詣の御供もなく、朝から澁面つくつて在しやりますわ。

藤内　奴も御出仕のお供が出來ぬで、肩身がちくとばかり狹まり申すぢや。

小染　奥樣がお可哀相ぢや、毎日々々お叱りばかりで、傍の者もはら／＼ものぢやの。

藤内　何でも御心配事があるのぢやろ。

小染　お上の機嫌が悪いのは御奉公の者には心掛りでおざるのう。

（土尾右京昌吉、枝折戸を開きて入り來る。）

右京　藤內か。

藤內　和子樣、いつにない早い御歸りにごわりまするな。

右京　父上は何れに在すぞ。

小染　賴うだ方は御奧に居られまする。

右京　左樣か。

（奧の方にて、）

左馬　右京の聲が致す。

（上手の小窓を開きて、左馬助は庭先を見やり、）

左馬　悴、いかゞ致した。

右京　はつ、兼て仰出されましたる淸水御參詣の門出ながら、御病氣と承はり、馳脫けて御見舞に參りました。

左馬　心弱い奴、君前へ出仕なしては、親ありと思ふなと、兼ての言葉を何と聞く。

右京　仰には候へども、御所の都合にて昨日も歸宅致しませねば、御用の間を缺かざる樣、朋輩衆に賴み合せて……

左馬　その小才覺措け、武士は唯直ぐにあれ、はや戾れ。

右京　はあ。

（右京立つて行かむとす、左馬助屈托の顏なりしが、膝を打ち、）

左馬　やれ待て悴、座敷に直れ、我等もそれへ參らうぞ。

（右京座敷へ上る。左馬助も出で來り、）

左馬　腰元は奧へ行け、藤內は庭外へ出でい。

（兩人下場、左馬助座に着く。）

右京　父上、何御用におざりまするな。

（左馬助は物をも云はず。）

右京　父上、父上。

左馬　右京、前以て問ふ事あり、主君と親とは何れが重いな。

右京　若年者の拙者、忠孝の道は心得ませねど、兼々の御教訓とて、憚りながら御主君を一際深く存じ居りまする。

左馬　よし、よし、さて御主君と申すは誰ぢやの。

右京　御戲れも事によれ、中納言樣の外に御主君がござりませうや。

左馬　駿府に在する大御所樣は何に當るの。

右京　中納言樣の御爺樣ぢやろ。

左馬　大御所樣と中納言樣とは何れが重かろぞ。

右京　御親子の御中、中納言樣への忠義は、卽ち大御所樣への忠義、隔てあるべき筈はありませぬ、父上の御言葉は、何とも合點が參りませぬ。

（左馬物をも云はず右京に切掛ける。右京は切付くる

父の肘を抑へしが手を引きてまたも切込む太刀風に、縁より下に飛下りたり。）

右京　こは何となされまする。

左馬　見い、親子とてもこの通りぢや。（小聲になり）彼方と此方が斯の様なりや何とするぞ。

右京　思ひ掛なき事共ばかり。

左馬　その仔細語らう程にこれへ參れ。

（左馬助刀を收む。右京元の座へ直る。）

左馬　若年者の其方とて、少しは天下の様は知るらむ、關が原の合戰以後、次第にひろがる德川の、流れの末は太かれども、その源の大御所樣は、寄る年波に爭はれぬ、頽の刻みの深き御身、萬一の事もあらば、天下の動亂はかりがたし。かゝる折には第一番に企を爲さむもの、豐臣家の外になし、故太閤殿下の恩顧を蒙りし大小名達、大御所に恐れをなし、表は當家に歸服なせども、御他界あらばいかゞなるべき。これ大亂の基なるに、淺ましや御主君には、御舍弟たる江戸殿に、御家を嗣がれし御腹立、または太閤殿下が一端の恩義を忘れたまはず、常々の御言葉にも、大阪に珍事あらば、秀頼と共に采取るべしと申させたまふ、されば德川の天下に禍をなしたまはむは當殿にこそましますべけれ。

右京　こは仰せにて候へども、天下はもと豐臣家のもの、暫くは當家にて、御後見を申せども、やがて秀頼公御成人の其後は、返させらるゝ筈なりと、假初の御口すさみにも、我等まで申聞けさせたまひ候。

左馬　その御言葉を何と思ふぞ。肉親の御子さへ、かゝる思を懐かせらるゝに、ましてや外樣の大名達時來らばと思ふもありなむ。近頃大阪には、諸國の名ある浪人を召抱ふる事の頻りなるに、所存の程は知られたり、天下を爭ふ大軍は、女儀を大將の大阪方、憂ふべきにもあらざれど、御主君まことに豐臣の采とりなば、日本一のゆゆしき御敵。

右京　兼て大御所樣の御仰せにも、我子ながら秀康は剛の者にてありけり、故太閤と我等とが、名乘の文字を合せたれば、武勇も二人を受けつぎたりと、賞美ありしと承はる。

左馬　さればこそ我等の苦衷、勿體なの事ながら、天下の爲に御主君の、御命を縮めうと企てたわ。

右京　え。

左馬　忰、そちの一命を天下の爲に贄に捧げい。

右京　すりや現在の御主君を。

左馬　忠義を教へし親の口から、大逆罪を勸めるわいやい。

右京　さればとて、御情厚い御主君樣。

左馬　天下の爲ぢや、たつて勸めい、我も思ひは變はらう

か、忍び難きを敢てなすも偏に天下の爲にして、私にあらざる證は、土屋の家もこれを限り、この企の成就の日は、汝も死ね、我等も共に三途の河邊で、存分お詫を申上げる。
右京　事を分けたる御仰せ、この天罰にて八大地獄の、責苦を永々受けようとて。
左馬　役目はきつと勤めうとか。
右京　はあ。
（枝折戸の外より、）
藤內　若樣、殿樣御門を御出ましにごわりまする。
右京　心得た、直樣參ると申せ。
藤內　ねい。
（藤內下場）
右京　さらば父上御暇申上まする。
左馬　待て悴、容易う請合うた大事、何として仕終するぞ。
右京　恐れながら御寢首を。
左馬　いや／＼、武勇絶倫の我君、そちの猪腕にていかでいかで、かつうは他家への聞えもあり、幸なるかな今日の御參詣、御茶など參る際に、取混ぜて差上げい。
（左馬助懷中より包紙を出して右京に渡す。）
右京　とはまた、あまりに急なること。
左馬　かゝる大事を胸に抱けば、立居にそれと知られなむ、御目に留まらば天下の大變、俤の場にて殺害の、罪過を犯すは恐れなれど、
右京　後世を捨てたる某には、恐ろしとも思ひ申さず。
左馬　犬畜生にも劣つたる、二人はこれが一世の名殘、來世は焦熱大焦熱の、火炎の中にて對面致さう、
右京　親子は一世と云ひながら、共に地獄に沈みたらば、煙の闇より御顏を、拜むがせめての賴みなるらむ。
左馬　人に謗られ、名を下し、最愛の子を捨て、家を捨ち、あらぬ事をば爲せうおやまで。
右京　父上、
左馬　右京、
右京　淺ましい事ぢや。
（右京父の手を取りて泣く。やゝあつて左馬助手を叩く。小染出づ。）
左馬　奧方へ是へと申せ。
（小染下場。）
右京　なに母上を。
左馬　今生の名殘ぢや、氣取られぬやう、一目逢うて行け。
（左馬助の室峯尾登場。）
峯尾　なに右京が歸りやつたか。
右京　清水參詣の御供先を脫抜けまして參りました、
峯尾　それは。ようぞ參られた。

右京　御用談に隙取ましたれば、御供に遲れようも知れず、はや御暇を申しまする。
峯尾　御前を能う勤めや、朋輩衆と喧嘩なぞしやんなや。
右京　畏りました。
（右京兩親に暇乞して下場。）
峯尾　我子ながら利發のもの、今歳を過さば御前を下げ、可愛らしい嫁御寮を、迎へねばならぬわいの。
左馬　（沈みたる聲調にて）その嫁御寮には誰がなる。
峯尾　はてこちの右京が婿風なりや、天からも地からも、降つて湧く程あらうず。
左馬　天に飛ぶか、地に入るか。
峯尾　こりや何を仰せあるやら。
左馬　右京には妻の沙汰より、極樂世界に住居する。
峯尾　え。
左馬　いや天人よりも勝れたるを、嫁女に申受けうわい。

——舞臺廻る——

四條河原阿國住居

風流なる座敷、床に珊瑚の珠數を飾る。歌舞伎芝居の座元、奴傳介と物語る。

座元　傳介殿、太夫の機嫌はどうぢやの。
傳介　見た所は變りも無い樣子ぢやがの、氣分が惡いとて寢たり起きたり、風吹き烏を正のものぢや。
座元　はて、それは困つたもの、芝居も當分休まずばなるまい。
傳介　今度出した「東下り」の噂は、淸水の舞臺より高いに、見物は三十三間堂の佛樣より概分に來られるに、折惡い太夫の不加減、えい事は二つおりないわ。
座元　早う舞臺へ上れるやう、介抱を賴むぞよ。
傳介　われらは一日小屋に出ぬと、身體が惡うなる程に、舞臺に精を出いても、見物が好がらぬぢやて。
座元　さらば御暇を申す。
（座元下場。奧より瓶江登場。）
瓶江　傳どの。
傳介　若太夫。
瓶江　座元は歸られたの。
傳介　山三はまだ來ぬかの。
瓶江　え〻また阿呆らしい、いつ山殿の事を尋ねました。
傳介　はて、つい今の先。
瓶江　そりや誰が。
傳介　はて、あなたが。
瓶江　あの何處で。
傳介　あのこ〻で。
瓶江　措かしやりませ、いつも〳〵、好う譃ける人ぢやの。

傳介　面妖な、お尋ねなされた返答が、御意に叶はぬとか。
瓶江　誰も聞きはせぬと云ふに。
傳介　白癩！　山三樣に頼まれたお言傳も聞かしやれぬとか。
瓶江　なに、御言傳。
傳介　いえ、なに物でごわるぢやて。
（折から名古屋山三郎登場、戸外にありてその趣を立聞きす。）
瓶江　お言傳とは何用ぢや。
傳介　そのお言傳はな、太夫の病氣で芝居は休みなり、鬱散晴しに花見はいかゞ、さあれば御身とたつた二人、連理の木では動けぬが、比翼の鳥なら飛んで行かれう、と思ふがどうあろと仰有れたは。
瓶江　なに山三樣と二人で花見。
傳介　我等を差置き、あまりといへば酷いお頼み、ちくとばかり腹も立つたが、悋氣と疝氣は年寄の謹み處、ぐつと我慢しての言葉ぢや。
瓶江　何を措いても參りたうはおざれども、引籠り中の太夫の手前、まづ見合せにしませうわいの。
傳介　これはいかな事、若太夫には戀路の闇を、紙燭して歩まれると見えまするげな。
（山三後方より。）

山三　僞りの影がさいたぞ。
傳介　や。
山三　花見にはいつ行くのぢや。
傳介　あの、それは明日、いや昨日。
山三　氣分の惡い太夫に隱れて、身共が花見に參るのぢやまで。
傳介　あの、それは物ぢや。
山三　ものとは。
傳介　はて怖ものぢや。
（傳介下場。）
瓶江　山三樣花見とは虛かいな。
山三　病みたる人を宿に殘し、何しに花見に參らうぞ、傳介が其方を擔いだのぢや。
瓶江　えゝ憎らしや。
山三　は、は、は、は、は。
瓶江　ほ、ほ、ほ、ほ、ほ。
（外より小鼓の音聞こゆ。）
山三　太夫か。
瓶江　今がた庭におぢやつたが。
山三　河原を漫歩きでがなあらう。
瓶江　もうし山三樣、河原へ出て見ようではありませぬか。
山三　せめては花を遠に見ようか。

（瓶江、山三と共に下場、阿國小鼓を手にして登場、力無げに柱に凭り、鼓をとりて調子を試む、意に滿たずして捨つ。）

阿國　結ぼるゝ心の闇が戀ならば、わが思ひこそさにはありけれ、懷かしいは戀の下崩、賴もしいは戀慕の始、煙絶えにし富士が根も、昔は燃えし山と聞け、奥また奥に潛みにし、戀の火焰が立のぼるか。

（床の間にある珊瑚の珠數をとりて頰に摩りつけ。）

阿國　はかなき生れを歌舞伎の神へ、捧げし誓は忘れねど、人戀しさも忘れ得ぬ、二十五年の生涯に、この賜物に觸るゝ時のみ、男の香色の身には染め、あらなつかしの面影。

（珠數を恍惚としてながむ。傳介登場。）

傳介　太夫樣。

阿國　あい。

傳介　まだ氣分は癒らぬかいの。

阿國　こゝと云つて惡い所もおざりませぬが、まだ立つ氣にはなれませぬ。

傳介　いまも芝居の座元が來て、案じて居られたわい。

阿國　氣の毒でおりやるの。

傳介　何にせい、東下りが大評判ぢやに、シテの太夫が休まれたで、芝居も立たず役者も立たず、裝束の衣裳着けたまゝ舞臺で倒られた時には、傳介も肝を潰しましたのぢや。

阿國　我身ながらも不思議のやうであつたわいの。

（山三、瓶江と共に登場。）

阿國　山三殿か。

（傳介瓶江を見て。）

傳介　や、これは。

瓶江　傳どの、此方(こなた)は憎らしやの。

傳介　ひたに過り過り。

阿國　また瓶江を構はれたのぢやな、譃(じゃら)けた人ではある。

傳介　首尾よう謀りまいたを、山三殿入來(じゅらい)で、桶の箍が逆ね申したわい。

山三　時に太夫、氣分はまだ癒らぬかいの。

阿國　まだ何となく心が欝結(むすぼ)れ、切りなく涙が零れてならぬぞや。

山三　さして身體に障りなく心が浮かず涙が乾かぬ、こりやてつきり戀の道ぢや。

阿國　え。

山三　瓶江殿、傳介と一緒に座を外して下され。

瓶江　あい。

（瓶江、傳介と共に下場。）

山三　何をお隱しなさるゝぢや、醫師(くすし)ならねど某は、病の

因を能う知つてぢや。
阿國　病氣の因を知つたとは。
山三　はて活達の氣にも似ぬ、病の因果は越前様ぢや。
阿國　や。
山三　戀は捨てたと名乘らるゝ誓文に隠されてか、片時も放さぬその珠數でも、大略は知れてある。
阿國　山三殿、今は隠さぬ隠されぬ、色に出づれ現れ處、頼もしい、なつかしい、思を戀と名くるとは、今になつて身に知られた。
山三　さすがは太夫、ようも隠さずおつしやつた。したが斯様に舞臺を引き、引籠つては埒が明くまい、こりや日頃にも似合しからぬ。
阿國　さいうて、應ふ戀でなし。
山三　隔ての無いが戀のならひ、まいて太夫は天下一、舞にかけたら古今の上手、勝らうとも劣りはない。
阿國　お身は左様にお云ひあれど、そりや此方だけの口といふもの、飛ぶ鳥落す殿様と、河原で立舞ふ傀儡の太夫。
山三　云はれた太夫、我れと我身を卑下したとて、思が成らうものでなし、そのうち御召が度重なれば。
阿國　神の御前で乙女で暮らそと、誓つた言葉は反古にはならぬ。
山三　己れで立てた誓文なら、己れで破ろと支はあるまい。

（阿國鼓をとりて一つ二つ打つ。）
阿國　我身が打つた音ではあれど、もう鼓へは戻らぬわいの。
（阿國涙ぐむ。外にて傳介の聲。）
傳介　山三様、入つてもようおぢやるか、
山三　こちへござれ。
（傳介上場。）
傳介　山三様、武家の飛脚が見えられて是非々々逢ひたいと申されておぢや。
山三　なに某に逢ひたいと。
傳介　大阪からの使者ぢやと申す。
山三　何にもせよ、對面致さう。
傳介　さらばおざれ。
（傳介山三と共に下場。阿國思ふとなしに四邊を見遣りつゝあり。瓶江登場。）
瓶江　阿國さま、阿國さま。
阿國　なんぢやのう。
瓶江　今がた表を越前様がお通りぢや。
阿國　越前様が。
瓶江　清水へ御花見に御出やるさうな。
阿國　そりや何時。
瓶江　つい今がた。

阿國　なぜに知らさぬ。
瓶江　太夫に別に知らせる事でも。
阿國　ほんにさうよの。
（阿國萎れる。山三立出で、）
山三　なに越前家が淸水御參詣とか。
瓶江　あいのう。
山三　幸ひ。
（山三手にせる書狀を懷中に收む。）

——幕——

三　幕　目

京都淸水寺舞臺

花に包まれたる淸水寺の舞臺、老若の僧は掃除を終りたり。（前幕と同じ日のこと。）

老僧　雲水よ、花が咲くと煩いのう。
若僧　笨煙老はまた愚痴を始めた。
老僧　いや、いや、然でおりない、朝は朝で、曉の花が好いとて夥しい人出がする。夕はまた入相の鐘に散るさまの、こよなう美はしいとて、莫大もない群集ぢや、その上日中は花見衣、貴賤混雜の忙しなさは、別物ぢや。
若僧　はて、それが何のうるさい、日々の佛弄り、線香には燻される、抹香には染みはてる、ほんに坊主が嫌やの嫌やの。
老僧　花が咲いたとて何面白かろ、散る花を淸めるので、箒持つ手がいとゞ辛度ぢや。
若僧　花が散るので戀が削れる、靑葉になつては禮盤と、また首引で暮らすのだがな。
老僧　うつら〳〵と寢たら格別、春と申すは騷々しいだけの者ぢや。
若僧　けふは越前樣の御花見とて、皙が間は誰人なりとも、參詣を止めた故、いつにない靜な事ぢや。
老僧　毎日毎夜この通りぢやと、樂靈が出來て嬉しいの。
若僧　また骨惜みが始まつたな、もう一息ぢや、早う掃除を致さうぞ。
（二人奥の方へ入る。名古屋山三登場。）
山三　大阪からの御書狀を、お預りは致したが、人傳にはならぬ文、折から當寺へ御參詣とは天の與へ、何どかして御手渡を致さうぞ。
（以前の僧出で來り、山三を見て、）
老僧　こりやそこの方、暫時の間御參詣は叶ひませぬぞ、さあさあ御堂の外へ出られませ。
山三　大慈大悲の觀世音菩薩、誓にしばし拜ませられい。
若僧　いやならぬわ、菩薩よりなほ御威光强い、伏見の越

前様の御參詣で、舞臺中は御花見の座敷ぢやてや。

山三　さう聞けば猶の事ぢや、貴賤を擇まぬは花の習、伏見の殿とて御叱りはおざるまいて、はゝゝゝゝ。

老僧　笑ひ居るわ、越前様はどうあらうと、

若僧　師匠の坊に叱らるゝ、

老僧　とつとゝ出やしやれ。

若僧　さあ〳〵お出やれ。

山三　すりや是程に申しても。

（警蹕の聲遠くより聞ゆ。僧は之を聞きてなほ慌てゝ）

老僧　早う出やれ。

（兩人にて山三を拉して推し出す。山三爭はむとはせしが、思返して僧と共に下場、越前中納言秀康、足羽安居丸、宮井久市、外近侍數名登場）

秀康　げにや梢も埋もるゝ、花の榮華は今を極み、天地も人も醉ひ心地、まことや自然は律儀なるかな、人待たねども花は笑めり、正直は勇の本體、あら勇ましの花の姿や。

安居丸　幸ひけふは長閑にて、天も守るか花の道行、

久市　霞の幕は空にかゝり、盛りを散す風を厭ひ、

近侍の一　春の盛をこゝに集めて、

近侍の二　殿の御成を待顔なる、

同の三　淸水寺の花の場。

（一同着座。）

秀康　誰ぞ茶を持て。

安居丸　はあ。

（安居丸奥の方へ入る。土屋右京登場。秀康の前に跪き。）

右京　御供揃の其間と、暫時の御暇たまはりて、私宅へ罷り歸りし處、思の外に手間取り、延引致しましたる段、眞平御許容下されたし。

秀康　して左馬の病氣は。

右京　次第に快氣仕り、兩三日の中には、御機嫌を伺ふやうに申居りました。

秀康　それは頂上ぢや。

（安居丸茶を捧ぐ、秀康取つて茶碗の熱きを覺え、物をも云はず突返す。安居丸その意を料りかねて逡巡す。右京機到れりと思ひ立たむとせしが、忍びず。安居丸の袖を引き、温湯と代へむことを囁きて教ふ。安居丸急ぎて下場。秀康はそ知らぬ面地にて花を眺めつゝあり。安居丸恭しく茶碗を捧げて秀康に薦む。秀康取つて一息に食み終る。）

秀康　能い加減ぢや、右京其方の手で一服立てい。

右京　はつ。

（右京仰を受くるに忍びずして躊躇ふ。）

秀康　早うせい。
右京　はあ。
（右京是非無く茶碗を受けて奥へ入る。微風吹く。落花翩翻。やがて右京顔色蒼ざめ、茶碗を持ち來る。秀康訝りて、）
秀康　右京腹痛でも致すか。
右京　いえ。
秀康　顔の色がようないぞ。
右京　はあ。
（と茶碗を差出す。秀康取つて服加減を試み、合心の思入にて飮み終り、右京を浸々と見て、）
秀康　右京今の茶は。
右京　えつ。
秀康　湯加減は如何致した。
右京　お熱いのを差上ました。
秀康　小姓共、皆も能う聞け、參りたての一服は、加減の熱いに得飮まざりしを、右京が心付に溫めておます、續いて所望致したれば、沸ざる樣なのを立て居つた。心を得たる右京かな、皆も彼の樣に心がけい。
（右京は慙愧の念に堪へざるさま。）
安居丸　そのまゝに御返しなされましたで、如何はせむと煩ひしを、右京の早速にて御機嫌に應ひました。

久市　私共も只今の御教訓は忘れませぬやう、確と心掛けまする。
秀康　諂ましい其方達心は何處までも美しく持て、僞り飾らぬを武士とはいふぞ、正直は武士の甲冑、義と申すが心の大將。面と腹と變はれる奴は、人非人と云ふぞよ。
（彼方にて「ならぬぞ、ならぬぞ」と罵る聲す。）
秀康　何事ぢや、久市見て參れ。
久市　はい。
（久市下場。彼方には「おのれらが」「役者づれが」など以前より聲高に聞ゆ。久市引返して登場。）
久市　殿樣申上げます、役者の山三が爭うてぢや。
秀康　なに山三が爭ふ、何と申して爭ふ。
久市　殿樣に御目通したいといふ、ならぬと云ふ、それで爭うてござりまする。
秀康　予に逢ひたい、苦しうない花見の場、彼等なんぞを呼うでこそ興も多い、此方よりと思ふ程ぢや、是れへ呼べ。
久市　はあ。
（久市下場。爭ふ聲止む。久市名古屋山三を伴ひて上場。）
秀康　山三予に逢ひたいとは何ぢや。新作の歌舞伎でも出來たかの。

山三　御花見と承り、御目通を願ひましたに、狂言氣のない坊様たち、口を酸くして頼うでも、ならぬとのみで押返され聲高になりましたが、御耳に觸れました。

秀康　其方に似合しからぬ事ぞ。

山三　恐れ入りました。さて罷出ましたるは、一大事の儀にござりますれば、御人拂を願ひたう存じまする。

秀康　左様か、小姓共幸ひぢや、面々勝手に花を見い。

（二人の外一同下場。）

山三　一大事と申しまするは、この御文にござりまする。

（秀康山三より消息を受取りて披閲す。）

秀康　是れぞ湛見甲斐より予に宛てたる消息、その使に山三とは。

山三　その文使ひになりましたは、先達て御誕生の御祝として、御城内に召出されし刻、怪しい御人に出逢ひました。話の綾は定かならねど藥包を手渡しなしたる、相手は家老の土屋様、江戸方の大軍師が、姿を變へて庭内の密々咄の的といつぱ、恐れながら殿様御上と、思ふにつけて早速の計ひ、他家と云ひ條、豐臣家にては、頼りに思す越前様、折から歸る大阪の、御使者は元の知人なり、下り船に追付きて、事の仔細を打明けても、早速には御承引なく、漸う只今この消息を、頂きました幸先へ、御參詣とは御武運の、長久なるべき御仕合せ。

秀康　汝の言葉に相違はあるまい、さりながら何故ありてさまでに、この秀康を心に掛くるぞ。

山三　それには二つの因由の候ふ、一つには此山三、幼きときは豐臣家の禄米をもて生ひ立ち候ふ、また二つには藝道の、歌舞伎の爲に殿様の、御無事を望み居りまする。

秀康　予を藝道の爲とや。

山三　されば太夫が申しまするは、越前の殿様こそ藝道の守護神、厚うひかせられまする故、歌舞伎も追々取立てられます。拙き手節も心を入れさせ、御覽下さる御殿様、國の爲には大檀那と喜ぶシテに連なる私、一座の者も一同に、殿様御寧昌を祈り居る次第にござりまする。

秀康　ははは、それだけの事で守護神か、弟の下知を受くる秀康、賞むるは歌舞伎の者どもばかりぢや。

山三　かくまで思ふ私達、何卒御身御大切に。

秀康　おう、おう、湯茶飲酒に心を付けいと申すよの。

山三　別けて彼人の由緣の御方には。

秀康　由緣……心得たぞ。

（秀康考ふるうち、胸痛の心地、寂しく笑ひに混らす。）

秀康　われも四邊を逍遥せむ、山三供せい。

（秀康山三と共に下場。奥の方より右京出でて主君の方を見送り。）

右京　世にあり難き御恵み、深き情を道事に、主の節を縮

めし某、昔を今に例なき鬼畜に劣りしうき身の果、御辯疏も得爲ずして、その儘終る命の瀬戸際、武士らしき最期をと、思へど是も名に立つ業、犬の樣に死ぬるこそ、なか／＼今の運命なるべし、南無や御佛、極樂世界は覺束なし、永く冥路にさまよふとも、御主に御詫を云ひ得るやう、守らせたまへ御佛。

（右京舌を噛み切り舞臺より飛降る。鳩舞ひ立つ。花激しく散る。「落ちた」「落ちた」とわめく聲聞ゆ。驅上り來れる安居丸。）

安居丸　殿樣、殿樣。

（奥の方にて）

秀康　安居、何事ぢや、

（秀康山三を從へて出で來る。）

安居丸　右京が舞臺から落ちさせられた。

秀康　なに右京が落ちた、早う呼び活けえ。

（安居丸下場。秀康續くを、）

山三　御殿樣、こりや御茶を參らせられたな。

（山三袖を控へる。）

秀康　む〻。

山三　落ちられたのでおざらうか。

（安居丸慌だしく上り來り。）

安居丸　殿、右京は夥しう血を吐いてぢや。

秀康　舌を噛んだか。

（花少しく散る。鳩啼く。）

秀康　花も散るわ、人間の命も散らう、一期の榮も今の嵐に、あたら櫻はあとも殘さで、元の土へは歸り行くぞ、山三今より伏見へ歌舞伎を仕立てい。

山三　なに歌舞伎を御覽とや。

秀康　思ひ出に國が舞を見ようぞ。

山三　はつ、折角ながら國は戀病み。

秀康　なに。

山三　いや殿樣のお召なら、死なうと太夫は參りませう。

――幕――

大詰

伏見城中能舞臺

普通の能舞臺。（前幕と同じ日。）

唄〽三河の國に差しかゝる
こゝも鄙路のおとろへや
夢の戀路とむすぼるゝ
渡せる橋は五つ六つ
七つにあまる八つ橋や

（唄の半ばに、業平に扮せる山三郎、寘に扮せる瀬江

使丁に扮せる傳介、登場す。業平床几に腰うちかけて憩ふ。童振り。)

童　いかに我が君

唄へ　みそなはせ
あの澤間より生ひ出でゝ
今を盛りの時もよし
眉目よし、香好し、娘どき
(童納まる。使丁振り。)

使丁　がいに咲いたは

唄へ　開いたは
はれやれ咲いた杜若
風が吹いてもつんとして
雨が降つてもしやんとして
色が深かう、おはすよの
(使丁納まる。中將振り。)
そやし立つれば中將も
花に見入らせたまひつゝ
げにや月行き星行きて
夏來にけらし八つ橋の
あらなつかしのかほよばな
(阿國の杜若の精登場。)

女　なうなう

唄へ　しばし旅人よ
咲きたる花になどかさは
涙をそゝぎたまふぞや
(業平振り。)
人の心はよつの緒の
喜怒哀樂のさま〴〵に
かはれるまでと知りたまへ
(杜若の精振り。)
否とよ我れは天さかる
鄙人なれど、うつし世の
調べは祕めて胸にあり
玉の小琴は草笛に
秋風樂は、松が枝の
たよりにつたふ、天の曲
(業平振り。)
さかしき賤の女よと
見遣り見かはす花あやめ
見れば見るほど似たけはひ
(兩人納まる。童續きて使丁振り。)
あの聲音から眉目からが
よう人に似てさむらふぞ
さつても貴方に生き寫し

瓜をちぎつて並べても
これ程似たがあるべいか
（女振り。）
見しは夢かや忘られぬ
その面影はおうそれよ
微かされて登る雲のうへ
袖をつらぬる瓣相の
中より立ちし夢の人
樂の拍子に打ちつれて
差手のしげき双の舞
手と手の觸れて花となり
目と目の合ひて火と燃ゆる
簪の花の搖らぎては
情の息をむねに聞く
雲のびんづら亂れては
思ひの色をあらはせり
（知らせなしに道具廻る。）

同　見　所

能舞臺と對したる見所、金屛風にて圍ひたる中に、秀康は疊上に、左右に侍、小姓、侍女數人、此方には醫師今大路道三、藥箱を傍らに控へたり。始終囃子の音。

道三は藥湯を調劑して、小姓を招きて薦めしむ。秀康取つて飲まんとして、痙攣起り茶碗を取落とす。道三これを見て立上り、手を取りて脈を試む。下手の襖を開きて、國家老本多伊豆守富正登場。この態を見て無言にて平伏す。

秀康　伊豆か。
伊豆　はつ。
秀康　別れになつたぞ。
伊豆　御心弱き仰せかな、いかでさることの。
秀康　いやいや、我が心より得たる病、骨の髓まで浸み透つた。
伊豆　御國表より只今上洛の某、御病氣と聞いて直ぐに參上。
（此時近侍の一人慌たゞしく氣に入り來りしが、秀康と伊豆との對話を見て差控へたり。）
秀康　なんぢや。
近侍　はつ、左馬之助唯今死去仕りました。
秀康　また親も失せたとな。
（伊豆守は近侍に。）
伊豆　さまでの病氣とも承はらぬに、して如何樣の最期を遂げたぞ。
近侍　吐血致して相果てたと申しまする。

秀康　（半ば獨語のやうに）　世渡りは旅路のさま〴〵、東南西北志すに任せたり、我は此方と思へども人は彼方へ足を向けたり、走りし後は草の蔭野、冥途の道は賑ふのう。

伊豆　何とてかやうに心細き事のみ仰せあるやらむ、是もおん病のなす所か、御心確かに持たせたまへ。

秀康　伊豆、あれ見い彼方は舞の囃子、人の世に咲く物云ふ花を、現に見ては此世を去る、さりとは人の榮華の極みぢや、さりながら、難波に生ふる蘆の若葉、あな心なの海士人は、月諸共に刈り取るならめ、秀康一日世にあれば、世は一日の義を繋ぐ、われ失するときは義は滅せむ、無道の譏りは不義の富貴と、共に東に流れ行かう、たゞ、それ故に命が惜いぞ。

（病苦益す重る。）

秀康　伊豆、無い命が惜しいわ。

伊豆　はあ、天運、天命、人の力は是れに盡きませう。

秀康　天ぢや、運命ぢや、自然に開く花を見て、天の威光に跪くより、技巧に生ひし人間の、誇を天に引き較べうぞ。

（益す苦痛の氣味――知らせなしに道具廻る。）

同　元の舞臺

（業平と女と振り。）

唄へ今は昔と繰りかへす
かへす返らぬ池浪に
似たりや似たり花菖蒲

（業平納めて、あとは女のみ振り。）

身は南海のつばくらめ
春を慕へる少女子ぞ
捨てよ、捨てよ、後朝の
はやうつり香はさめたらむ
ええ惡性の戀知らず
眉目も姿も同じとは
やはり元木が戀しかろ
新らしいとや、古いとや
戀慕の花の狂ひ咲き
執心こゝに愛着の
古へ人の乘りうつる
なうなつかしや我れはこれ
あかぬ別れを春日野に
浮名を留めし白らぞ
野草の花に精魂を
よせてこゝまで見えたり

（舞臺の下を驅け來る近侍。）

近侍　殿もそれまで、殿樣御臨終ぢや。

山三　や。

（舞臺の役者一同に驚く。近侍去る。地の謠も拍子も切れんとしたるを堪へて舞ひ續ける。阿國も取り亂さたるに、阿國は拍子を踏んで自ら謠ふ。）

阿國　亂れ亂れよ、我が戀は

それよ咲きたる杜若

（此邊より、しどろもどろに謠ひ出すものあり。）

唄〽たゞ一生に一度咲く

人をおもひし一念が

輪廻の浪にたゞよひて

邪淫の罪を受けなば受けよ

花に刻めるこの戀は

君とふたりに消ゆるとて

此世の春にとゞまらむ

思ひ出多き戀をして

御身と我れとは老いせじな

うせじや、消えじ、後の世の

なからむまでも、戀は失せじ

（阿國舞ひ納め、拍子を踏むと倒るゝに、舞臺の役者は驚きて介抱す。本多伊豆守は出で來り、この體を見る。）

山三　太夫、氣をしつかと持たれませ。

（阿國氣の付きたる樣にて、）

阿國　ああ、ああ。

山三　思ひがけなき御別れに、心を落とすも尤も千萬、さほどに氣分が惡しければ、御臨終と承はつたに、舞ひ續けては居られたぞ。

阿國　舞臺へ上がれば神への贄、一段終らぬそのうちは、人の戀では留められぬ。

（山三は伊豆守の立てるを見て、）

山三　はつ御臨終をも憚らず、舞ひ續けましたる段、御見逃がしを願ひまする。

伊豆　職分ぢや、役者の藝は合戰の場、後へ引く法はない、歌舞伎なんぞと蔑みしが、武士も及ばぬ魂は、まことに主君の愚かせられたも道理かな、天下一人、我等も肖かりたいわい。

――幕――

その夜の石田

場
關が原假陣場

時
慶長五年九月十四日夜のこと

人
石田治部少輔三成
島左近勝猛　同家臣
新吉郎　同悴
蒲生備中守鄕舍　同家臣
大谷刑部少輔吉繼
穴山小助　眞田の使者
武士、從者、庭の小者等
南宮山の巫女水篶

農家を假の陣場としたる様、床板を取放ちて出入に便したる箇處などあり。大雨のあとにて、まだ小雨寂し氣に降る、家の外面にて武士四人蕭條に焚火を爲し居る。

武士の一　何とであらう、明日の天氣は。
同の二　秋雨の定めはおざらぬ、小止みにはなつたれど、片時の先も占が置けぬ、降らば降らして置くまでぢや。
同の三　さりとは明らめのよい事の、合戰の最中の大雨は武者にはいかい禁物ぢやによ。
同の四　味方も困れば、敵方も苦むことぢや、代の草鞋に事を缺かねば、あにが篠突くとて大事がる、結句面白い功名も出來やうぞ。
同の一　降らば降れ、長雨は恐れねど、寒いには辟易よ。
同の二　火を焚いても煙に立てな、明しの見えぬ樣にとある、大將の首取るよりも、難かしい仰せな！
同の三　寒いには火が何より、何の是れしきの焚火、敵方に漏れやう譯おざんない。
同の四　よし敵方が掛りをつけたら、味方も打物取る分ぢや。
同の一　あつたら武者が顫へるのは、醜うも見苦しいわ。
（向ふにて「すされ」「行け」「退け」など云ふ聲騷がしく、武士等は何故やらむと訝る所へ、南宮山の巫女みすず髮を亂し、幣束を持ちて登場、あとより、士卒一人摑んで出づ。）
士卒　物狂め、すされ、すされ。

（と袖を取つて引く。）

みすず　なに物狂にすされとか、すさるまじ、すさるまじとよ。

唄へ月の夜も、降れば暗がり、くらまぎれ、目先も分かぬ暗まぎれ、はつちや恐もの、茄子に瓜をならせうとや、熟るかならぬか、畑を見さい、心の闇に目も曇る、迷ひ惑ふぞ悲しけれ、南無大日如來佛薩陀。

武士の一　この狂女は何處のものぞ。

みすず　自らは南宮山の巫女にて候。

武士同　巫女ならば神には使へで、陣中へは何しに來たぞ。

みすず　われも知らねど、

唄へうかれきて、あれあれ東が白むは日輪の升るなり。西の晦いは、いよさて山の端に月輪の沈むよの。

武士の二　唄ふ歌にも事を缺き、どうやら東を贔屓する狂女。

武士の一　追出せ、追出せ。

武士の三　すされ。

武士の四　どけ。

みすず　いいや退かじや。

唄へ退くまじや、退けとは禁句はばかりの、いくさの場になどされば、おしやる、おしやる、などおしやる。

武士の一　ええ面倒な、括してしまへ。

（武士等手取り、足取り、みすずを奥の方へ引立て行く。）

（島左近物蔭にて狂女の樣を垣間見たる心にて登場。焚火盛んに燃上るを見て踏み消す。）

左近　今まで數度の合戰に出遇ひ、生死の街に逍遙なしても、夢愕かぬ勝猛が、小耳に放れぬ狂女の戯歌、齢に連れて心まで、少しは年を取つたと見える。

（士卒一人登場。）

士卒　左近樣、信州より御使者でおざる。

左近　眞田殿よりの使者とや、御通し申せ。

（士卒下場、眞田安房守の使者穴山小助登場。）

小助　左近殿。

左近　珍らしや小助殿如何致して御發向ぢや。

小助　妾にそれと知ろし召れん、亂軍の中を使者に立つたわ。
左近　近頃稀有の御姿な！　いざ是れへ通られませい。
小助　さらば御免あれ。
（左近小助能き所に着座す。）
左近　先づ火急に伺ひたきは房州御身の上、如何渡らせらるるぞ。
小助　無事でおざる。
左近　さらば明日の合戰に、仙道方は間に合ふまじ。
小助　如何にも江戸の加勢の人數は我等の手にて食留め申した、主人申すは、今度の一戰、既に兩三日の間ならむ、昌幸かくて在るからは、仙道よりの加勢は、一人たりとも通すまじ、これを土産に御見舞に罷り上つた。
左近　有難し、この由主君へ申上う。
小助　御披露を頼み入る。
（左近の悴新吉郎驅け來る。）
左近　新吉、何事ぢや。
新吉　親人、島津殿には只今御陣を据ゑられまいた。
左近　して宰相殿には。
新吉　未だ到着なりませぬ。
左近　掃部が居るに何たる事ぢや、なほ御着あらば聞かせくれい、また備中殿へも、此由を御知らせ申せ。
新吉　畏りました。
（新吉郎下場。民家の奥より石田三成登場。）
三成　左近、島津公には着せられたとか。
左近　唯今御陣を据ゑられたと申しまする。
三成　遉がは早雄の薩州、勇ましいのう。
左近　御意御座りまする。さて房州殿の御使、唯今着到されまいた。
三成　外ならぬ小助男、さては大事の使か。
小助　唯今となりては十日の菊、對陣あまりに長き時は、味方は云はば集り勢、變あらんも計り難し、一刻も早う御驅合を迫き立ての使者におざりまいた。
（小助髻の中より、生絹の小切を出して左近に渡す、左近は三成に捧ぐ。）
三成　過ぎる程の用心をせられたの、なになに委曲は使者に申含め候恐恐、昌幸判、宛名も書かぬ眞田の狡さよ。
小助　今の折から拙者が身體を、消息代りとおざりまする。
三成　明日は愈よ大合戰ぢや。
小助　御籠りありし大垣より、打出たまひし御所存は。
三成　さればよ、昨今到着の敵方は、皆一夜陣を張り申す、人質に眼くらみ、大垣へ抑へを付けて、大阪乃至佐和山など、推掛うとの下墨と見た、さありては一大事、幸ひ今日の小迫合に、思ふ儘の勝利を得たるは、味方の吉兆、

此機を外さず總寄に、有無を一擧に付け申すぢやて。
小助　かの内府は若年より、弓矢取つては海道一の名大將、味方今夜の動轉を、覺られなば如何あるべき。
左近　されば夜を籠め、當地には陣を移した。御聞きやる通り、まだ浮田小西などは到着せぬほど、人馬には難義ながら、宵の口よりの大雨に、松明もなく、密密と關が原へは寄掛けたり。
小助　霧立つ山の木下闇、暗き森道に惑はざりしは。
左近　それぞ兼ての用意とて、長曾我部殿へ申談じ、大篝火を徹夜焚かせらるるを目處となし、牧田途へは進み申した。
小助　隙間なき御配慮かな、明けなば晴るる霧の間より、思も寄らぬ味方の勢、
左近　驚く敵へ一發の、烽火と共に切てかからば、
小助　叶はぬまでも鎬を削り、ここを必死と切結ぶ。
三成　相圖を待ちつる南宮山の、藝州の大勢、安國寺、長束なんどの手の者は、内府が旗元の直中へ、面を黑まし切て入らば、
小助　譜第の本多井伊なんどが、如何に急るもその詮なく、
左近　雪崩を打ちて白み渡り、
三成　やがて内府が皺首に、見參に入らうずるわ。
（士卒登場。）
士卒　申上まする。
三成　何事ぢや。
士卒　大谷刑部少輔樣、御越にござりまする。
三成　例の乘物ならん、其儘にて御通し申せ。
士卒　はあ。
（士卒下場。）
小助　合戰明日に極まる上は、我等とて長居は無益、急ぎ信州へ立歸り、此方よりの吉報を、受くると共に關東勢を、唯一拉ぎに仕らむ。
三成　素より隙間のあらぬ房州、倅とてあるまじいが、なほ其上に心を付けられ、やがて愛たき對面の、話し草を造り申さう、陣中といひ夜分なれば、返しの消息は認め申さぬぞ。
小助　畏つて候、さらば御免。
左近　何分共に御頼み申すぞ。
（小助頷く、三成左近に送れと氣色す、左近立つて小助と共に下場。三成扇にて手を打ち人を喚ぶ、武士二名程登場して、主の氣色を伺ひ、床几を直すことなどあり、その間に輿に舁かれたる大谷刑部少輔登場惡疾のため眼癈たるうへ面相を損じたるより、覆面したる儘にて輿を出でて座を定む。）
三成　病中も御厭ひなく、松尾山への御發向。近頃での太

儀、御芳志過分に存じ申す、して彼人の樣子はな。

吉繼　あたりを遠ざけられい。

三成　各には幕外へ出られて、四邊に心せられい。

一同　はあ。

（一同退出す、雨また降り出だす。）

吉繼　あたりは。

三成　某の外には影もない。

吉繼　さらば申そ、筑前の殿は夕顏と見たよ。

三成　夕顏とは。

吉繼　昨日は昨日、今日は今日、風に任せてふらついておざるわ。

三成　裏切りとまでも極まらぬでな。

吉繼　我が黨に旗を立て、伏見を攻落したる小早川、これがあの爲證にては、十が九つまでは裏切りかな！

三成　當の大將秀秋は恐るる敵とも思はぬが、名だたる家老も多かるに、八千の人數あり、もし敵と見ば、如何なる備へ立つべきぞ。

吉繼　異心は無しと某に、言葉を番へはしつれども、見えぬ眼に讀みたる心中、なにへろへろの筑前勢、合戰の間の一日半日、拙者が手の者千二百にて、山の麓に陣を張り、身動かしをさせ申さぬわ。

三成　此上は何分共、御身が働きを願ふばかり、

吉繼　事の始めに止めはしたが、聞入のない今度の企、元より命は友垣の、情に御身に參らせた、吉繼息のあるうちは、松尾山の旗色など、同時に弓引く大軍、大事の心に掛けさせられな。

三成　御身の請合心易し、此上は明日の運ぢやぞ。

（家の一隅に雨漏りて音激しく聞ゆ。）

吉繼　水の音な。

三成　古びた家で雨漏が致す。

吉繼　雨が漏る！

三成　草も枯つれば雨も漏らうで。

吉繼　いかさまのう、雨漏には桶など受けに並べうまで。

三成　降り止むまでが大事ぢやわ。

吉繼　降り止むまでが命ぢやわ。

（新吉郎驅け來る、家臣留む。）

家臣　御奧にては密談とおおやりまする。

新吉　さらば是れより御意得申さう、ならなら御主君、小西殿には今方御着陣にござる。

三成　うむ攝州がわたられたか。

吉繼　さらば我等も陣所へ歸らう。

（吉繼立つ、三成は吉繼の手を取り。）

三成　東白まば御邊も我も、生死の巷の關が原、勝利を得なば此世の對面。

吉繼　假か盲の刑部なれば、討死致さば三途の河原で、御身の顏を見るであらうよ。

三成　何れにしても逢ふぢやまで。

吉繼　何れにしても逢ふであらう。

二人　むはははは。

（三成扇にて手を打つ、新吉郎及び家臣等幕外より入り來る、吉繼は輿に乘る。）

三成　御見送り申せ。

吉繼　是れは造作に預るよ。

（三成の外、一同下場、島左近蒲生備中と共に上手より登場。）

左近　是れにおはせられましたか。して粗增は如何でござりましたな。

三成　おう散散ぢや。

備中　すりや裏切か。

三成　なに、大事の前の小事、大谷一手にて引受うと申したわ。

左近　目こそ晦けれ、彼殿が采取つて下知なさば、いかに多人數なりとても、小早川が勢どもを支へるには過ぎものなり。

備中　其間に當の敵を竭くさば、筑前勢は風前の、燈と共に消え申さん。

（新吉郎登場。）

新吉　はつ浮田殿愈よ御着相成りまいた、先手は掃部殿にござりまする。

三成　宰相にも着かせられたか、柴、島津、小西、浮田、よし小早川を敵と見ても、大谷、脇阪、戸田、木下、また南宮山のあなたには、毛利、吉川を始めとし長束、安國寺、長曾我部、正奇の二道を一發の、烽火と共に切入るべき、手段は既に定めたり。

左近　兼て直江城州と御申合せ圖に中り、愈よ明日は、天下を爭ふ大軍。

備中　味方の員數、敵の切れ數、合せて二十萬餘の大軍、恐らく日本始まつての勝負、心地よい事になりましたわ。

三成　太閤殿下の御跡を、手を濕らさずして握り込む、江戸の內府の腹黑さ、取つてよい天下なら、我等が取るも支はあるまい。

左近　所詮軍は雙六の、丁と出るか。

備中　半と出るか、

三成　賽の目が業をするまで。左近、備中、大博奕のう、むはははは。

（この前より雨は降り止み空明るくなる。）

新吉　親人、あれ御覽ぜよ雨は降り止み、雲の拗の合間より、薄る光は月輪の、現はれたまふと覺えたり。

左近　明日は天氣ぢや。
備中　戰ふにも榮があるわ。
左近　久振にて内府公が、押付を見るであろ。
備中　夜明けるにも時があるまい、御分も我等も陣所へ罷らう。
左近　さらば殿。
三成　方方。
（三人下場、蟲聲起り月出づ、向ふにて騷がしき音して、三成が乘替の馬飛躍し來り、三成を見て立留る、三成は不審す、厩の小者後を追ひて來る。）
三成　如何致いた。
小者　暗紛れの道中に、御乘換に付添ひましたる舍人、川の深みへ陷込んで、其儘に成りましたに、驚いたと見えまして、止むる鼻綱を引き切り、一散に飛び出しましたが、逸れずに陣所へ入りました。
三成　深みへ入つて命を捨てたと、
小者　左樣でおざります。
三成　厩小者の常ながら、足許を顧みぬ不覺、不便な最期を致し居つたな、馬は裏手へ繋ぎ置け。
小者　はあ。
（小者馬を引きて下場。狂女の謠遠に聞ゆ。）

唄　〽月は出でても心は曇る、闇に迷ふは誰ぞや、いぢらし。
三成　悉く手配は濟んだ、舍人は失せても馬は歸りぬ、筑前が心變りも、勝利の後の料理には、使りよき事もあり、天下は廻る水車、かの徳川を追くか追かぬか、明日の合戰の待遠しさよ、唯十二時に日本は、我が腕にて美濃地のほとり、關が原へは納め置く人の力は限りを極めぬ、唯この上は天道の奇しき轍の眞を執らむ。

――幕――

亂れ筐（二場）

場

一　秩父里の侘住居

二　東興寺の假籠

時

正平の頃

人

梅世姫　新田の息女

小筐

竹童　小筐の一子

猫實八郎

捕手四人

庄次　村長

藤作　百姓

おひえ　同女房

一　秩父里の侘住居

農家。前には五六枚の筵を並べて籾を乾したり。餘り太からぬ榛樹の並木のやうに並んだる間に、横樣に竹を結び付けて、藁を積掛けたるものあり。榛樹の蔭より負木に稻を付けたる百姓藤作、女房おひえと共に出て來て、門口から、

藤作　おかさま、今戻りましたぞ。

（と聲を掛けると、家の中から、女主人の小筐が出て。）

小筐　藤作さま、いかい太儀であつたの、まこりやおひえさんも負うて來て下されたのかいな。

ひえ　少し計りで、片が付くと思うてな、妾も一と背負擔げて來ました。

小筐　それはまあ氣の毒な、さぞ重かつたであろ。

ひえ　なんの此方のがたんと負うて呉れたによつて、重い事も無かつたぞいの。

藤作　なう、おかさま、いつも云ふ事ぢやが、なんと後添を入れたら何うぢやぞい、此方ほどの器量で、獨寢はあつたらもんぢや。

ひえ　お連合の死なしやれたのも、やんがて二年になるであろ。

小筐　さればいの、過ぐれば早いは年月なう、昨日か今日かと思ふうち、來月は早や三回忌になりまするわ。

藤作　小供というたら竹童ひとり、成人には程があるだ、百姓業の骨折仕事、山稼ぎの荒氣なさを、おかさまにさ

せるのは、おら如何にも可愛さうぢや。
ひえ　あんでも荒い仕事は、私等が受取つてすべいから、遠慮せずにおしやるが好いだよ。
小笹　有難うござりまする。
（ここへ村長庄次出で、）
庄次　やれ、ここにか、おう藤作も居たか、今方御地頭様からお觸れが出たぞや。
藤作　なんぢや、お觸れぢや、年貢を早く納めろかいの。
庄次　いやいやそんな事ぢや無いぞや、何でも昨日軍があつたが、新田方は大敗軍、さればいつ何時、此村へも、落武者が來ようも知れず、分けて何とやらいふ若い女の大將があるげな、そんなのを見付けたら、早う代官所まで知らせよとのおん事ぢや、よう心得て下されや。
小笹　畏りました、すりやまた新田方が負けましたかいの。
庄次　おうおう何時に變はらぬ大敗亡とよ、さうさう、失くなつた和主の夫は、無二の鎌倉方、軍の怪我で足腰が不自由になつたとやらで、此村で果てられたが、この咄を聞いたら、嘸喜ぶ事であろ。
小笹　夫が聞いたら喜びませうが、なに妾などに取りましては、たとへ何方が勝たうとも、心掛りはありませぬ。
庄次　これこれ浮かと口を利かぬもの、そんな蔭口を、代官所へ出入るものに聞かれたら、爲よくはあろまいぞ。

藤作　なんでもおいら達は野良へ出て、鍬と鋤とで畑で軍ぢや、働きや屹度勝軍ぢや。
ひえ　二人揃つて暮らして居れば、なにも外に欲しいものはない。
庄次　いかさま藤作は、夫婦揃つて居るから好いが、小笹なんどは二年越、後家暮らしで淋しかろ。
小笹　いえ、馴れますれば冇の床、なあに竹童と共寢の夢、寂しい事はござりませぬ。
藤作　竹童といへば何うしたらう。
ひえ　後から來ると云うてであつたが。
庄次　まだまだ觸れる家があつた。どれ急いで行かうかいの、藤作よ、屹度今のことを心得ろよ。
（庄屋は歸り行く。）
藤作　さあさあ嬶よ、もう一と稼ぎぢや。
ひえ　今度はおらの田の番ぢや。
小笹　それならば妾も後から參りませう。
藤作　あに、うらが田はちくとばかりぢや、二人で苅つたら一息ぢや。
小笹　天氣も少し催した様子、取入れぬうち雨に逢はせたら、濕めつてならぬであろ。
藤作　さうぢやとも、さらば急いで苅込まう、なう嬶。
ひえ　早う田面へ參りませう。

（二人は立上がる。）

藤作　さらば、おかさま。

小笹　干物を取片付けたら、妾も後から參りまする。

藤作　なに、それには及ばぬぞいの。

（後に小笹はなほも空を案じ。）

小笹　悪い雲が出て來た、秩父颪の冷風に、こりや今夜は降るであらう。

（筵を取片付けて居る處へ、小笹の子竹童は、藁繩を輪にしたるを持つて歸り來りぬ。）

竹童　母様、いま戻りました。

小笹　竹童、いま戻つたか、何をして遊んで居たかいの。

竹童　繩飛びをして遊んで居た。

小笹　おうさうかいの、してその繩は誰が綯ふたぞいの。

竹童　私が綯ひました。

小笹　なんぢや、我御料が綯うた、それはよく綯へたぞ、どれどれ見せやいの。

（繩を見て。）

小笹　おうおう大人にも增した器用な事ぢや。

（と褒めたが、繩の間に殘れる紙切を見て。）

小笹　こりや何んぢや、この紙は、

（と心付きて。）

小笹　これ竹童、なぜにそなたは嘘をば付くぞ。

竹童　いえ、嘘は付きませぬ。

小笹　これ嘘付かぬといひながら、この紙切れは何うしたのぢや、これこの繩は神様の、御前に張つた新稻の、神繩を外したものではないか、我御料はどうしてそれを持つてる。

（子供の逃げようとするのを捕へ。）

小笹　こりや竹童、なんで此方はかやうな悪さをするぞ、女親と侮どつてか、たとへ一筋の繩ではあれども、神様への捧げものを、奪取るとは淺間しい。なぜに我御料はこのやうな、情ない根性になつたぞいの、なう欲しければ妾に云や、應ふものは何んでも取らさう、此後決して人の物を、只欲しいとは思ふなよ。

（竹童は涙を絞して意見を聞いて居る。）

小笹　さあさあ分つたら其れで好い、泣きやんな泣きやんな、向後さへ謹しめば、もう妾は叱らぬわいの、さうさう能い子ぢや手傳うてくりや。

（手傳はせて、筵のものを家内へ運び入れ。）

小笹　こりや竹童よ、今にも降りさうな空合なれば、さぞ藤作殿も迫いてであろ、いつもお世話になる百分一、妾も苅入に行くほどに、大人しう留守をしませうぞ、それそれ籾が飜れてぢや、よう掃き寄せて置くが好いぞや。

竹童　籾を掃くのかや。

小笹　よう掃いて置きや。

（小笹は鎌を持つて畑へ行く。あとに竹童は覺束なき手付にて、箒を持つて庭を掃く處へ、新田の姫君梅世は、鎧下、直垂を着て、小刀を帶びて馳け來り、竹童の方へは見向きもせず。）

梅世　もの申そ、もの申そ。

竹童　家には誰れも居らぬのぢや。

梅世　そうかや、してお身は此家の子供かの。

竹童　おう母樣は田へ行つてぢや。

梅世　お身の外には誰れも居らぬかいの。

（竹童は頷く。）

梅世　幸ひ！　おうそこな子、暫し妾を休ましてたもるまいか。

竹童　いやいや、母樣が留守故に、知らぬ人を入れると叱られる。

梅世　これこれ後から追うて來るものがある故、日の暮れるまで隱してたもれ、なう是れこれ、この刀をおますぞ、さ、これを取らす程に、なう。

竹童　この刀を下さるのか。

梅世　それを上げう程にな、日の暮れるまで隱して下されい。

竹童　ほんとうに下さるか。

梅世　それ。

（と小刀を與ふ。竹童喜んで刀を弄ぶ。）

梅世　それでは一間を借りるぞや。

（と家の中へ入らんとすると。）

竹童　姉さま、家の中へ隱れては、母樣が歸つて來ると叱られる。それよりかここへ隱れた方が好い。

（と稻村を指す。姫は不審の氣色なるを、竹童はなほも稻を持ちて。）

竹童　此中に入つて寢て居れば、目付かりはせまい。

梅世　負うた子に教へられるとはこの事か、さらばここへ隱れませう、なう誰が來ても、なんにも知らぬと答へてたも、よいか、よいか。

（竹童は切りに頷く。梅世姫は稻村へ入ると、竹童は上から稻を掛け終る。稻村の中にて。）

梅世　そこな子。

（と呼ぶ。竹童傍へ立寄り、姫の話を聞き取り。）

竹童　では見えぬ處へ納つて置かう。

（と小刀を持ちて家の中へ入る。足利方の捕手の頭人、猫實八郎は太刀を提て、捕手四人を連れて出で來り、）

八郎　こりや者共、承つた樣子では、どうあつても此村へ忍び込んだに相違無さそうなや、この家で尋ねて見よ。

捕手　はあ。

（と二人ばかりは家へ飛込んで、竹童を連れて出る。）

八郎　こりや子供よ。この邊を若い見馴れぬ女が通りはせなんだかの。
竹童　なんにも知らぬ。
八郎　知らぬことはあるまい、若い美しい女が參つたらう。
竹童　なんにも知らぬ。
八郎　知らぬとさへ申せば、好いと思うて居ると見えるわ。
竹童　おりや、なんにも知らぬ。
八郎　はて困つた奴の、ええ、關はぬは、家探しせい。
捕手　はあ。
（と皆皆家の中へ亂れ入る。）
八郎　外には袖の通ひ路も、絶えてあらざる一筋道、あたりに隱せしこの太刀を、拾ひ申せし上からは、この家の前を過ぎりし筈ぢやが。
（と考へつつありしが、竹童の太刀に目が暮れたる樣な、八郎は見て取り。）
八郎　こりや子供、そちやこの太刀が欲しいかの。
（竹童頷く。）
八郎　どうぢや、欲しければ隨分取らさうが、いま云うたそれその女が何處に居るか、つい我等に教へたら、此太刀を取らせるがな。
竹童　その太刀を下さるか。
八郎　おう教へたら、我御料におますぢや、それ見い。

（と太刀をするりと拔き。）
八郎　これこの通り、よう光つてぢや、なんと美しいものであらうぞ。
（とまた鞘に收める。）
竹童　本當に下さるか。
八郎　教へさへすりや、弓矢八幡、眞實そちへ遣はすわい。
竹童　その姉さまは、
八郎　その姉樣は、
竹童　おりや何んにも知らない。
八郎　こりやこりや、知らぬことは有るまい。
（捕手ども出で來りて、）
捕手　諸所を尋ねましたれども、一向樣子が、
大勢　分りませぬ。
八郎　よし、よし。
（とまた竹童に向ひ。）
八郎　おう、これ好い子ぢや、ほんにこの太刀を遣るからの。
捕手　お頭、その太刀を、
八郎　よいと申すに、な、今のそれ姉樣が、何んにも知らぬと云へと申したかの。
竹童　おう。
八郎　さうか、さうか、この太刀をそれ長いわ、長いわ、

やがて其方の身丈ほどあるの。

（と竹童に挿させ。）

八郎　そして、何う致した。隠して呉れと申したらう。

竹童　叔父さま、能う知つてぢや。

八郎　おうおう、叔父も隠れて聞いて居つたわ、はははは、どれその姉様の隠れて居る處を中てゝ見せうかの、

（竹童は頷く。八郎は上手へ指さして。）

八郎　どうぢや、此方であらう。

（竹童首を振る。一陣の風吹き来り、榛樹の枝葉、掛け藁など鳴る。）

八郎　違うたか、では此方か。

竹童　おりや、なんにも知らぬ。

（八郎は竹童の素振にて、此方とは悟れども、他に隠れ處もなき故に訝しく思ひしが。）

八郎　こちらか、こちらか。

（と向ふ。竹童は下を向いてあるに。）

八郎　こりや子供、教へぬとその太刀は取らさぬぞ。

（と太刀に手を掛ける。）

竹童　叔父様、あそこぢや。

（と稲村を指す。またも狂風吹きて、掛け藁ばらばらと落ちたる間より、衣の端顯はれたり。）

八郎　それ。

（と稲を掛けるにぞ、捕手の者一度に稲を拂ひて綱を引出だす。竹童は家内へ逃げ込む。姫は手を盡して働きたまへども、獲物もなき上に、衆寡敵せず、追追と頻きる風と共に遂に捕はれたまふ。）

八郎　大儀大儀、さ、歩ませたまへ。

梅世　いづくへ。

八郎　はて鎌倉へ引いて行くのぢや。

梅世　假初にも新田の流れぢや、下人と共には歩まれまい。

八郎　いかさま、いかさま、板輿の用意もないが、それそれその戸を外せ。

（戸を外させ。）

八郎　夜を籠めて道中もなるまじ、隣村の東興寺まで伴ひ申す、さらば縄共を集めて、輿がはりを調らへい。

（稲かけの竹を取り外し、縄を集めさすると、竹童出て。）

竹童　その縄は私のぢや。

捕手　え、小童め。

（と云ふうち、八郎心付き。）

八郎　おう最前の太刀をおこせ。

竹童　あれは貰うたのぢや。

（と逃げにかかるを、八郎押さへて太刀を奪返し、竹童を突遣り、姫に向ひて。）

八郎　いざ召しませ。
梅世　新田の運もこれまでぢや。
（と戸板の上に乘り、捕手に舁かれて伴はれ行く。あとに竹童は。）
竹童　太刀をかやせ、太刀をかやせ。
（と喚く處へ。小笹は束ねたる楉に鎌を挿したるを肩にして歸り來る。）
竹童　母樣、太刀を取返して下され。
小藤　なにを云やる。
竹童　よその叔父樣が噓を付いて、私の太刀を持つていた。
小笹　なに我御料の太刀を持つて行つた。
竹童　おう、まだ貰うたのがある。
（と走り入つて、姫から貰ひし小刀を示す。小笹は一目見るよりはつと愕き。）
小笹　こりや竹童よ、この守り刀はどうして持つておじやるのぢや。
竹童　姉樣から貰うたのだ。
小笹　して、その姉樣は何うしてぢやぞ。
竹童　今縛られて行つたのぢや。
小笹　なに縛られて……はての、見覺えのある守り刀、こりや梅世姫樣御誕生の折からに、殿樣よりの遣はしもの、その御使はこの小笹、それがどうして此兒の手に。
（といふ處へ、村長は馳せ來る。小笹は刀を隱す。）
庄次　なうなう小笹よ、歸つてであつたか、今がたここでは甚い騷ぎよ、何がさて新田の姫君、梅世姫といふ方が、落ちて來たのを捕へたのぢや。いや女でも腕利きで捕手の衆も大難儀であつたが、多勢に無勢、男に女ぢや、とうとう縛られて、今夜は東興寺へ假の宿、所でこちの竹童だが、一端は隱まつたれど、在處を明かして捕はれになつたは却つて手柄、子供の事とて、お構ひないとの事ぢや。
小笹　もし庄屋さま、そしてその姫君とやらは、どうして我家へはござつたのぢやろ。
庄次　さればの、繩を付けて引いたのではなし、大方道に迷うて來たのであろ。
小笹　こちの竹童が匿まつた上に、また在處を明かしたとは、どういふ譯でおざるかなう。
庄次　いや其處ぢやて、その女武者に賴まれて、掛稾の中へ匿したげな、さうあらう、さうかさうか、後から追手が來て、なんでもその姫君が持つて居たとかいふ、銀作りの立派な太刀ぢや、これを遣るから敎へいと誑かされて逈が小供ぢや、つひ敎へたと見えるわい。いやはや罪の無いものぢやて。
小笹　さては一端かくまつて、また敎へたのでおざるかい

の。

庄次　それ故にお構ひないぢや、おうおう追て褒美を取らせると仰有つたわい。何しろ騒動ものが捕はれたで安心しました。風が凪いだら雨になりさうだ、おお寒む！さらば氣を付けて休まつしやれ。

（と村長は我家へと歸り行く。あとに小笹は差俯向きて、暫くは物を案じつつありぬ。）

竹童　母様よ、太刀を取返して下され、あの叔父様は嘘付きぢや。

小笹　なに嘘付きぢや、遣るというた太刀をおこさぬで、嘘付きぢやと云やるのか。

竹童　おう。

小笹　我御料、その小い刀を貰うた時に、その姉様は何と云うた、隠れた……所を……誰れにも……云ふな……と申されたであらうなう。

（竹童頷く。）

小笹　それを此方はなぜに教へた。母の爲には故主の姫君夫の爲には敵の片割れ、因果同志が夫婦となり、御家の紋の丸二つ引、丸三つ引の筋違ひ、軍で受けた手傷を云ひ立て、秩父の奧の山の峽、浮世を避けた賤の伏屋も、音づる風に亂れ小笹、十には足らぬいたいけの、小供に嘘を教へたぞ、人に云はじと頼まれながら、物に心を奪はれて、など一端の義理を破つた、其方の爲に新田の御家は、今日を限りの破滅となつた、父にも背き母にも違ひ、この一大事を引起したのは、みんな我御料の淺ましい根性から起つたこと、さあなぜ嘘を付きました、なぜ僞りを云ひました。

竹童　母様許して下され、勘忍して下されい。

小笹　いいや許されぬ、勘忍しませぬ、そなたの父様と契を込め、共に忠義は捨てたがの、一生に嘘とて付かぬ夫婦、それにどうして我御料のやうな、僞りものが子に出來た。父の心か母の血か、そも誰れが魂の、我御料の胸には宿つたぞ。ええ男の子は男の魂、嘘ついてまで足利方の味方をするからは、顔を立てるこの母も昔にかへる新田方、御主の仇め覺悟しや。

（と鎌を振上げて殺さんとせしが。）

とは云へ、二人の仲の一人子、この子の命を斷つときは、今日を限りに氏は絶える。

（と突放せしが、竹童が先の稻叢の中へ隠るる姿を見るより。）

小笹　ええ疎ましいことをしやるの。その性根では成人して、父の苗字を續いだとて、反りて家名の汚れを増さう、もうこれまでぢや、觀念しや。

（と鎌を取つて竹童の喉を貫く。折から雷鳴と共に大

雨。）

小笹　おお時ならぬ雷は秩父の山の時候崩し、我子を殺した上からは、弓矢を捨てた誓文崩れ、天下晴ての丸三つ引、この大雨を幸に、あの東興寺へ忍び入り、姫君さまをお救ひ申さう。

――幕――

二　東興寺の假籠

田舎寺の本堂。かの姫を押込め明日は出立せんとて、二人宛捕手の者は夜番を爲す。寒さは寒し、眠りたくもあり、焚火の傍を離れて甲は乙を連れて來り、

甲　これ和主(おぬし)、眠うはないか。

乙　されば上の瞼と下の瞼とが、仲ようしたがつて困るのがや。

甲　お頭は寢るからよけれ、散散に疲れた上に、代り合つての不寢(ねず)の番とは、我等の役も割に合はぬ。何んとであらう我等寢られることを思ひ付いたが、お身同心はせまいか。

乙　なんとお云ひやる、小雨は降るし、寒うはある、如何にも眠りたうはおじやるが、もし寢入つた處を見られたら、隨分身の上だらうぞ。

甲　そこが楠判官ぢや、これここへ繩を張つて、見よ、御寶前の鈴を外して付けて置く、暗さは暗し闇の夜ぢや、もし曲者が狙ひよつても、要害の繩があるとは悟り得まい。忽ちに足を取られて頭顚倒(づでんだう)、鈴がからから、我等が目を潤と開く、なんと好い智惠ではあるまいか。

乙　いかさま上分別、さらば早速に取掛らうぞ。繩は先のを解いて遣はう。

甲　（と二人して立木と捨石とへ繩を張り鈴を掛けて。）汝(おぬし)の智惠で、先一寢入出來ると云ふものぢや。

乙　なんとよい友達は持ちたうおじやらうな。

甲　あはははは。

（二人は堂の表の方へ行く。雨は強く、物皆眠れる眞夜中に、蓑笠にて姿を窶せし小笹は忍び來り、本堂目がけて行かんとして張りし繩に躓けば、鈴は聒聒と鳴る。）

甲　やや、鈴が鳴つたぞ。

（と捕手の者が騷ぐ聲に、小笹は身を潛めたり。甲乙の捕手は焚差の火を持ちて來り、四邊を見廻し。）

乙　はて誰れも居らぬぞ。

甲　風であらう。

乙　風にしては、音が大きかつた樣であつたが、

甲　それにしても何も見えぬではないか。

乙　かやう致さう。一と廻り堂の周圍を見舞うて寢よう。

甲　我等は御免蒙る、お身一人でお廻りやれ。

乙　さまで骨を惜しまれな。

甲　いやいや堂の樞は外から差してあるばかり、若し曲者に開けられては一大事ぢや。

乙　道理かな道理かな、さらば拙者一人で廻つて見よう。

甲　それはお身のよしなにおしやれ。

乙　心得た。

甲　寒いわ寒いわ、焚火の側を離れては、片時も居られぬ。

（と甲は元へ歸る。乙は行きかけると、後より小笹は物をも云はず、その捕手の横腹を突き通して、一思ひに害し終る。死骸倒れて繩に當りて、鈴また鳴る。）

甲　なんぢや、また鳴るのか、待て待て。

（と燃差を持ち來り。）

乙　はて面妖な、誰れも居らぬ、ははあ二郎吾が惡さをしをるな。

（と消えかかる火を吹きて、寺の廓を廻りて歸らんとする後より、小笹走り寄つて甲を捕へ、胸の邊を突き貫す。鐘聲聞こゆ．小笹は本堂へ入る。捕手の丙丁は出で來り。）

丙　鐘が鳴つたか、ああ、ああ、鐘が鳴つたら迷惑ながら、不寢番をせずばなるまい。

丁　それもこれも一夜限り、あの囚人を引渡せば、御褒美があるとの事ぢや。

丙　しかしな、それもお頭の猫貫さまが一人して、旨い事をするのであろ。

丁　なんになつても下役は損なものぢや。

（と語らひつつ來り、二郎吾の死骸を見て驚き走り去る。雨止む。本堂前の燃さしの焚火盛んに燃え上る。小笹は姫の手を引き。）

小笹　さあ落ちたまへ、姫君さま、さ、早う、早う。

梅世　落ちよとは理りながら、そもそも御身は何者ぢや。

小笹　何かの事は落付いたる上にて詳しく申上げませう。私こそ小笹と申して、元はお家に仕へしもの、一方ならず御館さまの、お慈しみを蒙りて、手足利延せし御恩も忘れ、足利方のさる武士と、はかなくも契を込め、共に武道を打捨てまして、この山奥へ籠りましたが、却つて忠の道に應ひ、はからずも姫君さまへ、久方でのおん目通、いろいろのお物語は後のこと、この洞合を三里ばかり入りますれば、山又山の峰續き、敵も味方も白雲の、心置きのない里があり、先づそこまでは急がせたまへ。

梅世　志は有難けれど、道の邊に隱し置きし、亡き父君のおん筐、奪ひ取られし腰のものを、取返さずに參るときは、末代までの弓矢の恥。

小笹　そのお腰のものとは、もしや。

（とかの守り刀を出だす。）

梅世　こりや先程童へ與へし刀、それが如何してそもじの手に。
小篋　はい、あの子供こそ亡き夫の、忘れ形身のその獨子、それを殺してお味方になりました。
梅世　なに、いとしの子供を殺してとや。
（といふ處へ、猫實八郎は捕手を連れて出て來り。）
八郎　やあ大切の囚人、逃ようとは奇怪なり、この猫實が目に掛つては、溝の鼠も同じこと、さあ尋常に腕を廻せ。
梅世　無禮なり八郎とやら、かの御太刀を我儕に渡し、とうとう此場を立去れい。
八郎　いや、こやつが、先きの樣にも懲りもせず、寢言を吐き居るわい。その御太刀こそここにあり、その孱弱い細首を、己れの太刀にて切つておまさう。それ。
（と八郎は姫に切掛ける。）
小篋　やあ姫君へ緩怠至極。
（と八郎を相手に切り結ぶ。捕手二人は姫へ掛る。段段とあしらひて姫は表の方へと切合ひて入る。あとに八郎と小篋とは激しく戰ひ。小篋は遂に組敷かれ、八郎は小篋を刺さんとす。焚火の光暗し。小篋は下より八郎を防ぐうち、姫來り。）
梅世　小篋。
小篋　はあ。
（姫、何れを何れと分らぬうち、また火光強くなり、遂に八郎を切り、小篋と手を交はす。）
小篋　姫君樣。
梅世　小篋とやら。
小篋　御太刀はお手に入りましたか。
（姫は太刀を探り拾ふ。この間に小篋は松炬に火を點け持ち來る。姫太刀を押戴く。）
小篋　いざ姫君樣、忍ぶものには夜こそ好けれ。
梅世　深山の奥に時を待ち、御父君の吊ひ軍。
小篋　丸三つ引の御旗を、尾上の空に吹き靡かし。
梅世　再び世に出で家の名を。
小篋　天が下に知らさせたまへ。
梅世　危をき處を逃れ得たるも。
（梅世姫は小篋の手を取り戴かうとするを、小篋ふり拂ひ。）
小篋　あれ勿體なうござりまする。
（と平伏する。）

――幕――

三七信孝（三幕）

場

序幕　岐阜城天守
二幕目　長良川巴淵
大詰　内海大御堂

時

天正十一年四月

人

三七信孝　神戸侍從
幸田彦右衛門
寺西喜兵衛
堀内次郎右衛門
近臣數名
淸三郎　小姓
岡田長門守　信雄の老臣
信雄の臣下
老僧
松枝　彦右衛門母
靜緒　彦右衛門妹
侍女數名

序幕

岐阜城天守

稲葉山に據れる岐阜城の天守、遠山近山を窓外に見る、上手に階子の口ある心、下手にもまたその段の口見えたり、當城の主、神戸侍從三七郎信孝の君は、下手なる窓に凭りて安坐し、侍女靜緒が、今様を舞ひつつあるを見る、前に酒盃左右に侍女、後方には、太刀持の小姓、高山淸三郎、少し離れて、近臣數名、堀内次郎右衛門の老いたるを筆頭に、川西喜兵衛、山路玄蕃助、太田監物、古市九郎兵衛など各、酒を酌み交はせるさま。

唄へ卯の花の、垣の根に咲け、人目を引かぬほどに、
　華やかに、忍うで、咲きませ。

（舞のなかばに、靜緒の母にして、かつては信孝に乳を上げたる、老女松枝は、慌しく出で來り。

松枝　あれ、厄體も、無や、この體たらく、靜緒、そなた

どうしたものぞ、合戰最中に、舞の沙汰でもあるまいに。
信孝　松枝よ叱るまい、某の差圖ぢやに。
松枝　さうおぢやりませうとも、なう殿、いかに娘が虚氣ぢやとて、羽柴方の大軍を、目前に寄せさせて、舞舞ふほどの、大器量は無からうず。
信孝　また媼が憎て口叩くな。
松枝　憎て口とや、あの眞を語るが憎て口とや、憎うても、可愛うても、云ふほどのことは申すが忠義、侍女衆は何をうそうそ、御近習の侍士衆も、暫くここを退いて下され。
靜緒　これ母者、いつもの癖とは申しながら、こはまたあまりの仰有りやう……
松枝　生死にかかはる大事の折節ぞ、言葉咎めなどせまいぞや。
信孝　何を慌てて參りしやらむ、（笑ひながら）おう、皆、下れ、媼が、我儘を存分聞いて見やうずるわ。
（これを聞いて、靜緒を始め、一同、左右に分れて階を下り去る。松枝は涙を浮かめつつ。）
松枝　殿、今の爲され方は、ありや何事におざりまする、目先に見ゆる惡運の、黒い雲に遮へられて、お心が晦んでか、捗捗しい、合戰の仕方をも爲されいで、お天守の窓の口、あの寄手の大軍を、御酒宴のお肴とは、あまりに心得過ぎたなされかた。
（信孝は傍なる遠目鏡を、窓によせて、遙かに敵軍を詠めながら。）
信孝　媼よ、羽柴の軍勢は、やがて呂久川を渡るであらう。
松枝　そこぞ、殿、渡られたりや落城は、瞬くうちでござりませう。
信孝　は、は、は、要害嚴しい稻葉山、齋藤龍興が籠つてさへ、容易には落ちぬ名城、父者が岐阜と名を改めて、なほさら堅固に守り立てたれば、まづ當分は持ち耐へが付かう、は、は、は。
松枝　はれ、笑止！　御思案に餘つて、世を捨てものの笑ひ躁。
信孝　世を捨てもの……捨てものか、ははは、捨てるものもあれば、拾ふものもあらうでなあ、ははは。
松枝　その拾ひ手が、恐ろしう存じられます。故上樣の天下の跡も、次第次第に御威光が、薄らぐやうに覺えまするわ。
信孝　それぢやに依つて筑前めと、弓矢を逆に並べあふのぢや。
松枝　その弓取る大將ともあらう殿が、敵を間近に押寄せさせて知らぬ顏、助勢の當もなく、軍評定もなされぬは。
信孝　よい、よい、媼、軍は男子のすることぢや。

松枝　その男子には誰れがしました、武勇も勝れ、智惠も勝つた御公達には、誰が育てあげました。

信孝　えい、また媼の育て自慢、措け、措け。

松枝　いかな武略の達者でも、時の運には背かうやうがおざりませぬ、先達つてから執念くも、お勸め申しあげまする、淸洲樣と和平のこと、少しも早う、取結ばせられて……

信孝　ははは、淸洲の三助殿と、仲直りせいとか、それも好からう、もとより我れから隔ては付けねど、彼人自然に遠ざかるのぢや、父君の弔ひ軍も、進んでは得せぬ人、よい談合の相手にならう、は、は、は。

松枝　まだそのやうづれのことを、……妾が申しあげまするは、ただ一端の時の用、尺蠖の踞むのも、延びるが爲めとの譬喩もあり、枉げて淸洲樣を、お賴み遊ばされて……

信孝　賴むも……賴まぬも……彼人は兄弟、世間に兄と披露される御人ぢや、兄上が下弟を、慈しむは尋常のこと。

松枝　その御兄弟がなにとて諍ひ、お心が直りしからは、とう御和平、さらば娘にも云ひ聞かせて、早う用意を致させませう。

信孝　靜緒を淸洲へ下すと云ふか。

松枝　はい。

信孝　ならぬ。

松枝　何故になりませぬ。

信孝　なぜに下す？

松枝　淸洲樣へ參らさせずば、この和睦は調ひませぬ。

信孝　ふう。

松枝　殿にも事はよう御承知、もとあの靜緒は幼いうち、彼家の御家頼と、許嫁の仲なりしが、いつの間にやら、淸洲樣が垣間見られ、お傍に出せいと達ての仰せ、あらうことか添ひもせぬ婿殿より、暇の狀を取つての無理強。

信孝　そのことは、某も聞き及うだ。

松枝　さ、それほどの御執着、內內のお使者も、その御內意を含んでの申し入。

信孝　無禮な奴、領地の望みともあらうことか、女をおこせなんどと……

松枝　高が女の一人や二人、他人にあらぬ兄御前へ、お遣はしなされたとて、弓矢の恥にもなりますまい。

信孝　云ふな媼、某の運を薄いと測定み、襟元について、靜緒を三助殿へ渡す心な。

松枝　なに、この松枝が、襟元へ付きまするとや。

信孝　付かいでか、我れも思ひを掛けたる女、いかで淸洲へ下さうぞ。

松枝　思ひを掛けたと仰せはあれど、お心に從はぬ、頑なもののあの靜緒、お傍に置くもお目觸り、一層のこと…

信孝　娵、淸洲へ下るを、靜緒は望むか。

松枝　ええ。淺ましいお言葉かな、まだ娘には事の由をも、云ひ聞かせは致しませぬ。

信孝　その承引を致さぬ靜緒が、押付けられたら、淸洲へ下るか。

松枝　たとへ何と申さうとも、參らさせずばなりますまい、今度のお扱ひの素たりや娘の身の上、お主へ忠義、親へ孝行、いかなる難義も厭ひますまい。

信孝　その忠義呼ばはり措け、さほど某を思ふ汝が、などで今まで……物を思はせ、春花咲かぬ悩みの底に沈める我れを横目には過ごしたぞ。

松枝　さ、それは何處までも、娘の心にあること、御意に背くも是非はない、母の手からも活きたる戀は、胸のうちから奪ひ難し。

信孝　それを淸洲へ下す心は、

松枝　はい、この涙にも御覽じあれ、心を退けた娘の身體を、この御城と、商ひごとを致しまする。

信孝　戀は娘の心にありとて、我れに物を思はせながら、淸洲へ下すを承引顏は、何處までも侮り過ぎたり、名のみの兄の信雄づれに、信孝を見かへるのか。

松枝　殿、難題もよい程に仰有りませ、なに一つ思ふことを、儘にさせぬことは無く、氣隨に育てた愛しい我子に、憂き涙を見せるのも、悉皆は殿の爲め。

信孝　さほどに思ふ信孝に、などて靜緒を許さぬのぢや。

松枝　娘が返答を致さねば……

信孝　三助殿へは逆らうとも、この信孝には任かせぬのぢや。

（信孝座を立つ。）

松枝　夢、さやうな、心にては……

信孝　ええ、冷めたい心ぢや。

（膝を拍ちて去る。松枝は思案に暮れたる處へ、靜緒の兄、幸田彦右衞門、あなたの段を上り來り。）

彦右　母者、これにか、して我君は。

松枝　いまがた強いお腹立にて、ここをお立ちなされたが。

彦右　それはまた、如何なる仔細にて。

松枝　淸洲樣よりお扱ひの、內內の使者と云ふが、妾の許へお出あり、表向きのことは何とも、靜緒をおこせとの申し越され。

彦右　それを殿へ申上げたでお腹立か。

松枝　常のこととは申しながら、今日はまた一倍增してのお憤怒。

彦右　むははは、こりや尤も、左樣でもおざらうか。

松枝　こりや忰、殿のおむづかり遊ばしたを、その心得顔は何事ぞ。

彦右　いかさま、御不審は尤も、また殿のお憤怒(いきどほり)も尤も。かねてより妹に、おん心あり顔ながら、外のこととは違ひ、ことには母者、別して愛しうする彼れが身の上、氣隨も氣儘も通り越し、隨分兄を捕らへて、談議などもしかねぬ奴、面倒と存じたで、そのままにして過ごしましたが、御短氣の殿のこと、お額の筋も嶮しく、動いたでござりませう。

松枝　どは云へ、お爲めを計つての事ぢやがな。

彦右　お爲めと覺し召さるゝは御道理、いかさま人目には、味方の旗色、悪しいとは御覽ずらむ、母者、容易うは、申されぬことながら、四邊に人もないこの天守。

（彦右衞門は立つて段の下を伺ひ、さて母に向ひ。）

彦右　いま二日ほどお待ちあれ、秀吉が首見ぬまでも、まづ自慢ものの金の瓢、例の馬標ぐらゐは、分捕つてお目に掛けまする。

松枝　それはまた愛でたいこと、そのやうな事があつたら、御武運長久でおはすわなう、ほほほ。

彦右　武邊に携はらぬ女性(にょしゃう)の御身、御存知の無いのも一定……

松枝　彦右衞、待ちや、それは誰れに申すのぢや、永の間父上に、連れ添うた松枝ぢや、いかな贔屓目にも、見え透くやうな今度の軍、萬に一つも味方に勝目はありませぬ。

彦右　何處までも、包まうとは存ぜしが、あまりなる御心痛を、そのままに見過ごすもいかが、なう母上、内内調じ合はせたる北國方の軍勢、佐久間殿を先手にて、既に今日あたりは、柳瀬まで押しかけたる筈。

松枝　おう。

彦右　今日にもあれ筑前方、呂久川を渡るを合圖、味方は一度に切つて出で、前後を挾んで押包めば、智謀に勝れし秀吉なりとて、打取らんこと必定なり、さりながら今日の人心、いかなる素破忍者(すつぱしのび)の輩、城内に潜み居らんも計られず。それまでは祕中の祕計、知つたるものは主君と某、いま母者を合せて三人。

松枝　おう、おう、さほどの計略あるとは知らず心急くまま無體(むたい)を申しあげたるが、ようこそお堪へ遊ばして、日の端へも出したまはぬ、それでこそこの嫗が、育てあげた三七様！

彦右　なう、この義は決して妹へも。

松枝　云ふ段か、この善い耳も悪い耳も、聞かせずに濟むであらうず。

彦右　して、清洲様の御使者は？

松枝　おう、一禮云うて歸しましよ。
彥右　さらば、我等も同じく參らう。
（と立上り、窓より外を見て。）
信孝　空が曇つて參つたな、見られい母者、先手は旣に、呂久川の向岸まで寄せまいた。
松枝　（喜んで聲を上げ）寄せた、寄せた、今の先きには、憂しと見えたが、聞けば反つて喜悅の寶の車を見るやうな。
彥右　これ母者、お聲を潛められい。
松枝　げに、さよの。
（と二人顏を見合せ。）
二人　は、はははは。
（二人連れ立ちて、段を下り去る。靜かなる雨到る。ややありて靜緖出で。）
靜緖　男心と同じやうな、定めの無い春雨空、降るまいと思うたに、降り出したら小止みもなう、能う休まずに降ることぢや、埒も無う軍を好く、男とは身勝手ものなあ。その軍ゆゑ城籠り、囚はれ人も同じこと、このお天守の窓口から、見やるあたりは寄手の旗波、明日にも打たう攻鼓、風騷がしく聞こえたら、勝つか負くるか定めの付いて、胸にしばらうつ不斷の響は、引換に靜まらう。
（と窓より四方を見遣る。信孝來り。）

信孝　靜緖。
靜緖　殿樣か。
信孝　何してぢや、
靜緖　（外を指して）折からの雨に、あれ御覽あれ、遠山には雲が掛かり、近山には霧が立つ、その霧の間からは、躑躅の花の紅色なが、霏霏と見えまする。
信孝　いかさま、美くしいと申せば、美くしいなう。
靜緖　でも、物足らぬ仰有りやう。
信孝　なに、物足らぬ？
靜緖　足りませぬはなう、美くしいと思召したら、ただ美くしいとは仰有らいで！
信孝　は、は、は、むつかしいことを云ふ人ぢや、自體我等には、躑躅の花、それほどに美くしいとは見えぬ、時になれば咲く赤い花、珍らしい顏に見るは與醒め、女童と違ふ男子ぢや。
靜緖　仰せとも覺えませぬ、古來よりの名將達は、歌詠まれ、唐詩つくられ、文武二道に達せられたと申しまする。
信孝　名將はさうかも知れぬが、信孝には歌は得讀めぬ。
靜緖　ほほほ。無差とした……、天下に名高き織田の若殿、お前樣が風雅の道に、お嗜みが無いのはなあ！
信孝　何と云はうと、無いは無いのぢや。
靜緖　お氣强のお生れ付きとて、武勇に掛けては引けを取

らぬ、……

信孝　その一徹の信孝に、靜緒、いつまで其方は物思はする。

靜緒　え。

（雨次第に强し。）

信孝　兎角に物を包み得ぬ、信孝も戀なればこそ、言葉の端にほのめかすを、あはれとも思はいでか。

靜緒　………

信孝　今日こそは一口に、其方の胸を云うて聞かせい、なうそちは、この信孝を、性得嫌ふか？

靜緒　いいえ。

信孝　外に思ふ男のあつてか？

靜緒　いいえ。

信孝　さらば何とて某に、その腕をば任かさぬのぢや。

（と、手を取るを、靜緒は振拂ひつ）

靜緒　ても殿樣、妾は凡べての男が嫌ひぢや。

信孝　なに。

靜緒　殿樣が男でなくば、、、、もそつと仲好う暮らさうと、終日思ひ侘びまする。

信孝　なに、男が嫌ひ？

靜緒　男は嘘付きぢや。

信孝　（靜緒の云ふを遮りて）信孝は嘘は付かぬぞ。

靜緒　己が勝手を計るものぢや。

信孝　我等は他人の上を思ふに。

靜緒　男は情の薄いものぢや。

信孝　信孝の心は深いぞ、いや、他は知らず、御身を思ふ心のほどは巴が淵の、渦卷く水底よりも深いぞ

靜緒　その深いのも男の心、水底に女が立つたなら、直に淺瀨が出來るであろ。

信孝　戀の深みは千萬無量、悉くの領地を埋め、數の寳を沈めても、乃至、信孝が生命なりとも、この深みには丈が立つまい。

靜緒　たとへ何であらうとも、男と云ふは頼まれぬ。

信孝　かほどに云うても……

靜緒　あゝ、一生男は持ちませぬ、鳥の翼を斷つが男、女の自由を縛るが男。

信孝　その嫌ひといふ男に逢はせう爲めに、そちを淸洲へ下さうと、今がたそちの母者が云うたぞ。

靜緒　靜緒にも、虫といふものがおざります、生みの親でも傀儡のやうに、思ふままには舞はされますまい。

信孝　さらば淸洲へ下るは否か？

靜緒　このお城を離れては、何處へ行くのも、好もしう存じませぬ。

信孝　城を離れるが嫌！　この城に何條の好き處があつて

か？
靜緒　母者が居りまする。
信孝　おう。
靜緒　殿様も居られまする。
信孝　我等が在るも、好きのうちか？
靜緒　男でない殿様が、世に一ち好もしい。
信孝　男でない我等！　ああ、さりとは頑固な！　あれ見い靜緒、呂久川の彼方まで、雲霞のごとく押し寄せ來りし、羽柴勢を破らんは、いま數日のうちにあれど、そちの胸に築いたる、黒鐵の大城を、陥すべき采配は、信孝には覺束無。
靜緒　（なかば獨語つやうに）つひの果まで、戀せぬ男は無いものか。
信孝　（聞き咎めたるやうに）男の戀せぬは、廢れものよ。
靜緒　それは誰れから習ふであろ。
信孝　生まれるときに享けて來たのが、若い血汐と流れ出すのぢや。
靜緒　思ひ出さでは、濟まぬものか！
信孝　戀なき男子は、墓所にあるわ。
靜緒　ああ、戀知らぬ、男があつたら、幾生までも頼まうものを。戀する時には男の權威も、女の前には草履同然
ああ！　ああ！

（と、窓によりて太息つく、信孝これを見て。）
信孝　情知らぬは女にあらず。
（と行き過ぎんとす。靜緒は窓に凭りたるまま、信孝を冷然と見て。）
靜緒　かくまで男は弱いものか。
信孝　（毅然として）強さが、女の誇らうことか。
（と去る。）
靜緒　旗差物の數の増したは、明日にも河を打ち渡し、この城下に押寄せて、一と合戰のあらうも知れず、二百十日の空模様、風雨の來るのを待つやうな。
（靜緒も下り行かんとす。あなたより、上り來りし、家臣川西喜兵衛は、冷笑して伺ひより。）
喜兵　靜緒どの、靜緒どの。
靜緒　川西さま、何の御用。
喜兵　何の御用！　はて、用は其方に覺えがある筈。
靜緒　ほほ、また何時もの話かいの。
喜兵　何時もの話とは曲も無い、川西喜兵衛、御身の爲めに戀を知り初めた、お身さまさへ承引あれば、早速刀自へ申し入れ、改めての婚禮沙汰、男子風は二の町でも、戰場の働きでは、他人にはあまり遅れぬ心得、靜緒御寮の婿金と披露しても、さうさう恥づかしうはあるまいぞ。
靜緒　恥づかしいの、似合ふのとは、それは他人の申すこ

と、我れと我が、睫毛は見えぬものな。
喜兵　見えぬ段か、はははは、見え透いて困るげな。……さ云ふお身こそ睫毛が見えぬ、明日にも痛い腹を召されう殿へ、首たけ落ちさせらるるは、石佛と賭け事をするやうなもの、ははは。
靜緒　喜兵衛どの、そりや何を云はれまする。
喜兵　怒られな、怒られな、なう、今度の軍、敵は破竹の羽柴筑前、大軍をもて攻め掛けられては、とても、とても、殿の采なんどで、防ぎが付かうものでなし、落城は數日のうち、かかる危なき御主へ、戀慕するとは、賢い御身にも似合はぬこと、今の身分こそ低けれ、敵方へ隨身なさば、直ぐにも一國一城の、主ともなるべき某ぢや。なう靜緒どの、優さしいお返事をめされても、女冥利に盡きますまい。
靜緒　なに、筑前方へ付かるるとか。
喜兵　いやさ、何も柴前方へ付くとは申さぬ、付けば然うぢやと申すまでぢや。上様御盛のころの大名衆も、徳川殿を始めとして、大半は筑前味方ぢや、なう、この喜兵衛が云條を立てさせられて、宿の妻とはならせられい。
靜緒　妾は人の妻とはならぬ。
喜兵　はて、頑固なことは申さぬもの、な、あたりに人なき天守の高樓。

（と傍へ寄る、靜緒はつと立退き、）
靜緒　寄らしやりますな。
喜兵　さて無差とした……
（と、また傍へ寄る。折から家臣、堀内次郎右衛門躍り込むやうに入來り。）
次郎　喜兵衛どの、喜兵衛どの。
喜兵　次郎右どの、なんぢや、賴みがひもない……
次郎　搦手の口には立つて居たが、あれ御覽なされ、羽柴方は次第に陣を引きますげな。
喜兵　なに、寄手が陣を引く……、これまで攻込んだ羽柴勢が。
（と、窓から遠くの方を望み見て）
喜兵　いかにも。あれ、あれ、總軍後へ引上げて、旗も、差物も、此方へ尻を靡かすわ。
（と次郎右衛門と顏を見合せて呆るる。）
靜緒　なに、寄手が引く……
（と、これも窓より首を延ばして、外を見る。次郎右衛門は喜兵衛の袖を引き。）
次郎　なう、喜兵衛どの、羽柴方が引くと云ふのは。
喜兵　上方邊に事が出來たか。
次郎　かうなつては兼ての手筈は。
喜兵　ああ、いや、それ、お城は安體ぢや。

（と、靜緒を憚る目交するに、次郎右衞門は合點す。）

靜緒　（窓より首を入れ）今日か、明日かと思うたに、嬉しやまた已がままに、お城の外も歩まれる。

喜兵　（また外を見て）寄手の勢が、引いた切りになつたらば……

（と思案する。次郎右衞門は下を見て。）

次郎　喜兵衞どの、これが來まするわ。これが、これが。

（と、指を出して示す。）

喜兵　なに、人が、

次郎　それ、もう、見えてぢや。

喜兵　ても、折角の……

（喜兵衞は、靜緒に心を殘して、次郎右衞門に引かれ、あなたの梯子を下り去る。）

靜緒　嬉しや、嬉しや、今までは、夥しい寄手の人數も、恐ろしいとは思はなんだが、かう引いて見れば、やはり心が落着くもの。

（と云ふうち、母の松枝上り來り。）

松枝　寄手が引きますとや、あれ靜緒よ、ほんに寄手が引きますかや。

靜緒　母さま、お喜悅！　あれ、あの通り旗を卷いて去にまする。

松枝　あつ、君の御武運も、今日を限り！

靜緒　寄手の引くのが、殿さまお爲めに惡いとか。

松枝　惡い段か、なう娘、北國の柴田殿と、挾み打の計略も、交喙鳥の嘴となつたぞいの。

靜緒　さうとは知らいで、喜びましたに。

松枝　軍の驅引、人馬の巧者、此方の殿とは、段違ひの筑前守、いまこの壺を外しては、もう雙六は此方の負、勝目はとても出まいわいの。

靜緒　喜悅と思つたは。

松枝　仇喜悅。

（雨は止みたれど、一片の暗雲に掩はれて、二人は愁然たる所へ、騷がしく上り來れる人數、信孝を始めとして、彥右衞門、その他の近臣。信孝は直ちに窓に凭りて、敵勢を見遣り。）

信孝　げに、引くわ、引くわ、本陣と覺しきあたりも、色めきて見えたるわ。

彥右　察するところ柴田殿、北國を發足ありしと覺えまする。

信孝　若狹街道を押出せば、はや近江へ打入りつらむ。

彥右　間近く寄せさせて一戰と、軍の口を明けぬゆゑ、引くには敵に利方あり。

信孝　雨の爲めに、河を渡さぬが敵の德、今となつては云ふも無益、とにあれ、後を付けて見う、方方出陣の用意、

彦右衛は今日の軍大將をせい。

一同　はつ。

（と、急ぎ下る。）

彦右　さらば、某も。

（と、立掛けるを）

松枝　待ちやれ、倅、出水で渡れぬ呂久川なれば、後追ふ味方も渡れまじ。

彦右　むむ。

（と萎れる。ややありて）

彦右　さあれど味方は案内知つたり。淺瀬を擇んで打渡し、せめては敵の肝を挫がむ。

信孝　ただ行け。

彦右　はあ。

（と、彦右衛門は急ぎ去る。信孝は後を見送りて、）

信孝　空は晴れた！　今となつて、晴れでもの空は晴れた！　出る水も、敵方が渡つてからの出水なら、味方の窮に入らうものを……

松枝　運で負けない敵方なれば、また不運で勝たぬ味方もあろ。

信孝　天運だ！　我等の軍配が、下手といふ譯ではない。

靜緒　でも、勝たねばならう。

松枝　これ。（と叱す）

信孝　（苦笑しつつ）叱るな。軍の拙ない三七、世間から見捨てられたわ。

（と窓によりて考ふるとはなしに沈思。……靜緒徐かに。）

靜緒　母さま。

松枝　なんぢや。

靜緒　兄者の具足など。

松枝　おう、倅者の軍大將、手傳うて具足着せましよ。

靜緒　妾は少し氣分が惡しいで。

松枝　心を付けや。

（と、信孝に一禮して去る。信孝また窓外を見る。折から、夕暉燦爛に差入る。）

靜緒　殿様、強い夕日が差しまする。

信孝　この夕日が、先日來より續いて居たら……

靜緒　空が變はりましたなあ。

信孝　變はつた、惡い空は變はつたが、今となつては詮が無いな。

靜緒　詮があるやらあらぬやら、妾の空も變はりました。

信孝　なに、そちの心が變はつた。

靜緒　雄雄しう、ようも、愚痴を仰有らぬ！　天の時とあきらめて心の殘らぬ、あの夕日。

信孝　むう、夕照！

靜緒　山の端に入る短かい名殘を、二人して詠めませう。

信孝　天外に賴る所なき、我れはいま杜を得た。

（と、二人相擁して面を接す、夕陽斜にこの男女を照らして、短き戀を榮に留る。）

――幕――

二　幕　目

長良川巴淵

名だたる岐阜城の要害のうち、巴が淵と聞えしは、長良川の水深く、渦卷くさまをたとへしなり、河に臨みし斷崖に、一本の松の古びたるは蟠れる龍にも似て首を延ばして河水を呑まんずる氣色あり。時は四月の末方なれば、木木の綠の蔭茂く、晝なほ暗き所とて、星の光りも通はず。幸田彦右衞門、松明を持ちて、母の松枝を伴ない、崖腹にて、

彦右　母者、これへ休息せられませ。

松枝　お城の中でも話は憚らうに、晝さへ寂しい巴が淵へ、連出いての談合は。

彦右　されば母者、お見遣る通りの城中、一夜一夜に夜逃の人數、その人人の見るあたりにて、母子が額を集めたら、それと思はれんも後目痛く、または殘り少なの城兵に、疑惑の種を蒔く道理と、これまでは招じまいた。

松枝　して、その談合とは何事ぞいの。

彦右　されば、此度の合戰、よしや張良樊噲の加勢ありとて、勝利はとても覺束なし、さしも織田の元老と、我れも許し、人も許せし柴田殿さへ、敵しかねて北國の、露と消えては漸くに、殿が振る采に付くは、日本國中、ただこの城の外になし。所詮御運の末ならんが、三十路に間のある御身の上、またいかなる幸運の、廻り合はさぬものにもあらず。何れにしても御命を、繼ぐが目前一の分別、思ひついたる手立のほどを、申しあげうとての仕合せ。

松枝　お云ひやる通り、杖とも、柱とも、賴みに思ふ勝家殿の、北の庄にて腹召されたと、聞いた時の愕き、もうかうなれば、世は筑前の思ふさま、この岐阜のお城の攻手が、あらうことか清洲さま、見す見す兄弟鎬を削り、血で血を洗ふ、淺ましさはなう。

彦右　それを今更悔むことか、繰返したとて益には立たず、とにあれ御主君の御命繫ぎまゐらす手段と云ふは、母者、彼れを清洲殿へ參らさう。

松枝　なに。

彦右　さ、彼方、妹への執心、今に至りて衰へず、妹さへ彼人の、お手廻りに差出いたら、危うき御命を、取留め

うは必定。

松枝　さ、それも、然るかは知られねども。

彦右　はて、御不承知か？

松枝　今になつてはな。

彦右　さらば御命が、縮まらうとも詮ないとてか。

松枝　何しに。

彦右　然あらば妹を、彼人(かのひと)に奉ることを……

松枝　そなたも知つてであろ、静緒は今は殿の情を……

彦右　さ、それ故にこそなほも申す、妹がさる身となつたる故、繋ぎ得べき御主君の、御生命(いのち)を縮めては、幸田の家の忠義が立たぬ。

松枝　忠は立たぬとお云遣れど、そなたの言葉に随ふときは、あれの女の操が立たぬ。

彦右　なんの、高が女の一人や二人、殿と替ことがなりませうか。

松枝　したが、あの様に、堅う手を切つた扱ひのこと、今になつて清洲様の……

彦右　その儀なれば、お氣遣ひは御無用になされませ。寄手一方の大将、岡田長門守どの、とうの先きより、窃かに渡られ居りまするわ。

松枝　なに、長門殿が。

彦右　只今これへお招ぎ申さう。

（彦右衛門は、松明を輪のごとく廻轉したる後、松の根元に結び付けある綱を引く、引かれて、長門守は、階段を攀登(はんとう)し來る。）

彦右　お待遠におざつたらう。

長門　いや、さほどにもおざなかつた。

松枝　おう、おう、長門様か。

長門　御老母、久しう御意得ませぬ、いつも御堅固で……

松枝　御一門の家頼(けらい)同士なれど、苦苦しい弓矢の沙汰、永らくの間、お目に掛りませぬが、お變りもなう、して、お内方(うち)には御息才か。

彦右　母者、互ひに味方の目を盗むこの出會、さる難儀は措いてなう。

松枝　ほんに！　さうぢや。なう長門殿、詳しいことは、倅から承はりまいた、御主君のこと、また娘のこと、宜しうお頼み申しまする。

長門　某が頼うだ方と、太刀打合はす信孝公を、庇ひ申すも外ならず、亡き上様の御血統を、世に絶やさじとの一心、出來るだけは、長門身に引受けて勉め申そ。

松枝　さては一定、御生命は。

長門　申し越した、かの一條さへ、隨ふならば……

松枝　娘のことか？

長門　いかにも。さりながら娘御が、この難儀を承引めさ

れたらうか。

松枝　さ、するも、せぬも忠義のため、分けてあれが、愛しう思ふ殿の爲め。

彦右　妹は急度差上げう、なう母者。

松枝　おう、たとへ何と否まうとも、急度清洲さまのおん前へ。

長門　差出さるるか、なう御母子、長門ほどの武士が、蘆間を分けて舟を操り、淺ましい色欲の、取持を致し申すわ、ははは。

松枝　なう、長門様、諄うお尋ねを致すやうで、無禮氣にはおざれども、靜緒さへ遣はしたら、清洲様思召で、急度御生命は繼がしやらうか。

長門　御念の入つた御老母、しかし最愛の御息女を、手放すとあつては、御配慮は尤も、さらば斯様致さう、某直ちに濱を戻り、いま一應頼うだ方へ申しあげ、急度承諾の御旨を、明白に承つたらば、合圖に烽火を打ち上げう、な、火を見たらば事は應ふ、筑前前へ、當分は御討死と披露し申せば、急ぎ人目にかからぬやう、御主君を川船にて、野間の内海へ御開かせなさせられい。

彦右　さらば妹も御供させて、一先内海へ送り申さう。

長門　いやいや、お妹御は直ちに本陣へ。おう、初夜の鐘を合圖にて、この岩下へ、迎ひの船を付けさせう。

（と立上がる。）

彦右　さらば長門どの。

長門　彦右衛どの。

松枝　少しも早う吉左右を。

長門　合圖を忘れたまふなよ。

（と、以前の綱に縋りて、斷崖を下り去る。二人は立つて見送る。）

彦右　母者、妹を連れて來う。

松枝　では、妾が云ひ聞かさうか。

彦右　いやいや、某が迎ひに參らう、しかし、我等が話したのみでは、口の達者な彼れ、母者と二人掛りでなくば、容易う承引かぬであらう。

松枝　他人へ洩れてはならぬこと、この談合は、やはり人目のない此處で……

彦右　むう、暫くお待下され。

（云捨てて彦右衛門は急ぎ行く、この時松明既に盡きて四邊暗暗。母は力無氣に岩上に坐して、越し方を默考す。川西喜兵衛、猿轡食めたる靜緒を、小脇に抱きて忍び來る。後れて、堀内次郎右衛門。）

次郎　喜兵衛どの、靜かに歩ましやれい。

喜兵　落人は急ぐものぢや。

次郎　急いだとて今夜の宿は定まつてぢやに。

喜兵　いや、いや、これがただ、降人に參るばかりなら、さまでの心配はいらぬがの、この人を何處へか、忍ばせ置かねばならぬからの。

次郎　いかさま、女を連れて、寄手の陣へも參られまい。

喜兵　えいわ、行く所まで遣つて見よう。

（聞く人ありとも知らで語らふ。聞耳濟ましたる松枝は、つと立ちて二人が行く方を遮る。）

喜兵　誰れぢや。

次郎　なにが居るのか。

（云ひつつ進み寄り、松枝に近づき。）

次郎　や、松枝どのぢや。

靜緒　母樣。（と叫ぶ）

（この時、猿轡すこし外れて。）

松枝　や、何してぢや。

（と驅寄る松枝を、次郎右衞門は支へて。）

次郎　はて、何處へ行かしやる。

靜緒　母樣あ。

松枝　おう。

喜兵　驚かれな、松枝どの、應はぬ戀を應へさすには、これが一の手立ての。

松枝　無禮なことをお云ひやるな、さあ、娘を此方へ返しや。

次郎　はて呑込の惡い、渡すほどなら連れて來ぬわ。

靜緒　助けて――。

喜兵　お騷ぎやるな、いくら叫かれても、寄手に聞こえる處でなし、その喚がる聲も、追付け終はるであらうもの。

靜緒　惡人！　助けて――

松枝　さあ。〔己れ、返さぬか、これ返してたべ。

（と近よりて、靜緒を奪はんとす。次郎右衞門これを支へる。その間に娘は、喜兵衞の縛める手中より逃れたれど、縛しめられたる帶のために、身體の自由を缺きて走り得ず。これを捕らへんとする喜兵衞、これを碍げんとする老母、それをまた支ふる次郎右衞門、老若四人の男女は、入り亂れて爭ふうち、靜緒また喜兵衞の手中に入り、次郎右衞門は守刀を拔きて、かかれる老母を突き倒し、既に去らんとする處へ、かくとも知らぬ彦右衞門は、妹を尋ね屈ぐみて歸り來りぬ。折から漏るる淡き月光の下、この場の光景を見て、怒氣冲天。）

彦右　おのれ。

（と、矢庭に妹を取返す。）

松枝　や、悴か。

彦右　母者、何してぢや。

喜兵　邪魔な奴、それ。

（と、白刃を閃かして、二人共に切つてかかる、彦右衞門は、母と妹とを、後に圍ひて。）

彦右　や、おのれ、狼藉奴。

（と切結ぶ、或るは崖上、或るは崖下に、奮闘数合にして、次郎右衞門を斬る、次郎右衞門、崖下に落つ。喜兵衞これを見て、氣萎えて逃げんとするを、彦右衞門は、後掛けに切放し、甦る所を、脚を上げて崖下に蹴込む。水の音。）

彦右　母者、彼奴等は仕留めました。

松枝　おう、悴、よい所へ戻られたなう。

彦右　危いことでおざりました。が、靜緒、そちや何うして、喜兵衞奴に捕らはれた。

靜緒　あい、部屋に居る處を背後から、聲も掛けず羽交締。

彦右　むむ、さうであつたか、我れも唯今其方の部屋まで忍うでは參つたが、四邊は取散らしたまま、是非に及ばず、歸り來ればこの場の仕儀ぢや。

靜緒　して母者にも、兄者にも、どうして這般寂しい所へ？

彦右　おう、そちに話す仔細があつて、母者にも待受けられたぢや。

靜緒　なに、妾に話がある。

彦右　母と兄とが打揃つて、そちに大事を頼むのぢや。

靜緒　その頼みと云ふは？

彦右　必ず聞かうと云ふ誓文が欲しい。

靜緒　そりや、御無體ぢや。

彦右　なじよに。

靜緒　仔細を伺はぬさきにはな。

彦右　云ふも云はぬもあるものぞ、母と兄とが頼むことぢや。

靜緒　さりとて事が分らいでは。

彦右　なんであらうと、聞くと云へ。

靜緒　嫌ぢや。

彦右　嫌とはなんぢや。

（と二人云ひ爭ふ。月の光、次第に弱し。母は傍らより。）

松枝　これ、どうしたものぢや、聞くも聞かいも、打聞いてからのこと、彦右衞、其方には似合はしからぬ。

彦右　母者、我等の申さうことが、一身の利欲ともあらうことか、君忠を重んじて、武士の道を立てうと思ふに、聞いてからとは何事ぢや。

松枝　其方は事を承知してぢやが、靜緒はまだ露ほども、事譯知らず、よう落着いて……、いや、いやその急きやうでは、靜緒が會得するやうには、よし、よし、妾が云ふて聞かせませう。

彦右　よい様に召されい。

松枝　娘。
靜緒　はい。
松枝　そちや、殿樣を何と思ふぞ。
靜緒　え。
松枝　可愛う……思ふであろ。
靜緒　あい、誰よりも……
松枝　むう、その誰れよりも、愛しう思ふ殿樣の、命を繫ぐ術があるが、そなた勤める氣は無いか。
靜緒　殿樣のお命！
松枝　女ながらも承知であろ、敵の目差すは殿一人、束の間に迫まる御首をそちの才覺一つによつては、取り繫ぐ方法がある。
靜緒　私の才覺で……殿の……
松枝　おう、寄手の殿の陣中へ、命乞ひに其方が行くのぢや。
靜緒　お命乞ひに寄手の陣！　寄手とはあの淸洲樣の……
松枝　其方が行きやれば、殿樣のお命が助かるのぢや、皆まで云はずと後は分からう、なう、娘、お主の爲めぢや、またしては大切に思ふ殿の爲め、さあ、身を捨ててくれ捨ててくれいなう。
靜緒　嫌ぢや。私は否みます。
彥右　なに、嫌ぢや、これ汝は忠義を忘れたか。
靜緒　忠義とへ、忠義がどうしました。
彥右　忠……忠を忘れる、おのれ、いかに自儘に育つたとて、その口術を能う叩いたな、
靜緒　兄者、女には操と云ふがありますぞや、殿樣に身を任かしたら、此方の身體で此方のでない、男は忠義を盡くしやりませ、女は隨分操を立てう。
（靜緒立上りて行かんとす、彥右衞門はその袖を捕らへ。）
彥右　待て、さては、おのれ、この談合が不承知か。
靜緒　このやうなこと、聞くも嫌ぢや。
彥右　聞くも……
（と引据ゑんとす。）
（と兩人を押分け。）
松枝　ま、待ちや、忰。
松枝　これ娘、いつもとは時が違ふぞ、いかに氣隨に育てばとて、あまりなる申し分、今のことも有樣は母が發意。
靜緒　えつ、母者までも。
松枝　さればなう、この月始めに、羽柴方の寄せたときさへ、そちを淸洲へ遣はして、救ひを賴まうかと、彥右衞門にも話したほど、數へては僅かの日なれど、天下には事が多く、さしもの柴田も腹を切り、味方は朝日の前の霜雪、賴みがひ無い有樣に、陣を拔け出るもの多く、廣い

城中に僅かの人數、虚實を覺らぬ寄手なれば、けふまでは猶豫した、明日にも打つてかかられたら、一支へもなく落城して、その攻太鼓の鳴るが合圖に、味方は一同果てるであろ。

靜緒　逃がれぬ所と、覺悟は篤うに極めて居まする。

松枝　その九死の中の一生を、そなた一人で得らるるのぢや。

靜緒　淸洲樣へ行けと云ふのか？

松枝　主とも、夫とも、賴うだ方を助けるのは、ただそなたが胸一つ。

靜緒　外の男に逢ふのは嫌ぢや。

松枝　操を破れと母の口から、勸めるも異なことながら、大切に思ふ殿樣お爲めぢや。なう、操を立つるも男故ぢやに。

靜緒　否！　否！

松枝　なんで否？

靜緒　女の操は女で立てる、自分で自分に立てるが操ぢや。

（彥右衞門傍より。）

彥右　ええ、つべこべと喧ましい、母者、程になされませい。さあ靜緒、君の爲めに敵地へ行くを否むなら、好い分別があるであらう、まさかに殿を見殺しには得致すまい。

靜緒　私も共に死にまする。

彥右　おのれも死ぬ……、しや面倒、和主などは何うなとせい、生きる殿を殺さうとか、むう、殿の死ぬるを願ふのか、

靜緒　なんの！　なんの！

彥右　ならば、行け。

靜緒　行かぬ、殿と一緒に私も死ぬる。

彥右　あつ、已れは剛かものぢや。

（母も彥右衞門も、呆れて語辭なし、かかる折、對岸にて、長門守が合圖の烽火、松枝は見るより。）

松彥　あれ、烽火が……

彥右　母者、措かれい、たとへ合圖が揚がらうとて、この剛か者が聞かぬときは……

松枝　あれほど堅く取極めたが……ああ！　どうせうなう。

（と彥右衞門と面を見合はせる、靜緒不審なる面色にて。）

靜緒　母樣、烽火が合圖とは？

松枝　そなたが敵地へ參るならば、御助命が應ふといふ證。

靜緒　すりや、もう、彼方へ妾のことを。

松枝　最前家老の長門殿と、これこの所で談合してぢや。

靜緒　ああ！

松枝　これ靜緒、道に應はうが、應ふまいが、眞實殿樣を思うたら、その身を捨ててなることを、せぬと云ふは情に缺ける、ここで其方の身を捨てるのが、情の常ぢやと思ふがなあ。
靜緒　ああ、これが殿と共なら、冥暗の地獄道とて、厭ひはせぬが。
彥右　妹、な……なにを云ふ、御一緒とは榮耀が過ぎる、殿のお役に立つことなら、末代までも譽れであらうぞ。
靜緒　何んぢや、譽れ！　ほほ、譽れが欲しうてすることか、私や、……あの……殿の……お爲めに……
松枝　何もかも母に任かしや、なう、娘、さらば其方は承引したか。
（靜緒無言にて泣伏す。母と彥右衞門とは、互に暗淚の落つるを覺ゆるのみ、この時彥右衞門燃料を集めて火を焚く。）
松枝　焚火は嚴しい法度ぢやに。
彥右　かの船の目標に燃しまする。
靜緒　母者。
松枝　なんぢや。
靜緒　私の行く時刻は？
松枝　今直ぐぢや。
靜緒　え、あの今！
松枝　おう、今！
靜緒　その以前、殿樣に逢うて去なう。
彥右　そりやならぬ。
靜緒　ならぬとあらば、妾は去なぬ。
松枝　はて、一生の別れ、逢うて行たがよい。
彥右　いや最う時がおりない。
松枝　さらば此處へ、殿を招じたがよからうぞ。
彥右　そはまた餘りに恐れ多い。
松枝　殿樣も時にこそ！　なら彥右衞、そち一走り、殿をお招じ申したがよからう。
彥右　問答は時が移る、何にせい早いが好し、さらば御出座を願ひ申さう。
（と、彥右衞門は驅行かんとするを。）
松枝　これ待ちや。
（と、耳語くことあり、彥右衞門頷いて去る。）
靜緒　なう母者、殿樣これへお出でがあらば……
松枝　亥刻の鐘が鳴るまでは、もはやこの世で逢へぬ殿、思ふままに氣隨を云や。
（靜緒は焚火を見て。）
靜緒　ああ！　火は燃えて！　焚木少なの、火は燃えて！
松枝　おう、殘るは灰ばかりな！
靜緒　母者。

松枝　娘。

靜緒　情ないわ。

松枝　情無からう。

靜緒　悲しいわ。

松枝　悲しからう。

靜緒　涙が出る……

松枝　泣きや、泣きや。

（二人相擁して泣く。……松枝は立上り、あなたを見て。）

松枝　あの松明は、殿と、彦右衞。……惜んでも短かい時を！

（と木蔭に身を隱す。やがて彦右衞門は、松明を燃して先へ立ち、信孝を伴ひ來り、手振にて殿を止め、ひとり靜緒の傍らに來り、耳語する處あり、松明にて消えんとする火を掻き起して去る。）

信孝　靜緒。

靜緒　あい。

信孝　聞いたぞ。

靜緒　あい。

（二人は直ちに相抱擁して、ただ涙に暮れゐたるが、ややありて、信孝。）

信孝　なう某も腑甲斐ないぞ、最愛の女を敵に取られ、露の命を存らふるわ。

靜緒　殿の……殿のお傍を離れては……あ、片時も生きるは嫌、殿、何とか術は無いものか、死ねと云ふなら、一層死なうが。

信孝　死ぬ！　ああ、死ぬもよし……

靜緒　殿、死ぬ？　あの……死なしやる。

信孝　さ、死ぬるもよいが、なう、このままに果てるは無念ぢやで……

靜緒　無念とへ、なにの無念？

信孝　今更に聞くことか、筑前めに詰められたが無念よ、以前は父が草履をも取つた奴、其奴に追詰められ……

靜緒　そ……それが、御無念か。

信孝　う、う。

靜緒　え、え。（と泣伏す）

信孝　口惜しいわ。

（と、靜緒に手を掛くるを、彼れは肩を交はして痛哭す、信孝宥めんとして傍へ奇るを、素氣なく振拂ひて、なほ悲嘆の涙を絶たず。）

信孝　靜緒、嘆きは然ることながら。

（と言ふを聞くより、靜緒は屹として、面を揚げ。）

靜緒　殿、殿、妾が敵の手に渡るのは、無念には覺さぬか、御無念には覺しめさぬか。

信孝　云はずともぢや。

靜緒　はあ！　御無念か、

信孝　變妾を敵に渡す！　世の人口も如何ならんと……

靜緒　措かしやれませ、措かせませ、世の人口……變妾……たとへ名は何とあらうと、殿、あの天主の高樓にて、何と云はしやれた、息の掛かる領地なりや、金銀財寶なりや、さては殿樣のお命とて、戀の深味は埋め切れぬと、仰有たは噓よな、あの虚言でおはしたのか、え、殿、應答を聞かして……、聞かしてなう。

信孝　我等も噓は嫌ひぢや。

靜緒　その嫌ひな噓を、何故に付かしやれた。

信孝　いや虚言は云はぬ。

靜緒　虚言は仰有らぬ、あ、さらば飽きさせられたな、おう、飽きさせられたのぢや、妾は捨てられてぢや。

信孝　そちが思ひ切られるなら、この苦しい思ひはせぬ。

靜緒　あの時の一夜さは！

信孝　靜緒、またいつ逢はうも知れぬ、快う……機嫌直して別れをせう。

靜緒　また逢ふとえ？　敵の陣中へ參つたあとで、また御前に出る靜緒ぢやと思うてか。

（鐘聲遠く聞こゆ。）

信孝　あ、亥刻か。

靜緒　迎ひの來る鐘の音。

信孝　靜緒、賴うだぞ。

靜緒　（冷やかに）賴まれませう。

信孝　行つてたまはるか。

靜緒　心の水の涸した人へも、女は誠を盡くすものよ！　殿、靜緒はやはり女でおざりました。

（信孝憮然。あなたよりは母、禮子と盃を持ち、こなたよりは彥右衞門、近習山路玄蕃助、太田鷹狗、吉市九郎兵衞、小姓の清三郎と共に、驅け來る。彥右衞門は先づ巖頭に登り、對岸を見て後、信孝の前に至り。）

彥右　あれ、あの細い燈火は迎の舟、さ、殿にも、はや御支度あつて、川上なる水門口より落ちさせたまへ、さ、早う、早う。

松枝　待ちや。

（と盃を殿へ進めて、それを娘に與ふ。靜緒涙ながらに飮む。信孝無言にて立ち、近臣を率て去る。靜緒それを見送りて慟哭す。母子もまた暗涙を吞む。彥右衞門やがてまた巖上に登り、曩きに長門守が傳はりて下りし綱を引いて、妹がこれより下り得べきやを掛念す。松枝は娘の背を撫でて。）

松枝　靜緒よ、はや舟は來たげな。

靜緒　母者、舟へ乘るのは……止めにせう。

松枝　なに止めにせう、ほほ、戯談云やんな。
靜緒　いや、眞實、妾は嫌になつた。
松枝　え、なんと云やる？
靜緒　母者、殿は頼むと云はしやれた、止めいで……止めいで……
松枝　止めいで？　おう、止めぬでの、
靜緒　あまりぢや、情ない、止められぬ……頼むと云はれて……
（と欷泣くを、巖上にある彦右衞門聞いて、）
彦右　な、なに、止めさせられぬで嫌になつた、止めさせられぬで……、おう、さては何か、前方より行かうずる料簡も無かつたでな。
靜緒　何ぢや、行かうずる料簡も無かつたとえ。
彦右　さらばこそ、四の五の云うて。
靜緒　でも殿樣の。
彦右　奉公には一命を差出す、命を捨てる心があればの。
靜緒　命、命と。命がそれほどまでのものか。
彦右　卑怯ものは、何より捨てるが恐ろしいとよ。
靜緒　兄者云はれな、なんの命が……母さま、參りませうさあ敵陣へ。　と立上る）
松枝　おう、行てたもるか。
靜緒　去なう。

（と歩み出す、この時雲晴れて、月光晝のごとし。）
松枝　待ちや。（懷劍を取り出し）これは目前の時の用に。
（と靜緒に渡す、靜緒受けて紐を解き、鍔元を能く改め、思慮するところあり、そのまま帶の間に收む。）
彦右　（巖上にて）こりや、とても女には下り得まい。おう。
（とさきに靜緒が縛しめられし帶を取りて、手繰りあげたる綱に結びつけ、巖下に向ひ、）
彦右　この松枝より釣下げるほどに、船をもそつと此方へ寄せさしめ。
松枝　その枝より、釣下さうとや。
彦右　されば、とても女には、この岩を傳はつては。
松枝　靜緒、よう支度しや。
靜緒　なんの……支度……
（と巖の上部に上り、褄の開かぬ爲めに、腰部を搦げなどす。彦右衞門はその間に松に攀上りて綱を掛けたり。松枝は帶にて靜緒の胴中を結び、彦右衞門はその端を取りて引き試む。）
靜緒　さらばぢや。
松枝　よう、心を付けて。
靜緒　あい。

彦右　妹、息才で居や。

（と綱を引く、靜緒は地を離れて、松の許へと釣上げられたり。）

彦右　目を瞑つてお居やれ、かまへて下を見やるな。

靜緒　兄者、命は惜しいものでなあ。

（とかの懐劍もて帶を切る、帶一二尺を殘して、主は河へ陷りぬ。）

彦右　や。

松枝　あれ。

（母に狂氣のごとくになり、岩に上りて河の面を見れども、水泡の行くは跡も無し、彦右衞門綱に縋りて河岸へ下りたり。）

（舞臺半ば廻轉す。）

長良川の流れ、屈曲して鈍角をなす處、巴が淵の斷崖松にかかれる綱を便りに下り來る幸田彦右衞門、下には信雄の家臣ども、船端に立ち、舳に騷ぎ靜緒を搜索す。彦右衞門崖下に下り立ち、

彦右　いかにや？　いかにや？

臣　いや探さうにも、この急流にて、手が付けられぬ。

彦右　早まつた女！

臣　かくなる上は是非も無し、我等は漕ぎ返さう、さらば。

彦右　暫くお待ち下されい。

臣　お供申すならば大事ないが、空手で還うなつたのではお叱責も恐ろしい。さらば、さらば。

（と舟子共對岸に去る。）

彦右　憎き奴、君のお爲めを思はぬ奴、（上方を仰いで）母者、大事は夫に申した、歸らぬことを爲し居つた、むむ（上方の話を聞きつつ）いかにも君が落ちさせられては……、片時も早く申上げて、御出船をお止め下されい。む、む、早う、早う、いやいや、足許の悪い母者にては、間に合はぬも知れぬ、某も跡追驅けて申上げう。

（と、また元の綱にて、斷崖を攀ぢ登る、風ひとわたり、蘆の葉動ぐ。ややありて上流（下手、奥の方は河下）より、棹さしのべて信孝等の乘りたる船流れ來る人目を避くるために苫を切りたり、信孝はその間より首を出して城の方を見る。月暗し、水上に、靜緒らしき、影なき女の姿、髣髴として顯る。）

信孝　あ、靜緒。

（と叫ぶ、その姿は煙のごとく散じぬ、舟は流れに從つて、蘆の間に入り、見えつ、隱れつ。ほど過ぎて岩の表を滑り落ちたる松枝は、聲を限りに。）

松枝　船よう、船よう。

（と呼ばはれども、ただ河風の騒ぐのみ。）

松枝　船よう。…………………………………あ、行た、心を盡くして人人を、虎の顎に追ひ落した、ああ、船は行た、娘は死んだ、追付け殿も死なれう。この世の中はただもう闇、南無や彌陀佛、殿も娘も西方の、一つ蓮の蕚の上に後生を授けさせたまへ、妾も娘と一つ流れ、この河の水沫（みなは）と消えう。

（と合掌して水に入る。）

大　詰

內海大御堂

客殿とは名のみ、この頃の兵亂續きに、修覆等も行き屆かざれば、描ける壁は雨に汚れ、襖は破れて、鼠の通路を造りぬ。庭には蔦蔓生ひかかり、小やかなる池には、杜若の四つ五つ咲きたる、かへりてあはれを添へたり。肅殺たる秋に似たる風、一と過りしたる後、庭の奧より、老いさらばひたる僧、破れたる衣、杖によりて蹌めき來り、緣を杖にて輕く打つ。襖の中より、小姓清三郎は立出で、

清三　や、いつもの老僧、今日も能く參られた。

僧　殿樣は、

清三　奧におざられまする。

僧　また例の考へごとかな。

清三　お出でのことを申し上げう。

信孝　（奧にて）いや、それへ參らうぞ。

（清三郎襖を開く、信孝は（髮やや亂れて力無氣に）座敷に來り坐す。老僧緣に腰を掛け一禮す。）

信孝　籠り居の事なさ、むすぼほる心のなやみに、相手欲しい我等、ようも毎日訪ひくれるな。

僧　業が盡きいで、死に殘つた坊主、村の者も相手にはせぬほどに、御機嫌も伺ひまするわ。

信孝　村の者も相手にせぬ？

僧　されば、この頃の軍續きで、寺に付いた僅かばかりの年貢の後に入つて來ず、村の人も顏を見ると、また布施物の催促かと、影を見るより遠退きまするわ。

信孝　村の者も相手をせぬ法師、おう、大概は我等と似た中の！

僧　御領主の殿樣が、相手になされぬ弟御さま。

信孝　かやうの筈とは思はざりしに、ただ此寺へ推籠めて、罪人と等しき扱ひ、寺の外へは歩むを構ひ、近習のものまで遠ざけ居つた。

僧　お痛はしいことぢや、さしもの御大身が、かやうの樣にならせらるるとは、ああ、ああ、南無大師遍照尊、こ

の御寺を、そのまま、てもよう似たお方ぢや。

信孝　なに、この寺に似た！　どう寺に似た！

僧　由緒は正しい御寺であれど、今は見る影もな。

信孝　ふう。

清三　もし坊様、ここはさほどに由緒ある御寺か。

僧　さればの、この御寺は、内海の大御堂と申しての、昔、右大將賴朝公の御父、左馬頭義朝公、野間の庄司が手に掛かり、生害めされた舊跡とて、これ諸の後寶、あれに出る平の康賴法師が、開基せられた御寺ぢや。

清三　さては此御寺には義朝公の御墓などありまするか。

僧　ある段か、寺内には左衛門の幸若殿がおざりまするわ。

信孝　なに、ここに義朝の御墓所が……

僧　なかなか。

信孝　あの家來の長田に亡ぼされたる……

僧　いかにも。

信孝　主を殺害せし長田！

僧　はれ、憎い奴でなう。

信孝　來るも來た、その場所へ。

僧　これも徴ゆゑぢやが、詰りはその身の損となりまいたわ。

信孝　長田も損なが、義朝こそ一の損、あ、信孝も身の破滅ぢや。

僧　（雲立つて空を仰ぎ）雲に日が遮へられてか、晴れとはせぬことよ、さらばまた參りまする。

（僧蹌ぼひつつ去る。信孝呻吟す。）

清三　まうし、お肩をお揉りませう、

信孝　なんぢや、肩をと、など、とは何。

清三　はい、恐れ入りました。

信孝　恐れ入つた、恐れ入つたとは何、揉むなら早う揉まいで。

清三　はい、

（と清三郎恐る恐る肩を揉む。折から岡田長門守は、廊下傳ひに入來り、信孝を見て平伏す）

信孝　長門か。

長門　はあ、

信孝　某は恨みに思ふぞ。

長門　はつ。

信孝　この信孝は、其方の何に當るな。

長門　されば賴うだ方の御弟御。

信孝　さては主の片割れか。

長門　いかにも左樣に當らせられます。

信孝　これ、（と云ひかけ清三郎を顧みて）清三止めい、（と肩を揉むを止どめ）某をここへ誘いたは、長門其方

であつたな、なう、其方ぢや、彦右衛に談合して、某を當國へ下したは、其方の計ひよな。

長門　全く御意に相違はおざりませぬ。

信孝　相違なからう、彦右衛が申したには、我等當國へ參ることは、筑前前こそ當分は包め、その中は客人分の扱ひとは聞いた、これが何の客人應待、二人三人の近習まで遠退け、立つにも坐るにも見張を付け、その上、この狹い寺中の外へは、一足も踏み出させぬ、かくては牢獄と何の差別か。

長門　はあ、仰せは御道理、それには段段との事譯おざる。

信孝　なに事譯がある、おう聞かう、さ、その仔細を聞かう。

長門　恐れながら、某口にて申上げうよりは、恰好の人こそあれ。

（顧にて清三郎を招く。清三郎心得て傍に來る。長門は清三郎に囁く。清三郎頷きて立ち、廊を廻りて去る。）

信孝　長門、參るのは何人ぢや。

長門　御存知のものにおざりまする。

信孝　存じて居る……はて、誰れであろ。

（幸田彦右衛門（無刀）出でて廊下に坐して平伏す。信孝はこれを見るより。）

信孝　やあ、おのれ不得人。

（と罵るを、長門は推止め。）

長門　待たせられい。

信孝　待てとは何ぞ。

長門　先づ、彦右衛門申すことを。一應はお聞あれ。

信孝　いいや、面を見るも腹が苛らるる、主を賣つたる彼奴、ああ！　お身とても同心な！　腑甲斐ない我等の面を見て弄らうとか、よい心掛けな、さ、早う去ぬ、己れの面を見るも奇怪ぞ。

長門　彦右衛、殿は嚴いお憤りぢやが、こりや仔細を知らでおはすからぢや、御機嫌に關はらず、とうお語りやれ。

彦右　仰せにはござれども殿の御意に逆らうては、

長門　よいわ、殿は殿の御料簡、聞かせらるるが嫌とあらば、耳を塞がるるまでのこと、お乳を上げた其方の母者が、失せたことなど聞かせられたら、お悔みの一言位は仰有らうぞ。

信孝　やあ、何と云ふ、松枝が死せた？

彦右　はあ、妹の跡を追ひまして、同じ場所の巴が淵に、身を投げ空しくなりました。

信孝　な……なに、靜緒が水に入つた、如何にして、命を捨てた、何條の故に入水したぞ、なにか、誤まつて陷つたか？

彦右　覺悟して相果てまいた。

信孝　それは何時、

彦右　あの夜のこと、御別れのお杯を、たまはりてより間も無う……

信孝　間も無う……

彦右　時も去らず……

信孝　時も去らず……

彦右　母までも……

信孝　むむ、松枝までも……

彦右　靜緒が果てては御身上、一先止め參らせんと、水門口へ驅付けたれど、はや出船の御跡、如何はせんと引返せし、留守の間に母は入水、頑固な妹ゆゑに、主君を死地に陷いれたる、その言分に覺悟致したと見えまする。

（この話の途中より、先程の僧の業と見えて、看經の鉦の音す。）

信孝　松枝の死せしは、さる譯よな、さるにても靜緒が果てしは何故ぞ。

彦右　情なや、殿、お身様故に妹は、長良川へ飛込みました。

信孝　我れゆゑに、靜緒が果てた？

彦右　殿、靜緒を殺したは殿ぢや。

信孝　なに、我等が靜緒を殺した。

彦右　殿、靜緒めは申しました、君の爲めに身を捨てて敵地に赴くをお止めもあらせいで……一禮を申された……御心根が恨めしい、行くのが嫌になつたぞと、呟いて居りましたを、さては命が惜しいかと叱るやうに追立てたれば、河に臨める切岸の、あの大岩の松の下、命は惜いものぞとの、ただ一言を此世の名殘……

信孝　飛込うでか。

彦右　迎への船へ釣下さんとて、胴中を結へたる帶を亂に切放し。

信孝　川へ入つたか。

彦右　殿、これがその帶の端でおざりまするわ。

（彦右衛門は懷中より帶の端を出し、信孝の前に置き退かんとするを、信孝引止め、手を取りて、）

信孝　これが記念か！

彦右　屍體を探さうにも、憚りある身は儘ならず、その帶の端のみを、此世に居たといふ標に、妹は殘して消え去りまいた。

信孝　帶の端、（と取上げながら）これが靜緒とか？　なんの、なんの、靜緒は未だこの世を去らぬ。

彦右　なにと御意なさる。

信孝　乃公は靜緒に逢うた。

彦右　それはまた何處にて。

信孝　巴が淵にてよ。河船で下るときに、水の上を歩むか

のやう巖の上に居たは彼れぢや、靜緒は死なぬ、おれは逢うた。

彦右　巴が淵にて……はて巖の上。

信孝　言葉こそ交へぬが、夜目にも歷歷(ありあり)と姿を見た。

彦右　名高き深み、河中に巖なんどの有るべきやうなし。

信孝　むう。

彦右　ことに夜陰……まざまざと……

信孝　面を見たがの。

長門　彦右衞、こりや世に云ふ亡魂魄靈などの、姿では無かつたらうか。

彦右　長門殿のお云ひやる通りか！　あ、亡魂なりと、魄靈なりと、身共は母者に、唯一目逢ひたい。

信孝　ああ、靜緒！　靜緒！

長門　殿、この内海へおざられての、御仕向が違うたも、な。

信孝　う、う。

彦右　御宥されませ、これと申すも、妹めが、皆我意から起つたこと、御難儀をも顧みず、自儘に命を捨てるとは憎い奴、無念な奴、某も腹掻破いて、身の明しをと存じましたが、かくては御先途を、見屆くるものなしと、惜からぬ命存らへ、御目通りにも、推參致しました。

信孝　最早云ふな、軍神には見放され、淺ましい心の中を靜緒にも見透かされた、何事も我が冷たい心から、熱い思も醒したのぢや。

彦右　さては妹の我儘を、お咎めもなく、お叱りもおざりませぬか。

信孝　叱る！　咎む！　さる權勢が、この三七にあると思うてか。

彦右　情ない、殿、もう云はしやれな、もう仰有れな。

長門　こりや彦右衞、お力を付けうとはせいで、反りて物を思はする、對顏の前の、約諾とは違ふでがな。

彦右　あつ、長門殿、責められな、お身某とお代りあつたら、此場の仕儀でも思ひを殺して、笑を面に浮められうか。

長門　いかさま、年配(としはい)をして、面目もない事を申した。

彦右　これ長門殿、折入つてお身への談合、お聞き下さらぬかの。

長門　何事でおざるの。

彦右　さ、この内海から、殿を落としてたもるまいか。

長門　なに。

彦右　なう、計つた事はまんまと外れ、殿に憂目を見せ參らするも、一分の責はお身にもある、せめては此處をお落し申し、御安泰を計りたい、見ぬ振をして内海から、殿を落して下されい。

長門　落す！　落去を勸めて、其上の分別は？
彦右　折を見て旗上げ、
長門　なに旗上、御分、殿を守立てて、どう働く。
彦右　せめて、千餘りの人數だにあれば。
長門　千の人數、ま、その才覺は成るとして、旗上の名分は何と立てる？
彦右　名分とや、はは、長門殿、筑前が相手なりや主と家來ぢや、主として家來を討つに何の名分。
長門　殿と筑前との取合のみなら、主と家來とも云はれうが、その御相手の中には我等主も罷りある、これ御兄弟の爭ひ、その上、筑前お手には、宗家の三法師殿在すからには、順逆の逆の字は、この殿の旗の上に光らうぞ。
彦右　むむ。
長門　旗上にはよしない分別、また何れにもせよ、殿御存命あること、筑前守承はつては、第一に先づ、我等殿が厄難、御身上に及ばうも知れず、ただ何處までも此儘にて人目を包ませたまふよりは詮ないことでござりませうず。
信孝　此儘、さ、此儘にあらば、死ぬるよりも命がないわ。
長門　（暫くあって）御諚！　申上げう言葉がござりませぬ。

（三人に暫時啞然。この前より看經の鐘の音止む。）

信孝　長門、予は死なう。
長門　何と仰せられまする。
信孝　天地に見放されたる某、生きての詮は何事、今日を限りに、此世を去らう。
長門　こは甚じき御決心。
彦右　（長門守の語を遮るがごとく）長門殿、な、なにをお勸めやる。
長門　彦右衞お控へあれ、いかに殿、かくてこそ、故上様の御胤ぢや、勇勇しき仰せ、長門身に取りて、大慶に存じ奉る。
彦右　殿、殿、先づ、先づお待ちなされませ、この所で失せさせたまふほどならば、岐阜にて、御腹とあらう道理、なう長門殿、其許も此國へ御動座を同心せられた人なう、何か外に宜き手立など。
長門　あり申さぬで……、我等主の御心量る上からは、この上宜い目の出やう筋はなし……
彦右　これと云ふも妹めが、頑固な似非賢人……
信孝　彦右衞、靜緒を罵しるな、女を頼うで、一命を棄がうとした、身の心根の賤しさは、我れながら淺ましい、云ふな、予は決心した。
彦右　はあ。

（三人また啞然。暫くして、また看經の鉦聞こゆ。）

信孝　幸の法の聲、例の法師が看經よな。
長門　せめて、後生のお沙汰など、某が伴ひ申さう。
信孝　ああ、いや、信孝には後生も無し、要らぬ事ぢや。
長門　さらば、御最期の御支度など。
（と、長門守の立去る後を、見送りし彥右衛門は、不覺の淚せきあへず。）
彥右　殿、お覺悟も然ることながら、今一應の御分別を。
信孝　その思案があればのう、彥右衛、それ共に、其方によき考へなど……
彥右　それとて……
信孝　無いか。
彥右　…………
信孝　あるまい。
彥右　…………
信孝　雨の爲めに軍は仕損じ、一身の爲めのみ計れば、女にさへも見放された信孝、行く處は知らねども、此世に有らう人とも覺えぬ。
（長門守、經机の上に樒を立てたるを持ち來りて、信孝の前に差置き、引下りて坐す。信孝肌を脫ぎ。）
信孝　彥右衛、介錯を。
彥右　はつ。
（と刀無きに躊躇す。長門この樣を見て、己れの刀を渡す。彥右衛門感慨の念に堪へず、淚に咽ぶ。折から走せ出づる淸三郎は、）
淸三　と、殿樣、お腹を切らしやりまするか。
信孝　淸三郎、種種と造作になつたが、予は今日を限りに相果てる。
淸三　殿樣、あの世におざらしやるなら、淸三郎もお供申しましよ。
信孝　いやいや、要ない追腹、無益にせい。
淸三　親共は討死致し、誰れ便りも無い私、殿樣にお分れしては參りまする家もござりませぬ。
長門　横合から恐れなれど、なう、殿、淸三郎は、我等に於て引受け……
淸三　嫌ぢや、殿樣に腹召させる長門樣と、一緒に住むは嫌ぢや。
（と云ふうちに、肌推寬げて、小刀を腹へ突立てる。）
淸三　ああ。
長門　や。
彥右　むむ、見事。
淸三　お先へ參……
彥右　先驅けせい、我等も後より……
（と介錯す。）
信孝　忠な奴、いで、（と短刀を逆手に持ち）往昔此處は

悪逆人の長田庄司、主の義朝を殺害なせし跡なりとや、それにも劣らぬ羽柴筑前、報いといふは世に有るものぢや。

長門　殿、輪廻の念は後を引く、ただ尋常の御最期を。

信孝　むむ、主を内海の、

（と刀を腹へ突立つ。彦右衛門は、引廻したらば介錯せむと機を待つ。信孝、先きの帯の端に目を遣り、顔にて、それを近づけよと知らする、長門守取つて信孝に渡す。信孝これを受けて、片手に握み、暫しこれを見詰めしが、俄に書押のかたを見て。）

信孝　あゝ、靜緒、靜緒。

（と茫然自失、彦右衛門、長門守と目交ぜし、涙を呑んで刀を振ふ。）

— 幕 —

甕破柴田（三　場）

登場人物

柴田修理亮勝家（四十一歳）
三上太郎盛重（凡二十五歳）
青地辰馬　勝家の臣
竹中寅松　同
池内亀助　同
赤島忠太　同
平井甚助　使者
供の士卒
常夏　侍女（凡十八九歳）
供の下婢
甲　內　兵卒
乙　平　同
敵方の兵大勢
小姓二人

所

長光寺城の廓內――同城內書院――返し――同奥庭水屋。

時

元龜元年六月四日のこと。

第一場　長光寺城の廓內

小丘ありて赤松生ひたり、近きあたりには同じき大木あり。兵卒二人立ちて對話。

兵甲　暑い事ぢやなう、やがて八刻下りと思ふが、この暑氣は何事ぢや、身中も熱つて焦げるかも知れぬわ。

兵乙　せめて風でもあつたなら、少しは凌ぎよいと申す者だが、死人の樣に靜かな空合、いとゞ暑さの增さうといふものぢや。

兵甲　恨めしい樣の旱續きで、さらでも惡い用水の、根を切られたが味方の大難、日々の飲代を定められると、反つて渴きが強くなつて、嘘ではおり無い水の中なら、どんなに濁つて居ようとも、第一番に飛込むつもりぢや。

兵乙　寄手の奴等も武勇達者の柴田殿には、とても正面に敵對が出來ぬと考へたか、水を塞つて掘川の鮒や鯰と同じ樣に、味方を渴き責に致さうぢやまで、さりとは卑怯な奴原だ。

兵甲　何と云はうが水が無いのは、兵糧に事を缺いたよりも難澁ぢや。

兵乙　いかにも膳に酒が無く、人間に女の無いのも同然ぢや。

兵甲　女と云へば腰元の常夏様が、小女を供に今方こゝを通られたのは、何處へお出なされたか。

兵乙　二の廓内の八幡宮に味方勝利の祈誓と申すが一の用ぢやよ。

兵甲　お主、面白い事をおいやる、八幡宮が一の用なりや二の用とは何ぢや。

兵乙　やれ風上には置けぬ奴、常夏御寮が軍神は八幡大菩薩の外にあるわ。

兵甲　陣内には八幡宮の外に兵神は在せられぬわ。

兵乙　はゝゝゝゝ、當世には珍らしい無風流の男ぢや、常夏御寮の軍神は、陣中一の風流男、三上太郎盛重殿ぢや。

兵甲　それにて思ひ當つたわい。三上様も先程から此あたりを彷徨せられてあつたわ。

兵乙　人の戀路の邪魔をすると、來世は鳥に生まるゝさうな、分相應に我等は急いで持場へ行かう。

（兵卒二人下場。三上太郎盛重上手より登場。）

太郎　嚴しき暑氣かな、阿鼻焦熱の猛火も物かは、さりながら、その焦熱の猛火より、なほ誇り立つ戀路の炎、身の一大事さへ忘れ果てゝ、欲界の快樂に耽り、早晩も、籠城も、魂こゝにあらざれば、苦樂の外に打捨てたり、けふは遙かに消息して眞實に逢はんと申越せしが、待てども遲き女の足、居所へ赴く半なりとも、今少しは早からうに。

（婢女を先きに常夏下手より登場。婢、太郎を見て常夏の袖を牽く。常夏點頭く。婢、左右を見廻し常夏に目禮して下場。）

太郎　（あたりを見ながら）常夏殿。

常夏　盛重様。

太郎　其處は何うおいやる、木蔭へ參られい、さて對陣の忙しき中に火急用事の出來せしとは何事の起りしにか、とうとう語られい。

常夏　火急の用事と申せしも貴方のお顏を見たい爲め。

太郎　なに見たい爲め。

常夏　さア貴方のお目にかゝる外には、實に用事はありませぬ。

太郎　常夏殿、常とは時が違ふぞや、大將の下知によつては直ぐにも敵陣に切つて入るべき今日なるに、唯逢ひたいのみが用事なりとは戯れも時にこそよれ。

常夏　すりやお呼び申したをお叱りあるぢやまで。

太郎　いかにも。

常夏　これはまた思の外のお言葉かな、戀路にそんな道理があつてか、戀と戀との其中には、逢瀬より大事はない、女だてらに大膽な、八幡樣を枷に使ひ、漸く御目にかゝつたに、無情うおぢやるも程がある。

太郎　無情とのみ申されな、對陣の其中にて憚りも無く語らはゞ、惡事千里の人の口、もとより狹き城の中に、なほ身を狹ばくなさんかと、思ふも汝と我れとの爲め。

常夏　益ない懸念を起したまふも、御心淺き故にこそ、たとへ浮名が立たうとも、または顯はれ罪の下に、命を捨てうと悔いはせじ、貴方と共にあるならば、地獄の釜の火の下でも、安樂淨土と思はうもの。

太郎　晴れて汝と添ふまでは、いとゞ大事の我が命ぢや、さりとて月を越えたる籠城、勢ひ日々に增さる敵勢、とても勝利は覺束無く、唯幾日を支へようかと、云ふに止まる味方の有樣、互の命は迫まつたぞ。

常夏　さては本國からの助勢は。

太郎　得參るまい、名に負ふ淺井朝倉二家の軍勢、殊に叡山の山徒まで力を合せたれば、本國よりの御發向は覺束無しと思はれたり。いま我等に降りかゝる禍を福に反さん術あれど、とても汝に語り難し、只手を束ねて運命の、車の轍にまさぐられう。

常夏　禍を福に反さん術ありとは、いかなる事か、御聞かせなきとは恨めしや。

太郎　さ、とても汝の同心すべき筈無ければ……

常夏　いや貴方の心に叶ふ事なら……、たとへ命を捨てようとも。

太郎　はて捨つる命を助けうとてなるに、などて、さらば大事を語り申さむ。四邊に心を配りたまへや。

（兩人左右を見廻して元の座に復す。）

常夏　幸ひ四邊に人も無し、事の仔細をとう語りたまへ。

太郎　御身が預り居る水屋の鍵を我等に暫く借したまへ。斯くのみにては、いかに慧き汝とて悟り得られじ、寄手は既に城内の水道を斷ち切つたれば、落城束の間なるべしと、思ふにかへて拔目なき勝家殿、數多の甕に天水を貯へ置き、士卒に頒ち與ふ、されば敵に取りては水屋の水こそ一の仇、この仇を倒し、是れを引手に敵陣に身を任さば、恩賞は思の儘、さあらば生命を助かる上に、おん身と晴れて添ひ遂げ得べし。

常夏　え、え、え、さては盛重樣には六角方に降參せうと仰有るのか。

太郎　降參なんどゝ汚らはし、實は我れは佐々木家にさる者ありと知られたる、鯰江相模守が子供なり、幼なきより都に育ち、面體見知れるもの無きを幸ひ、主に取りては大敵たる、織田家に奉公なしたるは、一つの功を立て

んが爲めなり、忍び入つて甕を碎かば、これぞ即ち柴田殿を打ちしも同じ、斯く打明けたる上からは、よも汝に異存はあるまじ。

常夏　さては貴方は敵方の……。

太郎　聞書でおざる。

常夏　はあ。……(泣伏す)

太郎　常夏殿、いかゞでおぢやる、鍵を借させらるゝか、但しは否か。

常夏　貸さぬと云へば。

太郎　盛重が身の切迫、腹掻割いて失するまで。

常夏　そはまた短慮。

太郎　いや多年の計策も畫餅となれば、生きて阿容々々歸られうぞ。

常夏　さりとて味方を失はれうか、此上は盛重様妾を共に殺してたべ。

太郎　そりやならぬ。

常夏　とは、またなぜに。

太郎　盛重に隨はぬ女、共に死なうとは無禮(なめ)なり、鍵を貸したまはずば、末代までも仇と仇、何とて共に死すべきか。

常夏　すりや死なうにも死なれぬか。

太郎　鍵を貸さうか。

常夏　それは。

太郎　繩を切らうか。

常夏　それは。

太郎　いや我れながら誤まつたり、我に佐々木が主なれば、御身に柴田も主にてある、我れを立てゝ人を立てぬは、情を知らぬ所業(しわざ)、さらば常夏殿、これまでは幻の夢にてあるぞよ。

(盛重立つて下手に行く。)

常夏　なう待ちたまへ。

(盛重の手を取りて縋りつゝ。)

常夏　女は出でゝ夫に從ふ。云交はせし上からは、いかにも貴方に從ひまする、宵月落つる亥の刻過ぎ、奥庭に忍びたまはゞ。

太郎　その時鍵を渡されうとか。

常夏　あい。

――幕、若しくは廻す――

第二場　城内書院

座敷には柴田修理亮勝家、熊皮の上に坐して中央に踞坐す。二人の小姓は左右に侍し、家臣四名は前面に居並びて評議の體なり。

柴田　辰馬、天氣の變はる模樣もないか。

辰馬　はつ。（線先に出でゝ空を見遣り）されば空には白雲のふはり〳〵と漂ふばかり、夕立などの起る氣合も見え申さぬ。

柴田　生温こい佐々木承禎が陣立、四千餘人を引連れても、四百に足らぬ小勢を恐れ、有無の合戰を兎角に嫌ひ、長榮の氣長軍、たとへば籠城月を越さうと、敢て懼る敵にはあらねど、元が領主の事なれば、百姓原も敵となり、終に筧を切り放され、飲水に事を缺かせられては、數萬の敵を取拉ぐ、味方の武勇も用ふるに所なし、あはれ一村雨も來よかし、飽くまで人馬に水を與へ、一擧に敵を敗らうずるに。

寅松　御の如く、士民の内通にて、水道は立切られ候へども、御用意の大甕に、飽くまで水を湛へたれば、足らぬながらも籠城は續き申す。

惣助　只氣遣はしう候は　大甕の水の盡きざる中に館、殿の御加勢到着の有無、一合を五勺に減じても、持堪へが肝要なりと存じ候。

忠太　此分にては日に增し味方の勇氣は細り、目醒ましい軍はなり申さず、さらでも若い土用の最中、飲水に事を缺きては、湊の餅も同樣、飛出さんは思ひも寄らず。

柴田　いや館を頼む存念なし、柴田が加勢には半時ばかりの雨が欲しいわ。

（士卒一人登場。）

士卒　申上げまする。

忠太　何事なるぞ。

士卒　只今敵陣より御見舞として使者を差遣し候。

柴田　なに、見舞に使者が來た、是れへ通せ。

士卒　はッ。

（士卒下場。柴田は辰馬に囁くことあり。辰馬立つて襖に入る。）

（柴田座を改む。使者平井甚助士卒に酒肴を携へさせて登場。寅松庭前に下り。）

寅松　御使者、これへ御通り下されませい。

平井　さらば御免下され。

（使者座敷に上り、着座して一禮なし。）

平井　拙者事は佐々木承禎が家臣平井甚助と申する者でおりやる。主人承禎申し候は、此度不思議の出會、長々の御籠城嘸御氣鬱でござらう、無禮ながら御見舞として、湖水にて漁り候ふ源五郎鮒、到來の伊丹の銘酒一升、進上申候との事でおりやる。

柴田　遉がに京近い近江の國主が御心、田舍者の柴田なんどが思ひも寄らぬ風流の馳走、酒は伊丹の銘物、肴は湖水の源五郎鮒とや、御承知の有樣なれば、分けて生肴は珍重致す、早速ながら賞翫仕らう。誰そある、盃もて。

辰馬　はア。

（奥より辰馬見有、盃を持參し來る、勝家取つて小姓に酌させ飲まんとす。）

太郎　暫く。

（聲掛けて三上太郎下手より登場。）

柴田　太郎何事ぢや。

太郎　敵方より送り越したるこれなる酒肴を、毒味も遊ばされずに參るとは、餘りなるおん怠り。

柴田　はゝゝゝゝ、晴の席に鴆毒を用ひて敵を害める者やあらむ。

平井　お疑は一應の道理、さあらば拙者毒見役をお勤め申さう。

（平井盃を取らんとす。）

柴田　いや〳〵多からぬ酒肴、御不自由なき御使者が接伴、有難過ぎて迷惑致す。

太郎　さらば、毒味も無くて召されまするか。

柴田（また飲んで）甘露々々、城内にも味の能からぬ地酒の候、御使者に一獻差し上げい。

平井　いや〳〵拙者は下戸に候へば御無用々々。持參爲したる酒肴を、直に御風味下されしは、拙者の面目此上はおざらぬ、付いては一つ御無心がござる、何卒手水を給はりたい。

辰馬　なに御手水とか、それ。

（小姓二人立ちて飯臺に水を入れたるを運び來る。）

平井　然らば御免下され、いや本日の御饗應はまた格別でござつた、是れは〳〵、手水にしては格外の水、かくまで多くの……さらば無禮仕る。

（面を洗ひ嗽ぎ等して、元の座に復す。小姓二人立ちて緣より下へ水を捨てゝ、飯臺を運び去る。平井見て驚く。）

平井　暑中には冷水が何よりの馳走、多分に賜はり忝けない。（前面の方を見て）やゝ、あれなる木陰に多くの馬を引出されたは。

柴田　御配慮無用、夕暮なれば馬共に洗足をさせ申すのぢや。

平井　なに、あの馬に洗足、この旱魃に清水を、あれ、さりとは無益しい、多くの水を、いやなに柴田殿、拙者は是れにて御暇申す。

柴田　佐々木殿の御芳志宜しく御禮を。

平井　申し傳へ候ふべし。

（平井甚助不審なる面色にて下場。太郎は手水を捨てたる邊を見て。）

太郎　數十人が一日分の桝數ぢやに。

柴田　水の樣子を伺はうとて、見い、酒と肴を遣し居つた

わ。

寅松　さりながら、あの廣庭に馬を引出し、あれ未だ清水にて洗足を致させるは。

龜助　既の小者が暑氣に中り、物に狂うて爲すわざか。

忠太　微笑みながら其儘に、見やりたまひて捨置かるゝは。

寅松　いかなる事で。

三人　おりやりまするな。

柴田　それぞ計略、水と見ゆるは白米ぢや。

一同　え。

柴田　今がた來りし小才の使者、手水を乞ひてそれとなく樣子を伺ふ、さるに依つてだぶ〳〵と水を汲ませ、其上遠き廣庭にて、淸水と見せて白米を、馬足に灑がせしは敵に油斷をさせう爲ぢや。

辰馬　君の計策圖に中り、馬足に注げる白米を、見たるときの愕きかた。

寅松　飛礫を受けたる烏の如く、立居を忘れ、度を失ひ、

龜助　言句も出でず眼を瞠り、世に不思議なる面色にて、

忠太　直ちにお暇仕り、慌だしう歸つてござる。

太郎　かくとも知らず敵方にては、手薄と思ひし用水も、有り餘るぞと心得て、軍評議も狂ひ申さん。

（勝家は大笑をなして立上り。）

柴田　はて、心地えい事であつたよ。

――幕、返し――

第三場　奥庭水屋

物古りたる杉木立の下に、板戸にて圍ひたる水屋あり、嚴しく錠を下したり。木立の間より常夏被衣を蒙りて登場。

常夏　月も落ちたる合圖の刻限、あの太郎樣は何してぞ、思へば不思議の今夜の仕儀、戀は惡趣の近道ぞ、御主も忘れ、味方も忘れ、天も地も敵として、間者の夫に付かうか、天道樣もあんまりな、少女の胸に戀草の芽生をさせて、敵の味方の軍のと、雪霜霰を並べたて、散々に蹴ませて、孱弱い女を苛なむのか、あゝどうぞして太郎樣が間者でなく、御館樣が佐々木の仇でなかつたら、こんな辛苦はあるまいもの、儘にならぬが煩惱の、浮世は輪廻の闇なれや。

（人の來る氣色に、常夏木蔭に身を隱す。太郎下手より登場。）

太郎　（小聲にて）常夏々々。

常夏　あい。

（常夏木蔭より出づ。）

太郎　鍵は。

常夏　なに鍵とや、さりとは御心、人目を竊み忍び出でた

常夏よりも、この鍵がさほどに愛しうおぢやるのか、ええ腹立ちや、とても見替られた此鍵を、渡すも反りて腹が苛られる、さうぢや、一層のこと捨てゝ退けう。

（鍵を地に擲つ。）

太郎　やゝ、大切の鍵を。

常夏　又しても鍵とや、聞こえた、鍵の外には大切の者は無いのぢやな。

（常夏太郎の方へ摩り寄る。太郎手を取りて。）

太郎　いかに女と云ひながら、あまりの譫語、常夏聞かれい、つねの逢瀬とは違ふぞや、御身の幸は我の幸、水屋の扉も二人の運も、開くべき鍵なるに、時移らば如何にせん。

常夏　ほんに一時の腹立に、鍵を捨てたは私の誤り、確かに此邊と思ひました。

太郎　此あたりにて搜せしやうぞ。

（二人搜せども見當らざるに、太郎腰より燧袋を出して火光にて搜索す。其中に常夏鍵を發見して太郎に渡す。）

太郎　あたりに心を付けい。

（水屋の鍵を開きて中に入る。常夏木蔭に忍ばんとす。龕燈を携へたる忍びの武士登場。）

武士　曲者。

（武士常夏を捕へんとす。常夏拂つて、龕燈を落とす。武士は「曲者々々」と連呼す。水屋より太郎出でゝ武士を斬る。其内に二三人の武士馳せ來りて暗闘。常夏は木蔭に忍び居る。終に松明を携へたる武士數人出で來る。太郎奮闘す。柴田勝家小具足長刀を持ちて登場。）

柴田　謀叛人め、推參なるぞ。

（太郎は左右の武士を防ぎつゝ、水屋の戸を後にして。）

太郎　やあ謀叛人にあらず、生れ付いての六角方ぞ。

柴田　なに六角方とは。

太郎　さる者ありと知られたる鯰江相模守が一子同苗太郎盛重、かくと名乘り申す上は、尋常に勝負あれ。

柴田　小賢しい小わつぱめ、さりながら、我が面前にて名乘を揚げし勇氣に免じ、身が相手を致してくれるわ。

（柴田進み出で二三合にして直に高股を薙ぐ。太郎倒る。木蔭より常夏出で。）

常夏　やゝ、太郎樣が。

（と太郎に近づく。勝家は目も觸れず、士卒の松明を取りて水屋に入る。士卒は呆れて暫時唖然たり。勝家水屋より出でゝ士卒に向ひ。）

柴田　申すべきことあるぞ、組々の頭人共に、急ぎて是れへ參るやう洩れなく申せ。

(松明を携へたる武士等左右に馳せ行く。太郎刀を杖に起き上り。)

太郎　此上は、はや〳〵命を取りたまへ。

柴田　ほゝ健氣なる奴、總江相模守が一子とは始めて聞きつる敵の間者、いかにも命は止どめてくれん、さりながら水屋へは何故あつて忍び入りしぞ。

太郎　甕を破つて捨てうため、さあらば味方の勝利ならんと、思ひ込んだる我が企も、運拙くして斯くの仕儀。

柴田　やあ女、大切の鍵を何とて人に與へしぞ。

常夏　(太郎の小刀を取りて喉を突き)二世を交せし夫の頼み、命を懸けて渡しました。

(士卒大勢左右より登場。追々に居並ぶ。柴田は持ち來れる床几に腰を掛け。)

柴田　水屋の戸を取りはなせ。

(士卒四人程にて水屋の戸を撤去す。勝家立つて士卒に向ひ。)

柴田　いかに方々承はれい。

一同　はア。

柴田　そも此度の合戰、敵は數千の大勢なるに、味方は漸く二百騎に足らぬ小勢ながら、久しき籠城に持ち堪へたるは方々の働き、勝家に取りて嬉しく思ふぞ、また館の御感斜ならずと存ずるぞ、然るに敵は士民を語らひ、用水の筧を切り放したれば、味方いかに猛しとて、乾ける喉を濕ほし難く、終には陸地の魚同然、忽ち命を落とすべし、見られよ數の甕の中、只一つを除きては、水の入りたるものも無し、明日を限りの名殘の甘露、いま酌みかはして今生の思ひ出となさんはいかに。

辰馬　仰せ畏まつて候。

柴田　さらば吸筒に一杯宛を計り、組下の物共にも分たれい。

(士卒各々水を酌む。勝家も士卒が薦むる吸筒に喉を濕ほし。)

柴田　今こそは一滴たりとも殘れる水なし。

(柴田立ち上り、持ちたる長刀の石突にて甕を壞る、一同愕然。)

柴田　甕は土に歸つたは、天に迫まられ渴き死に、乾鰈(ほしがれひ)の如く、へたばり失するか、但しは敵中に斬入つて、甘露の血汐に濕ふべきか、一日生きて臆病者となるべきか、一刻早く命を捨てゝ勇者とならうか、人間の花盛、其儘に萎らかすは無念ざうぞ、誘ふ山嵐に連れて散らさんはいかに。

辰馬　仰せの如く所詮死すべくば敵の刃にかゝりたし。

寅松　渚に殘りし小魚の如く、乾枯び死なんは殘念千萬。

龜助　冥途の道連れ一人たりとも、多き程が面白し。

忠太　切つて切つて切入つて、敵の血汐に湯浴を仕らう。
柴田　勇ましく〳〵、急ぎて用意致せ。
一同　はゝア。
（一同下場。勝家も行かんとするを。）
太郎　いかに勝家殿、遙かに御出陣とや、
柴田　思ひ付いたる早速の掛引、甕を破つて味方を激まし、危ふき合戦の首途なるわ。
太郎　必死を極めし城方に不意打されては、味方の敗北まのあたり、其の源は太郎が振舞、反りて主を害ひたるか。
常夏　三世の御主の目を盗み、掠め事せし天罰か。
太郎　敵と味方の戀の果。
夏夏　主を捨てたる戀の末。
太郎　いざや常夏。
常夏　太郎様。
（二人相刺して斃る。柴田悵然として。）
柴田　運命の期する處、吉凶を天に任せし今夜の軍、勝利はいまだ定かならねど、望める戀に身を終りし、悶えに悶えし二人の者は、安らけく勝利を遂げしぞ、あはれにも心ゆくかな、実はしき者は世を終つて彼岸に去りぬ、なにとて我れは長刀に深き戀をば懸けたりしぞ。

――幕――

嶋の女（三幕）

時

時代は不定、風俗一定せず、およそ範を室町時代の末期に取る。

所

伊豆熱海東濱の海岸

人

宗次　漁夫

みね　熱海の女

きく　みねの友達

うた　初島の娘

外に踊りの男女大勢

上の幕

舞臺は海岸の岩壁なり。上手に海を見せ、下手に屹立したる崖あり。海は狹間に小さき岩の並び立てる中に、浪打ちよせて白き花を散らす。崖は中腹に漸く三四人を容るべき程の、平かなる地點あり。この所へは風磨せる岩壁を亙りて、安らかに達し得るやうに造らる。其上には枝垂れたる松の大枝かゝれり。舞臺の前の部分は普通の海岸にあるごとき砂濱なり。幕明きの前に、浪の寄するが如き調子の樂聲聞こえ、その樂聲のやゝ衰ふるとき、幕の中より盆踊りの唱歌聞こゆる。

唄へ島へ行きたや、あの島行きた。
　やんれ
島の女子は色知りぢや。
　やんれ
島の娘はみな色知りぢや。
　やんれ
見れば数へる戀の道。
　やんれ

（と此二つ目の歌の半ばにて、幕は靜かに明く。）
舞臺には、様々の　ひなをなしたる若き男女、二つの圏をなして踊る。踊りの環は大きくなり、また小さくなり、不規則なる楕圓形ともなる。歌唄ひの男は、上手にて太鼓を打ちつゝ聲を張上げる、其外銅鑼を打つもの笛を吹くものなどあり、二人の男は燈籠を下げて、

この踊りを照らす。

この仲間の中に、おみれといふ二十歳位の美人ありて、その眼はとかく岩壁に流れ行く。岩壁には二つの踊りを義務のやうに、折々に見てゐる宗次といふ若き漁夫あり、彼れは己れの傍らに積み置ける薪を取出だして、燃せる火に加ふることを怠らず。

唄〽戀ぢや、情けぢや、
　やんれ
　さつても盡きぬ。
　やんれ
　島の煙りは絶えるとも、
　やんれ
　島の煙りの、
　やんれ
　立たない日でも、
　やんれ
　若い生命にや戀がある。
　やんれ

（此の唄の振りの頃から、おみれ踊の群を放れて、岩角に腰を掛けて憩ふ、友達娘おきく、群を放れておみれに近づく。）

きく　あれ、何とさしやつたえ。
みれ　わしや心持が惡いに依つて、少しの間休みませうぞえ。
きく　それはまあ、そして何處か痛むのかえ。
みれ　齒が痛んでなりませぬ、口を利かれるとなほ痛んでなりませぬ。
きく　（少しむつとして）さうかいな、それは惡うござんした。

（と、また元の踊りに入る、踊りの間は此時大きくなり、下手へ寄りたる果ては、一文字のやうになり、上手へと入り終る。おみれは其後を見送り、やがて宗次の方を見て、）

みれ　宗次さま、宗次さま。
宗次　（氣の抜けたやうに）なんぢやな。
みれ　なんぢやなではござりませぬ、お前さまは何をしてゐられますする。
宗次　おれか、おれは火を燃してゐるのだ。
みれ　私ぢやとて眼があるから、火を燃してゐるのは知つてゐます、其火を燃して、何になされますする。
宗次　魚を集めるのぢや。
みれ　盆の休みで、浦の稼ぎは、無いと云ふのに何にされ

ます。

宗次　盆ぢやとて、正月ぢやとて、魚を集めないでどうするものか。

みれ　さうかいの、まあその焚火少し休んで、こゝへござんせいな。

宗次　何か用かな。

みれ　なんであらうと、降りて來て下さりませ、下りて來るのが大儀なら、私がそこへ參りませうか。

宗次　（薪をとりて、見ながら一本を投げ入れ）そりや來たうは來ても。

（と心ないやうに云ふ。）

みれ　行かいでか。（と岩角の中頃に坐り）人が何云うても、生返事をしなさるのは、その焚火のせゐでがな、よい／＼、とても心を取られた焚火、一層のこと消しておきませう。

宗次　なに。（と顔を見る）

みれ　消さいでか。（となほも上がらうとする）

宗次　（立上り）用ならそれへ行きませう。（とおみれの傍へ來て）おみねどの、何の用事ぢや。

みれ　そりや用と云うて別にな。

宗次　なんぢや、用事は無いのかい、わしを下まで呼寄せて、それで用事はないのぢやな。

みれ　それ、そのやうに恐い顔して、そんなに私が憎いのかえ。

宗次　何も別に憎い筈はありませぬ。

みれ　憎うなうて、何んでそのやうな恐い顔をなされまする。

宗次　恐い顔をするものか、これは私の地顔なのだ。

みれ　いゝえ、恐い顔をなされます。

宗次　恐ければ恐いにして置くがよい、そして用とおつしやるのは、なんでござります。

みれ　だから、用と云つて別には……。

宗次　でも用があると云はれたではないか、折角人が魚付けの、焚火を励んでやつてゐるのに。

みれ　それは惡うござんした、私の用と云ふのはな、ちとお前樣に聞きたいことがござりまする。

宗次　用なら早く云つて下さい。

みれ　お前樣は何と云ふ、邪見な方でござりまする。村中の若い者が、みんな揃うて遊んでゐるのに、お前樣ひとり用ありさうに、一體まあ誰れに賴まれて、火を焚くのでござります。

宗次　誰れからも賴まれない、向うにあたるあの初島、あの島人から敎はつて、この濱寄りに魚を集める、手立に毎夜やつてゐるのだ。

みれ　その話なら聞いてゐまする、私の聞きたうございますのは、誰れあつて稼ぎをしない、今夜に限つてこの焚火、なんでなされまするのぢや。

宗次　や。

みれ　盆踊りにも入らない、分けを聞かせて下さいませ。

宗次　踊りたくないから、それで仲間に入りませぬ、焚火がしたいで焚火をする、何も別にわけはない

みれ　それでは私から頼みます、今夜の踊りに入つて下され、三年も五年も夫婦(めをと)のやうに、組んで踊つた私の頼みぢや。

宗次　私には踊れませぬ、けふは氣が違うて踊れませぬ。

みれ　お前様と一緒で無くば、私には踊れませぬ、それでは私はこのお盆に、踊ることができませぬ。

宗次　できずば止めになされませ。（上を見て）おう、火が昏(くら)くなつてきた。（と行きかける）

みれ　宗次さん、お前さまはどうあつても、私とは踊らぬ氣かえ。

宗次　面倒なことを云はれますな。（と岩へ上りかける）

みれ　（縋りとめて）私に愛相が盡きたのぢやな、私が嫌になつたのぢやな。

宗次　愛相が盡きたの、嫌になつたのと、なにも私はそんなことを、云はれる覺えはありませぬ。

みれ　いゝえ、無いとは云はせませぬ、たとへ根の無いことにもせよ、噂にまで浮名を立てられた、お前様と私の中、今夜も今夜とて、友達衆からお前様の、御亭主はなぜに來ないと、口々にからかはれて、私は恥をかきました。

宗次　根の無い花が咲いたとて、それは私の知らぬことぢや。（と振切つて、上へあがる）

みれ　どうあつても踊らぬのぢやな。

宗次　（火の傍らにて）もう口を利いて下さるな。

みれ　ようござります、もう口を利きさすまい、したが宗次さん、私を捨てゝよもや外に、女子を持ちはなされますまいな。

宗次　お前様とそのやうな、相談するには及ばぬことぢや。

みれ　しなければしないでよし、濱邊育ちに氣兼なものぢや、お前様がよそほかに、女子を持つたら濟ませぬぞえ、私はその女子を、さうぢや、殺してしまひまするぞえ。

宗次　殺す。

みれ　殺しますとも、そのやうな人と一緒に、世界にゐるのはわしや嫌ぢや、わしや其人を殺して退(の)けます。

宗次　（冷笑の氣味で）強(きつ)いことぢや。

みれ　外に女は持たせぬぞえ、ようござんすか、乾度覺えてゐさつしやりませ。

（この時、上手の奧にて盆踊りの歌、鳴りものなど、
幽かに聞こゆる。）

宗次　踊りが近うなつてきた、早く行つてあの仲間に、入つたがようござりませう。

みね　入らうと入るまいと、それを此方が知つたことかえ。

（と岩角を下る。此時浪の音高くなる。おみねは水面を見る、おきく上手から出て來る。）

きく　おみねさま、まだそこにゐたのか。

みね　おきくさんか。

きく　大勢が待つてゐます、今方踊りは里の方へ、阪を登つて行きまする、おみねさんがゐないでは、寂しうてしようことが無い、早う來て下さんせ。

みね　あゝ、いま行きませうぞえ。

きく　（岩壁を見て）あそこにゐるのは宗次さんかえ、あ、私や氣の利かぬことをしたなあ。

みね　なんの、のう宗次さん、いま私の云つたことを、忘れぬやうにして下され。

（と二人は入る。）

宗次　（沖の方を見て、生欠（あくび）し）あゝあ、まだ來ないのかなあ、（とまた薪を添へ、火光のあがるを見てゐたりしが、心は落着かぬ風にて、浪寄際まで來て、遠くを見て、また元の所へ戻る）もう來る時分だかな、あの人は三里の浪の上を、盥を便りに泳いでくる、それをおれは男の癖に、力の入らぬ火を焚くだけで、疲れるといふ道理はないのに、どうしてから眠いのか、あの人を思ふ心氣の疲れで、夜もおち／＼寢ないのが、大方目に祟（たた）るのだらう。

（また薪を添へて、うつらぐ春の心地。浪音高くなりて、おうたは、盥の中へ衣類を入れたるを便りにして泳いで來り、盥を上手の小さき岩の上へあげて岩角に立つ。手拭を盥中から出して、身體を拭ひおはる。宗次、それに心づきて下り來る。）

宗次　おうたさんか。

うた　宗次さん、待つてゐて下さんしたか。

宗次　さぞ、くたびれたであらうな。

うた　それ程でもありませぬ。

（と此問答のうち、うた衣服を着る。宗次は盥を取りて、小蔭に隱しながら。）

宗次　何にしろ、三里もある海の上、いかに泳ぎ達者でも（とうたの手を取つて、振るやうにして）疲れたことであらうな。

うた　お前に逢ひたい一心で、凝り固まつてゐる私の體、たとへ骨々が綿にならうと、くたびれるなぞと思ふやうな、そんなことはありませぬ。

宗次　さあ、一緒に行かう、（とおうたの手を取りて歩みしが焚火に氣がつき）お主が來てしまつたのに、燃しておくのは薪木損だ。（と焚火を消す）

うた（下にて）なあ、その焚火を的にして、泳いでくる三里の海、波の頭にのつたときには、あら、あの光りはお前樣が、夜すがら燃してゐるのぢやと、思へばそゞろに氣も引立ち。

宗次　おぬしの方は泳いでくるから、光りはよつく見えやうが、おれの方は何が何やら、その上に闇の晩は、三間先きも見えはせぬ、待つ間の辛い苦しみは、おれの方がよほどましだ。（と下りて來る）

うた　えゝ荒勝ちな、三里の海を來る方が、一層苦しうござります。

宗次　なんの、身體の苦みよりも、心の苦勞は辛いものだ。

うた　なんとでもよござります、互ひに思ふ心と心、どちらもかはりはありますまい。

宗次　さうぢや、はゝゝ。（と高く笑つてあたりを伺ひ）さあ、あちへ行かう。

うた　はい。

（と手を引連れて下手へと入り終る。暫くして踊の唄また起る。）

唄へ浪は立たねど心の海は、
　やんれ
日がな毎日あれてゐる。
　やんれ

（と先きの一群、また踊り來て、下手へと入る、おみれは其後に尾して舞臺に出で、上手に立止まり、茫然として一行の去るを見る。おみれは岩の上に焚火が消えてゐるのに心づき、つか／＼と岩頭に上り、不審のさまにて。）

みれ　宗次さん、／＼。（と呼びながら、脚下の海を見て）どうしたのであろ、もしや此岸から。（と云ひながら、平地に下り、盥を見つけて）盥が？（と考へてあたりを見廻す）

（やがて、下手から見ゆる二人のかげに、何か知らず身を隱す氣になり、隱れ所のないのに困つたが、僅かに岩の狹間を發見して、身體をひれふして親目を避く。宗次とおうたは話しながら出て來る。）

宗次　歸りは月で明かるいなあ。

うた　明けるまでには歸れまする。

宗次　あの初島と、この熱海と、磯の景色は變はらないが、三里の隔てがあることを考へると悲しくなるのう。

うた　岡續きでないくやしさ、もしそのやうであつたなら。
宗次　泳いで來る菩勞もなし。
うた　ほんに何夜さ、逢はれるにな。
宗次　それでは今度は明後日のこと、月はあるし、盆に掛かつて濱中は、踊りで人が賑かな、焚火の代りにこの松枝に、燈籠を釣るしておかう。
うた　あい、その燈籠を目途にして、私は岸へ着きませう。
宗次　天氣が悪いか都合が悪いか、そのやうな時には燈籠を、消して置くから海に入るな。
うた　あい、火の光りさへ見えてゐたら、たとへどんな高浪でも、風が吹かうと嵐であらうと、必ず渡つて參ります。
宗次　しるしが見えたらきつと來てくれ、もしまた見えずば、その次ぎの日ぢや、よいか、よいか。
うた　あい、合點ぢやわいな。（恥づかしき風にて）もしすこうしあちらへいて下さんせ。
宗次　傍にゐては悪いのか。
うた　いえ〳〵、あの私や裸になるほどにな。
宗次　身體まで私に任かせたお前ぢやないか、男の前で裸になるのが、そんなにまで恥づかしいのか。
うた　まあ其様なことを云はずに、さうぢや、人が來ると悪いほどに、よう見張つてゐて下さりませ。
宗次　さうか、よし〳〵。
（と男は下手に來てあたりを見張る、うたは衣を脱ぎて盥に入れ。）
うた　それでは、またえ。
（と盥を海中へ突入れ、其身も海に入る。男は忙てゝ近づき。）
宗次　それでは明後日の六つを合圖ぢや、六つに明りが見えたんだら、渡つてくるのは止めにするのだ。
うた　あいなあ。
（と泳いで去る。宗次は暫く見送りて。）
宗次　行つてしまつた。どれ寂しいうちへ歸らうか。
（と歸り行く。あとにおみねは、腹這ひつゝ男のあとを見送り、太い息をつき、失望の色を面に顯はし、また思返し、涙の眼にて、女の去りし海の方を見る。）

――幕――

中の幕

舞臺は前の幕と同じ。前の幕より二日目暮六つの頃なり。空くもり、何となく殺伐なる情調を漲らす。松ヶ枝に綱を下げたり。これは合圖の燈籠を釣るす用意なり。宗次は火打を出だして、燈籠に火を點じつゝあり。火が點ぜらるゝと、舞臺はやゝ明かるくなる、やがて

燈籠を手にして立上がりし宗次は、天候を懸念するらしき風にて、空を見上げ。)

宗次　や、悪い雲が出て來をつた、あの雲が擴がると、きまつてえらい風が出る、熱海に限つた日金の風雲、これは天氣が變はりさうな——今夜は逢ふ約束だから、月代も剃り髪も結つたが、海が荒れては命にかゝはる、いくら逢ひたうても身が大事ぢや、この燈籠の火の上がるのを、さぞや首を長くして、女は待つてゐるだらうが、今宵はおれも我慢をして、いつも春の臭ひのする、女のくれた椿の油の、薫りを嗅いで其夜を、夢の中で繰返さう。

(と燈籠を持つて下手へ行きかける。下手からおみれ出て。)

みれ　宗次さん、何處へ行かれますする。

宗次　わしはうちへ歸るのぢや。

みれ　そしてその燈籠はなんでござんすな。

宗次　さうか、これは……、さうぢや、龍神樣へ奉納するのぢや。

みれ　さうかいな、そしてそれは、何處へつけるのでござりますえ。

宗次　別に何處といつて極りはないが、おうさうぢや、龍の都は大海の、千尋の底の深い處、それから見える場所と云つたら、南の方で魚見ヶ崎、北の方ではこゝであらうか。

みれ　それではあの岩鼻の、崖にかゝつた下り松、あの枝など、掛けたなら、丁度よいでござりませう。

宗次　さあ、わたしもその積りで、綱を下げては置いたなれど、まあ空を見てくれたがよい、日金の山に風雲の、しるしが立つてゐるではないか。

みれ　なるほどなあ。

宗次　風に當つて消えないやうに、拵へてはおいたなれど、あの雲が擴がつたら、どんな天氣にならうも知れず、それで止めて歸りますのぢや。

みれ　それでは今夜はつけぬのかえ。

宗次　今夜は……、やめにする。

みれ　あの止めに……、ほんに綺麗な燈籠ぢや、雨に逢つても濡れぬやう、油紙を上に張り、風が吹かうと消えぬやう、格子を組んだお前の細工、さうぢや、その燈籠を今夜だけ、私に貸して下さりませ。

宗次　なに、燈籠を貸せと云ふのか。

みれ　今夜つけぬとあるからは、入用のない高燈籠、格子の組みやう覺えておいて、來年の盆に使はう、どうぞ貸して下さりませ。

宗次　でもこの燈籠は。

みれ　その位の物を貸しても、よからうではござりませぬ

かえ。(燈籠を引張る)
宗次　それでは急度返して下され。
みれ　取らうとは申しませぬ。
宗次　その位のものを、取りもしまいさ。
(と燈籠を離して下手へ入る、おみれは後を見送つて。)
みれ　憎い女を呼寄せる、恨の深いこの燈籠。(と下に置き)　この光りを便りにして、今夜渡つて來たならば。(と小刀を出して)　この小刀にてあの女を、殺して私も死ぬ覺悟、にくい男の巧みにて、風にも雨にも痛まぬやう、いくら丈夫に拵へても、恨みの刃は直ぐに立つ一層のこと、(と小刀にて燈籠を突破らんとする、鐘が鳴る)おう、(と小刀を收め)今鳴るのは六つの鐘、この燈籠をあの松に、釣るしあげたら島の女は、泳いでくるに相違ない、宗次さんの來ぬを幸ひ、誘きよせて名りかけ、戀の敵を殺してしまへば、あとは思ふ儘にならう、さうぢや。
(と岩角に驅け上り、飛付きて綱を手繰り下げ、燈籠を結びつけて、引きあげる。)
みれ　いま釣上げた燈籠を、あの島の女めは、戀しい男の業と思ひ、ほくそ咲んで着物を脱ぎ、一昨日の晩のやうに、躰を力に三里の海を、疲れた氣色も見せないで、きつと渡つてくるのである、口惜い――、憎い女――、をさな馴染の私を捨てゝ、見返るやうた、あれが女か、白椿のやうな肌の色、苔の無さゝうな肉附きに、男の心を取られたのか、砂の上まで引くやうな、あの黑髮で男の首を、幾重も〳〵卷締めたのか、ふゝ、その艶のいゝ暖かな、肌へも直つきに凍らすぞや、黑髮もこぐらかへして、淺ましうして見せるぞや。
(と、その時、却風吹き來る、おみれは思はず岩頭を摩べり落ち。)
みれ　ひどい風ぢや。(燈籠風につれて動く)吹くわ――吹くわ――。(浪の音高くなる)今吹き出したら止まぬ風、島を目掛けて吹いて行くのは、女を此地に渡すまいと、風の神さまのお加護であろ、有難い〳〵、いや〳〵いや、たとへ雨風激しくとも、必ず渡つてくるといつた、おう、あの風雲が立つてから、吹出したこの風は、時が立つほど大きくなるのは、一日に一度定まつて、湧く大湯より確かな位、浪が高くば女が死ぬのぢや、風が強くば敵は死ぬのぢや、私が手を下さないで、死なせるのは口惜しいが、あの燈籠の爲めと思へば、つまりは敵を取つたと云ふもの、(風強くなる)強うなつた――、渡つて來たらば綿のやうに、疲れ切つた身體を一突き、海で命を落としたなら、その高浪は私の心の、邪見の刃と見

るがよい。（燈籠の方を見て）消えるな、〱、てもようできた燈籠ぢや、この大風にも燈火の、ちらつかぬやう巧んだのが、おほゝゝゝ、宗次さん〱、お前のいとしう思ひ込んだ、島の女を殺すのぢや。風よ吹け、ほうい、ほうい。

（と風を呼ばはる叫びの聲、恨むがごとく、唄ふがごとく、續くうち。）

——幕——

末の幕

舞臺は前の幕と同じ場所、その明くる日の午前、暴風雨ありしあとなれば、藻屑など打寄せられてあること、雨に破れたる燈籠は、その儘枝に掛かりをれり。

（宗次、腕組をしながら、上手より出でくる。）

宗次　どうも不思議でならぬ、なんだつて、あのおうたが合圖も無いのに來る氣になつたのか、昨夜の暴れに渡らうとは、どんな用事ができたのか、若い女が打上げられて、死んでゐると聞いたので、見には行つたが其女が、おうたとは思ひもかけぬ、誰れ獨り知らないので、假埋めにするといふのを、其儘にして來たけれど、打ちやつて置くわけにも行くまい。（海を見て）まだ海は暴れてゐるな、もすこし浪が納まつたら、船を出して島へ渡り、面目ないがおうたの内へ、この事を知らせながら、どうした事か分けを尋ねよう、あゝ、あ、下り松に燈籠を、釣るして合圖をする筈だつたが、それももういらなくなつた。（と岩の上に昇りかけ）燈籠と云へばおみねに借してやつたが……、なんの、かうなつては、燈籠の入用もなくなつた。（と松の傍に來て）や、こりや燈籠だ、〱、おれの燈籠だ、一體誰れが釣るしたのだらう、雨に濡れて破れかゝつたのは、さては昨夜からこゝへ釣るしてあつたのだな、むゝ、これで死んだのだな。合圖の火が見えたので、それで泳いで來ようとしたのだ、誰れが釣るした、もしやおみね……（と考へることしばし）さうだ、あの人に違ひない、附けつ廻しつ嫌らしい、素振を見せても手を出さない、それを恨みにあのおうたを、殺さうと企んだのだ、いや、それにしてもおうたのことを、あの人が知つてゐる筈はないと思ふのだが、こりやどうしたのであらうな。

（と、とつおいつ、思案に暮れ、倒れるやうに、岩の中程に坐る、おみね、上手より出で來り。）

みね　宗次さんはどうしたらう。

（と獨語のやうにいひながら、宗次の前を通り過ぎ、ふと氣がついて振返り。）

みね　あ、宗次さん、こゝにゐたかいな。

宗次　おう、おみねさん、丁度よい所へ来てくれた、何よりも聞きたいのは、燈籠をどうなされた。

みれ　（冷然として）燈籠かえ、燈籠なら返しました。

宗次　返した？　よい加減なことを云はぬものだ、返した燈籠が、どうして松に掛かつてゐる。

みれ　それで返したと云ひまする、あの松に掛けて置けば、返したも同じこと。

宗次　（大きな聲で）なんだと。

みれ　まあ、びつくらした、大きな聲をなされまする。

宗次　松に掛けて置いたのを、返したとはどういふ分けです？

みれ　よくお聞きなさいませ、あの燈籠は下り松に、掛けとく外には用はない、お前様に手渡しするのも、また松に掛けるのも、同じ事ぢやと思うたから、わざ／＼と火を入れて、松に釣るして返したのぢや。

宗次　掛けやうと掛けまいと、それはおれがすることだ、お前様は何んだつて、そんなをかしい眞似をしたのだ。

みれ　をかしい事はありませぬ、島の女を呼び出さうと、それで私がしたのだもの。

宗次　なに。

みれ　宗次さん、ようまあ思ひ込んだものぢやな、親船が岩へ乘上げようとて、助け船も漕ぎ出されぬ、あの風にも厭ひはなく、三里の海を渡らうと、島の女はしたのおやな。

宗次　や、どうしてそれを知つてゐる。

みれ　一昨日の晩のこと。あの憎い島の女と、お前さんとの話しをな、やつぱりこゝで聞きました、嵐の來るのもこなたさまから、それもこゝで聞きました。

宗次　（唸るやうに）うつ。

みれ　すげなう人にされるのも、元はみんなあの女、憎いと思つた幸先に、はからず聞いた燈籠の便り、明りをつけて呼出したのは、いくら泳ぎが上手であらうが、人の力は知れてある、戀の敵は私の企みで、思の通りに、失せたのぢや。

宗次　さうか、それではお前が殺したのだ、さりとは餘りの振舞だ。

みれ　なにがあまりでありませう、お前様こそ、あまりなお人だ。

宗次　何があまりだ、わしはまだ人を殺さうと、企んだことはありはせぬ。人のこしらへた燈籠を種に、卑怯なことをしたものだ。

みれ　人殺しがなんの卑怯、お前さまのやうな卑怯な人には、人殺しと云ふやうな、勇ましい事はできますまい。

宗次　おれが卑怯だと、何が卑怯だ。

みれ　卑怯とも！　自分のかはゆがつた女の死骸を、知らぬ顔に見てゐるのは、それは卑怯であるまいか、宗次さん見て下され、もしあの女が運強く、岸へ着いたら其時は、只一突きに刺殺さうと、（小刀を見せ）これを用意に持つてゐました、もう今は用がない、さあ宗次さん、島の女がゐなくなつたら、もう今は用がない、私の思ひを應（かな）へて下さい。

宗次　あまりな事を云ふ人だ、卑怯であらうが何んであらうが、おれの事なら死んだおうたが、よつく承知をしてゐるのだ、敵を打つから覺えてゐろ。

みれ　それでは私を殺すのかえ、さあ殺して下さい、自分の思ひが應はぬからは、生きてゐたとてかひがない、切れものもこゝにある、さあ、これで喉なり胸なり、どこでも突いて殺して下さい。

宗次　殺せと、うぬ、逃げろ、逃げたら追うて殺して遣る。

みれ　私は熱海の女子ぢや、そんな卑怯な事は嫌ひ、なんで私が逃げませう、あの人を殺さうと、企んだ時から死ぬ覺悟、お前さんに殺されたら、そりや私の本望だ。

宗次　うん殺さう、殺しておれもおうたのあとを、追驅けてあの世へ行く……。

みれ　それは勝手になされませ、お前さまがあの人の、後を追掛けなさるのなら、私もあとを附け廻し、七生までも追驅ける。

宗次　なに、うぬ。

（とおみれの手から小刀を奪ひ、突いて掛り、直ちに女の胸を刺す。）

みれ　宗次さん、お前さんも死ぬのかえ。

宗次　世の中に用の無いおれだ、生きてゐたつてつまらない、おれも死ぬのだ。

（と小刀を腹部に刺す。）

みれ　お前も私も、一緒にこゝに死んでゐたら、世間では心中したと、云つてくれるであらうなあ。

宗次　えゝ、うぬ、うぬ、……うぬと……。

みれ　お願ひです、宗次さん、私の身體に伏し重なつて、そして死んで下さい。

宗次　いやだ。（と岩の上へ行き、燈籠の綱を外す）お前と死んだと噂をされては、直きに逢へるおうたに濟まない、おれはこれと死んでしまふのだ。

（と燈籠を抱へて海に入る、綱はそのあとを引いてずる〱と落ちる。）

みれ　私のそばで死ぬのが厭で、海へ行くなら私だつて、私だつて、海へ、海へ。

（とよろめいて岩の上へ昇る。）

――幕――

松永彈正（三幕六場）

登場人物

松永彈正久秀
島左近勝猛
筒井定次
織田信長
森傳助好久
不破彥三　山伏實は間者
介眞　僧
橫川運平
仙可　茶道
藤內　家來
太郎又　百姓
次郎又　同
阿濃局
龍姬　松永娘
雲井　侍女
外に
侍女四人（松永に仕へる）
同　（織田に仕へる）
取次侍（同　）
その外、武者、從者等

序幕

長谷寺迴廊の入口

長谷寺迴廊の入口、上手にあつて、あとは石垣、下手に寺の付屬の建物、牡丹の花壇があつて今が盛り。昨年の米の收穫が濟んだので、寺領內の百姓達は、年貢は寺へ納めたのだが、それをまた領主の松永へ再送の爲めに、此寺の迴廊へ引合せの爲め集まつてゐる。松永彈正久秀は暴威に任せて、寺の米を橫領してしまつた、その分けは、寺へは表高の領米のみを渡して、剩れる打出の分は、自己の所得とすることにした。そこで役僧を立會はさせて、剩米を受取りに來てゐる。松永の家來の橫川運平は算盤を彈きながら。

運平　やい〱百姓共、かねて申聞かせた通り、米俵の上包みは相違なくしてあらうな。

百姓太郎又　はい〱、御領主樣の仰せの通り、去年の年貢から、なあ次郎又。

同次郎又　去年の秋の上納から、俵の上に俵の衣、とんと俵の重ね着でござりましたわ。

運平　左様か、秤りの方は役僧達が、能く吟味をしたであらうな。

僧朴念　はい、拙僧共が立合にて、枡の廻しはありあまるほど、俵に納めてござりまする。

運平　左様かの、しかし、御坊や寺へ殘して置く分は氣遣ひはなけれども、御城内へ持參の分は、不足があつてはならぬぞよ。

朴念　不足があれば寺方にて、辨まへよとの仰せゆゑ、御城内へ送る分は、別して心をつけてござる。

運平　不足が立てば長谷寺にて、足す分のことながら、さうあつては氣の毒ゆゑ、百姓共の居るうちに、その分けを話して置くのだ、そこでなんだな、今方ので締めて何程になるな。

朴念　これにて二百俵、丁度八十石になりまする。

運平　寺領の表三百石、元よりこれは寺の分、餘徳の八十石は御領主の御城内へ取立ての分、さあ、これで算用は濟んだといふもの、やれ／＼草臥れた、少しの間休息しようか。

朴念　左様なれば庫裏へお出でなされませ。

運平　然らば左様致さうか、百姓共跡を取片付けて置きやれ。

（と家來を連れ、寺僧と共に入る。百姓達は取片付けをしながら。）

太郎又　なあ次郎又や、大きな聲では云はれぬが、御領主様の松永殿は、本當にひどいお方だの。

次郎又　このお寺の領地米、三百石は表高、内々の納め高は、三百八十石と云ふことぢや、それをどうやら嗅付けて、三百石を計り殘し、跡の殘りの八十石は、自分の物になさるとは。

太郎又　其事はわしも承知、此寺の介貞殿が、氣の狂つた元といふのも、其爲めぢやと云ふではないか。

次郎又　わしもそんな事を聞いたが、坊主欺せば七代祟ると、世の諺にも云ふ通りぢや、松永様の行末も、よい事はあるまいわい。

太郎又　これ／＼、うつかりした事を云はぬものぢや、そんな事が一口でも、役人に聞こえたら、大變な事になるぞよ。

（此時、參詣の男女、思ひ／＼に出で來る、此中に間者の山伏が交つてゐる、百姓はまだ俵を片付けてゐる。）

（暫くすると松永の家來藤内馳せ來つて。）

藤内　只今これへ姫君の參詣だぞ、歸るものは構はぬが、今から廻廊へ登るやつは、暫くの間控へてゐろ。

（これにて參詣の人々は行止まる、山伏は殘つてゐたが、藤内が手を振つて去らせる。）

（向ふより松永の娘龍姫、輿に乘り、侍女等附添ひて來る。女中頭の雲井が。）

雲井　申し姫君さま、はや廻廊でござりまする、お輿をお下りなされませう。

（輿を下し、中から龍姫出る。雲井は入口から上の方を見て。）

雲井　でも大層な參詣衆、のう藤内殿、往來は止めてござりますかえ。

藤内　只今止めは致したなれど。氣の長い百姓共、まだぐづ／＼してをりまする、身共が參つて追拂ひませう。

龍姫　これ待ちや藤内、たとへ賤しい百姓でも、花見る心は同じこと、心の儘に賞翫さしや。

藤内　仰せにはござりますれど、大殿樣にもやがてお越し、どの道こゝへは置けぬ奴ばら。

龍姫　いや／＼父上のお催しは、正日中の牡丹の茶の會、まだお出でには程があらう、この處へ床几を立て、往さ來るさの人々の、姿を見るも時の興。

雲井　姫君さまの仰せの通り、これは一段と面白いことでござりませう。

藤内　はて、むさくるしい百姓共、見たとて何のお慰み。

（と云ひながら、床几を据ゑさせる。）

雲井　申し、美しい牡丹がこれにもござりまする。

龍姫　おう、いかにも綺麗な牡丹ぢやなう。

（花を見て居る間、參詣の人々二三人づゝ始終通る。）

龍姫　のう雲井、日は麗かなり、牡丹はよし。

雲井　左樣にござりまする、日は麗かなり、牡丹はよし。

龍姫　のう、日は麗かなり、牡丹はよし。

雲井　はい、日は麗かなり、牡丹はよし。

龍姫　えゝ、も、知らぬわいな。

雲井　あゝ。（と氣がつき）左樣にござりましたか、時刻もやがて巳の下り、ほどなくお出でになりませう。

龍姫　のう、信貴とあちらとは、時刻が違ふものであらうか。

雲井　なんの、どこでも時刻は違ひませぬ。

龍姫　でもお姿が見えぬではないか。

雲井　いえ、お約束の時刻までには、まだ程がござりまする。

龍姫　女子の姿さへ來てぢやのに、ほんに心を知らぬお人。

（此の寺の介眞、うら若き狂氣したる僧、廻廊より馳せ來る。）

介眞　ゐた、／＼、／＼、こゝにゐた。

（と姫の面を覗きこむ、姫はあれと驚く、藤内は介眞

を押へて。）

藤内　無禮者め、己れは何奴だ。

介眞　私か、わしは此寺の僧侶だ、法師ぢや、坊さまぢや。

藤内　おのれ法師の身を以て、姫君に戯るゝとは憎い奴、其分には差置かぬぞ。

介眞　なんぢや、法師の身で女子に戯れてはならぬ、はゝはゝ、お云ひやるな、〳〵、領主が寺の米を盜めば、法師も女子と戯れる。

藤内　其様づれを申すとは、愈よ以て捨て置かれぬ。

（と捕へようとする、介眞逃げ廻つたが、遂に捕へられ、柱に縛りつけられる。）

（太郎又、次郎又出て。）

太郎又　やあ、介眞様が縛られてござるわ。

次郎又　申しお侍さま、何を致しましたか存じませぬが、其坊様は氣違ひでござりまする。

太郎又　どうぞ料簡してやつて下さりませ。

藤内　なに、この坊主は氣違ひぢやと申すか。

介眞　なんぢや、わしが氣違ひぢや、氣違ひぢやない、正氣でござる。

藤内　おのれ、正氣とな。

介眞　正氣、々々、髯の生えた鐘馗大臣、嘘ぢやと云ふなら、證文出して見せうぞ、寺領は三百石、打出しの八十石は、御領主様の取前ぢや

太郎又　これ〳〵介眞殿、何を云うてぢや、さあさあ早く、詫まつて、な、早う謝まつたがよいぞや。

次郎又　さあ、詫まつて其繩を解いて貰はつしやれ。

介眞　繩と云ふのは不動の縛り、降魔を成さる閻王の罪科ぢや。

龍姫　これ藤内、氣違ひとあるからは、もう許してやりやいのう。

藤内　たとへ氣違でありませうとも、かゝる者を此儘に許し置いては御領主の、御威光に係はりまする。

龍姫　なんであらうと許してやりや。

藤内　それはなりますまい、姫君御一人なら知らぬこと、恐れながら大殿の、御名にまでかゝはりまする。

雲井　これはしたり藤内殿、姫君のお言葉を、そなたはお用ひなされぬのか。

藤内　用ひぬと云ふ分けではないが、氣違ひとは云へ、あまりの雜言。

龍姫　用ひぬとあらば、それでよい。

藤内　用ひぬと申すわけではござりませぬ。

雲井　それならば其繩を、早うお解きなされませ。

（藤内は繩を解いても、介眞は茫然としてゐる、向うより筒井定次、若い侍、風流なる服裝、馬上で來るの

を、待女が見つけて、雲井の袖を引いて教へる。）

雲井　姫君様、筒井殿の若殿が。

（姫は恥かしさうに。）

龍姫　こなたへお通し申しや。

（定次馬から下りる。）

藤内　これは／＼は、若殿にはようこその御參詣、先づ御床几へお掛けなされませ、やいやい百姓共、おのれ等は此馬を連れてゆけ。

太郎又　へい／＼、さあ／＼介眞殿や、あちらへござらつしやれ。

（と上手へ連れて行かうとする、介眞はきかないで、下手へ行く、百姓もあとから續いて下手へ入る。）

雲井　若殿さま、貴方のお越しが遲いので、最前から姫君様が、そりや大層のおむづかり。

（と姫を見て云ふ。）

定次　某はさまで遲れたとも存じなかつたが。

龍姫　申し定次様、大層遲いお出でぢやな。

定次　さうでござつたか。

龍姫　まあ、よそ／＼しいそのお言葉。

定次　なんで某がよそ／＼しい。

（と云つてゐるうち、雲井始め一同、遠慮して去る。）

龍姫　よそ／＼しいではござりませぬか、待たせるよりは待つ身になるなとは、ほんに／＼能い教へ、待つてゐたのは御承知なれば、よくまあ待つたと一言の、御會釋位はあつたとて、佛の御罰も當りますまい。

定次　そなたは左樣にお云やれば、時を定めた今日の出合ひ、時刻に遲れた分けではない。

龍姫　知りませぬわいな。

（と背を向ける。定次はあたりを見て近寄り。）

定次　のう姫、そのやうな役にも立たぬ、むつかりは止めになされい、かねて書狀で申し通じた、某が安土入りの事、愈々二三日と極まり申した。

龍姫　えゝ、安土入りのお噂が、あの誠とはなりましたか。

（と振返つて聞く。）

定次　さあ其事につき、今日は久々にて御身に逢ひ、しばし名殘も惜みたく、便りをなさんと思ひし折柄、幸ひなる御身の手紙、取るものも取敢ず、一散に參つたのぢや。

龍姫　これはまあ何としたこと、偶ま逢へば曲もない、安土のお城へ勤めのお話、あとへ殘つた妾の身は、何となるのでござりませう。

定次　我も進まぬ事ながら、信長公の旗本に、付けば即ち御主君ぢや、安土のお城へ暫くは、出仕をなさねばなるまいわい。

龍姫　安土と云へば織田殿の、時めく花のお城住居、定め

て諸家の姫君が、お出でなされることであらう、それへ御出仕なされたら、大方他國で咲く花に、お氣が移るでありませう、このお話を聞きますと、心掛りでなりませぬ。

定次　何の其方をよそにして、移り氣を出しませう、その心配はよしにおしやれ。

龍姫　いえ〳〵さうはなりませぬ、妾でさへこのやうに、戀しく思ふ貴方さま、ましてや安土で美しい、女子の方が思はいでか。

定次　田舎武士の某に、目を掛くるものがあらうか、いやそれよりも心掛りは、かく語合ひはせしものゝ、勇名高き彈正殿の、息女と生まれし御身のこと、暫し別れのそのひまに、好き緣邊の口もあらば、心がはりをなさるであらう。

龍姫　えゝ聞こえませぬ定次樣、東に出る日が西から出ようと、妾の心が變りませうか。

定次　のう、某とても此儘に、御身を殘し置くことは、何處までも心がかり、彈正殿に會へるは幸ひ、恥かしながら我等の口より、緣組のこと頼んで見ようか、しかし一旦は天下の下知をもなせし松永殿、我等如きへ婚姻は、よも承引はせられまい。

龍姫　いえ〳〵もと松永は賤しき生れ、系圖正しき筒井のお家に、釣合はぬはこちらの家筋。

定次　御身がさるお心なら、おん父君に頼みを入れ、しかと御身を貰ひ受くる、談合なりと定めおかん。

龍姫　そりや眞實でござりまするか。

定次　僞りは世間の事、御身と我等のその間に、嘘といふ事があらうか。

龍姫　えゝ忝けなうござりまする。

（松永の家臣、向うから出で、）

家臣　姫君樣これにお出でに御座りましたか、只今殿樣、御着きにござりまする。

龍姫　なに、父上の御出でとな。

定次　我等もこれにて待受け申さう。

（以前の侍女等も出て、待受ける。此時向うより松永彈正、極めて華奢ながら、老人に似合はしき扮装、供のものに平蜘蛛の釜を荷はせ、從士多勢それに從ふ。定次を見て、戰場の名乘りがましき聲にて。）

松永　やあ〳〵、それに在するは、筒井家の若殿、定次殿と見たは僻目か、はゝゝ。

（と笑ひながら舞臺に來る。）

定次　お目立ちまして恐入る、今日はからずも此長谷寺の觀音へ、祈誓の爲さんと參りし處、思はざる路次の面會、御健勝の體を拜し、祝着に存じまする。

（家臣、床几を彈正と定次とに出して掛けさせる。）

松永　これは〳〵、近頃珍らしき對顏、彈正なほも祝着に存じ申すは外ならず、見られよ牡丹は花の司、富貴草とも世に云はれ、花の中の花の王、譬へを云はゞ日輪の、榮華を極む眞晝時、その日の光と花の盛りを、一つになさんとけふの茶事、わざと日の照る此寺の、舞臺に席を設けたり、水入らずの親子の茶の湯、事を缺きたる相客を、押して御邊に賴み申す。

定次　さすが松永殿には、室町御所にて切り盛りの、威權を振ひし御身とて、いと風流の御催し、感服いたしてござりまする、若輩者の定次が、お席の末に列らなりましては、折角のお催しを、汚すやうなものなれど、御意に甘えて御茶一服、頂戴仕りたう存じまする。

松永　元より路次の略式なれば、馳走もなく點心も、儘ならぬ野馳けの茶、不自由が反つて風雅、さりながら彈正が、一つの自慢はその釜ぢや、その釜こそ某が、祕藏の中の祕藏の名器と、世に謠はれたる平蜘蛛ぢや、けふの馳走は此釜の、沸ぎれる音が松風に、通ふを聞いて貰ふばかりぢや。

定次　すりやその釜が聞き及ぶ、平蜘蛛でござりまするか。

松永　大和半國、いや、畿內五ヶ國にも、代へ難いと思ふ程の釜、時の勢に付くとは云へ、將軍家を打奉つた元もこの釜、また一旦は主と賴んだ、三好へ謀反をしかけたのも、此釜ゆゑであつた。

龍姬　父上、そのやうな事を。

松永　はゝゝ、誰れも知つてゐる事ども、その釜が元になつて、あれ程の騷ぎを日本に、でかしたと云ふたらば、結局は釜の値打が付かう、一旦は天下の望み、心を掛けた事もあつたが、年老いぬればそれも詮なし、今は此世の執着を、思ひ切つた久秀には、娘の姬とその平蜘蛛、それを力に彈正は、餘生を送る覺悟でござる。

定次　承はり及びましたる、御家祕藏の名器、拜見のかなひまするは、身に取つて大慶の至り、御禮申上げまする。

松永　御禮などとは痛み入る、娘は見らるゝ通りの不器量、しかし、親の目からは十人並、娘ざかりを大和路に、育てば衣裳髮飾り、鄙びて興は覺めたれど、親思ひは人一倍、それだけが取柄なれば、松永の家を離れては、人前には褒められまいが、この平蜘蛛は天下の珍器、咲亂れたる牡丹花の、花暖む眞晝時、九つに間もあるまい、筒井殿にもお入りあれ、娘も早う。

（と立ち上がる。）

定次　左樣なれば仰せに從ひ。

龍姬　いざお越しあそばしませ。

（と、各、廻廊を上つて行く。この時、編笠を冠つた

武士、下手から出て、廻廊の方へ行かうとする。以前の運平が續いて下手から出て。）

運平　待たれい。

（武士は振返つて見たが、耳にも入れぬ風にて行かうとする。）

運平　待て、〳〵、待たぬか。

武士　待てとは某のことか。

運平　はて知れたこと、只今は主君松永殿の御參詣、それ故諸人の通行を、暫くは止めてござる。

武士　何を申す、領地であらば知らぬこと、寺領に入れば諸人も、隔てはあらぬ佛の場、信心なすを遮ぐるは、反りて奇怪至極の事ぞ。

運平　口に年貢が出ないとて、ほざいたりな痩せ浪人、どうあつても舞臺へは、通す事はならぬぞよ。

武士　理解を說けど聞分けなき、木耳耳の端した侍あつたら口に風引かすまい。

（と行かうとするのを、運平は鐺をとつて引返し、爭ふ所へ、運平の家來も出て武士にかゝる。）

（其內に、松永の臣、森傳助好久、早足で來り、此場の樣子を見て、中に入り、武士の顏を覗きみて驚く。）

傳助　横川殿、お待ちなされい。

運平　狼藉者を搦めとむるを、何故あつてか止めなさる。

傳助　そなた如きが五人十人、心を合はせて掛からうとて、お手に合ふべき人でなし、其御人を誰れとか思ふ、筒井殿の御老臣其名も高き左近殿。

運平　やあ、すりやこの御人が島左近、あの勇將でござりまするか、これは〳〵、存せぬ事とて無禮の段々、眞平御免下さりませう。

左近　はゝゝ、有樣は拙者も戯れ、無禮は互ひの事でおざつた。

運平　その仰せで拙者も安堵、いやなに左近殿、お家の若殿樣ならば、只今我等主人と舞臺にて、茶の會の眞最中、貴殿も押しての御參入、御案內を仕らう

左近　性得無骨の我等なれば、茶道の沙汰は知り申さぬ、さらばこれにて待受け申さん。

運平　近頃にない粗忽、まつぴら御免下されい。

（と腋下の汗を拭きながら元の口へ入る。家來も入つたあと、傳助は左右を見て。）

傳助　左近さま、能い處でお目に掛かつた、實は內々貴殿まで、便りをなさんと存ぜし處。

左近　ほう、何か火急のことが出來たか

傳助　さればさ、信長公より俄かの仰せ、主人祕藏の平蜘蛛を、差上げよとの御嚴命、その御茶請を持參致し、主人のあとを追驅けて、參つた處にござりまする

左近　彈正殿は好事の聞こえ、和漢の名器をあまた持てば、高が茶釜の一ツや二ツ、召された處が仔細はないが、その平蜘蛛は聞及ぶ、秘藏の中の名器なれば、定めて迷惑するであらう。

傳助　御存じかは知れませぬが、あの釜ゆゑには室町家にも、三好殿にも謀反したと、常々自讃の大秘藏、たとへ織田殿の仰せなりとも、容易に承知はなさるまい。

左近　ふう。

傳助　寺の領地の打出しまで、掠めて奪ふ松永殿、よも尋常にあの釜を、差上げはなさりますまい。

左近　天下に聞こゆる名器のこと、代りの品はあるまいが……。

傳助　いや、それがござりまするて、土蜘蛛の釜と申して、似たとは愚か瓜二ツ、我等の考へでは、惡狡い殿のこと、定めてあれに名をつけて。

左近　これ。

（とあたりを見て、傳助に囁く。）

——廻る——

長谷寺の舞臺

廻廊を上り切つた長谷寺の舞臺、後ろは觀音の御堂で御簾が下がつてゐる、廣い舞臺の中央に、三人は茶會を催してゐる。定次が正客、彈正が詰め、姫が立前である。

定次　結構なお立前、湯のお加減も一入にござりまする。

龍姫　不束なる手前、お恥かしう存じまする。

松永　いやなに定次殿、娘の手前は不束でも、釜だけは天下一品、それのみを御賞翫下されたい。

定次　いや〳〵、元より釜は重器なれども、龍姫殿の立前も、それに劣らぬ見事な業、感じ入つてござりまする、それにつけ松永殿に、某迄てのお頼みがござりまするが、御聞入れ下されうか、但しまたお聞濟があるまいか、承りたう存じまする。

松永　これはまた改まつて、近頃變つた申入れ、此大和一ヶ國を、半分宛領地に持てば、御邊の父御順慶殿とは云はゞ親類、兄弟とても同じ事、何なりと御意なされい、身に應ふ事ならば、承引致さいであるものか。

定次　先づ以て御承引忝けなし、某が頼みと申すは。

松永　御邊の頼みと云ふは。

定次　御息女龍姫殿を、申受けたうござりまする。

松永　なに龍姫を御邊の妻に……、して、順慶殿には御承知か。

定次　いまだ話は仕らぬ。

松永　まだ御承知はない、さうあらう、こりや姫、風呂の

火も消えたさうな、その平蜘蛛をあれへ運び、暫くこゝを遠慮いたせ。

龍姫　はい。

（と釜を取つて、堂の方へと入る。）

松永　さて定次殿、知らるゝ通り某の、子と云うては彼れ一人、あれを他家へ遣はしては、家の苗字が絶ゆるのみか、第一この久秀が、老後の樂みを失ふ道理、此義は平に御免あれ。

定次　近頃無禮の申入れ、御立腹もなくこま〴〵と、事を分けての御仰せ、御尤もにはござれども、龍姫殿にも此事のあらましは御承知なれば、枉げてお許し下さりませ。

松永　娘は承知！　いかでさる事があらう、親の許さぬそのうちに、他處の男と語らふなんぞと、無禮氣の事を申さるゝな、それとも龍姫が、しかと承知と答へたのか。

定次　さあその確とした答とてはござりませぬが……。

松永　さうあらう、斯樣な大事を父に話さず極めるやうな大膽な奴でもあるまい。

定次　それはとにかくこの緣談、御内意の程伺ひたし、もし御承引のやうなれば、兩親共とも談合致し、改めて申入れ。

松永　それはなり申さぬ、また緣邊の事は下々にても、相當に仲人を立て、申入れるが天下の定法、押付婿の相談は、先づ止めになされたがよからう。

定次　近頃痛み入つたお言葉、さう仰せがありましては、何とも申上げやうもござりませぬ、歸りて親共にも申聞け、改めて申入れたれば、お許しを下さらうか、差付けながら其邊の、御内意は洩らしは下さらぬか。

松永　その御返事なら同じ事、一ツ事は二度申さぬ。

定次　むゝ。（決心したる氣色にて）さらばでござる。

（と立上がる。）

松永　何れへござる。

定次　かゝる面目なき事を、申出だせし上からは、何しにこれにゐられませう。

松永　さらばお歸りなさるゝか。

定次　いかにも。

松永　あゝ待たれい定次殿、最前御身の話には、緣邊の事共は娘も承知致しをるやう、仰せられたが誠でござるか。

定次　いかやうなるか存じ申さぬ。

（と舞臺を下りて行く。樣子を伺うてゐた雲井が、思はず出で。）

雲井　あゝこれ。

（と止めようとする。）

松永　何を致す。（と突退け）無禮者め。

（と睨めつける。雲井は起き直り。）

雲井　御免なされて下さりませ。

松永　なぜに筒井の小悴の、後を已は追驅ける。

雲井　あのそれは。

松永　姫とあの定次と、云交はしたと云ふは誠か。

雲井　え、何のまあ。

松永　僞りか、それとも誠か。

雲井　何のそのやうな事がござりませう。

松永　なに無い！　無いであらう！　またそのやうな事があつたら姫は人非人ぢや、人外とも云ふものぢや、これ程までにかはゆがる、この父を外にして、男を拵らへるとは受取れぬ。

雲井　姫君樣に限つて、そんな事はござりませぬが、しかし殿樣、殿樣と姫君樣とは、親子の仲ではござりませぬかえ、お年頃にならせたまへば、どうで持たねばならぬは男。

松永　むゝ。

雲井　もう頃合の婿君を、お心掛けなされても、早いお年ではありますまい。

松永　それで已れが仲立したのか。

雲井　まあそのやうな嫌らしい、大それた事私が。

松永　誠か！　これ雲井、誠の事を教へてくれい、親子の情、男女の仲合（なからひ）、かはるものとは云ひながら、もと是れ一ッの心の働き、親を思ふ心が強くば、外の男を戀ひ慕ふ、生（なま）心は出まい道理、なんとさうではあるまいか。

雲井　いえ〳〵、それは憚りながら、御料簡が違ひまする。

松永　なに、我等が料簡違ひぢやと。

雲井　いかにも左樣にござりまする、年頃になれば若い者が、思ひ合ふのは自然の道理、時が來れば咲く花を、咲かせまいとするのも同じこと、押付け業にも參りますまい。

松永　もう止せ雲井、已れの云ふことが、なまじ道理に應ふやうで、一倍と氣分が惡しい、定次の事はもう聞くまい、姫がもし思うてゐると、萬一にも申したなら、手の中の玉は碎けてしまふ、父のみを思ふ姫と、何處までも思うてゐたい、おゝ、姫はいづくにをる。

雲井　あれにお出でござりまする。

（と後を差す。）

松永　姫よ、龍姫。

（と呼ばひながら、後に入ると、雲井も續いて入る。

舞臺の下から傳助は上つて來て。）

傳助　殿は。

（と云ひながら彈正を探す。下手から介貞が出て、其前に立ち塞がる）

傳助　御坊、殿は何處にをらるゝな。

介貞　殿か。（といきなり傳助の胸倉を取つて）殿とは御

何ぢや、お出を取つた……、寺の米を取つたのは、松永の殿ぢや。

傳助　なんぢや、おのれは。

介眞　持つてるな、その持つてるが證文か。

（と懷中より信長よりの率書を引出して取る。）

傳助　えゝ。おのれは何を致す。

（と突放すと、介眞はひよろ／＼として柱に當り、餘勢にて御簾の内へ轉げ入る。中にて物音して、間もなく蘭蕙の聲にてあれと悲鳴をあげる。傳助は介眞を捕へ、率書を奪ひ返し、彈正が中より出づる姿を見て、傳助は介眞を捕らへながら平伏する。）

松永　傳助、何とした。

傳助　はつ、御座所近きとは存ぜず、思はぬ狼藉、眞平御免下さりませ。

（彈正は介眞を見て。）

松永　うむ、例の小法師な。

傳助　殿にはこの小坊主を。

松永　捨て置け、それは狂人ぢや。

傳助　氣違ひでござりましたか。

介眞　何んぢや氣違ひぢや、氣違よ氣違よ、地獄で笑ふ氣違ひぢや、米を盜んだ氣違ぢや。

（と矢庭に傳助の手を取つて、舞臺の鼻へ引張り出して。）

介眞　見さいな、見さいた。地獄の閻魔法王、眞赤いの舌を出して、くわつ／＼と、焦熱地獄の火が燃えてゐる、はつ、はつ、はつ。

（彈正も釣込まれたやうに、思はず舞臺の鼻へ出て、下を見て。）

松永　はて咲揃うてさながらに、燃ゆる火よりも赤き牡丹花。それを見立てゝ焦熱の、地獄の業火と譬へたは、流石に法師上りの狂人、面白し、面白し。や、あれに居るは筒井の家老、島左近に能う似た面體。

傳助　え、なに、島殿が、いや殿、左近殿には伊賀など、何しに彼人がこの處へ。

松永　近い所は眼がかすめど、遠い所は蠅が通ふまで、見分けのつく松永の眼、決して見誤りは無い。

傳助　ぢやと申して島左近が、これへ參る筈はなし。

（と見てゐる、介眞は欄干の上に立つて。）

介眞　ござれ、今から地獄の底へ。

（と驅けてきて傳助の手を取る。）

傳助　何を致す。

（と撥ねのける。）

介眞　お來やれ。

（と欄干を走る。）

傳助　危ない。
（と止めようとする、欄干を渡り詰めた介眞は。）
介眞　お案やれ、
（と云ひながら、廻廊の屋根に上つて走り去る。）
松永　はて、身の輕い坊主。
傳助　いかにも身の輕い奴にござりまする。
（とこれを見送る。）
松永　傳助、何か事でもできましたか。
傳助　はつ、只今の騒ぎにて、申上ぐることをはつたと失念、安土の御城より俄かの奉書、信長公の御諚意にて、當家秘藏の平蜘蛛の釜、急ぎ差上げよとの嚴命、即ちこれにござりまする。
（と出だす書狀を、松永は開き見て。）
松永　命にも代へ難しと、思ひ込んだる平蜘蛛を、たゞ其儘に差出せとは、心得難き仰せである。
傳助　まことに左樣にござりまする。
松永　傳助、よう考へて見い、いつも話して聞かせること、あの釜の爲めには、この彈正がどれほど罪が造つてあるか、それをむざ／＼取上げようとは、あまりなるおん計ひぢや。
傳助　全く左樣に存じまする、さやうな仰せは恐れながら、我が女房を出せといふのも、同じ事にござりまする。

松永　差上げられうか、差上げられぬか、よう考へて見るがよい。
傳助　しかし殿、出さぬと云うて其儘に、捨置くことも出來ますまい、こりや一層のこと似合の品に、平蜘蛛と名を付けて、御前へお上げなされたら、如何なものでござります。
松永　いやが上にも大事になし、容易（たやす）く人に見せぬ名器、見知りしものも少なければ、たとへ代りを差上げても、見分けの付く氣遣ひなし。
傳助　それならば猶ほのこと、左樣なされたら如何のもの。
（と氣色を伺ふ。）
松永　いや／＼、包めどそれと穗に出づる、もしさうなつたら家の破滅。
（と考へる、雲井は簾のうちから慌だしく出で、松永を見て。）
雲井　申し殿樣、大變な事が出來ました。
松永　なんぢや。
雲井　姫君がお怪我をなされました。
松永　なに姫が怪我をした、どうしてした。
雲井　はい、先程あの小法師が、轉げこんだ其時に、壇から佛具が落ちましたが、姫君樣のお顔に中り、それはそれはお痛みが、強いとてお苦み。

傳助　あの姫君が佛具に當つて、むゝ、あの氣違坊主が飛込みをつたで。

松永　（苦々し氣に）傳助、そちが突き遣つたのぢやな。

傳助　はつ。（と竦む）

松永　して顏に疵でもついたか。

雲井　いえ〳〵、傷にはならねど腫上り、紫色に大きな痣。

松永　え、あの痣が。

（と驚く、姫は絹にて額を押さへて出る。）

松永　姫。（つか〳〵と寄り）氣分はどうぢや。

龍姫　まだ痛んでなりませぬ。

松永　さうしてゐてはならぬ、冷やしたがよからう。

雲井　最前から冷めたい水で、お冷やし申してをりまする。

松永　早う館へ歸つて療治をしたがよい、どれ。（と姫の額を覗きて驚き）誠にこれはきつい腫れやう……痣にならねばよいがのう。

龍姫　なに痣に、これ雲井、あの鏡を。

雲井　はい、あのお鏡。

（と懷中から出す、姫もどかしく。）

龍姫　これ早う見せやいの。（と鏡を取り見ると直ぐ）あれ。

（と顏を隱して泣く。）

松永　嘆くまい、療治をしたら癒るであらう、さ、早う館へ歸らうぞ。

龍姫　（考へ當つたことの思入あつて）皆のもの退きや。

松永　あたりの者を遠ざけて、何か用でもあるのか、用事ならば館へ歸り、ゆるりと聞かうではないか。

龍姫　いゝえいな、これ退きやと云ふに。（と四邊いもいを遠ざけ）いえ父上、妾が受けた此傷は、こりや何故だやと思はれまする。

松永　なんぢやと。

龍姫　寺の領地を無理槍に、奪取つた佛の御罰、物もあらうに壇上から、落ちた佛具が面に當り、かやうな姿になりました、申し父上、これにお怒りなされたら、佛の米を此寺へ、早うお返しなされませ。

松永　佛とは何の佛、この彈正は元よりも、佛も神も頼みに思はぬ、腕一本、心一つを目當にして、思ふがまゝに世を過る、罰…… 利生が佛にあらば、この長谷寺も以前の如く、榮えてをらねばならぬのだ、東大寺、春日の宮法隆寺、藥師寺、あのざまは何んだ、堂塔寶閣、形は容しく殘つても、その魂はありはせまい、まこと佛罰なら、石高に應じない不正な米ゆゑ、取上げたこの彈正に當る筈だ、何咎もない娘に罰を當てるなら、愈よ以て無法の神佛、これを見ても神佛が、世にあると云ふのは嘘いや、老いさらぼひし腰拔けや、乃至は智慧なき女原を、たふ

らかしての布施盗み、遊んで食らはう坊主共の作りごと、
其様な事は案じるには及ばぬ、誰かある輿の用意せい。

―― 廻る ――

元の廻廊の入口

左近と定次とが話してゐる。

定次　すりや、どうあつても左近には、この縁組は不得心か。

左近　若殿、よう考へて御覽なされい、松永殿とは表向き、親しう見せても双方とも、心の中は呉越の思ひ、互ひに領地はこの大和を、半ヶ國宛の大名、隙きさへあれば攻取らんと、心の嫉刄を磨く年月、それに縁組まうなんぞとは、恐れながら大殿始め、一家中の心にも、染まぬやうに思はれまする、此儀は平におん止まり。

定次　左近は左様にお云やるが、恨みの種とて外に無し、筋無き家と家との確執、この縁組が極まらば、大和の國も安穩に、百姓共も喜ばうぞ。

左近　憚りながら若殿には、この小やかなる和州だけを、たゞ御覽せらるゝより、左様の御意も承はる、室町御所の勢ひ盡き、いま織田殿は尾州より、都に入らせたまへども、越後の上杉、小田原の北條、中國には毛利浮田、四國九州其外奧州、あるは天下を望むもの、またさなくとも二國三國、取々分に志し、一日たりとも武を忘れず、さるを何ぞ、拳の中に抓み込まれる大和の國を、半分宛知行せうとは、あまりに欲の無い若殿。

定次　欲が無いとお云ひやれど、わしに取つては龍姫は、大和に代へても欲しいのぢや。

左近　思ひ込んだら何處までも、貫らぬき通すが男の意地、それもよからう、しかし、縁組せずとも龍姫殿が、お手に入らばよいのでござらう。

定次　松永と縁組まずば、龍姫は迎へられまい。

左近　おこさずは奪取るまでぢや、最前の仰せには、不案知らしき父の彈正、討果たいて領地と共に、姫を御手に入れたまへ、さりながら筒井松永、今は互ひに織田殿の、旗本に付く折なれば、私の遺恨にて、合戰は成り難し、存寄りもござりますれば、長くて百日、早ければ三十日、此儘ぢつとお待ちなされい、若殿は女を得、我々共は領地を增さん、織田殿の掛くる罠から、松永を逃がさぬやう、助力するのが我等の役目ぢや。

定次　なに、織田殿の掛くる罠とは。

左近　はて、萬事は左近が承知の事、暫くお任せなされませ。

（廻廊から先觸れの侍女出で。）

侍女　姫君のおん立ち。

（下手輿にて供の者が、はあと答へる、侍女は元の廻廊を上る。）

左近　若殿、松永の人々に、おん姿を見られては、女々しき者と沙汰せられん、松永を遣り過ごし、我々共はその後より。

定次　暫し小蔭に姿を隱さう。

（と二人は上手に隱れると、輿を用意して供の者出る、彈正先きへ、姬は雲井に手を引かれて出る、輿に乘つて行かうとする、侍女から話を聞いたらしく、龍姬は定次を探す風にて振返る、定次が思はず出ようとするのを左近が抑へる、彈正とちよと面を見合せて、左近は顏を背ける、彈正の一行は入つてしまふ。屋根から鳩が三四羽飛出す。介眞が屋根から下りて來る。）

介眞　あ、鬼が來た、地獄の中から松永殿を迎へに來た業の車、あれ積上げた俵が火になつた。

（と行かうとする、左近これを捕らへる、下手から間者の山伏が出て來る、左近は介眞を突放して、山伏を怪しむ。）

—— 幕 ——

貳　幕　目

安土城庭内の大藏藏

舞臺は一面に黑布を張り、前に舞臺一杯になるほどの蘇鐵の作りもの、下手に低く、大きなる庭石の作りもの、朱塗春日式の燈籠、背の低きもの左右に置く。幕が明くと、腰元四人、竹製の腰掛を重さうに運んで來る。

腰元の一　あゝ、このあたりでようござりませうか。

同二　あゝ痛や〱、腕が拔けるやうでござんす。

同三　何のまあ仰山らしい、このやうな腰掛一つで、腕が拔けるとは何事でござります。

同四　おほゝゝ、まあ、貴方の腕が拔けますとえ。

同二　何とお笑ひなされまする。

同四　でもあまりをかしうござります、あの阿濃のお局樣が、あのやうに美しい御器量でありながら、それで力は男勝り。

同一　それに引換へお前はまあ、鬼を手取にしさうな骨太、それでこの腰掛が、重いと云はれた義理かいな。

同三　てもあんまりな逢ひやう、阿濃さまと二人並べて、考へるとをかしなものでござんすな。

同二　なんなと云うたがようござんす、戀の應はぬ意趣晴らし、嫉妬も能い加減になされませ。

同一　なんぢや嫉妬ぢやと、取られる男もないものを、ど

うして嫉妬でござりますえ。
同二　まあ其方は白々しい、あの筒井の定次様と、先刻私が口利いたのを、お前が睨んだ目の配り、それで私を悪しざまに、云はれるのでござんせう。
同一　おほゝゝ、まあ程にしたが好い、しかしお前の云ふ通り、筒井様の男前は、立派な者でござんすなあ。
同三　大和男と世に云ふ通り、水際立つた男振は、ほんに私もあゝ云ふ人と、夫婦になりたうござりまする。
同二　えゝもう此人は……、お前が夫婦になりたいとえ、なりたかつたら生れ變り、美しうなつて來や。
同四　いやそれよりか一層のこと、化けて來るのがようござんす。
同一　あれむざとした此所で、物怪話しはなされぬがようござんす。
同二　さう申せば此蘇鐵が、夜な／＼怪しい聲をして、去なう／＼と云ふといな。
同三　泉州堺の妙國寺に、年久しうあつたのを、我君様のお望みにて、遥々と山河を、運んで來たこの蘇鐵。
同四　草木も精のあるかして、元の堺へ歸りたいと、それで泣くとか申しまする。
同一　物に堪らへぬ我君様、追付けこゝで正體を、御覽なされう思召にて、
同二　御床几をしつらへましたが、
同三　何にしても氣味の悪い、
同四　話でござりまするなあ。
（筒井定次、蘇鐵の後、上手より出る。）
定次　各はこれにござられたか、して我君の御入は。
腰元の一　我君様には廣間にて、諸國より御機嫌を、
同二　伺はるゝ御使者受け、
同三　しかし時刻も移りますれば、
同四　程なくこゝへ御動座を、
同一　遊ばさるゝで、
四人　ござりませう。
定次　かく洪大なる御庭の中、蘇鐵のあたりとの仰せ、某はこの所にて、君の御入を待ち申さう。
腰元の一　左様なれば私共は。
（と一禮して上手に入る、左近は下手より風のやうに出で、
左近　若殿。
定次　おゝ左近、何として此處へ。
左近　陪臣の身の容易には、拜見の應はぬ庭中、けふのお供を幸ひに、許しを受けて噂高き、蘇鐵をば見に參つた。しかし有様は若殿に、御功名を立てさせたく、かくおん跡を慕ひ參つた。

定次　其に功名を、立てさせたいとは如何なるわけ、

左近　さ、度々竊所にて申上げし、かの松永の釜のこと、愈々事實になりました。

定次　すりや松永殿には命にも、代へ難しと云ふ平蜘蛛を愈よ差出しめさるとな。

左近　いかに惜めど勢ひの、時の權威にかへがたく、釜進上とは表向き、似寄りたる品を以て、それと名をつけ欺かん、企みの程はさる者より、左近が許へ確かな注進、かねての勤めはこゝでござる、御前にて披露の折、贋物なりと申上げ、其場で直ぐに討手のお願ひ、同國なれば某へと、進てお望み候はゞ、必ず御沙汰のあるは必定、某先手を承り、唯一日にて松永を、攻亡ぼさば彼れの所領、大和の國の殘り半分、お預けは相違あるまじ、此儀を平にお勸め申す。

定次　して平蜘蛛を贋物と、云ふには確かな證據があつてか。

左近　はゝ、お言葉までもなし、一目にそれと逃れぬ驗し、今度持參の其釜は、土蜘蛛と云ふ名器なれど、かの平蜘蛛より丈高し、されば東山殿の、御物としるしの箱書に、入口を欺く巧みの箱に、納めし故に內底を、一分ほど削りしは、逃れぬ證據と覺めたまへ。

定次　いかにして左程まで、詳しく密事を知りたるぞ。

左近　人に知らせず入込ませし、間者より仔細の注進、かく戰國の世にありて、高が半國一ヶ國に、若殿が滿足ならうか、手始めに松永が、信貴山の城を乘取り、行く行くは河內和泉、攝州邊を切從へ、時代を輝やかすお心掛け、その振出しのけふが一と足、心を確かになされませい。

定次　むゝ、その獻上は誰れが使者、何者が參るのぢや。

左近　その使は娘の讀姫、何處までも腹黑きあの彈正、贋物なれば念を入れ、大事の娘を使者に仕立てた。

定次　さらば御前で贋物と、申さば恥辱を見るは讀姫、これ左近、此役目は許してくれい、かの姫と某とは、そちも知つたる仲合なるに、それが何でそのやうな、情けない眞似ができようか。

左近　若殿、それ故にこそお勸め申す、彈正を討ちたる上姫を取れとは申したが、一刻も傍らを、離さぬほどの寵愛に、如何はせんと思ふ所、姫が來るは天の與へ、贋物の事分りたらば、生得短氣の信長公、おん怒り強くして、直ぐに討手の御沙汰のあらば、卽ち姫はこれ人質、捕へ放れに親子を裂けば、共に碎かん纍もなし、此期に及びて何の猶豫、若殿、考へるまでもないこと、その覺悟は先達てより、お胸の中になくては應はぬ、筒井の家の繁昌は、唯此際の思ひ切り。

定次　とは云へ姫の恨みのほど。

左近　心弱きも程のあれ、しかと御料簡を遊ばされい。
定次　筒井の家の柱石たる、左近御身の勧めながら。
左近　左様にお心弱くしては、姫は御手に入りませぬぞ。
定次　とはなぜに。
左近　飽くまで姫を惜む彈正、また大殿と松永殿とは、心の底の合はぬ仲、只此儘にて姫君を、迎へんことは覺束なし、なあ若殿。領地を得るも、己れの事は己れでする、たゞ此腕が何より頼み、彈正には詰腹切らせ、一つの邪魔を拂ふばかり。
定次　父と領地を失ひては、頼む蔭なき龍姫と、某との婚姻を、父君が御承知あらうか。
左近　御承引が無くてはそれまで、當分は妾にして、お傍にお置きなさるゝまでよ。
定次　父を打たれし恨にて、姫が得心せぬときは。
左近　（舌打して）思切るまでのこと。
定次　え。
左近　家を出づれば男に従ふ、これ世の中の女の習ひ。
定次　むゝ。
左近　上手に出づれば弱くなるもの、案じ過ごしは後日の事。
（と云放つて、左近は下手に入る。）
定次　思ひもかけぬ左近の言葉、龍姫と夫婦になれば、松永殿は我が舅、それを亡ぼし娘を奪ふは、人の道を缺く道理、なにほど領地が欲しからうと、させる非道ができようか。
（此時木蔭にて「去なう」「去なう」と云ふ聲がする、定次にはそれが聞こえない。）
いや／＼贋物の進上は、松永殿の悪巧み、長谷寺で見たあの釜を、取替へて我君を、欺むかうとは曲事ぢや、忠義の爲めに、贋物を贋ぢやと云ふが何の不思議。
（また蔭にて、去なう／＼と云ふ。）
それにあの松永は、一人娘の龍姫ゆゑ、他家へは與れぬと云張つた、唯尋常では夫婦には、なることならぬ二人の仲、彈正殿を亡ぼしたら、反りて隨ふ戀の近道。
（又も去なう／＼と聲がする、その聲の主の介眞が、蘇鐵の間より半身を出すのを、定次が見付け。）
定次　や、おのれは。
（と追ひ、蘇鐵の周圍を逃ぐるのを漸くに捕らへ、組敷くと腰元が出て來る。）
腰元の一　定次様、我君様のお入りにござりまする。
定次　なに、我君が。
（と手を緩めると、介眞は逃げようとする、定次は介眞の手を取つて捻上げ、自分の背後に隱すやうにして蹲まる所へ、信長は阿濃局の外、腰元を從へて出で來

（と、此體を見て）

信長　何者ぢや。

定次　はつ、かねて面を見知つたる、大和國長谷寺の者、狂人なしてさまよひあるく、法師にござりまする。

信長　遍く衆生を濟度すべき、法師の身でありながら、唯一身を扱ひかねて、狂氣したとは足らぬ奴、放したがよい。

（と床几にかける。）

定次　仰せにござりますれど、何れへも遂電なく、推参いたしますれば。

信長　氣違ひならさうであらう。

定次　至つて身の輕き奴、屋の棟を驅廻くり、高き木の梢に登り……。

信長　諄い、それならば猿ぢや、猿ならなほのこと放して置け。

定次　はあ。

（と放つと、介眞はけろりとして。）

介眞　痛、痛、法師に手向ふと地獄へ落つるぞよ、婆婆のうちから報いがあるぞよ、よう〳〵寺の米を、盗みくさつて、憂き目を見せたな。

定次　無禮者奴。

（と突遣る。）

介眞　はつ、〳〵、〳〵、三世如見の觀世音菩薩、菩薩の米を横取にした領主の殿、お前もその身内であらう、それに居るのも松永殿の弟子の端か。

信長　はゝゝ、松永が何としたぞ。

介眞　聞きたいか、聞きたくば云うて聞かさう、寺の領米が三百石、八十石を取上げたらう。

信長　なに、八十石を取上げたとは。

介眞　えゝ算勘の疎い人ぢや、三百石から八十石を取上げたら、殘りは三百石しか殘らぬわ、おう、出家とて其樣な算當は知つてゐるのぢや。

信長　尻口の合はぬ事のみ、早く放さ遣れ。

定次　はあ、おん目障りぢや、下れ、〳〵。

介眞　（突然大きな聲で）去なう。

腰元共　あれ。

（と驚く、介眞は知らず顔に、又も去なうと二度ばかり云つて、蘇鐵の後へと入つてしまふ。）

腰元の一　申し、お局さま、あの法師の物云ふ事は、恐ろしう聞こえまする。

同二　此頃夜な〳〵此蘇鐵が、去なう〳〵と申しまするはもしやあの者の、業でがなござりませう。

阿濃　あゝこれ、我君の御前にて、滅多な事は申しますまい、御威光殘る隈もない、御城の中に怪しき者が、出で

やう筈はあるまいぞや。

信長　はて、左樣の噂も聞かぬでない、達て所望し堺の寺より、持參つたる蘇鐵なれば、惜しめる僧の企みにて、怪異出づると云拵へ、元へ戻さん計略かと、思ひの外に長谷寺の、若き僧の狂氣もの、定次、そちが面を見知らずば、かやつめ、あらぬ疑念を受けたであらう。

（此時向うから若侍出で。）

侍　申上げまする。

（信長、默つて侍の方を見る。）

和州信貴の城主、松永彈正大弼久秀、平蜘蛛の釜獻上の爲め、娘龍姫儀、持參致してござりまする。

信長　なに、侍ならぬ娘の使者、晴れての對面は面倒なり、これへ伴ひ申せ。

侍　はつ。

（と引返して入る。阿濃の局は侍女に目にて敎へて、敷物を取りに遣り、其身は信長に對し。）

阿濃　我君樣、かねて御所望の平蜘蛛の釜、さしも祕藏の松永殿も、御懇望の默しがたく、御獻上を遊ばすとは、おめでたう存じまする。

信長　おう、あの平蜘蛛は名器ながら、所望の底は外にある、あの彈正と云ふ男、室町の御所に叛き、また三好にも背いた奴、それほどの男が、あの平蜘蛛に執着なし、何人にも參らせ難しと、常に廣言を嘯きをる、それを知つて信長が、望みをかけたもありやうは、眞實我れに歸伏なせしか、否やを計る一つの手段、日本一の蘇鐵の下で、日本一の釜を得ること、我が運の開けた證據ぢや。

阿濃　誠に御諚の通り、今に始めぬ御威勢、祝着申しあげまする。

定次　あ、いや、我君。

信長　なんぢや。

（と云ふ所へ、侍がまた出で。）

侍　申上げまする、彈正娘龍姫、此頃よりの煩ひにて、いと窶れをりまする、殊には道中の髮も上げず、只今直ぐの御前ならば、覆面の儘にておん目通り、此儀單へに御許容の程、お願申しまする。

信長　よい、女人の身として神妙の願、苦しうない、早う通せ。

侍　はつ。

（とまた入る。このうちに腰元、敷物を持つてくる。）

信長　しをらしい女の顏、腰元共そちたちも心掛けよ。

阿濃　心床しい龍姫殿、早う逢うて見たいものでござります。

定次　（意を決して）我君。

信長　定次何とした、顏の色が惡いぞ。

定次　ものでござる。
信長　なに。
定次　松永が献上の釜は、平蜘蛛ではござりませぬ。
信長　なに平蜘蛛でないと。
定次　同じ秘藏の物ながら、土蜘蛛と云ふ釜にござりまする。
信長　贋物なりと云うた上に、代への器の名まで知つたは定次、そちや何人より聞及うだ。
定次　某が家の老臣、島左近より知らせ來ました。
信長　他家までも其名高き、左近の知らせとな、むゝ、して、左近は何れにある。
定次　内々にてお庭の拜見、お成りと聞いて引下りをりまする。
信長　武邊の話も承はらう、宿所へ歸さず止めておきやれ。
定次　有難き御意、申聞けるでござりませう。
（この時、向うから、前の侍、服紗を掛けし箱を捧げて出る、あとから龍姫、白絹で面を包んで出る。）
侍　御前おや。
（と云ふので、姫は下手に座す。）
松永彈正娘龍姫、罷出てござりまする。
（信長が輕く頷くので、侍は敷物の上に箱を置いて去る。）

信長　彈正の娘とは其方か、近う寄れ。
龍姫　はあ。
（と進む、定次があるいを見て驚く、二人はそれぞれの思入がある、信長は局を見て、取次げといふ科がある、局は前に出て、姫の前で。）
阿濃　龍姫殿、女子は女子同志、私が奏者の番。
龍姫　御苦勞に存じまする、今度我君様より、父久秀への仰せつけ、所持致す平蜘蛛の釜、差出せとある御嚴命、家にも身にも代へ難き、大事の物にはござりますれど、今日持參仕る、そのお使ひにこの龍姫、釜は即ちこれなる箱に。
（と箱を局の前に直す、余り流暢な辯舌に、局は感じ入つて、話の半分頃から、ぢつと姫の面を見てゐる。）
阿濃　すりやこれなるが御秘藏の、平蜘蛛の釜でござりまするか
龍姫　いかにも左様にござりまする。
阿濃　さらば其品を、御前へ御披露申しませうか。
龍姫　御披露お願ひ申しまする。
（局は箱を信長の前に直す。）
信長　明けて見い。
阿濃　はあ。
信長　（鋭く）待て。（と止め）その平蜘蛛は人も知る、

和朝に名高き天下の名器、その釜ゆゑには彈正が、軍に及んだ事もある、謀叛をした事もある、こりや龍姬、外ならぬ汝の使ぢや、贋物を以て人を欺く、左樣の事はあるまいな。

龍姬　家に傳はる寶なれど、一端お受けを申したからは、何しに左樣の僞りごと、殊に出立のその砌り、父が封印其儘を、持參致してござりまする。

信長　左樣でない。重き恩ある御所公方を、殺害をした松永、親とも云ふべき三好にも、刄を向けて戰うた、其上南都東大寺の、大佛殿さへ燒棄てし無道人、贋物などは愚かな事、定次、そちの家は松永と、同じく大和を領し合ふ仲、定めて釜に見知りがあらう、眞か僞りか鑑定致せ。

定次　はつ、仰せの如く松永家と、領地は隣り同志ながら、度々拜見は致さぬ釜、目利の程は確かならねど、最前聞いた……。

信長　諄ふ申さず、早く見よ。

定次　はあ。

（と一禮して、箱の前に直り、箱を開き、蓋を取つて其上に釜を置いて見、次ぎには箱の側りありし點を見て、愈よ贋物なりといふ確證を得たので、直ちに云はうかと思ひしが、さて龍姬を見ては、遉がにそれとも云ひ得ず、信長は少し苛ちて。）

信長　どうぢや。

定次　はつ。

（と平伏して、又も釜を見ようとする、彼方の蔭からは、左近が顏を出して、定次に勇氣をつけ斷行を促がす、定次は遂に決心して。）

定次　恐れながら此釜は、眞の品ではござりませぬ。

龍姬　あ、これ定次樣、どうしてその釜が。

定次　はてこれを御覽なされい、形は似たれど平蜘蛛に、あらぬ驗はこの寸延び。

龍姬　え。

定次　始終手掛けし品なれば、承知なされぬこともあるまい。

龍姬　（釜を見て）や、こりやこの釜は。

定次　土蜘蛛といふ代りの品。

龍姬　はあ。

（と驚く。）

定次　（信長の前にて）恐れながらこの通り、平蜘蛛ではござりませぬ。

信長　さては贋物であつたよな、やい龍姬、何とて贋物を持參して、我が眼を掠めようとはしたぞ。

龍姬　手づから父が封印したのを、隨分途中も大事に掛け、

持參致した此箱の、中身(なかみ)は覺えの代への品、こりやどうした事でござりませう。

信長　やあ、拔け〳〵と申すまい、正の物を見ぬと知つて、似寄の品もて欺く惡人、惜んでも惜むべき、老耄れの久秀より、花を欺く美貌の、二十歳(はたち)に足らぬ身を以て、この信長を目の無き者に、なさんとしたる大膽な、其場に直ちに成敗せうぞ。

阿濃　(信長に縋り)あいや我君、暫くお待ち下さりませ、その御腹立は御尤も、更々無理とは存じませぬが、御成敗との御仰せは、御短氣のやう存ぜられます。

信長　何が短氣だ、何くまでも予を蔑ろになす憎くき振舞、尋常の成敗、まだ〳〵手ぬるいぞ。

阿濃　さ、いかにも松永彈正は、上を恐れぬ不敵の振舞、久秀殿へのお咎めは、こりや男同士の表のこと、似せとは知らず封印も其儘箱を持參の使ひ、たとへ親子でござりませうとも、此場で直ぐの御成敗は、あまり笑止の御沙汰かと、憚りながら存ぜられます。

定次　恐れ多うはござりますれど、只今阿濃局の仰せの通り、罪科は單へに彈正一人、何事も知らぬ龍姬、何卒御寛大の御沙汰を以て、御宥免下さるやう、平に御願申上げます。

信長　むゝ、質と承知し信長を　欺かんとは女として、近頃過ぎた大膽、知らずに來たのは定であらう。

(龍姬は頭を下げて詫入るばかり。)

阿濃　あれ、あの通り詫びてをります、どうぞ御許し下さりませ。

龍姬　お局樣、一旦上げようと云うた釜、間違うたのは不思議なこと、とても此上の御慈悲には、暫しのお暇たまはりて、事の仔細を尋ねた上、誠の釜を我君さまへ、差上げたう存じまする。

阿濃　こりや能い所へ氣が付かれた、申し我君樣、なほ此上の御慈悲にて、龍姬殿には一時のお暇。

信長　ならぬ、最早釜には用がない、仔細は有らうと無からうと、贋物を持參させたは紛れのない曲事、松永めを呼出いて、罪を訊すそれまでは、この女は留め置く、阿濃、そちに確と預け置くぞ。

阿濃　はあ。

龍姬　すりや私はお城の内へ。

信長　當座の人質、あれへ連れて行け。

阿濃　はあ。(姬に)いざ龍姬殿、當分は私の預り、さあ私の部屋へ。

龍姬　私やお城に留められるのは、嫌でござりまする、申し定次樣、どうぞ貴方のお詫にて、お返しなされて下さるやう、お取成下さりませ。

定次　今更申上げたとて、お聞入れある筈は無い、先づ當分は阿濃樣の、お手許にゐるより外に、致しやうもありまい。

阿濃　お氣短かの我君樣・諄う物を申さるゝと愈よ御機嫌を損ずるばかり、とにあれあれへ。

（と龍姫の手を取つて連れ行かうとする、姫は信長に禮して、局その他と入る、小姓の外、信長と定次だけになる、侍一人出で。）

侍　申上げまする。

信長　何事ぢや。

侍　かねて攝州邊へお遣はしの穩密、立歸りましてござりまする。

信長　左樣か、これへ通せ。

侍　はつ。（つと入る）

信長　定次にも用は無い、暫く休息せい。

定次　はあ。

（と入る。引違へて向うより、山伏姿の不破彦三出で、畏まつて氣色を伺ふ、信長頷いて來れと示す、彦三來りて傍らに座す。）

信長　いつ歸つた。

彦三　唯今。

信長　攝州の樣子は。

彦三　石山本願寺衆は、愈よ當家に敵對するかのやうにござります。

信長　さうあらう、淺井朝倉に心を寄せ、今は又中國の、毛利を力と頼む一揆、して大和の國へも廻つたか。

彦三　大和にては筒井一家は、まことに當家へ歸服の樣子、さりながら松永は、何と無く心掛り、石山本願寺とは使者の往返、始終音物の取爲替、よほど近しう見えまする。

信長　左樣か。

彦三　なほ松永は軍用に、心を用ふる事深く、三年の兵糧を蓄へ、薪木を以て土居を築き、炭は土中に埋め置き、木實を集めて油を製し、また酒樽は常よりも、背いを高く造らせ、それを崩して掩ひの板に用ひ、串柿の串も長ういたさせ、壁下地に仕りまする。

信長　さりとては、よう細かに心をつけたるものな。

彦三　また領內の寺々の領地を改め、年貢に立會はせ、長高より過剩の分は取上げまする、現に長谷寺の三百石は、繩を入れて計りたる所、三百八十石ありたりとて、八十石を取上げて、城內へ運ぶ有樣、某逐一見屆けましてござりまする。

信長　ふう、それにて最前の痩せ坊主、氣違ひながら云ふ事が、しつかと合うた。

彦三　なに、氣違の法師とは、はて長谷寺にて其樣なのが

ござりましたを見受けました。

信長　その法師が此庭へ、紛れ込んだを定次が、見知つてゐると申したよ。

彥三　(手帳を見ながら) さらば介員と申すものにござりまする。それにしても彼の法師、いかにしてこの安土のお城へ。

信長　氣違ならば性根は知れぬ、亂れ心の亂れ足、何處へ行かうとおのれも知るまい。おう、日が暮れて來た、彥三、そちになほ聞くこともあり、長途の疲れもあらうが、改めて出仕致せ。

彥三　はつ、さらば衣服を改めて、後刻出仕致しまする。

(と下手に入る。)

信長　久しうは賴みにならぬ松永、とくにも討つて捨つべきなれど、謀反の實の上がらぬうちは、諸國の聞こえを憚りて、到るを待ちし時は來た。

(腰元來りて。)

腰元　我君樣に申上げます。御酒宴の用意整ひましてござりまする。

(信長頷いて立ち、腰元と共に上手へ入る。昏くなりかけてゐた舞臺一層昏くなる。庭男出て燈籠に火を點じて入る。赤味を帶びたあまり明るくなき光線。遠くにて河鹿が鳴く、定次出る。)

定次　思うた如く金は贋物、見出だした某が、御前の首尾のよいに引換へ、笑止なは龍姬殿、阿濃局に預けられ、俘となつた上からは、謀反人の娘よと、成敗あらんも計り知れず、一層のこと連出だし、我が邸へ隱まい置き、時節を待ちて我君より、改めて申受けう。

(と上手へ行かうとする。人の來る氣合に蘇鐵の蔭へ身を隱すと、龍姬は濡な被衣(かつぎ)のやうにかぶつて逃げてくる。上衣は脫いで白の着付けで、髮は振亂してばさらになつてゐる。)

(逃げては來たが、行先が分らないので、考へながらこれも蘇鐵の陰の方に歩む、そして定次の姿を見て、あつと驚いて立退くのを、定次の方では姬と見たので慌てゝ追驅けて來て、被衣を取らうとする。姬は被衣を押さへて手を緩めない、下手の燈籠の傍へ來て、男の力で無理にとると、姬の白い姿が出るが、絹の帽子は取れない、取つた被衣を投げるのが、燈籠の上に落ちて、下手の一つの灯は光りを障ざられしまふ。)

定次　龍姬殿。

龍姬　あなたは。

(と取縋らうとしたが、最前の恨みを思出して、またあてもなく驅出さうとする。)

(定次はその袖を捉へ。)

定次　龍姫殿、何れへ行かれる。

龍姫　何れへ行かうと私の儘、ようも〳〵定次樣、最前はあのやうに、難儀をお掛けなされましたな。

定次　その恨みは尤もながら、某が口を噤まうとも、始終は誰れかが申すこと、何れにしても贖物を、持參されたが罪の基。

龍姫　いえ〳〵、妾に繋がる父なれば、貴方樣にも父に當らう、その難儀をも知りながら、助けもなされぬ御料簡は、お情けなう存じまする。

定次　情を知らぬ御身の父、恨みはあつても義理はない。

龍姫　そりやまたなぜに。

定次　御身を申受けようと、詞を盡くして賴み入れど、聞入れのない彈正殿、爲せる惡事に酬いを受くるも、自業自得と申すもの、堪らへぬ氣性の我君なれば、直ぐに討手を差向けられ、信貴の城を攻められう。

龍姫　要害嚴しい信貴の城、兵糧矢玉の貯へも、充分に有餘る、さうたやすうは落ちますまい。

定次　はゝゝゝ、利發なやうでも流石は女性、駿遠三を領せし今川、當國の淺井、越前の朝倉、甲斐の武田、大國を領した大名も、織田殿の爲めには風前の灯、消えてもう跡もない、いかに武勇に猛からうと、大和半國に足らぬ身代、十日か、二十日か、または一月も支へられるか、旣に死生きの沙汰でない、幾日續くかと云ふだけが、唯此際の算用のみぢや。

龍姫　ぢやによつてこゝを脫出し、父上に此事を、早うお知らせ申したい、もう此上は定次樣、外に何にも賴みはせまい、どうぞ私を見逃がして、信貴へ遣つて下さりませ。

定次　それはならぬこと、信貴山へ行かれたら、彈正殿と諸共に、あたら命を捨てられう。

龍姫　父上と共々なら、何んの命を惜みませう、かう云ふうちにも目付けられては、また捕らはれの身とならう、奥の酒宴のお相手に、阿濃殿が行かれた留守、やつと脫出し逃げて來た、お城の外へ出る道を、お敎へなされて下さりませ。

定次　城外へ出る道は、いかにも案內致さうが、信貴城へは遣るまいぞ。

龍姫　なぜ遣らぬのでござりまする。

定次　信貴へ行けば死ぬばかり、どうして御身を遣られよう。

龍姫　そりや何故に。

定次　御身と夫婦になられぬゆゑに。

龍姫　定次樣、かねて誓うた互ひの心中、今に變りはござりませぬのか。

定次　何の變つてよいものぞ。
龍姫　あの私が淺ましい、見苦しうなりましても、お見捨てはなされませぬか。
定次　夫婦は元より一身同體、我れと御身の其中に、左樣な言葉は無い筈ぢや。
龍姫　此樣な顏になつても……。
（と半分云はせず。）
定次　え。（と輕く驚き）おう。（と思返して）君の御前も包み隱し、美しい顏を見せぬ……。
（と姫の被衣を取らうとする。）
龍姫　あれ。
（と遮ぎるのを無理に白綃を取る、姫は袖もて顏を掩うてゐるのを、無理に上手の燈籠の方へ連れて行き、その火影で見ると、龍姫の半面は夥だしい大きな痣、紫色に腫上がつたのが、目尻から口の端まで一杯になつてゐる。定次はあつと驚く。龍姫は恥づかしさに、灯を吹消し、地に平伏して泣いてゐる。）
定次　龍姫殿、どうしてこのやうに。
龍姫　貴方にお分れ申したあと、長谷寺にて佛具が倒れ、それが當つてこのやうに。
定次　ふう。
龍姫　館へ歸るとなほ腫上がり、かやうな痣になりました。これと申すも佛の御罰。
（と無意識のやうに立つ。）
定次　寺領を掠めた彈正殿、娘でさへもこの通り、生きながら地獄へ落ち、阿鼻焦熱の猜の傾。
（と定次は姫を耻かしめるやうに、押遣りつゝ、力を入れて云ふ、佛の罰といふ事が耳について、龍姫は抵抗する勇氣もなく、首を垂れて、定次に押遣られても、勢ひなく地上に平たばつてしまふのを、定次は他人のやうに見遣り。）
定次　恐ろしい、世は末世でない、現當の御罰が斯くの通り。
（と思案する。）
龍姫　定次樣、かやうな姿になりましたら、もう御見向きはなされますまい。
定次　なんの……其樣な事は無いが……佛の御罰が恐ろしい。
龍姫　え。
定次　親の罪が子に祟れば、末までも祟りを受けう。
龍姫　いえ／＼、さうではございますまい、私の姿が醜うなつたで、お嫌ひなさるでございませう。
定次　御身の面のかはつたことは、今始めて知つたのぢや。
龍姫　聞いてゐたのでございませう、現在我子の私にさへ

包んでゐた取替盃、
定次　や。
龍姫　これさへ知つた貴方のこと、私の顏に愛想が盡き、縁切らう其爲めに、我君樣にあのやう、云はれたのでござりませう。
定次　其樣な所存はなかつた。
龍姫　いや、それに違ひはありませぬ、何に代へても私を、思うてゐるのが眞實なら、あのやうな事はできない筈。
定次　いや〳〵、それは御身を引留め、手許に置かん我が計ひ、しかし、此上は是非無い。
龍姫　そんなら私は參りまする、首尾克う信貴へ歸りましても、織田殿の討手を受けて、父と一緖に死ぬ身の上、此上お目には掛れますまい。
定次　さう……か……も……知れぬ。
（龍姫は冷やかな男の語に、今更らのやうに小さい歎きを加へながら、それでもと自分の小さい思案を浮かめたので。）
龍姫　しかし、定次樣、段々と考へますれば、我君樣のお怒りも、元はと申せば盃のこと、誠の品を差出だし、お詫をお願ひ申したなら、如何なものでござりませう。
定次　（冷かに）そりやお怒りが解けたなら、討手の御沙汰も出ぬであらう。
龍姫　では貴方樣のお取成にて。
定次　それはなりますまい、贋とお耳に入れた某、今となつて逆かさまの、お取成はできますまい。
龍姫　とは云へ貴方は贋盃を、訴へ申したまでのこと、よも松永を亡ぼさうとて、企んだことではござりますまい。
定次　諄うござる、あまりに物を申されると、引捕へて御前に連れ行き、重ねて憂き目を見せまするぞ。
龍姫　え、なにあの私をおん前に。
定次　おう、阿濃殿の許へ連れ行き、局の中に押込めさせうぞ。
龍姫　あのお取成はかなひませぬか。
定次　なり申さぬわ。
龍姫　お見遁がしもできませぬか。
定次　今迄のよしみに免じて、それだけは致すまい、世の常ならぬ片輪者、それにも劣つた見苦しい、その顏でよう此の安土へ、阿女々々と參られた、さらばぢや。
（と行かうとする。）
龍姫　申し定次樣、ちつとお待ち下さりませ。
（と縋りつくやうにする。）
定次　何をなさる。
（と振拂ふ。姫は懐劍を拔いて、定次の胸を刺す。この時「去なう〳〵」といふ聲がまた聞こえる。定次は

急所の痛手に聲も立てられない。蘇鐵の幹へ身體を寄せて、姫の髻を摑んでゐる、喪心したやうになつた龍姫が、刀を拔くとき、定次は始めて「わつ」と聲を立てる、鮮血が迸つて、龍姫の衣裳を染める。ふら〱としながらも、定次は龍姫を組伏せる、此時に、また介眞が蘇鐵の上から首を出した。介眞は樣子を見て、引込むと、またも「去なう〱」と云ふ聲が聞こえるほつと息をついた龍姫は。）

龍姫　醜うなつたに愛想が盡き、父上達に報う當つた、恨の報いはこの通り。

（と途切れ〱云ふ、陰にて「去なう」といふ。それと應答するやうに）

龍姫　去なうとも、おう、去なうとも。

（介眞が出で、姫の手をむずと取り。）

介眞　去なう。

（と云ふ。姫はふら〱と後について歩み出す。上手から阿濃局は小褄を絡げ、長刀を持つて出で來り、二人の姿を暗中に認め、切つて掛かる。よき程に、島左近が下手から出で、樣子を見てゐる。局の長刀の尖先きが燈籠に觸れると、それに掛つてゐた襦が取拂はれると、燈籠の光りがさつと差す。局は姫を見て。）

阿濃　や、そなたは。

（と聲を掛ける、二人は蘇鐵の後へと逃げて一廻りする、局は姫を押さへる。左近は定次の屍體を見て、直ちにそれと察して、燈籠の火を消し、中へ割つて入り、姫を押へた局の手を引拔ける。介眞は姫の手を引き、引きずるやうにして、二人とも逃げて行く、後を追はうとした局を左近が支へ、手先だけの暗闘がある。此の中に月が出る。信長が靡然と上手から出で、靜かに此場のさまを見てゐる。阿濃局は月光に左近の姿を鮮かに見て。）

阿濃　やあ、見知りしことなき怪しの侍、大事の召人をなぜに逃がした。

左近　ほう、暇たまはり、宿所へ歸る筒井の島左近、怪しいものではござらぬぞ。

阿濃　その左近殿が何故に、慮外をば働かるゝぞ。

信長　（聲をかけ）阿濃、その事分けは聞くに及ばぬ、さるにても如何にして、夜陰に及んで庭へは來たぞ。

阿濃　部屋へ歸ればお預かりの、姫の姿は見えませぬ、其上庭にて怪しの聲、いつより近く聞こえますれば、見屆けの爲め參りました。

信長　左樣か。

左近　女性に似合はぬ健氣の振舞、左近感心仕る。

信長　左近、その亡き骸は。

左近　主人筒井順慶の嫡男にござりまする。

信長　定次を殺害なせし曲者は。

左近　暗紛れに定かならねど、正しく松永が姫の龍姫。

信長　それと知つて後を追はぬは。

左近　落行く先は親のもと、敵の籠りし信貴の城、討手の御沙汰を引受けて、かの一族を亡すまで、假りに命を預け置きます。

信長　（冷笑を面にうかめ）さりとては手緩い事ぢやな。

左近　いゝや、憚りながら彼姫が、逃出いだせしは我君の、思ふ坪に入つたものと、この左近めは存じまする。

信長　何と申すぞ。

左近　釜と娘を何よりも、いとしう思ふ彈正久秀、姫を留置き降參の、願ひもあらば折角の、彼れを亡す時節を失ひ、御賢慮に外れませう。

阿濃　ても恐ろしい左近殿。

信長　筒井に過ぎたる左近かな、我意を得たる汝の才覺、松永征伐の先鋒は、筒井家に命ずるぞ、後陣の續かぬ其中に、信貴の城を攻潰ぶせ。

左近　はつ、若殿を害せし敵、その時一緒に打取りませう。

信長　勇ましいぞ左近、のう、底意知れぬと思うたが、贋釜で彈正の、淺い底がよう分かつた、誠の釜が參つたなら、當分はあの老人に、手のつけやうは無かつたにのう。

（と左近と顔を見合せて氣味合、局は定次の屍に褥をかけてやる。）

――幕――

大詰

信貴城天守貳層

天守の貳階の内部を、一隅から斜に一隅へと切落して、斷面を見せたる飾りつけ。白塗の壁の所々に四角の窓がある。

中央と下手寄りとには、大きな柱があつて、これも小端を正面に向けてゐる。柱から柱へは、珠玉が下がつてゐて、窓から入る風に搖らめく仕掛けになつてゐる、なほ下手寄の柱には、朱の紐が張つてあり、それに金の鈴がついてゐる、眞中より少し上手寄りの陰は、三層に上る階段がある、

それから下手には切穴（きりあな）があつて、初層へ下りられる、そこには頑丈な欄干がついてゐる。

座敷には、種々な棚があつて、それには室町御所から運んで來た傳來付きの珍奇な寶物が、錦の布に包まれて、數多く並んでゐる。一段と高い棚には、例の釜が新らしい木の箱に收められてゐるのが載せられてある。

床には虎の皮が、惜氣もなく多く敷かれ、鎧櫃や、太刀臺のやうな武具が弓や長刀のやうな武器と並んで置かれてある。

敵軍に攻められた爲め、自分と姫との居間に當てるため、さま〴〵の調度類を運ばせた、一夜造りの座所ながら、松永は茶の嗜みのある人とて、僅かの事でも何となく秩序が立つて、床しい氣がする。序幕の侍女達は、下手に團居して、矢尻を磨いてゐる。

侍女のい　まあ皆さん、この軍は、どうなる事でありませう。

同ろ　毎日々々軍の沙汰、早う止んでくれゝばよいに、困つた事でござりまする。

同は　こんな事になると知つたら、お暇をお願ひ申して、宿へ歸つてゐた事なら、今の苦勞はあるまいもの。

同に　ほんにあの時宿に歸り、其儘御所へ上らずば、かうした難儀は受けますまい。

同い　それもさうでござんすけれど、在所にゐれば寄手の衆に、追使はれて樣々の、云ふに云はれぬ難儀をしませう。

同ろ　少したりとも云ふ事を、背けば男は切殺され、女は陣所へ引かれた上、俘になると申しまする。

同い　俘と申せば姫君は、要心嚴しい安土の城を、よう拔け出して來られたもの。

同ろ　あの夜の姫君さま、常から白いお顏の色の、凄いやうに青ざめて、（と聲を潜め）高うは云はれぬ事ながら、例のお顏の　（と額のあたりを差し）　な、それは〳〵恐はかつたわのう。

同は　其上に召物に、べつとりと付いた血、眞赤いに染まつてのう、今云うても身の毛がよだつ。

同に　それにあの怪しい法師、お姫樣の手を引いて、喜び勇んで躍る樣に、歩んで來たのを見掛けましたが、ありや何でござりませう。

同い　誰れかは知らぬが其後は、終に姿を見せませぬ。

同ろ　何を云うてもお姫樣が、たわいも無いあの有樣、あらぬ事を口走り、正氣にあらぬ狂ひごと、とんと樣子が知れませぬ。

（と云ふ所へ、雲井が切穴の中から上がつて來る。）

雲井　腰元衆何の事ぢや、ちとお靜かになされませ、折角落着いて御寢なつた、姫君樣のお耳觸り、お嗜みなされませ。

腰元のい　これは〳〵雲井さま、思はず聲高に物申して濟みませぬ。

同は　どうぞお許し下さりませ。

雲井　して姫君樣の御容體は。

腰元のろ　先程よりすや〳〵と、お眠りなされてゐられまする。
雲井　それはまあ能い事でありました、して殿様には。
腰元のい　お一人にてお物見へ。
雲井　左様でござりましたか、これからは私が、代つて詰めます程に、暫く休息なされませ。
腰元のい　有難う存じまする。
（と各は挨拶して段を下つて行く。雲井は几帳の傍らに坐る。）
（松永彈正、小手脛當、茶道の仙可を連れて物見より下りて來る。）
松永　雲井、姫はまだ眠つてをるか。
雲井　はい。
松永　樣子は確と分からねど、安土の城にて定次を、害せしと聞く娘の振舞、理非の沙汰はとにあれ、遉がは松永の娘ほどある、仔細あらんと思へども、たわいなさに埒明かず、いかに要害堅固なりとも、後詰めもなき僅かの小城に、織田方の大軍を引受けては、所詮勝利は思ひも寄らず、せめて娘が正氣となりなば、思ふ儘に名殘を惜み、城を開きて潔ぎよく、討死せんと思へども、何を申すも狂氣の姫、それのみが心殘りではある。
雲井　軍の中の姫君の、常ならぬ御容體、御察し申し上げまする。
（鈴が鳴る。彈正それと見て仙可に科がある、仙可は欄の所へ行き、坐して下方に向ひ。）
仙可　誰人にござりまする、なに石山表より御加勢の人數（にんず）が、到着致しましたとな。
松永　なんと、本願寺から加勢が參つた、（立つてつかつかと欄の傍に行き、大音にて下に向ひ）石山方の御使者には、書院にて對面せん、粗略の無いやうに持成（もてな）せ、まつた加勢の人數には、百人に付き柳樽一つ宛の割にて、二樽を參らせ置け、折を見て某見參に入り申さうと、一々に申傳へてくれい。（雲井を顧み）雲井、姫を頼むぞ。
（と段を下りて行く、仙可も後から下る。雲井は喜んで。）
雲井　御加勢の人數が見えたとは、何よりも無い喜び。（窓の方へ行き、下方を見て）おうおう、武者溜りに見馴れぬ指物、どうやら違つたあの旗章、あれが石山の御加勢かいのう。
（と見てゐる處へ、後を顧み〳〵、上がつて來たのは甲冑を鎧ふた森傳助、あたりを見廻して。）
傳助　雲井殿、こゝにか。
雲井　おう傳助殿、殿樣ならつい今、下へお出でなされま

した。

傳長　いや、お目に掛るためでない、氣付いた事があるによつて、忙しい中を拔けてきた、外でもない例の平蜘蛛の釜、こゝに置いては危いほどに、場所を移し申さうとそれで天守へ參つたのぢや。

雲井　なにあの釜を移せとは、そりや誰の仰せでござりまする。

傳助　此軍の最中に、誰れが釜の世話を燒かうぞ、思ひついた某の、才覺から出た分のこと。

雲井　御寶藏にあつたのさへ、危しと御意あつて、こゝへ御移しなされたほど、殿樣の御意なら知らず、貴方さまの御勝手に、動かすことはなりますまい。

傳助　やあ、殿の外には一家中に、とんと言葉は返されぬ傳助に向つて無禮の女、おう、あれにあるが例の釜な。

（とつか／＼と行き、取らうとする。）

雲井　滅相な傳助殿、殿樣の仰せがなくては、御座所に番するこの雲井、塵一本でも御座敷より、動かすことは應ひませぬ。

傳助　女ごときが知ることでない。

（と几帳の傍へ行く。その陰より、龍姫がすつくと立つて。）

龍姫　退きや、／＼。

（とけたゝましく云ふので、傳助ははつと退いて。）

傳助　おう、姫君。

龍姫　定次樣、さりとては情無い。

（と取縋る。）

傳助　申し姫君さま、私は傳助でござりまする。定次樣ではござりませぬ。

龍姫　また妾を僞はらうとか、紛れもない定次樣。

傳助　これは迷惑な。

（と振放す。）

龍姫　えゝ逃げるとて逃がさうか、心變りし定次樣、恨みの刄思ひ知れ。

（と短刀を拔いて追ひ廻す、傳助は隙を見て釜を取らうとする、雲井はこれを遮る、こんな風に立廻つてゐるうち、傳助は時が惡いと思ふので、下へ驅下りる、龍姫が追掛けて、欄に脾腹を打つて倒れる、雲井は介抱して。）

雲井　姫君さま、姫君さま。

（と呼活ける、龍姫は目を開いて。）

龍姫　あ、そちや雲井か。

雲井　姫君さま、何處もお痛みはござりませぬか。

龍姫　なんぢや知らぬが、節々が痛んで……。

（と懷劍を見て、考へてゐる。）

雲井　おゝ、姫君様、貴女はお氣が付かれましたか。
龍姫　こゝは何處ぢや。
雲井　館でござりまする、もし信貴のお城でござりまする。
龍姫　え、なに信貴の城……父上のお出でなされる信貴の城ぢや。
雲井　嬉しや／＼姫君様、正氣にお成りなされましたか。
龍姫　どうして妾がこの所へ。
雲井　安土の城で定次様を。
龍姫　定次様を殺したわいの。（と泣く）
雲井　それから、どうなされました。
龍姫　蘇鐵の葉陰で去なうと聲して……。
雲井　えゝ。（と驚く）
龍姫　誰れやら妾の手を引いて。
雲井　お手を引いたは怪しい法師、宿所へお歸りなされては、たゞもう去なうと仰しやるばかり、信貴へおん供致しました。

（下の寺にて鬨の聲聞こえる。）

龍姫　やゝあの聲は、ありや何んぢや。
雲井　ありや寄手の鬨の聲。
龍姫　なに、寄手とは。
雲井　御存知ないも御尤も、ま、姫君、こゝから御覧じあそばしませ。

龍姫　でも夥たしい寄手の人數、おゝ、あの旗章は筒井の勢。

（と姫を窓の傍らに伴ふ。）

（と見てゐるのも半分は怪訝の念を爲してゐる、こゝへ彈正が上がつて來る。）

雲井　申し殿様、姫君様が正氣にお返りあそばしました。
松永　なに正氣になつた。（喜色をうかめて）おゝ姫。
龍姫　父上様。
松永　こりや龍姫、性が付いてくれたか、我が企らみより苦勞を掛けたなあ、が、御身にも知らせぬほど、密かに巧んだ取替釜、それがどうして現はれた。
龍姫　定次様が御前にて、平蜘蛛とは真赤な僞り、代りの品の土蜘蛛ぢやと、申しましてござります。
松永　むゝ、定次がどうしてそれを。（と考へ込む）
龍姫　こりや誰れか内通の。
松永　むう。手づから箱へ入替へて、封印爲せしを薄々は知つたと思ふは傳助好久。
雲井　さう申せば傳助殿が、どこかへ釜を移さうと、つい今しがた見えられました。
松永　釜を移さうとて傳助が參つたと……。心を籠めて築きし城、信貴山の中にても、要害尤も嚴しき天守、こゝを措いて其外に、大切の釜の置きどころが、何處にあら

うと思うてゐる。

雲井　止めるを聞かず無理槍に、持つて行かうとなされました、其物音に姫君が、お目をお醒ましなされたので、驚いて御陣の方へ。

松永　忠勤無二のあの傳助、此度の軍にも、本願寺への使者を勤め、それがけふはあの通り、二百騎の加勢も來た、狼藉を働いてまで、釜を外へ移さうとは……。

龍姫　申し父上樣、この軍の元はと云へば、定次樣を殺したから、もう生きても詮のない、妾の首を敵方に、出したら扱ひが、できようかとも思はれます、どうぞ妾をお手にかけ、お殺しなされて下さりませ。

松永　隣りづからの好みもなく、難儀が掛ると知つての計ひ、惜むべき定次め、切つたのは姫の手柄、釜を惜んで贋物を、持たせて出した此父を、心の中では恨んでゐやらうが、あの釜は手放されぬ、あの釜ゆゑには恐ろしい、罪も造つて來た彈正、主君を殺したわ、三好を討つたわ、果てはそちが思うてゐた、定次さへも殺させるやうになつたわ、よしない慘い心だと、恨まずにゐてくれい。

龍姫　なんの父上樣、この癡ゆゑに愛想を盡かし、心がはりの定次殿、惜しい……方とも思ひませぬ。

雲井　すりや、それ故に姫君樣は。

龍姫　定次樣を手にかけた。

松永　癡ゆゑ心變りとは、情の薄い若者、その癡が醜うなれば、なるほどにいぢらしさが、一倍添ふのが親の心ぢや。

（この時、何處とも知らず、怪しき聲がある。）

聲　佛の罰。

松永　なに。

（と振返つて見るが、何にも見えぬ。鈴が鳴る、雲井が立つて段の口へ行き。）

雲井　なに、敵方よりの矢文。

（と、下から差出すのを受けとつて、矢についた儘持つて來るのを、彈正が取つて開いて見る。）

松永　「筒井方の島左近よりの文、何々、落城今日の中たるべし、ついては龍姫殿、眞贋の釜を持參なし、我が陣へ參らるべきこと、然るに於ては若殿殺害の恨みを忘れ、助命計ひ申すべきこと」娘、此狀をお見やれ。

龍姫　見るまでもござりませぬ、安土で死んでゐる筈の、命が今まであつたのぢや、誰れにも離れた妾の一身、助かりたうは思ひませぬ。

松永　彈正が釜を惜しむは、たゞに物が惜しいばかりでない、釜に執着した意地が、貫ぬき遂げぬと嘲されるのが何よりも口惜しい、どうあつても平蜘蛛は、決して他人へ渡すまい。

雲井　姫君様の御最期には、死出の御供致しまする。

（と云ふうちに、貝鉦太鼓の音が間近に聞こえ、男女の叫喚の聲がする、三人が聞耳を立てゝゐるうちに、侍女達は、天守へと逃げ上つて來る。）

雲井　これ、許しもないのに御天守へ。

（と云ふと、侍女達は口々に「敵が」「寄手が」と云ひ罵つてゐる。）

松永　なに敵が。（と窓から下を見て）や、三の木戸まで亂入なせしか、合點の行かぬ軍の仕様、裏切りなせしものあるか。

（仙可が慌てゝ上つて來る。）

仙可　申し殿様、最前參つた本願寺衆の、加勢と申すは眞赤な僞り、誠は筒井の廻しもの、木戸を押明け敵方を、招き入れての不意打に、味方の勢は悉く、討死致してござりまする。

松永　何と云ふぞ、加勢と云ふは廻し者、むゝ、その本願寺へ行つたは傳助、達て望みし使者の役、釜に心を掛けたとも傳助、（と考へ）仙可。

仙可　はつ。

松永　傳助を呼べ、傳助を探せ。

仙可　はつ。（と立上がつて下を見て）殿様、傳助殿がこれへ參られまする。

松永　傳助が來た。

（と云ふ處へ、傳助が上がつて來る。）

松永　傳助。

傳助　はつ。

松永　本願寺の加勢と云ふは。

傳助　石山衆と思ひの外、筒井方の廻し者。

松永　云ふな傳助、汝の參りし本願寺とは、島左近の許であらう。

傳助　ヤ。

松永　安土に起りし珍事の仔細、知らざれば已れめに、出し拔かれたは我が誤り、釜の內通もそちであらう。

傳助　流石は松永彈上殿、御眼力は違はねど、氣の付きやうが遲うござつた、誠某は筒井の間者、化の皮を現はす前に、其釜を取上げようと、下げずに濟む頭を下げてゐました、最早御運も盡きました、尋常に御生害あつて、姫をお渡しなされませい。

松永　人非人、覺悟せい。

傳助　御相手申す。

（と飛下り、下なで。）

それ。

（と聲を掛け、彈正と渡り合ふ、侍女達は姫を圍ひ、一隅にゐる。段の下から、槍の穗先きが閃く、上つて

來る人衆を、雲井と仙可とが、長刀をもつて防いでゐる。姫は藥玉をとつて傳助に投付ける、それに躓いて傳助が轉ろぶと、松永は得たりと切伏せる。此間に、段から武者が二人ほど上がつて來る、一二合で雲井は直ぐ膝のあたりを切られる。彈正はその武者を切り、なほ一人と戰うてゐる仙可に。）

松永　こやつは我等が切る、汝は下に降りて扉の戸を鎖せ。

（と仙可を下に遣り、己れは武者を切落とす、この時分から風が吹いて、藥玉の房が搖らめく、松永は外面を見て。）

松永　以前に增した寄手の勢。

龍姫　父上御怪我はござりませぬか。

松永　年は取つても彈正ぢや。

（侍女は雲井を介抱する。）

雲井　殿樣、姫君樣。この深手では身動きもなりませぬ。死出の山路でお待ち申してをりまする。

（と懷劍にて喉を貫いて倒れる。）

松永　仙可、腰元共、愈よ落城も迫つた、姫も我等も今を最期ぢや。

（と云ふのを聞いて、侍女共は「わつ」と聲をあげて泣く。）

泣くまい、めい／＼に暇を取らせる。こゝにある數々の寶物は、悉く東山殿傳來の名器ぢや、一ツあつたら一生を送られよう、取々に持つて行け、女童には見向きもせまい、用意の火藥に火を付けて、煙に紛れて落ちて行け、姫來やれ。

（と、釜を取つて小脇に抱へ、姫の手を引いて三層へ上がらうとする。）

―― 廻る ――

天守三層物見

天守三層の高閣を、外面から見た處、白堊の壁、四方が廻れるやうになつてゐる縁には、白き漆喰塗の欄干がついてゐる。扉も開きになつてゐる、二層の廂の屋根が下の方にある。背景には遠く國境の高山が薄く見える

二層の屋根を傳はつて來るのは介眞で、風に吹かれながら、物見へ上がる。

介眞　佛の罰か。

（と云つて、扉によりかゝるを、內部から押されるので、驚いて廂の屋根へ飛出して隱れる。扉の中から彈正が釜を持ち、姫の手を引いて出る。）

松永　何が佛の罰、大佛殿を燒いたことか。

龍姫　あれ。

松永　何が恐ろしい、罰を當てる力があつたら、其時にたぜ當てぬ、雨を降らすなり、風を止むるなり、利生を現じてなぜ火を消さぬ、折柄の强い風に煽られて、あの大きな伽藍が一時に燃へ上る、瓦は落ちる、扉は外れる、中の窓から顏を出して、久しぶりで日に當つた、あの大佛の姿と云うたら、憐れにも愚かしい面相であつた、罰を當てるなら、燒かせるやうに仕向けた坊主共が第一番に、地獄へでも、極樂へでも、落ちて行くのが順であらう、はゝゝ。

龍姬　まあ父上、最期の際にそのやうな、恐ろしいこと仰有るな、長谷寺で受けた傷、それに付けても後の世が、案じられてなりませぬ。

松永　痣のことか、こりや廻り合せといふもの、將軍ともなれば殺されもする、高が斯波殿の被管から、織田信長のけふの榮華、彈正とて其通り、氏無き身ながら今日は、大和半國の領主となつた、表高と取上高と、違ひのあるのを改めたのは、曇りの無い政道、罰利生が眞にあつたら、今まで掠め取つた坊主共に當つてよいわけ、彈正に當るわけが無い、首や手が多いのに、事の屆かぬ觀音殿、見當違ひに罰を當てるとは、愈よ以て佛の力の無い證據。

龍姬　もうお止めなされませ、あの世へ行く身が御佛に、惡體口利かれては、愈よ御罰が當りませう。

松永　また罰呼ばかり、死ねば一切は空になる、願ふこともない、賴む事もない、何事も時の運だ。

介眞　（欄の外から首を出して）佛の罰。

松永　（捕らへて襟首をつかみ）むゝ、佛具を落として姬の顏へ、痣をこしらへた元の小法師、己れも恨みのある奴ぞ。

龍姬　安土のお城を脫出すときの、便りとなつた法師殿。

松永　善惡の沙汰問ふに及ばぬ、碎けて元の土に返れ。

（と襟首を放すと、介眞は遙かの地上に落ちる。）

松永　微塵となつて失せをつたわ。

（風强くなる、貝鉦の音近く聞こえる。彈正は火の上がらぬに苛ち、扉を開くと、中から黑煙が出る。）

松永　おゝ、姬、今が最期ぢや、思ひ殘すことは無いか。

龍姬　早うあの世へ遣つて下さりませ。

松永　互ひに思ひ思はれし、男のもとへ行きたいのか。

龍姬　いゝえ、情の薄い人よりも、いつまでも父上の。

松永　我れと一緒に住んでゐたいか。

龍姬　あい。

松永　男に遣るのは惜しかりし、姬と釜とが我が執着、さあ、覺悟せい。

（と姬の胸元を差貫いて殺す。鬨の聲近く聞こえる。）

松永　寄手の奴原、鳴りを靜めて、我が云ふ事をよつく聞

け、松永彈正大弼久秀、いま此所にて腹掻割いて死にたると、織田殿へ申傳へい、最期の供はこの平蜘蛛は〻〻。

（と釜を足下に打付けて割る。火、盛んに燃える。）

（と腹を切り、娘の死骸を抱いて、闇中へ飛込まんとす）

――幕――

千利休（一場）

人物

千利休
細川越中守忠興
中村式部少輔一氏
宗巖　利休弟子
露平　奴
里根平內　石田の臣
川北石見　細川の臣
古溪　僧
半休　雛僧
旅人
旅人の供
雲水の僧
里根平內の從者
お吟　娘
小原女
白河女

紫野大德寺山門

天正十九年二月廿八日のこと。舞臺一杯に山門を飾り、左右松の書割、小原女大勢出てゐる。

向うより旅人、供を連れて出て、門を見やり、

旅人　あれが大德寺であらうぞ。

供　いかさま、左樣にござりませう。

（と舞臺に來る。）

小原女の一　あれ、お上りさんでござんすぞえ。

同の二　遠國のものであらうぞえ。

（と立上り、薪を頭上に戴くのを、旅人は見て肝を潰ぶし。）

旅人　申し〳〵、女子衆、ようまアその重いものを、頭の上に載せてゐられるものだ。

女の一　これは處の習ひにて、子供の時から致しますれば、さのみ苦勞ではないわいな。

供　さりとは魂消たことだ。いかさま旅をしますると、不思議な事を見るものだ。

旅人　なんでも物は聞いたばかりで、見ないと分らない事だらけぢや、とても事に此邊の、話が聞きたいものぢや。

女の二　さあ此邊と申しましても、私達は大原の生れ。
女の三　所のことなら話もせうが、のう皆さん。
供　聞いて損はないと申す、さア何なりと話してくれ。
女の一　そんならこゝで話そかえ、（唄の調子にて）抑も大原の里といふは。
（と踊りになる。）
〈高野の川の水上にて、山ふところの一村なり、里の女子のならはしに、都に出でゝ黒木賣る、薪に花を折り添へて、いざ召しませや、春をめせ。
旅人　やんや／＼、おかげで大原の事が分つた、さア此上は參詣しませう。
供　それが宜しうござりませう。（大原女に　いや女子衆、大儀でござつた。
女の一　何んの事ぢや、人達に散々話させて置きながら、何一つ買はんのかいな。
旅人　買へと云うた處で、旅の者がその薪を買つて、何にしませうぞ。
女の四　しようとしまいと其方の勝手、さあ誰のでも買つたがよい。
供　それを買はれてなるものか。
女の五　ほんにこの奴さんに、背負はせたらようござんす。
供　えゝ、ろくな事は云ひをらぬわ、あれお旦那、そこ構はずとちつとも早く。
旅人　いかさま逃げるが上分別ぢや。
（と逃げて行くを、大原女追ひながら行く。）
（石田の臣、里根平內、家來二人を連れて出で。）
平內　やい、なんでも此あたりが、胡散臭いぞ。
家來の一　確かに利休の娘の姿、二度までも見ましたからは。
家來の二　利休に由緣の大德寺、此寺中が怪しうござる。
平內　聞き及びもしたらうが、利休の娘の吟と云ふやつ、恐れ多くも太閤殿下、御心を掛けられたを、勿體無くも御意に背き、終には姿を隱せし女、いま天下治まりて、功名手柄はしたうても、藥にもできぬ當世、彼奴を捕へて我君へ、差上げたらおのれ等も、隨分褒美に有りつかうぞ。
家來の一　それは一番忝けない。
同の二　褒美の金を聞くからには。
平內　我々三人心を合はせ、うまい仕事をせにやならぬわ
（山門の中より、細川の家來川北石見出て來る。）
や、これは細川殿の御家臣、川北殿ではござらぬか。
石見　まことに御身は石田殿の御家臣、里根殿であつたな。

平内　いかにもその平内でござるが、さて石見殿、ちとお聞き申したいことがござるが、お教へなされては下さりませぬか。

石見　とはまた何事でござりまするな。

平内　されば貴殿、この邊りにて若い尼には、お出合なされませぬかな。

石見　なに尼、左樣のものには出合申さぬ。

平内　左樣でござつたか。

（と不審さうに考へる。）

石見　その尼は所緣のお方でゞもござるかな。

平内　いや、別に所緣のものでもござらぬが、御存知の利休の娘、實はあの女の事でござる。

石見　利休の娘を何故あつて、貴殿はお探し召さるゝな。

平内　行方の知れぬお尋ねもの、彼れを捕らへて手柄を現はし、功名をしたうござれば。

石見　はゝゝ、そりや御本心でござるかな。

平内　何んと云はるゝ。

石見　武士の功名手柄と申すは、戰場にての一番槍、または强敵の首取つたなどが功名、逃げ隱れする女性なんどを、搦め取つたとて何んの手柄、さる事を申さるゝと、隨分御主人石田殿の御名前にも掛はりませうぞ。

平内　こは奇怪なる雜言、お尋ね者の詮議をなすは、大閤殿下への忠義、武士の道にどうして缺ける。

石見　さればさ、罪人の行方を探し、不淨の者を捕へるなんぞは、そりや小者どもの爲すべき業、誠の武士の所業でない。

平内　なんであらうと入らぬこと、身共は身共の思ふ通り、貴殿の口添へ入り申さぬわ。

石見　いかさま、あつぱれ武士が小者の仕打、それもよからう、はゝゝゝ。

（と下手に入る。）

家來の一　ても憎らしい川北石見、あのやうなる雜言。

同の二　なぜ聞捨てに致されまする。

平内　こりや、あれは相手が惡るい、細川の家臣の中でも、音に聞こゆる川北石見、かなはぬ時は互の損ぢや。

家來の一　でも三人一緒に掛かりましたら。

平内　止めるといふのがこゝが當世、强さうなのは除けて通すが、世渡りの上分別ぢやよ。こゝにかうしては居られまい、少し氣を拔き改めて、この寺内を探つて見よう。

（と家來を連れて上手に入る。）

（山門の上にて、扉の戸を細目に開き、利休の娘お吟、頭髪を包み、袈裟を掛け、半身を顯はして外を見る。）

（鐘の音、お吟扉を鎖して姿を隱す。）

（向うより千利休、跡より奴露平附添ひて出る。）

利休　春の夕暮れ來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、春とは云へど寺の中は、どこやらが寂しうて、いとゞ心が澄むやうぢや。

露平　いかにも左樣でござりまする、大路を離れしお寺のこと、わざ／＼の參詣の外は、往來の人も無く、猶更ら靜かでござりまする。

利休　いかさまの、禪法の寺に取つては、この侘びが命ではある。

（と舞臺に入り、四邊を見る、露平も前後を見廻して、利休の面を伺ふ。利休領くに、露平は礫を拾ひ、門上へ打つと、お吟、扉を開き廊に出て。）

お吟　父上。

利休　あ、これ。

（と制する。）

露平　あたりには誰れもをりませぬ、早うお出でなさりませ。

利休　お吟、ようまあ無事でゐてくれたな。

お吟　お懐かしう存じました

（お吟、領いてまた中に入り、やがて降り來る。）

利休　お吟、定めて窮屈の事であらう、諸人に遍ねく、顏を見知られてゐるこの利休、ありや一體何處へ行くのかと、人の口に立てられたら、もう親子の身の切迫、飛立つやうに逢ひたうても、儘ならぬ今の身の上。

お吟　私もかうして人目を忍び、浮世を厭ふ尼のなり、姿形ちは窶せども、悲しさ辛らさに嘆きは積もり、心の中は地獄の底。

露平　お二人さまのお嘆きは、御尤もに存じまする、これと申すも道ならぬ、太閤殿下の無體の戀慕。

（と思はず、聲が大きくなる。）

利休　これ、靜かに致せ。

露平　へい、おうさうだ、數の多い寺の中のこと、何れへかお忍びと、お勸めは申しましたが、萬一寺へ歸つてはと、この山門の樓き住居、寺中の者は誰れ彼れと、心の置ける者はないが、見知らぬものが來ては大事、あれへ參つて遠見をなし、人が來たなら馳拔けて、お知らせ申すでござりませう。

利休　それはよい分別ぢや。

露平　では安心して、お話しをなされませ。

（と下手に入る。利休あとを見て。）

利休　露平が見張をするとあれば、これに居ても氣遣ひは無い。（とお吟に向ひ）さてお吟、何から先きへ話さうか、一體まあそちの身ほど、世に不幸なものは無い、稚い時に母には分れ、父の手汐でやうやつと成長なし、町人なれど堺の分限者、百舌屋へ嫁入させたので、先づ安

心と思ひの外、その良人には死に分れ、是非なく內へ引取つて、わしが手許へ置くうちに、あゝ、あの時出さねばよかつたのだ、黒谷の櫻狩、殿下に垣間見られたのが、この大難の元であつた。

お吟　良人の後世の祈りのため、參詣したのが身の仇に、なつたのもこの吟が、心からでありました。

利休　いや〳〵、元はと云へばこの利休が意地堅いから起つた事ぢや、殿下がお傍仕へに出せと仰せのあつた時、只一言に斷わつたのは、思へばわしの手落であつた。一應歸つてそなたとも、相談をするのであつた、年こそ取つたれ殿下の御威勢、太閤の息が掛かつたら、どんな榮耀も思ひの儘、今となつてはあんまりな、片意地の事であつたと、そなたは思つて居るであらうな。

お吟　思ひがけないそのお言葉、たとへ榮華を極めたとて、好まぬ人との語らひを、なんの女が喜びませう。

利休　さあ、さう思へばこそ太閤殿下の、仰せを卽座に斷つた、あれ程までに仲の好かつた、百舌屋の子息の名殘の面影、忘るゝ隙もあるまいと、わしもとうから思うてゐた。

お吟　そりや長次郎樣のことは、一生忘れはせまいなれど、のう父上、私には、外に男ができました。

利休　なに、外に男ができたとは。

お吟　さあ、殿下の仰せがあつた時には、さして心に覺えませねど、私はあの宗巖どのを。

利休　え、宗巖を。

お吟　思ふと云ふのか、慕ふといふのか、此間からこの山門に、夜晝を送るうち、することなしの物思ひ、勿體なや父上も、また亡き夫も外にして、あの宗巖殿が賴もしく、思はれて來ましたのは、世にいふ戀でがなあらう。

利休　ふう、さては殿下の仰せをば、受け引かなんだは宗巖と、語らうてゐたからか。

お吟　いえ〳〵、そのやうな事はござりませぬ、私が內にゐた時には、たゞ賴もしい人ぢやとばかり、思うてゐたのも戀であつたか。

利休　何んぢや戀ぢや、この恐ろしい最中に、氣樂な事を云ふ人ぢやな、さりながら是れも風流、暗い中に一道の光明を認め得たといふのは、こゝであらうわい。

（此時、山門の後にて。）

白川女　花買はんかいの。

（と云ひつゝ、頭の上の桶に、花を載せたる白川女、二人ほど出で、利休親子を見て向うへ入る。）

利休　身過ぎも多いに花を賣る、あゝ風流な事ぢやのう、茶道を極めて一代の、師匠と世間で立てられても、心の中は四苦八苦、風流はあの手合に、遙か及ばぬ身の上ぢ

やな。

お吟　殿下の御志を斷つたのは、世に亡き夫へ操立てと、我れながら思つて居たのは、我が身で我が身の心の僞り、やはりあの宗巖殿を、慕うてゐた爲めであつたか。

利休　さては其方はかうなつたのも、父が片意地からぢやとて、わしを恨んでゐぬのぢやな。

お吟　何のまあ、思ひ返して私が、お傍へ出たら濟まうもの、それに心が付きながら、承知をせない我儘は、お許しなされて下さりませ。

利休　利休はな、いくら欲が深くとも、娘を賣つて世を渡らぬ、太閤殿下は時の天下、しかし利休も當代の、茶道に於ては天下取り、立てた意地はどこまでも、張合つて通さにやならぬ。

（露平、以前の所より出で。）

露平　誰れやら參りまする、またお話もござりませうが…、おゝそれ、この門の上でお話しなされませ、お二人さんがお上りなさいましたあとで、梯子を外づして置きますれば、氣のつくものはござりますまい。

利休　いかにもこゝで長話は、あまり智慧のない事であつた、お吟、この山門の階上には、わしの像が置いてある、云はゞ住居も同じ事、露平が言葉について、二人で階上へ上がりませう。

（と立上がる。）

お吟　久しぶりでお木像に、御對面をなされませ。

利休　おゝ。

（と頷いて上る。）

お吟　露平、あとを頼みましたぞ。

（とこれも後から上る、露平は梯子を外づし。）

露平　かうして置けば、誰も氣のつく者はない、

（此時、向うから雲水の僧大勢出て來る、露平、それと入違ひに門の下手へ入る。僧は門の中へ入り終ると少し間を置いて、雜僧半休、箒を持ち、あとを振返りながら出て、外してある梯子を見て。）

半休　やあ、誰れか梯子を外づして置く、かゝる徒ら者はわしの外には無い筈だ、この山門に安置した、利休居士の木像を、細川の殿様が、御覽と云出されたので、掃除をしろと云付けられたが、これでは上がる事ができぬ、氣の短かい老師に、叱かられては大變だ、一番梯子を直して見ようか。

（と梯子を掛け直さうとする、さきの石田の臣平内、家來を連れて出て。）

平内　それ。

（と半休を退けて、上がらうとする。）

半休　こりや、何をなされまする。

平内　なんでもよい、梯子を片寄せてゐるからには、愈よ怪しい門の上、利休に由緒の多い此寺、むゝ、退け〳〵。

半休　退くわけに參りませぬ、老師さまの仰せにて、掃除に參つたこの半休、自分の用の濟まぬうちは、上げる分けには參りませぬ。

平内　なんであらうと退いてくれ。

（と半休を押さへ。）

それ。

（と命じる、家來は梯子を直す處へ、露平出て。）

露平　申しお侍、お小僧を捕へて、亂暴な事をなされまするな。

平内　また邪魔ものが出でをつた、是れこの山門の二階には、怪しい者が潜みをるのだ、それを引立て參らうと、我等が致すを遮げるゆゑ、それでかやうに押さへてゐる。

半休　これ〳〵お侍、掃除をしないと老師樣から、三十棒を喫はねばならぬ、こゝを放して下されい。

露平　あゝ云つてござや、放してお遣りなされませ。

平内　放すもよいが邪魔をすまいぞ。

（と半休を放して、梯子へ上りかける。）

露平　あつこれ、梯子へ上つて何をしなさる。

平内　何をしようと此方の勝手、すつこんでおいやれ。

露平　今方聞けば此所へ、細川樣がお出でのよし、掃除を留め狼藉するのは、無禮でござりませう。

平内　何んであらうとお尋ね者を、探す我等を遮げなさば、其分には差置かぬぞ。

（家來は平内に囁く。）

扨はおのれは利休の奴、いよ〳〵以てお尋ね者は、こゝに居るに極まつた、それ彼奴も搦めよ。

露平　はゝゝ、おのれ等如きに捕らへられるやうな、骨のない奴大明神ではない、さあ來い。

（と立廻りになる。平内は口笛を吹くと、家來四人出で、露平にかゝる、大勢を相手に露平立廻り、少し疲れたる氣味にて、遂に山門の柱に押さへつけられる、半休は加勢の出たのを見て逃げて行きしが、此時門の中より出る、あとから古溪禪師、侍者二人を從へて出る。）

古溪　喝、門内にての狼藉、靜まれ。

平内　また出で居つたな、おのれは何者。

古溪　吾が寺の境内で、わしを聞くとは何者だ。

平内　某ことは、石田治部少輔三成の家臣、里根平内と申すもの。

古溪　その石田殿の家來が、なんで狼藉をなされる。

平内　はて、お尋ね者の利休の娘、どうやらこの山門に、隱れ忍んでゐるらしい、その詮議を遮げるゆゑ、取押へ

てをつたのぢや。

古溪　寺の旦那の利休居士の娘、居る處が無くば我寺へ、隨分止めて置かうもの、尋ね來ればこそ遠慮の至り、さてはこの山門に、確かに娘が居るのぢやな。

平内　其邊は確かとせねど、なんとも怪しい此山門。

古溪　扨は定まつて居ると云ふのではござらぬか、それなれば寺で探がし、もし居つたら改めて、わしが草庵へ連れて參らう、安心して歸らつしやれ。

平内　いゝや、身共が連れて主人へ渡し、太閤殿下の御前へ出すのぢや。

古溪　そりや、誰れ人の指圖ぢや。

平内　指圖とてはござらぬが、彼れは天下のお尋ねもの。

古溪　はゝあ、左樣かた、太閤殿下の御沙汰とあらばまた格別、まして石田殿さへお指圖もなされぬに、境內にて爭論の儀は相成らぬ、卽座にこゝを立退きなさい、其上細川越中殿、この樓上に安置せる、利休居士の木像を、見たしとのお入り、追付けこれへ見えられる、方々が居らるゝと、お目觸りにもなる事ぢや、早くお歸りなされませ。

平内　見掛けた天下のお尋ね者を、其儘にして歸られようか、達てお留めなされると、腹立てゝも探して參るぞ。

古溪　ほう、歸らぬかな、狗子佛性有と申して、狗の子には佛になる性があるに、さりとは頑なゝ人ぢや、毒を以て毒を制すかのう、……、若い衆、この侍を境內から運び出せ。

（といふと、門內から以前の雲水大勢、各々棒を持つて出る。）

平内　こりや我々を何んとなされる。

古溪　取つては食はぬ、境內の外へ送り出すまでだ、歸らつしやれ。

（門內より僧出で、）

僧　細川殿、はやお越しでござります。

古溪　左樣か、……、石田殿の御家來、お聞きの通りぢや、歸らつしやれ。

平内　とは云へそのまゝ。

古溪　はて、歸つて宅で休まつしやれ。

平内　（思入あつて）さらば歸らう。

（と家來をつれて下手へ入る。露平前に出て平伏し。）

露平　禪師さま、あぶない所へお出で下され、有難う存じまする。

古溪　ではあの美しい娘御が、やはり山門に居つたのか、目端の銳どい石田殿の、家來だけあつて、どこやら取柄のあるものぢやな。

（露平は梯子を直して二階へ上る、半休は箒を持つて、

（庭から上らうとする。）

小僧、もう掃除はよい、庵へいて休め、若い衆も大儀であつた、おのし達なか〳〵えらかつたな、しかし、坊主の方の修行も、今の氣込み位で、よう遣れよ。

（小僧と侍者を殘して、皆下場する。）

利休　禪師、忝けなうござりまする。

（利休、お吟、露平、下りて來る。）

古溪　利休殿、世の風說に、あらまし承知してをつた、嘸心配なことであらう、お吟どの、あまり美くしう生まれるのも、かへつてよしあしぢやな、お身の爲めにこのわしも、猿樂を一番興行したよ、はゝゝ。

お吟　禪師さまのお出でがなくば、どのやうな事にならうも知れず、有難うござりました。

古溪　なるほど、太閤が迷うたも無理でない、しかし無體の戀慕に、逃げまどふお身の顏には、迷ひがあるな、戀があるな、綠の髮は絹に隱し、綾の衣は袈裟に包み、沈んだ姿のその下に、浮かれ心があるやうだ、やがてはそれが此上にも、なほ禍の種とならう、どうぢや、一層の事、姿を其儘、眞の尼になる氣はないか。

お吟　尼になるのは嫌でござんす。

利休　こりや吟、最前も云うた通り、せめて都を離れてくれ。

お吟　いえ〳〵、それも嫌でござります。

利休　（思入あつて）はて、なあ。

（此時、露平、向うを見て。）

露平　あれ、あちらから宗巖殿が參られまする。

お吟　え、宗巖さま。

利休　ほんに、あれは宗巖だ。

（と思はず、お吟を見る。お吟少し恥づかしき科。）

宗巖　師匠にはこれにお出でゞございましたか。

（宗巖遽だしく登場）

利休　宗巖、禪師樣がお出でなされる。

（宗巖、禪師に一禮し。）

宗巖　禪師樣、御機嫌宜しうござりまする。

（禪師頷く。）

利休　いかに大事が有らうとも、取亂しては埒もない、火急の事でも起つたのか。

宗巖　お師匠樣、早く此場をお立退きなされませ。

利休　なに、私に立退けとな。

宗巖　さればにござりまする、唯今中村式部少輔樣、御上使として御入來あり、大德寺へお出での由を申上げました處、直ぐさまこれへとの仰せ、この山門へお師匠樣の、木像を置かれましたが、太閤殿下の御意に應はず、勅使を始め高位高官の、下を通る山門へ、己れの像を置くな

ぞとは、上を蔑する無禮とあつて、切腹仰せ付けられる、その御上使とおつしやつたのは、定めて逃げよとの謎かと、思はれますれば今のうちに、少しも早くお立退きをお願ひ申上げまする。

利休　この山門へ我像を、置いたるを罪として、我れに死罪の御沙汰とか、さある時は此寺へ、迷惑を掛けるが殘念。

古溪　いや、物隱しせぬ殿下なれども、娘をお傍に差出さぬ、罪とはよもや仰せはあるまい、そこで木像に祟つたのぢや、寺へは難儀は掛かるまい。

露平　差出がましいやうなれど、これよりすぐに御發足、當分の間お姿を、お隱しなされまするのが、何よりの御分別。

お吟　なあ父上樣、事の起りは私から、一層私が名のつて出たら、父上樣へ掛かる難儀は、大方消えるでござりませう。

利休　さう手輕うは參るまい、一旦それと仰せが出ては、元へ返へすはむづかしい、死罪と御諚があつた上は、どうせ免れぬ利休の身の上、なんの、利休は死なうと茶の道は、天地あるまで傳はるものぢや、平家も亡び源氏も果て、北條九代の夢の跡、室町御所の滅亡も、信長朝臣の御最期も、目の前に見たこの利休、勢ひをもて人を制する、道がいつまで傳はらう、千の利休が志す、茶の道は末世末代、利休は死んでも茶は殘る、利休が定めた寂びの味、榮耀榮華の裏の裏、茶道の極意を顯はして、末世の鑑にしてくれう、隱遁の客は禪師、詰めの客は娘のお吟、宗巖は後ろ見の、介添へとなしたけれど、さある時には正客の事缺き、はて誰れをがな。

（と考へる、この時、山門の後にて。）

細川　あいや、不足ながらこの忠興、正客を懇望申す。

利休　や、あの聲は細川殿。

（細川越中守忠興、門の中より出る。）

細川　仔細は殘らず承はる、兼ねて教へを受けたる忠興、枉げてその正客の、お許しを蒙りたい。

利休　高位、淸僧、幽玄の女、月、雪、花を一つ時に、天晴れ利休が最後の茶の湯、式部少輔のお入までに、一會催し申すべし。

古溪　わしも數に入るのか、さらば例の席にて、やがて支度を致さう。

利休　いや、わしが茶の道は、機に臨み變に處するが事の妙、往來端にて茶の極意を、顯はして御覽に入れん、宗巖來やれ、奴も來い、寺に有合ふ銅鑼の音を、合圖になして方々には、設けの席に來られよ。

（と利休立上り門の中へ入る、宗巖、露平續いて入る、

お吟も立上り、行かうとして思ひかへし、柱に身をもたせて崩れるやうに坐る。)

(向うより、中村式部少輔、馬上にて供を連れて出で、細川を見て。)

中村　や、それにおはすは細川殿か。

細川　さういふは中村式部少輔か。

中村　千の利休へ打手の使者、大德寺へ參詣と聞き、弟子なる宗巖を先きへ遣はし、後よりかくは追掛けたり、もしや利休が居るならば、首打たではかなふまい、御邊は利休が茶の門派、行方を知らばお敎へあれ。

細川　利休か……、利休はあれに居りまする。

(とこれを聞いて中村は馬より下り。)

中村　なに、利休はこれにありとや、さりとては情けなき、御返事に預かるぞや、利休これにありと聞かば、首打たではかなふまじに。

細川　利休は旣に覺悟の上、路次にて最後の茶會を爲し、尋常に腹切らん、所存の程を承知致した。

中村　なに、利休は覺悟せしとか。

お吟　なう中村樣、父の代りに私を引立て、その御沙汰をば引換へに。

中村　一旦仰せのありし事は、御沙汰替へはかなふまじ。

(銅鑼の音、門の内にて聞こえる。)

細川　ありや客を呼ぶ知らせの銅鑼の音。

古溪　細川殿は今日の正客。

お吟　また次席は禪師さま。

細川　迷惑ながら中村殿には、路次の一會相濟むまで。

中村　心靜かに勉められよ、我れはこれにて餘處ながら、非常を戒め、警固をなさむ。

(道具廻る)

山門の裏を見せ、下手に山櫻の立木、それに長柄の傘を縄にて結びつけ、下に毛氈を敷き、有合せの釜、風爐、上手に松の立木、その枝に銅鑼を釣るしあり。宗巖は入來る客を導きて坐せしむ。よきほどに利休出で、座に着き。

利休　方々ようお入、風情もなき路次の茶席、庵は天地を長柄の傘、毛氈とで取仕切り、花は時候の山櫻、散りかねたるが利休の命、有るに任せて分を知る、これが茶道の極意でござる。

(と茶を立てゝ出す。細川飲んで。)

細川　さて亭主、お立前結構に存じたが、茶道はこれ風雅の骨頂、何處までも靜かであるべき筈、殊更ら大事の今日の一會、寺内とは申しながら、人を隔てぬ道の邊に

て、まなびをなすは如何ならん。

利休　は、不寄一應は御尤も、もと、茶の道は禪を旨とす、心澄みて涼しければ、貴賤群集のそのうちに、寂しみを求め得られる、即ちこれ茶の味ぢや。

古溪　寒者は人を寒殺し、熱者は人を熱殺す、いかにも禪の妙ぢや。

（一服終り、お吟、茶碗をかへす、利休それを收めて）

利休　さて、この茶會が利休の名殘り、この所にて最期を遂げん。……宗巖。

宗巖　はつ。

利休　阿彌陀堂の釜、それにかねて御懇望の石燈籠、あれは細川殿へ利休の形見、宅へ歸つて御屆け申せ、又この匙は某が自作、粗末ながらわしが手を、お前にくれた志ぢや、織部の茶碗と共に、わしの紀念と思うてくれ。

宗巖　すりや、どうあつても此處で。

利休　死なねばならぬ仕儀になつた、しかし利休は命が惜しい、東山御所の時、珠光禪師があらましを定め置かれて、道耳、宗悟、我が師紹鷗、某これを受け引いて、足らざるを補ひ、無きを増し、日本茶の湯の一々、悉く定め終つた、さればわしの身體は即ち茶ぢや、わしが死んでは茶が廢たる、茶ゆゑに生きた利休なれば、利休が死んでは茶も死ぬのぢや、まだお前が殘つてゐるので、どうやらわしも冥途へ行ける、わしが死んだ跡は、まだうら若い悴ども、これを守りたて茶の道を、日本に絶やさぬのが、これがお前の勤めなのだ、この利休は片意地で、一旦云ひ出したことを、後へ引かぬが大きな損、今死ぬのも、先づそんなことが元であつた、風に柳とたとへの通り、心を付けて世渡りをしてくれい、其方一人の爲めでない、こりや茶の湯の爲めといふものぢや。

宗巖　段々との御教訓、添けなく存じまする、もと愚鈍の私なれど、御指南受けたそれだけは、一生忘れは致しませぬ、御長男の道安樣、御次男の小庵樣、お二人樣に付添ひ申し、憚りながらお師匠樣の、定め置かれし茶の湯の定法、頽れるやうな事はしませぬ。

利休　それでよい、それでわしも安心して死なれると云ふものぢや、わしが命の惜しいのは、茶の湯が廢たるが心掛り、その執着さへ晴れたなら、外に思ひ殘りはないと云ふものぢや、方々、お吟にちと申含めたい事がござります、あれを連れまして話しする處もござりませぬ、恐入つた儀でござれど、暫くの間、方々には。

細川　いかにも我等も心ぬかり、……、いざ禪師。

古溪　暫時あれにて待ち申さう。

（と立上る、宗巖これを送りて、幕張の外に出る。跡に利休はお吟に向ひ）

利休　これ娘、わしが死んだあとは、其方は何とするつもりぢや。

お吟　父さんと別れたあとは、おゝ、宗巖殿を便りとして、身の落着を定めまする。

利休　宗巖と夫婦になるのか。

お吟　あの宗巖殿と夫婦になるかと、おゝならいでか、あちらさへ嫌はせられずは、いや〳〵思ひをかけたお人、押掛け嫁でもわしは女房に……。

利休　それほどまでに思ひ込んだか、これ、大閤殿下の仰せさへ、背いたそちは貞女だと、褒めた世間の其口は、今度は反つて内弟子と、乳繰り合つたと嘲けられうが、それをそなたは構はぬか。

お吟　何の〳〵、謗らば謗れ、世間の口が恐ろしうて、それで世間が歩かれませうか私も千の利休の娘、思込んだら何處までも。

利休　その利休の娘なら、今の思案悪るからう、憎しみの掛かつたそなた、再縁せぬと云ふだけに、表向いては罪とはならぬ、その祟りはこの利休、わしの片意地からとは云へ、命を捨てるもそなたから、若しそのやうな事になつたら、一の祟りはあの宗巖、さある時には茶道の興廢、折角立てたわしの道は、あゝ天地と共に長く傳はる、わしの道は亡びるのだ、これ吟、隱れ忍んだ尼姿、それを幸ひ誠の尼に、目前でなつてくれ、色欲煩惱邪見を離れた、尼御前の身となつてくれたら、わしも安心してあの世へ行かれる。

お吟　父さま、それは許して下され、おう、初一念を通すまでは、どうぞお許し下さりませ。

利休　すりやこれ迄に、わしが云うても。

お吟　どうぞ許して下さりませ。

利休　もう此上は。

（と刀にて、お吟の肩先を斬る、お吟斃れる、その騒ぎに、一番に宗巖、續いて細川、古溪出る。）

細川　こは利休には、何故あつて娘御を。

利休　手に掛けたのは茶道の爲め。

細川　何と云はるゝ。

利休　されば、申さずとての事ながら、あさましやこの吟は、いつかは弟子の宗巖を、片思ひする此年月、もしも此事太閤殿下の、お耳に入らば宗巖も、われと同じき最期を遂げん、さある時には我が家の、道の廢たれを思ひ切り、成敗致してござりまする。

細川　言葉を盡して諭されたら、元より利發のお吟どの、聞入れぬことあるまじきに、短氣な事を致されたな。

お吟　いえ〳〵、短氣ではござりませぬ、かうなつてもあきらめられぬ、あさましい私の心、死ぬのは結句身の仕

合せ。

宗巖　申しお師匠様、何と申してよいのやら、私には分かりませぬ、またお吟様のお心根、忝けなうござります、一層私もこの所で。

（と、利休の置いた刀に手をかける。）

細川　やれ待て、お身死しては師匠に濟むまい。

宗巖　はい。

（と控へ。）

死なうにも死なれぬ私。……、これお吟さま、この宗巖は一生涯、女房と云ふものを、決して持ちは致しませぬ、どうぞこれをお土産に、成佛なされて下さりませ。

お吟　忝けない宗巖さま、此世の緣は薄くとも、未來はきつと女房ぢやぞえ。

（と取付いて落入る。）

（六つの鐘、鳴り初める。中村一氏入來り。）

中村　時遲れては御機嫌如何、して生涯の御用意は。

細川　おう、はや暮れ初むる入相時、……、居士、最期の用意は。

利休　提げたる我が得道具の一つ太刀、いま此時ぞ、天に抛つ。人生七十力囲希、咄々、吾が這の寶劍、祖佛共に殺さむ。

（と辭世を詠む。）

古溪　大丈夫、よい覺悟。

（露平出で。）

露平　こりやお旦那にも、お吟さまにも。

（と泣く。）

利休　露平、世話になつたな。

（と刀を逆手に取り。）

式部少輔殿、憚りながら御介錯。

中村　承知致した。

（と用意する。）

（その時、舞臺を斜に廻す。）

（小原女は薪木などを賣盡して、京の町の買物に代へたる一同、どや〳〵と出て來る、上手から、雲水の僧も出で來り引違へて、上手と向うへ入る。）

（こちらでは、利休は刀を突込む、中村は刀を拔いて後ろに廻る。）

（すべて、木魚の音、微風に散る花、この模樣にて。）

——幕——

伊原青々園篇

出雲の阿國（三場）

人名

名古屋山三
腰元關屋　實は不破伴作
石田治部少輔三成
前田中納言利家
大野修理之助治長
同　主馬之助治房
道外方
女方
唄うたひ
囃子方
若君拾丸
近習　大勢
軍兵　大勢
出雲の阿國
淀君
大藏局
和期局
饗庭局
玉の局
腰元　大勢

第一場　淀城奥殿大廣間

日本中の頭痛の種であつた朝鮮征伐も愈々和睦の議熟して近さうち大明國よりの使者が大阪へ來るといふので人々ホツと息を吐いた其の半ば，文祿四年には天下に色々な椿事出來に及んだ。二月七日には奥州會津百萬石の領主蒲生飛驒守氏郷が京都で頓死せられた。實は太閤秀吉の寵臣石田治部少輔三成が小堀内膳に言付けて毒害したとの風聞である。其の七月十五日には，太閤殿下の養子たる關白秀次公が高野山に切腹仰付けられ，若君姫君をはじめ妻妾三十餘人は京都三條河原で打ち首となつた。これも石田三成が太閤殿下の思ひもの淀君と合體して秀次公を讒言した故と言傳へられる。斯の通り石田と合體して秀次公を讒言せられた淀君は，自分の腹に生ませられた若君秀頼公を天下の跡目に立てん爲であつたが，計略圖に中つて眼の上の瘤たる秀次公は右の最期。さなきだに太閤殿下の寵愛深きばかりか，今は秀次公に代はつて當然天下の跡目た

るべき秀頼公の御母として飛ぶ鳥も落ちんばかりの勢ひ。何時しか其の年は暮れて、明くれば慶長元年五月五日の端午の節句、所は淀君の御住居たる淀の城の奥殿大廣間。その頃都に持囃された出雲の阿國の歌舞伎踊を今日しも此處へ招き寄せて御覽があるとのことで、腰元が褥や脇息を持運んでゐる。

腰元一　やれ〱御節句といへば何時でも大抵な忙がしさではないのに、取分け今日は歌舞伎踊の御見物で一段と眼が廻るやうぢやわいの。

腰元二　したが、眼の廻る代りには、其の眼にたんと保養をさす事が出來ようぞいな。

腰元三　ほんに其うで御座んす。歌舞伎踊は如何なものか、私等は未だ見た事が御座んせぬが、出雲の阿國といふ女は、美人ぢやといふいかい評判ぢやわいな。

腰元四　踊よりも何んな美人か、其れが見たいものぢやが、でも稀有な事もあるものぢや。

腰　一　稀有なとは何が稀有ぢやぞいな。

腰元二　御方樣は大の阿國嫌ひぢや御座んせぬか、あのやうな男たらしの賣女は噂を聞いても胸が痛うなる、四條河原を通つて櫓太鼓が耳に入るのも身の毛がよだつと仰やつてぢやわいな。

腰元三　それは政所樣が、いから阿國を御贔屓遊ばすゆゑ、御方樣の氣に召さぬであらうわいな。

腰元二　いや〱、其ればかりでは御座んせぬ。高い聲では言はれぬが、もう一つは御方樣の嫉み心が強いからで御座んすわいな。天が下に又とほど美しい者はてくあるまいと思召してぢやに、阿國は美人ぢや〱と餘り評判が高いによつて、つい御氣に障るのであらうわいな。

腰元一　ほんに其の通りぢや。去年關白樣が切腹遊ばして、三十餘人の上﨟衆まで無慘の御仕置になされたも、聚樂御殿には數多の美女が居るとて御方樣の嫉み心が基であつたとやら。

腰元二　阿國嫌ひも大方其處らぢやと思ふのに、今日は何うした風の吹廻しか、此の御殿へ御呼寄せ遊ばしたは、何と稀有な事であらうがの。

腰元一　其う聞けば、ほんに稀有ぢや。其れとも和子樣の御慰みでは御座んすまいか。

腰元二　そなたは、何を言やる。まだ頑是ない和子樣に歌舞伎踊が何の玩具にならうぞいの。

腰元三　但しは阿國を呼ばうで弄り物にしようといふ御方樣の思召かも知れぬ。

腰元四　まあ、其んな事でもあらうかいの。其れにつけても、美しい女御に生れた者は苦が絶えぬ。

腰元一　結句私等のやうな於多福が果報かも知れぬ。

（二人が顏見合せて笑つて居る處へ、花道からけたゝましい音がして、朋輩の腰元が十四五人轉げるやうに息を切つて此處へ駈込む。）

皆々　あれ、和子樣。田樂遊ばすな。

同　何うぞ御免し遊ばしませ。

（口々に叫ぶ後から、今年四歳に成らせられる若君拾丸（秀頼の事）水干の裝束に額には菖蒲の鉢卷をして腰に菖蒲刀を下げ、菖蒲の兜巾と篠掛、子役の小姓大勢と一所に出る。）

若君　踞め〱。

（と言ひながら、片手に提げた菖蒲繩で腰元たちを打たうと追掛けさせられる。）

皆々　和子樣。御免し遊ばしませ。

同　あれ、田樂遊ばすな。

（と皆が逃廻る。）

若君　踞め〱。

（と若君が其處らを追廻して居るうち、下手の襖を明け老女大藏局に案内されて此處へ通つたのは石田治部少輔三成（三十七歳）。若君は其れと氣付かず。）

若君　踞め〱。

（と言ひながら石田の片膝を菖蒲繩で打つ。）

大藏局　若君さま、石田殿を何となされまする。

若君　おゝ治部か、人違ひぢや。免せ。

石田　さては端午の節句に、下世話で致す菖蒲打をなされまするな。

若君　其うぢや。そなたもしやるなら此繩を貸さうか。

石田　あはゝゝ、わつけも無い事を。追て御父君と參內遊ばす御身でありながら、左樣な田樂遊ばすと殿上人が笑ひまする。大藏殿。その菖蒲鉢卷を取つて御上げ召されい。

若君　嫌ぢや〱。此鉢卷は取りはせぬ。

大藏局　でも、石田殿が彼のやうに申されまする。

若君　何ぼ治部がいうても、此鉢卷を取る事は嫌ぢや。さあ、皆の者は私と一所に來い。彼處で又菖蒲打して遊ばうぞ。

大藏局　其の菖蒲打よりも、追つゝけ此處で歌舞伎踊が始まりまするゆゑ、其れを御覽遊ばしませ。

若君　いや、歌舞伎踊は見たうない。私は菖蒲打が大好きぢや。踞め〱。

（と言ひながら、又も腰元たちを追掛けて奥深く入らせらるゝ。後姿を見送つて。）

石田　彼の寛濶な御氣性は上樣を其のまゝ。しかも菖蒲打なんど賤き者の業くれを好ませたまふ所まで御父君に似させたまひしは重疊ながら、既に秀次公の御例もあれば、

餘り氣儘に御育て申すは却て若様の御爲めに成りませぬ。大藏殿くれ〲も若様への御教訓を頼みまするぞ。して、只今聞けば、歌舞伎踊の催しが御座るとやら、それは眞事で御座るかな。

大藏局　淀様が火急の御思立ちで、京都から阿國を御呼寄せなされました。

石田　何、阿國を。妾が大嫌ひは女歌舞伎と雷ぢやと仰せられた淀様が。

大藏局　さ、妾も餘り不思議におもひまして、淀様に左様申したら、此れには些と仔細のある事ぢやと仰やつてゞ御座りました。

石田　むゝ、何はともあれ、最早御出座に間も御座るまい。拙者は此處で御待ち申すで御座らう。

（途端に下手から若き腰元關屋が入つて來る。）

關屋　大藏様、樂屋の支度はもう宜いさうで御座ります。

大藏局　支度がよくば御方様の御出座遊ばすやう、大奥へ申して御くりやれ。

關屋　畏りました。

（關屋が立ちかゝるを、最前から眼も放さず見詰めて居た石田が呼留める。）

石田　こりや。待ちやれ。

關屋　は、何か御用で御座りますか。

石田　むゝ、此の者は拙者はじめて見受けましたが、何時から此の御殿へ奉公に上りましたな。

大藏局　確か、そもじは去年の冬からであつたの。

關屋　其の通りに御座ります。

石田　して、名前は何と申す。

關屋　私は關屋と申しまする。

石田　何ぢや、關屋ぢや。

關屋　左様に御座ります。

（石田は熟と考へて。）

石田　むゝ、關屋か。人住まぬ不破の關屋の板びさし。

關屋　え、何と仰やります。

石田　今のは新古今集の和歌ぢや。

關屋　私は又この節はやる歌舞伎踊の小唄かと思ひました。

石田　はゝ、たわいもない事の。もう用はないから行きやれ。

關屋　は。

（腰元關屋が心を殘して上手へ入つた跡で、石田は倘も思案して居る。大藏局は訝しげに。）

大藏局　石田殿、心ありげな今の上の句、あれは何となされました。

石田　さ、合點の行かぬは今の關屋が面體、去年七月、高

野山にて關白秀次公に殉死したる不破伴作に生寫しで御座るわ。
大藏局　え、其の伴作ならば昔に聞えし秀次公の御小姓。
石田　蒲生家の名古屋山三と共に天下の美少年と唄はれた天晴名譽の者で御座る。
大藏局　如何さま。其の伴作が苗字を其のまゝに不破の關屋の板びさし。
石田　荒れにし後は只秋風ぞ吹くといふ下の句も、秀次公の御最期を嘆いた心と讀めば讀まるゝ。
大藏局　其れではもしや。
石田　然し正しく生害したる伴作が再たび此の世に生きて居よう筈はなし、殊に男子と女性、此れこそ他人の空似で御座らうわ。
大藏局　でも、念の爲め關屋を此處へ呼寄せて。
石田　いや、其の詮議は却て無用で御座る。これ、大藏殿。
（石田は何か耳打する。大藏局は打頷いて。）
大藏局　では、御殿の四方を。
（とあたりへ氣を兼ねながら、手を叩く。腰元下手から出る。）
腰元　大藏樣、御召で御座りますか。
（大藏局が耳打すると、腰元は立つて行く。入違に矢張下手から現はれた大藏局が二人の子供、大野修理之助治長と同じく主馬之助治房、何れも前髪たてた凜々しい若衆姿。石田と母とに一禮して。）
修理之助　石田樣。
主馬之助　母上。
兩人　何御用で御座りまする。
大藏局　これ、修理も主馬も近う寄りや。
兩人　はつ。
（と兄弟が進寄ると、石田は修理に、局は主馬に囁く。兩人は顏見合はせながら元の座に直り。）
兩人　委細畏まつて御座ります。
（と平伏する。途端に、上手の襖が明いて、淀君（廿歳）が出御あらせられる。つゞいて、和朋局、饗庭局、玉の局、そのほか女房たちや、先きの腰元大勢、關屋たちがズラリと列ぶ。淀君は石田に眼をつけ。）
淀君　治部殿、おぢやつたか。
石田　先づは式日の御慶めでたく申上げまする。
淀君　して、御事は今日の催しを知つて御ぢやつたか。
石田　いや、別にあなた樣の御耳へ入れたい儀が御座りまして參上致しました。
淀君　妾の耳に入れたいとは。もしや上樣の身の上に御變りでも。
石田　いや、上樣に何の御變りは御座りませぬが、故蒲生

飛驒守後室の儀につきまして。

淀君　むゝ、氏鄕の後家が何としましたのぢや。

石田　かねがねあなた様にも御存知させられまする如く、上様、會津表より内々の御召寄せにつき、昨日京着、今日早速伏見へ登城。上様御對面遊ばさるゝ筈で御座ります。

淀君　其の氏鄕の後家は信長公の娘、妾とは從姉妹同士、此の度の御召寄せは、上様いつもの惡性ゆゑ、人質にするというて伏見に引留め、實事は寢屋の伽にしようといふ御心に極まつた。

石田　拙者も左様に存じまするによつて、内々あなた様の御耳に入れる次第に御座ります。

淀君　さりとて妾は何の嫉しうも思はぬ。妾の母上小谷の方は信長公の御妹御、言はゞ氏鄕の後家は妾よりも眼上ながら、妾は拾丸といふ天下の世嗣の母ぢや。もし亦蒲生の後家が如何ほど美しいとて、妾よりも年上ぢや。上様今日の御對面により假令會津の姥櫻を伏見に手活となされうとて、妾に御見替へ遊ばす道理はない。其れゆゑ妾は芥子程にも思はぬ。然し山三に此の事で聞かせたら、妾を賴み甲斐もなう思ふであらう。

石田　あなた様は山三と仰やりまするか。

淀君　蒲生浪人の名古屋山三、今ごろ洛中に雅男と噂の高い彼の山三が妾へ切なる願ひ、飛驒守が歿後も故主の家に何事ないやう、上様へ取りなしてくれと、頼うで居るわいの。

大藏局　其れに、氏鄕様の後室が上様の御寢間の伽をなされうなら、山三殿は味氣ない事で御座りませう。

和期局　今日も歌舞伎踊の見物に山三殿を御呼びなされました程に、追つけ此處へ見えるで御座りませうが、後室様の事を聞いて、彼の美しい眉の間に皺の寄るのが御氣もじで御座ります。

石田　さては今日の歌舞伎踊は山三に見せうとての御催しで御座りますな。

淀君　其うであつたら御事は何としやる。

石田　聞くさへ苦々しう存じまする。如何さま、其の山三は飛驒守が小姓の時よりあなた様御眼かけさせられ、上様名護屋御出陣の御留守にも度々御召寄せられたとは申せども、今は主なしの浪人もの。天下の御世繼の母君たるあなた様の御側近く召させられまするは非禮の第一。ことに彼めが故主は上様御不興の蒲生家といひ、浪人してより洛中に風流なる活計を營み、或ひは禁裏仙洞の上﨟、或ひは公家武家の女房たちと、淫らなる噂數を知らず。斯かる輩の當御殿に出入いたすは世間の批判も如何で御座りまする。

淀君　治部殿、その諫言だて措いてたもれ。

石田　何と仰やりまする。

淀君　浪人を近づけるのが何の非禮。今の國取大名に、昔浪人ならぬが幾人あらうぞ。其ういふ御事とて、元は近江の國觀音寺の兒小姓であつたを、上樣が御見出しなされて武士に仕立てたとの御物語ぢや。又御事は世間の批判を氣に御しやるが、太閤殿下の思ひ者、且つは若君の母なる妾に對つて、誰が如何なる批判を加へよう。日本は愚か、大明朝鮮までを打靡かせ給ひし吾が夫とても、妾の心は妾の儘に遊ばすよりほかは無い。もし亦山三といふ風流男を妾が側に引付けたとて上樣が御不興なら、妾も上樣に申す事は山々ある。今もいうた通り、妾に嫉み心はさら／＼無けれど、氏鄕の後家を召し寄せられて今日の御對面は何事ぞ。去年秀次殿成敗とても、菊亭右大臣殿の息女を橫取された御憤りが、上樣の御決斷を早めた事は御事も知つて御居やる筈ぢや。

石田　さりながら、其處が男子と女性との違ひ、よし上樣が愼ましからぬ御行狀を遊ばせばとて、あなた樣まで瓜田に履を容るゝ御振舞は、憚りながら穩かならぬかと存じまする。

大藏局　これは石田殿の仰やる事に理があるやうに思ひます。

淀君　大藏までが其のやうな、妾に淫らな事があると言はぬばかりの口振。聞捨てには出來ぬぞよ。

石田　いや、聊以てあなた樣を疑ふのでは御座りませぬが、人の口には戶が立てられぬといふ下世話の譬。

淀君　でも、妾は其の人の口に見んこと戶を立てゝ見せようぞ。人を生かす殺すさへ心の儘なりや、其れほどのこと妾にはいと易い儀ぢや。

石田　假令口には戶が立ちましても、其の人たちの心の疑惑は何と致方が御座りますまい。

淀君　如何に人が疑はうとも、妾さへ潔白なら構ふことか。花紅葉の色を愛で、蘭菊の香りにあこがれるを、誰が淫ら心と言はうぞ。妾が山三を近づけるは丁度其れと同じぢやわいの。

石田　これは近ごろ興ある御詞。花紅葉の色、蘭菊の香りが山三とは。

淀君　でも妾には其う思へるのぢや。

石田　さりながら、山三は草木で無うて人で御座ります。色香のほかに心といふものを持つて居りまする。色香ばかりはあなた樣に捧げても、心は疾うに人の物で御座ります。

淀君　え、山三が心は人の物。その人は出雲の國ぢやとお言ひやるのであらう。

石田　如何にも其の通りで御座ります。彼れめに嚥かされた女性は、是れまで數知れぬうち、國ばかりは山三の方でも心を許した深い仲ぢやとの專らなる世評。して其通り心の露は仇なる人に吸取られ、只殘んの色香ばかりを愛でさせて、あなた樣は御滿足に思召しまするか。

淀君　いや、其の心の露までも妾が吸はうと思へば、國なども蚊弱き蝶の飛ばすも逐ふも身の勝手ぢやわいな。妾の威勢で何一つ心の儘にならぬ事はない。近き例は、秀次殿はじめ聚樂の誰れ彼れを。

大藏局　あ、これ。何と仰やりまする。

（大藏局が押止めたな、遙か末席に控へた腰元溜屋がジロりと見る。さうして其の關谷の方へ石田の眼が屹と注がれた。）

淀君　國が如何に美しうても、强い者は矢張妾ぢや。して山三は强い者に使らねば成らぬ身ぢやほどに、山三といふ天秤に妾と國とを掛けて見たら、妾の重いのは定ぢや。歌舞伎踊に事よせて、此處へ山三と國とを呼ばうだのも、在りやうは其の天秤の目方を量る爲ぢやわいの。

石田　さすれは、山三があなた樣に附くか、阿國に附くか、其れを試めさん爲めの今日の催しで御座りますな。

淀君　阿國嫉ひの妾が歌舞伎踊を呼ばうだ仔細は其の通りぢや。皆にも合點が行つたであらうの。

大藏局　しかし、山三殿が阿國を捨てゝあなた樣に附きましたら愈々大事で御座りまする。

淀君　大藏、心配しやんな。妾は山三といふ花を手折らうとは言はぬ。色香を愛づる其の花が何時でも手折れると思へば、其れで滿足ぢやわいな。

石田　如何さま、あなた樣の御心は拙者に能く分りました。斯ほどまで奧底深き淀樣なればこそ、太閤殿下にも並々ならぬ御覺え。

淀君　治部殿とした事が、妾を弄り物にして御くりやるな。したが、妾と國とが今此處で山三の秤に掛かれば、伏見の城でも、矢張妾と蒲生の後家とが上樣の秤に掛るのぢや。其の秤目も妾の方が重いと知れては居るが、でも、樣子が聞きたいわいの。治部どの。御事は是れから直ぐに伏見へいて、其の消息妾に知らしてたべ。

石田　仰せまでも御座りませぬが、拙者とて此處の秤り目が見たう御座りまする。

淀君　其の秤り目よりも、秤にかゝる國の顏が見たいので御ぢやらう。

石田　これは如何な事。

淀君　歌舞伎踊は御事の踊りやるまで往なさぬほどに、早う立つてたべ。

石田　然らば、後刻又御目にかゝりまする。大藏局。先刻

の事な。(と互に顏を見合せ)　さらばで御座る。

大藏局　これ修理と主馬。そち達は石田殿を御見送りしや。

(と眼くばせする。)

兄弟　は。

(淀君はじめ一同に會釋なして立上る。石田なはじめ三人は腰元關屋に心を置いて花道へ退出する。此の時丁度舞臺の方で鳴物の音が聞こえる。)

淀君　もう踊が始まりさうぢやが、山三は何として遲い事であらう。

(途端に花道から、侍が入つて來て。)

侍　名古屋山三、只今參上いたして御座ります。

(大藏局は淀君の御意を伺つて。)

大藏局　御方樣が御待兼ねぢやほどに、直ぐ此れへ御通しやれ。

(侍は再び出て行く。)

大藏局　腰元關屋。山三殿を出迎ひしや。

關屋　は。

(關屋が花道の際まで出迎ふと程もなく、天鵞絨のやうな五分月代に伊達な衣裳の好み、しづ／＼と花道から出て來たは此れなん日本一の風流男と唄はれた名古屋山三。その時廿歳の若者である。)

關屋　山三殿、あれへ御通り成されませ。

山三　御出迎ひ恐入つて御じやる。

(と山三は關屋の顏を見て驚く。關屋は俯向く。)

山三　然らば御免下され。(と何氣なき風にて御前へ通る)これはこれは、淀樣はじめ、方々には御出座に御座りまするな。

淀君　山三。いかう遲かつたのう。

山三　計らず遲參の段、平に御免下さりませ。

淀君　今日はそなたに見するものがある。待兼て居たわいの。

山三　某へ拜見仰付けられまするとは。

淀君　そなたの大好きなものぢや。それ、彼の庭へ舞臺をしつらへて、國が歌舞伎踊を見せるのぢやわいの。

山三　其の歌舞伎踊が某の大好きとは合點が參りませぬ。

淀君　いや、踊ではなうて、國が大好きぢやといふ事ぢやわいの。

山三　愈以て某には覺えが御座りませぬ。

淀君　皆見やれ、山三が彼のやうな眞面目くさつた顏をして。

和朔局　幾ら隱しても其の隱すより顯はるゝぢやわいな。

饗庭局　山三殿と國とが深い仲ぢやといふ事は御方樣も疾くに御承知。

玉の局　それを知らぬ顏して居やるのが憎らしう御座りま

す。
山三　これは近頃迷惑千萬な。成程世間では左様な噂も致すさうに御座りますが、某は一向存ぜぬこと。如何さま、友達の附合で、二三度ばかり四條河原の芝居へ參りましたのを、誰やらが尾に鰭をつけて、左様な風評をいたしたものと見えまする。
淀君　其れが定ぢやと御言ひやるな。
山三　定で御座りまするとも。先いつ頃より、あなた様へも御願ひいたして居りまする某の故主蒲生家の儀につきまして、此の頃は寢食さへ忘れたる有様、左様な淫らな事を致さう念も無ければ、暇とて御座りませぬ。
淀君　そなたが強つて左様に言ひやるものを、くどうは責めまい。したが、蒲生家といへば、愈々飛驒守の後室が會津からわせられて、今日伏見の城で上様に對面との事ぢや。
山三　某も其の儀を承はりまして、萬々一、上様が事を左右に託して御引留め遊ばされ、御部屋にも御取立て遊ばさるゝやうな儀が御座りましては、故飛驒守の恥辱、まつた蒲生一家の瑕瑾。さりとて、無下に其れを斷わつて上様の御怒りに觸れなば、會津百萬石の知行にも拘はる次第、と憚かりながら心痛いたして居りまする。
淀君　其うであらう。妾も今石田殿から始めて聞いたのぢやが、御對面ある上からは、人質といふて引き留めて御寢間の伽にしようと仰しやるは知れたこと。でも、妾が口を出しては嫉んで妨げするやうに他から思はれるが術なし、そなたには頼み甲斐のない者と思はれても、此ればかりは淀の勝手にならぬわいの。
山三　もう是非が御座りませぬ。然しながら、如何に恥辱とは申せ、操を破つて操を立つるの道理。其れで殿下の御心さへ御解け遊ばせば、蒲生の行末の爲め却つて仕合せかも知れませぬ。
淀君　其う諦めるより仕様はあるまいわいの。兎に角今度の事は妾の心に任せぬが、此の後とてそなたに頼まれた事は仇愚かにせぬつもりぢや。蒲生家の爲め、殊にそなたの行末につき、随分上様の前を取りなさうぞ。
山三　何分ともに宜しく御願ひ申しまする。
淀君　決して心置きなく思うたが宜い。
山三　あなた様に何の心を置きませうぞ。
淀君　心を置かぬが定なら、もつと近う寄りやいのう。
山三　でも、餘りに御側近く寄りましては恐多う御座りまする。
淀君　恐れ多いとは、これが妾に心を置いて居る證據ぢや。さ、ずつと、此方へ來やいのう。
山三　でも、狎れ／＼しう致しまして、御局たちの手前も

如何で御座ります。

淀君　斯れほど言うても他處々々しくしやるのは、局たちの前よりも、國の前を憚るのであらう。そなたが妾の側に近寄ると、舞臺から國の睨むのが怖いのであらう。

山三　又左樣な御無理ばかり。國とは何の譯もないものが、怖い事は御座りませぬ。

淀君　では、近う寄りや。さ、此處へ來や。

山三　然らば御免下さりませ。

淀君　其の挨拶がまだ心を置いて居やるのぢや。今日は無禮講ぢやほどに、誰にも遠慮は無いわいの。

（山三は淀君の側近く坐る。途端に簾を隔てた舞臺から小唄が聽こえる。）

唄〽吾が戀は月に叢雲、花に風とよ、細道の駒かけて
　　思ふぞ苦しき。

淀君　あの唄は誰の心であらうの。

山三　大かた某の心で御座りませう。

淀君　そなたが誰に戀をしやらうぞ。戀は女のするものぢやわいの。

唄〽山を越え、里を隔てゝ、人をも身をも忍ばれ申さん。

大藏局　あれ〳〵、彼の天冠をかぶつて腰に瓔珞を垂れたのが國で御座ります。

和期局　成程色が白うて頬がムッチリして、噂に聞いたより美しい女御ぢや御座りませぬか。

淀君　喧しい。そなた達には彼れが美女と見えるかや。

和期局　いや其れほど美女とも思ひませぬ。

淀君　でも、山三。そなたには美女に見えようの。

山三　如何さま、四條河原で見物した時は美人ぢやと思ひましたが、あなた樣の前へ出ましては、月夜に星の光が薄いのと同じで御座ります。

淀君　でも、星の光の方がそなたは可愛いかろ。

山三　いや、とても照らされるものならば、月の光が好もしう御座ります。

淀君　其れはほんにか。（と山三の側へ寄らうとして）あれ、其の星が此方を睨んだわいの。星は瞬くものと聞いたが、睨んだ星は始めてぢや。

大藏局　あれは踊の振で正面を向いたので御座ります。

淀君　其うでない。山三が妾に口を利いたからぢや。あれあれ、又星が睨んで居るわいの。一層の序でに此方を睨み通しにさしてくれうわいの。

（淀君、山三の側へ寄添ふ。）

唄〽中々に節とは思ひ候へど、夫れ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜なかの口ずさみとよ。曉つきかたに思ひこがれて吹く尺八は君にいつも添ふてふ（双調）別れて後は又逢ふしき（黄鐘）とよ。

淀君　あれ見やれ。國が此方を睨んで嫉ましさうな顏わいの。

大藏局　それは皆あなた樣の御氣の故で御座ります。

淀君　氣の故でも、妾は彼の嫉ましさうな顏が踊よりも面白うて成らぬ。

（淀君は又山三に寄添ふ。）

唄〽春雨の打ちしをれたるを見るにつけても、此の春ばかりにとよの。

（唄ふ半ばに、末座に控へた腰元關屋が不意に立ち上がつて、懷劍逆手に持つたまゝ、淀君眼がけて飛びかかる。大藏局をはじめ女房たちが立上がり淀君をかばふ。此の騷ぎで舞臺の唄はバッタリ切れて、けたゝましい足音がする。）

局たち　狼藉者ぢや、侍衆、出合ひめされ。

（局たちが聲々に叫ぶと、左右から最前の大野修理之助と主馬之助との兄弟が甲斐々々しい出立で驅込む。）

修理之助　腰元關屋と名乘つて淀樣を狙ふ汝こそ。

主馬之助　實は秀次公の御小姓不破伴作であらうがな。

（此の間に女房腰元たちは淀君を警護して奥へ入る。山三ひとり悠然として伴作を見詰めてゐる。）

伴作　如何にも、吾こそは故關白秀次公の身内にさる者ありと知られたる不破伴作なるわ。太閤殿下に秀次公を讒言せし淀の方を打取つて主君の怨みを晴らさん爲、去年高野山に於て切腹せしと世上の風聞を幸ひ、當城内へ入込み、今日の催しに紛れ、本望遂げんとせし甲斐もなく、淀の方を打損じたるか。無念至極。

修理之助　姿は女ながら、面體正しく伴作に相違なければ、非常を警護せよと石田殿の指圖により。

主馬之助　吾れ吾れ兄弟軍兵を以て四方を取圍んだれば、最早逃れぬ。覺悟いたせ。

伴作　此の上は死者狂ひ。片つ端から撫斬にせん。

（伴作は二人を相手に劇しく戰ひながら入る。山三立上つて後姿を見送り、冷やかなる笑を洩らす。）

第二場　同歌舞伎踊舞臺

此の奥殿に對つた庭先には今日の催しの爲めに舞臺がしつらへてある。舞臺では丁度阿國が藝のはずんだ最中、此の椿事が出來したので、皆が樂屋へ逃込んだが、怖い物見たさで、揚幕の內や臆病口から這出したり、顏だけを覗かしたりして、顫へながら騷ぎの樣子を見て居る道化役者や唄うたひや囃子方が幾人もある。

道化方　あれ／＼、わつけも無い女ひとりに切まくられて大の男が逃げるわ／＼。

女方　あれは女ぢや無うて男のやうぢや。

唄うたひ　では、丁度そなたのやうに女方でもあろかえ。

囃子方　あれ、侍が又切られたわ。サッと血が迸つた。

道化方　それ佛倒れに倒れたわ。

女方　如何さま、そなたが舞臺でする佛倒れよりも餘程上手ぢや。

唄うたひ　あれ／＼、大勢の侍が又押し寄せして來をつた。

囃子方　それ、血刀さげて此處へ駈けて來るやうぢや。

道化方　側杖くふな。逃げやれ／＼。

（皆が慌てゝ樂屋へ逃込む。すると、伴作は髮をおどろに振り亂して、顏や手足に數多の傷を受け、血みどれになつて、片手に血刀さげてよろめきながら舞臺を眼がけて逃げて來る。後からつけて來た軍兵が打つて掛る。其をあしらひながら舞臺の側へ來て、高欄に手をかけて飛上る。柱を後楯に取つて又切合ふ。其のうち、軍兵が次第次第に增すのを終に持餘つてしまふ。獨りになつて、氣が弛んでタジ／＼となる處へ、左右から修理之助と主馬之助とが再び現れる。後から先きの軍兵大勢が續く。伴作は其を見て屹となつて刀を杖に立上る。）

修理之助　死際きたなき不破伴作。

主馬之助　此上は首を渡すか、但しは繩にかゝるか。

兩人　覺悟なせ。

伴作　何を小癪な。いで、汝等も冥途の道連れ。

（又切合はうとする所へ。）

阿國　待つた、待つて下さりませ。

（と樂屋から、舞の衣裳のまゝで出雲の阿國が駈けて出て、伴作を自分の袖でかばふ。頭に黃金の天冠を戴き、腰には瓔珞を纏ふ。）

修理之助　やあ、そちは出雲の阿國ぢやな。

主馬之助　謀叛人をかばひ立てして跡で後悔するな。

阿國　かばひ立てしたら何で惡からう。此處は淀の方樣の御殿でもない、太閤樣の御城でもない、此の國が歌舞伎踊の舞臺ぢやわいな。四本柱は、多聞、地國、廣目、增長の四天を表はし、木戸の櫓は城に形どりて、五本の槍と陣太鼓とは軍の眞似事。私の爲めには此の舞臺が藝道

の城廓なりや、其の城廓に楯籠もつては天下も將軍も眼の中に無い。貴賤高下善惡邪正一切皆平等。何ぼ謀叛人ぢやとて、私の懐ろへ駈込んだら誰にも指をさゝす事ぢや御座んせぬ。それとも手出しがしたいなら、此の國から先へ何とでも成されませいな。

修理之助　河原者の分際で無禮至極。者共。かゝれ。

（再び軍兵共が切つてかゝらうとする。）

利家　方々、早まられな。前田利家、只今それへ參るで御座らう。

（中納言前田利家公威儀を正して此處へ出で來る。大野兄弟はじめ一同恐入つて會釋をする。）

利家　仔細はあれにて承はつた。如何さま舞臺を己が城廓と心得たる國の心がけは天晴ぢや。斯ほどまで藝道の規模を重んじてこそ天下に一人の女とも呼ばれるのぢや。國。此の利家は、武士にも稀なるそちが心底にめでて、其れなる伴作はそちの差配に任するぞ。

阿國　御情ぶかき御詞、有難う存じまする。其の御情に甘えまして、改めて國からお願ひが御座ります。

利家　願ひとは何ぢや。

阿國　御覽の通りの深手なれば、最早太刀打も叶ひますまい。さりとて、敵に首を掻かれたり、生捕となるのも無念に御座りませうほどに、此の上は只切腹のほどを御許し下されませ。

利家　むゝ、許す。

阿國　伴作殿、今のを御聞きなされたか。

伴作　お國どの。御身の取なしは忝ない。見事切腹して秀次公の御跡を追ひ參らせう。したが、此の御殿の中に、某が介錯を頼む人たつた一人御座る。

利家　誰ぢや。名を申せ。

伴作　蒲生家の浪人名古屋山三に介錯がして貰ひたい。

利家　むゝ、其の山三とやらを呼べ。

（一人の軍兵が立つて行く。）

伴作　さらば切腹。關白秀次公の御小姓不破伴作、生年十九歳の最期、武士の手本に皆々見て御きやれ。

（伴作腹へ刀を突込む。此處へ山三が駈付ける。）

利家　蒲生家の浪人名古屋山三とはそちか。

山三　御意の通りに御座ります。

利家　これなる伴作の望みぢや、其の方介錯して取らせ。

山三　畏まつて御座ります。

（山三は正面の階段を踏んで舞臺へ上り、阿國に目禮して伴作の側に寄る。）

山三　身共は名古屋山三ぢや。望み通りそちの介錯致すぞよ。

伴作　むゝ、山三か。忝ない。

山三　伴作。能う御聞きやれ。そちと吾れとは天下の美少年と言はれた二人。そのふたり共、去年は主君を喪ひ、今亦そちが吾れの手にかゝるとは離れがたなき宿世の縁ぢやのう。

伴作　最前、そちに顔を見られた時、スワ身の一大事と思うたが、能うこそ知らぬ振してくれた。此の伴作、今はの際に禮を言ふぞよ。

山三　其の禮には及ばぬ。そちといふ事は身共が言はいでも、あの才覺者の石田がずんと見通しぢや。

伴作　さ、其の石田めが氣取つたによつて、事を急いで此の不覺を取つたのぢや。

阿國　不覺は取らしやんしても侍らしう死なしやるのぢや。

山三　伴作、そちは滿足であらう。

（伴作莞爾とうなづく。）

山三　吾れは不覺を取らぬ代り、何時までも侍らしうならう生きるのぢや。

（と阿國の顔を見る。）

伴作　御身は何といふぞ、もう耳が聽こえぬ、介錯頼む。

（山三は肩衣ぬいで後へ立ち、刀を拔く。阿國は側に合掌する。）

第三場　元の大廣間

大廣間には淀君が再び出座あつて、今しも伏見から歸つて來た石田に對面あらせられる。最前の騷ぎから神經過敏にならせられた樣子。側には大藏局をはじめ女房腰元が附添うて居る。

石田　さりながら、淀樣の御身の上に何の變りもなうて重疊に存じまする。

淀君　其れも御事と大藏とが計らひゆゑぢや。

大藏局　あの關屋が石田殿の御眼に留まらずば、如何な大事にならうも知れませぬ。ほんに危い事で御座りました。

石田　然し、此の後とても決して御油斷はなりませぬ。あなた樣や拙者に怨を懷いた者が無いでは御座りませぬゆゑ。

淀君　治部殿。そのやうな事いうて妾を驚かして御くりやるな。今の騷ぎさへ膽を冷したわいな。

石田　はゝ、淀樣の日ごろにも似合はさせ給はぬ臆病さ。

淀君　でも、妾は臆病で御ぢやるわいの。臆病なればこそ、蒲生の後家に上樣を寢取られはせまいかと、御事の御歸りやるを待兼て居ましたのぢや。

石田　最前の御詞にも似合はぬ事。したが、上樣今日の御對面は思ひのほかの首尾で御座りました。

淀君　思ひのほかとは。
石田　飛驒守の後室は剃髪いたいて居りました。
淀君　何、尼になつたとや。
石田　如何にも、緑の髪を剃りこぼちて、白無垢の上に黒き法衣を着けて居りました。これは上様の御難題を免れんとて思ひ設けた計り事に違ひは御座りませぬ。上様も其れを御覽遊ばして意外の御様子で御座りましたが、其の心底ならば吾等も氣遣ふ事は無い、早々國へ歸りやれとの御仰せ。
淀君　では、今日の對面は何事なう濟んだので御ぢやるな。
石田　さ、後室が下られてから、其れとなく上様の御腹立は一方なりませぬ。蒲生家の世繼ぎは幼少なれば、會津といふ關東の要害を預け置く事不安心ゆゑ、其の百萬石を公儀へ預かり、野州宇都宮へ十八萬石にて處替へを仰付けよとの御詞で御座ります。
淀君　では、後室が手に入らぬ腹癒せに、知行を削つて處替へを遊ばす御所存とな。
石田　まだ表立ちての御沙汰は出でませねど、あらまし其の通りに御座ります。
淀君　能う知らせてたもつた、妾が其の沙汰は屹度止めて見せよう。
石田　飛驒守が跡目をさほどおかばひ遊ばすは、山三からの願ひゆゑで御座りませう。
淀君　それのみでは無い。後室が尼となりやつたしをらしさに、妾は是れから蒲生家を贔屓にするのぢやわいな。
石田　如何さま、伏見での秤目は、あなた様の御相手が尼になつたゆゑ、其れきりになりましたが、して此方様の秤目は何となされました。
淀君　最前の騷ぎでまだ何とも能うせぬが、追つけ國が此處へ參る筈ぢやほどに、是れから秤にかけて見ようわいの。
（腰元が入つて來る。）
腰元　國は御次ぎまで參つて居りまする。
淀君　これへ通しやれ。
（程なく腰元に案内されて阿國が入つて來る。最前の舞臺姿とは變つて是れは一段とあでやかな當世風。末座に坐つて平伏する。）
淀君　今日は大儀であつたのう。
阿國　拙い業くれを御眼にかけて恐れ入りまする。其れに、折角の御催しも濟まぬうち、只今の變事で殘念に存じます。
淀君　いや、あれだけでも面白う見物したわいの。褒美としてそなたに盃やらう。
（腰元が銚子盃を持運ぶ。阿國は盃を受けて飲む。）

淀君　そもじは名古屋山三といかう深い仲ぢやとの噂ぢやが、好い男を見付けて仕合せぢやの。

（淀君試すやうにいふ。）

阿國　えゝ、何の其のやうな事が御座りませう。ほんに世間の噂ほど當てにならぬものは御座りませぬ。

淀君　これ、隱しやんな、最前そもじが舞臺から此方を見やつた眼が口を利くわいの。そもじぢやとて生の姫御前ぢやあるまいし、山三との仲は是れ〳〵ぢやと、妾に打明けても宜さゝうなものぢや。

阿國　でも、其れを打明けたら、其處らの御方に御氣もじで御座ります。

（阿國當付けていふ。）

淀君　はて、由ありさうな詞ぢやの。此處に居る者は妾と妾の女房たちばかりぢや。其れに何の遠慮が入らうぞ。

阿國　でも、遠慮いたしまする。

淀君　そもじはいかう口の堅い女御ぢや。では、妾が誓文しよう。そもじが山三と深い仲ぢやといふ事を打明けたら、今日の褒美に山三を晴の夫に取持たう。

阿國　其れはまあ眞實で御座りますか。

淀君　妾が何で詐を言はうぞ。淀の川瀨の水車が逆に廻る法もあれ、妾の誓文に變りはない。屹度夫婦にして遣るから、山三と深い仲ぢやと言うたがよい。

阿國　それならば申しまする。眞こと山三樣と私とは二世かけた深い仲で御座ります。私が山三樣を思うて居れば、山三樣も私を思うてゞ御座りますわいな。

淀君　むゝ、よう言うた。屹度さうぢやな。

阿國　あいなあ。今日の踊も、あなた樣の御側に山三樣の姿が見えたので、いとしい彼の人の前ぢやと思うたら、斯う氣がいそ〳〵として、常より一層藝がはずみましたわいなあ。

（と見せつけがましくいふ。）

石田　淀樣。こりや些と秤目が違ひさうで御座りますな。

大藏局　國とした事が、御方樣の前で餘りな物のいひやう。

阿國　でも、淀樣が何も彼も打明けいと仰やりますもの。

淀君　國がそれほど思ふ男ぢやもの、誓文通り山三と添はして遣らう。

阿國　忝う御座ります。

淀君　そもじは山三と添ふのが其れほど嬉しいか。

阿國　嬉しい段では御座りませぬ。

淀君　でも、妾が何ぼ添はせたうても、山三が嫌ぢやというたら何としやる。

阿國　山三樣が何の嫌ぢやと言はしやりませう。

淀君　深い仲なら其うありさうなこと。さらば、妾が前で山三と夫婦の盃させよう。山三を呼うで來やれ。

（腰元が立つて行く。つゞいて山三が入つて來る。）

淀君　山三。そなたは日本一の嘘つきぢやの。國の口から何事も聞いたぞよ。そなたと國と深い仲ぢやとの事ゆゑ、妾が取持つて此の場で夫婦の盃さすのぢや。其の盃を山三に取らせい。

山三　これは近頃迷惑な儀で御座ります。某と國とは何でも御座りませぬ。

阿國　山三樣。そりや詞が違ひませう。

山三　詞が何で違ふ。そなたと身共とは他人ぢや。それに、深い仲ぢやなぞと能くも淀樣の前でいうたな。折角の仰せで御座りまするが、盃などゝは思ひも寄りませぬ。

阿國　山三樣。眞實お前は其のやうな氣かいなあ。

山三　此の山三に對つて狎れ〳〵しい口の利きやう止しにしやれ。

（淀君小氣味よげに。）

淀君　國、そもじこそ妾に嘘を言やつたの。山三は他人ぢやと言うて居るわいの。あ、其うであらう。そもじのやうな女御に戀する山三では無い。のう、山三。そなたの肩には蒲生家といふ重い荷が掛かつて居る。そなたとて武士に歸つて立身せにや成るまい。それには皆此の淀といふ後楯で無うては叶はぬ。如何に天下一人の女御ぢやとて、國。そもじが念佛踊の御利生で山三を知行取りにする事は出來ぬ。まして蒲生家といふ百萬石の跡目をそもじのやうな賤い者が何とし得よう。すりや、山三は妾に付かうとも、そもじの物には能う成るまい。

（阿國口惜しさに忍泣する。山三ずつと阿國の方に眼を注ぐ。）

淀君　そもじは泣いて居やるの。

阿國　いや、泣いては居りませぬ。

淀君　でも、皆見やいの。國が彼のやうに眼を眞つ赤にして。山三がそもじの物にならいで口惜いか。山三。國を慰めてやりやいのう。いや、其れも他人なら是非に及ばぬ。

石田　如何さま、此れは淀樣の秤目が重いと見えまするな

大藏局　あつたら御方樣が夫婦の固めをさせうと思召した其の盃も無用で御座りました。

淀君　其うぢやの。治部殿が退屈でわせられるゆゑ、盃を彼方へ廻しや。

腰元　は。

（腰元が山三の前にある盃を石田の方へ運ばうとする。阿國泣伏す。山三見兼ねて。）

山三　いや、國からの其の盃、某が御受け致す。

阿國　え。

（と國は驚く。）

淀君　國の盃を受けるとは。夫婦の固めをしやるのか。

山三　如何にも。淀様の御取持により、名古屋山三、改めて國と夫婦の固めを致しまする。

阿國　其れは本間で御座んすか。

山三　はて、可愛いそなたに何で嘘を吐かう。最前他人ぢやというたは詐ぢや。

阿國　其れでは眞實私と夫婦になつて。

山三　くどい事の。さ、固めの盃。なみ〳〵と注いでもらひませう。

阿國　あゝ、嬉う御座んす。

（山三盃を口につける。）

淀君　山三。そなたは本性で其のやうな事いやるのかや。

山三　某本性に御座ります。

淀君　して、此の淀が不興ぢやというたらば。

山三　でも、致方が御座りませぬ。

淀君　其れでは、妾が勘氣に觸れても構はぬと御いやるのぢやな。そなたは豫ね〴〵此の淀に願うた事を忘れやつたか。武士に歸つて出世がしたいゆゑ、上様に宜う吹聽してくれと御言ひやつたであらう。

山三　如何にも左様に申しました。

淀君　上様の御不興受けた蒲生家ゆゑ、其の跡目が心元ない程に、此れも取りなしてくれと御言ひやつたでは無いか。

山三　如何にも左様に申しました。

淀君　其の蒲生家は、飛騨守の後家が今日伏見の對面に尼姿で居たとて、上様以ての外の御憤り、會津百萬石を公儀へ預りて、野州宇都宮へ只つた十八萬石で處替への、內內御沙汰があつたといの。上様に縋つて其の御沙汰を止めるのは、妾より他に誰がしようぞ。でも、そなたは妾が不興しても、構はぬと御言ひやるか。

山三　何とも是非に及びませぬ。

淀君　そなたは氏鄕の頓死が訝かしい、相手を探つて敵が打ちたいと御言ひやつた。妾の勘氣に觸れたら、其の望みは皆水の泡であらうぞや。

山三　某の望みは始めから水の泡で御座ります。

淀君　何と言やる。

山三　淀様。眞こと山三はとうの昔武士を止めました。

淀君　えゝ。

山三　武士を止めれば忠義も手柄も御座りませぬ。あゝ、思ひ出せば、某十五歲の冬、奧州名主の城の合戰に、一番槍の功名を揚げてより此のかた、槍師々々は多けれど、名古屋山三は一の槍と世上に唄はれ、只管武士道を磨いたも今は昔の夢物語。つく〴〵思へば武士ほど詰まらぬものは御座りませぬ。近き例は先君氏鄕公、十四歲の初

陣より、信長公太閤殿下御二代に亙つて戰場の功名數知れずといひながら、心みじかき山風に去年俄に散らせたまふ。（と石田に眼を注ぐ）秀次公とて先づ其の如く、罪なき罪に高野の露と消えさせたまひ、剰へ頑是もなき若君姫君、三十餘人の上臈たちまで三條河原にて打首とならせ給ふ慘たらしさ。不破伴作が太閤殿下に繋がる淀様に遺恨を含み、最前の振舞もあながち故なき亂暴狼藉とは言はれますまい。（と淀君と三成とをヂロリと見る）しかし、其の伴作もあつたら武士道だてしたゆゑ、某が刃に掛つて無慘の最期を致しました。其れにつけても、武士道サラリと止めて、浮世は兎角茶にして暮す事と覺悟いたしました。

淀君　では、知行取りになりたう無いと御言ひやるか。

山三　知行取りは愚か、天下將軍になつたとて、榮華は浮べる雲。恐れながらあなた様とて、今こそ太閤殿下の思ひ者として天が下に時めきたまふとも、漁陽の貝鐘に驪山宮の夢驚かせし楊貴妃の例も御座ります。

石田　や、楊貴妃の例とは、淀様に對して不祥の一言。

山三　さ、石田殿、　も其の通り。佐和山城に草生えて、山河空しき時節の到來せんも圖られず。

石田　やあ、豐臣の天下を調伏の詞の端々。此のまゝ容赦は出來ぬ。

淀君　治部殿。御待ちやれ。して、山三。そなたは氏郷が横死と決しても敵打つ所存は無いのぢやな。

山三　如何にも、武士を捨てた某の眼から見れば、敵打などゝは淺ましや、此世からなる修羅地獄。そは最前の伴作が好い手本で御座ります。

淀君　何と言やる。

山三　さ、あなた様を失ひまゐらせたとて、秀次公が生歸らせらるゝものでもなし、其れに、あなた様は何事なうて、伴作だけが自滅をいたしました。頓と埋まらぬ事では御座りませぬか。

石田　山三。そちは命が惜いと見えるの。

山三　人は愚か、鳥畜生まで、命を惜むが自からなる生類の情でありながら、死を見ること歸る如しなどゝ、それこそ武士道の大嘘。のう。國。最前もいうた通り、身共は侍らしうなう何時までも生きるのぢや。

阿國　私も一所に生きまする。

石田　はゝ、卑怯な奴の。しかし、世上で風聞いたす通り、飛騨守には上様が毒を御かひなされた、と身共がいうたら何と致す

山三　其の敵なら疾うに取つて居ります。

淀君　何ぢや、敵を取つたとは。

山三　淀様、あなた様は某と寢屋の契りこそかはし給はね

ど、此の山三を戀して入らせられませうがな。

淀君　え、うとましや、妾がそなたに戀したとや。花の色香をめづるが戀ならば、大かた其れも戀といふのであらうわいの。

山三　いや、花を見るのに同じ花見る人を嫉む例の御座りませうか。今日あなた樣が此れなる國への御仕向けは、同じ花見る人を御嫉み遊ばす御心。其の嫉み心は即ち某に戀をなされた證據で御座ります。さ、太閤殿下の御側女たるあなた樣に戀せられたは、殿下の御命を取らぬ代りに、殿下のいとしい物を拙者が取つたので御座ります。最前伴作はあなた樣の命を果して敵を取らうと致しましたが、此の山三は其うでない。あなた樣の御心を奪うて敵を取つたので御座ります。石田殿。其の方が命に危げのないだけ、伴作よりは何と智慧で御座りませうがな。

石田　さすれば、そちは豫てより上樣に遺恨を含んで居ると申すか。

山三　いやさ、御氣にさへられますな。もし上樣が左樣であつたらばと申す言はゞ物の譬へ。武士道やめた某に敵を取るの取らぬのと御尋ねなされますは、近ごろ野暮な沙汰かと存じます。

淀君　其れほど武士道やめたといふそなたが、何として、出世がしたいの、蒲生家の跡目が心配ぢやのと、妾に頼み事をしやつたのぢや。

山三　其れはあなた樣へ近寄らうばつかりの申譯で御座ります。あなた樣といふ御方は、己より弱い者でなければ打解けなされませぬ。其れゆゑ、あなた樣よりも弱い者に見せかけやう爲、左樣な心にもない事を申しました。して、あなた樣は其れを眞に受けて、自らは山三よりは強いものぢや、自分より弱き此の山三は乾度吾が物ぢやと思召したので御座ります。

淀君　でも、強い者は矢張妾ぢや。

山三　いや、あなた樣は餘に御身分が御高う御座ります。して榮華にあこがれて入らせらるゝ。其れがあなた樣の大きな弱みで御座ります。此の山三は、武士を捨て、忠義を捨て、世の名聞を捨てゝ、何ひとつ屈托もせねば、其の上あなた樣を戀に落したゞけ此方の强みで御座ります。

淀君　聞くも忌はしい、又戀と言やるか。

山三　でも戀をなされたから是非が御座りませぬ。大かた世の戀といふものは、男女二人で酒を飲合ふやうなもの。一人が醉へば一人が屹度醒めて居りまする。醉うた者は前後不覺で御座りますが、醒めた者は何も彼も能う知つて、相手の狂ふを見て居るのが面白いもので御座ります。其の醉うたあなた樣を、もつと醒まさずに置かうと思う

て、國は他人ぢやと申しました。さりながら、いとしい國が其れを聞いて、無念さうな顔のいぢらしさに、つい心の底を言うてしまひました。あなた樣の御爲には、一日も早う其の醉の醒めたのが御仕合せかも知れませぬ。

阿國　山三樣、お前は其れで、あの盃を受けて下されましたか、嬉う御座ります。

山三　あの時、そなたは嘸辛かつたであらうの。

阿國　あいなあ。しかし私も淀樣と同じやうに矢張醉うて居るのを、お前はシラフで面白がつて居るのぢや御座んすまいか。

山三　身共は左樣思はぬ。そなたは淀樣より若い。して淀樣の時めきたまふは太閤殿下といふ後楯ゆゑぢやが、そなたの時めくはそなた自らの藝ぢや。ぢやによつて身共はそなたに惚れたわ。吾等は二人とも醉うて居るのぢや。其の醉うたまぎれに、身共も今日から歌舞伎ものとなつて、そなたと仲よう暮らさう。

阿國　あいなあ。もし、淀の方樣。眞こと此の國は、是まであなた樣を羨ましうも思ひましたが、今日といふ今日、私があなた樣より仕合者ぢやといふことを覺りました。

淀君　山三と添ふのが其れほど仕合せか。

阿國　いや添はいでも、あなた樣より私の方がいとしがられて居ると思へばで御座ります。

（途端に、簾の外の縁先から若君が兜人形をさげながら駈けて入らせられる。）

若君　母上。菖蒲兜がこはれたわいの。

淀君　おゝ、若。よう御ぢやつた。（抱占めて）でも、矢張妾の方が仕合せぢや。此の若の母ぢやもの。天下の母ぢやもの。

石田　如何さま、其の稱目なら國は叶ひませぬ。

阿國　ほんに、年ふる花のあなた樣は母御といふ事を名譽になされませ。また若竹の此の國は人の妻ぢやといふ事を自慢に致しまする。

大藏局　でも、山三の妻が何の自慢にならうぞ。

淀君　其うぢや、妾には太閤殿下といふ立派な夫がある。

山三　さ、其れだに忘れたまはずば、此の後も餘の人と戀をさせたまふな。

淀君　妾は何時も戀はせぬ。妾の望みは榮華ばかりぢや。

（此間に淀君の膝から放れて簾の外を眺めて居らせられた若君は空を指さして）

若君　母上、兜の代りに、あれ、あの御月樣が玩具にほしい。

淀君　おゝ、お月樣が玩具にとは。若。能う言つた。

石田　いかさま、殿下の御胤は爭はれませぬ。

山三　はゝゝ、月が玩具とな。人間の望みは大かた其のや

うなものぢや。

阿國　私等は其んな望みをやめて。

山三　國。そなたと一所に退出しよう。

（立上つて、阿國の手を執る。阿國ニツコリする。山三は淀君と石田の方を振向いて冷かに笑ふ。）

――幕――

高安月郊篇

平賀源內（二幕四場）

人物

平賀源內國倫　浪人
平賀萬五郎　源內弟
井口小齋　林家學頭
關內玄庵　醫學館長
古河千種　和學者
市中菴砂人　俳諧師
周　念　僧
篠崎與一郎　與力
大井重右衞門　豪商
惣兵衞　藥種屋
銀兵衞　御用達
八五郎　大工
おつる
芳澤國石　役者
ともよ　力婦
鐵之進　劍客
金六　興行師
其外、木戸番、百姓、町娘、町人、捕手。

時代

安永

第一段

第一　湯島物產會

上手大きな床、世界地圖を掛け、横棚、襖、正面より下手へ折廻して緣、向う下町の遠景、毛氈を布き、都府樓の瓦、鍬先、扶桑木、孟宗竹、朝鮮人參、菩提樹の實、麝香鼠、龍の玉、シャボン、エレキテル（長さ三尺横一尺深さ八寸、上に轆轤二本つけ、線を卷き、中袋へ通した箱）火浣布（石綿を織り八方に銅をつけた物）など各札をつけ三寶臺に載せて並べる。林家學頭井口小齋、醫學館長、與醫師關內玄庵、和學者古賀千種、俳諧師市中菴砂人、僧周念、與力篠崎與一郎、豪商大井重右衞門、藥種屋惣兵衞出る、見てまはる。

砂人　イヤこれは珍物揃ひだ。

千種　先づ都府樓の瓦とは結構ですな。

小齋　これは先年九州を漫遊の途中、大宰府で手に入れま

した。斷片はいくらもありますが、これ程大きなのは容易にえられません。

玄庵　何様相丞が見られたものでせうな。

周念　此鍬先とは何ですな。

砂人　それは私が先年蝦夷へ參りました時、去舊家で貰ひました、彼地でも殊に珍重する物で、此先に神靈がございます。病氣又は災難などの時、これに祈願を致しますと、忽ち效驗が現はれるといふ事で。

千種　イヤそれは一體何ですな。

砂人　義經の兜の鍬形です。

皆　ヘーイ。（ト敬服する）

與一郎　これはまた古い木ですな。

千種　これが卽ち扶桑木で、神代では筑紫から、奧州まで陰にしたと、古事記にありますが、今でも其根は伊豫郡、喜多郡の二郡にはびこつてゐる相です。

小齋　何様山海經、淮南子にも出て、それから我國の名にもなつたのぢやが、ハハアこれが扶桑木ですか。

與一郎　成程これは不思議ですね。

重右衛門　不思議と云や、龍の玉とは不思議ですね。

惣兵衛　ヘイ龍といふ物は本當にある物でございますかねえ。

玄庵　ある所か、これを御覽なさい。これは薩州から到來しましたが、此通り少し暖味があります。これは龍といふ物は寒さを恐れるものですから、始終此玉を掌中に握つてゐるので。

重右衛門｝
惣兵衛｝ヘーイ。

千種　イヤまた菩提樹の實とは珍しい。

周念　これは殊に不思議なもので、一體菩提樹といふ物は日本で筑前の香椎の宮、京の泉涌寺にありますが、これはそれ等とちがひ、此間信州善光寺の如來を出開帳の節、或日の事でございました、空には一點の雲も無い極上天氣でございましたが、俄に光がさしたと思ふと、ばらばらばらと降りましてな――

重右衛門　エ、天から降りましたので？

砂人　それは不思議の不思議ですね。

玄庵　井口さんの孟宗竹は始て拜見致します。

小齋　私は怪力亂神を好まんから、それも名は通つても外では見られぬ薩州の孟宗竹ぢや。

砂人　ヘイこれか冬笋(たけのこ)を出すのですかね。

小齋　それで彼孝子の名をつけたので、元唐土から渡つて來ました。

與一郎　これは一つ江戸へも植付けて、世の戒にしたいものですね。

玄庵　此朝鮮人參もどうかして植付けたいものぢやて。
小齋　兎角氣候がちがふと育たぬもので、此麝香鼠も死にましたな。
周念　しかしまだ香がします、これは變な香だ、どうも伽羅には及ばんな。
惣兵衞　これは如何です、此度やう〳〵の事で長崎から手に入れました極新しい舶來品で。（シャボンを見せる）
小齋　これは何ぢやな。
玄庵　一向香も無い樣ぢや。
惣兵衞　これは香ぢやございません、手に塗りますと、玉の樣に綺麗になりますので。
千種　はてな、そして名は何といひますな。
惣兵衞　シャボンと申します。
玄庵　シャボン？
皆　ハア――（不思議がる）
周念　イヤ珍しい物があるものぢやな。
小齋　（エレキテルの箱を見て）　こりや何ぢやな。
惣兵衞　それは平賀先生の御出品で。
小齋　（札を見て）エレキテル？
玄庵　何とも解せぬものぢやな。
小齋　また例の人をどしかかな。
與一郎　御主人はどうなされたな。

惣兵衞　今下に見えましたが――
（平賀源內、三十八、總髮、細い髷、羽織袴で出る。）
源內　これはどなたも好くこそ御來會で。
與一郎　大層御盛會ですな。
砂人　殊に珍品山の如しで、好い後學になりました。
源內　いや手前は未好く拜見しません。（ずつと見渡し）何都府樓の瓦、扶桑木、鍬先とは何ですな。
惣兵衞　義經の鍬形でございますと！
源內　義經の？　（能く見て）　いや、こりや昔の耕作の道具だな。
砂人　いや、そんな事はありません、確に義經の鍬形と、彼地ではこれを持ち傳へた者を頭として居りますよ。
源內　それは彼方では忠臣藏の芝居にも義經を出しますからな。
砂人　エ……（詰まる）
惣兵衞　しかし此菩提樹の實は有難い物でございますね。
源內　菩提樹？　（取上げて又冷笑し）　いやこりや水木の實を烏が食ひ、椋丈糞に交つたのだ。
周念　いや、けしからん、菩提樹を烏の糞とは！　（怒る）
源內　ぢや嘗めて御覽なさい。（周念閉口する）
惣兵衞　けど此朝鮮人參は大した物でございますね。
源內　こりや朝鮮人參ぢやない、廣東人參だな。

玄庵　いや確に朝鮮人參と唐人から直に求めましたぞ。
源内　それは少し目のある通辭をお使ひになると好かつた！
玄庵　………
與一郎　此孟宗竹こそ正眞正銘の珍物ですね。
源内　今の世に孟宗竹が珍しいとは、不孝者ばかりになつたのか。（小齋不快な顔をする）鼠の死骸に躓ギヤマン、手が汚れるからシヤボンかな。
皆　エ？
源内　ワハヽヽヽヽヽヽ。（一座しらける）イヤこれは失禮、誠に珍品海の如しだ。
玄庵　では主品のエレキテルとは何ですな。
源内　それは人間の體から火を取る道具です。
皆　エ？
小齋　どうしてこれから取れますな。
源内　其鏈の先を人に持たし、此箱の轆轤をまはすと、其氣が傳うて體に入ります。
小齋　此鏈で？（信ぜぬ體）
源内　御解得が無くば、一寸持つて御覽なさい。
小齋　いやそれにも及びません。
源内　いやお疑ひの樣子だから、是非お目にかけませう。
玄庵　それでは手前が持ちませう。（鏈を持つ）唯これでよろしいな。
源内　左樣。（箱の轆轤をまはす）そして其先を體へおつけなさい、如何ですな。
玄庵　（身に感じるのをわざと制して）いや何ともありませんな……
源内　（それと察して段々烈しくし）まだお感じになりませんか。
玄庵　……未何ともありません……
源内　餘り強くかけますと、お命にかゝはりますが、それでもまだこたへませんかな。
玄庵　（驚いて）イヤ、こたへました……こたへました……少し、大分こたへました……
周念　こりや不思議な幻術だな。（皆氣味の惡い顏をする）
源内　いや幻術ではありません、オランダ人が稻妻の理から考へ、三代かゝつて成就したもので、それを不思議と思はれるなら、顯微鏡でも御覽なさい。菩提樹か。烏の糞か、感涙を流すまでもありません、薩摩あたりの頑硯きより、あの大空を望遠鏡で御覽なさると、銀河も星の集り、今に龍より昇れませうよ。
玄庵　また例の大言ぢやな。
源内　いや大言ではありません、本當に昇つて見やうと、色々工夫をして居るので。

砂人　本當に昇る？　イヤそれが出來たら大當りだな。
源内　今に仕上げてお目にかけますから、まゝ出來てからお暇下さい。
與一郎　此火浣布といふのは何にするものですな。
源内　それは火を防ぐ爲に造りました。
重右衞門　火を防ぐ？　どうしてこれで防がれますね。
源内　これを風下へ張つて置いたら、火に燒ける憂は無いので。
惣兵衞　へーイ、それは重寶な物でございますね。
千種　一體何でございますね。
源内　昔蜀の張賓といふ男は火鼠の皮を集めて布としたといふ事だが、日本には火鼠はありませんから、石綿を求めて造りました、これを大きな袋に造り、家でも倉でもかぶせたら、類燒の氣づかひはありません。
與一郎　成程な。
源内　先づ御藏へ掛る樣近日願つて出る積りで。
玄庵　いや今太平の世の中に非常の用意は無用ではありませんか。
源内　いや太平とは何が太平、戰が無くば火事があります。江戸は殊に風が烈しく、動もすれば大火になり、家倉始め人の氣まで落付の無い一時暮し、こりや先づ火を防ぐ用意をせずば、大きな事は出來ませんぞ。
小齋　いや左樣な用意をして置いては、人の氣は却つて緩み、非常の役には立たぬものぢや。
源内　いや用意をせずとも給緩み、近年の此惰弱、大名から士、町人、色と欲の泥水に、骨の拔けたぬらくらばかり、一技量ある者共もぬらくらの玩弄物になり、口をぬらす世の中だ。萬一異國から攻めて來るか、または内から謀叛人が起つたら、八百八町も一夜の煙、こんな寶も、どんな瓦も、灰になつてしまひますぞ。
皆　エ？
源内　依つて先づ火を防ぐ用意をして、次に心の火を洩らす工夫をせねばなりませんな。
小齋　（獨言の樣に）其心の火はどこから立つかな。
玄庵　（小齋に）イヤ兎角正雪、大貳の類は絶えぬものですな。
源内　エ？
小齋　イヤこりや長座しました。
玄庵　手前も御免。
千種　我々もお暇しませう。
源内　こりや一時にお開きかな。
惣兵衞　それでは御出品は後程お屆け致しませう。
周念　御免。
（來客皆一禮する、源内默禮、皆入る。）

與一郎 （殘つて） 平賀さん、相變らず口が惡いな。

源內 ハヽ、でも餘り馬鹿げた物ばかりだから、つい默つてゐられなかつたので。

與一郎 でも世の中といふものは、あれで兎に角通るのだから、餘り眞を云過ぎると却つて憎を受けますぞ。

源內 それは御尤、兎角嘘の上手な者が甘い事をする世の中だ。手前も嘘をつくともてはやされる。眞をいふと、山師と云はれる。これではもつと／＼嘘をつく修業をしませうかな。

與一郎 いやさう云つたものでは無い、嘘三分、眞七分といふ所が世を渡るには丁度好いな。

源內 いや眞十分か嘘十分、それで嘘も眞になります。

與一郎 其代りに眞も嘘になりやしませんかね。

源內 ハヽ、詰る所は分らぬものさね。お分つてゐるのは此火浣布だ、これは奉行所へ願つて出ようと思ひますが、お取次に下さらんか。

與一郎 承知しました。

源內 こればかりは眞僞は明白だから、よも聞屆けられぬといふ事はありますまい。

與一郎 いや、それは何とも受合はれぬが、まあ十分お口添へして見ませう。

源內 受合はれぬとは、あなたからしてまだ御呑込みなさらんな。

與一郎 手前は確に感服したが、そこがそれ、眞ばかりでは通らぬ世の中だからな。

源內 でもこれは理窟の入らぬ實證の品ではありませんか。

與一郎 實證があれば、それ丈に尚如何でせうな。

源內 エ？

與一郎 イヤ、まあ何とかお取計ひ致しませう。（半鐘の音） ヤ復火事だな。（立上つて緣へ出る）

（源內ずつと見まはし冷笑する——道具まはる。）

第二　天神下お鶴住家

上手四疊半の小座敷、小い床に浮世繪の軸をかけ、壁に三味線、續いて小間、正面暖簾口、前折廻して緣、下手格子戸。上手竹垣、小い植木棚に植木鉢少し、手水鉢、外舟板塀、總て意氣な好み。

お鶴、二十七、櫛卷、路考茶の着物に更紗の帶を胸高しめ、長火鉢に當つて立膝ゝ、淨瑠璃本を見てゐる。

弟芳澤國石、十八、野郎頭、紫帽子、派手な振袖、女形の裝で傘さして出る。

國石 姉さん、今晩は。

つる オヤ、國ちやん、もう來たの？

國石　いえ未だですがね、私の出場が濟んだから。
つる　お前の役は何だつけね。
國石　矢口渡の臺です。
つる　さう、好い役がついたのね。
國石　エ、お蔭で儲かります。
つる　また親方のおふねは好いだらうね。
國石　好うござんすとも、底に色氣があつて上邊は力が薄い樣で、そして後でぐつと出るんですもの。
つる　丁度今木を見てゐたんだよ、此仕舞の方の、
「娘は苦しき身をあせり、村々より大勢にて取卷かれたまひなば、何とてお命あるべきと、天にあこがれ地にひれ伏し、正體なみだの隙よりも、思ひついたる一思案、上なる太鼓に屹と目をつけ」
こゝいらは屹度好いだらうね。
國石　エ、そこですよ。
「此太皷を打つ時は、いけどりと心えて、村々の關を解くと、さい前聞いたが天の與へ、こゝぞ殿御へ心中の、女の操（舞臺の樣に立つて跡は唄ひながら）と一筋に、よろめく足を踏占め〳〵、やう〳〵撥を振上げて、打たんとしても手は屆かず、延上りてはよろ〳〵〳〵又起直つて飛上り、どんと一聲かつぱとふす――」
（と身振をする）

つる　ハ、甘い〳〵其調子なら代が出來るよ。
國石　ハ、さうですか、いつか是非やつて見たいと思つてゐるんで。
つる　さうだよ、其位にならなくつちや、つまらないね。
國石　けど旅とちがつて、二丁町で此役がつくには並大抵ぢやありませんよ。
つる　それはさうだとも。家柄が好けりや拙くつても好い役がつくが、腕丈ぢやいくら好くつてもねえ―
國石　それもお金がありやねえ、仲間中でも、世間でも、人氣を取る事も出來ますがねえ――其金が無いのですもの、私たくやしくつて、くやしくつて……
つる　お前あの贔屓にして下さる周念さんはどうしたんだい。
國石　あの人は此間出開帳に菩提樹の實が降つたとかで大儲けに儲けてから、岡場所へ宗旨を變へ、芝居の方へは鼬の道ですよ。
つる　厭な坊さんだ事！
國石　是非茲で三十兩ばかり無いと、折角ついた好い役も此次にはまた仕出に下げられてしまひます。
つる　困つたねえ、どうかして工面が出來ないの？
國石　だから姉さんに相談に來たんですよ。
つる　私にって、困つたねえ。此頃は內の旦那もどうした

んだか便も無く、玆の家賃まで滯つて居る始末さ。

國石　ぢや旦那もどこかへ宗旨を變へたかね

つる　どうせ、そんな事だらうよ。

國石　あ、こりや頼みの綱も切れたかねえ。

つる　いや、さう氣落ちをするものぢやないよ、まだはつきりした事ぢやないんだから、其内に何とかなるだらう、宛にして元氣好く、舞臺を勤めるが好いだらう、

國石　でも急に入るんですもの。

つる　急に入る？　仕樣が無いねえ、ぢやまあ此櫛、と云ひたいが、これはどうも離されない譯がある。此簪の方を持つてお出で、あとは夏物でもどうかしたら、少し位は出來るだらうよ。

國石　いえ、そんなにして貰つちや濟みません。

つる　でも今が肝心だ、此機を取りはづしたら、浮ぶ瀨は無いからねえ。

國石　姉さん……有難う……此御恩は忘れません……

つる　恩も何もあるものかね、親も無けりや家も無く、廣い浮世に姉弟二人、お互に力にならなくつちや、生きてゐられるものぢやない……

國石　……でも私の方は厄介をかけるばかりで、何の力にもなりやしません……

つる　なあにならない事があるものかね、唯お前といふ同胞がある丈で、どんなに心强いか知れやしないよ。

國石　……姉さん、本當ですか……（すがる）

つる　お前にお世辭をいふものかね。（國石泣く）

つる　お前もめつきり氣が弱くなつたねえ。

國石　いえこれから確りします。

つる　けど女形には其方が好いかも知れない、まあ〳〵お金の苦勞なぞで氣が滅入つちや藝が陰氣になるから、そんな事は心配せず、いつもおふねの樣な心持でゐるが好い。

國石　エ、ぢやよろしくお頼み申します、

つる　ア、二三日の中に沙汰をしますよ。

國石　有難う、ぢや左樣なら。

つる　親方によろしく！

（國石外へ出る、源内出る、行合ふ。）

國石　オ、先生。

源内　國石、どこへ行くな。

國石　へイ、今そこの姉の處へ參りまして、歸る所でございます。

源内　姉の所？　お前の姉とは何してゐるね。

國石　ヘイ、去年まで丁子屋に居りましたが、去る人に引かされまして、今そこに圍はれて居ります。

源内　丁字屋に居た？　何といふ名前で？

國石　雛鶴と申しました。
源内　雛鶴？　雛鶴がお前の姉か。
國石　御存じでございますか。
源内　知つてゐる所か、あの源内櫛は雛鶴から廣まつたの
　だ。
國石　ほんにさうでございましたね。
源内　家は何所だね。
國石　其所でございます。
源内　久々で寄つて見ようかな。
國石　ぢや御案内を致しませう。
源内　やお前はまた用もあらう、かまはずに行くが好い。
國石　それぢや御免下さいまし。（入る）
源内　（格子を明けて）御免よ。
つる　ハイ。（立つて見て）オヤまあ旦那！
源内　雛鶴――ぢやない、お鶴さんか――久しく逢はなか
　つたな。
つる　さあ、どうぞ此方へ。
源内　差支は無いかね。
つる　何がございますものか。さあ、どうぞお上り下さい
　まし。好くまあ知れましたね。（ト上手へ案内する）
源内　（上つて）今そこで逢つて聞いたのさ。
つる　誰に？
源内　國石に。
つる　ほんにあの子も矢口へ出てゐるのでございますと
　ね、丁度今其話をしてゐた所、貴君がお出でなさるとは、
　不思議な樣でございますね。
源内　それが矢張緣があるんだ。いつかの櫛も世間へ廣が
　り、源内櫛と云ふ相だ。
つる　さうですとね、此間も兩國を通りましたら、町の娘
　が五六人皆あれをさしてゐました。
源内　（おつるの髪を見て）オ、お前もまださしてゐるね。
つる　それはお約束でございますもの、唐の伽羅でおひか
　せなすつた香もゆかしいお志、以來は外のをさしません
　と、申上げたではございませんか。
源内　其言葉をいつまでも守つて？
つる　守らないと思つてゐらつしやつたの？
源内　でも武士にも二言のある世の中だからな――
つる　お侍にも嘘があるから、私共にも眞がございますよ。
源内　それは何より有難いな。
つる　私こそ人に魁け、姿は何と變つても、髮はいつも伽
　羅の香、始終自慢をしてゐるんですよ。
源内　そしてあれからどうしたね。
つる　私の身ですか、それはいつか聞いて戴きませう、け
　ふは折角いらつしやつたんだから、陽氣なお話をしよう

ぢやありませんか。

源内　いや、もう嘘には飽果てた、本當の話ならしようかね。

つる　あら私嘘をつくと思つてゐらつしやるの？

源内　でも眞ぢや渡られない世の中だと、今も人に云はれて來たんだ。

つる　それは私も隨分嘘をついて來ましたが、今思ふとそれが何になつたでせう。せめてこれからは思ふさま本當の事を云つて暮らしたいと、思ふ事もございます。

源内　いやそれぢや氣ちがひになるより仕樣が無いね。

つる　氣ちがひにならなけりや、本當の事を云はれないから、なつて云ふ方が、正氣で嘘をつくより好いかも知れませんねえ。

源内　こりやさうだ。ぢやなつた積りで話をしようか。

つる　なつた積とはまだ嘘ですね。

源内　ハヽ、積りで無くつても、もうなつてゐるかも知れない。まあそんな事も考へずに、思ふさま云つて見なよ。

つる　エヽ、聞いて下さい、と云つた所で何を申しませうねえ。

源内　矢張考へるから駄目だな。

つる　何考へる譯ぢやありませんがね、本當の事をいふと陰氣なものですねえ。

源内　それは當前だ、けどお前なぞは隨分陽氣な事もある筈だねえ。

つる　何陽氣所ですか、泥水から泥水と、衣裳ばかり着替へても、とてもさつぱりとは致しません。至は岡場所から朝鮮長屋、河岸端の藻屑にでもなつてしまふのでございませうよ。

源内　大層捨鉢だね。

つる　それは其筈ぢやありませんか、七の年から金にしられ、賣られたり買はれたり、生きてゐる張合は無いんですもの。

源内　いやそんな事はない、私が江戸へ來た時、誰が當時全盛だと尋ねたら、皆丁子屋の雛鶴と云つたものだ　持丸長者や大名の御臺所より鳴り響いた女では無いか

つる　それが何になるものですか。それ丈落目がみじめになるのが儲物でございませうよ。

源内　ぢや好い相手を見つけて、比翼塚にでもなるのかね。

つる　其權八も無いんですもの、獨狂ひも出來ませんねえ。

源内　何無い事もなからうぜ。

つる　いえ、本當に無いんですよ。ありや遠くに新口か、あなたの種になつてゐるんです。

源内　イヤ飛んだ引合に出されるね。

つる　あなたあれからどうなすつたの。

源内　私か、私も同じ捨鉢だね。

つる　エ、あなたも？

源内　私もお前に逢つた時は、誰一人知る者もない獨ぼつち、しかし今に天下に名を擧げうと、其うらなひとしてあの櫛を先づお前にさゝせて見たが、それや淨瑠璃で名は通つても、それ丈眞面目な志の害になり、物產會や本草會と、世間の目をさまさうと、催しをすると山師と云はれる。仕官をするには飯粒が足の裏について自由にならず、腐れ儒者や生臭坊主の仲間入をして、唐の糟や、天竺の泡で口を濡らさうより、オランダと智慧比べ、今までに無い工夫をすると、手品師の樣に思はれる。これぢやわざ〳〵國を出て何の爲に江戶へ來たのか、積にさはるのを笑つてゐる此身が何よりをかしいよ。

つる　ぢや、あの櫛もあなたのお爲にはならなかつたのですね。

源内　兎角美人と才子とは馬鹿の餌食になるものさね。

つる　それぢやつまらないぢやありませんか。

源内　いや其敵打ちに思入、馬鹿を馬鹿にしてやるんだね。

つる　で、つまり何になるんです。

源内　つまる所は、自分も馬鹿さね。

つる　あら何の事ですねえ。

源内　ハ、、、、、、。

つる　いえ笑ひ事ぢやありません、私もう馬鹿の餌食に辛抱かし切れなくなつたんですが、どつか好い所はありますまいか。

源内　でも籠の鳥で飛ばれないぢやないか。

つる　なあに碌に餌もあてかはなくなつたんですから、飛ばうと思や飛びますよ。

源内　ぢやまたどつか金の籠でも見付けて飛込むんだね。

つる　いえ、いくら金でも銀でも、籠にやくさ〳〵しましたから、もつと息の出來る所へ女中にでも行きたいのです。

源内　ぢや私の所へ來て貰はうかな、此頃は獨ぼつちで、飯炊も無いといふ仕末だ。

つる　まああなたが置いて下さりや、御飯焚でも何でも致しますよ。

源内　うまく云つてらあ、直ぐ飯櫃の底を見て逃出して行く癖に。

つる　あらそんな女だと思つてらつしやるの。

源内　でも玆の內だつて、餌が足りないから飛ばうといふのぢやないか。

つる　それは餌ばかりぢやありませんもの。

源内　餌ばかりでなけや、何だ。

つる　それをお尋ねなさるの？

源内　でも聞かなけりや分らないもの。
つる　あなたも人が惡い事！
源内　どつちが惡いか知れないね。
つる　あら私これで馬鹿な程正直ですよ。
源内　だから正直な程馬鹿にするね。
つる　まあ誰を馬鹿にします。
源内　己まで馬鹿にしやうとしたつて、一文にもなりやしない、まあ好い相手を見付けてやるから、宛にせずに待つてゐるが好い。
つる　あなたも隨分酷い人ね。
源内　なあにこれで馬鹿な程親切だよ。

唄へ一つとや、一人笑つてゐやうより、二人で泣く方が眞實だ、タンノウ

（御用達銀兵衞、四十代、羽織着流し、お鶴の伯父、大工八五郎、三十五六、半纏、尻端折で附いて出る。）

銀兵衞　內かい。
つる　誰？（立つて障子を閉め、次の間へ出る）オヤ旦那？　伯父さんもお揃ひで？
八五郎　甘い話になつて來たせ。
つる　エ？
銀兵衞　まあかうだ、聞きなせえ。（火鉢の前へ坐り込んで）お前京人形になつてくれねえか。
つる　京人形ですつて？　私は踊は出來ませんよ。
銀兵衞　いや踊るんぢやねえ、唯ぢつとして箱の中に入つてゐりや、それで好いんだ。
つる　で、どうなさるの？
銀兵衞　遣物にするんだ。
つる　エ？
銀兵衞　京からわざ〳〵取寄せました京人形でございますと、當時飛ぶ鳥落とす田沼樣へ差上げやうといふ趣向だ。
八五郎　これには流石の御老中も手をお拍ちなさるだらうよ。（おつる呆れて默つてゐる）
銀兵衞　實は私も甲州の銅山で耗つてしまひ、お前の處へも不沙汰になるといふ仕末、何か大仕事と思ふ所へ、今度の大火事だ。こいつは一つ取入つて大儲けをしやうと、瀧本さんとも相談したが、先立つものは遣物だ、それももう當前では追付かねえから、京人形とは甘いだらう。それで御用を仰せ付かりや、八公に請負はせ、お前も玉簾の中へ坐られるといふものだ。
八五郎　どうも旦那の氣前には恐入つたものぢやねえか。後藤の目貫を袖に刺し、肴につけて差上げた奴があるといふが、そんなけちな話ぢやねえ。大金で身請をした女

を出して一仕事とは恐入つた。お蔭で己も大儲けだ、お前も出世が出來るといふもの、早くお禮を云はねえか。

銀兵衞　おつる、何故默つてゐる。

八五郎　どうしたんだい。

つる　旦那、伯父さん、それは誰に云つてゐらつしやるんです。

二人　エ？

つる　私はこれでも生きて居ますよ。

銀兵衞　どうしたと？

つる　此體には血も通つてりや、涙もまだ〳〵ございます。それを箱入の京人形にしやうとは、餘り馬鹿にした話、これぢや先で何になるやら、まあ此息の根が止つてからどうなと勝手になさいまし、まだ少し早うございますよ。

八五郎　オイ〳〵それは何をいふんだい。旦那のお蔭で苦界を拔け、かうやつてゐられる身分ぢやねえか。旦那の爲ならどんな事でも、しなくつちや濟むめえがな。

つる　いえ苦界を拔けて苦界に入り、又一倍の苦界に入るのが、餘り結構でもございませんねえ。

銀兵衞　オヤ生意氣な事を云やあがるな。それぢやまた元の苦界へ叩込んでも、かまはねえか。

つる　そりやどうせ金で買はれた體ですもの、また金に賣られても仕方が無いと致しませう。

八五郎　また金と引替へより遺物の方が好いぢやねえか。

銀兵衞　いくら箱入にすると云つたつて、唯途中丈だあな。

つる　いゝえ出されても同じ事です。人形所か猫ころや、猫よりひどいなぶりもの、同じ玩弄物(おもちや)にされるにしても、偶にや息の出來る方が、まだ辛抱が出來ますよ。

八五郎　好し、それぢや旦那また元へ叩込んでおやりなさいまし。

銀兵衞　まさか、さうも出來ねえな。

八五郎　ぢや岡場所へやつちまひませう。

銀兵衞　それも餘りみつとむねえや。

八五郎　なあに構ふものですか、旦那からぢや、ばつが惡けりや、私(わつち)からに致しやせう。それとも江戸ぢやいけねえなら、東海道でも京大阪でも、賣口はいくらでもごぜえやす。思ふ樣汐を踏ませてやらざあ、附上りやがつて仕樣がごせえやせん。

銀兵衞　さうだ、折角の名案を無駄にしやうとは積にさはる、殊にそれで代(かた)の女を仕込まなけりやならねえからなあ。

八五郎　それぢや直にさういふ段取に致しやせう。

銀兵衞　フム、（立つて）しかしおつる、もう一度思案をして見ねえか。

八五郎　丁子屋の雛鶴が流れ流れて宿屋の飯盛になつち

や餘り器量が下らうぜ。

（おつる默つてゐる。）

銀兵衞　まだ剛情を張つてやあがるな。

八五郎　ぢや、やつゝけやせう。

（行きかける、源内障子を明けて出る。）

源内　イヤ、一寸お待ちなさい。

二人　オヤ、此方(こなた)は？

源内　私は昔馴染の者で、圖らず門を通つたから、一寸寄つて見たのだが、どうぢや、此おつるさんを私に讓つては下さるまいか。

銀兵衞　何ですつて？（ト戻る）

源内　どうせ、どこかへ沈めるなら、誰にでも好かり相なものだな。

銀兵衞　一體貴君はどなたゞね。

源内　私か。さうだ、名を云はねば渡す譯にもまゐるまい。私は馬喰町に住む平賀源内といふ浪人です。

八五郎　あゝあの山師？

銀兵衞　いや、お名前はかねて聞いて居ります。それぢや、お讓り申さねえ事もねえが――

八五郎　いくらでお引受けなさいますね。

源内　いくらならお渡しなさるな。

銀兵衞　さうですねえ。身請の高は八百兩だが、（少し氣味の惡い思入で）まあ百兩位はひきませう。

源内　いや負けて貰ふには及ばん。値切らうと思やいくらでも云分はあるが、そんなけちな事はしない、元の儘八百兩で讓り受けませう。

八五郎　エ、元の儘で？

源内　四五日の中にお渡しする、今取りあへず持合せを手附としてお受取下さい。

（懷から袱紗包を出す。）

八五郎　（開く、紙包多く出る）こりや一體いくらあるんですね。

源内　いくらあるか、けふの會で集まつた丈さ。

銀兵衞　（改めて）丁度三十兩ございます。

源内　左樣か、それでは確にお約束しましたぞ。

銀兵衞　（不承ぶしやうに）ヘイ、よろしうございます、しかし成る丈早くお願ひ申します。

源内　此十日までにお渡しします。

八五郎　ぢや、旦那それで手離すんですか。

銀兵衞　さうよ。

八五郎　何だか鳶にさらはれた樣だなあ。

銀兵衞　なあに跡金の出來るまでは、まだ籠の鳥だ。（云ひながら外へ出る）

八五郎　よもや出來相もござえやせんねえ。

銀兵衞　そこは山師だ、何をするか、知れやしないよ。（話しながら入る）

つる　先生、あなたまあ、本當に出して下さいますか。

源内　虚に飛出しちや茶番にならあな。

つる　でも先はあんな事を云つてらしつて？

源内　先は先、今は今だ。私も時まんばうだから、何をするか知れないからね。

つる　ぢやまた宛になりませんね。

源内　それは大丈夫だ、若金が出來なけりや、簪でもこしらへて流行らせ樣かね。

つる　あら頼り無い事をおつしやるよ。

源内　なあに、お前もしつかり歌でも唄つて賣つてあるけ。

つる　エヽ、好うござんす、身儘になるなら、地獄の底までも行きませうよ。

源内　（立つて）ぢや、おつる。

つる　先生。

源内　もう「先生」は止してくれ、それ程馬鹿でも無い積だ。

つる　それぢや旦那、でもございませんねえ。

源内　旦那でも無し、殿樣でもなし——

つる　源さん、とも云はれないし——

源内　名のつけ樣のない御縁だねえ。

（互に顔を見合はせ、親しい樣でまた不安の思入、源内外へ出て傘をさす、おつる見送る。）

唄へ六つとや、むげん地獄へ落ちるとも、めぐりの鬼を供につれ、あとから釋迦の長羽織。タンノウ

——幕——

第二段

其一　兩國橋詰

見世物小屋三つ並ぶ。一つには猿になつた男が木に登つてゐると、連の男が止めてゐる看板、一つには天狗を生捕にしてゐる所、一つには「力婦ともよ」として肥えた若い女が米俵三を片手で上げてゐる畫。木戸番呼立ててゐる。

木戸番一　評判々々々々、これは四國巡りの途中、讃岐の國に於きまして忽ち猿になり、木の枝へ飛上つた男でございます。名も佐治兵衞と申しまして長屋の色男、人間が猿になるとは前代未聞、評判ぢや／＼＼。

木戸番二　評判ぢや／＼、これは越後の國は高田の生れ、百姓の孝行娘親の爲に大根島へ奉公中、不圖四斗樽を片手

で提げたのが始、石であらうが、鐵であらうが、手毬につかふ、ともよと申します力持、巴板額御前も何でも無い、評判ぢや／＼。

木戸番三　これは信州の山奥で生捕りました天狗でございます、畫空事(ゑそらごと)や芝居とちがつて正眞正銘の天狗だ、天狗だ／＼／＼。

（田舍者二人出る。）

田舍者一　イヨウ、面白相な物が並んでらあ。天狗の生捕に人間の猿、女の力持か。

田舍者二　こいつは國ぢや見られねえ、土產話に見て行かう。

田舍者一　どれを見るな、天狗にしやうか、猿にしやうか。

田舍者二　それよりは女が好い。

田舍者一　さうだ、どうしたつて女だなあ。

木戸番二　いらつしやい／＼。（二人力持の小屋へ入る）

木戸番一　評判だ／＼人間の猿だ／＼。

木戸番三　天狗だ／＼。

（町の娘二人、供の女つれて出る。）

女一　まあ賑だ事。

供　久々でまゐりますと、目が覺める樣でございますねえ。

女二　一寸御覽、人が猿になつて居ますよ。

供　まあ、此方は女の力持でございますと。

女一　一寸見やうではありませんか。

女二　エヽ、どちらにしませう。

女一　猿の方が面白相ねえ。

木戸番一　いらつしやい／＼（二人猿の小屋へ入る）

木戸番三　天狗だ／＼。

木戸番二　女の力持／＼。

木戸番三　天狗だ／＼／＼／＼。

（劍客鐵之進出る。）

鐵之進　何だ天狗の生捕？　これは奇妙だ、諸國修行をしてまはつたが、遂に出逢はなかつた天狗とは屈竟だ、どれ一覗(ひと)いて見やう。

木戸番　いらつしやい／＼。（鐵之進天狗の小屋へ入る、直出る。）

鐵之進　（木戸番をつかまへて）　こら、己人(おのれ)を馬鹿にするな。

木戸番　いえ何も馬鹿には致しません。

鐵之進　でも天狗だなどゝ人を釣つて、好く見りや梟だ。

木戸番　そんな事はございません、確に天狗にちがひございません。

鐵之進　噓をつけ、梟の面を彩(つ)り、兜巾篠掛を着せをつて天狗などゝは子供でもごまかされんぞ。

木戸番　どう致しまして、あれは天狗の子でございますか

ら小いので、今に大天狗を生捕つてお目にかけます。

鐵之進　エイどこまで人を馬鹿にする。こりや其儘には免されんぞ。さあ木戸錢を戻せ。

木戸番　いや兎に角御覽なすつたんだもの、見料は當前です。

鐵之進　何當前な事があるものか、手前ばかりぢやない、餘人にも害になる。こりや此小屋をたゝんでしまへ。

木戸番　冗談ぢやありません、これでも感心して行く人があるんですからね。

鐵之進　いやそれはどこまでも欺きおほせたのだ。愈以て免されんぞ。いつそあの梟めを絞殺してやらうか。

木戸番　馬鹿な事を云つちやいけねえ、大事の商賣道具だ、手をつけても承知をしねえや。

鐵之進　エイ此方で承知をせんのぢや。（小屋へ入る）

木戸番　エイどうするんだ、本氣になつて？　（續いて入る、騒の音）

木戸番　助けてくれ〳〵。

（隣　木戸番助けに入る、直皆出る。鐵之進天狗を攫んで出る、爭ふ、隣の小屋から猿の顔をした男や見物出てたかる。皆手に合はぬ。鐵之進天狗を締め樣とする、力持ともよ、二十代、島田、白粉濃くつけ、友禪の着物で出て止める。）

ともよ　まあお待ちなさいまし。（手を攫む）

鐵之進　（其力に驚いて天狗を落とす）何だ貴樣は？

ともよ　私は隣の力持ですが。野暮な詮議は御人體にも似あひませんね。

鐵之進　でも餘り人を愚弄するから。

ともよ　いえ、さうぢやございません。天狗だらうが、猿だらうが、皆本氣でございますよ。

鐵之進　エイ、己まで嘘をつくな。

ともよ　いえ本當ですよ、見物が御覽なさるより本氣なりやこそ、こんな裝をして女の柄に無い事までするのです。其心根を買つて下すつたら、天狗だつて何だつて、かあい相なものでございますよ。

鐵之進　でも餘り見えすいた嘘ではないか。

ともよ　見えすいてゐる丈罪は無いんです。見えない質の方がいくら情無いか知れやしません。

鐵之進　いやこりや一理はあるな。さういふお前の方が目に見えた質らしいな。

ともよ　なあにこれで見えないんですよ。

鐵之進　でも本當に力がある樣だな。

ともよ　それはあなた位抑へるのは譯はありません。

鐵之進　ぢや己の刀を受けて見るかな。

木戸番　イヤ評判だ〳〵。

鐵之進　エイ己まで見世物にしをるな。（睨みつけて入る）
見物皆　ワハ、、、、、、、、、（入る）
木戸番二　（ともよに）イヤどうも有難う。
ともよ　なあにお互様さ。
木戸番三　飛んだ新五左が飛込みやがつたなあ。
（國石出る。）
ともよ　（見て俄にやさしくなり）オヽ國石さん、どこへ行くの？
國石　馬喰町まで。
ともよ　まあ一寸お寄りなさいな。
國石　さうはして居られませんよ。
ともよ　でも一寸位好いぢやないか。色々話があるんだから。
國石　それはまたゆつくり聞きませう。
ともよ　あら氣の無い御挨拶だ事！
國石　でも急ぐんですもの。
ともよ　私も急に話さなくつちやならないのよ。
國石　何を？
ともよ　それは茲では云はれないから、一寸そこまで來て下さいな。
木戸番三　冗談ぢやありませんぜ、お客樣が待つてます、さあ早く力持々々。
ともよ　エイ、うれつたい！　おや今晩ね？
國石　それは宛になりませんよ。
ともよ　あらひどい、そんな事を——
木戸番三　まあさ、幕が明くといふのに！（無理に小屋へ入れる）
（國石行きかける、興行師金六出る。）
金六　オヽ國石さん、今お前さんの所へ行つたんだよ、
國石　さうですか、それは濟みませんでした。
金六　時にどうだ此間からの話は？　さうべん／＼と待つて居られねえぢやねえか
國石　ヘイ、どうも遲くなりまして……
金六　けふにも一座をきめてしまはなくつちや、先もせいて來てゐるからねえ。
國石　ヘイ御尤で……
金六　今更考へる事も無いぢやないか、手金まで取つて置いて！
國石　ヘイ、何も考へてゐる譯でもございませんがね——
金六　ぢや何をぐづ／＼してゐるんだい。
國石　ヘイ……少しあの……姉がかれこれ申しますので…
金六　姉がかれこれ？　姉て何だい？　また何をかれこれ云ふんだい。
國石　ヘイ……それは暫の事ぢやございませんからねえ、

一旦旅へ踏み出しや、いつ江戸へ歸られるやら……

金六　それは當前だ、またそれなればこそまとまつた金を出すんだ、それに今更そんな事をいふのは、あゝ手金を踏む積りだね。

國石　どう致しまして、そんな事は――

金六　ぢや誰が何と云つたつて、かまふ事は無い筈だ、それとも外に好い口を見つけたかね。

國石　いゝえ、そんな事はございません。

金六　いや、さうだ〳〵、そんなら其分には濟まさねえ。出る所へ出て始末をつける、さあ來い。（引立てる）

國石　いえ、私はもうきめてゐるんです。唯姉が得心しますまでと、つい隙が入りましたが、ぢやよろしうございます、師匠や堺町の方へも申しまして、何時でも參る事に致します。

金六　乾度だね、それぢや翌、明後日立つとして、最初は前橋であの矢口を出したいから、其積りをしてゐなせえ。

國石　エ、矢口ですつて？　エヽ、よろしうございます、せめてそれでも磨き上げて――けどお土産にもならないかなあ。

金六　なあに田舍だつて馬鹿には出來ないよ、堺町でくすぶつてゐるより、いくら好い贔屓がつくか知れやしない。ぢや間違はない樣にねえ？

國石　大丈夫でございます。（金六入る）

（源内出る。）

國石　オヽ、先生、今お宅へ上る所でございます。

源内　さうか、ぢやこれから歸るから一緒にお出で。

國石　へイ。（大名の行列の鳴物）

源内　あゝうるさいものがやつて來た、此方から行かう。

（上手へ向く。）

（町人二人大醉の體で出る。）

町人一　オツト待つたお二人さん、（女形の聲色で）どこへお出でなされまする。（手を廣げる）

源内　エイ、うるさい。（拂ふ）

町人二　いゝや離さぬ、朝夷の五郎が引止めた。

町人一　いや五郎ぢやねえ、三郎だ、曾我物語に歷然たり、いで草摺を引くべいか。

源内　エヽ、馬鹿！（大聲でいふ、皆ひるむ、源内國石を見返つて）さあ行かう。

國石　へイ。　　附いて入る――道具まはる。

其二　馬喰町源内宅

平舞臺、上手に床、星界の圖を掛け、下に刀掛、續いて棚、本箱、机、火鉢を置く。正面壁、眞中戸、中仕

事場、飛行船を置く。下手障子、外緣側、其向う古い庭木物凄く茂つてゐる體。三聖吸酢圖の衝立を置く。

源内國石つれて出る。

源内　さあ遠慮は入らんから、布くが好い。

國石　有難う存じます。

源内　そして一體どうしたんだ。

國石　ヘイ、少々お願がございまして……。

源内　お願？　何だ、どんな願だ。

國石　ヘイ……私もう江戸にもゐられませんから、お暇乞に上つたんでございます。

源内　エ、どうして？

國石　家柄も無けりや贔屓も無く、金も無けりや見込もございませんから、もう此方には見切をつけ、旅から旅を打つてまはらうと思ひますが……それにはどうかあのお舟をやらせては下さいませんか。

源内　それは易い事だが、旅役者になるのは止すが好いね、江戸よりは尚見る目が無い田舍をまはりや、段々藝がすさむばかりで、もう檜舞臺へは歸られないよ。

國石　それはもう歸らない積りでございます。

源内　それはひどい思切だ。まだこれからといふ年ぢやないか。

國石　でも見込がございませんもの。

源内　そんな事があるものか、世の中と云ふものはどうなるか、翌も知れたものぢやない。それなればこそ私なぞもかうやつて江戸にゐるんだ。殊に近々少し入つて來る宛があるから、さうだ、それでお前も贔屓にして、人氣を立てゝやらうぢやないか。

國石　ヘイ、さう願へりや何よりでございますが——

源内　譯は無い、直にもどうかしてやらう。

國石　それはまあ有難う存じます、ぢや田舍へまゐりますのは暫見合はせて居りませうか。

源内　行く位ならオランダまでも行くんだね。

國石　へ、オランダ？

源内　ハ、それでも知れたものだが、其一足も出られないから、まあ茲で磨くんだね。

國石　ヘイ、私も田舍なんぞへ、埋もれに行き度はございません、姉も止めるのでございますが、どうするにも仕様がないものですからね、それをお蔭で助かりまして、其上出世が出來ましたら、こんな嬉しい事はございません。何とお禮を申しませうやら。

源内　なあにまだ禮をいふには早いよ、けど大丈夫だから、安心して元氣をつけるが好い。

國石　ヘイ、ぢやまあ仕打の方を斷はつてまゐりませう……けど一應ぢや聞いてくれますかしら？

源内　手金でも取つたのか。
國石　ヘイ。
源内　ぢや己が出してやらう。けふ翌にも入るから。
國石　左樣でございますか。何分よろしくお願ひ申します。
源内　承知したよ。まあ一杯飮んで行け。（本箱から德利盃を出して差す）
國石　まあ先生。（酌をする）
源内　（飮んで）お前あのおつると本當の姉弟かね。
國石　ヘイ左樣でございます。
源内　さう云やどつか似てゐるね、またあれ程靡れちやゐないから、これから磨きや大したものだ。
國石　どうかよろしくお指圖をお願ひ申します。
源内　なあに藝ぢやない。藝なんぞ磨いたつて、こんな世の中ぢや始まらない。それよりは其顏を磨いて、坊主であらうが、儒者であらうが、侍であらうが、大名であらうが、閻魔であらうが、河童であらうが、思ふ樣惱ましてやつたら、己の樣に筆でばかり空威張に威張つてゐるよりや氣が利いてゐるね。
國石　私には兎てもそんな腕はございません。
源内　なあに、腕なんぞ入るものか、唯其顏で一寸笑や、今時の男は女より脆いからね。
國石　いえ、女でも男でも、今の世の中はこはいものでございますね。
源内　ハ、おつるより女の樣だなあ。
（おつる出る。）
つる　エ、それは私はすれつからしですからね。
國石　あら、いつの間に？
つる　どうか私より此子をかあいがつてやつて下さいまし。
源内　ハ、お前の世話をし序に、してやらうといふんだよ。
つる　いゝえ、私の事はもうどうでも好うございます。
源内　何をいふんだよ、此間の金も遲くなつたが、けふ翌にも沙汰があるから——
つる　いゝえ、遲いからぢやありません、そんなに出して戴いた所で始まりませんからね。
源内　ぢや私の所へ來る氣は無くなつたんだね。
つる　私よりあなたこそ、氣も無いのに厄介物をおしよひこみなすつても、つまりますまいからね。
源内　氣が無い事はない、あればこそ買つて出たんだ。
つる　なあに氣まぐれにお出なすつて、今では持餘してゐらつしやるんでせう。
源内　お前も隨分疑深いね。
つる　でもいよ／＼さう見えましたもの。
源内　ぢや矢張京人形になつて、出世をする方にしたんだ

ね。
つる　あら、あなたの方が疑深いよ。
源内　でも私の方へ來ないとすりや——
つる　どこへなと賣り飛ばされ、どうでも藻屑になるんでせうよ。
源内　これは分らないね。
つる　でも私さういつまでも情の無い人の御厄介になつて、情も無い御奉公は溜らなくなりましたから。
源内　ぢや其内に、好い人を見つけやうといふのだね。
つる　なあにそんな人が遊びになど來るものですか、もうこんな身になつてしまつちや、とても本當に相手になつてくれる人はありませんから、落ちるならどん底まで落ちた方が、氣持が好いだらうと思ふんですよ。
源内　おそろしいあきらめ樣だね。世の中といふものは、さう捨てゝしまつたものぢやない、命がありやまたどんな花が咲くかも知れたものぢやないぢやないか。
つる　いゝえ、花なんか、疾くに散つてしまつたのです。
源内　なあに花は死ぬまで咲くものだ。
つる　いゝえ、もう花も實も何もお仕舞、どうか私より此子をお願ひ申します。
岡石　あら姉さん、何ですねえ——
つる　エヽ、だまつてお出でよ、私は唯行がゝりや、意地づくからぢや嬉しくもないからね——
源内　ぢや今更手を引けといふのかい。（むつとする）
つる　あら怒つちやいけませんよ、何も此子の事ばかりぢやありません、あなたの方の事も考へてねえ——
源内　（愈むつとして）大きにお世話だ、懷まで讀まなくつても、口の干上る樣な事はしやあしないよ。
つる　あら、あなたの方が勘違ひをしてゐらつしやるよ。
源内　なあに分つてゐるよ、お前の腹の底まで好く分つてゐる、さう聞きや倚の事、けふ迄に金を渡して、お前の身を引取つた上、直どこへなと好い所へやらうぢやないか。
つる　それが意地づくだといふんです、そんな意地づくぢや有難くも無けりや、行かうと思ふ所も無し、つまらない手數ですよ。
源内　いゝやつまらない事は無い。それでもおつとに氣持が好いや。
つる　ぢやあなたのお心持は、八百兩の鶯を買つて、直放してやる樣なものですねえ。
源内　いゝや、さうでも無いね。
つる　ぢや何でせう。
源内　何だつて好いぢやないか。
つる　いゝえ好くはありません、其お心持を何はなくつお

や、私も驚ぢやございませんからね。
源内　だから尚面白いんだ。
つる　ぢや面白半分に相手になつてゐらつしやるんです
　ね。
源内　なあに眞面目だ。
つる　嘘、嘘、また狂言の種にでもしやうと思つて！
源内　エ、狂言なんぞもうやるものか。
つる　でもお前は好うござんすね。
源内　お前の目にはねんねえだらう。
つる　いゝえ、羨ましいんですよ。
源内　どこが。
つる　こんなにいろんな事を思はない所が。
源内　ハ、まあ好い加減にして一杯飲め。（盃をさす）
つる　いゝえお酒所ぢやありません、是非お心持を伺はな
　くつちや……
源内　ぢやまあ惚れてゐるとでも思つて置け。
つる　あらお門ちがひ、だから御厄介にはなれないと云ふ
　んですよ。
源内　何故、さうなら大事にしてくれるだらうぢやないか。
つる　所がさうで無いから、つまりません。
源内　そんなにつまらなけりや、勝手にしろ。（ぐつと飲
　干して）エ、冷たい酒だなあ。

つる　いつそこんな時は冷たい方が好うござんす。
源内　いゝや、熱い熱い火の様なのでなけや、飲んだ氣が
　しなくなつた。（火鉢の鐵瓶へ德利を入れる）
國石　何かお肴を取つてまゐりませう。
源内　ぢやこれで見つくろつて來てくれ。（紙入を渡す）
國石　かしこまりました（入る）
つる　けど餘り熱いのは毒ですよ。
源内　なあに飲むからには、毒になる位で無くつちや、飲
　んだになりやしない。さあ、ついでくれ。
つる　いけません、毒と知つてお飲みなさる樣ぢや——
源内　毒と知つて飲むから毒にはならない、さあ此大きな
　のへついでくれ。（茶碗を出す）
つる　尚いけません、そんなのぢや——
源内　エ、つがなけや入らないや。（手酌で飲む）
つる　あなたも氣が短いのね。
源内　ハ、氣が短いのに氣を長く待つてゐなけりやならな
　い世の中に、もう辛抱がし切れなくなつたよ。
つる　それは私だつてし切れなくなつたんです、だから思
　切つてどん底へ飛込まうと覺悟をしました。
源内　それを止めてやるのに振切るんだね。
つる　あなただつて止めてるのに、お飲みなさるぢやあり
　ませんか。

源内　それは止め様が足りないからさ。
つる　あなたゞつて足りません。
源内　何だ、足りない？
つる　エヽ。
源内　どこが足りない？
つる　でも横目をつかつたり、も一眞劍になつてゐらつしやらないもの。
源内　ぢや眞劍になつたらどうする。
つる　それは私だつて眞劍になりますよ。
源内　面白い、ぢや眞劍勝負をしやうか。
（下手で、「頼む。」）
つる　あら誰か來ましたよ。（下手へ入つて直立て）萬五郎さんといふ方が見えました。
源内　エ、弟が？
つる　まあ、弟御さんですか。
源内　此方へと云つてくれ。
つる　ハイ。
（下手へ入る、萬五郎二十五、旅装で出る。おつる座布團をすゝめて入る。）
源内　どうした、いつ來たな。
萬五郎　昨日殿のお供で參りましたから、取敢へず伺ひました。
源内　それは好く來た、どうだ國元の様子は？
萬五郎　ハイ別に變りはございません。
源内　國を出てからもう十年、それでも變りはないかね。
萬五郎　ハイ、太平無事でございます。
源内　イヤそれだから居られないのだ。
萬五郎　あなたはまた如何でございます。
源内　私か——私は年々事だらけだ。
萬五郎　（心配相に）どんな事がございましたな。
源内　一々話すのも面倒だ、また面白くない事ばかりで。
萬五郎　承はれば淨瑠璃、戯作をなされた相でございますな。
源内　ハヽ、そんな事もやつて見たよ。
萬五郎　そしてもつと眞面目なお企は？
源内　それも色々やつて見たが、一ツ物にならんのだ。
萬五郎　それはまた何故でございます。
源内　それは家柄も無く、引も無く、金も無けれや何も無いから——少し大きな事をしやうと思や、矢張公儀の手を借らにやならない、と云つて仕官をするにや、國元から止められてゐる、金持を使うて見ても、矢張算盤を離さないから、詰り人の腹を肥すばかり、自分はいつも天竺浪人、伯樂も無く、小使も無しだ。
萬五郎　では此先どうなさるのでございます。

源内　どうするやら自分にも分らないね。

萬五郎　兄上、實は此度皆と相談してまゐつたのでございますが、如何でせう、國へお歸りなされましては？

源内　エ、歸れ？

萬五郎　國では未に惜んで居ります、此方でお見込がござりませんなら、お歸りになりまして、本草でも、醫學でも、儒學でもお望みの方をおやりになつたら、國益にもなりませう。

源内　ハヽ、小人島の王になつた所で面白くも何ともないな。

萬五郎　イヤ、小人島とはひどい事をおつしやりますな。

源内　でも此江戸からして小人島だが、また其内にはどうかなる樣に思はれるのが玆の氣分だ。

萬五郎　それでは國元の事や、平賀家の事をお考へにはならぬのでございますか。

源内　それを今更云出して何になる。一旦なつた天竺浪人、醉郷も仙郷も、どこも己の故郷で無いなあ。

萬五郎　それは何といふ事をおつしやるのでございます。假令どこへお出でになつても、あなたはどこまでも讃岐の人でござります。兩親は早く亡くなりましたが、殿の御恩で家祿はあり、手前と二人不足は無く、一生賴りにと思うて居りましたに、獨此方へお出でになり、故郷の夢も御覽なされませぬか、先祖代々の墓參もお心にはかかりませぬか。をさない時の家邸や、昔馴染も思出しもなされませぬか。手前は家を續いだものゝ、親身と云ふては兄上一人、此方に事が無い丈に、どうしてお出でなさるやらと、夢に見たのも始の內ばかりではござりません。今度此方へ來ると極り、立つより早くお目にかゝりました其お姿は昔の兄上、今は定めてお立派にと樂んでまゐりましたに、（あたりを見て）それとは違うた此お暮し、こんな事なら故郷の方がどれ丈樂やら知れません。お顏も餘程お變りなされましたな。これは是非お歸り下されませ。私ばかりではござりません、親族兩親の內一人でも居られましたら、是非々々と云はれるでござりませう。親の心と思召して下さりませ。（涙含んでいふ）

源内　其眞心は嬉しいが、兎ても歸る氣は無いな。

萬五郎　でもまたお別れ申しましたら、もうお目にかゝる事も出來ぬではござりませんか。

源内　エ？　いやそんな事もあるまい、また出府する事があるかも知れん。

萬五郎　いえ、それは宛になりません、また私の事は扨置いて、あなたとて此先どういふ宛がござります。

源内　それは丸で無い事も無い。近い話は今度火浣布といふ物をこしらへて、奉行所へ採用を願うてあるが、今にも沙汰がある筈だ。さうなりやお倉へかぶせる程大きな

のをいくつもこしらへる、また諸大名からも申込んで來るにちがひ無い。公益にもなりや、己も少しは息が出來る、國元から御用になりや、それを土産に一寸位歸つても悪くは無い。

萬五郎　でもそれが宛になるでござりませうか。

源內　大丈夫、分り切つた公益だ、外の事は兎も角も、あれが用ひられぬ筈はない。

萬五郎　でもお上の事はなあー

源內　なあにいくら目の明いた者が無いと云つて、それ位は分るよ。

萬五郎　それではそれを頼みにして、お待ち申して居りませうか。

源內　さうだ、もう暫く見てゐてくれ。

萬五郎　はかない頼みでござりますな。

源內　はかないと云や何もかもはかないものだ。まあそんな事は止して、今夜は泊つて行け。久々で昔話でもしやうかな。

萬五郎　いえ、さうはして居られません、明日早朝から御用がござります。

源內　ぢやこれからそこまで出かけて一杯やらう。

萬五郎　いえ、それも門限がござります、復隙を伺ひ、上る事に致しませう。

源內　相變らず不自由だな。ぢやまあ一杯、今肴を持つて來る。

萬五郎　手前は未(いまだ)に一口もいけません。

源內　それも相變らずだな。けど餘り馳走が無い。

萬五郎　いえ、別に何も入りません、唯御無事の體を見ましたら、それ丈で十分でござります　それでは隨分御機嫌好う。

源內　エ、また來るのぢやないか。

萬五郎　ほんにさうでござりました、何やらまた長くお別れをする様な氣が致しまして……（涙をこぼす）

源內　（も思はず涙を浮べて叉氣を變へ）ハ、、、、

萬五郎　では復お目にかゝります。

（入る、源內送つて入る――おつる奥から出る、源內出る。）

つる　あなた本當にお國へはお歸りなさらないの？

源內　あゝ。

つる　何故でございます。

源內　それは緣が無いんだねえ。（ト衝立に倚りかゝる）

つる　エ？

源內　生まれ故鄕を我から出て、京、大阪、江戸までも、世の中を渡つて見たが、容れられもせず合ひもせず、と云つて我儘八百を書散らしても矢張不足だ。つまらない

小細工で露命を繋ぐ破三味線・もうちりてつとんと引い
てしまはうかと、やけになつたり思直したり、むしやく
しやしてゐる所へぶつゝかつたのがお前の身の上だ。
（ト少し其方へ近づく）

つる　私も親縁が薄いかして、頼無い弟一人、それも私も
身を賣られ、口で笑つて心では本當に笑つた事は無く、
泣かない涙の一生かとあきらめてゐましたが、圖らずお
目にかゝりまして……これから一體どうなるんでせう。
（トすがる様に寄る）

源内　どうなるやら、分つてゐる様で分らないね。

つる　本當に分つてゐる様で、分りませんね。（また離れる）

源内　縁がある様で無い様で、始めての様で馴染の様で—

つる　あら、矢張眞劍になつてゐらつしやらないよ。（ト屹となる）

源内　なつてゐるよ。

つる　いゝえ、なつてゐらつしやいません。矢張あなたは
お大名のお姫様か何かで無けや、納まらない方ですねえ。
（ト憎らしい思入）

源内　其大名にも見切をつけた、お姫様より櫛巻が合性かも知れないなあ。（ト手を取らうとする）

つる　あゝ復誰か來ましたよ。（下手を覗いて）伯父でございます。

源内　ぢやお前は彼方(あちら)の間に隱れてゐるが好い。

つる　ハイ、ぢやよろしく。（奥へ入る）

源内　（下手に向ひ）此方へお通りなさい。

（八五郎出る。）

八五郎　御免なせえ、其後度々上りやしたが、いつもお留
守やら逃口上、けふは好くゐらつしやいましたねえ。

源内　イヤ度々御足勞であつたが、どうもまだ都合が出來
ぬのでな——

八五郎　いやいつまで出來ねえのでごぜえやす、四五日が
十日になり、十五日になつても出來ねえのは、手を引い
てしまふお積りか、それとも踏倒さうといふのかね。

源内　いや、そんな事はせん、もう一兩日待つて下さい、
屹度始末をつけるから——

八五郎　いや、もう待つてはゐられねえんだ。さあこれは
此間の三十兩流してしまつても好いんだが、そんなけち
な事はしないとおつしやるんだ。其代りおつるは勝手に
するから、さう思つて貰ひやせう。

源内　いやおつるは是非此方(こつち)へ申受ける。

八五郎　ぢや直ぐ金をお出しなせえ。

源内　それは直ぐといふ譯にはまゐり兼ねる。

八五郎　いつまで立つたつて出來るものか、こんな化物屋

敷に住んで、火の車をまはしてゐちや、貧乏神が離れるものかね。

源內　いや、翌にも、今にも沙汰があつたら、直ぐお渡しが出來るから――

八五郎　何が宛になるものか、もう半時も待たれねえんだ。（立つ）

（與一郎出る。）

源內　オヽこれは好くこそ、それ沙汰がありましたぞ。

八五郎　へーイ。（又坐る）

源內　（與一郎に）餘り御沙汰が遲いから、お尋ねに上らうと思つてゐました所、わざ〳〵お出で恐入ります。

與一郎　いや、容易ならぬお願ぢやから、お奉行にも方々へ御問合になつてゐました。

源內　いや、誰にお見せになつても、何より確な物だからな――

與一郎　しかしお差支は？

源內　いや御遠慮には及びません。

與一郎　では先お受取り下さい。（火浣布を出す）

源內　エ？　何故お返しなさるな。（ト不審の體）

與一郎　折角のお願であつたが、お聞屆にはなりませぬて。

源內　エ？

與一郎　成程面白い工夫ぢやが、今太平の御代にそれ〴〵火防の諸役もあるのに、斯樣な非常の用意をしては、却つて油斷の元となり、若しもの時手落があつては相ならぬ故採用出來ぬとの仰でた。（源內憤恨の思入）折角お取次しましたが、さう仰せられては是非がありません。どうかお納め下さい。（源內答へず向うを見つめてゐる）手前も色々お取りなしもしましたが、何分頑に儒者、醫者などの意見もある樣子――

源內　エ？　儒者醫者の意見とは？

與一郎　貴君は平生彼等の憎を受けてお出で故、かういふ時も、障りとなつたと見えますて。（源內忿怒の思入）兎角當世は當り障りの無いのが第一、少し變つた事でもすると、忌まれ、妬まれ、憎まれて、公益も私欲に見なされ、類の無い思付は謀叛の端とも疑はれます。以後も好く御注意なさるが好い。手前はこれで、御免。（入る）

八五郎　へ、沙汰があるといふのは此事かね。飛んだ沙汰がありやしたね。これぢや一文にもなりやしねえ。骨折損の借金儲け、此方までお相伴に引張られて、馬鹿た目に合ひやした。どうせ山師の云ふ事だ、宛になるものぢやありやしないのに、うつかり乘つておつるまでごまかされる所だつた！

（つぶやきながら行きかける。）

源內　いやおつるは是非申受ける。

八五郎　まだおつるを？　ぢや金をお出しなせえ。
源内　金は明日お渡しする。
八五郎　いやもう待てねえ。今で無けやそれまでだ。
源内　今とは餘り、屹度明日お渡しするから――
八五郎　屹度つて、どんな宛があるんですね。
源内　それは云ふに及ばぬ事だ。
八五郎　なあに云はれねえんだらう、此様でどうなるものか。
源内　いやまだ外に工夫をしてゐる事もあり、豫て恩義を施した商人もあるから、それ等へ云つてやれば屹度出來る。
八五郎　ぢやなぜ今までにさういふ方へ云つてやらなかつたのですね。
源内　それは此方に見込があつたから――
八五郎　其見込がかうはづれちや、どの道だつて出來るものか。
源内　いゝや屹度出來る。
八五郎　何出來るものか。
源内　いや出來ても出來ずとも、おつるは申し受ける。
八五郎　金が出來ずにおつるを卷上げられて溜るものか。
源内　いや是非共に申受ける。
八五郎　ふざけた事を云ひなさんな、芝居や草双紙とは譯が違ふぜ。活きた女だ。お前さん等の手には合はないから、あきらめて見世物の（立つて仕事場を覗いて）また何かやつてゐるね。
源内　エイ、無禮な――（源内刀掛の刀を取るより早く抜いて八五郎を斬る。）
八五郎　アッ……（逃入り様に衝立を突付ける、源内よろめいて、踏止り、屹と見る。）
源内　オ、腐儒者がうせたな。（衝立を斬る）坊主も――醫者も――侍も――（又此方へ來て壁を斬る）大名も素町人も！　エイぞよ／＼と蛆蟲め！　（床の地圖を斬る）
（國石出る。）
國石　ヤア大變だ、姉さん／＼。（あわてゝ入る）
（おつる出る。）
つる　オ、あなた、どうなすつたのでございます。
（源内刀を振上げる。）
つる　（止めて）私ですよ、私ですよ。
源内　おつるか。
つる　分りますか。
源内　フム。
つる　分りましたか。

源内　分らなくつて！
つる　あなた、まあ、飛んだ事をなさいましたね。
源内　なに、まだ何もしやあしない。
つる　しない所か、死んでしまひましたよ。
源内　死んだ？
つる　エ、。
源内　（正氣になつて）エ、人もあらうに大工風情を殺して、これで死んでは此長の年月の志も何になる、何といふ事をしたんだらうなあ――いや今更云つても仕方が無い、仕置なんぞにならうより、どうせ死ぬなら自分の手で――（刀を腹へ突立て様とする）
つる　（あわてゝ止めて）あれお待ちなさいまし、これは私が殺した事にしますから、あなた何にも知らないとおつしやいよ。
源内　そんな事が出來るものか、殺したからはどこまでも殺したに違ひない。
つる　でもそれぢやお命がないではありませんか。
源内　それも、もう仕方が無い、これが私の運かなあ。
つる　でも私の事から、こんな事になつちや濟みません、是非私が引受けますから、あなたどつかへ行つてゐらつしやい。
源内　そんな事が出來るものか、お前こそ除いてお出で。跡の事を、頼みもせんぞ。
つる　あら、ひどい事をおつしやいます、そんな私だと思つてゐらつしやるんですか。さあ、早くお逃げなさい。
源内　いゝやお前こそ逃げろといふのに！
つる　いゝえ、あなた、早く、さあ――
（捕手出る。）
捕手　御用だ、（トかゝる、二三度拂ふ）
つる　（中へ入つて）いえ私が殺したんです。さあ、私に繩をかけて下さい。
捕手　エ、お前か？
（ト不審の體で其側へ寄る、源内それを拂除けて、おつるの手を取り、仕事場の戸を突倒して飛行船の側へつれて乘り、刀で天を指して。）
源内　さあ行かう、天へ！　天へ！
（おつるすがりついて泣く、捕手あきれて見る――此體よろしく幕。）

（大正二年）

奢（二幕）

人物

中村內藏助
ぬ ひ　內藏助妻
野 風
尾形光琳
三木權太夫　富豪
け い　三木妻
井川善五郎　富豪
あ さ　井川妻
那波屋九郎左衛門　富豪
つ ね　那波屋妻
千切屋惣左衛門　富豪
ふ さ　千切屋妻
深江庄左衛門　銀座年寄
と は　深江妻
細谷太郎左衛門　銀座年寄
た き　細谷妻
關善左衛門　銀座年寄
と め　關妻
ふ く　和久屋妻
と よ　袋屋妻
し げ　百足屋妻
平野藤兵衛　ぬひ父
宗 淡　茶人
伊 八　手代
小傳次　草履取
神澤彌十郎　與力
夢 松　幇間
壺太夫　物眞似師
染松七三郎　役者
三條浪江　同
芳澤崎之助　同
辰岡久菊　同
其他女中、禿、同心

時代

正德三年三月

第一段

其一　東山端の寮重阿彌の廣間

平舞臺、上手に大床、大幅を掛け、前に大花瓶、續いて違棚、正面手欄付の縁、向う遠く西山、京の町を光琳模樣風の背景。

井川妻あさ、細谷妻たき、關妻とめ、那波屋妻つね、千切屋妻ふさ、和久屋妻ふく、袋屋妻とよ、百足屋妻しげ、各派手な元祿模樣の着付、上手、下手、縁側に二三人づゝ、双六をしたり、立つて景を見てゐる體で幕あく。

あさ　まあ好う晴れました事！　昨夜の空模樣では雨かと心配して居りましたが。

たき　花もあの通り祇園のは散りましたが、知恩院のはまだ盛りでござります。

とよ　高臺寺、淸水のもよろしうござりませうなあ。

しげ　嵐山も好いかして、ほんのりして居りますなあ。

とめ　二三日前宅からまゐつた者がござりましたが、少し早かつたと申して居りました。

つね　承はればお辨當比べがあつたとやら、さぞ御趣向がござりましたでせうなあ。

ふさ　けふはまたお衣裳比べ、あれ深江樣が見えました。

ふく　まあ、お見事なお物數寄！

（深江妻とは、二十七八、初代友禪の書模樣の着付で、出る。）

とは　皆樣、今日はお相伴を、

あさ　さあ、どうぞ此方へ。

とは　いえ、お早い方からおつめ下さりませ。

たき　さうおつしやらずと、どうぞあれへ。

とは　いえ、私は此方で皆樣のおこしらへを拜見させていたゞきます。

とめ　さうおつしやるあなたこそ恐れ入りましたお好みでござりますな。

とは　どう致しまして、友禪に描かせましたが、思ふ樣にまゐりません。

（三木妻けい、二十八九、派手な裝で出る。）

あさ　オ三木樣、どうぞこれへ。

けい　ハイ、中村樣はまだでござりますか。

たき　まだ見えません。おこしらへに御念が入ると見えまして。

とめ　大方光琳の畫の樣に極彩色でござりませう。

つね　ほんに中村樣は尾形樣と御懇意故、お宅の襖まで光琳模樣とやら。

ふさ　それにお下屋敷も三共、殊に眞葛が原のは凝りに凝つた御普請とやら。

けい　したがそこには新町の太夫とやらが入つてゐるといふ事。（冷笑する）
とよ　それでは奥様に取つては、餘り結構ではございませぬな。
皆　アハ、、、、、　（ト笑ふ）
たき　あれ、中村様が見えました。
けい　まあ、あのこしらへは？　（不満の體、
あさ　これは思ひもよりませなんだなあ。（ト皆顔を見合はせる）
（中村妻ぬひ、二十三四、丼髷、黒羽二重の着付、白無垢の下着、白地に墨繪の帶で出る。）
ぬひ　皆様、遅うなりまして、相濟みません。
しげ　どう致しまして。さあ、あれへ。
ぬひ　いえ、此方が勝手でございます。（舞臺の中程へ坐る）
とよ　今日は呉服屋まで拜見にまゐつた位、皆様のお物數寄、殊に中村様はさぞかしと樂んで居りましたが――
ぬひ　私こそ皆様のを拜見しようと樂んでまゐりました。（あたりを見まはし）　まあ、東山西山の柳櫻をまぜた色色、ほんに春の錦でございますなあ。
けい　其錦の中に唯一色！
あさ　花の中の松？
たき　極彩色の中の墨繪？
とめ　これは恐れ入つた御趣向でございますなあ。
ぬひ　どう致しまして、趣向の無いのが私の趣向。これで氣が置けずに皆様のを拜見が出來ますな。
つれ　まあそれでは此方（こちら）が陰（かげ）へ入りたい様でございますなあ。（けい不快な體）
（女中玉子盃を持つて出る。）
けい　これは國春といふ女繪師が描きました蒔繪の盃でござります。どうぞお邪魔でもお持歸り下さりませ。
ふく　まあ綺麗な事！　頂戴致します。
（女中一人々々に渡す、他の女中酒肴を持つて出て、ついでまはる。晝太夫、坊主頭、白袴はいて出る。）
あさ　私は一寸物まねをさしてお目にかけます。
晝太夫　拙うはございますれど、芳澤あやめ、傾城善の綱を御覽に入れます。（ト手拭をかぶる）

唄（筒井筒、井筒の水は濁らねど、かはしゝ人はおぼろ月、入るかたもなき吾思、唯變らじと一筋に、寢ても覺めてもいとしさの、餘りて洩れて憎うなる。墨と硯は濃い中なれど、人が水さしや薄くなる。辛氣え、水さしや人が、人が水さしや薄くなる。辛氣え。其一念の付添ひて、苦しき胸のほむ

らの火、少しは其と思ひ知れ、足もとはよろよろと、もつれもつるゝ善の網、切れて形はなかりけり。

皆　よう／＼。

（身振をして入る。ぬひ厭な顔をする。）

とよ　あやめの癖そつくりでござりますな。

しげ　好う似せたものでござりますな。

とは　けど少し氣になる文句がござりましたな。

けい　それはどういふ文句でござります。

とは　「墨と硯は濃い中なれど、人が水さしや薄くなる」とは。

けい　おさしつかへがござりますか。

とは　私ではござりませぬか？

けい　そんなら他にござりますか。（ぬひの方を見る）

とは　どこにあるやら、穿つた文句丈に當つてゐる樣でござります。

けい　當つてゐるならお氣の毒、したが人に水さゝれた位で薄くなるなら、それは自身が惡いのでござります。誰がどうしやうが、外に增す花が出來ようが、尙更濃く、磨つたらよろしいではござりませぬか。

とは　でも磨ればする程命が短く、どうでも形は無かりけりでござりますなあ。

けい　硯のためならこれも本望でござりませう（一同笑ふ

飾つても、內はもつれる鐵の網ではなあ――

とは　アハ、、、、

（此間おぬひ俯いてゐる。）

（役者芳澤崎之助、三條浪江、染松七三郎、長岡久菊、紫帽子、振袖で出る。）

あさ　これはまたどなたの御趣向でござります、

ぬひ　私が呼びよせましたのでござります。

たき　これは物眞似より本物で、何よりでござりますなあ

けい　したが文句をさしつかへのない樣に願ひます。

ぬひ　それは氣をつけませう（役者に）何ぞ差支の無い、はなやかなものをなあ？

崎之助　ヘイ、では山盡しは如何でござります。

ぬひ　それお好さ相な、では直に。

崎之助　畏りました。

唄〽見渡せば、比叡の高根は都の富士よ、向う山々何々ぞ、鞍馬、貴船や、鷹が峰、伊達をかざるや衣笠山に、裾はちらほらもみぢの高尾、登りつめたよ愛宕山、嵐山風いとはで見たや、君を思へば音羽の山の、瀧の白糸どこまでもつる、焦げや戻せ

　や東山へござれ、花の盛はこゝぞ圓山。

皆　よう〳〵。
　(踊つて入る。)

ふさ　舞臺より側で見ると、尙よろしうござりますな。

ふく　これはけふの秀逸でござります。

けい　いや役者なぞより皆様の隱し藝をお出しなされてはどうでござります。

あさ　それが好い〳〵先中村様の舞からお願ひ申します。

ぬひ　いえまあ三木様のお琴から。

ふく　では井川様の三味線とお合せなされてはどうでござります。

たき　それは是非願ひませう。

とめ　あちらにお席も設けてござります。

つね　さあ、どうぞあちらで。

あさ　では私共から始めませう、さあおけい様！

けい　ハイ、ではお先へ御免蒙ります。中村様、あとでお逃げなされますなえ。(ぬひ、とはの外皆入る)

とは　おぬひ様、けふのお好みは第一でござりましたなあ。

ぬひ　これも光琳様に相談したのでござります。

とは　流石でござんすな、これには御主人も手をお打ちなされましたでござりませうな。

ぬひ　(云難相に)　宅は一昨日から歸りません。

とは　まあ、そんな人ぢや。聞けば島原から大阪の新町まで入浸り、とう〳〵名高い野風太夫を根引、今も三木様の當付は猜みばかりではござりません。あのお家や、井川様、那波屋様なぞは由諸ある根生の舊家、兎角私共を下に見てお出でなされます、それに人も無げな近頃のあの奢り方、世間でも好うは申しませぬぞえ。

ぬひ　まあ、何と申します。

とは　それは長うはあるまいの、今に分散しようのと、私共の耳にまで入るのは、元祿此方度々の銀の吹替。其度毎に銀座方の身代は御同然に殖えましたが、銀の品が惡うなるにつれて、物の値は上るばかり、儲かる人は桃山にもまさる贅澤、さも無いものは暮し向が苦しうなるにつけて、其恨を目ざましい方へ向けるのでござります。もう好い加減に世間體なとお謹みなさる樣、あなたから御意見なされたらどうでござります。

ぬひ　でも他から何と云はうとも聞く樣な人ではござりません、尙逆に出ます故、云ふ丈火を煽ぐ樣なものでござります。

とは　あのあなたからおつしやつても？

ぬひ　ハイ。

とは　奢ばかりか、太夫の事も？

ぬひ　エ……
とは　それも默つてお出でなされますか。
ぬひ　…………（自制の思入）
とは　少々の遊びなら兎もかくも、金が出來る限りをして、はては龍宮の樣な別世界、鼻の先に見せつけられて、それで何ともござりませぬか。
ぬひ　（勉めて落付いて）でも金でする事でござりますもの、どこまでした所で知れてござります。
とは　いえ〳〵、廓の中なら知らず、根引の上は情も濃く、親身になつたらどうなさる。あなたは末にお子達も無いではござりませぬか。
ぬひ　（急所を刺された思入）エ……
とは　こりや其女の仕向一つでどんな事になるか知れませぬぞえ。
ぬひ　（わざと笑を含んで）いえ向うでどう出ようとも、親身になればそれ丈に張合がござります。
とは　エヽ、氣樂な事をおつしやんな。向うは手練手管に馴れ、世間も人も好う知つて、男の心を取るすべは素人の思ひもよらぬ呼吸まで呑込んで居りませう。あなたは正直なお心一つ、世間も何も御存じない大家のお育ち、今まで何一つ御苦勞がなかつた丈、此勝負は危い〳〵、こりや今の内に何とかせねばなりませぬぞえ。

ぬひ　でもなまじな事を致しましては、却つて恥になりませう、負けるが勝と申します故――
とは　エ齒がゆひ、そんな事いうてござつては、どんな憂目を見るかも知れません。それに三木樣なども好い氣味と思ひなさるは知れた事、くやしい事はござりませぬか。こりや是非何とかなされませ。其御相談なら光琳樣より上でござります。
ぬひ　（少し心動く思入）難有う存じます、ではまあ何と致しませう――
とは　左樣ぢやなあ――こりやけふこれから向の家へ不意打をしてはどうでござります。
ぬひ　そんな事をしたら尙負になりませう。
とは　では急用ぢやというて、迎ひをおやりなされませ。そしてお歸りになつたら、もう二度と行かれぬ樣、嚴しくお談じなされませ。
ぬひ　でも噓と分つたら、尙行きませう。
とは　そんならお里へお歸りなされませ、表向親御からおかけあひなされましたら、お弱りなさるにちがひござりません。
ぬひ　いえ、これしきの事で歸りましては、それこそはづかしうござります。
とは　これしきというて、女子の一生で何よりの大事では

ございませんか。
ぬひ　それは左樣でございますが……
とは　それ故その位の事をせぬと、こたへるものではござりません。
ぬひ　でも、そんな事位でこたへる人ではございません。私もまたわざと戚す樣な事は出來ません、云出すからは大眞實、あの家を出ますなら。生きて歸らぬ覺悟から致します。
とは　エ？
ぬひ　まあもう少し見てゐて下さりませ、此衣裳も私相當、黒無地白無垢とは光琳樣も好うお見立てなされました。
とは　其潔白が醉うた目には？
ぬひ　艶がないと見えますか。
とは　兎角男といふものはなあ――

（けい出る。）

けい　中村樣、さああなたの番でございます。是非一さし皆樣もお待兼でございます。
ぬひ　いえ、けふは御免を蒙ります、どうも氣分がすぐれませぬ故。
けい　どうかなされたのでございますか。
ぬひ　別にどうも致しませぬが、いつもの持病でございませう。
とは　持病とはどんな御病氣？
ぬひ　いえ、それも春の習でございます。

（緣側へ寄つて向うを見る振する、けい不審の體、とは、思ひやる思入で道具まはる。）

其二　眞葛原の下屋敷

二重、上手横向に床、花鳥の幅を掛け、續いて棚、半壁、前下手へ折りまはして緣、手摺のついた廊下、後東山、櫻の灯見えた書割、前庭、灯籠、手水桶、網戸、垣、總て凝つた體。

野風、二十二三、濃艶なこしらへ、前髮取つて外は下げ、三味線を前に置き、柱にもたれて東山の方を見てゐる。

幇間夢松かけて出る。

夢松　御注進々々。（芝居式に）
野風　エ、洒落どころか、どうでござんしたえ？
夢松　イヤどうの、かうのと、云樣も無い位見事でござりましたぜ。何しろ京でも指折の良家（よいしう）の奧樣のお揃ひでござります、餘多の腰元が前後を取卷き、金ピカの乘物を手ぐりにして、端の寮へお乘込み、其お上品な事といふたら、島原の道中など、足元へも寄れませんなあ。
野風　（ぢれて）エ、外の事はどうでも好い、あの人はど

うでござんす。
夢松　さあ、さあ始めからお話しせぬと分りません。それからあの大廣間へお並びなされますと、友禪やら、疋田やら、凝りにこつたお物數寄、出來合らしいのは一も無く、其見事さ、美しさ、派手な姿を見馴れました此目もくらんで見當がつきませなんだ。
野風　それであの人の姿も見えなんだのかえ。
夢松　いや、それを見ずに歸る様な拙者奴ではござりません。豫て芝居でよそながら覗んで置いたあの奥様、あれかこれかと見まはして居りますと、一番後から御入來で、それ中村様と私ばかりか一同目玉をくわつと張つたと思召せ。
野風　そしてどうでござんした？
夢松　先づおつきの腰元の衣裳と云つぱ――
野風　エ、腰元の事は入らぬわいな。
夢松　いえ、其腰元から結構で、外の奥様方より優つたこしらへ、それに先蹤落とされましたな。
野風　(不快な顔をして)　そして、あの人はえ？
夢松　ところがお駕をくり入れて、お出ましなさる其お姿――まあ當てゝ御覧なされませ。
野風　エ、誰が知るものかいな。
夢松　ほんに誰にも思ひもよらぬ、上は黒羽二重に白無垢をお重ねなされたには、アッとばかりでござりましたな。
野風　何、黒羽二重に白無垢？　(ト向うを見る)
夢松　それから餘所の奥方は度々衣裳をお着替へなされ、愈々派手な裾模様でござります。それにあのお方は幾度お替へなされましても、どれも同じ黒羽二重に白無垢でござります。
野風　フム――　(ト考へる)
夢松　愈々不思議と見て居りますと、やつとの事で分りましたな、成程黒羽二重といふものはいかな貴人高位でも此上もないお召物、色も黒と白の重着では艶が無い様でござりますが、外が皆派手な極彩色でござります故、一際目立つて其氣高さ、一座は自然ふし目になり、腰元より落ちました。イヤそれには恐れ入りました。
野風　(妬ましい思ひ入)　エ誰一人並ぶ者も無いのかいなあ。
夢松　あのお好みといひ、御容姿といひ、誰がお側へ寄れませう、新町にもござりませんぜ。
野風　京とは質が違ふわいな。
夢松　それは違ひます、其違うた所で比べて見ようなら、イヤあなたより外にござりませんな。
野風　エ、私は比べものにはならぬわいな。
夢松　でも旦那の目には桃と櫻、こりやお迷ひなさるのも

御尤もでござります。

野風　エ、お前さんまでがそんな事を！（ト怒る）

夢松　いや、私はあなたの忠臣でござります。こりやああなたも一工夫なさらにやなりません。黒羽二重に白無垢に優るこしらへ、何であらうな——十二單(ひとへ)では堅くるしいし、羽衣では艶が無し、唐物かオランダ物でも吟味したらどうでござります。

野風　エ、うるさい、あれ丈聞いたら好いわいなあ。

夢松　オット縮じり。それではまた伺ひませう。イヤも一向はえぬ御注進ぢやわい。（行きかける）

野風　ア、これ。旦那は其邊に見えたかえ。

夢松　旦那でござりますか。いえ、彼所(あすこ)は奥様方ばかり、どこの旦那もけふは内でお待兼でござりませう。

野風　エ、そんな事まで聞きやせぬわいな。

夢松　オツトまた縮じりましたな、けふは風向の悪い日ぢやな。（行きかける）

野風　あ、これ／＼お前さんに頼みがある、これから直にお迎ひに行て下さんせ。

夢松　エお迎ひに？　いやけふは無駄でござりませう。

野風　いえ、何であらうが、是非おつれ申して下さんせいなあ。

夢松　これは御無理でござりますな。

野風　（金を包んでやり）いえ／＼無理でも何でもかまひません。そこをおつれ申さぬ樣ではお前さんも腕が無いぞえ。

夢松　腕が無い？　腕が無いと云はれましては、此顔が立ちません。それでは一つ腕を揮つて——はて何と云はう——高臺寺蒔繪の硯筥をお目にかけうと云はうかな——いや、それなら持つて來いと云はれたら直剝げる——太秦(うづまさ)の石燈籠を持込んだと云はうかな——奈良の大佛が着きましたとも云はれんな——いや、あなたが御危篤ぢやと云うたら飛んでお出でなされませう。

野風　エ、そんな事いうて來て貰うても嬉しうない、唯私が一筆かく故、それを持つて行つて下され。（筆を取つて又置き）エ、手が顫うて好う書けん。では「待つてゐる」と云うて下され。

夢松　それでお出でなされますか知らん。

野風　それで來て下さらねば、私にも覺悟があるぞえ。

夢松　エ？

野風　もうお目にかゝらぬかも知れぬわいなあ。

夢松　いや、それは大變、それ程思切つたお覺悟なら、いかな旦那もお出でなさるでござりませう。では一走り、追付(おつつけ)吉左右お知らせ申さん——（役者の聲色でいふ）

野風　エ、また洒落所か、早う／＼。（更に金を投げやる）

夢松　イヤこりや宙を飛んでまゐりせうかい。

（走つて下手へ入る。野風鏡臺を出して髪を撫付ける。中村内藏助、三十四五、代々の歌人の筆の色紙を縫いだ紙子羽織、贅澤な着付、徴醉の體、禿に櫻灯籠もたせ、草履取小傳次、前髪、下に絹、上に木綿の紋付、伊達な帶、加留多の箱をもつて附いて出る。）

唄〽恨みながらもまたうち向ふ
　　月はゆかりからき人の

内藏助　三日見ぬ間にこゝの花はもう散り出した。月も醉うたか春の宵千金では安いものぢやなあ。（内へ入つて）小傳次。

小傳次　へイ。

内藏助　今夜はこゝで泊る故、翌の朝早く迎ひに來い。

小傳次　へイ

内藏助　そして手代共に、兼て申付けた通り用意して、茶碗は井戸にすると云うてくれ。

小傳次　かしこまりました。では行てまゐります。

内藏助　大儀であつた。

（小傳次入る。）

内藏助　一昨日から醍醐の花見、宇治で泊つて奈良から吉野へと思うたが、其花よりこゝの花と、内へも歸らず駕を寄せた。

（野風默つて俯むいてゐる。）

内藏助　（袱紗に包んだ小判の歌加留多を出して）土産は通圓のお茶より、興聖寺にも無い山吹ぢや。歌は去るお公卿様、繪は光琳、と思うたが、流石に小判には描かぬので、弟子にかゝした。こんな歌加留多はまだどこにも無からうなあ。

（野風見向きもせずにゐる。）

内藏助　一寸見い、字も定家様、繪も宗達風、とてもの事に光琳自身に描いてくれたら、天下の名品にならうもの、兎角名人といふものは金づくでゆかぬものぢや。

野風　そりや名人許でござんせうか。

内藏助　まあさうぢやな。今の世の中では、誰であらうが、何であらうが、金の力でどうにでもなる、唯ならぬのはあゝいふ人、氣に向かぬと一筆でも描いてくれぬのには仕様が無い。

野風　いえ、あのお方ばかりではござんすまい。

内藏助　エ？

野風　どなたの爲でも、何の爲にも、動かぬものがござんすぞえ。

内藏助　そりや何ぢや。

野風　女子の心でござります。
內藏助　女子の心？　ハ、それこそ尙譯も無いわ。
野風　いえ、よその女子は知りませぬが、私の胸の底にあるのは小判の加留多や双六で上る事は出來ませぬ。
內藏助　それを今云ふ事か、其性根を知つた故、廓の泥を洗うたのぢや。
野風　それは目の前へ衣裳比べを見せびらかさうと思うて！
內藏助　そんな事があるものか、衣裳比べなどゝ私は丸で聞きもせんのぢや。
野風　それに好いお好みが出來ましたなあ。
內藏助　それは誰ぞに相談したのであらう。どんな着物をきて行たやら、どんな衣裳を比べても、牡丹の前の藤や山吹、花の御殿が外にあらうか。
野風　下立賣の烏丸には金銀の花の御所が――
內藏助　あつた所で明家同然、心はどこへか飛んでゐる。
野風　いえ〳〵金糸がぐる〳〵卷ぢや。さあ早う圓山へ迎へにお出なされませ、黑羽二重に白無垢、一同を蹴落とした姿でござんしたといのう。
內藏助　オイ野風、それはお前のいふ臺詞やないぜ。茨木屋にゐる時分はそんな事はいひもせなんだ。いかに廓を出たというて、素人くさい事をいひな。元の儘で無いと興がさめる。どこまでも太夫らしう、さあ何なりと望むが好い、衣裳であらうが、道具であらうが、住居も茲が氣に入らずば、嵯峨なりと、桂なりと、龍宮の眞似でもしてやらう。さあ、どうぢや、どんな事でもかなへてやるぜ。
野風　屹度かなへて下さりますか。
內藏助　かなへようとも〳〵。
野風　ではお暇を下さりませ。
內藏助　エ！
野風　身一つでお出しなされて下さりませ。
內藏助　ハ、、、、もう口舌どころぢやないやないか。
野風　いえ、口舌ではござんせぬ。
內藏助　そんならお前、眞面目にいふのか。
野風　嘘にこんな事が云出されますものかいな。
內藏助　そりや何故に？
野風　でもお心が足りませぬもの。
內藏助　エ？
野風　廓の中なら兎も角も、から足を洗うたからは、心一杯いたゞかぬと、此心が足りませぬ。
內藏助　心一杯？　それは疾うからやつてゐる。
野風　いえ〳〵一杯ではござんせぬ、お家の方に七八分、殘る二三分いたゞいても、有難うはござんせぬ。

内藏助　疑深い心ぢやな、二三分どころか十二分にやつてゐる。お前から望みもせぬのに、何もかもやつた筈、まだ此上にもやらうといふのに、不足がなほ面白う無い。

野風　でも何をいたゞいても、どうしても足らぬ所がござります。

内藏助　はて何であらう、此上はこゝへ入浸つてしまはうか、いやそれではお上の御用が缺ける、というてお前を內へ、といふ譯にもゆかん、といふのはあのおぬひ、いやあれはどうなとするがな、町の中ではお前も氣づまりや。

野風　それぢやによつてお內にぢつとしてお出でなされたが好いわいな。

内藏助　ハ、、、、お前も急に野暮になつたな。

野風　それがお氣に入りませぬか。

内藏助　いや眞面目になつたので尙好いのぢや。

野風　始めから眞面目でござんす。眞面目なりやこそ御恩を受けても勤めては居りませぬ。

内藏助　其氣儘が面白い、心の儘の情で無いと私の心も滿足せぬのぢや。

野風　其心の儘の情丈に、心一杯いたゞかぬと、心一杯上げられませぬ。

内藏助　ではどうしたら滿足するな。

野風　それはお心にござります。

内藏助　私の心にはもう仕様がない。

野風　それ、そんなお心情、お暇をいたゞきます。

内藏助　またそんな事をいふ。お前今までの事を忘れたのか。始めてお前に逢うた時は丁度こんな春の朧夜、京の遊びに倦きはてゝもつと變つた興もがなと思ふ矢先にお前の噂ぢや、浪華の情に江戸の張を兼ねた女と聞いた故、呼んで見ると其通、京の女子と違うて張合のある情の剛さ、イヤこれでこそ私の相手と、それからの互のかけひき、折合ふまでにどれ丈かゝつたと思うてゐる。

野風　ほんに夏から秋までも隨分氣長うござんした。京の形氣に派手な御氣性、私も始めは氣が置けて、初心らしくもなり、意地にもなり、わざとよそ〲しくして居りました。

内藏助　其よそ〲しさも外の者なら、分らぬ奴といふ所ぢやが、何もかも分つてゐて、知らぬ顏の憎らしさ。どうして面を脫がしてやらうかと、隨分智慧を絞つて見た。

野風　其面と見えたのは本の心でござんした。人には遠慮せぬ私が、控へ目にしてゐましたのは、それ丈大事にしてゐたのか。

内藏助　それが何やら奥の手らしく、探りを入れたり、跡寄つたり——

野風　強くもなり、弱くもなり、
内藏助　遊びやら、爭ひやら、
野風　樂しみやら、苦しみやら、
内藏助　仕舞には分らん樣になつてしまうた。私も遊びをし盡したが、つまる所苦ではつまらぬと、急にじれ出したのは、ありやお前から！
野風　いゝえ、あなたから！
内藏助　うそ／＼まあどちらからにしても、それからばたばたと登りつめると、飛込んで來たのは江戸の侍、いや誰であらうが指でもさゝせるものかと、引拔いて玆へ移した、もうお互に苦しむ譯は無い筈、さあけふは面白う、此歌留多でもして遊ばうか。
野風　（手を出しかけて氣を變へ）エ、こんな物は町の女子におやりなされませ。（投げる）
内藏助　（むつとして）よし、それでは暇をやらう、勝手に行け。（立上る）
野風　エ？（思はず側へ寄る）
内藏助　ハ、、、、もう止めんか、花が散るぜ。（坐る）
野風　（復強く）いえ／＼けふは是非きつぱりしたお言葉を伺ひます。
内藏助　どこまでも云ひ張るな。そんなら何か、外に行きたい處があるのか。
野風　行きたいのは金氣の無い、心の底まですつとする處でござんす。
内藏助　（眞に怒つて）エ、之ほど十分にしてやるのに、ようそんな事を――（卜荒々しく立つ）
（繪師、尾形光琳、四十代、總髮、道服で出る。）
内藏助　オ、光琳さん！　どうして今頃こゝの內へ？
光琳　お暇乞に上りました。
内藏助　エ、暇乞？　それはまあ此方（こちら）へ！
光琳　御免。（上る）
内藏助　そしてどこへお出でなさるのぢやな。
光琳　江戸へ行かうと思ひます。
内藏助　江戸へ？　江戸は平生から嫌ひぢやと云うてござつたが？
光琳　それでも是非行かねばなりません、京を追放になりました。
内藏助
野風　｝エ、追放？（驚く）
内藏助　ま、どうしてそれは？
光琳　さあ、聞いて下され、二三日前の事でございます。嵐山へ皆と花見に行きましたが、辨當比べをしようと豫ての約束、皆々凝りに凝つた重箱、食籠（じきろう）など出しました中に、私は竹の皮包を出しました。

内藏助　はてなあ？

光琳　こりや趣向に困つたなと皆が笑ひましたから、それを明けてまはしましたら、あつとばかりに閉口しました中には一面金蒔繪をして置きましたのぢや。

内藏助　イヤそれでこそ光琳さんぢやなあ。（野風を振返つて、又氣がつき此方を向く）

光琳　これから皆食べてしまふと、大事相に包みましたが、私は其竹の皮をぽいと川へ流してしまひました。

内藏助　いよ／＼面白い、例の氣象ぢや。

光琳　いや、餘り褒めて下さるな、それを川下で拾上げた者がござりましてな——

内藏助　さぞ感心したでせうなあ。

光琳　感心どころかびつくりして、奉行所へ屆けましたら、けしからぬ奢の沙汰とあつて、京の町を追放でござります。

内藏助　それで追放！

野風　蒔繪の竹の皮で追放！

内藏助　イヤ思ひもよらぬ事ぢやなあ。（トあきれる、野風も氣になる思入）

光琳　私も親が無くなつてから、讓受けた身代は三四年で使ひはたし、こゝ十年は借金の利息に追はれてゐましたが、繪さへ描いてゐりや、そんな事はそれほど苦にもならなんだのに、今度こそは降つて湧いた災難、世の中といふものは、一寸先も分らぬものと、つく／＼思ひ知りました。

内藏助　そして江戸はどこを宛に？

光琳　深川の冬木といふ家へ手頼つて行かうと思ひます。

内藏助　冬木なら聞こえた大家、御不自由な事もさしますまい、しかし途中や、何やかやに（懷から金を出して包み）これは甚失禮ぢやが、今の場合俗な餞別も風流ぢや、どうぞ納めて下され。

光琳　難有う、御辭退せずに頂戴します。

内藏助　そして外に御用はござりませんか。

光琳　用と云うて一切の事は投出して行きますが、唯捨て置かれぬは……

内藏助　どんな事でござります。

光琳　子供の事でござります。（云難相にいふ）

野風　あなたにお子達がござりましたのか。

光琳　實は一人、男の子がござります。

内藏助　それはちつとも、知らなんだ。どこに忍ぶ戀路があつたか、あなたも油斷のならぬ人ぢやな。

光琳　いや私の樣な者には女房子があつては邪魔にもなるし、身代も無くしたからは、女房になり手も無しとあきらめてゐましたが、さて丸で獨でもゐられず、此四五年、

おさんといふ女との中に壽市郎といふ子が出來ました、しかし表向では無し、兄弟親類とも氣まづい間柄になつて居ますから、それ丈が氣にかゝつて……

内藏助　イヤ、流石の光琳さんも縮の工夫より此思案にはお困りぢやな、なあに御心配には及びません、何不自由の無い樣、私が引受けました。

光琳　あの引受けて下さりますか。

内藏助　お易い事ぢや、安心してお出でなされませ。しかしおさんさんとやらいふ女の事は受合はれません。どんな素性か知りませんが、兎角女といふものは、何ぼ好うしてやつてもつけ上つて氣儘なもの、まして落目になつてはどんな氣になるやら分つたものぢやござりませんな。

野風　それは女子の心といふものは女子でなくば分りません。

光琳　いや子供の事さへ引受けて下さつたら、女の事はよろしうござります。あれは元大阪の貧乏人の娘で、しかも早く親に別れ、妹と二人親類の厄介になつて居ましたが、近年の諸式の高直(かうぢき)に其家にもゐられず、自分は京へ奉公、妹は跡で新町へ勤に出ましたとやら。

野風　エ、そして其苗字は何と云はれます。

光琳　小橋といひます。

野風　そんなら私の姉でござんす。

二人　エ、！

野風　京へ行つた限(きり)たよりも無く、手紙を出しても知れぬとて返つて來ました、其内に私は揚屋へ養女と云うて貰はれましたが、そこの内も左り前で、勤する身になりました。そんなら姉はあなたのお世話になつて居りましたか。

光琳　それは不思議ぢや、しかし今となつては丁度幸、そんならあれの事はあなたにお頼みして置きます。

野風　ハイかしこまりました。いつそ茲へ引取つて——

内藏助　お前も暇を取るのは見合せかな。

野風　アツ私は出るのでござんした。

内藏助　まだあんな事をいふ。

光琳　いやおさんの事はあれの心に任せませう、唯子供の事をお頼み申します。

内藏助　承知しました。安心してお出でなされ。まあ、一口お盃を！

（野風盃を出す、光琳受けて飲む。）

光琳　（あたりを見て）あ、此東山もいつ復見られる事ぢややら——（盃を内藏助にさす）

内藏助　眞葛原の春の月、ほんに世の中はおぼろぢやなあ。

（飲んで光琳にさす）

光琳　いや私はもう十分。
野風　では私が戴きませう。
内藏助　エ？
野風　花も名殘りでござんすなあ。
（内藏助無言にて盃をさす。野風飲む。）
光琳　イヤ中村さん、こりや私ばかりでござりませうか。
内藏助　エ？
光琳　僅辨當位で追放なら、それ所か比べるものも無い奢ではなあ！
内藏助　ハヽ、此れは光琳さんとも思へぬ言草、そんな事をいうたら、あなたの繪や蒔繪はどうぢや、あれこそ奢を極めた藝、あれも蒔繪の竹の皮を捨てる氣象故出來るのぢや。私の奢も私の氣象、いや私はまだ奢とも思うてゐません、何をしても、何をしても、私の心には矢張不足。
光琳　まだ御滿足なさらんかな。
内藏助　足りませぬとも／＼翌（あす）は京中の良い衆であらうが、分限であらうが、天下の名器名物を集めても、皆蹴落として見る積。
光琳　ではどこまでもお心は？
内藏助　心はいつも張切つて居ます。
光琳　イヤそれでは何も云ひますまい。心一杯おやりなされ。
内藏助　あなたも江戸の水に濁りもせず、富士も手筥に取入れて下さりませ。
光琳　承知しました、武藏野も小袖の模樣にしてお土産に致しませう。しかしそれはいつの事やら？
内藏助　これほど氣の合ふあなたにも？
光琳　もうお目にかゝる事は？（ト顏を見る）
内藏助　いや、それも分りません。まあ道中御無事にお着きなされたら、直ぐ知らして下さりませ。
光琳　あなたも時々おたよりを、樂しみにして待つて居ります。それでは中村さん。
内藏助　尾形さん。
光琳　（野風に）あなたにも御機嫌よう。
野風　私も翌（あす）はどうなるやら。
光琳　あ此朧夜も胸の蒔繪になりますなあ。
（しを／＼禿について入る。内藏助送る。）
（風の音。花ちる。）
野風　あのまあ花の散る事わいな。
内藏助　咲くもよし、散るもよし。
野風　散つてどこまで飛ぶのやら。
内藏助　心の儘に入り亂れて、枝にあるより面白い。ワハハヽヽヽヽ。
（笑の末は消えて、野風の顏を見る。野風も見てまた

後向き、横目に見かへる。）

此體よろしく幕

第二段

中村本宅

高二重、正面大床、大幅の山水を掛け、柱に黒め金の花生、前に卷物、棚に手筥、香盒、香爐、硯筥、色紙など置く。立派な坐布團を敷き並べ、外廣い緣、折りまはして下手へ續く。庭に大きな飛石、手水鉢、植込、切戶、柴垣、總て贅澤を極めた體。

細谷太郎左衞門、闕善左衞門床の幅を見、深江庄左衞門、いづれも羽織着流し、茶人宗淡、十德で卷物を開いて見てゐる。

太郎左衞門　ヨウ――これは牧溪ぢやな。

善左衞門　（箱の蓋を取上げて）東山殿の御物としてござります。成程頭の下る物ぢや。

宗淡　ヤ、眞龍岩の墨蹟、これは大變な物でござりますぞ。

庄左衞門　これはどの位の物でござりますな。

宗淡　まあ五十貫目は確でござります。

庄左衞門　へーイ。（感服する）

（千切屋惣左衞門、那波屋九郎左衞門、井川善五郎、三木權太夫、續いて出る。皆會釋しあふ。）

宗淡　さあ、まあこれから御覽を、眞龍岩でござります。

惣左衞門　眞龍岩？

九郎左衞門　これは始めて拜見致します。

庄左衞門　此手筥が名物の「片輪車」でござりますな。

善左衞門　ほんにこれは見事なものぢや。

善五郎　これも名高い「千歲」の硯筥ぢやな。

太郎左衞門　イヤ此桃底の金の花生も名物で。

九郎左衞門　不破の香爐、雀の香盒。

宗淡　「これさへあつたら奧山にゐてもさびしう無い」と利休が云はれたのはそれでござります。

權太夫　定家の色紙に、兼好の文。

惣左衞門　どうも恐れ入つたものばかりぢやなあ。

（ぬひ下手から出る。）

ぬひ　これは皆さん、ようこそお越し下さりました。

權太夫　今日はお招きにあづかりまして、いつもお斷りばかりして居つたが、名品持寄といふ事故、それならばと參上しました。

善左衞門　豫々拜見をと願つて居りました名器揃ひで、恐れ入りましたな。

宗淡　これでは兎ても私などの物は出せません。

ぬひ　さうおつしやらずと、どうぞ拜見を、まあお席へ。

善五郎　ハイ、三木様から。（皆着席）

宗淡　さあ、御銘々にお出しを願ひませうかな。

權太夫　（盆石を出して）私のは先祖が黒田如水公から拜領しました「殘雪」といふ東山物で。

善五郎　成程好い時代がついてゐますな。（次へまはして古寫經を出し）私のはずつと昔、先祖金賣吉次が奥州の秀衡公から頂戴しました古寫經でござります。

權太夫　これは好い金が使うてある。

九郎左衛門　成程。（次へまはして花生を出し）私のは利休居士が巡禮の腰につけたのを所望された「顏回」といふ花生で。

善五郎　これはいかにも、誂てゐますな。

庄左衛門　（茶碗を出して）これは有樂殿が銘をつけられた「臨濟」といふのでござります。

九郎左衛門　それは變つた名がついてゐますな、どういふ譯やら解せません。

太郎左衛門　（茶杓を出し）これは蒲生氏郷殿が手造りの茶杓で。

庄左衛門　成程、これ丈にもあの人らしい所が出てゐますな。

善左衛門　（茶入を出して）私のはお聞きでもござりませう、「兵庫茄子」でござります。

惣左衛門　ア、もし、「兵庫茄子」は私が持つて來ました（ト あわてゝ自分のを出す）

善左衛門　（冷笑して）イヤいかに茄子ぢやというて、さう二つあつて耐りますものか、これは唐物でござりますぞ。

惣左衛門　勿論で、利休居士に見せたら、緒が長いとあつて、少し切られたといふ曰く附でござります。

善左衛門　其通り。宗旦の極がついてゐます。

惣左衛門　私のには宗偏の極がついてござります。

善左衛門　イヤ其極からあやしいな。

惣左衛門　けしからん、先々代が三十枚も出して買入れました書付もござります。

善左衛門　私のは三十五枚、しかも宗匠の世話で出所も確なといふ受合、なあ宗匠？

宗淡　左様でござりますとも、それは大丈夫でござります。

善左衛門　それにどうして二つありますな。

宗淡　イヤ世には先祖代々の寶物ぢやというて、あやしいものを大事がつてゐるのがござりますからな。

惣左衛門　イヤ、こりや聞捨てになりません、こゝで眞僞を正さぬと、家の寶がすたります。（ト詰めよる）

ぬひ　ア、もし、けふはまあどちらも結構な物とばかり拜見して置いたら、如何でござります。

善五郎　左様、左様、容易に分るものではござりませんか

らなあ。

惣左衞門　イヤ是非極めねばなりません、誰に見せたら好からうなあ。

（平野藤兵衞、質素な箱付、一軸を持つて出る。）

庄左衞門　これは平野さん、さあ、ずつとこれへ。

藤兵衞　ハイ。（ずつと見渡した丈で上手へ坐り）イヤ皆さん、遲刻致しましたが、私なぞは何を見ても盲同然でなあ。

權太夫　どう致して、さうおつしやらずと御覽下さい。

善五郎　御持參の品もどうぞ拜見を。

藤兵衞　ハイ、これは是非お目にかける積りで持つて來ましたのぢや。內藏助殿は？

ぬひ　唯今御挨拶を致します。

（內藏助下手から出る。）

內藏助　これは皆さん、好くお出で下さりました。

太郎左衞門　どうも恐れ入りましたな、天下の名品揃ひで、よくこれ丈お集めになりました。

內藏助　いや、まだ〳〵思ふ程集まりません。

藤兵衞　まだ、これでも足りませんかな。

內藏助　これしきではなあ――

宗淡　私の知邊（しるべ）に徽宗皇帝の鷹の一幅を讓りたいと云うてゐる者がござりますが――

權太夫　徽宗皇帝の鷹、それは是非見せて下され。

內藏助　いや、見ずとも私が買取りませう。

宗淡　ハイ……（ト一寸困る體）

權太夫　いや、私が先へ聲をかけました、値段は後から、先づ私の方へ――

內藏助　いや、値段もいかほどでもかまひませんぞ。

宗淡　イヤこりや結構過ぎて困りましたな。

藤兵衞　イヤそれでは私も持つて來た此一幅、これを讓つて上げようかな。

內藏助　へーイ、どなたのお筆でござりますな。

庄左衞門　定めて名筆でござりませう早く拜見したいものでござります。

藤兵衞　さあまあ、御覽なされ。（先隣席の權太夫に渡す）

權太夫　何ぢや、「宗達筆屏風一雙、右質物に入候間銀子一貫目借用申候事實正也何時にても右御入用の節返濟可申候萬一調達致兼候はゞ右預置候品勝手次第に御賣拂可被給候爲後日證文仍て如件――中村內藏――

（云ひさして笑止相に下へ置く、皆驚く。）

ぬひ　（横から見て驚いて引たくつて裂く）エ、父さん、餘りでござります。こんな古い反故を持出して、皆樣の前で恥かゝす積りか、惡洒落にも程があるわいな。

藤兵衞　いや、恥かゝす積りでは無い、また反故ではない、

定家の色紙にも優る一幅、當家には寶であらうぞ。

ぬひ　そりやなぜにえ？

藤兵衛　されば、今でこそ此通り天下の名物を弄ぶ奢を極めた暮をしても、前はたつた一貫目を頭下げて借りた事もある、それを思うたら不足どころか、これを毎日床へ掛けて置くが何よりぢや。それでわざ／＼表具をさして、進物に持つて來ました。あの幅より好からうがな。

内藏助　イヤそれは御親切の程難有う存じます。私も恥ぢもせな、御尤もとも思ひます。しかしそれも一時、これも一時、無い時には一貫目も寶、有る時には千兩萬兩の名器も不足、それは其時々の身の上次第で、今の私が一貫目も無い様な氣でゐたら、大きな事は出來ません。春が來たら、梅も櫻も心一杯咲かさねば止まぬ私の心、あの太閤様でも草履取から出世をなされたというて、一生草履を戴いてござつたら、あの天下は取れません。取れば取る程心を張り、醍醐の花見、北野の茶の湯、遊まで大きくやられたので、室町此方荒野になつてゐた京も桃山の花盛り、また其氣象なればこそ、朝鮮までも征伐なされたのでござります。

藤兵衛　それ丈に二代と續かぬ。東照公様を見なされ、太閤様がパッパと手ばかり廣げてござる間、氣長う地道につゝましやかに、辛抱してゐられた故、其跡を受取つて二代、三代、四代、五代、六代、どこまでも續くぢやないか。

内藏助　それは私の氣象とは違ひます。人は一代やら何代やら、世の中に涯も知れぬもの、假令百代續かうとも、名ばかりでこれといふ事もせず、傳來の名物一二箇抱いた位で、良家がほした所で何になります。（三木、井川等不快な體）

藤兵衛　そんな事を云うて此家をどうするのぢや。末だに子供も無し。心細い事はござらぬのか。

内藏助　別に心細い事はござりません、子供があつた所でそれは其者の運次第で、どうなるやら知れません。私は力一杯自分の運を極めます。朝鮮、唐までも手が延ばされぬ窮屈な今の世の中、せめて名器を集めたり、名物を作らせるのが私の天下取りでござります。

藤兵衛　何ぢや天下取、エ、天下を亂す近年の銀の下落、其爲に諸式の高直、こりや一體誰のせゐぢや。

内藏助　それは私等の知つた事ではござりません。御勘定奉行荻原近江守様の御意見で銀の吹替、私等は唯申付の通りにするのが役、まあそんな俗な話は止めにして、あちらで御一緒に井戸の茶碗でお茶一つ召上つて下さりませ。

藤兵衛　エ、まだ名物の自慢なら分散の時見に來ませう。

それまでは來もせな私の方へも來ぬ樣にして下され。そんな心ではつきあはれぬ、私の家の風儀までくづれますわい。(荒々しく入る)

ぬひ　エ、呼ばなんだらよろしうござりましたなあ。(下苦しい思入)

(手代伊八出る。)

伊八　旦那樣、お奉行所から直ぐ出頭せいと差紙がまゐりました。(出す)

ぬひ　エ、お奉行所から？

內藏助　(不審の思入)では直ぐ行かねばならん。皆樣には御ゆるりと、お茶は宗匠に願ひます、御一巡濟むまでに歸つてまゐるでござりませう。

宗淡　承知いたしました。

(ぬひ心配相に顏を見る、內藏助手まねで制して下手へ入る。伊八附いて入る。)

庄左衞門　時ならぬ呼出し、何事でござりませうな。

太郎左衞門　されば丸で見當がつきません。

善左衞門　聞けば尾形光琳さんは追放になつたとやら、其掛合ではござりますまいか。

九郞左衞門　こりやさうかも知れません。光琳さんには始終世話をしてゐられたから。

惣左衞門　しかし其光琳さんは何で追放になりましたな。

身代は潰しても、惡い事はし相も無いお人やが。

宗淡　いや、いつかも女の事で訴訟沙汰になりましたからな、——

(與力、神澤彌十郞、同心多勢つれて伊八附いて出る。)

彌十郞　(ぬひに)家內は其方か。金銀財寶一切封印をつけるから左樣心得い。

ぬひ　(仰天して)エ、それは何のお咎めで？

彌十郞　奢超過に依り內藏助は遠島ぢや？

一同　エ、！(と驚く)

彌十郞　それ片端から！

(同心に指圖して諸道具に封印する。皆恐れあわてゝ銘々の品を包む。)

彌十郞　こりや〳〵勝手に手をつける事は相成らんぞ。

權太夫　いえ、これは私の物でござります。此通り箱に書いてござります。

善五郞　これも此通りでござります。

善左衞門　これは誌がござりませんが、私のに違ひござりませぬ。

彌十郞　誌が無うて何が證據ぢや。

善左衞門　でも私の本物の兵庫茄子でござります。

彌十郞　本物でも僞物でも同じ事ぢや、どちらにしても證人の判をそへて願うて出い。けふは兎に角持つてゆく。

善左衞門　あゝ面倒な事になつたなあ。

彌十郎　面倒どころか、まだ遠島や、追放になるものが四五人あるぞ。

一同　エー！

彌十郎　それ〴〵宅へ呼出しが行つて居ようて。

一同　エー！（皆仰天して逃入る）

彌十郎　（一々帳面へつける）牧溪の畫一幅、金の花生、眞龍岩の墨蹟一卷、千歲の硯筥一、片輪車の手筥、定家の色紙、兼好の文、雀の香盒、不破の香爐、兵庫茄子の茶入、光琳の畫額、茶の間はどちらぢや、倉はどこぢや。

伊八　ヘイ、此方でござります。（案内して入る）

ぬひ　あゝあれにも封印、これにも封印、茶の間も倉も皆封印。（よろ〳〵となつて柱にすがる）

（小傳次出る。）

小傳次　大變な事になりましたなあ。

ぬひ　どうしよう、どうしたら好からうなあ。

小傳次　どうするにもかうするにも、手の出し樣がござりません。何一つ持つて行かれず、着のみ着のまゝで出て行くより外はござりません。

ぬひ　衣裳比べは昨日の事ぢやないか。

小傳次　左樣でござります。あの羽二重も唯一日！

ぬひ　名筆のお羽織所か、眞の紙子も着られまいなあ。

小傳次　光琳樣は江戶へ行かれてまだ仕合でござります。

ぬひ　此方は遠島とはどこであらう。定めし波の荒い處であらうなあ。

小傳次　波も荒し、風も荒し、鳥も通はぬ處では、魚を取るか、木の實を拾ふか、食べる物まで御自身にお探しなさらねばなりますまい。

ぬひ　まあ、そんな處でどうしてお命が續かうぞいなあ。

小傳次　それにあなたはどうなされます。お里へお出でなされますか。

ぬひ　いえ〳〵私は歸らぬぞえ、母樣は生さぬ中、父樣には今の先あんな事を云はれた其跡で、裸同然ですがりつき、一生厄介になれるものかいなあ。

小傳次　でも外にお立退きなさる處がござりますか。眞葛原のお下屋敷も矢張お召上になるでござりませう。

ぬひ　エ、ならぬにしても彼所へ行けるか、またあの人はどうするであらう。

小傳次　それはどうするやら分りませんが、そこは泥水も飮んだ人丈、どうなとして行きませう。どうもならぬのはあなた樣ぢや。世間の風にお當りなされた事もないのに、かう不意な大嵐ではなあ――

ぬひ　あゝどうしたら好からうなあ――

小傳次　もつと加賀が近かつたら、飛んで歸つて、お殿樣

にお願をしようもの。

ぬひ　ほんにお前は加賀様から褒美に貰うたもの、其功もありながら、今といふ間にあはず。

小傳次　矢張お里へお歸りなさるより外はござりません。

ぬひ　いえ〳〵行く所が無うても、里へは歸らぬ。

小傳次　そんならどうしてお暮しなされます。

ぬひ　さあどうしたら暮されようなあ。

小傳次　それ御覽なされませ、こりや私が先お里へまゐりまして、お願ひ申して置きませう。外に仕様がござりません。（入る）

ぬひ　あ、これ〳〵何と云うても行きやせぬぞえ、と云うてどこへ行かう――どこへ行たとて、いつまで待つのぢや、待つてゐたとて逢はれるかいなあ。

（内藏助しを〳〵出る。）

ぬひ　オヽ！（すがりついて泣く）

内藏助　（あたりを見まはし）もう封印がついてしまうた。

ぬひ　お出でになると入れちがひに！

内藏助　それでは何一つ殘るまい。目の前にありながら、もう吾物で無い名器、家藏、明家よりさびしいのう。

ぬひ　どうしてかう不意に起つたのでござりませう。

内藏助　いやお上では前から御評議があつたと見えて、第一御勘定奉行荻原近江守様からしてお役御免ぢや。

ぬひ　エ！

内藏助　元祿此方（このかた）の金銀吹替、今更曲事（くせごと）とてお咎めになつたとやら。

ぬひ　では其巻添でござりますか。

内藏助　いや其爲やら、奢の爲やら、深江、細谷、關も遠島ぢや。

ぬひ　そゝゝして遠島とはどこへでござります。

内藏助　私は伊豆の大島ぢや。

ぬひ　そしていつまでゞござります。

内藏助　十年やら、二十年やら、一生やら分らぬのぢや。

ぬひ　まあ、一生やら分らぬ？　それではこれが此世のお別れになるやら知れませぬなあ。

内藏助　それは何とも知れぬ浮世、現に昨夜光琳さんの子の事を引受けたら、そこどころかけふは自分の――あ、そなたをどこへ頼まうやら――

ぬひ　いえ、私は跡に殘つて居られませぬ、私も一緒にまゐります。

内藏助　何をいふのぢや。一緒に行かれる位なら、かうまでに心配しはせぬ。しかし今まで金を蒔いた丈、また人を助けてやつた事もある故、かういふ時にはそれ丈の報があらう。心あたりへ使をやつたが、何とか返事があるであらう。

（伊八出る。）

伊八　旦那様、使が歸つてまゐりました。これがお返事でございます。

内藏助　（封を切つて見て）何おや、「御手紙拜見、御申越の儀折角ながら、此方も手狹故、御内方御引受申す譯にはまゐらず」エヽ、あんな廣い内の癖になあ――（他の文を明て）「此方近頃都合惡しく候へば折角ながらお斷り申候」エヽ、お蔭で都合が好くなりましたと、つい此間云つた癖に！（他を明て）「御卽答致兼候へば熟考の上お返事致すべく候」考へるまでも無いでは無いか。あゝなつたのも、私が世話してやつた故、此方は直に行かねばならぬ。――エヽ、どいつも、こいつも、盛の時は追從たら、かうなつたら逃口上、恩知らずめ、義理知らずめ、人間といふものはそんなものか――あゝもう外に無いかなあ――どうぢやお前達の中に好いあてはあるまいか。

伊八　私共の方では何ございません。私からしてどうしやうかと、とつおいつでございます。

内藏助　あ、去年店を出してやつた佐助の内はどうであらうな。

伊八　あの男はいけません、二貫目ほど穴をあけてゐたのが此頃になつて分りました。

内藏助　ではあの丹波へ片づけてやつたおかめはどうであらう。

伊八　あれもいけません、先の男といふのは從妹を世話するとだまして、島原へ賣つた相でございます。

内藏助　あゝどこも無いのかなあ。

後で多くのどよめく聲）

伊八　ヤ、あの聲は――一寸見てまゐります。（あわてゝ入る）

（またどよめき、石三ッ五ッ飛んで來る。）

ぬひ　あ、石が！

（伊八走つて出る。）

伊八　大變でございます、どこからともなく大勢が、お店先まで寄せてまゐりまして、旦那の事を惡口雜言、石を投げる奴もございます。

ぬひ　まあ、どうしたら好からうなあ。

伊八　こりや戸を破られぬ様、打付けてまゐりませう。（入る）

ぬひ　あれ、また石が飛んでまゐります。

内藏助　人の落目につけこむとは、卑怯な奴等！　かう上からも下からも追立てられては仕様が無い。少しも早うお前の身を――こりや里へあづけるより外は無いなあ――しかし今の先、あんな事を云合うて、今更よろしうお賴み申します、そんな事が云へるものか。それ見たかと

云はれるのは知れた事、あゝこりや身を刻むほどつらいなあ。

ぬひ　私もつらいばかりぢやない、其あとよりは先の事、食べる物まで御自身におさがしなさらねばならぬ處とやら、そんな處へどうしてまあお一人でやられませう。さあ一緒に行つて私がさがして上げますわいなあ。

内藏助　何をいふのぢや。どんな處へ行つたとて私は左程困りもしまい。其先より跡の事、お前があとでどうならう。あゝ矢張里へ頼むのか、私の顏は丸潰れぢやが、我を立てゝはお前の難儀、今まで一度も助けてくれと、誰にも云はぬ此私が頼みますと一筆書かう。それを持つて行つてくれ。

ぬひ　いえ〳〵一緒にまゐります、けど野風をつれては嫌でござんすぞえ。これからは私一人ぢや、私ひとり附いて行つて、魚も釣ります、木の實も取ります。海士や漁師は居りますか。取れぬ時は舞でもまうて、其代りに取つて貰ひます。何がよろしからうなあ——潮汲か——松風か——あの仕舞の所はあなたも得手ぢや、いかな海士でも喜びましよ。それ、「稻葉の山の峰に生ふる」あなた舞うて下さりませ。「まつとし聞かば今歸り來ん」ぢやわいな。

（段々狂氣の體。）

内藏助　（哀の思入）これ氣を落ちつけてな、何も心配する事は無い、向へ行つたとて、今更小言も云はれまい、親は泣寄り、私さへ折れて出たら引受けて下されう。お前の身が確で無いと、島へ行つても二重の苦、どこにどうして暮してゐようと思うては溜るものか。それ丈は安心さしてくれ。

ぬひ　いえ〳〵私は安心出來ませぬ。さあ舞うて下さりませ。こゝの家の名殘ぢや、此疊も踏み納めぢや。あなたの舞も見納めぢやわいな。

内藏助　（涙聲で）ほんに此家で舞ひ納め！

謠へ立別れ稻葉の山の峰に生ふるまつとし聞かば今歸り來ん

（ト立つて舞ふ。）

ぬひ　それは稻葉の遠山松、これはなつかし君こゝに

（下坐で）

へ須磨の浦廻の松の行平、立歸り來ば我も木蔭にいざ立ちよりて、そなれ松のなつかしや。松に吹來る風も狂して、すまの高浪はげしき夜すがら妄執の夢に見ゆるなり、我跡とひてたびたまへ。

（内藏助舞ふ、中へおぬひ踊の手でからむ、それも亂れて舞ひながら廊下を下手へ入る——水の音。）

内藏助　ヤア！

（驚いて跡を追ふ、半廻り、廊下續き下手に茶室、後木立、前中央に井戸、下手に石燈籠、內藏助走つて下りて井戸を覗く。）

內藏助　オ、！（釣瓶を下しては）おぬひ——おぬひ——誰ぞ早く、伊八！　與兵衞！　多兵衞！　佐吉！角藏！　吉助！

（呼びながら緣へ上つたり下りたり、茶室を覗いたりあちらこちらかけまはる。）

皆逃げて行つたのか。

（よろ〳〵となつて復井戸へ寄り、釣瓶を下す、引きかけようとする、櫛上る。）

あゝ醉醒の水に浮く妻の櫛、おぬひ！　お前は此家をのかなんだなあ。（ト淚聲）

（野風かけて出る。）

野風　內藏さん、今こそ私の心一杯、さあ受取つて下さんせ。（袱紗に包んだ髮一束を出す）

內藏助　野風、これを見い。（櫛を示す）

野風　こりや誰のでござんすえ。

（內藏助櫛で井戸の中を指す。）

野風　（覗いて）あれは？

內藏助　おぬひぢや。

野風　エ！（驚いて髮を落とす）

內藏助　私は出さぬがお前もあの家を——

野風　出ても心はどこまでもお附き申してまゐります。

內藏助　それや嬉しい、とも云はれぬのう。

野風　そんなら今はお心丈でも？

內藏助　月日を金銀、海山の屛風の中に獨寢ようか。

野風　でも夢ばかりは儘になりましよ。

內藏助　夢が儘でも何になる？

野風　私も狂氣になりたいわいなあ。

內藏助　あ、落ちてこそ花の露は沁む、これが奢の極みであつたなあ。

（行きかけろ、野風追ひすがる。內藏助其顏から井戸の中を見かへる。）

唄へもはやいのちも絕えなばたえよ
　　住めば恨めし同じ世に

此體よろしく幕

（大正九年）

八代目團十郎（二幕四場）

人物

市川團十郎　八代目
市川海老藏　團十郎の父
市川猿藏　團十郎の弟
市川鰕十郎
津國屋千右衛門　大阪の町人
武藏屋市五郎　江戸の町人
植久　仕打
金史朗　狂言作者
玉屋玉助　同
寅吉　金剛
萬吉　同
庄八　同
安藏　手代
久代　藝子
藝子梅松、玉千代、若菊、政榮
其他女中、見物、表方

時代　嘉永七年

第一段

其一　大阪道頓堀

平舞臺、上手に中の芝居、「兒雷也豪傑譚話」と「與話情浮名横櫛」の看板を上げ、下に口上、招き、「市川白猿」としたのを立て、續いて「堂島連より」とした米俵の積物、其下手茶屋、二階には三升の紋の紅提灯、下には三筋に蝙蝠、瓢簞つなぎの暖簾、店先には進物の引幕を飾り立てた書割。賑かな囃子で幕あく。老若男女大勢芝居積物茶屋の格子の前に立つて、皆向を見てゐる。

仕打植久、五十代、社衎、表方つれて上方から出る。
手代安藏下手から出る。

植久　オ、安藏、もうどこまでやつて來た？
安藏　今日本橋の下を通りました。
植久　どうや景氣は？
安藏　どうのかうので云へたもんやおまへん。大川から東堀の兩側はずつと提灯やら、篝やら、晝より明るい所へ、川つきの内は毛氈布きつめ、辻々や橋詰、橋の上まで人

で一杯、待兼て三味線ひくやら、鼓太鼓で囃すやら、殊に上場(あがりば)と來ては危ない程寄つてゐます。イヤも天神祭より盛でつせ！

植久　（にこ／＼して）　其筈や、江戸の人氣を背負うて立て、めつたに旅へは出さぬ八代目を引拔いて來たんや。其位はずさな面白無い。私は上場まで迎ひに行く。座へ着いたら直ぐ手打にかゝる樣ちやんと用意をさしといとくれ。

安藏　かしこまりました。（ト左右へ入る）

見物一　あれが仕打の植久や。名古屋まで飛んで行つて、親父の海老藏を口說落としたといふ事や。

見物二　左樣か、流石に甘い所に目を着けよつたな。もう親父では呼べんよつてな。

見物三　あれ、向から猿藏(さるざう)がやつて來た。

（市川猿藏、二十、柿の社布、金剛万吉つれて上手から出る。金剛寅吉下手から出る。）

寅吉　早くお出でなさいまし、もう相生橋を過ぎました。

猿藏　さうか、思つたより早かつたね。

寅吉　櫻の宮でも待ちかまへて居りやしたから、直ぐ迎ひの船へお乘りなさいました。

猿藏　例のいら／＼してゐるんだらう。

寅吉　何故だかいつもより青い顏をして、口もおきゝなさいません。

猿藏　けふはにこ／＼してゐる相なものだのになあ？（ト不審の體）

寅吉　さあ早くお出でなさいまし、道が通れなくなり相です。（ト附いて下手へ入る）

見物四　あれが八代目とは腹ちがひで親父の氣に入りといふ事やが、まだ／＼若輩(じやくはい)で見込が立たんなあ。

見物五　兄貴とは、代物が違ひますなあ。

（藝子梅松、玉千代、若菊、政榮、三升の紋の傘さして、上手から出る。武藏屋市五郎、江戸の町人風、三十代、羽織着流しで下手から出る。）

梅松　オヽ旦那、どちらへ？

市五郎　伊豆屋まで行くんだが、お前等はどこへ行くんだ。

玉千代　太左衞門橋まで出迎ひにまゐります。

市五郎　誰の？

若菊　知れた事、成田屋さんの。

市五郎　ハヽヽ、何成田屋が來るものか。それは乾度似せ者だよ。

政榮　阿呆らしい、似せ者で濟みますかいな。

梅松　此通りの人出といひ、大層な用意をして！

市五郎　でも本者(ほんもの)が來る譯が無い、外の役者と違ひ、市川は江戸市中の抱へ役者、湯治にゆくにも團十郎の名前を

連中へ預ける位だのに、田舍どころか大阪の芝居へ無斷で出て溜るものか。
玉千代　それでも出るのやこそ此人氣やおまへんか。
市五郎　本當に出るなら江戶つ子が承知をしねえや。
若菊　まあ不粹な、江戶つ子にも似合ひまへんな。
市五郎　いや、江戶の義理を踏みにじるなら己からして默つてゐねえ。見屆けた上一理窟を云はにやならねえなあ。
（ト上手へ入る。）
政榮　むつかしい事を云やはるなあ。
梅松　そんな事はどうでも好い。さあ、早く行きまひよう
（ト皆下手へ入る。）
見物六　イヤこりや江戶と大阪の引張合になりましたな。
見物七　でも出るに違ひ無ければこそそこまで來たのや。
見物八　あ、船が着いたかして、あの騷ぎ！
見物九　あの呼聲は上りましたな。
見物十　それ、そこへ見えました。
見物十一　成田屋！
一同　成田屋!!!　成田屋!!!　成田屋!!!　待つて居た！　待つて居ました!!　待つて居ました!!!
（ト皆前へ進む。植久、市川海老藏、六十四、剃髮、市川團十郞、三十二、柿色の杜衎、猿藏、金剛庄八、万吉、寅吉、其外表方附いて出る。上手から安藏、其外表方大勢出る。見物團十郞の側へ寄る。出方押分けて通す。）
安藏　お目出たう。
出方一同　お目出たうございます!!!
（團十郞目禮する、しかし浮ばぬ體。）
植久　さあ、直に舞臺で手打を願ひます。
安藏　音羽屋さん始め皆樣も揃うてお待ち受けてございます。
海老藏　それでは直に。（ト團十郞を見かへる）
團十郞　……ハイ……（ト少しためらうて口上、看板を見る、驚く。）
猿藏　兄さん――兄さんと云つたら――（團十郞悔しい思入）さあ、お入りなさいまし。
（團十郞默つて、苦悶しながら、體丈引かれる樣に皆と共に上手へ入る、見物跡をつけてゆく。）

其二　伊豆屋二階座敷

平舞臺、正面手欄、椽、上から葱草を釣る。左右障子向岸に灯の點つてゐる書割。下手斜に床、違棚、上手襖。津國屋千右衞門、四十代、大阪の富有な町人風、羽織着流し、手欄にもたれて坐り、上手へかけて梅松、玉千代、若菊、政榮酌をしたり三味線引いてゐる。前

に杯盤。

唄　へつがもねえ、花のお江戸をはる〲と、こゝに三升の八代目、さぞや色香もふかみくさ、ほんに名高い親玉ぢやわいなあ。

千右衞門　もう唄が出來たのか、誰が作つたのや。

梅松　梅升さんで。

千右衞門　人氣といふものは不思議なものやなあ。まだ年は若し、藝というた所でさう味が出てもせんのに。

玉千代　でもあの顏が錦繪の通り、品があつて、意氣で、艶があつて、愁を含んで——

若菊　どこやら淋しい所があるやおまへんか。

政榮　そこにまた實意がおます。本間の時次郎其儘たんな。

千右衞門　今度の與三郎もあの男の柄を見て書いたんやが、若旦那が惡黨になるといふ所はあの柄で無いと若旦那氣が無くなつてしまふ。

梅松　あゝ早見たい事！

玉千代　私は兒雷也が見たいわ。

若菊　私は勘平！　名古屋で大評判だしたと。

政榮　私は十八番の助六！

千右衞門　まあ追々出すやらう。

梅松　一度切やおまへんのか。

千右衞門　引止める魂膽やといふ事やが、さう甘く行くか知らん。

玉千代　此方でも江戸に負けん程贔屓にしたら好いやおまへんか。

千右衞門　それは私なぞは親父から大の贔屓、奢の沙汰で江戸拂ひになつても、矢張派手な氣象も面白いし、殊に伜は親孝行の褒美まで貰うた、其やさしい心立がまた自然に藝に出てゐる、あの藝と氣性と一になつて見える所が藝丈で舞臺と樂屋と別の人間の樣な役者より何ぼかあいゝか知れんな。

若菊　それで見る方でも舞臺ばかりやおまへん、親の歸參がゆりる樣不動樣へ日參した時でも、兩側は女子の山だしたとなあ。

千右衞門　さうや、それで又物堅い、あれ丈女子に騷がれながら、まだ浮名一つ立つた事も無い。先度も小塚原へ遊びに行つたが、泊りもせずに歸るので、相方のおでんといふ女が氣にして男衆に賴むと、己は日本の市川團十郎だ。小塚の女に馴染んだと云はれちや、家の瑕瑾だ、そんな事をいふならもう來ねえといふ。女は驚いて、それでは何でもよろしいから、これまで通り來て下さいとあやまると、ぢや二枚袷でもこしらへてやると直に機嫌

を直したと。
政榮　まあ、すつぱりとした氣象や事。此方でもさうだつしやろかな。
千右衞門　それはお前達の腕にある、いや腕よりは心にある。お富より浦里や、しうかの樣な女子は誰やらうなあ。
（女中襖を明けて出る。）
女中　ヘイ、成田屋さんが見えました。
千右衞門　待兼た、早うこれへ。
女中　ヘイ。（入る）
梅松　一寸、片付けまひよう。（ト慌てゝ片付ける）
玉千代　布團はどこにしまひよう。
千右衞門　まあ、そこらへ布いておけ。
（女中案内して團十郎、羽織着流しで出る。）
千右衞門　さあ、ずつとこれへ。
團十郎　ヘイ、先づ其後は久しくお目にかゝりませんでしたが、お變りも無くお目出たう存じます。
千右衞門　いつかの後日の與三切やつたな。今度は思ひがけない乘込で丸で夢の樣やな！
團十郎　……ヘイ……（ト俯むく）
千右衞門　私等は江戸へ行く毎に見て、土產話にもしましたが、一般の大阪の人は始めて、しかも評判は此方までも響いてゐるよつて此景氣や。私もどの位嬉しいか知れまへん。
團十郎　難有う存じます。
千右衞門　まあ好う來られたなあ。
團十郎　……ヘイ……
千右衞門　名古屋まで行たよつて、久々で逢ひたいとお父さんから呼んだと聞いたが、お前さんの事や、矢も楯も溜らん樣に飛んで來たのは尤、しかし好う江戸の仕打が放したな。次興行の話は極つて無かつたのか。
團十郎　いえ、極つて居りました。馬琴の怪鼠傳に、瀨川吾橋を如皐が書く事になつて居りました。
千右衞門　それに好う出したな。
團十郎　それは伜の間丈、信州戸隱山へ參詣かた〴〵伊香保の溫泉へ罷越度と、町内へも屆けまして――
千右衞門　それで默つて許したのやな。それにしても名古屋の芝居へ好う出られた。
團十郎　それは親父に逢ひますと、めつきり老衰致しましてねえ……其瘦背へ背負切れぬ借金……日數も僅でございましたから、つい出勤致しました。
千右衞門　それからまた此方へとは、お父さんもよく〳〵苦しいからであらう。お前さんもさぞ困つたらうなあ。
團十郎　いえ、私は只口上に四五日で好いから出てくれとの事でまゐりましたら、看板も上り、役割もきまつて居

りますーー

千右衛門　フム、そんならお前さんは何も知らずか。

（市五郎出る。）

市五郎　いや、知らぬとは云はれめえせ。

千右衛門　オヽ、武藏屋さん！　（團十郎びくつとする）

市五郎　お馴染甲斐に案内も無く飛込んだのは御免なせえ、お本物の成田屋がこんな景氣で乘込んで、大阪の舞臺へ出て、仕打は固より、江戸市中に知らぬと云つて濟むかねえ。

團十郎　………（俯むいて苦悶する）

市五郎　元祖以來市川は江戸の氣性を十八番にして、舞臺ばかり見物と息が通つてゐる間柄だ。睨めば睨み、泣けば泣き、藝も贊意も一になつてゐたではないか。それに代々名人といふより江戸つ子らしい役者が續いて、殊にお前の親父の藝風、武道から生世話物、何でもやつてのける凄い腕、道具衣裳ばかりか、暮らしまで贅を盡したのは、あれは親父ばかりぢやねえ、あの頃の江戸の習だ、それを件に江戸拂とは市中に見せしめの槍玉に上つたのだ。それ丈に不便が增し、お前さんの人氣も其裏だ、またあれから茶を斷つたり、絶食までして親の赦免を祈つた情には舞臺より泣かされやした！　そゝゝのお前さんだもの私等は固より市中一般ちつとの間も放されるものか。其心持を思ひもせず、斷りもせず知らぬ顏で大阪へ出るとは何の事だ。

（團十郎愈々俯むいてゐる。）

千右衛門　イヤ御尤や、一通りで無い御贔屓から、さうおつしやるのも御尤やが、また此方の事情も察しておやりなされ。これが何も自分の欲から出るのと違ひ、全く親父の爲でござります。海老藏も江戸を追はれて、此方へ來た時はまだ元氣もあり、上方には見馴れぬ藝風に一時人氣を集めましたが、追々年を取るにつけ、濃うなる丈女子供には向かず、内證は物入だらけ、借金が嵩むのも當前。やう〳〵八年目に赦免になり、江戸へ歸つても、もう時代は過ぎてゐます。また此方へ舞戻つても、愈々借金になるばかり、それでは伜を呼寄せるより外に切拔け樣はありますまいな。

市五郎　そんなら何故表向江戸の許しを乞はなかつたのです。

千右衛門　それでは今度の間に合ひません。

市五郎　間に合は無いで云譯になりますか、また江戸の仕打にしちや、一年通して買つた體、其間を拔かれちや、よもやよろしいとは云ひやすめえ。もう來年は河原崎座へ約束が出來てゐる筈、どちらへも斷りもせず、名古屋までなら旅で濟むが、江戸に劣らぬ大阪で、一度が二度

に三度になり、江戸から呼びに來た時は金で面を張る積か。それで濟まざあしらばつくれて、八代目で候と、大きな顔をして歸れると思つてゐるのか。

千右衞門　いや八代目で此方へは出やしません。白猿の名で出ます。

市五郎　白猿は五代目以來の俳名として通つた名、そんなごまかしは何にもならねえ、尙積にさはりまさあ。

千右衞門　そこを大目に見て下さるのが、江戸の廣い御氣象や。

市五郎　いや立てる所を立てなくつちや、廣い胸でも納まりませんや。オイ、成田屋、こりや己一人の云分だと思つちやいけねえぜ。江戸市中で此噂を聞きや今までの裏が來るぜ。景氣が好い丈尙積だ。大入が續いても、見に行かねえからさう思ひねえ。これ丈云つてもまだ虫が納まらねえなあ。

（ト荒々しく入る。藝子等顏を見合はせる。團十郎疊に突伏す。）

千右衞門　イヤ、江戸の人といふ者はさばけた樣で、一間違ふと喧嘩腰になるものや、しかし譯さへ立つたら、當つて碎けるのもまた早い。まあ何とかなるやらう。心配する事は無い。さあ一お上り。（ト盃をさす）

團十郎　（受けて）……ヘイ……

（藝子皆酌をしようとする、團十郎飮みもせずに置く。）

千右衞門　（藝子等に）機嫌直しに何ぞ陽氣な唄を歌ひんか。

梅松　陽氣な唄て何がよろしやろな。

玉千代　夕暮の作り替はどうだつしやろ。

千右衞門　ハ、そんなものより、先づ成田屋、お前さんに引合はしたい者があるが、逢うてやつて下さらんか。

團十郎　ヘイ、どなたかは存じませんが、お引合はせとあればいつなりと。

千右衞門　そんならこゝで直に逢うて下され。（藝子等に）お前等は一寸彼方で！

藝子　ヘイ、ではまた後程。（ト入る）

（千右衞門立つて緣側を下手へ入り、直戻る。藝妓久代續いて出る。島田髷、前に櫛、長い笄、簪二本差しちがへ、柿茶の襟、蝙蝠の裾模樣の着付。恥づかしい體。）

千右衞門　これは久代といふ島の内の、いや、藝子として引合はせはしません。大阪の女子と思うて下され。

團十郎　へ？（ト不審の體）

千右衞門　と云うても分るまい。實はお前さんに（ト二人を見て微笑を含み）見ぬ戀や。

團十郎　エ？（久代愈々恥づかしい體）

千右衛門　いや見ぬ戀とも云へん、見たわ／＼、お前さんの姿を錦繪で幾百枚、江戸土產に貰うたお始まりで、それから便のある每に取りよせてはためた／＼大抵揃へてゐる樣子、それからお前さんの藝風から、氣性まで開紀し、イヤもう見るより深う知つてゐる、が知つてゐる丈では濟まされず、見たうなり、逢ひたうなり、是非逢はずには置かぬと云うても、まゝにならぬ身の上に、じれてゐた所へ此乘込。不意の出合も緣であらう。それは眞面目な、凝性の女子や。揚卷ほど派手やないが、白糸より一本氣で、浦里よりもつさりでも、お輕の實意は受合や。お前さんも江戸の女子には鼻につかうが、それとは違ふ大阪の女子相手になるのも藝の爲や、いや藝より實意で附合うてやつて下され。好いか。

團十郎　へイ……（ト久代の顏を見て驚く體）

千右衛門　跡は本人から直に聞くが好い。久代、好いか。（ト目くばせして）　イヤまた後に逢ひませう。（ト上手へ入る）

唄　〽錦繪にながめ三升の面影は月の桂の男氣の伊達な心が見ゆるぞえ。

（此間團十郎承を聞きに立つ樣な振をしてはまた戻つて久代と顏を見合はせ、愈々不審の體、久代極りの惡いこなし、德利を持つてはまた置き、盃を洗うては、改めてさして。）

久代　一、いかゞ？

團十郎　私は酒は。（ト云ひかけてつい盃を受けて一寸口をつけ）　あゝ、どうも不思議だねえ——

久代　不思議とは？

團十郎　でも餘り好く似てゐるから！

久代　どなたに似て居ます？

團十郎　阪東しうかに？

久代　エ、しうかさんに？

團十郎　あれは私の時次郎に浦里、金五郎に小さん、助六に揚卷、と、舞臺で相手になるばかりで無く、樂屋でも氣が合つて、兄弟、でも無く、女夫、でも無く、親しい中に女の樣な所もあり、ほんの女であつたならと思ふ所もありましたが、今お前さんを見るとハッと思つた位、其しうかに似てゐるとは、不思議な事もあるものだね。

久代　（嬉しい思入）……まあ、どうしたら好いでせう、しうかさんに私が……

團十郎　似たと見るのは私の目丈か、なつかしいと思ふせゐか、いや矢張似てゐる、本當に似てゐるねえ。（ト愈

愈見ろ）

久代　さう御覽なさつたら陰へ入りたい樣でござります。

（ト何恥づかしいこなし）

團十郎　いやお前さんも亦錦繪で見た私、さぞ逢つてゐただらうねえ。

久代　逢ふ所か繪にも出ぬ所が見えまして……

團十郎　どんな所が？

久代　どんな所と云うて口にも云へません……

團十郎　思わくと違つた所が？

久代　いえ？　思うたより深い所が！

團十郎　エ？　（ト改めて顏を見合はせる）

唄〽あれ、なつかしいでは無いかいな。

（團十郎盃をほして久代に差す。久代受ける。團十郎ついでやる。）

團十郎　あ分らぬものは世の中だなあ――今まで多い贔屓の中で格別これといふ女も無く、女嫌ひとまで云はれたが、胸の底では誰を待つやら、どこでめぐりあふ事やら、思はぬ樣で思つてゐたが、心ならず來た此土地で、本の女のしうかにとはなあ！

久代　私は極て居りました、一生の中、是が非でも、舞臺ばかりかお側近くお目にかゝらにやおかぬとまで思ひ込んでゐましたが、江戶へも行かず此土地で、舞臺より先に逢はうとは、それこそ分りませなんだなあ。

團十郎　では此先もどうなるやら？

久代　どうなるとも極めました。

團十郎　何と極めたね。

久代　エ………（ト俯むく）

（軒の葱草につけた風鈴落ちる。）

團十郎　（びくつとして）あ、風も無いのに、切れたのは？

久代　（も一寸氣にして又氣を變へ）何が切れても、此心は！

團十郎　切れぬと云つても、無常の浮世！

（雨の音。）

久代　あ、降つて來ました！

團十郎　一時か、本降か、身に沁む樣で、はかないなあ。

唄〽さあ、泣いても好いわいな。

此體よろしく幕

第二段

其一　中の芝居樂屋

平舞臺、正面板壁、前薄縁を布き、中程に机を置く。狂言作者金史郎、机の前に坐つて、臺帳を明て見、下手に玉屋玉助、拍子木を持つて控へ、前の方に海老藏羽織着流し、盜賊夜叉五郎の役、市川鰕十郎、四十代、羽織着流し、高砂勇美之助の役で、兒雷也の棧橋の場の暗鬪の稽古をしてゐる。出場になり、立上つて、三人からむ。

意氣が合はぬ體。

團十郎　一寸待つて下さい、どうも何だか、しつくり合はない樣で。

鰕十郎　矢張此方とはどこか違ふと見えますな。

團十郎　どうかも一度願ひます。

（復やり直す、少し進んで復甘くゆかぬ體。）

團十郎　どうもいけねえ、こゝはかうゆきませうか。

鰕十郎　そんなら私はかう出ませう。

海老藏　すると私はかうゆかなくつちやならねえ。

（やり直す、尙合はぬ體。）

團十郎　（じれて）尙いけませんね。

海老藏　お前が早過ぎるんだよ。

團十郎　あなたまた長過ぎます。

海老藏　それは上方ではゆつくりやらなくつちやいけねえからよ。

團十郎　ぢやも一度願ひます。

（やり直す、愈々合はぬ體。）

團十郎　（癇癪を起して）どうしたんでせう、矢張思ふ樣にゆきません。

海老藏　まあ、此位で好いにして置かう、舞臺へかけちや追々まとまつてゆくだらうよ。

團十郎　でももつと合はせて置かなくつちや舞臺へ出られやしません。

海老藏　相變らず癇性だね、だが旅でまでそんな事を云つてちや仕樣が無いぜ。

團十郎　いえ、旅ぢやございません、大阪の晴の舞臺です、江戸も同然、尙大事にしなくつちや、私ばかりか江戸の名折になりますからねえ。

鰕十郎　そんなら今度こそお客樣が見てござると思うて、本眞劍にやりませう。

團十郎　私はいつでもお客樣を目の前に置いてやつてゐるんです。

海老藏　いや、藝にかゝつちや、お客樣も自分も忘れて、一心に其役にならなくつちや、本當の味は出るものぢやないよ。

團十郎　私はどうしても相手ばかりか御見物と息が通はなくつちや、氣乘りがしません。
海老藏　それはまだ若いからだ、入不入にかゝはらず、自分でかうと思つたらどんな半疊を打ちこまれても、びくともしない樣にならなくつちやいけねえ。
鰕十郎　今度は大丈夫大入で、半疊どころか割れる樣な聲が掛りませうな。
團十郎　ぢや、尙稽古をして置かなくつちやいけません、も一度今の所を。
海老藏　さう度々同じ所を、鰕十郎さんにも氣の毒だ。
鰕十郎　いえ、私は幾度でもかまひませんが。（ト云ひながら厭な顏）
海老藏　流石に己も閉口だ、さあ先をやらう。（下手に向つて）彈いてくんねえ。
（先の合方をひく團十郎氣の進まぬ體。）
團十郎　（中途に止めて）どうもけふはいけません。
海老藏　何故？
團十郎　何だか氣分が惡くつて、頭がふら〳〵とする樣です。
玉助　お藥を取つてまゐりませうか。
史朗　暫くお休みになつたら如何です。
團十郎　けふはこれで歸らして貰ひます。

海老藏　エ、歸る？　それこそ中途半端になつて、初日に間に合はないぢやないか。
團十郎　でも……やつてゐられません……あゝ倒れ相だ……（よろめく）
玉助　（支へて）お危なうございます。
團十郎　皆樣御免なさい……（ふらふらと下手へ入る）
海老藏　（見送つて）例の持病にやこまつたものだ、どうか勘辨してやつて下さい。
鰕十郎　よろしうござりますとも。
史朗　では、今の跡はおあづかりとして、次の幕にかゝりませう。
玉助　次も矢張兒雷也が出ますが？
海老藏　仕樣がねえな。
史朗　いえ、手に入つたお役ですよつて大丈夫で、皆さんの方でどうぞよろしうお相手を。
鰕十郎　でも何ぼ此方から合はしても、いきなりではお氣に入りますまいからなあ？
海老藏　と云つて初日を延ばされやしねえ。
玉助　元來せき過ぎるのが無理ですなあ。
海老藏　私が何でも引受けて、やつてのけるのを見つけてゐるからでせう。あれの出ない所丈やつて置いて下さい。
史朗　よろしうござります。

海老藏　ぢや皆さん。
史朗　（臺帳を改めて）賤が家の場。
（玉助拍子木を打つ――道具まはる。）

其二　島の內植久奧座敷

平舞臺、上手斜に床、違棚、續いて陰氣な地色の壁、下手襖、其外、細い廊下二階の上り口、後壁。團十郎横になつてゐる。植久急いで上つて出る。

植久　親方、如何でございます。不意にお惡いと聞いて、びつくりしました。
團十郎　（起上つて）どうも氣分がすぐれませんのでねえ――
植久　困りましたな、今お醫者がまゐりますが――
團十郎　いや、お醫者樣に見て貰つても、仕樣がありませんよ。
植久　仕樣が無い事がありますものか、是非翌初日にしたいと思ひますよつて――
團十郎　エ翌が初日？　そんな事が出來るものですか。
（ト立腹の體）
植久　出來ん事はござりません、あなたさへ好かつたら、外はどうでもなりますよつてな。
團十郎　いやまだ稽古も足りないし、氣分がどうも進みませんから――
植久　稽古はもう入りまへん、親方の當り藝やごあへんか。
團十郎　でも他は初役ばかりですからねえ――
植久　大丈夫で、皆親方ばかりに目をつけますさかい、他の事はどうでもよろしうおます。
團十郎　さうはゆきませんよ、皆がぴたつと合はなくつちや、私だつて甘く出來やしません。もう一度稽古しませう。
植久　いや、それでは困ります。もう番附にも辻びらにも、翌としましたし、茶屋々々へ京近在からも附込、もう夜船に乘つて來て、木戸へ押かけ向正面へ滑り込んでゐる人もござります。それに一日でも延ばしたら、どれ丈皆の損になるやら、いや、張り倒されるかも知れまへん。
團十郎　そんな事を云つて、始めの話では唯一寸口上に出てくれといふ事だつたぢやありませんか。
植久　いやそんなことはおまへん、是非一芝居といひました。
團十郎　いや私は聞きません、誰に云ひなすつた。
植久　御隱居に云ひました。
團十郎　エ、親父に？
植久　それに今更聞かんなんて、それではあんた、御隱居の顏を潰してもよろしいのか。

團十郎　…………

植久　イヤこりや御隱居にも聞いて貰はにやなりまへん。（ト立つ）

（海老藏上つて出る。）

海老藏　イヤそれは私が惡かつた。もつとはつきり云へば好かつたのに、最初の話が口上丈、それで得心したら一芝居、まあ〳〵大阪へ行つた上でと來て見ろと此始末だ。また思つたより大人氣に初日をおせきなさるのも御尤も、ちつとも早く見たいといふ御見物の思召も難有い、己の時より立つ景氣に嬉し淚がこぼれたよ。

植久　さうだすとも、御隱居も長々の御苦勞に、莫大の借金、其重荷を下すのはあんたばかりや。

海老藏　何よりも急なのは去る旦那に五百兩といふ恩借があつたが、今度俄に入る故戾してはくれまいか。六七十日も立つたらまた貸してやる、己もよく〳〵の事故云ひ難いがいふとのお話、よろしうございます、早速お返し申しますと、云つたもの丶外に工面が出來るものか。

團十郎　エ、そんな急なのがございましたのか。

海老藏　折角贔屓にして下すつた大阪のお客、其御恩を返さずには、これからも顏が出せない、と云つて江戸ではもう遲い、田舍まはりに落ちぶれて、あの樣はと云はれちや、思ふさま派手に暮らした以前に對して濟らねえ、いや私ばかりか市川の名折だ。お前も氣が進むまい、かたくるしい氣象では、江戸に濟まぬと思ふだらうが、この所を呑込んで、翌を初日に勤めてくれ。今までとても給金を受取る毎に私へ初穗、今また私の爲にとは、吾ながら云はれねえが、私ももう長くはあるまい、ちつとでも側に置きたし、此世の名殘に同じ舞臺へ出たくもあり……（段々泣聲になり）いつか孝行の御褒美をお上から戴いた時も、私は此方で手紙を見て、難有淚、嬉し淚に、人目も恥ぢず聲を上げたよ……其孝心に倚の事こんな事をいふ私の苦しさ……江戸拂になつた時より、此胸が、燒ける樣だ！

（團十郎俯むいて泣く。）

植久　御尤もなお心の內御推量申します。いえ私とて決して大儲けしようといふ欲からではござあせん。江戸で放さぬ市川親子を一手で大阪の舞臺へ出した、好うやりよつた、豪い奴と云はれたさ。さう云はれたら損も得もござあへんわ。現に乘込丈にも隨分の物入、何ぼ大入が續いてゐます。お二人共の御身上を樂にして、また御隱居の內證も知つても、引合ひ相もありまへんが、藝一心におなりなはつたら、芝居道の爲にもなる事と思ひましてな―

海老藏　いや、私はもうこれまでだ。十一で七代目になつてから、此年まで何十年。家の藝を始めとして、新物も

諸へ渡し、大極上々吉と位をつけられ、三都から異國まで知られたからは、今死んでも惜くない、氣がゝりは唯子供等、海老藏はまだ若輩、權十郎は倘分らず、お前にはまだ家内も無し。も少し先途を見屆けてと子煩者と云はれる丈未練も多い親心、それも結句苦になつちや、つくづく世の中も厭になる！　あゝもうどうでも好いや、一生重荷に惱まされて、大阪どころか、どこの片田舍の土になつても仕方がねえ―　江戸拂ひは赦免になつても、もう歸られないのが運だつたなあ――　（ト向を見る）

植久　そんな事を云うて、第一それでは翌の初日をどうなはる。

海老藏　……でも悴が此體ではねえ……

植久　でも今更どうなります。

海老藏　さあ……どうと云つて仕樣が無い……私が重荷を重ねませうかね。（ト苦い顏）

植久　エ、あなたが？　（ト其顏を見る）

海老藏　淵に沈むには、思ひきり重いが好いね。

團十郎　（決心の思入で）　いえ、お父さん、御心配にはおよびません。重荷は私が引受けませう！

海老藏　おや出るかね。

植久　初日は翌でも？　（ト首を出す）

團十郎　……へイ……

植久　稽古も氣分も此儘でも？

團十郎　……へイ……

植久　イヤ、それで安心致しました。御隱居、難有う存じます。これで私始め、何千、何萬の人が喜ぶか知れませへん。早速樂屋へも觸れまして、愈々用意にかゝりませう。あゝお目出たうござります。（トいそ〳〵入る）

海老藏　（ぢつと悴の顏を見ていて）　お前、思ひ過ごしにしめえな。

團十郎　……いゝえ……

海老藏　まあ、今夜はゆつくり寢るが好い、翌の氣分でまた相談をしませうよ。

團十郎　いえ、もう御相談する事もございません。

海老藏　おや本當に決心したね。

團十郎　へイ。（トきつぱり云ふ）

海老藏　（まだ氣にかゝる思入で）　あゝ飛んだ苦勞をさせたねえ――　（ト心殘して入る）

團十郎　（つか〳〵と二階の下口まで行つて跡を見送り）　お父さん……勘忍して下さい……　（よろ〳〵と元の座敷へ戻つて、柱にもたれかゝる）　私よりあなたに愈々苦勞をかけまして。孝行どころか大不孝になりますが……私はどうしても江戸市中の御贔屓に濟みません。此前の樣に舞臺で暇乞をして、さあ行つて來いと景氣好く送り出

されてこそ曇りの無い親子の對面、元氣もついて歸られました。それに今度は斷りもせず、お仕打に裏切つて、どうして舞臺へ出られませう。御見物と息が通つてこそ藝も生きる私の持前、氣が咎めて何が出來ませう、と云つて此方の御見物、乘込のあの人氣、新奇な力が入る樣だし、親父樣と同じ舞臺、腕はぶる／＼震ふ樣だが……其腕にはまた江戸の血が通つてゐる！ イヤ、親の血も通つてゐる！ 親の重荷を下しては、江戸の血が煮えかへる！ 江戸へ義理を立てゝは、親の血が涙と流れる！ 義理も立てず……恩愛に背き……エヽどこの舞臺を踏まれやう？ 出るに出られず……歸られぬ……私の命は兩方へ差出します。お父さん！ あ江戸はどちらに當るやら？ （ト手をついて） 皆樣のお顏も見えて來る！ お母さんの顏も……そこに見えるな、……

（ト泣く。久代急いで出る。）

久代　あ、親方。何を泣いてお出でやす？

團十郎　オ、いや何……何でもないのさ。

久代　でも、涙が出てゐます？

團十郎　……それは…… 不圖お母の事を思ひ出して……

久代　江戸に殘つてお出でゞすの？

團十郎　木場の內に居るんだ……今度立たうとして脚絆の紐を結ばうとしたら、錺のぼたんが不意に落ちたよ！ お母は氣にしてね、これは何か惡い前兆、けふは止めにして別の日にと云つたんだ、それを聞かずに大丈夫ですと出て來たが…… 蟲が知らせるといふ事はあるもだのねえ。

久代　エ、何ぞ惡い事がござりますの？

團十郎　なあに、まだありやしないがね、今までも長の苦勞、親父と離れてゐる丈尙心配、私も幕間には機嫌を聞き女房を持てと進められても、斷つてゐたのは母の爲――

久代　そんならいつまでもお獨りで？ （ト心細相に）

團十郎　獨ぼつちが私の一生！ 母の爲ばかりで無くなつたよ。

久代　まあ、酷い、あんな事を！ （ト恨めし相に）

團十郎　いや、久代はん、お前さんに賴んで置くよ、私の舞臺は見なくとも、錦繪より濃く覺えてゐておくれ！

久代　錦繪どころか本のお顏を、舞臺は固よりかうお側に見てゐるではござりませんか、それに覺えてなどゝ別れる樣な事は氣になります。

團十郎　いや、舞臺は戰場だ、敵もあり味方もある、必死の覺悟で出なけりやならないからね――

久代　さう云へば私でも必死の覺悟でかゝりましたが、乾度敵が出來ませうな。

團十郎　敵よりお前の覺悟だ、浮氣で無いと見たから賴む

よ、幾萬の贔屓も嬉しいが、其中で唯一人の眞底に刻んであると思はずには……行かれないから！
久代　まだ思はれませんの？
團十郎　でもまだ逢つたばかりぢやないか。
久代　私は幾年お馴染か知れませんわ。
團十郎　ほんにしうかとは長の馴染、其續合と思や昨今でも無かつたね。（ト悲し相に見る）
久代　（も見て）あ、悲し相な其お顏？
團十郎　でもしうかはあれからどうしてゐるやら、さぞさびしがるだらうなあ。
久代　しうかさんより私こそ、江戸へお歸りになつたらなあ――
團十郎　だから好く覺えてゐておくれと云ふんだ。
久代　覺えてゐる所か、私もお跡から行きますわ。
團十郎　エ、跡から？　江戸より遠い處でも？
久代　どこであらうが、參ります。
團十郎　……其心丈で澤山だ。（懷から紙入を出して渡し）これは私が好んで織らせたので、此道中も肌につけてゐたのさ。
久代　（受取つて）難有う、けど何や形見の樣ですなあ。
團十郎　……土産とも思つてお置きよ。
（寅吉上つて出る。）

寅吉　御免なさいまし、久代さん、お迎ひでございます。
久代　もう迎ひに、ぢや直參りますとなあ――
寅吉　へイ、さう申します。（入る）
久代　親方、おやまた明日！
團十郎　其明日は……（トぢつと見て）どうだかねえ…
久代　あ、お約束がございますの？
團十郎　約束と云や約束かも知れねえな。
久代　まあ、どこからのお約束が？
團十郎　先の世からやら、後の世やら……賴んだよ。
久代　何やら胸が……
（ト取りつく。）
（團十郎引よせて又放す。）
御機嫌克う！　（氣にしながら入る）
（鐘の音。）
團十郎　（床の間の短刀を取つて、拔いて見て）魂に錆は無いなあ。
（屛風をまはす、猿藏上つて來る。）
猿藏　兄さん――兄さん――もうお休み？　御氣分はどうかと、お父さんが心配してゐますよ。好うございますか――兄さん――
（ト覗く。）
オヽ！　（驚いて）お父さん――大變だ！　大變だ！

大變だ！

（海老藏、寅吉、庄八、萬吉急いで上つて出る。猿藏屏風の中へ指さして物も云はぬ。皆側へ寄つて覗く、屏風倒れる、團十郎短刀を手にして俯伏し自殺してゐる體。海老藏手を肩にかけて悲痛極まる思入。皆驚嘆の體。鐘の音で幕。）

（大正十二年）

壇の浦（二幕三場）

人物

二位尼
平宗盛　尼の二男
平知盛　尼の三男
平清宗　宗盛の子
鬼王丸　知盛の子
平有盛　尼の孫
玉蟲の前
冷泉　乳母
三郎丸　牛飼
唐笠法橋
やどりき　法橋の娘
小藤次　法橋の二男
田口民部重能
駿河次郎
右近　侍女
小辨　同
市助　町人
千六　職人
其外源氏の兵卒

第一段　壇の浦海上

其一　御座船

一面船の上、前後に櫓、中央に帆、下手に鷁首、向う陸の山、缺けた月がかゝつてゐる。其間海の書割、夜明前。平有盛、二十一二、直垂、笛を吹いてゐる。玉蟲の前、十八九、藤の袿、緋の袴で上手から出る。暫聞いてゐる。

有盛　（吹き畢つて心づき）オいつの間におぢやつた。
玉蟲　先程から聞いて居りまして、今までにも無く、身に沁みました。（ト側へ寄る）
有盛　（立上つて）此世の名殘に覺えてゐておくりやれ。
玉蟲　エ、では此いくさに？
有盛　あゝ、當家の運も極まつた。日景を返す勢も白旗の影見たばかり、一戰もせず都落、一の谷も屋島も落とされ、此西の海に漂うて、けふのいくさを最後とは！　斯樣な事になると知り、諫めても效も無く、我と命をお縮めなされた父小松殿のお心が今更思ひやられるわい。

玉蟲　おん兄君清經様も海にお沈みなされたのは一昨年の十月。維盛様がお逝れなされたのは去年の春。

有盛　我等は逃げも沈みもせぬ、どこまでも一門と運を共にする心。

玉蟲　妾も共にしようにも、先手へお進みなされましたら？

有盛　それはとこでどうなるやら？

玉蟲　其知らせさへ無かつたら、何を相圖に致しませうなあ。（と心細相に顔を見る）

有盛　いや今まで離れぬ互の心、今後先になればとて、僅の違が何であらうぞ。

玉蟲　では待つてゐて下されませ。

有盛　しかしあの世の道も六あるとか、其修羅道は今目前——夜もほの／＼と明けて來た。（見まはす）

玉蟲　あ、陸にも白旗、海にも白旗。

有盛　幾千艘あらうなあ。

（清宗、十五、直垂、急足で出て見る。）

清宗　ほんに多い敵の船、味方は總て千艘ばかり！

有盛　いやまだ熊野の別當や、伊豫の河野、阿波の田口がまゐる筈ぢや。

（宗盛、三十五、烏帽子直衣、上手から出る。）

宗盛　田口民部はまだまゐらぬかな。

清宗　あの船がそれでござりませう、オ、此方へまゐりました。

宗盛　まゐつた／＼。これでいさゝか心づよいのう。

（風波の音高くなる。）

玉蟲　折悪しう東風、汐も西へ流れまするなあ。

清宗　味方の船も、こりや押し流され相でござりますなあ。

宗盛　敵の船が乗出したな。（矢鴿首に立つ）

玉蟲　あゝこゝまでも！（と恐れる）

（平知盛、三十四、烏帽子、鎧、采配もつて出る。）

宗盛　オ、知盛、敵の遠矢が早茲までも飛んでまゐるぞ。

知盛　何遠矢が？　と矢をぬいて見て）音羽の小藤次。

清宗　あ、扇を開いて此方を招いて居りまする。

知盛　此矢射返せといふ事ぢや。誰ぞ無いか。

宗盛　此船にはなあ——。

知盛　では我等の家來に申付けう。

宗盛　あ待て、して先手の様子は？

知盛　先陣は山鹿兵藤次、續いて松浦黨、其次は一家の人人、いづれも元氣盛でござるが、唯田口民部ばかり、心變りしたと覺えたれば切つて捨てたうござりまする。

宗盛　エ、民部が心變り？　そりや眞とは覺えぬ、これへ呼んで糺して見よう、それ。

有盛　ハッ。（入る）

知盛　一人裏切る者ござれば、互に疑ひ、軍氣は亂れ、二人、三人續くが習、今味方は小勢でも、心を一に堅めたれば、船いくさ知らぬ阪東武者波の飛沫と致さうが、二心抱く者ござつてはなあ——

宗盛　いや、味方に左樣な者はよもあるまい。

知盛　無いどころか、既に都落にも池殿は遁れましたぞ。九州では緒方の謀叛、旗色何ふ浮薄の世の中、先づ斬つて鬪まさずば、けふの勝負にかゝはりまする。

（有盛先に田口民部重能、六十前後、鎧、直垂で出る。知盛見つめる。）

重能　お召しまでも無く、參上致さうと存じました。

宗盛　民部、其方心變りしたといふ事ぢやが？

重能　これは思ひもよりませぬ、何者が申しましたやら？何を證據に左樣な事を！

知盛　證據は何より、汝の嫡子教能事、敵に降つたは何故ぢや。

重能　ありや伊勢義盛に、某先づ降人にまゐつて居ると欺かれた故でござります。

知盛　欺かれたと知つたなら、何故また歸參せぬな。

重能　そりや軍律嚴しくて、其隙も無いのでござりませう。

知盛　それではけふのいくさ半に此方へつけと密使を立てい。

重能　ハッ……

知盛　彼方へつけと其方に申し越したら何とするな。

重能　ハッ……

知盛　親子分れていくさは出來まい、親の方へ呼戻すか。

重能　……それは……

知盛　子の方へそちがまゐるか。

重能　……それは……

知盛　最早向うへ行くとしたな。

重能　決して左樣な……

知盛　密使の往來を見とめたぞ。

重能　エ……

知盛　覺悟致せ。（刀を拔きかける）

宗盛　待て〳〵。其密書をこれへ見せい。

重能　左樣な物がある筈はござりませぬ。

宗盛　それでは子の事は何とするな。

重能　今更彼を招きましても、最早其隙もござりませぬ故、親子別々に弓ひきあふより外はござりませぬ。

宗盛　では其方は當家の方へ？

重能　何しに心變り致しませう。既に八島へお渡りの時でさへ、眞先に驅けつけまして、かたの樣な內裏をお造り申したではござりませぬか。また勝浦では弟能遠、義經を防ぎ止め、家の子悉く討たれたではござりませぬか。

伜が敵に降りましたも親を思ふ情の弱味。其子も思切りましたに、まだお疑ひ下さるは、お情厚い御當家にしてはお恨めしう存じまする。

宗盛　いや今更疑ふ譯では無いが、味方の心を一にする爲。

重能　では某の心お目にかける爲、先陣にお出し下され。

知盛　エ、眞先に敵に附かうとは不敵者め。（復刀に手をかけて宗盛の方を見る）

宗盛　いや／＼此期に及んで、よもや左樣な――こりや、先の陣に備はつて、四國の者共にいくさ能くせよと下知してくれい。

重能　かしこまつてござりまする。お疑ひ下さらずば、何しに心迷ひませう、者共へも確と下知するでござりませう。

（立つ、知盛も立つて睨む。宗盛目で制する、重能わざと冷靜な粧うて入る。）

知盛　（惜しがつて）エ、何故お許しなされませぬ。

宗重　でもしるしも無いでは無いか。

知盛　あの顔色が見えませぬか。

宗重　顔色ばかりで判斷出來ぬわ。

知盛　其不決斷が味方の破滅ぢや。

宗盛　でも父上でさへ、あの頼朝すらお助けなされた。

知盛　それ故此いくさになつたのではござらぬか。

宗盛　いや無慈悲をせぬが當家の習ぢや。

知盛　それは太平の時の事、いくさに臨んで容赦するなら、先づ兜ぬくが好い！　あゝ當家も最早これまでぢやなあ。

（二位尼、練色の二衣白袴で出る。）

知盛　母上！

二位　知盛、そなたと計る事がある、外の者は遠慮しや。

皆　ハア。（二人の外入る）

知盛　某と御相談とは？

二位　されば、そなたのいふ通り、早これまでの當家の運命、一家一族此海の藻屑となるも是非が無い、唯心がかりは吾君の事、當家の爲に御身にまで波かけて相濟まうか。今の内に人つけてお落とし申してはどうであらうな。

知盛　何樣、こりや好い所へお心がつきました、しかし最早夜も明けて、海も陸も敵の目の前。

二位　それには此船を前へ押出し、妾自身御衣を抱き、水の中へ飛入つたら、敵の目も欺かれ、お行方も安からうぞ。

知盛　あ、流石は母上、悲しくも勇ましい御覺悟、しかし、それは愈破滅となつた上の事、まだ最後まで戰ひます故、早まつた事なされますな。いざといふ時お知らせ申すでござりませう。

二位　それでは相國を待ちますぞえ。あ、今思ひ當るのは人の世の浮き沈み、殿上の交りさへ嫌はれた人の子が天下を握り、日の本の半まで知行とする一家の繁昌。其榮華は共にしても、それほどに樂しくなく、入道殿の増長我慢。

知盛　都まで移されたが、はては焦熱地獄の病。

二位　其焦熱を共にして、今八寒の地獄に入るとは、斯樣な事になるならば、都の土になつたもの。

知盛　それも兄宗盛殿の弱さ故。

二位　いやありやそちの兄では無い。

知盛　エ、宗盛殿が兄で無いとは、それではあなたのお子でもござりませぬか。

二位　さうぢや妾（わらは）の子では無い、ありや淸水（きよみづ）の北阪に傘張つて商なふ法師の！

知盛　何法師の！　それがまた何故に？

二位　されば嫡男重盛を設けた次の時、入道殿は獨ぎめに、弓矢取る身は男子こそ寶よ、此度も必男子と下知する樣に云はれたのに生まれたは女の子、何とされうかと恐ろしさに、京中を尋ねさせて取替へたのがあの宗盛！

知盛　それならば何故早く知らせては下さりませぬ、今更素性を洗はぬまでも氏の長者とはして置くまいもの！（くやしがる）して其女子は？

二位　それは音信不通故、尚氣にかゝる此年月、其後に出來た女の子はとり／＼に幸して一人は國母にまでなつたのにと榮華につけて思ひやつたが、今となつては壹目も見ず、傘張つてがた暮らしてゐよう、それが却つて仕合になつたとは。

知盛　あ、驚き入つた互の身の上、では姉君がござりましたか。

二位　今始めて打明けて、弟となつかしがり、も一目見ずに死んで行く眞の母が茲にとは、夢にも知らず平家の滅亡餘所事に聞かうぞいのう。（と泣く）

（有盛出る。）

有盛　伯父上、お察しの通り田口民部裏切りましてござりまする。

知盛　愈裏切？（と向うを見て）オ、熊野の別當、伊豫の河野も！（口惜しがる）

二位　四國鎭西の者共まで！

知盛　何、一々海に漬けませうぞ。續け！

（屹となつて入る。有盛も入る、玉蟲、右近、小辨、急いで出る。）

玉蟲　有盛樣！（其跡を見送る）

右近　あれ／＼雲か、旗か、一流！

小辨　八幡大菩薩の御示現やら？

右近　オ、源氏の船の上へ下りまする。（と恐れる）
小辨　さては敵に御加護かいなあ。
二位　篳をこれへ！
玉蟲　篳とは何となされまする。
二位　今そなた等には珍しい東男が來よう程に、見苦しう無い樣にするのぢやわいな。ハ、、、、、。（悲しく笑ふ、侍女泣く、右近入る）
二位　（あたり見てまはつて紙の端を取り上げ）

君住めばこゝも雲井の月なれど
尙戀しきは都なりけり

（哀の思入で海へ投げて又一枚拾ひ上げ）

戀しとよこぞの今宵のよもすがら
契りし人のおもひ出づらん

（また海へ投げる、右近篳持て出て差出す）
（二位篳を取つて一寸考へ）

今ぞ知るみもすそ川の流には
浪の下にも都ありとは

（掃く、笛まろぶ、玉蟲あわてゝ取上げ抱く——風波の音で淺黃幕。）

其二　岩　の　上

中央に裂けた樣に上の方で尖つた岩、其間に矢の立つた御座船難破して挾まつてゐる。前の方少し平になり、其まはり海、向うの方は暗く、黑雲遠山を壓してゐる中に白旗ひらめいてゐる。

二位尼、鬼王丸、八歲、玉蟲の前、侍女、宗盛、淸宗岩の陰に身を潜めてゐる。

有盛、髮亂し、鎧の袖も切れ、少し疵を負うて、長刀もつて、後から岩をまはつて出る。

有盛　これにお出でなされましたか。
玉蟲　オ、有盛樣！（と側へ寄る）
二位　どうぢや、いくさは？
有盛　殘念でござりまする。何を申すも敵は三倍、裏切まで出來た上、風も向、汐も逆らひ、雲、稻妻まで軍氣を挫き、矢種も盡き、刄もこぼれ、味方は右に、左に落命。もうこれまでゞござりまする。
二位　時忠は何としたな。
有盛　大納言殿は逸早く生捕にされました。
宗盛　エ、生捕？
二位　門脇殿は何となされた。
有盛　中納言殿は錨を負ひ、唯今海に沈まれました。
二位　行盛は？
有盛　行盛は我等と同船、今を限りと思うてか、法華經を取出し、提婆品を讀終つて、西に向つて回向の上、切死

をいたしました。

二位　それぞ亡き父母へ菩提の習、最期まで忘れぬは、けなげにもあはれぢやのう。

有盛　某は祖母様や、人々はと見かへりましたら、御座船は難破の體に、切抜けてまゐりました。

玉蟲　まあ、鎧の袖も切々に、刀疵やら、矢疵やら！（鎧をいたはる）

有盛　いやまだ命にはさはらぬ故、御無事の體を見ました上は、今一度進みませう。

玉蟲　エヽ、其重手でどうなりませう、見す〳〵人手にかからうより、こゝにお出でなされませ。死ぬにしても諸共に！

有盛　でも氣にかゝる先手の様子——

清宗　あれ人の無い舟がいくつとなく流れまする。

右近　楯や弓が芥の様に！

小辨　紅葉とちる赤符！

宗盛　エ、血がこゝまでも寄つて來る！

有盛　いやこりや味方の赤旗ぢや、どの船が覆つたやら！

（拾上げて岩の上へ置く）

宗盛　あれ何やら潮を吹立て、此方を目がけて寄つてまゐるわ！

（海鹿波の間から跳上つて下手へ入り、また跳上つて上手へ入る。）

侍女皆　あれい!!!

玉蟲　人の屍を待ちがはに口を明いてめぐるのは！（恐ろしい思入れ）

宗盛　こりや當家の爲に亡ぼされた怨靈の化身ぢやな。

有盛　なに、只の海鹿でござる。（切る）

（暗くなる、稲光。）

清宗　あれ、空にも何やら！

（皆過度の刺戟で錯亂の體。）

宗盛　オ、ありや宇治の惡左府ぢや。

玉蟲　エ、頼長様とはそりや、どこに？

宗盛　それ、あの意地の惡い顏が憎相に齒を出して！

有盛　いや、そりや幻でござりまする。（と空を切拂ひ）これ何もござりませぬ。

宗盛　オ、左馬頭が見える！

玉蟲　エ？　義朝様か？

宗盛　あの青ざめた顏が氣味よげに、今こそ仇を打つといふ！

有盛　エヽ、それも空耳でござりまする。

清宗　あゝ口を裂かれた西光が赤い舌で笑ひをる！

右近　さうおつしやれば菱の上へ突落とされた成親卿か！

小辨　鬼界が島の鬼になつた俊寛がそこへ！

清宗　扇の芝を染めた頼政がこゝへ！
宗盛　焼討ちした三井寺も、奈良の法師首が數も知らず、火の玉となつて渦を卷く！
清宗　オ、大佛が炎を吹く！
宗盛　あちらにも光！　こちらにも火！　笑ふ聲が聞こえるのう！
二位　（淺ましい思入で）　エヽ、怨靈より此有樣こそ何の祟りぢや。入道殿は變化を見ても睨み仆しておしまひなされた。其強い所を受けもせず、都の水に柔いで、優にやさしうなつた丈、浮世の葛藤に堪へぬとは、これも榮華の報かいなあ。
（知盛出る。）
二位　オ、知盛！
知盛　御無事でござりましたか、して吾君には？
二位　今しがたお落とし申した。
知盛　それは先安堵致しました。
二位　妾も直にと思ふ間も無く此岩へ打上げられた、最早勝負も決したであらうな。
知盛　いやまだ最後の一策がござりますぞ。
二位　此期に及んで一策とは？
知盛　されば今味方は負色となりましたが、敵の九郎義經も三軍を統べる器で無く、士卒と先を爭ふとか。けふも定めて勝に乘り、先の方に進んで居りませう。狙ひ寄つて打取りましたら、勝負忽ち顚倒して、極まる不運も回されませう。
二位　何樣、それは最後の賴、しかしそれには誰をやらう？
知盛　某がまゐりまする。
二位　いや待ちや〳〵そなたは人に顏も知られ、殊に味方の杖柱ぢや。
知盛　いやもう撰ぶ間も人もござらぬ。
有盛　人も無いとは何事、まだ某も居りまするぞ。
知盛　でも大分手負の樣子？
有盛　これしきの疵が何でござらう。
知盛　しかし九郎の顏を知つておゐやるか。
有盛　いや、それはまだ存じませぬが、聞けば色白く、背低く、むか齒少しさし出たとやら、狙ひ寄つて海に投げるか、共に組んで波に沈むか、源平最後の運の分目、是非某にお任せ下され。
知盛　それでは敎經の舟へ行き、此旨を傳へた上、共々に進むが好い。
有盛　心えました、ではいづれも！
（祖母から玉蟲を見ろ、玉蟲すがりつく。有盛手を握占めて又離し。）
有盛　皆よく見てお出でなされませ。

（屹と下手を見て、急足で後へ入る。皆跡を見つめる。）

玉蟲　あれ、舟も波に逆らひ、風に向うてゆら〳〵と！

右近　それに矢も雨の様に！　あ、能登様のお舟へお乗りなされた！

小辨　また向うへお進み遊はす！

玉蟲　あ敵の舟へ乘移つて！

清宗　物の具光るは義經ぢやな。

玉蟲　違うたか打ちもかゝらず、次の舟へお移りなされた。エ雜兵が二三人！　蹴倒された小氣味よさ！　また次の舟へ一飛に！　あの緋威は誰であらう。

宗盛　判官ではあるまいか。

玉蟲　いや、あれぢや〳〵あの勢！　飛びかゝつて一打に！　エ、向うの船へ飛びくさつた！

宗盛　一飛び、二飛び、三、四と飛んで行く。

玉蟲　それを追つて能登様も――エ、雜兵が組みついた！　あれ二人も三人も！　判官はどこへやら？　エ、逃がしてしまうたな！　オ、一人を海へ蹴落として、あとの二人を脇にかゝへ、

侍女
清宗　あゝ海へ!!!

玉蟲　有盛様も！

（皆よろ〳〵となる。二位尼、知盛顏を見合はして絕望の思入。）

二位　此上は是非が無い、覺悟の通り船に乘り、敵味方の見る前で、水に入るであらうわいなあ。

（玉蟲、侍女皆泣く。）

知盛　（涙を呑んで）最早お止め申されませぬ、其樣を見屆けて、跡見苦しう無い様に取りはからふでござりませう。

二位　（玉蟲に）せめては最期を美しう、平家は西の海に入つても、都の花とちりはてたと後の世までも傳へてたも。

玉蟲　いえ、妾は波の底までもお供致しまする、有盛様に暫でもおくれて生きてゐられませうか。（侍女等に）そなた等こそ殘るが好い。

右近　いえ〳〵妾とて殘りませうか。東夷や下司下郎にどの様な辱しめを受けませうやら？

小辨　思ふ丈でも身の毛が立ちます。是非お供致してまゐります。

二位　嬉しい志、それでは其意に任せうぞ。

知盛　（鬼王丸を見てうなづき）母上、此子もおつれなされませ。

二位　エ？

知盛　丁度君に似寄の年頃こそ幸、御手にお抱き遊ばして、

水にお入りなされましたら、なあ――。（目くばせする）
二位　（うなづいて）　誠にそれこそ苦肉の計略。
知盛　それでは鬼王。
鬼王　ハア。
二位　（其顔を見て）　あ、そちは世にも不運な者ぢやのう――榮華の家に生まれながら、物心のつく頃は都を落ちて浦づたひ、島づたひの果は此海！
知盛　何罪も無い身にも、祖父の業に一家の運、繋がる上は是も非も無い、嫡子知章は吾身に代り、一谷に討れたが、そちは祖母様のお身にそひ、波の底までお供せい。
鬼王　ハア――しかし波の底には故郷はござりまするか。
知盛　何故郷？……有るとも〳〵浮世の夢の都より波の花のいつも咲く常盤の郷があるであらうぞ。
鬼王　直父上もお出でなされまするか。
知盛　行くは行くが、逢ふか、逢はぬか、測られぬ生死の……鬼王！
鬼王　父上！
知盛　（引寄せて又離し二位尼に向って）　母上……親といひ、子といふも、これが最後の言葉であらうなあ……。
（泣く）
二位　（も涙を拭いて）　それでは知盛、宗盛、清宗、さらばぢや。

鬼王　おさらば、
玉蟲　おさらばでござりまする。
（二位鬼王の手をひき、玉蟲、侍女附いて上手の岩をまはり、後から御座船の先へ上つて見返る、白い光さす。）
二位　（見まはして）　東は修羅の苦界の波、味方も敵も皆あはれ、西は寂光淨土の霞。空も海も一色に透き通る思ぢやわいなあ。
（知盛を見下し船と共に入る、知盛岩にかけ上つて見送る。宗盛、清宗も見る。）
宗盛　あれ、見る〳〵船は沈んでゆく。
清宗　敵も味方も見つめる様子！
宗盛　鬼王丸をお抱きなされて――。（波の音）
清宗　あれい！
（宗盛に取りつく、知盛よろ〳〵と岩をすべり下る。風の音愈烈しくなる。）
知盛　（涙を拂うて）　此上は兄上にも、いざお覺悟なされませ。
宗盛　しかしまだ皆までは死にもしまい。
清宗　あ、誰やら敵の熊手に引上げられて！
知盛　生捕られては恥の恥、いざ〳〵お覺悟なされませ。
宗盛　しかし清宗は何とするな。
清宗　あの世までも父上と御一緒に參りまする。

宗盛　いや某はあの世を頼まぬ、息が絶えては闇の闇、親も子も我もあらうか。

清宗　でも怨靈は殘りまする。

宗盛　ほんに怨靈が此世から攻めるからは、あの世があるなら何の事！　どんな責に逢はうやら？　父上は火の車に！　母上は水の中！　我子まで目の前で死ぬ苦が見てゐられうか。

清宗　父上！

宗盛　オヽ……（引占めて泣く）

知盛　其御情愛はさる事ながら、某も今目の前に親と子の死を見ました、いざ御介錯致しませうか。

宗盛　そんならあの世を救うてくれるか。

知盛　それは佛の御名でもお唱へなされませ。

宗盛　名ばかりで救にならうか。

知盛　では其身其儘佛ぢやと思召せ。

宗盛　此苦が何の佛ぢや。

知盛　では武將らしく命も塵と思召せ。

宗盛　……我等は塵の世捨人に——

知盛　エヽ、それも今更何にならう、某と共に飛込みませうか。

（引張る、宗盛拂ふ、又引く、又拂ふはずみによろよろとなる、知盛突く、宗盛海へ落入る。）

清宗　あれい！（續いて飛込む）

知盛　（岩に片足かけて下を見送り）エヽ、なまじひに泳ぎを知り、浮きつ、沈みつ、親は子を、子は親を見かへつて、泳ぎまはるあはれさ！　みじめさ！　エヽ、敵の船に近よるわ！　熊手にかゝるわ！　引上げられるわ！　此恥を見まいとて、兄とした人を落としたに、それも無益の罪になつたわ！（哀の思入から、なさけない思入になり、大苦惱の思入）此上は是非が無い、吾が身に平家の運を負ひ、こゝを最後の巖としようか。

（赤旗を取上げて岩の上へ登り、其間へ立てる。）

知盛　味方の船は早散りぢりに右も左も白旗ばかり、二十年の平家の勢ひ、罪も榮も今消滅！

（と鎧を解く、源氏の兵士三四人出て掛らうとする。）

知盛　エヽ、無益の殺生。控へて居れ。

（兵士(つはもの)後ずさりする。）

知盛　あ後の世は我も知らず、唯身に餘る此力奈落の底まで貫かうよ。

（と短刀を拔て腹へ立てる、赤い光其身から岩にさす、風の音、波の音、水鳥飛上る——幕）

第二段　清水北阪傘屋

二重茅葺の屋根、朱の傘の看板、丸木の柱、正面壁、上手出入口蓆を布き、下手繩暖簾、外柴垣、其中竹藪、上手傘二三本干し、其向に淸水の樓門、堂塔の書割。壁の隅に皿椀紙屑鉢庖丁など置く。唐笠法橋、六十、剃髪、鼠の着付、娘やどりぎ、三十五、しかし若く見え殊に男めいた體で傘を張つて居る。町人市助出る。

市助　傘を一下んせ。

やどりぎ　ハイ〳〵朱の濃いのがよろしうござりますか。薄いのがよろしうござりますか。

市助　朱では平家の色に近い故、源氏の白が好いわいの。

法橋　傘にまで源平はござりません。

市助　あるとも〳〵平家盛の時は、烏帽子衣服まで六波羅樣がはやつて、私等もお館へ出入をしたが、今ではそこも草原になり、一家も藻屑、殘る者はけふ都入、殊にあの宗盛がおめ〳〵と生捕られるとは、恥を知らぬにも程がある、ありや人かつたいといふものぢや。（法橋厭な顏をする）

やどりぎ　でも最後までも離れぬやさしさ、源氏の樣に同士打するよりましではござんせぬか。

市助　いや、當世は何よりかより強い者勝ぢや、此都も京女郎も東男に見かへにやなるまい、（宿木に）お前さんもいつまでも獨でゐるのぢや。まだ〳〵艶は大有り、どうぢや、源氏の旗頭にでも世話をしようかな。

やどりぎ　（怒つて）措いて下んせ、そんな田舍者に身賣をせいでも、傘丈で澤山ぢやわいな。

市助　でも惜い其容姿、侍が厭なら此いくさで大儲をした町人に？

やどりぎ　エ、男は嫌ひぢやわいな。

市助　それで其年までさうしてゐるのか。あゝ傘屋の看板娘には勿體無いなあ。（懷から錢を出して）ではこれを貰うてゆきます。（と傘を持つて入る）

法橋　難有うござります。（と錢を取入れて横手へ下り、傘を干す）

（職人千六出る。）

千六　オ、やどりぎさん、精が出ますなあ。

やどりぎ　千六さん、どこへ行かしやんす？

千六　平家の生捕を見に行かうと内を出たが、そんな死損ひより生々したこなたの顏を……いや、どう見ても不思議ぢやなあ。

やどりぎ　何が不思議でござんす。

千六　でも傘屋の娘にしては其品といひ、只の女子にしてはぴんしやんと、餘多の引手をぢらして、一體どうする積りぢや。

やどりぎ　さあどうするのやら、今に光君から迎の車が來

ますわいな。
千六　そんな昔の物語より、此間の歌のかへしを？
やどりぎ　あれは誰に聞きなさつた。
千六　エ、自分で汗水たらして作つたのぢや。
やどりぎ　千載集にある待宵の小侍従の歌で女を釣らうとは上手過ぎますなあ。
千六　エ、ありや女の歌か。こりやしくじつたなあ。
やどりぎ　ハヽヽヽヽ。
千六　イヤ出直し／＼。（入る）
法橋　ハヽヽ、あの男も吾身知らずぢや、しかしお前本間にいつまでもさうしてゐる氣か。
やどりぎ　でも此所等あたりの下司下郎に此身を許す位なら尼にでもなりますわいな。
法橋　エ、尼に？
やどりぎ　したが祇王ほども全盛の日を見ずに此髮も剃れません、或時は白拍子になつて宗盛樣の所へでも推參しようかと思うた事もござんした。
法橋　エヽ。（とびくつとする）
やどりぎ　知盛樣や、重盛樣は淸水詣に見受けましたが、鎌倉武士とちがひ、優美なお姿でござんしたなあ。
法橋　では二位の尼君や、太政入道殿は？
やどりぎ　それは見た事はござんせぬが、あの樣に心の儘に榮耀榮華を極めたら、さぞ面白い事でござんせうなあ
法橋　人に恨まれ、憎まれて、果は地獄の苦でも？
やどりぎ　地獄極樂を此世で知るのも、氣味の好い事でござんせう。
法橋　何の氣味が好い事があらう。一家一族海に入り切れいで生捕……二位尼樣のお心持が今更思ひやられるわい。
やどりぎ　私は入道樣が面白うてなりませぬ
法橋　エ、淸盛殿が！
やどりぎ　私が男であつたならなあ――
法橋　ほんに男であつたなら――。（とふびんの思入）
やどりぎ　弟の小藤次もどうしたのでござんせう。
法橋　彼奴の阿呆め、源平の騷動に出世でもしようと飛出して、どこでどうなりをつたやら、大方一谷か、屋島の藻屑にでもなつたであらう。命日も知れぬより、知れ過ぎる方がましか知らん。
やどりぎ　とは誰の命日が？
法橋　エ、何……死んだ婆の事……あゝ三郎丸はまだかいなあ。（ト外を見る）
（牛飼三郎丸、二十四五、しを／＼出る。）
三郎丸　法橋殿、今歸りました。
法橋　オ、三郎丸殿、どうぢや、願ひはかなひましたか。

三郎丸　ハイ、流石は判官殿でござります、何とぞ宗盛樣の最後の御車を仕りたいと、申しましたら、ならぬといふ家來を止めて、苦しう無いと免してくれられ、嬉しいやら、悲しいやら、お側へ寄つて久々でお顏をお見上げ申しました。

法橋　さぞ、變つてゐたでござりませうな。

三郎丸　お變りなされましたとも〳〵、どれが殿とさがした位、いつぞや内大臣の拜賀の時は多くの殿上人を前後にして、けふを晴のおんよそほひでござりましたが、それにはひきかへさびしい淨衣、淸宗樣は白い直垂、目もお上げなさらぬのに、前後左右簾を上げ、これ見よがしの八葉車、また見ようとて出たも〳〵いくさや饑饉で人氣の薄くなつた此都のどこの隅から出て來たのか、兩側は人の堤、爪はじきするもあれば笑ふもあり、くやしいにつけまた淚、牛の歩みを早めては、これが此世のお名殘かと、また引く繩をゆるめました……。

法橋　……そしてどうぢや……どこまでお供なされたな。

三郎丸　判官殿の宿所堀川までお供しました。

法橋　そして直閑東へ下向の樣子でござりますか。

三郎丸　そこまでは聞きませぬが、遲かれ早かれ遁れぬお命、どこの露におなりなさるやら、それまで見るのはたまりません。

法橋　あゝなぜ西の海で死なゝんだのぢやなあ。（泣く）

三郎丸　二位尼君は好くこそ水にお入りなされた。若しながらへてござつたら、入道樣の御最期より地獄の苦をお受けなさらう。

法橋　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

三郎丸　また些彼處へ行て噂丈なと聞いて來ませう。

法橋　どうぞ知らして下され。

三郎丸　承知しました。私の兄も木曾に斬られ、恨重なるあの源氏、というてどうする事もならず、花の都もこれまでぢやなあ。（入る）

（法橋向うを見て、苦惱の思入。）

やどりぎ　父さん――父さん――父さんと云うたら！

法橋　オ、何ぢや。

やどりぎ　お前なぜ其樣に氣にしやしやんす。

法橋　いや、何も氣にしはせぬ。

やどりぎ　でも淚が出てゐるぞえ。

法橋　（あわてゝ拭て）何、それは……餘所事ながら哀であつた故……。

やどりぎ　いゝえ餘所事ではござんすまい、お前も平家に由緣があるのぢやな。

法橋　何の由緣があるものか。傘一本買うて貰うた事も無いわい。

やどりぎ　それに其樣に嘆かしやんすのは？

法橋　いやもう嘆きやせん、これが浮世ぢや、ハ、ハ、南無阿彌陀佛、ハハ、、、、。（ト泣笑する）

（駿河次郎、副將をかゝへ、乳母冷泉追ひかけて出る。）

冷泉　まあ待つて下さりませ。（引止める）

次郎　エ、離せ／＼。

冷泉　いえ／＼其子は平家の餘類ではござりませぬ。

次郎　何無い事があらう、平家も嫡々宗盛の末子副將ぢや。

法橋　エ、？（立上つて見る）

冷泉　どうして左樣な――。

次郎　エ、無用の云譯聞く間は無いわ。

（行きかける、冷泉取りつく、次郎突倒す、冷泉倘も足にすがる、次郎蹴る、法橋たまらぬ思入、やどりぎ飛出して止める。）

次郎　エ、己は？

やどりぎ　私は出緣も無い者ぢやが、餘り見てゐられぬ故止めました。假に宗盛樣の末子とした所で、もつと丁寧にいたはつたら好かり相なものぢやなあ。

次郎　エ、敵の小童何いたはる事があらう。

やどりぎ　でも戰半ぢやあるまいし、何にも知らぬ稚子ではござんせぬか。

次郎　稚子でも餘人で無い、嫡子故容赦はならぬわ。

やどりぎ　さう情を知らいでは、下々まで懐きませぬぞ。（ト拂つて行く）

次郎　え　エ、小癪な事を、除け／＼。

やどりぎ　いえ、まあ待つて下さんせ。（ト止める）

次郎　手出しをすると、連累になるぞよ。（ト振離して入る）

冷泉　あゝこれ、も一度お顏を見せて下されいのう。（ト追うて入る）

法橋　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（ト溜らぬ思入で奥へ入る）

やどりぎ　エ、憎い源氏！　今に判官でも賴朝でも疊の上では死なれまいぞえ！

（法橋の二男小藤次、折烏帽子、直垂、太刀佩いて出る。）

小藤次　姉樣、今歸つた。

やどりぎ　オ、小藤次！　まあ、どこへ行て居やつたのぢや。

小藤次　ハ、無斷で飛出した故、さぞ驚きも、怒りもなされたであらうが、喜んで下され、此通り立派になつて來ましたぞ。

やどりぎ　ほんにどこのお侍かと思ふ樣な其身裝、父さん、小藤次が立派になつて歸りました。

法橋　何ぢや小藤次が？――オ、其裝は？　一體どこへ行つたのぢや。

小藤次　さあ聞いて下され、いくさに出ましたのぢや。

二人　エ、？

小藤次　私も傘屋の息子で、一生を過ごすのは面白無い、何がな出世の緒口をと思うてゐたら、不意に起つた源平の合戰、そりやこそ時節と飛出して、判官殿の下に附き、一谷(いちのたに)から屋島、壇の浦まで攻め行きましたぞ。

法橋　エ、壇の浦まで！　好う殺されもせなんだなあ。

小藤次　何、殺される所か、勝つて勝つて勝ち通し、殊に壇の浦では大手柄をしましたのぢや。

やどりぎ　大手柄とはどの樣な？

小藤次　されば其日は先月の二十四日ぢや、まだ明け切らぬ凌晨(よあけ)から天地も碎ける鬨の聲は此あたりの松風とは比べ樣も無い凄さ、敵も今日を限りと思うてか、侮り難い勢で、味方はばた／＼波の飛沫(しぶき)ぢや、所へ海鹿(いるか)が數知れず潮を吹いて寄つて來て、向うの舟の下をくゞり、口を明いて待つ體に、氣落をするやら、裏切るやら、二位の尼を始として、彼方でもざんぶ、此方でもざんぶ、それ生捕れと熊手を下して引かけ引きよせ引上げると、いかな上臈も和布(わかめ)同然、私も誰ぞと見まはしますと、舟を目がけて泳いで來る者がござります、扨は向うも命が惜いのかと引上げて見たら、まあ誰ぢやと思召す？　大物も大物、先の内大臣宗盛でござりました。

法橋　何ぢや宗盛？　（ト驚く）

やどりぎ　それはまあ好かつたなあ。

法橋　（先づ喜んで、又心づき）　エ、何といふ事をしたのぢやい！

小藤次　何と云うて此上も無い手柄ではござりませんか。

やどりぎ　手柄とも、手柄とも、大手柄ぢやわいな。

小藤次　侍頭に取立てられ、此通り立派になりました。どうでござります、好う似合ひましよがな。

やどりぎ　ほんに好う似合うた、傘屋の子とは見えぬわいな。

小藤次　もうこんな商賣は止めて、あなた方も源氏の侍の親同胞と大きな顏をなされませ、何を濟まぬ顏付、なせ褒めて下さりませぬ？

法橋　誰が褒めう、何のそれが手柄にならうぞ。

小藤次　まだこれで不足なら、さうぢや、これから願うて出て、どうで助からぬ平家の大將、首打つ役を仰せつかりませう。

法橋　エ、宗盛の首を打つ？　お前好う首を打つか。

小藤次　打ちますとも、打ちますとも、平家の大將の首を打つて、孫子の代までも譽に致します。

法橋　何の譬所か、罪ぢや、罪ぢや、罪ぢやわい。

小藤次　罪は向うにござります。

法橋　エ、お前こそ大罪ぢや。

小藤次　何故私に罪がござりますな。

法橋　エ……

小藤次　大手柄をして罪になるとは、どういふ譯でござります。

法橋　……それは……

小藤次　姉様、何故ぢや。

やどりぎ　私にも合點が行かぬ。

小藤次　折角、喜顔を見ようと、勇んで歸つて來たものを、褒める所か苦い顔、罪ぢやとは譯がある、聞かして下さりませ、親父様、源氏の侍で無く、實の子に隱さずと、譯を話して下さりませ。

法橋　あゝこりや云はねばならぬかなあ。一生云ふまいと誓うたが、云はずば知らずに罪を犯す？　好し、云はう、あの宗盛はな、ありやお前の（ト外を伺うて）兄ぢや。

二人　エ！（驚く）

法橋　眞實の兄ぢやわい。（よろ〳〵と坐る）

小藤次　どうしてそれが平家の方へ？

法橋　それは清盛の横紙破り、是非男の子をといふ矢先に出來たのは女の子、丁度此方に男の子が出來たので極內內で取替へたのぢや。

小藤次　そんならあれが私の兄！　夢にも知らず引上げたとは、兄弟の縁であつたか。

法橋　其縁も何にもならず、命助けても助からぬ、いつはりながら平家の長者！

小藤次　それでは傘屋の子でゐた方が無事安穩であつたもの！

法橋　出世になるとやつたのが此親も量見ちがひ！

小藤次　そして平家の女の子は？

（やどりぎ顔見合はせて決斷の思入、つか〳〵と外へ出かける。）

法橋　（止めて）これむすめ、どこへ行くのぢや。

やどりぎ　判官殿の堀川御所へ。

二人　エ？

小藤次　それはまた何の爲に？

やどりぎ　あの宗盛殿は平家の子で無いと訴へて――

二人　エ！（驚く、やどりぎ又行きかける、小藤次止める、拂ふ）

法橋　（止めて）そんな事をしてたまるものか――

やどりぎ　いえ、それで命は助かりませう。

小藤次　何と？

やどりぎ　傘屋の子に何の罪、丸で免されぬにした所で、

島流し位で濟みませう。

小藤次　ほんにこりやさうかも知れぬ。しかしそれではこなたの素性が——

やどりぎ　私こそ平家の娘と天下晴れて名乘り上げ、切られようが打たれようが、せめて最後は淸盛の胤らしく死にたいわいなあ。

法橋　それでは長の養育も皆無駄になるでは無いか。

やどりぎ　其御恩には宗盛殿の命助けるので濟まして下され。

法橋　(泣いて)　オヽ好う云うてくれた〳〵其志で十分ぢや。しかしそれで彼奴(あいつ)の命は助かつた所が、生恥は同じ事、なまじ素性が分る丈、尙世間の笑ひ草、それより矢張平家の二男、先の內大臣宗盛卿として死なしてくれ。

小藤次　では實の親兄弟が玆にとも知りもせず?

法橋　知つた所で嬉しからうか。

やどりぎ　知らずに死ぬより悲しからうか。

小藤次　いやこりやどこまでも宗盛卿で死なせる方が兄貴の爲に好からうなあ。

やどりぎ　それでは私はどこまでも傘屋の娘で終るのかいなあ。(ト力無げに坐る)

法橋　それも緣と思うてくれ、なさぬ中でも親となり、子となるのも並大抵の事ぢやない。

小藤次　あゝ不思議なものは人の身の上、はかないものは浮世の榮華!　こりや功名も何になる?　兄弟敵にならうより、元の通り傘屋の伜!　(ト碎けて側にある傘を取る)

法橋　エ・お前內へ戾るのか。

小藤次　ヘイ、平家が勝たうが源氏が勝たうが、そんな鬼の取合ひに頓着せず、日和には日傘、雨には雨傘、(ト傘をひろげ)　天道樣を相手にして自分の力で暮しませうかい。(トすぼめる)

法橋　オヽさうしてくれ〳〵傘の骨は細くとも、罪つくらねば恥も無く、親子きやうだい仲好く暮らしや不足は無い。

やどりぎ　いえ〳〵私は矢張まゐります。

法橋　エ、それはまたどこへ行くのぢや。

やどりぎ　名乘つて出るのは止めますが、一旦素性を知つたからは今更こひしい父、母、兄弟、其面影も夢も見ず、一太刀むくいる事もならず、くやしさ、悲しさ、淋しさに、あぢきない日を送らうより、これから先西の方、福原から一谷、壇の浦と一門の跡を弔ひます。

小藤次　あゝどうでもこなたは平家の子ぢやなあ。

法橋　しかし女の身一で、途中で路用が無くなつたら?

やどりぎ　其時は何なりと、田植や海人(あま)の手助けでもして、果はどこで野晒しやら?

二人　エ！

唄〽別れの殊更悲しきは親の別れ、子のわかれ。

(やどりぎ支度する。)

法橋　云出したからは引かぬ氣象、それでは行く所まで行
た上でな？

小藤次　歸つてござれ、と云ひたいが、それも無益か。

法橋　手造の笠が餞別。(ト笠を渡す)

やどりぎ　ほんにこれを父さんの影と思うて戴きます。

法橋　まだ父と云うてくれるか。

やどりぎ　長いお世話でござんしたなあ。

(ト取りつく、法橋泣いて其手を取る。)

やどりぎ　それでは小藤次

小藤次　やどりぎ様！

やどりぎ　其やどりぎの名も限りだやなあ。

唄〽妹背のおもひきやうだいの
いづれをわきて思ふべき

(宿木行きかける、杜鵑の聲。宿木空を仰ぐ。)

唄〽袖にあまれる忍音を
かへしとゞむる關もがな

(宿木見返る、法橋追つて出て倒れかける、小藤次支
へる——此體よろしく幕。)

(大正十年)

狂小町（二場）

人物

小野小町
遍昭　元、良峰宗貞
依子　宗貞の妻
由己丸　二人の子
圓意　僧
文屋康秀
藤原長房
同　良世
同　家宗
大江維章
阿部清行
里の童

其一　清水寺

平舞臺、上手、太い柱、其上手堂の一端、格子下し其間から微な光、向うから下手へ折りまはして欄干、後遠山、近く木立の先の背景、但始の内は暗く、人物に丈光をあてる。

藤原長房、良世、家宗、大江維章、阿部清行、はなやかな狩衣指貫、二三は花の枝をかたげて出る。

長房　世の中は夢かうつゝかうつゝとも
　　夢とも知らずありて無ければ。

維章　いや、現ぢや、現ぢや、恐ろしい現ぢや。一封の祕書が舞込む丈でも、位はすべる、流される、首までも飛んでしまふ。

良世　がまた夢ぢや、夢ぢや、美しい夢ぢや。花の色も、色の女も！

清行　女の中の小野小町も？

家宗　色と才で引きよせては、また男嫌ひの顔をする、正體も知れぬ魔の女！

長房　あの女の心こそ、夢とも知らず、ありてなければぢや。

維章　いや、あるとも／＼我等にはかういうて來た。
　　こゝろから浮きたる舟に乘りそめて
　　一日も波にぬれぬ日ぞ無き。

清行　（せき込んで）いや我等にはかうぢや――
　　おろかなる泪ぞ袖に玉はなす
　　我はせきあへず瀧つせなれば。

維章　（嘲つて）それは御身の泪の事で、向うはせきも止めもせず、勝手に泣けといふ事ぢや。
清行　エ、顔も心もえ解かずに、女の心が得られようか。
維章　それが得られたら何とする。
清行　何得られよう、得られぬ様に祈つてやるぞ。
維章　それが利からうぞ。祈つたとて、呪うたとて、尚熱い火になるわ。
清行　エ、手に入れがほの面憎さ…引きめくつてやりたいな。（ト詰寄る）
維章　（太刀に手をかけて）其手こそ先一打に――
（文屋康秀出る。）
康秀　（笑を含んで）ま〻お待ちなされ、まだどちらも手に入れた證も無いのに、打ち合ふのは早過ぎる。それ幸に外の男が甘い事をしまいものでも無い。
維章　エ、まだ外に男があるのか。
康秀　あるとも〳〵、あの女に心をかけてゐる男は幾人やら？
長房　さういふ御身も其一人であらうがな。
康秀　ハ、いやとは云ふまい、一人も一人、唯一人の――
維章　清行　何ぢやと？
康秀　（懐から歌を出して勿體らしく）

わびぬれば身をうき草の根を絶て
さそふ水あらばいなんとぞ思ふ。

維章　エ、そりや例の引きよせる手ぢや。
康秀　手なら手にしておくがよい。（得意げに）さそふ水あらばいなんとぞ思ふ、
清行　何御身等にさ〻はれるなら、六十にでもなつた後の事！
康秀　いくつでもかまはん、
さそふ水あらばいなんとぞ思ふ。
維章　エ、ひつこい、そんな歌は裂いてしまへ。（ト取りにか〻る）
康秀　めつさうな、指の端にも觸れさせぬわ。（ト他の方へかざす）
清行　（これを取らうとして）それを此方へ！
康秀　（また後へやつて）どつこい、さうは――
維章　エ、渡しおれ。
（復取らうとする、康秀逃げる。二人追ふ、かけまはる。）
他の人々　ワハヽヽヽヽヽヽヽ。
（笑ひながら入る、三人追ひまはし舞臺を駆けまはつて入る――光薄白くなる――遍昭、三十四、剃髪、白い衣、鼠の帶、奥から出る。欄干にもたれて見まはす。）

背景漸々見える。笛の音。圓意、六十、茶の衣きて出る。）

圓意　遍昭殿、何をしてござる。

遍昭　月が好いので見て居ります。

圓意　まだ好い月が見たうござるか。

遍昭　……でも……心の光とも見えます故。

圓意　あのおぼろが心の光なら、まだ何に迷うてござる。

遍昭　……（ト詰る）

圓意　榮華の春にか。

遍昭　それは夢に見も致しませぬ。

圓意　（向うを見て）藤の榮えか。

遍昭　（手で拂ひ）それは幻と見切りました。

圓意　殘して來た妻の事か、子の事か。

遍昭　（勉めて）……それは露と見捨てました。

圓意　（其顏を見て）それにまだ解脱が出來ぬのは？

遍昭　……黒髮は剃りましても、殘る此身を父母は何となれと撫でましたやら？（ト自分の身を見渡す）

圓意　（其體に指をさして）其身こそ迷の元ぢや。（空を指して）あの月を御覽なされ、解けた樣に茫として、空も山も差別も無い。

遍昭　（見上げて）でもまた姿を現はします、おぼろの中に花の影も、町の灯も、春めいて見えまする。

圓意　それがまだ迷の目で見る故ぢや。其目から、其心から洗はにやならぬ。心の底に蟠まる永劫人を惱ます毒蛇！

遍昭　エヽ、もう云うて下さるな。拂ひました〳〵長い間の心の葛藤、戀といふも裏は憎か。苦しめあふが樂か。妻子がある丈二重三重、哀と戀の二筋に魂は引裂かれ……はては帝のおかくれに、此世の望も、思わくも、一切斷つてしまひました。

圓意　では若復逢うた時は？

遍昭　エ……

圓意　戀が勝つか、哀が引くか廊を登る女と童？

遍昭　（後を見かへつて）あゝ、まゐりました〳〵若私の事を尋ねましても、玆には居ぬと云うて下され。

圓意　自分では逢はれぬかな。それなれば好い樣にはからひませう。

遍昭　お賴み申しました。（急いで堂の横へ入る）

（鉦の音。稍青い光、遍昭の元の妻、依子、二十七八、藤色の着付、由己丸、八歲、上手から出る。）

依子　（圓意を見つけて）もし、一寸お尋ね申します、此お寺に先の藏人頭良峰宗貞殿が居られませうな。

圓意　左樣な人は居られません。

依子　それでも叡山で聞きましたら、此方へと申されました。

圓意　それは一所不住の身の上故、どこへどう行かれたやら、分るものではござらんのう。

依子　エ、分りませぬか、どこで聞きましても分りませぬか。

圓意　分りませぬな。第一家を出られたからは、跡を追うても無駄でござりませう。

依子　いえ、是非逢はねばなりません。一言（ひとこと）も云ひもせず、前以つて其氣色も見せず、不意に家出したのでござります。先づ其譯も聞かねばなりません。どの様な譯がござりませうとも、私ばかりか此子まで、置去りとは何事でござります。これからどう致しませう。私が泣けば此子も泣き、此子が泣けば私も泣き、泣いて毎日暮らしましても、何の甲斐もござりませぬ。

圓意　殘された身はさもあらう、しかし出家する身には先自分を救はにやならぬ。無斷で出られたのも是非が無い。

依子　でも私はともかくも、此子が何とも無いのでござりませうか。これまでとても苦勞ばかり、公の事は私共には何とも致方はござりませぬが、一身の事でも地獄の苦。私は一番早く馴染みましたし、此子を頼みに安心をして居りましたに、段々離れて余所へ傾き、はては子の事も忘れた體に、辛抱が出來ませなんだ。

圓意　そこをも一（ひとつ）、辛抱なされば好かつたのぢや。

依子　そんな事が女子に出來ませうか。妬ましい、よりおそろしくなり、それまでにも無くいとしくなり……命がけに引止めましたら倘向うへ寄つてゆきます。

圓意　一旦行たらまた返る時があつたかも知れぬ。

依子　何返る時がござりませう。向は世にもきこえた人―

圓意　それ丈に長うもあるまい、自分の欲を滿たしたら、また外に移らうもの。そこで覺めるか、それまでにか、何にしても善智識ぢや。もう少しお待ちなされ。

依子　どうして待つて居られませう。自身ばかり悟り濟ましても、私共には何になります。

圓意　なりますとも／＼追々解脱の端（はし）になります。

依子　私共には元の通り、返つてくれたら、それが何より救でござります。もう何も申しません。まだ增す花が出來ませうとも、今度こそ默つて居ります。官位俸祿は捨てましても、山の陰、草の中で、諸共に暮らしましたらいかな貧苦も物の數とも致しません。此子までも此頃は遊びもせず、手習ばかり致しまして、褒めてもらふと申します故、いつ褒めて下されう、そんな時はもう無いと申しましたら、筆を投げて泣きました……こゝへ來る道すがらも、賤の業に目をつけて、車引く親の後押す子まで羨ましいと申します……道端の地藏尊にも逢はして下されと、祈ります……取りわけこの觀世音に、さうぢや

これをさゝげませう。（裝束、帶など取出して）これは彼人(かのひと)の裝束でござります、これは帶でござります。身についた形見の品々、撫でさすつて居ましたが、これを誦經の料と致します。

由己丸　私もこれを差上げます。（卜差した小太刀を出す）

依子　どうぞ今一度お逢はせ下され。茲(こゝ)へ來ずば、どこに居ります、深山(みやま)の奥でも、荒海の濱でも、どこまでも尋ねてまゐります。若又身でも投げまして、此世に無い人となりましたら？

由己丸　エ、此世には居られませぬか。（卜圓意にすがる）

依子　さあ、居らぬ時は其道しるべして下さりませ。死出の途も跡追ひます。

由己丸　私もどこまでもまゐります。

依子　よしや地獄の底までも！

由己丸　エヽ、地獄でも厭ひませぬ。

（遍昭先から格子の上へ半身を出し、二人を見聞きして斷腸の思入、幾度も出ようとしては思ひかへす。）

依子　其生死さへ分りませずば、幻になと見せて下さりませいなあ……（卜泣く）

圓意　（卜憐の思入にて）それではまあ御佛に祈願して、今夜は彼方の局でお休みなされ。

依子　いいえ、どうして休んでゐられませう。今夜は御堂に籠ります。

由己丸　（格子の方を見て）あ、あの影は？（依子も見かへる）

圓意　いや、ありや何でも無い！　さあ此方へお出でなされ。

依子　ではよろしうお願ひ申しまする。

（圓意、案内して下手へ入る、二人も附いて入る。遍昭つか〳〵と出て、跡を見送り、涙に咽ぶ。鐘の音。薄赤い光。）

（小野小町。三十、下髮(さげがみ)、目のさめる樣なはなやかな銀で蜘の巣ちらしの模樣の裝で奥から出る。遍昭の側へ寄る。）

小町　宗貞樣。

（遍昭心づかず佇見てゐる。）

小町　遍昭樣。

（遍昭未心づかぬ。）

小町　（遍昭の肩を叩いて）卑怯なおん方！

遍昭　（氣がつき振返つて驚き）オヽ！

小町　（少し笑を含んで）なぜ逢うて上げはなされませぬ。

遍昭　もう苦しめるのは止めて下され。（卜少し下手へゆく）

小町　いいえ、苦しめるのではござりませぬ。餘り哀でござ

りまする故。

遍昭　妾とは誰が妾？（ト振りかへる）

小町　彼人もあはれ、あなたもあはれ！

遍昭　それが今分りましたか。

小町　今までにも分らぬ事もござりませぬが、また張合もあり、負けぬ気もあり、も一といふ所が物足らぬあなたの心！（ト恨めし相に見る）

遍昭　あれでまだ足りませぬか。

小町　足らぬしるしは餘の人より取りわけて彼人を——

遍昭　置いて出たではござらぬか。

小町　出ても一切お捨てなされた。

遍昭　それは人の世が恐ろしい故。（ト向離れる）

小町　それが卑怯ぢや。世は飛鳥川にもならばなれ、仲絶えずば何が恐れ。命は露とはかなくとも、生きたるかぎり逢うてこそ、情の眞ではござりませぬか。（ト近づく）

遍昭　其眞があつたなら、あれほどに惱まうか。（愈離れる）

小町　では妾に眞が無かつたと思召すか。

遍昭　引寄せては横へそれ、雲の上に心をかけては、また名も無い下司に笑顔見せ、一重やら二重やら、八重やら知れぬ花の心、どこに眞があつたやら？（ト舞臺をまはる）

小町　（それに附いて）いえ妾こそ一筋に、外の思を狂駒と氣散らしてゐたではござりませぬか。

遍昭　それがいつまで續いたな。（ト此方を向く）

小町　それはあなたがためらうてお出でなされた故

遍昭　ためらうてゐたのではない、家の務もあり、時めく一族との葛藤もあり、晴らされぬ憤りもあり、迫つて來る危さもあり——

小町　何があつても投げすてゝ來て下さらねば、下司にだも及びませぬ。（ト立止る）

遍昭　下司下郎と比べるとは、此身も奴とする心、それが何の眞であらうぞ。

小町　いえお互に奴となり、婢となつてこそ戀の眞ではござりませぬか。

遍昭　こなたは男の婢となる女ではない。

小町　いえ先づ奴となる男にならー（ト他の方へ向く）

遍昭　何のならうぞ。誰も彼も奴にして、自分をあがめ戀ふといふ其心をめでゝ自分も戀、實は自分で自分を戀ふのぢや。

小町　エ、憎い口におなりなされたなあ。

遍昭　口より憎いは何であらうな。（ト小町の胸を穿つ様に見る）

小町　（も見かへして）其お姿でござります。

遍昭　此身になつても何が憎い？
小町　花をかざしたお姿より、（トつく〴〵見て）憎ければこそ玆までも――（ト又近づいて來る）
遍昭　追うてござつたか。（ト一足後寄る）
小町　五條の后の御申付、それを汐にまゐりましたが、はからず聞いた今の話。あれで氣持も今までと變りました。
（ト柱にもたれる）
遍昭　どう變りましたな。（ト向直る）
小町　今まではあの人に一筋引かれてお出でなされたお心が眞實憎う思ひましたが、今始めて哀と知ると、あの頃のあなたの苦しさ、分るにつけてそれもあはれ、其爲に其お姿！（ト悲しげに）エ、なぜお遁れなされたのぢや。
遍昭　でも地獄にぢつとしてゐられませうか。
小町　地獄の苦なら妾が先へ……（柱によろめく）
遍昭　何の落ちよう、極樂から極樂へ――（悔し相に）
小町　移つてゐるとおつしやるか。（きつと見かへる）
遍昭　其姿こそ前にも增して――（憎と未練と交つて）
小町　色がさめたとは見えませぬか。
遍昭　さめたやら？　氷つたやら？
小町　解けて流れる涙こそ戀の眞の根に沁むと今こそ思ひ知りました。（ト眞底からの情を表はす）
遍昭　（悶えながら）知つた所で何にならう……涙の痕に血になつて、墨の衣もくれなゐに……（自分の衣を見る）
小町　其色がなぜ慮ぢや。さあお歸りなされませ、五條の宮もお待兼ねぢや。かの人も命懸けぢや。妾の今の心根も分りましたか――
（遍昭愈々悶えながら下手へ行く。）
小町　（其跡について）さあ、此方へお出でなされませ、世の中にこそ解脫の道がござります――
（ト手を取る、遍昭よろ〳〵引かれて、また拂ひ、上手へゆく。）
小町　（また其跡について）山寺より眞の隱家がござります。岩の上は寒いばかりぢや、旅寢をすれば妾も寒い。苔の衣を貸して下され。
（ト寄添ふ。）
遍昭　苔の衣は唯一重、（ト其顏を見て悲しい思入、又氣を變へ）貸さねばうとし、いざふたり寢ん。（ト洒落にいふ）
小町　エ？　（ト不審の思入）
（遍昭其隙に走つて入る。小町跡を見送つて溜息つく。鐘の音。花ちりかゝる。小町見上げて、花を袖で受止める。花いよ〳〵散つて袖をこぼれる。鐘の音をかす

めて、暗轉。）

其二　市　原　野

一面冬枯の薄原、向うに鞍馬山、叢杉の木立の書割。
夕暮の色。
里の童數人踊りながら出る。

唄〽枯野の薄、逆髮亂す、月の櫛させや。
〽枯野の薄、木枯亂す、月の鎌で刈れや。

（小町狂亂の體、色稍青ざめて、髮亂し紅葉一二つけ、美服破れて引きずり、よろ〳〵と出る。）

小町　（一人の童を見て）オヽ、維章殿？　にこ〳〵と御機嫌ぢやな。どこぞに好い花が咲きましたか。妾の色は此通り！　もう厭かえ？

（ト手を取らうとする、童こはがつて後へ寄る。）

小町　（他の一人を見て）オヽ、滿行殿！　お前は厭といふまい。人を見ぬ日は涙がこぼれたと云はれたなあ――此通り好く見られるぞえ。

（ト引寄せる、童笑うて拂ふ。）

小町　お前も厭？　（他の一人を見て）オヽ、行家殿！　お前こそ逃げはしまい。どうぢや、美しからうがな。（ト髮を揃へて、紅葉を取り）それ、これは妾の心ぢや。

（ト渡す、童取りもせぬ。）

小町　エヽ、取りもせぬとは不禮者！　妾を誰と思ふのぢや。天が下に名の高い小町ぢやぞえ――小町が心をやらうといふのに、取らぬ男が世にあらうか。さあ、取つてたも！

（ト復渡さうとする、童取つて直捨てる。）

小町　エヽ、取るが早いか捨てるとは憎い男！　小町の戀と名が立つたら、後の世までも譽で無いか。それも入らぬとは憎さも憎い。小町の憎は戀より深い。殺す位で足らぬぞえ。

（ト恐ろしい顏して詰め寄る。童逃げまはる。薄に隱れる。）

小町　逃げうとも逃がさうか――隱れたとて探し當てずにはおかぬぞえ――それ、そこぢや。（ト薄を分る、童又逃げて奥へ隱れる）それ、こゝぢや。（ト又奥を分る、童又上手へ隱れる）それ、見つけた！（童上手下手へ分れ隱れる）エヽ、あちらへ、こちらへ、心を分ける浮氣者！　薄原へ火をつけるぞえ。

（童驚いて飛出し左右へ逃入る。）

小町　待ちや〳〵憎いと云うたのはありや虛ぢや。憎いといふ裏はかあいゝ、かあいゝといふ心はさびしい。さあ、

茲へおぢや、一緒に遊ばう。雛遊をしようではないか。
姫君には妾がなる、采女や舍人にはお前達、さあ早う銚
子を持ちや。エ持ちやといふのに！
（ト石へ上つて坐る、康秀出る。）
小町　オ、舍人、好う來たなあ。
康秀　エ、舍人？　とは何奴ぢや。（ト側へ寄つて）オ、
こなたは！（ト驚く）
小町　オ、康秀殿が舍人とは丁度好い、さあ牛車の用意し
や。
康秀　何ぢや、牛車？（ト更に好く見て）まあ、其有樣
は！　浮草どころか亂れ柳？　あさましい姿になつたも
のぢやなあ。
小町　何ぢや亂れ柳？　それでもさそふ水があるなら行く
ぞえ。
康秀　いや、もう誰がさそふものか。
小町　誰もさそはぬ？　でもさそうたものは幾人やら？
始は大抵歌を寄せる、夢の字は炎になり、涙になり、ハ
ヽヽヽヽお前も死ぬと書きやつたなあ。
康秀　……そんな事は知らぬわい。
小町　今更知らぬとは好う云はれた。朧月夜の細殿で此樣
に袖を引いたのは誰であつた。
（ト康秀の袖をひく。）

康秀　（拂うて）それはどこぞのたわけ者であらうぞい。
小町　（强く其手を引いてつと進み）鴨の祭の歸るさに、
翠簾の中へまぎれ入らうとしたは誰であつた。每夜格子
の外まで此樣にしよんぼりと、通うたは誰であつた。（ト
忍姿を眞似る）
康秀　それこそ眞に、私では無い。
小町　私で無いとはそれほどの根も無い淺はかな心、さそ
うたとて誰が行かう。（ト拂ふ）
康秀　（見直して）イヤ、さうつんとした所はまんざら捨
てたものでも無い。
小町　ハヽヽヽヽヽあの、いやらしい顏わいなあ。
康秀　エ、未に弄りをるわい。
小町　弄るとは誰が弄る？
康秀　知れた事こなたがぢや。
小町　いゝえ、そなたが！
康秀　氣違ひを弄つても氣味が惡いわ。
小町　氣違とは誰が氣違ひ？
康秀　小野小町、ともあらうものゝなれのはてが氣違ひと
はなあ。
小町　何、小町が氣違ひとは、そりや氣違ひにもならうか、
夢より外に逢ふ夜も無いもの！　其夢も破れたもの！
康秀　其夢に見る人は誰ぢや。

小町　さあ、其人は誰ぢや。其人はどこぢや。其人はどこぢや。

（ト尋ねまはる、康秀危な相に附いてまはる。）

小町　其人はどこへ？　どこにも影も無い、浮世の果は——さびしい、さびしい——さびしいなあ——

（ト薄の上へ倒れる。寒月向へ出る。）

康秀　あゝ野晒になるのかなあ。

小町　（飛起きて）何ぢや野晒？

康秀　オヽ野晒より寒月に立つ其凄さ！　哀を越して恐ろしい。

小町　恐ろしいとは何がえ？　（ト寄る）

康秀　（愈々後ずさりして）それ／＼美しい所がある丈尚恐ろしい。こりやかなはぬ。（ト逃出す）

小町　これ、どこへ、お前も逃げてゆくのぢやな。（ト追ふ）

康秀　（愈々逃げて）逃げずにはゐられぬわい。（ト走つて入る）

小町　あゝ獨(ひとり)！

（段々暗くなる。向に維章、髮亂して幽鬼の姿で茫と現はれる。）

小町　オヽ、お前は！

（維章寄つて來る、小町此方を向く、淸行同樣の姿で現はれる。）

小町　お前も？

（淸行も寄つて來る、小町避ける、二人捉へようとする、小町逃げても逃げられず、きり／＼舞ひする。）

小町　エヽ死んでも執着は晴れぬよな——いやもう恐ろしい事は無い、あはれぢや、あはれぢや、皆あはれぢや、其あはれにほだされて、死ぬにも死なれぬ姿よりお前達の方が仕合せぢやぞえ。

（トきつと見る、幻影たぢ／＼となり、段々薄くなつて消える。）

小町　幻も消えてしまうた、さびしさの極みぢやなあ！

（青い光、遍昭、良少將のはなやかな、直衣姿で奥の方へ現はれる。）

小町　オホヽヽヽヽヽヽヽ

（泣笑ひする、光愈々明、少將の姿愈々鮮になる、小町、足も空に其方へ寄つて行く　——幕——

（大正十二年）

あじろ舟（二幕四場）

人物

網代屋津之助
おたね　女房
浪江　藝子
吉村寅太郎　浪人
池內藏太　同
那須眞吾　同
酒井傳次郎　同
前田繁馬　同
久齋　隱居
庄八　手代
市松　藝子
小しほ　同
ひなぢ　同
さもん　同
さきの　同
おはま　見習
兵助　讀賣
捕手

時
文久三年

第一段

其一　大阪新淸水浮瀨

上手床、違棚、續いて壁、正面遠く山、海、近く野、町はずれの景。上手に茶の間の壁、丸窓、下手下口。浪人池內藏太、那須眞吾、酒井傳次郎、前田繁馬、羽織袴、藝子市松、小しほ、ひなぢ、さもん、さきの其間に坐つて、前に「七人猩々」貝の盃數種並べ酒宴の體。

內藏太　（盃を取上げて）此盃は「春風」か、オランダ渡りと見えるな。（市松つぐ、飲む）

眞吾　（次の盃を取つて）そんな物より此「君が爲」が好い。（小しほつぐ、飲む）

傳次郎　何か一舞うて見い。

小しほ　ヘイ、そんなら「松盡し」でも。

（三人舞ふ。）

（吉村寅太郎、二十六、月代、羽織袴で出る。）

寅太郎　古い事をやつてゐるな、もつと變つたのをやれ。

さきの　そんなら此頃はやる「萩さん」が好いわいな。
市松　それにしませう、お賴み申します。
（二人踊る。）
唄〽萩さん、島津はどうでした、出來なくて島原一揆の眞似ぢやもの、ナントショウ土佐はエ、
寅太郎　措け〳〵島原一揆の眞似になつて溜るものか。
紫馬　由比正雪や大鹽平八、いやもつと大芝居が見たいな。
ひなぢ　今中の芝居で齋藤太郎左衞門をしてゐます。
眞吾　あんな格子定規にかゝはる侍より自由自在の劍の舞が見たいな。
さきの　オヽこは！
內藏太　何がこはい、お前等の腕の方が餘程こはいわ。
三人　オホヽヽヽヽヽヽ
寅太郎　浪江はどうした。けふは網代屋も來るから是非と云つて置いたのに。
市松　網代屋さんと聞いて、おやつしに隙が入るのでござんせう。
（藝子浪江、二十四五、島田、其頃の大阪風の濃厚な着付で出る。）
浪江　また陰口でござんすか、浮名もうけは厭ぢやわいな。
市松　浮名丈でもござんすまい。
內藏太　さう聞きや、唯は通さぬぞ、さあ、取りあへず。「吾せこ」ぢや。（ト一の盃を差す）
浪江　（受けて）「來べき宵なりさゝがにの」（ト云ひつつ飮む）
眞吾　いや「蜘の振舞」までも無く來るにきまつて居るぞ。（ト復他の盃を差す）
浪江　（受けて）それは「瀧の音」？「絕えて久しくなりぬれば」では氣になります。
寅太郎　「名こそ流れて尙聞こえけれ」なら好いではないか。
浪江　いつまでも立つ浮名なら、それも惡うはござんませぬな。（ト飮む）
市松　惜い事！　けふは醉ひ潰さねばおきませぬぞえ。
（ト他の盃を差す）
浪江　（受けて）好うござんす、「幾瀨」でも戴きませう。
小しほ　そんならなみ〳〵！（トつぐ浪江ぐつと飮む）
傳次郎　見事々々。
浪江　あゝもう胸が「鳴門」でござんす。どうやら「猩々」の樣な顏になり相な。一寸彼方で醒まして來ます。
紫馬　ならぬ〳〵其赤い顏を網代屋に見せるのぢや。

浪江　（立つて）いえ、こんな顔を見せたら鮑の貝になりますわいな。（入る）
內藏太　イヤ、こりや浪江の方が熱相ぢや。
皆　ハ、、、、、、。
女中　網代屋さんが見えました。
（網代屋津之助、三十、羽織着流しで出。女中入る。）
津之助　御免下さりませ。
寅太郎　オ、待兼ねた、さあ、これへ。
津之助　遲うなりまして、相濟みません。
內藏太　さあ、ずつとこれへ。
寅太郎　取りあへず一獻じよう。（ト一の盃を差す）
津之助　（受けて）難有う。
（小しほ酌する。津之助飮んで返す。）
眞吾　それより、此「七人猩々」でやつては？
津之助　どう致しまして、そんな大盃で！
さもん　これは六升半入ります。
ひなぢ　今までこれで上つた方は二人よりござりません。
さきの　オランダ人がまゐりますと、屹度天王寺の歸りに寄りますが、皆これにはびつくり致します。
市松　近年はさつぱり來ぬ樣になりましたが、どうなつたのでござんせう。
繁馬　さればオランダ人ばかりか、メリケン、オロシヤとどし〳〵來るやら？
傳次郎　どこからも來ぬ樣になるやら、此日の本が沈むか浮瀨ぢや。
寅太郎　時に醉はぬ內に話がある、お前達は暫く彼方へ！
藝子　ヘイ、そんなら後程。
內藏太　オ、、何か甘い肴をあつらへて置てくれ。
市松　かしこまりました。（ト五人入る）
寅太郎　（風呂敷包を解き、一の畫を取出して前に置き）先づこれを見て下され。
津之助　（ひろげて見て）ハアこれは楠公が御最期の圖・鐵石、あ、藏本鐵石先生のお筆でござりますな。
寅太郎　さうぢや、七度人間に生まれて逆賊を滅ぼさんと題字を書かれたのは中山侍從ぢや。
津之助　成程、これは見事な物でござりますな。
寅太郎　どうぢや、これを買うて下さらんか。
津之助　ヘイ、戴いてもよろしうござりますが、お値段の所はどの位でござります。
寅太郎　千兩ぢや。
津之助　エ？（ト驚く）
寅太郎　高いと思はれるか知れんが、畫題が楠公、筆者が鐵石、贊が中山、今に二千兩にもなるのは我等が受合ふ。どうぢや、一張込んで貰へまいか。

津之助　（寅太郎から他の二人の顏を見まはして）　吉村さん、あなたとは長いお馴染、侍町人の差別も無い位のおつきあひ、御心持も知つてゐれば、私の氣性も好う御存じ、なぜもつと有りのまゝ打明けては下さりません？

寅太郎　エ……

津之助　今に二千兩になるからと、欲で釣らうと思召すのは、餘り見下げたおつしやり樣、算盤の上なら御免を蒙むります、何これが千兩どころか、十兩も出せませうか。そんな金錢づくより、お心の底を打明けて下さりましたら、千兩でも、二千兩でも、出すまいものでもござりません。

寅太郎　イヤ、これは我等が惡かつた。兼々氣性を知ればこそ此無心、しかし有りの儘聞かれたら、もう否とは云はれませんぞ。（ト見つめる）

津之助　それは知れた事、否氣なら始めから體好くお斷わり申します。

京太郎　ではどの樣な事があらうとも？

津之助　私も網代屋津之助、町人ながら青表紙の端も覗き親代々の商賣では納まらぬ胸の底、ましてあなたから時勢の事も承はり楠公の御心位は此畫を見ずとも知つて居ります。さあ、おつしやつて下さりませ、此續きをお描きなさるのでござりませうがな。

（五人顏見合はせ、四人上手へ見張りに入る。）

寅太郎　さうぢや、其續きやら、始めやら、鎌倉以來何百年、上をないがしろに、民を虐げ、國を危うくする幕府の大罪、最早時節到來した。愈此度大和へ御幸・それを機として中山侍從、藤本鐵石、松本謙三郎、我等など先づ五條に旗を擧げ、京では三條中納言殿、長州では眞木和泉殿など、それぞれに手筈を定め、此大阪に御駐輦、攘夷を名として幕府を討つ號令發布と定まつた。其軍用金の一端に此畫を賣らうと思うたのぢや、どうぢや、千兩と云ひ出したのも、無法では無からうがな。

津之助　イヤ、こりや目の覺める樣なお話、好くお明し下さりました、千兩でも、二千兩でも、御用立致しませう。

寅太郎　用立てゝ下さるかな。

津之助　町人の分相應、刀の代りに金で投出す私の魂、お役に立つたら何より仕合せでござります。此畫を戴くにもおよびません。

寅太郎　それでは愈々御代となつたら、何なり御用仰せつかる樣取りはからふ事にしよう。

津之助　そこまで宛に致しません、あなた方も命がけ、私も命がけで、先の事は考へますまい。

寅太郎　流石は網代屋、石の橋を金槌で叩いて渡る大阪の町人には珍らしい。

内藏太　（入つて來て）　得心の上からは、成るべく早う工面してほしいが？

津之助　私共も此頃は兎角貸し倒れになりまして、千兩となると右から左とまゐりませんが、丁度今日去るお大名から返つて來る金がござります、それをおまはし申しませう。

眞吾　それは何より好い都合ぢや。

津之助　しかし親父は固より、手代にも知らされません。（一寸考へて）　フム、夜中の鐘を相圖に、裏口へお出で下さりませ、そつとお渡し申しませう。

内藏太　承知した。

寅太郎　門出を祝うて、此「七人猩々」を飲みまはさうかな。

内藏太　それが好い。（ト手を打つ）

（藝子五人出る。）

内藏太　此盃へついでくれ。

五人　ヘイ。

（皆寄つて猩々の盃につぐ。）

寅太郎　（謠）　また傾くる盃の影をたゝへて待ち居たり。

内藏太　老せぬや／＼藥の名をも菊の酒、

眞吾　盃も浮び出て、友にあふぞうれしき、

皆　〽此友にあふぞうれしき。

（トうたひながら飲みかはす。）

寅太郎　さあ行かうか。

市松　もうお歸りでござりますか。

寅太郎　ゆるりと飲むのは近い內、賴むぞ。

津之助　呑込みました、好いおたよりをお待ち申して居ります。

（寅太郎盃を持ち、四人と下手へ、藝者送つて入る。津之助下口まで見送る、浪江茶の間から出る。）

唄　〽浪枕かりのゑにしも千ひろの海の深い願は一すぢな、やるせないぞえ思ひ草

浪江　えらい事をお受合ひなさんしたなあ。（ト心配相に側へ寄る）

津之助　（驚いて）　エ、お前聞いてゐたのか。

寅江　醉がまはつて横になり、うつ／＼としてゐたら、中途から耳に入り、ハッと思うて、動悸がしましたわいな。

津之助　（困つて）　イヤ、こりや大事も大事、此上も無い大事を聞かれたなあ――

浪江　いえ、もし、津之助さん、それ程の大事を私が聞い

て、なぜ悪うござんすえ。
津之助　エ？
浪江　お前の大事は私の大事、洩らしでもする様な私ぢやと思はんすか。
津之助　そんな事は思ひはせぬが、一途へはどこまで響くか――
浪江　さあ、それ故尙心配、お前こそ若もの時にはどうなさんす。
津之助　それは一か八か、どうで無事には濟まぬ世の中、遲かれ早かれひつくりかへらう、幕府の運も盡きてゐる。こんな時にうか〳〵と算盤ばかり置いてゐても、二一が四になるやら、十になるやら？　こゝは私も運だめしぢや。
浪江　そんなら私も一生懸命、氣ばかりでも張りつめよう。したがそれに一圖になり、私の方をお留守にしては聞きませぬぞえ。
津之助　何のしよう、すんでの事に家を出て一本立になつた上、思ふまゝにしようと思うた。
浪江　エ、お家を出て？　あのおたねさんを捨てゝ出て？
津之助　さ……さう思うたが、かうなつては金が入る、矢張家に居ねばならん――
浪江　何の事ぢや、口ばつかり！　矢張お家でおたねさんを大事にした方が好いわいな。
（トつんとする。）
津之助　あほらしい、子供の時から育てられた家、其義理も思はにやならぬ、侍ほど思切りよく、出る譯にもゆかぬぢやないか。
浪江　左樣、左樣、義理も大切、情も大切、稚馴染はまた格別ぢやわいなあ。
津之助　これ、浪江、お前けふはどうしたのぢや、つひにない愚痴をいふな。
浪江　それは私は愚痴な女子、お乳母日傘で育ちはせず、お賢い大家の糸さんとは比べものにならぬわいな。
津之助　何を云ふのぢや、そんな口舌してゐる隙は無い、早う今の金の事を――
浪江　金の事やら、誰の事やら、早うお家へお歸り〳〵、それが何より家內安全、天下太平ぢやわいな。
津之助　ハヽ、天下は遠から動き出した、家內も毎日波や風こゝまで波では浮ぶ瀨が無い、けふはもうお預けにして、翌の晩喧嘩なと、何なとしよう。
浪江　いやもうお前の奥の手は見拔いてゐる。
津之助　何知つてゐるものか、事が無けねば魂は見えぬ。
浪江　そんなら其魂を私にも見せて下さんせ。
津之助　見せうとも〳〵今こそ見せう「君が爲」に。

（ト其名の盃を取つて差す。）
浪江　（受けて）エ、あの眞實？
津之助　何も時節ぢや、お前も覺悟するが好い。
浪江　私や元から命がけぢやわいな。（ト盃をさす）
（津之助其手を取つて、片手で飲む。さきの駈けて出る。）
さきの　（二人の體を見てきまり惡げに）あ、濟みまへんなあ。
（ト入る、二人笑を含んで顏見合はせる。）
唄　〽解けてはづかし胸の謎、たまの逢瀨を憎くや松風

其二　網　代　屋

下手寄に二重、四疊半、上手に床、眞中圓く窓、其中央佛壇、前に花瓶、燭臺、下手棚、茶器を置き、續いて壁、廊下、下手藏、下飛石、手水鉢、石灯籠、上手に枝折戸、黑板塀、切戸、立木。
久齋、七十、剃髮、十德、帳面を見てゐる。
手代庄八、五十代、着流しで下手から入る。
庄八　お出でなされませ。
久齋　ハイ、今聞きや奉行所から呼出しがあつたとやら。何事でござつたな。
庄八　また御用金でござります。
久齋　復か、そしてどれ丈？
庄八　二千兩でござります。
久齋　二千兩？（眉をひそめて）此逼迫の時節に二千兩そして都合は出來ますか。
庄八　ヘイ、丁度けふ西から返つた分がござります。それをまはしたら宜しうござります。
久齋　それはまあ好かつた。それが無かつたらにつちもさつちも行かぬ所、近年の貸倒れ、かう續いてはどうならうと、時々夜中に目が覺めて寢られぬのも度々、津之助はどうしました。
庄八　ヘイ、まだお歸りになりません。
久齋　どこへ行つたのぢや、お奉行所まで代理で濟ますとはなあ？
（娘おたれ、二十五六、先笄、地味な着付で出る。）
たれ　父さん、今晩はもう遲い故、翌の事にしてはどうでござんす。
久齋　いや〳〵是非逢うてゆく、どうしてから遲いのぢや。また例の南ぢやな。
たれ　……いえ〳〵けふは吉村樣から呼びに來まして——

久齋　吉村？　吉村とはどこの人ぢや。若や土佐の浪人の吉村寅太郎ぢやないか。
たれ　さあ……どうでござりませうやら……
久齋　そんな人に附合うたら危ない、どんな事を仕出かさうやら？　近年の世間の亂れ、皆浪人が騷ぎ立てゝ御所の御公卿さんまで乘せる故ぢや。こはい事／＼町人には何より禁物、用心に用心して、御法度を大切に守らにやならん。兎角津之助は大膽な。お前も氣をつけて、餘り夜ふかしもせぬ樣いふが好い。
たれ　そんな事は云はれいでも、氣をつけてゐますわいなあ。
久齋　それに大分私の耳に入る事がある！
たれ　エ？
久齋　あう遲いのも曰くがある、も一度迎ひをやるが好い。
たれ　今丁稚をやりましたわいな。
（ト立つて下りかける。津之助出る。）
たれ　オ、お歸り、父さんが待兼てぢやわいな。
津之助　さうか。（ト座敷へ入つて）これはお待たせ申しました。一寸餘儀無い附合で遲うなりまして、相濟みません。（おたれ入る）
久齋　聞けば吉村とかいふ人に呼ばれてぢや相なが、よもや寅太郎ぢやあるまいな。

津之助　エ……違ひます……卯兵衞といふ大和の大百姓でござります。
久齋　そしてどういふ用事でござつた。
津之助　……あの……山を抵當に……金を貸してほしいとの話――
久齋　いや、金なら此方に入りますぞ。
津之助　エ？
久齋　けふ奉行所からお召出しとは、何事かと氣になる故先から來て聞いて見ると、また御用金二千兩。
津之助　何、二千兩？
庄八　今月中に半金出せとの事でござります。
津之助　いや、とても今二千兩などゝ――そんな工面は出來ません――
久齋　何であらうとお上の御用、ましてけふ返つて來た金があるといふぢやないか。
津之助　……それはもう外へ貸す約束致しました。
庄八　エ、どこへお約束なされました。
久齋　どこであらうがそれは私、お上へ出さねばならぬと云や、變がへしても仕方が無い。
津之助　其お上がどうなるやら、翌の事も分りません。
久齋　何お上がどうなるものか。緩んでも德川樣ぢや、三百年の御威勢には浪人などが突いた位でびりつともする

ものか。
津之助　いゑ、掃部様さへ浪人には唯一打、これではまたどんな事がござりますやら――
久齋　イヤ事があつたら此方の家は忽ちこたへる、重に貸付けた先は御譜代ぢやないか。まして此上御用金まで出すからは尙事切れぢや。翌は早速お請書を出すが好い。
津之助　……ヘイ……
久齋　外への約束は斷らにやなりません。
津之助　……ヘイ……
久齋　かれこれ云や家の暖簾にもかゝはりますぞ。
津之助　ヘイ……しかし此月中でござりますな。
庄八　左様でござります。
久齋　が現在あるからには早いが面目、お上のお覺えも好い譯ぢや。好いか――好いか――好いかといふのに？
津之助　ヘイ、好い様に致しませう。御安心なされませ。
久齋　隱居はしても兎角氣になる此頃のお前の素振！
津之助　エ？
久齋　いや、それも世間につれるのぢや。がどんな事になつても、家の暖簾に疵のつく様な事をしてはなりませんぞ。慶長以來續いた家ぢや。私も養子、お前も養子、尙更義理がござります、お前よも義理を忘れはしまいな。
津之助　御念には及びません、實の親より御恩の程は大切に思うて居ります。
久齋　そんなら餘り心配させて下さるな。どれ隱居へ歸つて休みませう。（ト立つてよろめく）
庄八　お危なうござります。（ト扶けて、下手へ共に入る）
（津之助見送る。鐘の音。）
（津之助思案にくれる思入上手の切戸を叩く音。）
津之助　あ、ござつた！
（其方へ行きかける、風の音、佛前の燈消える、振返る――尙強く叩く音――よろめきながら其方へ行て戸を明る――寅太郎入る。好いかといふ手振。）
津之助　一寸お待ちなされませ。
（寅太郎うなづき物陰へ忍ぶ。津之助藏へ入る、おたね出る、驚いて又入る。津之助金箱を持つて出る、下手を見まはして、手渡す。耳打ちする、寅太郎うなづいて切戸を出る、津之助閉める、おたね出る、津之助此方へ來る、おたね側へ寄る。津之助驚く。）
たね　ありや誰でござんす。
津之助　……エ……
たね　なぜ内密にお渡しなされます。
津之助　（云ふに云はれず、困却して）……それは一寸譯があつて……。
たね　どんな譯でござります。

津之助　……それはお前に云うても分り難い……商賣上の約束ぢや……

たれ　どなたと約束なされました。

津之助　……誰と云うて……誰でも好い……聞きもせず、見ぬ顔をしてゐてくれ。（ト座敷へ上る）

たれ　今までは聞きもせず、見ぬ顔もしてゐましたが、今こそさうはしてゐられません。御用金が入るといふのに少々で無さ相な今のお金、餘所へ渡して濟みますか。

津之助　それはどうなとなるわいな。

たれ　何のなりましよ、お上の御用にまでお代へなさる上からは、茲の内はどうなります、父さんにも何とおつしやる、私もどうなるのでござります……。（ト膝に詰め寄る）

津之助　何のお前がどうなるものか。ちつとも構ふ事は無い。

たれ　かまはぬ所か、もう辛抱してゐられません。今までは心の底まで向へとは思ひませなんだが、其一筋も空頼み、底まで見えた上からは、私はほんの名ばかりぢや。世間體ばかりつくろうて、お家さんがほしてゐられましようか。（ト段々烈しくいふ）

津之助　（愈迷惑して）いや、それは丸で見當ちがひぢや、そんな逆事につかふのぢやない――

たれ　そんなら何にお渡しなされます。

津之助　……それはお前にも云はれぬ事……

たれ　私にも云はれぬとはあの事ばかりぢや。

津之助　エ、もつと大きな事があるわい。

たれ　これ程大きな事が女子に取つてござんすか。

津之助　男に取つてはまだ〳〵ある。

たれ　そんなら云うて下さんせ。

津之助　云はれぬのが男のつらさぢや。

たれ　あの女子の事故云はれぬのぢや。

津之助　エ、お前、邪推などせなんだぢやないか。

たれ　邪推所か現在見ました。

津之助　（困り切つて）……あゝこりやもういつそ……さうぢや、浪江につかふのぢや。

たれ　エ、矢張さうでござんしたか。餘りぢや〳〵餘りでござんすわいな。

津之助　いや、それも餘儀無い譯……お前にちつともかゝはりの無い事、親父さまにも云はずにゐてくれ。

たれ　私にかゝはりの無いとは、これ程かゝはりのある事が外にござんせうか。

津之助　いゝや無い、其段は安心してゐてくれ。

たれ　これが安心出來ませうか。

津之助　いやまあ私に任して置てくれ。

たれ　任して置いたら何にもかも渡しておしまひなされます。
津之助　何のやらうぞ、私の心では——
たれ　遠に飛んでゐましたな？
津之助　いや、飛ぶに飛ばれず、居るにゐられず、（ト立上つて行きかけて）もう暫ぢや、運に任せて待つてゐてくれ、待つてゐてくれ——
（ト側へ寄つて手を取る、おたれヒステリイ的に振拂ふ、津之助詮方盡きて困り切る）

——幕——

第　二　段

島の内浪江の家

常足の二重、正面押入、壁、神棚、下に三味線箱、火鉢鏡臺など、前續、下手へ續く。前、手水鉢、燈籠、植込、上手土間、門口、格子、臺所口、外曲つて横町の書割。

見習のおはま、着物をたゝんでゐる。

讀賣兵助下手から出る。

兵助　さあ〳〵これは此度大和の騷動、五條の代官所の燒打から、高取(たかとり)の城攻、大日川の合戰まで詳しく分る、景物にこよしの一枚。（唄ふ）
〽見るも聞くのも皆人たのみどれが誠かうそぢやゝら
〽誠つくして虚ぢやといはれ今は屋形で一思案
（浪江此間に奥から出る。）
これ、一買(ひとつ)うておくれ。
はま　へイ。（門口へ出て）一枚おくなはれ、何ぼだす。
兵助　よしこのつけて十文で。
浪江（鏡臺の引出から錢をほり出して）これをおやり。
はま　へイ、十文。（ト渡して受取り、浪江に渡す）
兵助　難有う、さあ〳〵これは此度の十津川の始末、天誅組の敗北、よしこのまで出來ました。
〽やけぢやどやけぢやかうなるからはくどき落とさにや聞きはせぬ。
（歌ひながら入る。）
（浪江讀んで心配の體。おはまに奥へ持たしてやる。義太夫の流し、聞こえるおたれ出る。）
たれ（門口を明けて）御免。
はま（出て）へイ。（上口へ出て行つて）？
たれ　あの……浪江さんはお内でござりますか。
はま　へイ、内で。
たれ　一寸、お目にかゝりたうござりますと、取次いで下

さりませ。
はま　あんたどこから、おいなはつた？
たれ　エ……あの……網代屋からまゐりました。
はま　網代屋？（ト浪江の顔を見返る）
浪江　（振返つて見て驚き、又困る思入）……まあ、此方へ……お通し申し。
はま　へイ、さあ、此方へ。（布團をすゝめて入る）
たれ　御免。（ト通つて、浪江を見、反感を制して）始めまして……私は網代屋の家内でござります。
浪江　左様でござりますか。私は浪江でござんす。
たれ　不意に上りまして御不審でござりませうか、一寸お尋ね致したい事がござりましたので……
浪江　それはまあどんな事でござります。
たれ　あの……津之助は……何所に居ります。
浪江　エ？
たれ　もしや、此方に居りは致しませんか。
浪江　何の私の方に……いえ、此頃はさつぱりお目にかゝりません。
たれ　いやもし、浪江さん、私も唯の使ではござりません。來る筈は無い所へ自身にまゐりましたのでござります。それも私より家の事で是非逢うて申しませねば、翌にも迫るお上の御用、津之助は固より家の暖簾にかゝはる事でござります、どうぞおつしやつて下さりませ。
浪江　……それは知つて居りますなら、申しますが、眞實此方へはお出になりません、餘所をお尋ねなされませ。
たれ　よそ外は一二軒今寄つてまゐりました。お前様は一通りのお馴染でもござりますまい。津之助の身の上にかかはる事とお聞きなら、何はさておき、お逢はせなされても、御損が行きも致しますまい。
浪江　（むつとして）妙な事をおつしやりますな。何も私が算用づくで邪魔をするとでもお思ひの様子、そんな素人じみた事をする私でもござんせぬわいな。
たれ　ハ、何そんな事を思ひませう。私も小娘でもなし、遂に今まで邪魔した事も無ければ、され様とも思ひません、お前様にお恨みも、何もござんせぬわいな
浪江　（愈々反感をもつて）さうおつしやる中に針がある、それはお憎みなさるのも御尤も、定めて家をお明けなさるのも身をお隱しなさるのも、皆私のせいと憎んでお出でなされましよ。今更云譯なぞ致しません、憎いなら憎まれませう。憎まれて、憎まれて――憎まれぬくのが……いつそ氣持が好うござんす。
たれ　憎んで濟むなら憎みもしませう、恨んでも、嘆いても、濟まぬのは御用金、それが出來ずば家が立たず、工面をせうにも時節柄、親類とて融通は出來ず、家質を置

くも面目無いと、父樣は四苦八苦、それを餘所に自分丈隱れたとて濟みませうか。そんな人でもござんせぬのに、何か深い譯があつてか、逢うて聞くより外ござんせぬ故、笑はれるのを覺悟して來ました。もう云うて下さんしても、お前樣の負けではござんせぬぞえ。

浪江　勝ちが負けやら、負けが勝ちやら、勝ちも負けも出來ぬつらさ……どうでも憎まれるより外は無い、お金の事も家出の事も皆私のせいでござんす、義理より深い情の隱家何であらうが洩らしませうか。

たれ　それではどうでも云うて下さりませんな。

浪江　ハイ……

たれ　あそれはまた餘りぢや、何もお前樣との緣をどうと云うでは無し、私の方の事でござりますぞえ。私の緣こそ今が切れ目、父樣の腹立、一家の咎め。

浪江　エでは御離緣の話でも？

たれ　さあ、それは必死に止めて居ります、が津之助の心の底を問ひ正さねばなりません。

浪江　それはお尋ねなさるまでもござんすまい。

たれ　ではもう歸らぬ氣でござりますか。

（浪江默つて俯むく。）

たれ　エ、それほどまでにお前樣に？　（ト始めて嫉憎の思入を表はして）いやお前樣に云ふ事はござんせぬ、が津之助には今一度、（獨言の樣に）歸らぬとでも直に聞きたい、家の方はなだめても、矢張出る氣か聞かしてほしい。それであきらめる樣な私ぢやと思うてか、（又浪江に）素人は一圖でござんす、町人の女房には駈引の無い情が命、情の力で命の糸を繼ぐか、切るか——今にお見せ申しますわいなあ。

（ト立つて奧の方へ寄る、おはま出て塞ぐ樣に立つ、おたれ强ひても進まず、恨めしい思入で外へ出て、あたり見まはし、考へながら入る。）

（半まはり）

同　奧

緣側から續いて奧の間、小さい床、壁、二階の上口、下手庭、裏口。

津之助手紙を書いてゐる。浪江緣を傳うて來る、

浪江　もう、望はござんせぬは。

津之助　いや、まだ一筋殘つてゐる。

浪江　でも其讀賣の樣子では？

津之助　いや、今にも長州勢が上つて來たら、それと一になつて盛返さう、そしたら京大阪もひつくりかへり、御用金の沙汰もそれぎりになるかも知れん。

浪江　それが宛になりませうか。望にも迫つてゐるではご

ざんせぬか。

津之助　けふ翌が生死の境、つらい思も今暫ぢや。

（庄八、おはまの止めるのを押除けて出る。）

はま　いゝえ、ゐやはれしまへん、あんたそんな無茶な事を、いきまへんというたら……

庄八　矢張ござつた、今御寮人さんがすご／＼お歸り、それでも茲より外に無い、無理にでもお目にかゝらにやなりません故まゐりました、さあ、お歸りなされませ、會所から呼びにまゐりました。

津之助　エ、會所から？

庄八　何でも十津川の事で尋ねると云うてゐられます。

津之助　十津川？（びくつとして）それならもうあの男は離緣しましたと云ふが好い。

庄八　エ、離緣？　いや其事で大騷動、御寮人さんが泣いてのお頼みで、どうやら濟み相でござります。

津之助　家は濟んでもお上は濟まん、いや、私の方から出たからは、固より歸らぬ覺悟ぢやわい。

庄八　それでは御寮人さんがおかあい相でござります。御隱居始め一同を一生懸命におなだめなされましたあの御苦勞、お察し申して涙がこぼれます……さあ、まあ一寸でもお歸りなされませ。

津之助　いや、折角ぢやがどうでも歸らん。（手紙を渡して）委細はこれに認めた。篤と讀んで不埒とも……何とでも思うて下され……こゝの內も今出る故、もう來るにはおよばぬぞ。

庄八　思切つたおつしやり樣、それではまあこれをお目にかけ、其上の事に致しませう、しかしどこへお出でなされます。

津之助　どこへ行くやら私も知らん……お前にも心配さした、尙家の事を頼みますぞ。

庄八　いやこりやいよ／＼氣になります、も暫こゝにゐて下さりませ。今度は此方からお頼みでござります。あ、こりやどうなる事であらうなあ——（ト上手へ入る）

津之助　（見送つて此方向き）こりや猶豫してゐられぬわい、十津川の事も分つて來たのか。

濱江　吉村樣もどうなされたやらなあ。

（寅太郎忍んで出る。）

津之助　オ、どうして茲へ？

寅太郎　大和から逃げて來たのぢや。

濱江　では、いくさは？

寅太郎　總潰れぢや。

津之助　エ？

寅太郎　折角京や長州と打合はせ、先づ五條の代官所を燒打ちした其日の夕方御所では御幸を御變更、會津を召し

て御門を閉ぢ、三條殿始め七卿は長州落、今更引くに引かれもせず、高取の城を攻めたが乗取れず、あたりの藩から寄せて來るのを幾度か打ち破つたが、何分小勢で、烏合の衆、とても長く支へられず、天の辻を我から燒き、せめては南朝の御末、黑木の御所の御跡を我等の墓と籠つたが、里人の歎願にまたそこも立退いて、鷲家口にかかつたら、待ちかまへた紀伊藤堂彦根勢三方相手に必死の激戰、那須始めばた／＼討死、それにも屈せず次の日も加はつた高山勢を村の向へ擊ち退けたが、藤本、松本等の討死にもうこれまでと皆ばら／＼中山殿は長州へ、我等は重手負うた故一足おくれて茲までまゐつた。

津之助　そして長州の方はどうなつたのでござりませう。

寅太郎　京の手筈が狂うたからは、直ぐ寄せて來る譯にもゆくまい。

津之助　では大阪へお乘込も？

寅太郎　それも皆くひちがうた、あれ程確と打合はせ、十に九まで見込をつけたに……殘念ぢやなう……。

（津之助浪江と顏を見合はせ自分にも顧みる。）

浪江　それではもうこれまでゝござりますか。

寅太郎　何これまでゝ止むものか。破れたとて天下に響かう、討死した人々の血汐は無駄になるものか。彼方此方に火ともならう。更に大きな企てして、幕府を倒す時が來ようぞ。

津之助　それが來るでござりませうか。

寅太郎　來るとも／＼屹度來る。唯それはいつ來るやら、折角出された軍用金煙になつて相濟まんが、我等の命があるからは、決して忘れは致さんぞ。

津之助　いえ。それは御配慮には及びません、唯お役に立ちまして、御旗の光を拜めると、それを樂しみにして居りましたのに……

寅太郎　其光はいつかさゝう、其時始めて効が見える、それを宛にしてゐて下され。（懷から紙包を出して）これは京の同志へ送りたいが、何とかしてとゞけてほしいな。

津之助　かしこまりました。確にお屆け申しませう。

寅太郎　（匕首を渡して）これは私の……形見……でも無し……置土産……命があつたら逢ひませう。

津之助　へイ、隨分お大事に。お寒相な、これなと着てお出でなされませ。（羽織を脫いで着せる）

浪江　御機嫌よう。

寅太郎　オゝ。

（寅太郎外へ出ようと戸を明けると、捕手二人飛び込んでかゝる。寅太郎投げて出る、捕手續いて出る。）

外で　御用ぢや／＼／＼／＼

（ばた／＼と音――浪江駈けて行つて戸を閉め、立聞

く――、此方へ來て、よろ〳〵と坐る。）

津之助　彼方もこれまで！　此方もこれまで！

浪江　もう待つ事も出來ませんなあ？

津之助　最後の賴みも切れてしまうた。

浪江　そんなら私も茲で一緒に？

津之助　いやこれが眞にお前の爲なら一緒にと云ふけれどそれを名にして申譯、死んでくれとは云へぬでないか。

浪江　何であらうがお前を見殺し、おつとしてゐる私ぢやない、お金は立派に使ひ捨て、お家への爲に死なんすからは、私の爲で無い丈に、快よう死ねますわいな。

津之助　あの快よう死ねるか。（ト手を取る）

浪江　あい。（トすがる）

津之助　（また手を放して）しかし一緒に死んでは親父樣家の者も倘面當にと、不憫どころか憎むであらうな。

浪江　ほんにさうぢや、先程もわざと氣强く、惡者になり濟ましたのに、命まで取つたとあつては、いつ〳〵までも恨まれて、云譯にはなりますまいなあ――

津之助　こりや一緒に死ぬにも死なれぬ、お前は跡へ殘つてくれ。

浪江　それも無理ぢや、つらい思をした上に、死ぬより苦しい思をせいとは……

津之助　でもお前丈でも知つてゐねば、私の心は無駄になる。

浪江　知つてゐても何にならう、倘悲しうござんすわいなあ……

津之助　それではどうでも殘る氣は？

浪江　一緒に死んで惡ければ、處と時刻は別々でもあの世を宛に死にます故、待つてゐて下さんせ。

津之助　逢はれるものなら、あの世で待たうが、知れぬ闇路へ飛込むのぢや、これが最後の別れにならうなあ……

（二人手を取りあふ。）

（津之助涙を拂うて庭へ下り、裏口から出る、半まはり、黑板塀、柳、上に二階の端見える。上手に橫堀の一部、橋、津之助柳の陰へ來る。寅太郞縛されて捕手附て出る。互に思入。月さす。）

寅太郞　くもりなき月を見るにも思ふかな
　　　翌はかばねの上にてるやと

（それとなく別を暗示して入る、津之助見送る、おたれ驅けて出る。）

津之助　オヽ、どうしてまたやつて來たのぢや。

たれ　どうしてと云うて、庄八の話といひ、あの手紙を見て、おつとしてゐられませうか。

津之助　では譯も分つたであらう、お前にも濟まなんだ、勘忍してくれ〳〵。

たれ　何濟むも濟まぬもござんせぬ、今までの事は今までにして。さあ、歸つて下さんせ。
津之助　いや、歸つたら私ばかりか家までも卷添ぢや。
たれ　それほどまでに、浪江さんに？
津之助　いや、浪江とも別れてしまうた。死ぬも生きるも唯一人。
たれ　エ、一人で死ぬ氣でござんすか。
津之助　どうしようとも今を限り、お前こそ達者でゐや。
たれ　いゝえ、私も歸りません。
津之助　エ、歸らん？　お前もそれ程？（ト顏を見る）
たれ　それが今分りましたか。（トすがりつく）
津之助　……分つても何にもならぬ……さあ、早く歸るが好い。
たれ　お前が思ひ直さんしたら？
津之助　私はとても思ひ直せぬ。
たれ　そんなら私も！
津之助　いゝえ、お前は――
たれ　いゝえ私は――
津之助　お歸りといふのに！
たれ　そんなら先へ、二世の瀬踏みをしますわいな。
（ぢつと津之助の顏を見て、上手へ駈けゆく。津之助止める、おたれ爭うて、川へ飛込む。水の音。）

津之助　アッ……
（驚いて駈け寄り、見下して、うろ〱する。）
（浪江二階の障子を明けて驚き、決心の思入で、津之助を見て障子を閉める。）
はまの聲　あッ！　たれぞ來て！　姉はんが剃刀で……
津之助　エ！
（つか〱と戻る、入らうとして又立戻る、柳ちる、月其顏にさす。懷から匕首を出して拔いて見る、死場はどこと考へて、うなづき、足もしどろに向へ入る。）

――幕――

（大正十四年）

崋山の魂

人物

崋山渡邊登
えい　登の母
たか　同妻
立　同子
高野長英　同友人
福田半香　同門人
雪吹伊織　同親戚
捕手

景

中央に墨畫で茅葺屋根に丸木の柱、其中程から棹を差出して先に酒旗をつけ、横壁に四角な窓、其奥の方に畫幅を掛け、曲つて壁、其間に臺所口、下手冬枯の大木、其後に一棟、窓開き、其外垣、其横流、後に傾斜の急な山二重、總て崋山の絶筆を模した書割。左右黑い布で仕切る。

亭の前に床几を置き、渡邊登、四十九、月代、髭延び、袴はいて、目を閉ぢて横になつてゐる。横から中央へ當てゝ蒼茫とした光線。福田半香、三十八、總髪、羽織着流し、上手から出て畫を見る。

半香　あゝ見事だ。氣韻といひ、筆力といひ、こりや先生御一代の傑作ですね。

登　(目を開いて體を起し)　どうだ、難は無いかね。

半香　ございませんとも、お若い時の御決心通り、天下第一です。とう／＼此までお登りなすつたのですから、もう世間の事には一切御頓着無く、畫道三昧にお入りになつたがよろしうございます。

登　私もさう思ふがね――

半香　元來斯道にお入りになつたのは、御幼年の折、日本橋で大名の行列の先にお當りなされ、不禮者と散々に打擲をお受けになつたからではありませんか。同じ人間、同じ年頃でありながら、向は駕に乘つて多くの供をつれ、此方は犬猫の樣に土足にかけられるとは、おのれ此恨一生の中に晴らさにやおかぬと、くやしく思召したからではありませんか。(ト其側へ寄つて坐る)

登　さうだ、その時のくやしさ！　しかし百石取の田舍侍の子では大名になる見込は無し、何より先づ家の貧苦を救はねばならぬので、十六から繪を習ひ出したが、紙を買ふ錢も無く、燈籠や紙鳶の繪を描て百枚一貫、毎朝早

く起きて飯を焚く火で讀書。

半香　其苦學の甲斐がございまして、とう〳〵天下に有名とおなりなさいましたが、まだ大名に頭を下げさせるどころか、西洋の事情を傳へると云つて俗儒の憎み、殊に何の御關係も無い無人島へ渡航の企、實は伊豆の代官江川太郎左衞門を御存じとて、それからそれへ及ぼさうと、江川を恨む蝮の耀藏が、あれを種に謀叛と訴へ、お書きさしの反故を證據に、すんでの事にお命まで！　まあ何といふ事でございます。

登　私も此世の地獄に墮ち、體は蟲に攻められる、末に濕に惱まされる。見聞きしたのは人が人をいぢめる殘忍、俗世間といふものは、あれほどまでに淺ましいものかと、其底に徹したのだ。

半香　やつとの事で松崎先生始め御友人の盡力でお國元で蟄居、もうどんな事がございましても、俗世とは縁をお絕ちなさいまし。

登　それは名聞や、利益はとうに絕つてゐる、また恨も憎もわすれてゐるが――私一人では無いからねえ――

半香　いゝえ、お一人です、日本にオランダの畫法を取入れて、南畫も一になさる方は外にありません。

登　畫の上では獨だが、身の上では藩主もあり――親子もあり――

半香　いゝえ、それは上邊の事で、先生の眞面目は畫でございます。

登　其畫は何の爲だ。

半香　道の爲ではございませんか。

登　其道は何の爲だ。

半香　エ……道は道の爲で……

登　道の道とはどんな道だ。

半香　そんな理窟はどうでも好いではございませんか。

登　でもかう切迫して來ては、先づ理から正さないとねえ――

（雪吹伊織、五十代、羽織袴、大小、固くろしい士風で急いで下手から出る、少し暗くする。）

伊織　渡邊さん、まだ考へてお出でかな。

登　ハイ……（ト床几をすべり下る）

伊織　半香なぞの云ふ事を聞いてはいけませんぞ。

半香　なぜいけません。（ト立上る）

伊織　でもあなたが畫會なんぞ催ほしたから、蟄居中にもかゝはらず、公儀を憚らぬ振舞とあつて、またお咎めがあるといふ事だ。

半香　でもそれで幾分か先生のお勝手元の助にならうと思つたからで、畫家が畫會をするのは當前ぢやありませんか。

伊織　いや、唯の畫家ぢや無い、田原の藩士だ。殊に殿がお役におつきなさらぬのも、渡邊さん、あなたの爲だ！

（ト登に詰寄る）

登　……（俯いて手をつく）

伊織　しかも外の殿とちがひ、姫路から御養子にお入りになつた時、あなたは異議を申立てたで無いか。それにもかゝはらず厚くお用ひなされたで無いか。殊に入牢なすつた時は、御自身に水戶樣始め方々へお賴みにお出でなすつたで無いか。それほどの御厚情を受けながら、御登用の途を塞いで濟みますか。御先代は忠義一圖で、士の風が末になつたと慷慨の餘り病氣におなりなすつたが、今ござつたら何と云はれるだらう。

半香　いや、御先代は武道一遍、先生は武より畫です。

伊織　いや、畫は餘技に過ぎん。（ト背景を見て）これも邯鄲の夢で無いか。（ト爪彈する）

半香　いや、世間の方が夢だ。（ト下手を指す）

伊織　いゝや、畫が夢だ。

半香　それが天下後世まで殘るからなあ。

伊織　殘るか、殘らんか、此刀でためして見ようか。（ト畫の側へ寄る）

半香（あわてゝ止めて）これ何をなさる。

伊織　筆が強いか、刀が強いか、比べて見るのだ。

半香　エ、無法な事をなさるな。（ト爭ふ）

登（中へ入つて）先づお待ちなさい。

伊織　では殿へ申譯をなさるかな。

登　……ハイ……

半香　それより畫を第一義にねえ——

登　さうだ、畫を……

伊織　エ、不忠不孝渡邊登、そんな者の畫が何になるか！

（睨みつけて下手へ入る）

半香　俗人はあれだから仕樣が無いなあ。

（ト上手へ入る、登伊織の行つた方へ行きかけては、また半香の方へ戾り、また迷ふ——高野長英、三十八、髮少し延び、道服、短刀をさし上手から出る。少し明。）

登　高野さん、あなたならどうなさる。

長英（落付拂つて）私かな、私なら俗にはかまはないな。

登　殿の事も？

長英　それは小人が云ひふらすのだ。假に眞とした所で、あなたより世間が悪いのだ。元來我々には何の罪も無いぢやないか。世間の目を明けてやらうと、夢物語や愼機論、しかも書きさしの草稿であなたは蟄居、私は永牢、こんな無法な事があるものか。せめて牢内で飜譯をと願つてもそれも許さない。蘭學の爲に死んでも好いが、夢物語で一生を夢にしては殘念だ。まして西洋の事情や學

問を傳へるものが無くなつては世間も闇だ。
登　それもさうだなあ――
長英　（憤然として）彼等は全國を牢にしてゐる。今五大洲で外國と交はらぬは日本ばかり。そんな事で武陵桃源(ぶりようたうげん)と思つてゐても虎、狼は能く嗅いでゐます、其鼻の先へ火繩筒位鳴らした所で何になります。聞けばアメリカの船に大鹽平八が乘つてゐたといふではありませんか。彼奴無謀な事をしたと思つたが、逃げたのなら何をするやら、もう德川の代も長くはありませんよ。
登　で、あなたはどうなさる。
長英　私は牢を――破る積りだ。
登　エ、破る？
長英　牢を破つても矢張牢だが、それまで破つて外國へ拔出しては同囚が氣にかゝる。先づ彼等の目を覺ましてやらなけりやなりません。それにはもつと／＼飜譯や、著述をしなけりやなりません。あなたもゝつとオランダの畫を應用して、今までに無い畫を描くが好いではありませんか、
登　其畫の爲にまた罪を――
長英　そんな罪は罪で無い。小人の爲に自分を無駄にしたら、それこそ罪だ。
登　でも其小人は權を持つて居る、それに捉へられて入牢したら、今度こそ命が持たん。第一繩にかゝつて大道を引かれる丈でも、六代重なる君恩に對して相濟まん。
長英　其食祿の一粒も民の汗、民百姓の事もお考へなさい。いつかの飢饉にも、天に代り造化の窮を補へと云はれたで無いか。
登　エ……
長英　それに母御はいくつだね。
登　七十になります。
長英　私はあなたに忠告されて、國元から母を迎へ、これから孝養をと思ふ中此災難。牢の中で死なうより、いつそ自殺と覺悟をしたが、跡では母獨蓄へも無し、親戚も無し、自分ばかり頼りにしたのに、其自分が非業に死んでは何を宛に生殘らう。よもや死刑ではあるまいと、留守中の事を人に頼んで名乘つて出たが、牢内の苦しさより氣になつてならぬのは母の事。今頃はどうしてゐよう。もしや死んでゐはしまいかと、出牢する者に手紙をことづけ、無事で居たら母の手で「達者」と書いて、掌に墨を塗り、其型を押して送つてくれと、僅の金をそれに添へ、もし死んでゐたら香花料にしてくれと頼みました……
登　（たまらぬ體で）もう云つて下さるな。私も牢の中で夢に呼んでは、人に笑はれ、母も亦法を破り、駈け出して來た夢も見ました……總ての事は擲つても、母ばかり

は本性から流れて出る眞の泉、其母に先立つては魂天へも還られまいなあ。

長英　私は愈々母の事が氣にかゝる、其爲にも出ねばならん。（ト行きかけて又戻り）しかしあなたにはもうお目にかゝらぬかも知れんのう。

（ト顔を見合はせる、捕手出る。暗くなる。）

捕手　御用だ。

（ト長英に掛る、一寸立廻、突倒して入る。捕手追うて入る。）

登　（其跡を見送つて）あゝ高野は代々醫者丈に囚はれても心は自由だ。私は繼が二重三重——まして死んだ跡はどうなるだらう——此苦から解脱して、何の念もい無境に入るのか。死でも濟まぬ過去の因果を更にどこまでも續けるのか。地獄の責はもう經て來た。外に地獄も極樂もそんなものは思ひもせんが、丸で闇では此魂も……腹切る丈で何となる…… 此世の責は果しても、あの世があるやら…… 生れ返るやら、また此惱みをくりかへすやら……
……生死も無くば此惱みは？　これも夢とは涙が許さぬ。榮華の夢は見もせぬが、貧苦の夢、努力の夢、牢舍の夢、君父の夢、妻子の夢、繪畫の夢——あゝ夢で無い、夢で無い！　夢で無くば何であつた？——夢に入らずば何となる？——神も、佛も天道も、それまで夢に迷ふのかなあ——

（母えい、七十、質素な裝で出る。）

えい　登、お前まだ迷つてゐるのかい。

登　でも、あなた……

（ト跪いて顔を見上る、少し明。）

登　あゝ隨分御苦勞なさいましたなあ——

えい　（坐つて）それはお父樣の二十年の御病氣、藥禮やら好物の麵類に事を缺いて、疊建具の外は大抵質に入れても矢張足らず、僅二朱借りに半藏門から本所まで行つたら、大雪になつてねえ——

登　お歸りになつた時は雪まぶれ、あわてゝ洗足の湯を沸かさうとして着物をこがしましたなあ——あの頃から近年まで夜中夜着などおかけなすつたのを見た事がありません。

えい　やつと此頃は安樂になりました。

登　其代りこんな片田舍、江戸の便りがある毎に、私には氣兼ねをして、くりかへし〳〵お讀ませなさるおいたはしさ。それにまた御苦勞をかけましてはなあ。

えい　いいえ、私に引かされてはいけません、殿樣のお爲を計るのが肝心だよ。

登　（手をついて）お母樣、あなたは孝行を盡しても不忠の子と、忠を盡しても不孝の子と、どちらがよろしうご

ざいます。

えい　それは親としては、孝行にしてくれたら、外に何も入らないが、また不忠になつては士の母として困るぢやないか。

登　では不孝になりましても？

えい　いや、忠を盡して不孝になる事も無いではないか。

登　いえ、なります、まして不忠不孝者は？

えい　そんな者があつたなら、それ丈尚ふびんであらう。

登　あのお憎みなさいませんか。

えい　子を憎む母があるものかね。

（登淚に咽ぶ。妻たか、三十六、やつれた姿で出る。）

たか　どうなすつたのでございます。

登　たか、お前にも長々苦勞をさせたのう。

たか　私ですか――私は別に苦勞とも思ひませんが――

登　いや、お前が來てから十九年、貧苦の中に血を絞つて書物や、蘭畫に費し、碌々着物もこしらへてやらなかつた。

たか　まあ何をおつしやるのでございます。私も着物などこしらへていたゞいて、喜ぶほど世間並でもございません、それよりは新しい本や畫を御覽なすつて、それが世間の爲になりましたら、どんなに嬉しいか知れません。

登　所がそれで罪になり、本は藩へ寄附してしまひ、殘るのは此夢ばかり！（ト畫を指す）

えい　これは覺めは致しません。

登　しかし子にも傳はらんのだ。

（立、十、袴はいて走つて出る。）

登　立、お前には本も、畫も、何も殘さない。それは私がした樣に、苦學をせんと役に立たんからのう――

立　ハイ。

登　（其顏をつくづく見て）あ、丁度此子の年頃だ、弟の定意が館林の寺へやられるのを送つて行つた私は十四、駒込邊から雪はちらつく、板橋で別れると、物もえいはず、見も知らぬ荒男につれられて、顧へながら振りかへりかへり私も見えなくなるまで立つてゐたが……あゝあれが此世の別れになつた……

えい　ほんにあれぎり、熊谷で死んでしまつた……次の子も養子にやつたら矢張死に、娘も貧家へかたづいて死に、薄い影のさす當家。

登　いや、假令餓死するとも二君に仕へてはならん。何より御祖母樣を大事にして、お母樣に心配さすな。

立　ハイ、そしてお父樣には何をしたらよろしうございます。

登　私にか、私には何もせんでよい。私がまだお前の爲にしなければならぬ事が澤山あるが――

陰で伊織の聲　不忠者！

登（びくつとして）あゝそれももう出來んかなあ――

陰で　御用だ、御用だ。

陰で半香の聲　先生、先生。（暗くなる）

登（苦悶を極めて）あゝもう考へては居られん――お母樣――（トえいの前へすりよる）

えい　登、私より殿にねえ――

登　ハイ、殿樣に申譯を致します……

陰にて　御用だ、御用だ、御用だ。

立　お父樣。

登　立――たか――

たか　ハイ。（ト側へ寄る）

登（立を引き寄せ、それからたかの顏を見て）此畫を私と思うてくれ。

（ト放して、よろ〳〵と床几にもたれかける。）

立　お父樣！（ト取りつく）

登　何が夢になる事かなあ。

（暗轉――正面に床、邯鄲の畫を立てかけ、上手棚に本、下に机、側に屏風、下手障子。登柱にもたれて目を閉ぢてゐる。前に短刀。風の音。夕暮。）

（登目を開いて、短刀を拔き、其切先から下手を見て立上り、つか〳〵と障子の方へ行つて、細目に明けて、名殘惜げに見、よろ〳〵と上手へ行つて、屏風をまはす――たか下手から障子を明けて出る。不審の體で屏風を覗き、驚き倒れる。）

たか　……お母樣！

（えい、立、走つて下手から出る。たか物もえいはず招く。二人屏風へ驅寄る。）

立　あ、お父樣……

えい　これでこそ……私の子だ！（ト云ひながら泣く）

（夕日の光邯鄲の畫にさす。風の音、海の音に交へて）

――幕――

（大正十一年）

長谷川時雨篇

犬

現今
郊外

古島七兵衛　六十八歲（犬の番人）
お民　廿二歲（七兵衛の娘）
お高　十三歲（七兵衛の孫）
中畑老人　六十五六歲（庭園取締）
長次郎　四十歲位（園丁長）
園丁
請願巡査
草刈女
飼犬ペス　巨大なる洋犬

晩夏の夕暮。貴族の別莊の裏庭の一隅。

表面奥に、鐵柵のある表は向ふむきになつてゐる瀟洒な洋風つくりの犬小屋がある。建物の裏側（舞臺表面）には出入口がある。

左手の一隅に木立に取りかこまれ、古島七兵衛一家三人が雨露をしのいでゐる粗末な番人小屋がある。

草苅の女が息拔に木かげへ廻つて來る。

草苅一　とても日かげへ這入らないぢや居られない。

同二　あの獸たち、終日怠けてるのに、ちよいと休むと目の敵にしやがる。

同一　働くものばかりがばかあ見るのさ。

同三　あらッ！　民ちやんだ。

（木かげに蹲くまつてゐるお民を見ると叫ぶ。）

同三　――あゝ、吃驚した。

同二　どうしたのさ？

同三　だつて、またやりやあしないかと思つて……こら、こんなに冷汗をかいちやつた。

同二　あの娘赤んぼを埋めたんだつてね。

同三　こんども産月だから……

同一　何しろ狂人だからね。

同二　（ふと苦い顔をする。不意に）えゝ畜生ッ。他人のことまで心配してたまるものか。

同一　そりやさうさ、他人ごとぢやないさ、自分の餓鬼さへ乾し殺しかねないんだから。

同三　惡い家へ奉公にやつちやメチヤクチヤだね。良い娘を氣狂にされたり、罪人にされたりして、主人は大手を振つてるのだからね。

同一　こちとらあ何にしたつてみじめだよ。此處の邸だつてさうだ、兇狀もちは寄せつけちやいけないつていふさうだが、親父が引きとらないで、誰が狂人を引きとるのだ。

同三　それにね、をばさん、呆れかへつちやうぢやないか、園丁ら、正氣のないものに惡戯をしやあがるんだよ。

同二　（お民が出て來たのを見つけて）――笑つてるぢやないか？　民ちやん、何をしてたんだい。

同三　ほんとに、お前に脅かされちやつたよ。

（お民は知らん顔をして、四邊をキヨロ／＼見廻してゐる。）

同三　何を言つたつてだめだ。空吹く風だ。

同一　なまじ顔が奇麗だから……

同三　（吐きだすやうに言ふ）　あんなこと言つてら。醜いつたつて打つちやつておくものか。

お民　（聲をひそめて）　ねえ、穴ん中へ隱しちやつた方が好いだらう。めつかりこはないから……。

（複雜な無言に草苅女達は顔を見合せる。）

（一人の園丁が番小屋と犬の家の方とを覗いて、行きがけにお高をこづく。）

園丁　氣違ひ、おれの色女になるか？

お民　（押附けるやうにした園丁の顔を強く押す）

園丁　この畜生ッ。

草苅三　（お民が打たれたので憤として）　何をするのだ。

園丁　生意氣だからよ。

草苅三　厭なものは誰だつて厭なのだよ。ふられたからつて、酷いことをしないが好い。

園丁　きいた風なことを言ふな。手前たちやさつさと掃除をしろ。

草苅二　何を言つてやがるんだ、爺さんが居ないのを狙つて來やがつて、照れかくしに酷いことをするな。

園丁　毆られたいのだな、口のはた張り裂くぞ。

草苅三　張り裂いて見ろ、狂人を孕ましておいて……

お民　（拳固を振りあげた園丁をグン／＼木立の方へ引つぱつて行く）　掘つておくれ、ね、深く掘つておくれ。

園丁　何をしやあがる、厭だ。

お民　――貧乏人！

園丁　貧乏人？――その通りだ。お前は金持ちが好きで、金持ちに瞞されて監獄へいつたのだからな。金持ちが好きだらうよ、どうだ、ペスを世話をしようか？　え？　ペスは三萬圓だぜ、あんな豪義な家を持つてらあ。

（淫らな賤しい笑ひを聞棄て、草苅女の二と三が激しい氣色で爭ひかけるとき、犬を散歩に連れていつた七兵衞が歸つてくる。）

七兵衛はお民が獨りものになつてゐるのを見ると眼を伏せて通り過ぎ、犬の家の扉を開き、犬を曳いて中にはひつてゆく。（ベスは頗る傲然たる雄犬、贅澤を極めたる首輪、鎖。七兵衛を從へて、曳ずるやうにして這入つてゆく。）

七兵衛の氣分に壓しられて、園丁も草苅女達も無言に立去つてしまふ。七兵衛は扉口から出てくると小屋に行き、土竈にかけてある釜からバケツにお湯を汲みとり、加減を見て又扉口にはひる。犬のために用意されてある器物は新しくて高價な品。

七兵衛は仕事を終つて出て來ると、目の前に、土に坐つて、機嫌よげに分らない唄をうたひながら土を掘つてゐるお民を見て、釘附けにされたやうに停んでしまふ。バケツの汚水を捨るのさへ忘れてゐる。

七兵衛　（突然抱締めたいほどいぢらしくなつて呼びかける）たみ！

お民　お退き、邪魔だ。

七兵衛　（幼兒に言ふやうに）もう止めろ、そんなことするな。

お民　奪られないやうにしてゐるのだよ、お前は鬼だからね。

七兵衛　（暗い〳〵手に兩眼を被はれたやうに居縮む）

お民　赤ん坊をどうしたらう、人形もとられちやつたかしら？　探して來なくつちや。

七兵衛　これ、何處へ行くのだ？

お民　（引き止められ呆やりとしてゐる）

七兵衛　（ホロリとして）俺は——何にも頭を下げない俺だ。なあお民、俺は正直だからだ、心に暗いことがなければ誰奴にだつて頭を下げることはない、神樣にだつてさうだ、祈る事も願ふこともない、貧乏はしても天道樣は見てゐらつしやる、俺の貧乏は正直すぎるからだ、と思つて慰めてゐる。だが、俺はお前にだけはすまない事をしたと思つてゐる。申譯けのないことをしたと悔んでゐる。俺はお前にばかりは、これ、かうやつて詫びる。な、だから、すつかり前のことを忘れてしまつてくれ、淺間しい眞似をしてくれるなよ。好いか、好いか？　分つたか？

お民　心配しなくつたつて好いよ。

七兵衛　あゝ！　分つてくれたな。

お民　あたいも一所に穴へ這入つてしまふからね、奪りにくるなら死んでくるが好い。

七兵衛　と、とんでもない、そんな事は考へてくれるな、な。

お民　（七兵衛が足で土を寄せるのを憤として）退かないか？　（凝と睨む）お前だ、お前だ。怒つたのはお前だ。

（太い聲を出す）　捨てしまへ、犬の仔なら賣れるが……。

七兵衛　（狼狽てお民の口を押へる）　こんなに詫てゐるのが分らないのか？　情けない奴め。――お父さんのむかつ腹立ちたのは、ちひさい時分から知つてゐるだらう。な、お父さんはその爲に自分の一生をメチャ／＼にしたばかりか、とう／＼お前までだいなしにしてしまつた。あとさき見ずに腹を立てて、長く後悔するのがお父さんの癖だ。お前が犯した罪だつて、お前がしたのではない、お父さんがさせてしまつたのだ。無分別な俺が罪を犯させたやうなものだ。堪忍してくれ、お民。だから、もう言つてくれるな。

お民　お父さんはないのだよ。

七兵衛　なくつたつて好い。父親なんざなくつたつてお前の子だつたのだ。それを俺は氣がつかなかつた。腹を立てて目が眩んでしまつてゐたのだ。――とんでもないことをした。お前が雇はれてゐた家の主人て奴の仕ぐさがあんまり納ないので、瞞されたお前までが憎かつたのだ。腹が立つて腹が立つて、縊り殺してくれやうかとまで一時は逆上した。俺があんな氣違ひじみたほど怒つたので、お前まで血が上つてしまつて……。

お民　犬の仔は高いんだからね。

七兵衛　さうだ、慥に、俺はあの時さう言つた。

お民　（笑ひ出す）　あたいのお尻がまだはひらないんだよ。揺つておくれ。

七兵衛　お民。（緊つかりと抱きしめる）　もう一度揺つてくれ、よ、も一度揺つて幸福に生てくれ。お前は、お前は、この儘ぢやあんまり可哀さうだ。

（突然お高が、ものに追はれて轉がるやうに走つて來て、二人には目もかけず小屋のかげへ逃込む。續いて巡査と園丁が駈けてくる。）

（七兵衛は癡しげに走過ぎたかげを追つてゐたが、巡査を見ると無意識に穴を埋めようとする。お民はそれをさせまいとする。）

巡査　古島さん、逃込んで來たものはありませんか？

七兵衛　別に……

巡査　すると、どつちへ行つたかなあ。

七兵衛　何者でございます？

巡査　不良少女――女の子だつていふのですがね。

七兵衛　（少し急込んで）　け、決して、そんなもの……

園丁　さうも言へないだらうぜ、高公だつて……

七兵衛　（氣色ばむ）　それがどうしたといふのだ。

巡査　君！　あの女、何をしてるのです？

七兵衛　（脅えた物腰で）　あれは、その――また暴れだしましたので……

巡査　（注意深く見て居る）
七兵衞　旦那さまも御承知の通り……
巡査　知つてゐます。だが、以前も間違ひをやつたさうだから、氣をつけなければいけないね。
七兵衞　（救はれたやうに首を下げる）
園丁　どうしませうね、もううつちやつときませうか？　今夜ちよいと行くところがあるのだが……
巡査　いや、僕が氣をつけますから出かけてもよござんすよ。別段、たいしたこともしないでせう。
お民　やいッ。
（行きかけた巡査たちの後から叫びかける。）
お民　縛るなら縛れ、殺して埋めたのだぞ、其處を掘つて見ろ！
七兵衞　（吃驚して）これッ何をいふ？　めつさうもない。
（一度歩みを止めはしたが巡査は先に立つて去つてしまふ。）
（秋蟬の蹘簽しく、日足は急に傾く。）
（七兵衞は屈託さうに歩みを運び、小屋にはひつて横倒れになる。）
（草苅女の一人が仲間の道具を集めて預けにくる。）
草苅女　おや、おとつさん呻吟つてゐるね、どうかしたのかい？　――明日もこの分ぢやまだ暑いね。

（井戸側に取散した砥石などをかたづけ、顏を洗つたりする。）
草苅女　高ちやんが二三日見えないぢやないか。
七兵衞　（不機嫌に）あれも不良だからな。
草苅女　まあ！　嫌だよ、また氣に障つたのかい？
七兵衞　生恥かきの、ろくでなし揃ひだよ。
草苅女　おとつさんの性分は、損だねえ。
七兵衞　生れつきだ、仕方がない。
草苅女　いくら生れつきだつて、華族さんや金持ちならそれで濟むけれどね、子供たちだつて隨分損をしてるよ。この本邸だつて大變な慈善家だといふのに、民ちやん一人位置いといてくれるぐらゐなんでもなささうなものだけれど、矢つ張りおとつさんが可愛がられないからだよ。
七兵衞　……
草苅女　憎まれちや立ちゆかないよ、およしよ。
七兵衞　そりやあ知つてる。俺はこの强情で、とうとう零落てしまつたのだ。――俺は生れつき不仕合せな人間なのだ。
草苅女　不運なのはお前ばかりぢやないよ、あたしたちだつてみんなさうだね。――だがおとつさんも苦勞が多くつて氣の毒だね。
七兵衞　（返事を反して）お高は、二三日子守に賴まれて

いつたよ。
草苅女　お前さんも遲い子持ちだが、もうすこしだね。
七兵衛　なあに、俺にはお民が末つ子だよ。彼女の兄がお高の父親だが――鑛山で死んでしまつたのだ。
草苅女　まあ、なんてこつたらうね。
七兵衛　（諦めかれた笑ひを紛らはして）俺も不運のどんづまりさ、もうこの上悪いことは來やうがありやしない。よく／＼悪い星の上に生れたものだな。
お民　――なぜ、こんな悪いことをしやあがつたのだ、好いことをしにおさやあがつて――此奴が、此奴が。（兩の頬をかはる／＼に自分で打つ）
草苅女　（見兼て）まあ、民ちやん！
お民　監獄へ來てごらんなさい。そりやあ廣いのですよ、お出なさい、ね。
草苅女　嫌だよ、ろくな事をいやあしない。
（草苅女は呟きながら歸つてしまふ。間近な梢でづくづくなしいが一聲高く鳴出すと、犬の家の扉口の上にかけてある時計は六時を打つ。）
（七兵衛は重たく身を起して、母屋の厨房へと犬の食事を取りに行く。）
（鏡を眺めたり身づくろひしたりしてゐたお民は、斷れ／＼に卑俗な鼻唄をうたひながら、ふらりと歩いていつてしまふ。）
（夕暗が四邊を占領すると、木立の茂みからお高が眼を光らせて、近寄つてくる足音を狙つてゐる。）
（七兵衛は大事さうに犬の食器を運んでくる。手にドげた籠の中には幾種かの食物があり、白いナプキンがかけてある。お民はその匂ひを嗅ぎつけると飛出していつて、七兵衛の腕にぶらさがるやうにかぢりつく。）
七兵衛　（危く器をとりおとしさうにして）危ない！誰だ。
お高　あたいだよ。
七兵衛　あ――お高か？　何處をほつゝいて歩いてたのだ。
お高　何處つて、そこら中さ。好いぢやないか、歸つて來たのだから、ね、ね。
七兵衛　ばか言へ、歸つて來ない方がよつぽどましだ。
お高　乾度かい？　嘘つき！　そんなに怒つてやしないぢやないか。
（お高は七兵衛が叱るのも頓着なく、ナプキンをまくつて覗き込み、中のものを抓んで食べる。）
七兵衛　止さないか、こらッ、誰か見ると悪い。犬の夕飯だ――
お高　見て悪いんなら見なくつたつて悪いんだ、どつちだつておんなじぢやないか。

七兵衞　そんな無法な……

お高　おぢいさん何時もさう言つてるだらう、世の中の奴が無法なんだつて。おぢいさんは正直なのだらう、だから好いぢやないか。

七兵衞　抓み食ひは正直なことではない。

お高　正直だよ、食べたいから食べるのだもの正直だよ。お食べよ、おぢいさん、こんなうまい肉犬にやるなんて勿體ないや。

七兵衞　やめないと撲るぞ。

お高　撲られたつて食べた方が好いや、お腹が空いちやつたのだもの。

七兵衞　お前、飯もくはずに歩いてたのぢやないか？

お高　食べてごらん、ね、うまいだらう。

七兵衞　（抓み入れられたのを嚥込む）

お高　うまかつたらう。も一つおあがりよ。

七兵衞　（身にしみて哀しげに）全くうまいなあ。――俺は、俺は……（膝を抱いて泣く）

お高　（鼻をつまらせ、眼を引きこすつて）おぢいさん、今にたんと食べさしてやるよ。

七兵衞　（頑なに首を振る）俺はもう駄目だ。はづかしいが、こんなうまいものを食つてゐる犬もあるのかと思ふと、生きてゐるのが嫌になつた。俺はなんのために生れて來たのかわからなくなつた。――たか、お前は勝手なことをして暮らせ、俺たちよりもずつとよく暮してくれ、おぢいさんのお願ひだ。

お高　あたりまへだよ、おぢいさんは人間なみの暮しをしてやしないよ、それより惡かつたら大變だ。――さあ、もひとつお食べ。

七兵衞　（覗く）すこしは殘しておけ、時間を外して取りにいつたので小言をいはれてやつととつて來たのだ。――然し、俺たちは三日も四日も食はなくつたつて、死ぬまで氣がついてくれる者はないな。

お高　ばかだね、時間よりなるたけ早く行つてさ、お世辭をつかつて、なるたけ上等なものを貰つて來て食べちやう方が好いよ。

七兵衞　俺はつくづく人間が嫌になつた。なんで俺はかうやつてゐなくてはならないのだ。お前のためか？　ふん！　聞いたゞけでもばからしいと思ふだらう。お前のためにおぢいさんは何をした。何にもしやあしない。しないどころか居ない方がよつぽど好い位なものだ、俺が居なければ、俺のやうな貧乏人の孫だといはれないだけでもお前の爲めには好い。さうだらう、お前もさう思ふだらう。では、お民のためかといへば、どうして、爲になるどころか、俺はあれのためには惡い奴だ。俺なんぞ

お生きてゐたから彼女は氣違ひにもなつたのだ、子殺しまでしてしまつたのだ。罪人にもなつたのだ。あんな人の好い、可愛らしい娘だつたお民が……だからどの道俺は居なくつてすむ人間だ、居ない方が結構な人間なのだ。

お高　そら、またはじめた。そんな事言はないで、面白く生きてたら好いぢやないか？

七兵衛　まあ、だまつてゝくれ、俺は思案がついてきた。一寸さきは暗とはよく言つたものだ。

お高　おぢいさん。（七兵衛の膝を搖り動かす）あたい何處へ行つてたか知つてるかい？　姉ちやんの敵のところへいつたのだよ。

七兵衛　……

お高　姉ちやんを困らした主人ていふ奴がね、自動車に乗つて出るとき轉がつてやつたのだよ、門のところで。

七兵衛　（凝と聽耳をたてる）

お高　乗つた奴が違つてたから、骨折損をしちやつた。お孃さんがね、「まあ、民の妹さん？」なんて濟ました聲を出して、「ほんとにすまなく思つてゐますわ、民はどうしてゐます。」なんて、悲しさうにして見せたよ。

七兵衛　そのお孃さんは優しい女だつたか？

お高　（唇を曲げて）馬鹿正直だから駄目だ。本當に悲しいんぢやないよ、悲しさうにしたのだよ。その位なことおぢいさんにだつて言つて分るだらう。だからあたい、有難うございますつて言つてやつた。「民ちやんは赤んぼを殺して狂人になりました、監獄へも入つて來ました」つて、丁寧にお辭儀をしてね、何かくれたから、門のところの溝へたゝき込んでやつた。

（七兵衛は思はず話に釣り込まれて、末恐ろしげにもあれば、小氣味よい感も交へた微笑を、歪んだ唇にうかべる。）

お高　ねえ、おぢいさん、金をくれさへすりやあ濟むと思つてるのだね。子供だと思つて、糞だあ。

（小暗がりに佇んで眺めてゐた長次郎が、突然七兵衛の後から突き倒めすと、反動をうけて竹籠の中の器物は散亂する。長次郎は勢ひに乗つてそれを踏み躙る。）

長次郎　貴様たちは、こんな事を平時してやがつたのだな。

七兵衛　（憤然と）ばか、ばかな、人を見て物を言へ。

長次郎　俺の目は盲目ぢやないからな。

七兵衛　盲目だとは言はない、目が明いてゐても道理が見えないのだ。

長次郎　七兵衛、貴様氣でも違つたのか？　俺を誰だと思つてるのだ。あんまりのさばるな。

七兵衛　のさばるどころか、俺は今日まで人間並の息も吐いてゐないのだ。お前が園丁長で、長次郎つていふ男だ

といふことも忘れてはゐない。

長次郎　いけ圖々しいつたら……盜棒め。（七兵衛の横顔を毆る）

（お高は長次郎に飛附いて二の腕に噛みつく。長次郎は二ツ三ツ續けてお高の頭を打ち漸くに振り離す。）

長次郎　盜人といつたのが惡いか？　主人に食はす飯を盜めば盜人だ。

お高（ヒステリックに）犬がなんで主人だ。

長次郎　主人ぢやないか？　ベスに月給を貰つてゐるのは誰だ。人間は犬のかはりに給料を拂つてやつてるのだ。使つてゐるのは犬で、使はれてゐるのは七兵衛だ。

お高　嘘だ。

長次郎　無益だよ、いくら言つたつて。現在七兵衛が雇はれてゐらあな、その泡で生きてる奴もあらあ。犬の飯を食つてよ。

お高（反抗的に）食つて惡いか？　人間が食べて好いものだから食べたのだ。人間と犬とどつちが大事だと思つてるのだ。

長次郎（見下げきつて）さうさな、蛆のやうな人間にや一文の價打もないが、犬でも三萬兩からするのがあらあ。まあ犬にでも生れてくるんだなあ。

（痛快な事を言つたやうに長次郎は行きかける。お高は草刈鎌を持出して來て、急ぐはずみに七兵衛に躓くと、猿と蟇のやうにしやがみ込んでゐた七兵衛は、お高の帶の結目を掴んで引止める。）

お高　離せつてば、離せ！

七兵衛　よせ！　かまふな。

お高　厭だツ、離せ。（藻掻く）

長次郎（底氣味惡さうに、口だけ強く）恐ろしい代物もあつたものだな、手前も矢ッ張り監獄ものだ。

（言捨て急いで行く背を目がけて、お高は跪きながら鎌を投げつける。）

お高　覺えてろ、畜生。（足摺りをして泣出し、七兵衛の頭をピシヤ〳〵續けて打つ）弱蟲！　意氣地なし！　おぢいさんの馬鹿、ばか、ばか……

七兵衛　………

お高　死んでしまへ、意氣地なし。お前も民ちやんも死んぢまへ。あたいが……あたいが……

（七兵衛が思はず歔欷の聲を洩すと、その暇にお高は身を飜へして飛んで去つてしまふ。）

（七兵衛は引摺られるやうに二足三足追ひかけながら呼ぶ。）

七兵衛　おたか――おたか！

（空虚な聲に答へるものがないので、力がすつかり拔

けきつてしまつたやうに坐り込んでしまふ。やがて頭をあげて呟やきはじめる。）

七兵衛　——とう／＼やつて來た。——いよ／＼お迎が來た。お高が教へていつてくれた——（呆やりと四辺を見廻して、やがて寂しい笑聲を立てる）お高は怒つたが、長次郎のいふのは尤もだよ。——全く四ツ足より劣つてゐる。因果な生れだ。俺なんぞが生てるといふことは人間の恥辱だ。その通りだ。長次郎の言つた通りだ。頼盤のやうな俺には一文の價打もない、犬は三萬兩だ、たいしたものだ、豪勢なものだ。犬に生れかはつてくる方がましかも知れない。

（やがて扉口からベスを曳出してくる。優しく犬を愛撫する。）

七兵衛　ベスさん、お世話になりました。あたしはお前と仲間ぐらゐには思つてゐたが、御主人だとは氣がつかなかつた。不足だつたらうが勘忍しておくんなさい。そこで貴下も二三日樂をなさい、立派に生れすぎても窮屈なものだと、貴下を見るたびにわたしは思つてゐました。ばかな考へだつたかも知れません。誰にも勝つた犬なのだと、貴下は繋がれてゐても自慢なのかも知れない、だが、まあ二三日飛歩いて來るのもよいでせう。珍らしい毛なみだから、直につかまるでせうが、つかまへるものはどうせ貧乏人だから儲けさせてやつて下さい。——さあ、そこまで送りませう。

（七兵衛は犬を連れて木かげへかくれる。）

（十一日ごろの月影ほの白く香ふ夜となる。）

（番人小屋を訪ねて來た中畑老人と單身で歸つてきた七兵衛とが丁度行きあふと、七兵衛は犬の首輪と鎖を背に押しかくす。）

中畑　おゝ、七兵衛さん、どうも言憎い嫌な役目で來てね。

七兵衛　（落附いた態度で）長らくお世話さまになりました。

中畑　いや、どうもね、私もおなじやうな年輩なのに——それにお前のこの事情も知つてるのに、言ひたくはないが……犬の運動が不足ださうで、若いものでなければ勤まるまいといふのだが——そこで給料だがね、もちつとなくちやならん筈だが、何か粗匆をおやりださうで、差引きとなつた。だが、それにしてもあまりすけないので氣の毒だが……

（銀貨の幾個かを靜かに掌にうけて、七兵衛は凝と見詰めてゐる。）

中畑　（慰めかねたやうに）間違ひはなからうが？　たしかに、好いかね。

七兵衛　（他人ごとのやうに冷たく）よろしうございます。

中畑　それで、直にとも行くまいから、夜が明けたら出かけて下さい。――君も、もちつと樂な仕事を探すが好いね。

七兵衞（白く笑ふ）わたくしの値打ちはこれでございます。（掌の銀貨を見せる）

中畑（暗然として）さやうなら、丈夫でおくらし。

七兵衞　左様なら！

（中畑老人は沈入つた面持ちで歸つて行く。七兵衞は後を見送つて佇む。）

（間。）

七兵衞（呟く）とう〳〵一人になつた。――俺の思ふままになるのは今だけだ。

（見詰めてゐた銀貨を無意識に隱嚢に入れ、氣が注いたやうに犬小屋の扉口へと這入つて行く。）

（間。）

（月光冴え渡る。）

（お民はふらりと歸つて來て七兵衞を探ね廻り、犬の家の表の方へ廻つてゆく。）

お民の聲　ぶらさがつてるよ、あはははは、人間がぶらさがつてる――

（四邊沈默。）

――幕――

氷の雨（一幕）

玉代　若いころ自分を賣品（うりもの）にして生きてきた女、末期に近い病人（五十二歳）

豐子　玉代の生んだ娘（二十歳）

お敬　看護婦

おとく　玉代の友達、カフェの女將

媼や　（六十位）

病室、正面床の間と並んで地袋の上に緣起棚と佛壇がある。その傍に火燈口。右手は冬枯れた庭の方に丸窓。左手は廻り緣、引込んで豐子の部屋、（この室の障子は閉切つてある。）

玉代が寢てゐる上の天井に、古びてはゐるが精巧な西洋型帆船（二尺ばかりの）が釣るしてある。

夜、八時すぎ、病人の枕許に看護婦が日誌を記けてゐる。雨の音。

豐子　（自分の室から出て來て、病室を覗き込む）くさいくさい、とても堪らない臭氣（にほひ）だ、家になんか居られやしない。

お敬　（そつと立つて來て）しづかに！　いまおよつたばかりですから。

豐子　おや恰度いゝや、行かう、お出よ。

お敬　でもね、ちつと具合が惡いね。

豐子　なんだ、約束して待たせといたくせに。

お敬　だつて！　病人はあなたのお母さんですよ。

豐子　あゝさうだよ、途中からお母さんだつて現はれて來た人さ。

お敬　またあんなことといつて、しやうがない人だね。醫師（せんせい）にね、氣をつけろつて言はれたんだからね。

豐子　（すこし氣にかけて）でも、今晩つてことはないんだらう。

お敬　まあね、あんな病氣だから、そんなに急なこともないでせうよ。

豐子　なんだ、來たくつて堪らないくせに！　附いてるつたつて、ただ坐つてるばかりぢやないか。こんな腐つた空氣、一分間だつて吸つてられやしない。他（ほか）の者の方が病氣になつてしまはあ、つまんないぢやない？

お敬　でも、職業だもの。

豐子　いゝよ、媼やが丁度いゝよ、若いものにや堪らない。

お敬　仕樣がないいね。あたしや眞面目なんだけれど、豐子

さんそんなこといつて——實際、この臭氣には閉口だね。

豐子　それ見ろ、お出よ。

お敬　ちよいと行かうかね。邪魔ぢやありませんか？

豐子　厭なく！　心配するな、邪魔なところまで連れてかないよ。

お敬　おやおやだ。（白い眼をする）丁度いゝや、おとくをばさんが見舞にくるつて、病人が樂しんでゐましたよ。

豐子　まづいなあ。（顔を大業に顰める）よけいなこと。いつけやしないかね。

お敬　あんたでもそんな事心配するかね。

豐子　まあいゝよ、あんまりしやべつてて、目を覺まされると困るから。

お敬　さうだく。（首を縮め、豐子のあとについて、豐子の室の前に行く）豐子さん、お小使錢貰つて來ませうか？　布團の間に入れてありますよ。

豐子　いらないよ、まだあるよ。

お敬　だけど、もう分らないんですよ。幾度も勘定なさるけれど——嫗やにでもチヨロまかされると勿體ないね。

豐子　はあだ、やつてるな。

お敬　あらいやだ、そんなこたあしませんよ、かう見えても潔白なものだ。——なんだかあたしまで臭いやうだね、香水を下さいな。めかすあてもないけれど——その羽織を借りてかうかしら。（室のなかへはひつて、衣桁から羽織をとつて着る）なんぼなんでも派手かね？　ふん、いゝお孃さまだ。ねえ、豐子さん褒めなさいよ。

豐子　なんだなあ、騷々しい。（洋裝して、姿見にむかひ、帽をかぶつたりする）

お敬　ねえ豐子さん、病人がばかにあの船を氣にしてますよ。今朝つから、よつぽど甚く氣にするね、なんのためだらう。

豐子　（目をキラリとさせる）

お敬　（好奇心と慾心をまぜて）あるんでせう。あの中に？

豐子　知らない。（お敬と探り合ふやうな眼を見合はせる）なにがあるものか。私にはケチにしてゐて、おとく婆さんに巧く捲上げられてるから——あの船はおのろけなのだよ、あれに初戀が乘せてあるのだとさ。死んだら靈魂(たましひ)を乘つけてくつもりなのだらう、冥土にお輿入れの乘物なのさ。

お敬　それつきりですか？

豐子　ああ！　それつきり。

お敬　なんだか變だね。

豐子　變なこたあああるもんか、さ行かう。

お敬　あたし、どうしよう、止さうかね、ばかに寒くなつ

て來た、雪が降つてくると厄介だからね。

豐子　欲ばり、あの箱は空つぽだよ。こいつたら來いよ、うんと飲ませて、のろけでもなんでも聴いてやるよ。

お敬　あの人と二人ででつてんでしよ、こつちやあ祝んないや、醉ひませんよ。（意味をもつて）なにしろ、大病人を預かつてるんだから

豐子　勝手にしろ、狸め。

お敬　あなたは良い娘ですよ、感心なほどな不孝者だ。

（豐子はお敬にかまはず、左手の廊下の端の開戸(ひらき)をあけて去つてしまふ）

お敬（呟く）いくら、母親とは思はないつたつて、すこし甚すぎるよ。他人より愛がないのだもの。

（さういひながらも、病室を覗いて見てから急いで豐子の室の電氣を消し、あとを追つてゆく。）

（媼やが火燈口からそつとはひつてきて、お敬の散らしたまゝの雜誌や新聞紙をかたづける。）

媼や（鼻を袖口で被ひながら、病人の顔を覗き込む）おやせなすつたねえ。——こんな大病(たいびやう)の方を、うつちやらかして出ていつていゝのだらうか？　なんだか氣になるねえ。——いやに陰氣だよ。早くあのおかみさん來て下さればいゝが——これで五十燭かしら、暗いやうだが——（良の方へ、聽耳をたてて、救はれたやうに）お出なすつたのかねえ。（そゝくさと良へゆく）

（電氣が消える。と、暗い中で、玉代の言語が分明ときこえる。）

玉代　——まあ、若旦那、厭ですよう、惚れた惚れたつて。そんなに手輕に心中なんて出來るものぢやありませんよ。かにして下さいな、ね、——あらツ、そんな、刃物なんぞ出して、脅したつて駄目ですよ、いやですつてば！

（静まる。また暗がりで言ひはじめる。）

玉代（媚をふくんで）あらいやだ、船長(きやぷてん)、薄情だなんておどかしてさ、うまい洋酒ぢやないの。ほんとにあなたは、可愛い。たのもしい人だわ。だつて、こんなに珍らしいお土産を、いつでも澤山もつて來て下さるのだもの。あなた、ねえあなた、あたしをよつぽど愛してる？　あたり前だつていふの、なら、何故死んぢやつたの。お金は殘しといてくださつたつて、もうありやあしないわ。——船長(きやぷてん)、ちよいと、船長(きやぷてん)たら、あたしを抱いて頂戴。——あツ、誰だい、そんな冷たい細い手を出すのは！　誰だ、嫌だ、嫌だ、畜生、あたしを連れてくつてのか？　誰がお前なんぞと死ぬものか。

（廊下の開戸から、媼やとおとくが出てくる。）

媼や　おや、電氣が消えてしまつた、どうしたのでせう。

おとく　電球(たま)が斷れたのかもしれない。なにしろ眞暗で病

人を踏んだら大變だ。
媼や　只今豐子さんのお室の方のをつけますから（手探りで障子を明けかける）
玉代　人殺し！（叫ぶ）
（媼やは腰が抜けたやうに坐つてしまふ。おとく、障子につかまつて顫へながら。）
おとく　媼やさん、はやく、あかり、あかりを――。
玉代　――あ！　誰か助けておくれ、助けておくれ。
おとく　玉代さん、玉代さん。（聲をかけながら、あとずさりして媼やと手を組み合せる）
（電燈がポカリと點く。玉代が凝と二人の方を見詰めてゐる。）
おとく　（脅えながら）玉代さん、うなされてゐたのかえ。
玉代　（室内など〳〵見廻す）
おとく　ばあやさん、そつちへも早く明りをおつけよ。
媼や　おかみさん、あたくしや、とても怖くつて……
おとく　そんな事いつちや困るぢやないか、今に若い人達が歸つてくれば陽氣になるよ。なあに、なんでもありやあしないさ、停電のときにうなされたりしたものだから、ちよいとおどされたけれど――（強て笑ふ）だが嫌だね、あたしはあの古い帆前船が、天井にブラ〳〵してるのが大嫌ひなのさ。なんだつてまた、こんな汚ならしい、古つくさいものを釣るしとくのだらうね。
媼や　こんな古船のあつたのを、誰も知りませんのですよ、御病氣になつてから出させたのでございますよ。
おとく　隨分古いものなのさ。ある船長さんがね、この帆船に、うんとお土産を積んで、クリスマスの贈りものによこしたのさ。
媼や　その方でございますか、奥さんのお世話をなすつてらしつた、旦那といふのは？
おとく　なんでもはじめは、青い帆や赤い帆が張つてあつたが――白い帆にしたのは船長が死んだ時分からぢやなかつたかしら？
媼や　あらあんな事おつしやる、黒い裂れの帆でございますよ。
おとく　黒い帆だつて？　ま、いやだ、ばあや、ごらんな白い帆ぢやないか！
媼や　おや？　なるほど――あたくしや嫌ですよ、まるで、幽魂がフハ〳〵してるやうで――あゝいやだ。
おとく　シツ、目が覺めてゐるのだよ、氣にするといけない――今晩は！　どうですね、ちつとはいゝ？
玉代　（ハツキリと）おや、いつ來て？　ちつとも知らなかつたよ。
おとく　（あやふやに）なに、今來たばかりさ。

玉代　忙がしいだらうに、氣の毒なね。

おとく　おかげさまとね、こんな晩でもお茶は挽かないけれど――なんだか逢ひたがつてるつていふから。

玉代　そりやお前さん、待兼てたのさ、いろんな話があるもの。

（媼や意味ありげにおとくの顏を見る。）

玉代　ばあや、何かおいしいもので御酒をもつて來てあげておくれ。この人は陽氣な性質だから、病人のそばぢや嫌だらうけれど、

おとく　いつもおんなじやうな事言つてるね。

玉代　ほんとにさ、長いことだつたねえ、交際つておくれなのも。

おとく　何をあらたまつて言つてるのだよ。（しきりに香を炷く）　媼やさんおかまいでないよ、寒いから、出かけに強い洋酒をやつて來たのだよ。

玉代　ばあや、そこの戸棚のね、ずつと奥の方を見てごらん、種々な瓶がある筈だから、それを出しておくれ。

媼や　おや／＼まあ、何日にも見たことのない瓶が、こんなに幾本も！

玉代　これを飲むのも、もうおしまひだと思つたから出させておいたのさ。（おとくに）船長が持つて來たのだよ。

おとく　まあ、そんなに古いもの、とつておいたの？

玉代　（言葉なく笑ふ。やゝ懷古的に）船長はほんとに私には深切だつたね、あの人のところへあたしや行きたいよ。

おとく　なにを言つてるのだよ。（強く打消して、瓶のレツテルをポツ／＼讀む）ベルモツト――これは乾度口當りがいゝよ。（キルクを拔く）

玉代　あの人が自慢のだよ、あたしを抱いては、無理に飮ませたのもそれさ。

おとく　おや／＼おのろけか？　洋酒は古いのがいゝがのろけは新らしいのに限るよ、もつと近いところを願ひませう。

玉代　ないよ。

おとく　きいて呆れる、ないもないもんだ。そんな病氣になつたのも、なんのためだと言ひたいほどだよ。

玉代　だつて仕方がない、さびしかつたんだもの。なんの爲に生きてるのか分らなかつたのだもの。

おとく　そりや誰にだつて分りやしないさ。豐ちやんのお父さんを逃して、さびしかつたのかい？

玉代　（首を振る）

おとく　さうぢやないんだつて！　おや、矢つ張り船長さんか？　やりきれないね、廿五年も前の旦那で、[illegible]人た。子までなさせた男がきいたら、どんな氣がするかね。

玉代 （冷たく） 豐子は誰の子だか、わかりやしないのだもの。
おとく それだつてお前さんが生んだのだらう。
玉代 それはさうだが、生みたくつて生んだのぢやないのは、分つてるくせに。
おとく （幽に溜息をする） 親不孝をされてもしかたがないねえ。
玉代 さうお言ひだけれど、可愛いには可愛いんだよ。あの娘のことばかりが、心殘りになつて――（とぎれて、さめ〴〵とする） あたしは罪の深い女だねえ。
おとく （屹々と） そりやあ、お互ひに罪がないとはいへないが、そんなに言つたものでもないさ。
玉代 （病ひにげなくキツパリと） あたしはね、豐子の身もちの惡いのも感づいてゐるけれど、自分に恥かしくつて、叱ることが出來ないのさ。だけれど、たつたひとつ、氣になつて、死にきれないのは、あの子のお父さんは誰なのか、あたしにも分明知れないといふ、情けないことなのさ。豐子のふてくされも、そんな事がもとなのぢやないかと思ふと、ハツキリ聞かれたときになんて答へようかと、そればつかり胸にかたまつてゐて、あの娘を見るのが怖いのだよ。
おとく もうよさうよ、そんな苦勞までしては體に障るよ。ね、もうよしておくれね、豐ちやんはもつと利口だから、そんなこと訊きはしないよ。お母さんの生活かたを、すつかり呑込んでゐるから、氣をいためさせることなんぞ言出すものかね。
玉代 いゝえさうはいかない、あたしがもう駄目だとなれば、屹度そのことを訊くよ――さうしたらさうしたら、あたしはなんて言つたらいゝだらう。
おとく （ちよいと意地の惡い口をする） 實はね、あたしも妙に氣になつてゐたのさ。なんぼなんでもね今まで口のさきまで出てもね、言出せなかつたのさ。お前さんが案じるのは、あの安田さんのことぢやないかい？
玉代 （喰入るやうにおとくの眼を見詰めてゐる）
おとく （ギヨツとして） ――？ さう思つてるの？
玉代 （氷のやうな顔色になる。うつろの瞳を見張つて顫へてゐる）
おとく （吐息） さうだつたの？ あの人はまた、ちつとも氣にしてないのだもの。豐ちやんを見るとね玉代さんの若盛りはこんな娘だつたらうつて、そりやあ甘くなつてるの。あたしも、まさかと思つてね――豐ちやんはまた、お母さんの名なんぞ、これつぱかしも明さないものね、身分のある方の令孃のやうな顔をしてゐるから――だから、全く惡氣やぢないのだよ、お前さんの生んだ娘

だとは知らないからだよ。でも心配おしでない、決して案じないがいゝよ、豐ちやんはどうして、あれで仲々なんしやしないから。男の方は夢中だけれど……

玉代　（呻く）あたしが逢つて來よう。

おとく　と、とんでもない。まあお待ち。さうときけばあたしが二人にすつぱり言つてやるから、安心してゐておくれ、ね。

玉代　（おとくの手をグツと掴む）おそろしいことだよ。

おとく　では、はつきりさうだとお言ひなのだね。

玉代　――

おとく　水かけ論だと、却つてお前さんが恥をかくよ。ただ昔馴染だといふだけだと、嫉妬のやうに思はれて、火をつけるやうなものだからね。さうなると、好かない奴にも意地で惚れたりするからね。豐ちやんばかりぢやないが、あの年頃はむちやくちやに生意氣で、鼻つぱりばかり強いからね。

玉代　お前さんは知らないからだよ、あの娘の、ちよいとした癖がそつくりだもの、どうしようね、もしさうだと畜生になるよ。

おとく　いけない、いけない、そんなに氣をたてては！　氣が弱くなつたねえ、そんな心配をしだしたら際限はないよ、はじめつから私達のかげふは出來ない筈だわね。お客さんだつてさうだ、何處へ自分の子を捨てゝるか知れたものぢやない、その位なことは承知の上だあね。

玉代　（耳をふさいで）みんな業晒の罰だ、豐子なんぞなしで死ねたらねえ。

おとく　（苦く笑ふ）勝手もの！　色女になつたり、良い母親になつたりしようとするから苦しむんだ、船長にだつてよくしやしなかつたぢやないか。

玉代　――あの人は、あたしを抱いて歩く力があつた。

おとく　（皮肉に）あの人一人にでも抱かれたやうにさ。

玉代　あの人は、あたしが汽船へ乘つてゐたら、沈んで死んでしまはなかつたかもしれないよ。

おとく　（仲をする）好きなことを仰しやる、病人だと思つてきいてゐると、隨分だねえ。お前さんはあの船長を好いてやしなかつたよ、あたしの方がほんとはよつぽど好きだつた。

玉代　お前の惡い癖で、他人のものをとりたがるのさ、いやらしい眼附きをして、様子で口說のだから――男ばかりぢやない、あたしだつて醉されて金をつかはれるし、電話までもつてつてしまつて――

おとく　なんだねえ、今ごろ、そんな眞劍になつて、古い嫉妬なんぞ――どうかしたの？

玉代　お前といふ人がくると、誰とでも、あたしの仲を突

ツついてしまふ。今やつと分つた、船長へ行かうかと相談したのを止めたのもお前だ、安田さんを醒めさせたのもお前だつた。豐子を安田に逢はせようとするのもお前の策略だね、昔のあたしへの面當なのだらう。

おと　どうしたといふのさ玉代さん。

玉代　お前をたつた一人の友達だと思つて、なにもかも打明けてゐたら――お前のために、何にもかもメチヤクチヤにされてしまつた。

おとく（ムツとしたのをおさへて）困るねえ、そんなことをいつては。お前さんの一生をだいなしにしたのは、みんなお前の浮氣と我儘からだらうぢやないか。怨まれたりしちやあ立瀬がないよ。言ひたくはないが、誰が好きこのんで、こんな惡臭い中に居るものかね。あたしだから辛棒するのだよ、いゝかげんにしておくれ、これで怨まれたり、惡口雜言されたりしちやあ、もうごめんだ。

玉代　大方さういふだらうと思つてゐたよ、お前の親切なんて、見え透きつてゐらあ。形見でもあるかと思つて狙つてるのだらう、財産なんか、これんばかりも殘つてゐないときいたら、今迄して見せた深切が惜しくつて殘念だらう。

おとく　なんて呆れた口をきく人だらう。なんぼなんでもそんな賤しい女とは思はなかつたよ。見違へたのはあたしの呆氣さ、もうどんなに頼まれたつて、おせつかいはしますまいよ。

玉代　どうぞさうしておくれ、お前のおせつかいで、あたしは一生の運を取逃して來たのだよ。

おとく　なんとでも言へ、業つくばりの死にそくない。

玉代　あゝ死にそくないだよ、死にそくないだとも！　覺えてゐろ、化けて出てやるから。（自分の口走つたことに竦然とする）

おとく（竦然と佇んだまゝ、やがて泣出す）お前ぐらゐ甚いことをいふ女もない、病人だから大概のことは堪へるけれど、あんまり甚いといふものだよ。そりやあ若いうちは、お互に、仲が良ければいゝだけ猜みもしたり、憎みあつたりしたけれど、かうなつてまで變らない友達つていふのは、すけないものだよ。あたしや血縁には薄かつたし、お前もたよりすくない身で、こんな難病をおしだから、どうか死水をとつてあげたいと、あたしのやうな我むしやらでも優しい心になつてゐるのに、お前つていふ人も、なんぼなんだつてあんまりぢやないか。

玉代　何言つてやがる、また口前でごまかすのだらう。（だが急に弱々しくなつて）百も承知さ、――だけど、あたしだつて、お前ばかりがたよりなのを知りきつてるくせに、死目に近いものに腹を立てさせて、面白がつてゐる

から……

おとく　面白がるなんて――それどころぢやない、本當のことをいへば、何時お別れになるかしれないのに――仲よくしようよ。嫌な思ひを殘させないでおくれね。

玉代　――

おとく　ね、玉ちやん、お前はもつと優しい女だつたよ。

玉代　(凝と見て薄く笑ふ)

おとく　あたしがお前の男を奪らうとしたと思つてお出のかい？　さうぢやないよ、お前に、あたしより好きな人があるのが嫌だつたのだよ。

玉代　(細く聲をたてゝ笑ふ)

おとく　あたしが居ては嫌なら歸るよ。

玉代　(後から)　おい！　歸つてしまふつもりか、薄情もの。頼む用があるぢやないか　なんのために來てくれたんだ。

おとく　豐ちやんをめつけて來よう、ね。

玉代　そんなに狼狽ないつだつて、まだ死にやあしないから、遺言ぢやないのだよ。顏が拭きたいから、お湯をとらせておくれな。

おとく　(救はれたやうに)　あ、そんなことなのかい？　すぐ持つてくるよ。

(吐としておとくは火燈口に這入る。玉代、そのうち昏々として、また譫言を言ひはじめる。)

玉代　いゝお天氣だねえ、朗々とした空だ。洋の上も乾度靜かだよ。――あら見えた、ね、青い空ともすこし黑青い海との間に、白い帆が見えて來たでせう、あれあたしの船なのですよ。迎ひにくるんですから、髮でも洗つとかなくつちやあ！

おとく　(媼やに手傳はせて、洗面器にお湯を運んでくる。媼やに)　あゝ、どうして大變な元氣さ。

玉代　(譫言)　おとくさん、窓から覗いてごらん、白い帆の船が、あたしを迎へに來たやうだよ。

おとく　え？

玉代　いゝお天氣ぢやないか、西はあんなに晴れてゐる。

おとく　(小聲で媼やに)　嫌だねえ、こんなに、氷のやうな雨が降つてゐるのに！

媼や　(おなじやうにひそめた聲で)　なんだか今夜は、變でございますね。

おとく　(大きな聲をする)　玉さん、お湯をとつたよ。

玉代　(意識にかへつて)　あ、ありがと。あんまりいゝお天氣で、氣持ちがいゝから、髮が洗ひたかつたの。

おとく　とんでもない、顏だけ拭いてあげよう。

玉代　ぢやあ手だけ、洗はせてね。――アルコールをすこし入れて――それから、香水を垂らしておくれな。――

爪ぐらゐとつてもいゝだらう、こんなに伸びてゐるもの
――爪紅をさしてね。
媼や　（おとくに）　おかみさん、もつと明るい電燈にいたしませうか。
おとく　（爪をとつてやりながら）あるのなら、さうおしよ。
媼や　（みどり色の笠のあるスタンドにも點ける）
玉代　ねえ、下身の癌は業病だつていふけれど、そんな氣はしないよ。――全くいゝお天氣だね。
おとく　（うつむいて寂しさうに）　もう直に癒るのだらうよ。
玉代　ばあや、鏡臺を此處へおくれな、あたし船へ乗る前に、安田さんにちよいと逢つてくるから。（おとくに）ね、あのことぶつかつて見る氣さ、あの人だけには、豐子を妙な目で見られちや、とても堪らない。あのキザな奴、さうとは思ひたくないのだけれど……
おとく　（暗く）　不快なこつたねえ、つく／＼！
玉代　（やる瀬なげに身悶えして）　おとくさん、あの子は大丈夫だらうね？
おとく　（こはばつた頷附きで）　さうだよ。
玉代　たしかだらうか？
おとく　――
玉代　（暫くして手を出す）　水白粉を少し。（化粧をする）
おとく　（急に居たゝまれないやうに立上る）
媼や　おや、どちらへ？　豐子さんなら、あたくしが見附けてまゐりますよ。
おとく　（獨言のやうに）　取返しがつかなくなると大變だから。
媼や　だつて。あたくし一人ぢや。
おとく　すぐ來るよ、此方だつて氣になるから、飛んで歸つてくるよ。（去る）
玉代　（續いて行かうとするばあやに）　ばあや、鏡を見せておくれ。
媼や　はい大層おめかしなさいますね。（やつといふ）
玉代　久しぶりでね。（笑ふ）　ばあや、そこの窓をあけておいておくれ。
媼や　めつさうな。あなた、みぞれまじりの氷雨が降つてをります。
玉代　そんな事はなからう、いゝお天氣の筈だから。明けて見せておくれ。――そんな、黒い穴なんぞ見せないで。明るい窓の方をおあけよ。
媼や　（泣きさうに）　これが窓でございますよ、眞暗な晩なのでございますもの。
玉代　嘘ついてら。（寄りかゝつた枕から倒れながら天井の船にいふ）　ねえ、いゝお天氣ねえ、素晴らしい凪よ、

ねえ。——ばあや、あたし、船に乘るのだよ。

媼や　（夜具を着せかけて、辛棒しきれずに後退りしながら、奥へ逃げ込んでしまふ）

（電球が斷れる。靑いスタンド一個になる。）

玉代　（また悴々として）あ、入らつしやい船長、よく入らつしやつたわねえ。ねえ船長、あなたに頂いたお鳥目ね、この病氣でみんなになつてしまひましたわ。だから、あなたのところへ行かうかと思つてゐたのですわ。心細くなると、思出すのは矢つ張りあなたよ、あなたがいゝわ。あら厭だ、安田なんか、ちよいとした迷ひでさあね。——でもどうしませう、あたし豐子のことが氣になつて——どうしたらいゝのでせう、なんにも知らないで、豐子がまた安田の子を生みやしないでせうか？　自分のきやうだいを生みやあしないでせうか？　色町には、どれもこれも女よ、母も娘もありやあしない。——え、止めないで下さい、どうしてもちよいと見て來ます。あんな奴に勝手な眞似をされちやあ堪らない。豐子はあたしの子です、あたし一人の子です。誰にだつて指をさゝせるものか、父なし兒だから心配するのだ。——そこにゐるのは安田か！　お前はあたしをさん〴〵苦しめておきながらまだ足らないのか。もし豐子がお前の種たつたら、どうするつもりなの。豐子を返しておくれ豐子をかへせ、豐子をかへせ！

（呼び聲に、豐子が驚いて顏を出す。と、それきり平靜になつたので、また引込んでしまふ。）

（みぞれの降る音、おとくとおけいが歸つてくる。媼やもあとからついてくる。）

媼や　（廊下を來ながら）豐子さんお歸りにならないのでございますか？

おとく　おけいさんが、おいてきぼりにされたのさ——あら、また電球が斷れてゐるよ。こつちの室へ點けよう。

（おとくさきに立つて媼やと二人して、豐子の部屋にはひる。）

お敬　（スタンドを病人に近づけて見て叫ぶ）大變です。みなさん。

（おとくと媼やは、漸く電燈を點けおへたまゝ、立竦んでしまふ。）

お敬　早く醫師を！　早く！　（その中でも、せはしなく玉代の脈を調べながら）だめだ、もうだめだ。

媼や　（手を合せて顫へながらおとくにさゝやく）おかみさん、油斷がなりませんよ、あの看護婦、天井の帆柱に目をつけてをりますよ。

おとく　（これも泣きながら頷く）

——幕——

北國藥研谷（二幕）

北國藥研谷
近藤三左衛門家

村山半六　江戸にて三左衛門に推擧された侍（廿五歳）
柾木大助　醜い執拗な男、國侍。（三十歳）
今村權平　國侍、粗暴な男。（廿四歳）
小串六平太　細長き體、年齡より老けて見える、他をしやくる男。（廿七歳）
恩地新五郎　近侍役、半六とは江戸からの知己。分別ある男。（廿五歳）
湯ケ谷藤兵衛　江戸生れの近侍、これも半六と知己、禮儀正しい男。（廿六歳）
炭燒き男　眞黒に汚れた、年齡のわからぬ男。
近藤三左衛門　劍道師範役、達人。（七十歳）
小雪　三左衛門の養子が江戸の邸で生ませた娘。（十九歳）
おさち　三左衛門の娘が國元で生んだ小雪とおなじ父をもつた孫女。（十九歳）

北國藥研谷の谷間。白み初めた四邊には、冬霧が深くたちこめてゐる。

わざとらしくない詩吟の聲がきこえ、ガヤ〳〵と語らう聲がして、柾木、今村、小串とつゞき、あとから恩地、湯ケ谷と山逕から現はれてくる。村山一人が、ずつと後れてくる。

大助　妙なところへ出たな、藥研谷だ。霧が深いので路を違へた。
權平　炭燒き小舍のところへ出たやうだ。
大助　（後の方へ大聲で）炭燒き、居るか？
權平　（おなじやうに）氣の毒だが起きてくれ、賴みがあるのだ。

炭燒き　（ひよつくりと顔を出す）

大助　火をこしらへてくれぬか。

新五郎　（掻き集めた落葉へ、火をつけながら）　焚火ならばもう出來る。

大助　早い奴だな。では湯をくれろ、腹の中へ溫かいものでも入れたら元氣がつくかもしれん。

權平　いや、とても元氣にはなれんよ。いかにも殘念だものな。これだけの顏觸れで、無手で歸るなんて。

新五郎　しかし、それは止むを得ないさ。ないものはないので、居たものを逃したのとは違ふ。

藤兵衞　せめて、尻尾の一本もぶらさげて來ると、勇氣もすこしは出たであらうし、こんなに朝寒が身にしみないのだが……

新五郎　ばか言へ、尻尾の一本位もつたら、猶更面目ないわい。なんにもない方がまだましだよ。

藤兵衞　――なんといふ畜生だ、昨夜にかぎつて出て來ないなんぞと、そんなことがあるものか！

六平太　さう憤慨するな。親の敵を探すのだつて平易ことではない。まして、目ざす對手は、山野を駈け廻る四足だ。

炭燒き　（鑵子と鍋を眞中へ突出す）　味噌汁をもつて來ましたよ。

大助　これは珍味だな。

權平　かへすがへすも、この汁の中へ、猪の肉を叩き込まないのが殘念だ。

炭燒き　猪狩にでもござつただかね。

新五郎　いや、狼だ。

炭燒き　狼退治かね。人助けだから、どうぞ殺してしまつておくれなさいよ。

藤兵衞　それがな、昨夜中待ち伏せしたのだが、どうしても現はれないのだ。

炭燒き　さういへば、昨夜はちつとも鳴聲を聞かなかつたな。賢しい獸で、おらたちだと、すぐに姿見せて脅すがなあ。

新五郎　一體狼は、月夜の方が出るのか、暗の方が出るのか、晝なのか、夜の方が多いのか？

炭燒き　どつちといふことなしだ。だが、おれらでも、おのれの殺されるのは厭だと見えるだ。なにしても、嗅覺が利くだからな。

六平太　それは氣がつかなかつたな。村山はお鐵砲がゝりだつた、硝藥の香が嗅つたと見える。

大助　（握飯を食べるのを止めて、鋭く）　短銃でも持つてゐはせんか？

權平　村山、持つてゐるか？

半六　（諧謔に）　拙者は公私を混同しやせんよ。

權平　それはさうだらう。だが、さうと知つたら誘ふのではなかつたな。

大助　（意地惡い語氣で）　半六は最初つから斷わつたのだ、それを拙者が無理に伴なつたのだ。だから、護身に短銃でも持つて來たかと思つたのだ。

權平　まさかそんな臆病武士でもあるまい。

半六　（稍氣輕く）　いや、臆病だつたかもしれぬ、狼退治なぞ、附合たくなかつたのでな。

六平太　と、すると、我々が蔑貶られたのか、狼が見貶られたのかな。

半六　（戯言にうけて）　蔑視りはしないが、君方に、遊び半分まかせておけばよいもの。

大助　（烈火のやうに怒りだして）　なんだと――聞きすてにはならんぞ。（他の者に呶鳴る）　こらッ！　辨當なんぞ突ッついてゐる場合か。俺は半六が只今の申分を聞流しには出來ぬぞ。俺の申狀が正しいか、半六のいふのが尤もか、貴樣たちよく判斷しろ。（ふすぼつた怒りに半六を見据ゑ）　いやしくも君侯の領地内に、惡獸出沒して、領民を苦しめるといふのを、聞捨にしてすむか。萬一、他領の武術者など通行のせつ、主君を嘲つたらいかゞいたす。北國に聞えた雄藩でありながら、領民安堵のために出向くものが、家中に一人もないかと吐ざきをつたら、君侯の御恥辱ではないか。まだそれもよい、だが萬一、それら輩が、退治したと各地で觸れ廻つたらどうする。日頃なんのために主君は我等をおはぐくみおき下さるのだ。――きけば近藤先生は、御邊を、武術鍛練の士だと、御推擧あつたといふが、平時の棒振り鍛練者は、心臍の練り方が足りぬわい。兎に角、遊び半分の仕事といつた趣向を聞かう。

半六　（迷惑氣に）　柾木氏、さう立腹では當惑する。

大助　だまれ！　柾木大助心が平ぐだけの言譯きかずば、その儘には差しおかれぬ、猪子才ものめ。

半六　だが、さう立腹されては、何をまうしたとて――

六平太　（まるで無關心の者が、批評するやうに）　山といへば、箱根山、碓峠を難所とする江戸者に、北國の山はえらすぎるな。それに、座談ではない實際の惡獸狩だからな、しかもよ、この冬空に――ちと思ひやりがなかつたかな。

半六　（六平太に）　小串どの、さう仰しやるのならまうさうか。實は、貴殿がたは、あまり半六の身を察してくださらぬと思つてゐる。じたい、この半六は、君方のやうに御譜代の御家臣ではない。近藤先生御推擧による、新參者なればこそ身を謹みもいたす。朋輩の誘引は嬉しい、

新參の守さも、分別てたくしてくださると、忝けなく思ひながらも、一應お斷りいたしたといふも、自儘のことにて、萬一身を害つたら、殿へはまうすまでもなく、近藤先生にもお詫まうしやうもない——小雪どの、柾木氏、そこをお察しくだされい。各々方に對しても、肩身のせまいほど御奉公の日が淺い。何か一事、主君の御用をつとめるまでは、輕擧をつゝしまなければ——

大助　(持つてゆきどころのない憤慨に)　フン、では、狼狩は輕擧だといふのだな。

六平太　柾木。どうしたのだ。村山半六のまうしたことはたいしたものではないか。理論整然だ。止めろ、止めろ、貴樣の勇氣はいつもむちやくちやでいけない。——ホホウ、炭焼きが何かくれたぞ。

炭焼き　猪の肉の炙つたのだが、食べなさるかね?

六平太　それは馳走だ、遠慮なくもらはう。みんな食れ——これからは獸肉もいゝな。

炭焼き　寢てからあたゝまるで、嬶の代りになりますだ。

六平太　あは、あは、獨身者が多いのだ、あやかるかな。——柾木、貴樣は女にもてぬ面だから、猪肉でも食つて慰めろ。

權平　某にもくれ。

六平太　其方もてぬ組だな、おさち殿の婿にはならぬのか?

權平　あんな醜い女はいやだ、柾木にまかせる。

六平太　小雪どのが見えてから、おさちどのはみんなに嫌がられだしたな。

權平　ばかいへ、小雪は——　(言ひかけて口をつぐむ)

六平太　(わざと)　小雪は張り甲斐があるよ。あの女をせしめた上に、近藤先生の跡取りになれるのだからなア、さぞおさちどのは無念だらう。

權平　ウン、やきやきしてゐる樣子だ　なア、柾木。

大助　しらん、俺はしらん。この場合、女のことなぞなんだ　(むちやくちやに猪の肉を食裂く)

六平太　さういふな、小雪どのの肌合は、名の通り白くきらかげだ、たわたわしてゐる。(手に持つ猪の肉を見て)　こんな肉ではないわい。誰でも食べたからうぞい。

權平　(しきりに腕を擦りあげて)　俺はひとり殘つて退治てしまはうかな。

六平太　何をだ。小雪どのをか?

權平　(狼狽て氣味に)　狼をだ。

六平太　褒められて、婿になるつもりか?　勇氣があるなう。——さうだつけ、勇氣といへば、たしかあの時、恩地も湯ケ谷も居た筈だつた。聞いておつたな、珍しく近藤先生が人物評をなされたのを——しかも村山半六のこ

とだ。半六は智はあるが、あれは誠に卑怯者だ――と、な、たしかに卑怯者だと仰しやつたつけな、なあ湯ケ谷。

藤兵衛　（片腹痛げに返事を避ける）

大助　なに、近藤先生が卑怯者と言はれたと？　それは初耳だ。半六推擧の近藤先生が、半六は卑怯者だと仰有つたのか？

藤兵衛　（穩健に）　先生の仰しやつたことを、小串は半分ほどしか聞かなかつたのだ。あれは仲々意味深長な諧謔で、前半の方を聞かないと、ちよつと分りにくい謎なのだ。

新五郎　老先生は、そんな、無暗に他人を侮蔑なさりはしない。話の筋を拔いてしまつて、悪い言葉だけ拾へば、どうにでも附會つけられる。

六平太　（辛つぽく）　藤兵衛、貴樣も變な奴だなあ。自分のものになる女を、半六に引つぱられながら、新五郎の眞似をして君子面か？

藤兵衛　お前の癖だ、氣にはしないが、國の者の恥になるから止めてくれ。女のことなぞで、友達を苦しめる男と思つてくれるな。

大助　それはさうだ、女のことなぞ持出すのはみつともないが、一體貴樣たちのやうな、中庸を得た奴等は厭ひだ、國の者の恥だといつたが、國詰の者には洞が嶽派の日和見は居ぬぞ。――近侍の奴等は、とかく江戸の風俗にそみて軟弱だ――小串、瓢をよこせ。

六平太　自分のはどうしたのだ。

大助　今村が乾してしまつた。

權平　（酒氣を吐き、突然刀を拔く）　腕が鳴るな。狼のかはりに、何か斬るものはないかな。

大助　（同じく、すらりと拔いて）　俺もさうだ。（振廻す）　どうだ、え？　この、朝霜がむらむらと刀に觸れる味ひは！　たまらんの。

權平　（氣合をかける）

大助　六平太、拔いて見ろ。

六平太　（颯と正眼にかまへる）

（少時、重い緊張を破つて。）

權平　炭燒きでも斬らうか？

六平太　炭燒き風情をぶつたぎつても、汗も出やせん。腕の冴る奴がほしいのだ。

權平　エイッ

大助　トー！　（火花の出るほど打合はせる）

權平　（刀をひいてから）　好い氣持だなあ。

大助　半六、江戸ではこんな寒い冬はなからう。極寒が思ひやられるな。

權平　（あたりの立木に斬りつけながら）　刀でも拔いて見

ろよ。焚火のそばにばかり讀んでゐると、いざといふ時、拳が萎縮けてしまつて役に立たんぞ　北國特有の雪風は、血も肉も凍らせるからな。

六平太　いや、半六は凍らぬよ、戀は血潮を燃立たせるといふわな。

權平　（正直に）なにを生ぬろくさい。卑怯者とよばれる男に、燃える血潮があるか！

六平太　（權平の肩に手をおいて）貴樣當世といふことを知らぬな、不骨者め。よいか、卑怯者と罵つたのは、いやしくも我々の先生、藩の御師範役、しかも半六お取立の恩人だ。その上、小雪どのといふ戀女がある。なんと言はれたとて腹が立てるか。（嘲笑ふ）そこで好人物の藤兵衞だが、こんな時だと思はぬのかな。

藤兵衞　汚らはしい、だまつてをれ。

大助　藤兵衞、僻くなつたな。これも、智ある卑怯者の組だな。いつて見れば腰ぬけだが――まあいゝわ、腰のものを見せてくれ、どんな武士の魂をもつてゐるか、見たいな。

藤兵衞　見てくれ（突出す）先殿樣より拜領助國在名だ――尤も亡親讓りだが。

權平　立派なものだ。

大助　恩地、見せろ。

新五郎　拙者のはあまりよくない、綱廣だ。

六平太　いや、たいした差料だ。

權平　半六、見せてくれ。

半六　（手をかけて止める）

大助　（その樣子をギロリと見て、近づいてゆく）

半六　（不祥な顏をつとめて避けるやうに）自慢の代ものだと御覽に入れるのだが……

大助　（半六の手の上から、握り拳で、半六の刀の柄をドンと擲く）貴樣は――實にツベコベ理由をつける奴だな。どうしても見せぬか？（突然かゝらうとする）

六平太　こら、よさぬか！（中央に立つて）極めつき、卑怯者半六だ、まあまて――そこで半六、細木氏と拔きあふか？　それとも近藤先生に向つていつて、卑怯者の名を雪めるか、どつちにするな？

半六　（ゆがめた笑ひを、唇だけに笑つて）御注告だが、どれもとらぬことにする。近藤先生がさう御しやつたのなら、それも御心あつてのことだらう、卑怯者となつて他日を待たう。御藩公といふことのほかは、今の拙者には命がけにはなれない。

六平太　いや尤もなことだ。（頤をつまんで）先生は御老體ではあるが、まだ〳〵手練の冴はなまやさしいものではない、止めておいた方が無事だよ。

大助　さうはならぬぞ。無事安穏を祈るのなら武士を止めろ。武道の掟をも辨まへぬ腰拔けめ。それでも主君の面てを汚さぬといへるか。

半六　榧木氏——

大助　なんだ。

半六　——

六平太　もう好い、もう好い。半六は賢い、刀は拔きはせんよ。

大助　（輕蔑しきつて）北國生れの我々には出來ん堪忍だな。

六平太　それも人々の考へかただ。行かうか？

標平　手ぶらで歸るのは、廣言した手前具合わるいが、半六の『性根』といふ土産ばなしがあるからいゝ。

（六平太、大助、標平、連立つて去る。新五郎に私語してゐた藤兵衛は、一人後から行く。）

新五郎　（炭燒きを呼んで金錢を與へ、去らしてしまつてから）村山氏。

半六　——

新五郎　（傍へ寄つて）湯ケ谷も殘りたい樣子だつたが、自分の名なぞも出されたので、あの男は氣が優しいから遠慮して去つてしまつた。くれぐれも、君が思ひ違ひをしてくれないやうにと言つていつた。

半六　何を思ひ違へをしよう、拙者はもすこし藤兵衛どのを知つてゐる。

新五郎　いや、その思ひ違へではないのだ。近藤先生が卑怯者とおつしやつたの……

半六　（遮ぎる）そのことならば——すこし考へさせてくれ。

新五郎　充分考へてもらはなければならない。が、そのまへに、わしのいふ事も聞いて、考慮してくれ。——ちと言惜いことだが、實は貴公が現はれるまでは、江戸では、小雪どのの周邊には藤兵衛か、などと噂されてゐた。藤兵衛はもとよりそんな望みも持たない、まして小雪どのも先生もとうとう御存じない事だ。國許の方ではまた、おさうに、あの藩が、だいぶ的としてゐた。そこで、先生が君といふものをどんなにお愛しになるか、君も知らぬとはいふまい。——今日のことも、小人の讒言と思つてくれ。傳へられた根本は、まるで違つてゐる。彼等の曲解といふより、無理にこぢつけた話だ、惡意のある仕業だ。わしは先生の爲に辯明しておく。先生は御酒を上つて。大層御機嫌がよかつた。わしらに取捲かれて、例のやうに君の御自慢で、かう仰しやつたのだ。村山は手腕は強い、人間も出來てゐるが、酒が弱くて對手にならぬ。その上、もひとついけないのは、遠慮深い奴で、戀

「戀の道に臆病だ」——と、笑ひながら仰しやつたのだ。これは臆測だがな、我々がお前と仲のよいのを御承知で、小雪どののことを、早く言出させようと、御催促の謎だと思つてゐた。それを六平太が聞き噛つてあゝした言廻しをしをつたのだ。

牛六　（しんみりと）拙者とて、なんで近藤先生を怨みませう。假ひ御本心でおつしやつたとて怨めませうか。お聞き申すうちにも、先生の温情が身にしみます。

新五郎　分つてくださつたか？

牛六　土に頭を摺りつけても、先生の愛憐に報ゆるすべはありませぬ。ことに貴殿といひ、藤兵衛どのといひ、他所者の某を、わけへだてなくお引立くださる厚志、牛六何と申してよいか、たゞたゞお禮まうすほかよりない。——しかしながら大助も申したごとく、武士の意地は別物——新五郎どの、某の惱みをお察し下さい。

新五郎　——

牛六　刃向つて死ぬか、長らへて埋もれるか——新五郎どの、このまゝでは、某の若き日が怨み死にに死ぬ。

新五郎　察しる。だが、そこに切ない分別が入るぞ。逆つて事を荒だてたら、悲嘆にくれる女もあるのを忘れられるな。あれ等ごときものの毒舌に、長い一生をあやまつてはならない。君といふものを、あれほど樂しげに眺めてこられる先生のためにも、自重しなければなるまい。出來にくい隱忍であらうが、堪へてくれ。

牛六　では、どうすればよいのだ。

新五郎　（威をもつて）自分を捨てゝくれ、辛抱してくれ。今の場合、くどくどしくはいはん。體よく追ひやると思ふたら思つてくれ、神かけてそんな不誠實な心はもたん——こんな言譯を言つたり、聞かせたりするのさへ氣恥しいのだ。氣を廣くもてば、こんな北國ばかりが武士の住みどころでもあるまい。世の中は廣い、どこでゝも生きてゝくれ。決して長く捨てはおかない。日は明日も照る。堪へられぬを堪へるのも男子ではあるまいか？　あんな小人の毒舌に踊らされてくれるな。な、堪へてくれ。お前のためとはいはない、お前を子のやうに愛していらつしやる先生のため、主君のおためにもだ、な。

牛六　——主君は、牛六を見そこなつたと思召すだらう、卑怯者が逐電したかとお思ひになるだらう。

新五郎　（顔を反ける）こんな事を勸める俺を許してくれ。あれ等にも、あれらの親にも、一門にも、殿様の息はかゝつてゐる。討たせて其儘にもなされられまい。さすれば騒動は廣がるばかりだ。——牛六、そなたも知る通り、殿様はまだお若年。萬一、硬直な近藤先生が亡くなられたら、この國は暗だ。俺は一藩の者になりかはつて賴ま

なければならない。主君を思ひ、我々にも詫みをもつてくれるなら、男を捨て、どうぞ失走してくれ。

牛六 （沈默の後、憂鬱な面をあげる）

新五郎 牛六、承知してくれたか？ （土に手をつく） この國の者共にかはつて、此通りだ。

牛六 手をあげてくれ、そんな事をされては困る。なんの、お禮どころか、牛六こそ自分の生命をもらつたやうなものだ。出奔するといふことが、お慕ひまうす殿へ、たつたひとつの忠義になるなら、この身の名聞などどうなつてもよい。

新五郎 さう言つてくれるな、俺はなんといつてよいか言葉がない。

牛六 この國へ來て、城外へ出たのは今日がはじめてだ。一度踏みだした城内へ、再び這入れぬとは、妙なものだなあ。（薄く笑ふ）

新五郎 よく聞き入れてくれた、恩に思ふぞ。――健康で日を待つてくれ。――金子はあるか？

牛六 身につけてゐる。

新五郎 では――機嫌よく暮らせ。

（凝と手を握りあふ。）

（牛六は新五郎の後影を見送り、思ひにふける。）

（伐木の音。炭燒き斧をさげて來ながら、獨言をいつてゐる。）

炭燒き 今度の竈で、里へ下りるやうになるかな？ どらおらも手傳つて來べえ。（ふと牛六を見つけて） まだ御座らしつただか、焚火が消たやうだが、くべようかね？

牛六 （現のやうに） 深く恩義を感じるものが、却つて亡恩の者になる――

炭燒き 火を焚かうかね？

牛六 （氣がついて） いや、かまふな、拙者も行く。（行きかけた炭燒きに） 此處はなんといふ山間だ。

炭燒き 藥研谷だよ。迷ひ込んだものは、生きてかへれねえ魔所だちゆうだが、なにそんなことはねえ。あの山を目標に行きなされ。（去る）

牛六 （青黑く、ふすぼつた昴奮） 藥研谷！ 醢にしてくれたに――

（風につれて、細かい雪がおちて來て頰を打つと、ふと、その中にある面影を思ひうかべて悄然とし、やがてまた怒りに燃えて、刀を拔き空を斬る。）

――幕――

第二幕

其日の夕暮。

廻り縁、無双窓のある古風な家造り。室の障子をあけて、初雪の降りそめた空を、小雪がぼんやりと眺めてゐる。庭隅の老木の梢で鳥が鳴いてゐる。

おさち　（無双窓をガラリとあけて）ええ暗い、針の目が見えはしない。あゝ、あ、しんきくさいなあ。（欠伸をする）江戸の女子は、終日装化粧にやつしてゐるといふが、わたしらは明けても暮れても、お針仕事が一生だ。厭になるなあ。（小雪にあてこする）油を賣つてやれ、のそのそして暮す方が、御主人さまのやうでよい。——寒がりのお方が緣にござる。半六さまが、庭口からでもお出るのかな？

小雪　（しんみりと）今年の初雪ですわねえ。千鳥があんなに啼いてゐます。——祖父様、お早くお歸りくだされぱいゝに。

おさち　雪が降るのが、そんなにさびしいのですか？　あたしなぞ、あの鳥同前、御先祖様のお墓のある、生れた土地よりか知らぬ、穴の中の人間ですもの。あなたとは、話が合はない筈ですわねえ。花のお江戸と名に聞いてるだけで、國の女は誰一人、御出府のお伴は出來ないのですもの。本當にさびしいといふのは、あなたぢやないあたしの事ですよ。祖父様は妙な御氣性で、ほんとの孫女を憎んで、あなたつたら御祕藏の腰巾着、遊山のつもりでお連れになつたのでせう。

小雪　いゝえ、そんな思召しではありません。あたしがこんな寂しがりなので、可哀さうだからとお伴れ下さつたのです。祖父様はいつもさう仰しやつていらつしやいます、國許の家にはおさちがゐるから安心だ、あれは強かりしてゐる、お前ももつと強かりしなければいけないと——

おさち　ほんに、あたしは氣が強いから——遊山なんていつておゆるし下さい、あなたはそれどころではない、座敷牢へはいつたやうでしよ、氣の強いあたしが見張つてゐるから、半六さまとお話も出來ないでね。あなたは、あたしなんぞに逢ひたくもなかつたでせうにね。

小雪　まあ！　そんな——たつた二人の姉妹ですもの。

おさち　うそを——お國詰のお伴なんて、嫌なのは分つてゐます。半六さまがお出でなかつたら、あなたは何時にだつてお出なさる方ぢやない。今迄だつて、あなたが來たいといつたことを聞いた事もない——尤も、家の母様が、去年まで生きていらつしやつたから、とてもあなたなんぞ入れはしなかつたらうけれど。

小雪　わたしは母様に早く別れたから、お國の母様に、どんなにお目にかゝりたかつたでせう。

おさち　（苦く笑ふ）私の母は、わたしのやうな一酷者で

したから、うまいお世辭はよう言ひませぬわ。祖父樣はよく御承知だから逢はせなかつたのですよ。

小雪　でも、隨分さびしい日が多うございましたわ。今まで、祖父樣がお國詰の間は、乳母と二人で、毎日暦へしるしをつけては、日のたつのを待兼ねてゐました。あたしもお國へつれていつてと、幾度おねがひしたでせう。

おさち　來て見ればこの通りの古家で、あたしといふ憎らしい妹がゐるばかり。よいところではありませぬ。（ふと自省することの出來ないふうで）一體、祖父樣つて依怙贔屓なお方だ。だから家の女たちは、祖母樣も母樣も、みんなが憎んでゐたのだ。あとから生れたものを姉と呼ばせたり――いくら自分の眼の前で生れたからとて、あんまりななされ方ではないか。祖父樣ばかりが悪いのではない。亡父も悪かつたのだけれど……

（ふと、白けた複雜な無言がくる。二人共あらぬ方を見守つてゐたが。）

おさち　（突然に）江戸表では、あなたの母御さんは、正妻でしたか。

小雪　（手もち無沙汰に、鼓の赤い紐で、綾を組むだり解いたり、さしうつむいて）母樣は、あたしが生れたときお逝くなりになりましたから、母なしで育つたあたしは、お國表の母樣を、お母樣だと思ひあげてをりました。

おさち　あたしの母さまは、それを一番嫌がつてゐましたわ。生みもしない子を、あたしは持たないつて。――あ、さういへば今日は忘れごとをしてゐるやうな氣がする。なんであつたらう？　あなたは思出さない？

小雪　（わびしく首を振る）

おさち　あたしのうつそり、家の仕來りを忘れてしまつた。

（おさち、急に窓を閉めてしまふ。小雪は、暮れる庭に、一輪紅い山茶花を折取つて、室に這入らうとすると、おさちが室内から押歸す。）

おさち　（銚子と盃をもつてくる）これが近藤の家の仕來りなのですよ。この家の女子たちは、初雪の日には緣側に出て、から手をついて言ひますの。「今年はことのほかに冷ますることだな、これからの御奉公、御たいていの事ではございませぬ、お寒さ凌ぎに造りました酒を、お毒味つかまつります。」から言つてこの酒を飲みますの。祖母さまも、母さまもさうなされたからわたしたちも今日はよばれませう。（毒をもつた言ひ方で）他所で生れた知らぬ女子でも、姉さまならお前が家督とり、わたしはお相伴の下郎女、さあ飲んでさして下さりませ。さあ、早うして――あ、氣がつかなんだ、悪じひして、悪いものでも入れてあると思はれてはかなはぬ、お毒味しよか？（注いで飲む）ああ、おいしい！　さあ、疑はずに。

小雪　（盃をいたゞいて）雪のせゐか、胸が痛んで來て……

おさち　あがらんの？　そんなに、なにもかも、此家のものがお厭ひで、どうして此家の家督になれよう、笑止な方ぢや。

小雪　おさち様、そのやうな事、二度と言つて下さいますな。さちにも一度逢へと仰しやるので、お供はして來ましたが、わたしは矢つ張り、あたしの母がゐた家が戀しうござります。

おさち　よい事聞きました、それで死んだ人達も安心しませう。わたしの母様というたら、去年臨終のをりまで、家督のことばかり言ひつゞけてゞ、冥府へ行つてもその事を苦勞にするとまで言はれました。早う死なせた病氣のもともそれ故ぢやと親類どもの祖父様を譏ること。それといふのも、あの祖父様も御養子、故父も御養子で、お前はなんのつながりもないお方となるので……

小雪　（強と）血筋ではなくても、天にも地にも、たつた一人のわたしには大切ない祖父様です。

おさち　（機嫌よく）それで何もかも春の雪のやうに解けた。お前は祖父様さへあつたらよかろ。家督取りは養子をする、半六さまはわたしの養子ぢや、それも強かりと約束してほしいな。

小雪　——

おさち　古い事を根にもつて、わたしの母様と一緒に、亡父を怨んだのうらまないの——もう、どれもこれも、みんな亡なつたものぢや、昔のことはおいて、半六さまのことをキッチリ定めなければならない。ま、祝ひにも一盃飲みましよ。お前をあの人の代りにして、さあさしましよ、——おゝ可愛い、半六さま、初雪の降る日に約束しました、忘れるときゝませぬぞ。

小雪　初雪の降る日——（悲しさうつぶやく）

おさち　嬉しい〳〵日になるやうに——なんでそんなに悲しい顏をなさるの？　わたしが悦ぶのを怜むのですか。

小雪　初雪の降る日は、あたしには悲しい日なのですもの。父上様がお逝りになつたと、お國からの知らせをきいたのも、江戸では初雪の降つた日でした。十九年前に、あたしが生れたをりも、その冬はじめての雪がふつた日で、母様はそのまゝ冷たいお體になつておしまひなされました。あんまり果敢なく消えたさうと、祖父様が哀れにお思ひになつて、生れた子に小雪と名づけたのだと、わたしが幼いをり〳〵に、父様がお膝にのせて、髮をなでてくださりながら、大きうなつても、生命は母に似るなとおつしやつたに、その方にも早く別れて……

おさち　（耳をおさへ）きかない。きかない。誰も彼も死

んでしまつたのに、思ひ出なんて厄介ものを殘されては堪らない。（憎みをもつて）さうはお思ひなさらんか？父様を仲にして、憎みあつた女二人の幽霊がこゝにゐる――あたしは父様になど、抱いても貰はなかつた。――えゝ、そんな事はどうでもよい、半六さまを思はぬと、誓言なされ。

小雪 ――

おさち （自ら嘲つた語氣で）父様にも可愛がられなかつたわたし、祖父さまにも愛されないわたし、その代り半六さまにたんと可愛がつて貰はう。

小雪 でも――半六さまがなんと仰しやるか……

おさち （ヒステリックに）慾張り女！ 父様を奪つて、祖父さまをとつて、半六さままで奪る氣か。――あなた母子はなんといふ義理知らずだらう、えゝ、泣け泣け、泣けるだけなくがいゝ、あたしの母様は、お前の母御にたんと泣かされたのだ。（小雪の手から山茶花をとつて捲り散らす）胸が痛いといつたお方、こたつにでも寢てござれ。半六さまがお出たら、わたしがお目にかゝる。さあ、さあ、奥へ行つて――

（小雪を引立て無理に奥へ連れて行く。）

（暮の太鼓鳴る。雪はふりまさつてくる。）

（半六忍びて縁に近より、人氣の近よるを窺ひ斬込まうとする。と同時に、そつと立出た小雪は、半六と見るより轉がるやうに、その胸に飛込んでゆく。）

半六 （ハツとして、しかも強く小雪を抱きしめながら）ああ、矢ツ張り御身に縁があつたのだ。

小雪 （男の顔を見上げて何故となく胸を打たれながら、自分のことにも心急いて）お目にかゝりたうございました。

半六 （急しく）では、もう聞かれたか？

小雪 いゝえ。あたくしが申上げたいのでございます。

半六 小雪どの、それどころではない。半六の進退は今の間に定まるのだ。心を落附けて――

小雪 おちついてはゐられませぬ、あたくしはどうしたらよいのでございませう。

半六 それどころではないといふに――拙者の様子でも知れさうなものだ。今にもそこへ先生のお聲が聞こえれば、かうしてはゐられない羽目となるのだ。委細はあとですぐ知れることだ。今話してはゐられない。御身の心だけが聞きたい、いかやうに落魄ても、半六を思つてくださるか？

小雪 半六さま。大切ない祖父様を捨ることはあつても、あなたには代へませぬ。

半六 （クラクラとするを踏止まつて）小雪どの、御本心

か？

小雪　はい！　祖父様は、およろこびこそなされ、お叱りはなさいませぬ。半六ほど目鏡に叶つたものはないと、仰しやるのがお口癖でござります。

半六　（喪心したやうに、ドッカリと坐り込む）——小雪どの、その方の首へ、かりにも刄をあてようとしたこの男に、この恩知らずに心をよせ、お慕ひなさるか？　なぜあなたは踏にぢられないのだ。いゝや、理由はどうでもよい、善も悪もない、恩を仇にかへす不埒者だ。なぜその男に、この無垢な魂を——魂までくださらうとするのだ。先生といひ、あなたといひ、過分すぎて……

小雪　いゝえ、いゝえ、どのやうな事が起りませうと、あなたの日頃を信じてをります。

半六　祖父様に刄向ふ悪人でもか？

小雪　（涙にひたつて）武門にはよぎない習慣がございます。

半六　（ひしと小雪の頸を抱きしめる）その一言で、武士も意地も捨てた。迷つたのがはづかしい。ありやうは、義の爲に遠國する約束をしたが、御身に一目逢ひたくて、後髮をひかれ、一足づゝ立歸つてくると、若氣のいたらぬ心から、一足づゝに無念さが燃えて、無分別な考へに身をまかせた。——だが小雪どの、その中でも迷つたぞ。互に逢へば身の破滅。先生にもお目にかゝりたくなし、お身には逢ひたし、逢ひたくなし、さま／＼に心が亂れてのう。

小雪　お嬉しうござります半六さま。わたくしの生死は、あなたの仰せひとつで守ります。たゞお願ひは祖父さまのこと、何事か知りませぬが、どうぞ堪へてくださりませ。

半六　言はれずともものことよ。お目に觸れぬうち退散しよう。

小雪　かういふうちも氣がゝりな——（ふと振返つて、脅える）あッ！　おさちどの。

おさち　（障子のなかゝら、立聽きのまゝ）姉上、お欺されなさるな。祖父様をだましうちにしようと、忍び込んだのを、見咎められたからの狂言です。欺されないやうに御用心なさい。

小雪　（半六に）堪へて下さりませ、堪へてくださりませ。さ、早く。

半六　（沈着に）小雪どの、もうそなたも連れてゆけない。忍び込んで誘ひ出したとあつては、先生のお顏がたゝない——待つてゐてくれるか？

小雪　——死ぬ日が來るまでは……

半六　乾度誓ふか。

小雪　（小指をくひきる）

半六　何をする。（その血を吸ふ）

（半六置忘れられた酒器の銚子の口から飲む。）

小雪　（狂氣のやうに）それをあがつては呪はれます。

半六　酒でも飲まずに別れられるか。（小雪の口に口うつしにする）

小雪　毒藥となつて——毒藥となつて死なせてくれたら……（哭く）

（室内が明るくなり、おさちの罵り喚く聲が近よつてくる。）

おさち　いゝえ、なんとおつしやつても不義ものでござります。さうでなければ盗賊がはひりました。

三左エ門　待てといふに待たぬか。三左衛門の家に盗賊ははいらない。——いゝや、半六ではない。

おさち　小雪の泣聲がしました。

三左エ門　なぜさう逆目だつのぢや、優しうものを言へ。

おさち　いゝえさうはなりません、庭さきに忍び込んだものを。あらためない法はありません。

三左エ門　まだ言ふか、分らぬ奴だ。泣聲は小雪であらうと、それは何か悲しうて泣いてゐるのだ、泣かしておいてやれ。あれもたよりすくない若い女子ぢや、泣きたい事も澤山にあらう。あはれな奴ぢや。

おさち　半六は、あなたを打たうと忍び込んだのでございます。

三左エ門　あはははは、それで汝は長刀なぞ持出したのか。汝に半六がうてると思ふのか。半六は俺の眼鏡にかなつた男だ、そちごときものが——ばか／＼しい。

おさち　（口惜しげに）祖父様、あなたは何も御存じないから……

三左エ門　いゝや、知つてをる。汝などが口出しするところでないぞ。半六は所用あつて此地を發足した。

おさち　御自分の命を狙はれるとも知らずに、私の申上げる事はお聞入れなさらぬ。——では、犬でゝも御座いましたらうよ。逃げそくなつた犬でせう。——（疊を蹴つて）憎らしい女犬め、泣くがいゝ。祖父様のお尻へついて、紛れ込んで來た犬め、もう二度と顔を見せるな。——祖父様、あの物音がきこえませぬか、犬が腹をたてゝ騒ぎます。追拂つてやりませう。

三左エ門　くどい。——夜食の仕度をして參れ。

（おさちの影が消えると、三左衛門はすぐに燈火を吹き消す。靜かに縁に現はれる）

（小雪は駈寄つて、祖父の兩足の上に手をついて見上げる。）

三左エ門　（背を丸くして聲をひそめ）何事があらうとも

うろたへるなよ。半六は汝の大事な夫だぞ。つね〴〵言ひきかせてあることを役に立てるのだぞ。さあ退いてをれ。

半六　（土に手をついて）　半六は不覺者でござります、今頃までうろついてをりまして御苦勞をかけまする。只今となつて引くことも退くことも出來ませぬ。不義者として御成敗くださいまし。

三左エ門　半六、立會へ。――實はな、暗くなるまで歸らなかつたのは、途中で待ちをるであらうと、便宜のよいやうにしたのぢや。早う立會へ。

半六　――

三左エ門　よぼ〳〵老爺に向ふに臆すな。――主君へはこの身のかはりにもと汝を推擧したが――これも老の繰言だな。これ鍔音ひとつ立てずに去つては恥辱だぞ――よい折に引け。

半六　ハッ。

三左エ門　武士はな、知行にありつくばかりが名譽ではない。勢ひよく出立せい。――これ、稽古のつもりで激しくかゝつて來い。

小雪　祖父様！

三左エ門　案じるな、案じるな。――半六。（激しい聲）

半六　（決心したやうに立つ）　先生！

三左エ門　見苦しいぞ、刀をぬけ。（俄に力の籠つた氣合に誘ひかける）

半六　（本能的に、身を守るため打込んでゆく）

（二合、三合、三左衛門に引摺られて半六は眞劍になる。激しく鋭き太刀風、三左衛門は美事に斬下げられて倒れる。半六は立ちすくんでしまふ。）

半六　しまつた！　（這寄つてゆく小雪を押へて）　この間だ、死なう！　（刀をとり直す）

おさち　（突然に叫ぶ）　卑怯者！

（袖にかくしてゐた雪燈をつきだして、すぐ近くの植入みのかげから、睨みつけて立つ。）

おさち　半六さま、祖父様の敵はわたしたち二人の孫がとらなければなりません。自儘のおはからひは許されません。

半六　なるほど、敵を打つ人があるなら打たれて進ぜよう。だが、こゝで打たれては、祖父様のお情が無になる。いつなりと名乘つてお出なさるがよい。

おさち　（三左衛門の傍に寄つて）　祖父様、なんといふ御不覺でございます。御寵愛の姉上に、この手を添へて、屹度お怨みははらさせます。

小雪　（弱る氣をはげまして）　いゝえ、おさちどの、わたしも敵の片割れ、仇敵うちの日にはお前の手にかゝりま

せう。それまでは……

おさち　見逃せと仰しやるのですか？　それはなりません。祖父樣のかたきに、あなたを渡してはやれません。——半六さま、やがて名乘つて出ませう。だがあなた方の爲には、永劫逢はぬやうにしてあげたいと思ひます。

半六　（毅然と）おさちどの、それは御解釋が違ふ。小雪は拙者の妻、お差圖はうけぬ。

おさち　（反抗的に）いゝえ、たとへどうあらうと、姉上の手をもつて、あなたのとどめは刺させる。

半六　小雪が望めば、お身の介添はまたぬ。が、おさちどの、たつてこの場を通さぬとなら、この胸なり、眼なりお突きなさつたがよい。（まつすぐに胸を向ける）

おさち　——

半六　お騷ぎなさらぬがよい、恩と責めとは忘れぬ二人だ。（泣入る小雪を小腋に抱へて、やさしく）供養は、二人して此處を立去ることだ、女夫になつてお詫びをしよう。

おさち　（嫉妬に叫ぶ）逃げのびて、安閑と暮す氣か？

半六　一生暮す——探しあてられるまで！

おさち　（二人の後影に呪詛を投げるやうに）犬め！　足の下の土が落ちてそのまゝ地獄となれ！　犬と思つて見逃してやる。人なら——人間なら行かれぬ筈だ。（ヒステリックに泣く）

（立去るものにも暗き夜の雪、三左衛門の亡骸も、おさちの生身をも、石像のごとく埋づめて降る。）

——幕——

岡田八千代篇

黄楊の櫛（一幕）

人物

豐之助　主人（三十三歳）

藤平　父親（六十二歳）

おつな　去りたる妻（二十五歳）

おさつ　使ひに來る婆（六十歳）

お袖　近所の娘　十七歳）

爲吉　小僧（十四五歳）

時

夏

場所

東京

とある大通を反れたる横町。上手に塀に圍まれたる藪の裏面を見せ、藪に添ひて細き露路あり、下手同じく塀にて見切り、通路とせる露路あり。其中にのれんを下げたる櫛製造所の店先の體。店の下手及上手の一部に棚を釣り、製造されたる櫛を入れたる箱、及び木材などを置く。下手の隅に窓あり。窓のもとに臺を置き、櫛をすく道具を置き座布團を据ゑあり。すべて棚の前板の間。其外疊。奥とのしきりに細き硝子の入りたる障子を立つ。その向ふ臺所に續きたる茶の間の心。軒先に祭の提灯を下ぐ。店の端に烟草盆を置きて主人豐之助、苦みばしつたる好男子、さつぱりと小意氣な浴衣にて烟草を呑み居る。店先に小僧爲吉、腰かけゐる。

遠く祭の太鼓の音。幕開く。

爲吉　（立ちかゝりて）ぢや、豐さん。鬢櫛の方は明後日までだよ。祭で氣の毒だけどもつて大旦那が言ふんだから、いゝかい。お嫁さんの方もいゝかい。鬢櫛は明後日まで。お嫁さんは今夜だ。忘れずに連れて來ておくれよ。

豐之助　（奥へ込みて）よし〳〵、分つてるよ。

爲吉　ぢやきつと明後日までだよ。お内儀さんも言つてたア。如何して豐さんともあらうものが、三十三枚の櫛なんか造らへたんだらうつて、如何して造へたんだい？豐さん。

豐之助　（紙に包みたる黄楊の櫛を出して見ながら）おれだつてわざ〳〵造へた譯ぢやないんだからな。

爲吉　なぜ三十三枚齒のある櫛は縁起が悪いんだい？

豐之助　知らねえな。なんでも此齒をかうして指の先で撫でながら、年越の晩に四ツ角に立つて願ふと、どんな呪ひでも利くといふんだ。まア昔者の迷信さ。

爲吉　ヘエ。ぢやもし、其時に己らなら、己らが、もし今晩豐さんなら豐さんを殺してしまひたいと言つて呪へば豐さんが死ぬんだね。

豐之助　（櫛の歯を上にして指先にて撫でゐたるが、フト止めて）縁起でもねえ事いふない。もうお前は歸えんなよ。油賣つてると旦那に叱られるぞ。

爲吉　ヘイ〳〵。ぢや、明後日と今夜だよ。あばよ。

（爲吉走け出して、下手の露路より去る。）

豐之助　（ちつと考へて櫛の歯を數へる）ちよッ、如何したつて三十三枚だ。今迄にこんなに氣に入つた出來の櫛はねえのになア。

（二階にて烟草をはたく音す。）

豐之助　ちよッ。まだ話して居やがら。

（櫛を紙に包みて懷へ入れ、奥のしきりの障子を開け二階を見上げる心にて。）

豐之助　おい、お父つさん。（間をおきて）お父つさん。

父親　（二階にて）オイよ。

豐之助　幾ら言つたつて同じ事だ。好い加減にして下りて來ねえ。

父親　あゝ今、丁度下りようと思つてる處だ。

豐之助　（店へ歸りて）此暑いのに。いつ迄居るんだらうなア。なんだつてあんな奴をよこしやアがるんだらう。

父親　（柔和なる顏立。奥より出で来る）豐や、おさつさんはお歸んなさるさうだよ。

おさつ　（卑しき顏。下品なるつくり、父親に續いて店へ來ながら）ぢやア、如何してもおつなさんにはもう用は無いと言ふんですね。

父親　幾度も申しました通り。もうあつし共は、男二人で充分用は足りるんだから……。

おさつ　（ぢろりと豐之助を見て）豐さんも男らしく無いね。お前さんおつなさんに約束したのをお忘れかい？

父親　（豐之助のムッとして何か言はんとするを押へて）夫は最前も（豐之助を指して）是から申しました通り、いづれ亦店でも持つたら呼ばうと言ひましたのは、如何にもあの女が出て行かないから申した方便でしてな。例へかうして今度型ばかりの店を持つたのも、みんなお店のおかげなんですから、今度また嫁でもとるにはお店の相談を借りねばならず。お店ぢや、おつなでは承知をしませんのでな。どうぞまアお前さんから、あの子にも宜しく言つて下さいよ。

おさつ　ぢや詰り、今度はお店で承知しないからおつなさんを呼びかへされないと言ふんですね。へ、エ、夫で分りましたよ。ぢやア今度はお店のお世話でお嫁さんが出來るといふ譯なんですね。へ、エ。

豊之助　（堪へかねて）　おさつさん。好い加減にして呉んねえな。だれが嫁を貰ふと言つたんだ。

おさつ　とぼけても不可ませんよ。最前お前さんお店の爲どんがお嫁さんを如何とか言つてたぢやないか。年はとつてゝもね、耳は近いんだよ。

父親　あれはお前さん……。

豊之助　（遮りて）　お父さん、こんな奴にうつかり言つて、またお店の迷惑になると不可ない。うつちやときねえよ。

父親　さうだな。

おさつ　どうせ私は鐵棒引さ、だがね。頼まれた事は達さなきやならないんだよ。ねえ。お前さん達アおつなさんの方は一體如何するんだよ。

父親　とにかく、よく亦倅とも相談をするから。

豊之助　相談も何もねえよ。親父の身體に手を上げるやうな女房は己れは持てねえんだ。

父親　なアに夫やあつしも我慢するがね。その爲に年中倅に氣を揉ませるのも氣の毒だし、自然お店の方へも不義理になるし、まアどうぞ宜しく今度はお斷り申しますよ。

おさつ　それやおつなさんもね。お父さんに向つて手を出したのは全く自分が惡い、夫もつまりはお前さんに……。

豊之助　（首をふりて）　聞かねえ、聞かねえ、言譯は聞かねえよ。たとへ親父が呼んでくれと言つたつて己らは嫌なんだ。なんだつてあゝもおつなは親父につらく當るんだらうと思つて、己れは恨んでゐるんだからな。

おさつ　夫はおつなさんも全く後悔してるんだから、ねえ豊さん。おつなさんもあゝして苦勞のしつぱなしでおさらばぢや可哀さうぢやないか。ねえ。お前さんも今度はかうしてお店の近所へ店らしい店も持つた事だし、あの子も例へ今度は直ぐ出されても好い。一日でも好いからこの店へ坐つてお女房さんらしくして見たいつて言ふんだからね。ねえ、今度惡い事がありや私だつて利きやしないよ。うんとあの子をとつちめてやるつもりなんだからね。

豊之助　（つとめておさつの言葉を耳に入れまじとして）　何てたつて不可ねえよ。お前の保證ももう何度だか知れねえんだ。この店だつて彼奴が居なければこそ持てたんだ。どうしたつて己れは親父を酷い目に合せるやうな女房は持てねえんだ。

おさつ　ぢやお前さんはお父さんに氣に入らない嫁なら、何度でも出すつもりかえ。

豊之助　如何だつて好いぢやねえか。

おさつ　へエ。へエ。どうせ私は世話燒ばゝアだよ。だけどもね。誰の爲でもなしさ。お前さんだつておつなさんにや惚れてるぢやないか。

豐之助　（立かゝりて）　なんだと？
おさつ　何も怒らなくつたつて好いぢやないか。へ、、。
ねえ大抵な事なら入れておやりよ。ねえおとつさん。
豐之助　駄目だよ。已れも二度や三度の中は我慢をしたんだ。親父にも詫まつて歸つて貰ひもしたんだ。そりや女房が居なけりや、やつぱり親父に使歩きをさせなきやならずよ、已れの忙しい時にやア飯の世話までもして貰はなきやならねえんだ。夫でも濟まねえと思ふから、まア始めの中は詫びてくりや家へも入れてやつたんだが、如何してお前、あの女の癇癪と來た日にや、他人の思ふやうなもんぢやねえんだからね。少しばかり已れと親父とがこそ〳〵話しをしたからつて、お前。突然親父を向うへ突き飛ばしてよ。見ねえな。（親父の臉をまくりて綳帶を見せ）　いまだに癒りやしねえんだぜ、老人だから堪りやしねえやな。うつかり向ふへ倒れる拍子に其處に出てた庖丁の處へ肱を突いたのよ。そりやアついだと言へばついよ。けれどもお前、假にも亭主の親だと言ふ心掛がありやこんな事にはなりやねしえんだ。已らは如何しても親に怪我をさせるやうな女ア家に入れる事は出來ねえんだよ。
おさつ　ぢやア如何しても駄目だつて言ふんだね。
豐之助　うるせえな。もう默つて歸りやアがれ。

父親　まア、さうお前もぎだうに言ふもんぢやない。まアおさつさんも腹を立てないで一まづ歸つておくんなさい。あつしはナニ、倅に氣に入つてる嫁なら、ちつとやそつと怪我位したつて構ひませんがね。いろ〳〵此も外に苦勞もある事ですから、とにかく又氣の向いたやうな日にでも話しに來ておくんなさい。
おさつ　ぢやア豐さん、今度は如何しても家へ入れない覺悟なんだね。
豐之助　さうだ。その覺悟だ。
おさつ　ぢやアその通りあの子にも言ふよ。
父親　然しなおさつさん。亦いつかのやうに刃物ざんまいでもされちや困るからね。なんとか上手に……
おさつ　豐さん。立派な覺悟だね。もう賴んだつてあの子は歸さないよ。
豐之助　（苦しげに）　大きにお世話だ。手前の娘ぢやあるめえし。早く歸れ。手前のお蔭で祭だつてえのにさんざんだ。
おさつ　ヘエ〳〵どうもおやかましう。覺えてるがいゝや。
（おさつ、憎々しげにいひて下手露路の方へ行きかけ。）
おさつ　ぢやアおつなさんにやもう嫁さんの後口が定つたからつて言ひませうよ。

父親　おさつさん。そんな事を言つちや……
豐之助　いゝやな。お父さんうつちやときねえな。
おさつ　豐さん。大層強つ氣になつたもんだね、へ、、。
（露路口より去る。）
豐之助　お父さんお前さぞ厭だつたらう！　さつぱりと湯
にでも這入つて來ねえ。
（豐之助の顏、やゝ色蒼ざめて身體も勞れたる如く見
ゆ。）
父親　なアに。己らは後で行くから、お前行つて來な。ど
うせ今日は休みだ。己らは横にでもなつた方が勝手だか
ら。
豐之助　（心惡しきを隱すがごとく元氣よく）　さうか。ぢ
や、今の中一風呂浴びて來ようか。
父親　（豐之助の顏色に心づきて）　お前、なんだか顏色が
惡いぜ。如何かしたのか？
豐之助　なアに。少しばかり肩が凝つてる丈だ。ぢや一寸
行つて來ら。
（立ち上がりて再び坐り。）
豐之助　ねえお父さん。
父親　なんだ。
豐之助　あゝは言つてやつたけれどもな。又あんな女だか
ら、いつもの傳で、自分で文句を言ひに來ねえとも限ら
れえからな。もし己らの留守にでもやつて來たら決して
弱い氣を出しなさんなよ。よくお前から言ひきかして歸
してくんねえ。もしお前が氣を弱くして此處へ置くやう
な事があれば、今度は己らが出て行くから。いゝかい！
此上お前、亂暴されて見ねえな。己らア兄貴や姉さんに
顏が向けられねえんだからな。
父親　よし／＼大丈夫だ。如何してお前の苦勞するのを見
ちや、己れだつてそんなに氣を弱くしちやアゐられやし
ねえ。だがな豐、お前氣を惡くしちや困るがな、お前、も
しもあの女が氣に入つてるなら、家へ入れてやつた方が
いゝよ。よくいひ聞かしてやりやア分らねえ女でもない
んだからな。なア豐。己らはもう老人だ。ちつとやそつ
と邪魔にされたつて當前だと斷念めて居るんだから、
なア、眞實の總領にだつて娘にだつて邪魔にされぬいた
己だ。末ッ子のお前がこんなに孝行にしてくれるんだも
の。その嫁に少しぐらゐ邪魔にされたつて己らは決して
お前を何とも思やしねえ。決して思やしねえから、少し
でもあの女が可哀さうだと思ふなら、も一度呼びかへし
ておやり、よく／＼不可なけりや、己らは何處へでも行
くから。
豐之助　お父さん後生だ。お前賴むからそんな事は言はね
えでくんな。己らもしお前に出てゞも行かれた日にや。

そオら見ろ。立派な口を利いて引取つたくせをしやがつて、親に怪我をさせてまでも女にのろけて居やアがるときつと彼奴等は言ふんだ。それぢやお前、威張つて引とつた己れの顏の立て所がねえから、ねえお父さん。もうそんな事は云はねえで家に居ておくれ、頼むから、己ら、おつなんかに、何で未練があるもんかな。お父さんがもし入れでもすりや、己らは全く出て行つちまふ積りだから。

父親　よし／＼。ぢやア、まア面倒でもお前に死水はとつて貰はうよ。

豐之助　緣起でもねえ事を言ひなさんな。ぢやア、己らア行つて來るから氣をつけてゝ吳んねえ。まさかもう來もしねえと思ふけれども、いつかのやうな事もあるから、いゝかい、しつかりしてゝ吳んねえよ。

父親　大丈夫だ。心配しねえで行つて來な。

豐之助　ぢや急いで行つて來ら。（奥へ行きかけてまた立止り）それから袖ちやんがお母親さんと來るかも知れねえから。もし來たら待たしといて吳んねえ。今夜お店へ一所に行く筈だから。

父親　（嬉しげに）　ぢやア、いよ／＼上手く行くのかな？

豐之助　うむ。もう大體の話は定つてるんだがね。大旦那のお内儀さんが一遍本人を見てえつて言ふもんだから、本人には夫と言はずにお店でお祭の餘興があるつて事で呼ぶ筈になつてるんだ。

父親　さうか、夫や好かつた。何でも淸元の御師匠さんとかで若旦那はあの子を見染めたんだつてな。お母親さんは堅いし、兄さんはしつかりものだし、お店にや好いお嫁さんだ。

豐之助　さうよ。若旦那もあれでなか／＼今時の學問もあつて商賣だつて拔目がねえんだから、袖ちやんも幸福者さ、ぢや行つて來ら、己ら水口を閉めて、裏から出てゆくからな　店の方を頼んだぜ。

父親　あゝ、ゆつくり行つて來な。

（豐之助奥へ入る、やがて水口の締る音す。暫くして下手露路口よりお袖。島田に結ひて人品なる娘風。よそ行のなりにてめりんすの風呂敷包を持つて出づ。）

お袖　（店を覗きて）　をぢさん。をぢさん。

父親　（寢轉びて居たるが起き上りて）　よう、お袖ちやん。これは綺麗だ。

お袖　いやなをぢさん。

父親　まアお上りなさい。お母さんは？

お袖　（店先へ腰かけて）　今ね、お客があるから一足先へ豐さん處まで行けつていふのよ。

父親　おや／＼。さうですかい。まアお上り。

お袖　此處で澤山。今ね表で豐さんに逢つたわ。
父親　あゝ一寸湯に行きましたよ。
お袖　(心細げに)　ねえをぢさん。豐さんのお店つてどんな處？　大きいの？
父親　さア大して廣くもないがね。お庭なんかあつて。なか〱凝つてますよ。
お袖　さう？　大旦那だのお内儀さんだの。若旦那だの、番頭さんだの、種々な人が居るでせうねえ。
父親　そりや居ますよ。今日はお客をするんですからね。
お袖　でも私、餘り餘處の家へ行きつけないから。いやだわ。誰も居ないと好いんだけれども……
父親　アハヽヽヽ、それぢやお客様が困りまさ。
お袖　私は困らないわ。
父親　アハヽヽヽ。
お袖　でもね。お芝居があるんですつてね。番頭さんや小僧さんの。
父親　さうかな。あつしやア知りませんよ。お袖ちやんは芝居は好きですかい？
お袖　えゝ好きよ。でもあたし、めつたに見た事は無いの。夫も歌舞伎座つきりか知らないのよ。豐さんのお女房さんの事をみんなが新派の誰とかに似てるつて言ふけども、あたし新派は知らないわ。

父親　ハヽヽ、さうですかね。だがお前さんは大變清元が上手だつてな。ひとつ今度をぢさんにも聞かしておくんなさいよ。
お袖　ちつとも上手かないわ。お店の若旦那はそりや上手！
父親　あつしやアお店の若旦那にはまだ一度もお目にかゝつた事は爲いが、どんな方だな？
お袖　どんな方つて、矢張り男の人だわ。
父親　アハヽヽ、女の若旦那があるかな。
お袖　いや、あたし、をぢさんは揚足ばかり取るんですもの。
父親　そんなに脹れちや、お嫁に貰ひ手がなくなりますぜ。
お袖　いゝわなくつたつて。
父親　夫では一生兄さんの厄介者かな。
お袖　一生でも二生でも兄さんは厄介なんかにしやしないわ。
父親　兄さんはしないでも、今にお嫁さんが來りやお袖ちやんは鬼千匹だからな。きつと厄介者だ。
お袖　あらまだ兄さんは學校へ行つてるぢやありませんか。お嫁さんなんか貰つちや可笑しいわ。
(上手の細き露路よりおつな、銀杏がへし、意氣な浴衣がけにて黒繻子の帶の間に紅絹に包みたる剃刀を差

して豐之助の店を密かに覗ふ。）

父親　アハヽヽ。今は貰はなくてももう直きでさ。

お袖　直きぢやないわ。

父親　まだ〳〵と思つて居たお前さんでももうお嫁さんだからな。

（おつなやゝ氣色をかへて聽耳を立つ。）

お袖　あたしだつてお嫁さんなんかにならないわ。

父親　アハヽヽヽ。まアお上り、其中には豐も歸るし、お母さんも見えやうから。二階へ行つてお茶でも呑まう、大分蒸して來たから、二階へお出で、少しは涼しいから。

お袖　お母さんは如何したんでせう。

父親　直きに來るさ。さア、まア上つておいでなさい。

（お袖風呂敷包を持ち、父親に續いて二階へ上る心にて奥へ入る。おつな。そつと露路を出で嫉ましげに奥を覗く。下手に足音す。おつな上手の露路へ隱る。下手の露路より豐之助。湯上りの心にて石鹸と、手拭とを持ちて出づ。）

豐之助　（店を見て）お父さん。今歸つたよ。（お袖の下駄を見て）袖ちやん來てるんですかい？

（返事なし。豐之助店先に腰を下す。おつな出づ。）

おつな　（聲を忍びて）豐さん。

（豐之助振り返り。ハツとして立上る。）

おつな　お前さん氣が變つたのかい？

豐之助　（店を見返りておつなの側へ寄り）まア待つてくれ。

（と豐之助の店へ上らむとするをおつな押へる。）

おつな　お前逃げるのかい？

豐之助　（強く）逃げやしねえやな。

（おつな手を離す。豐之助奥を覗きて再び店先へ下りる。）

豐之助　親父は二階だ。

おつな　二人は二階とお言ひな。お前さんも優しいお嫁さんが定つておめでたうございますよ。

（おつな口惜しげに涙をぬぐふ。）

豐之助　詰らねえ事を言ふぢやねえか。いつ己らが女房なんぞを貰つたんだ。

おつな　澤山お隱しよ。どうせお袖ちやんはあたしより年は若し、綺麗なんだ。

豐之助　靜かに言ひねえ。そんな馬鹿な事を言ふもんぢやありやしない。ありやお店の若旦那の處へ行く人ぢやねえか。

おつな　馬鹿におしでないよ。お店ともあるべきものが、あんな處の娘を貰ふもんかね。

豐之助　たとへどんな處の娘だらうが氣に入りや貰はねえ

とは限りやしねえんだ。やつかみも大概にしろ。

おつな　あゝ私はどうせやつかみ性だよ。そんな事で私をごまかさうたつて駄目だよ。今夜お前さんは袖ちやんを連れてお店へ行くんだらう。なんてつたつて知つてるよ。お店からもお嫁さんを連れて來いつて向ひが來たつてぢやないか。

豐之助　夫がお前の思ひ違ひなんだ。

おつな　思ひ違ひなものか。さつきも聞いてりやア、お父さんも嫁のなんのつて私は口惜しいよ。お前さんはもうほんとに私を捨てるつもりなんかい？

豐之助　己れの心はお前も知つてる筈ぢやねえか。

おつな　だつてお前さんは、今度こそは如何しても入れない積りだつてをばさんに言つてよこしたぢやないか。

豐之助　お前。また何だつてあんな者を遣すんだな。夫ほどお前早く話が定めてえのか？

おつな（やゝ安堵せるごとく）さう言ふ譯ぢやないんだけれどもね。お前さんのやうな男にや。何かしら私を思ひ出すやうなものを見せて置かなきや、氣が長いんだもの。心配で心配でなりやしない。今度だつて、きつと何とかするからつてお言ひだから歸つたんだよ。もう三月にもなるのに何とも言つて來ちや吳れないんだもの。お負けに私に內證で家中で越して終ふんだもの。

豐之助　そいつア仕方が無えやな。お店からは店の傍へ來いつて言ふし、親父も彼處は越してえつて言ふんだから。

おつな　ぢやアお前さんはお店とお父さんの言ふ事さへ聞いてりや好いんだね。

豐之助　さう言ふ譯ぢやねえけども、親父の氣に染まねえ家に片時だつて住んでりや不孝ぢやねえか。

おつな　ぢやア若し、私が此處の家を探し出す事が出來なくても平氣なんだね。

豐之助　さうぢやねえけれどもさ。だつてお前他國へでも越しやアしめえし目と鼻の先きぢやねえか。

おつな　だつてこんな露路の中ぢや運が惡けりや探し當てる事は出來ないかもしれないぢやないか。

（おつな悲しげに涙をこぼす。）

豐之助　だつたつてお前親父が……

おつな　お前さんは二言目には親父親父つて言ふけれどもね。お前さんはそんなにも親が大切なのかい。自分の好きな女房を振り捨てゝもあのお父さんが夫ほどまでに大切なのかい。

豐之助　さうだ。大切だ。己ら自分の身を捨てゝもあの親父は大切なんだよ。己らは何故お前が己れの萬分の一も親父の事を思つてくれねえのかと思つて、口惜しくつて口惜しくつてなりやしねえ。

（豐之助淚を含みておつなの顏を見る。）

おつな　あゝ何故。あたしにはお前さんのやうな優しい心を持つ事が出來ないんだらうね。何でもない事ぢやないか。あの袖ちやんのやうにおとなしくやりや好いんだもの。

豐之助　さうだ。さうさへすりや好いんだ。

おつな　（何か想像するやうに）あの、何と言はれても、どんな氣に染まない事があつても、ぢつとして耳を閉いで……あゝ私には小ぢれたくつて出來やしない。

豐之助　する氣が無えから出來ねえんだ。己らだつてお前に袖ちやん位の優しい心がけがありや何も好んで別れるたア言やアしねえんだ。

おつな　ぢやお前さんは私を嫌つてるんぢや無いんだね。

豐之助　當前ぢやねえか。

おつな　あゝ嬉しい。ぢやアお父さんの前だけであんな事ををばさんに言つたんだね。

豐之助　分りきつてるぢやねえか。

おつな　ぢやア、私と此處を逃げておくれ。

豐之助　（驚きて）馬鹿な事を言ふな。親を捨てゝ女房と家を出られるもんか。考へても見ろ。

おつな　だつてお前さん。此儘にしちや。きつとお父さんは袖ちやんをお嫁にすると言ふだらうぢやないか。

豐之助　何を言つてるんだな。ありやお店の……

おつな　嘘だよ。あんな優しい人があるのにと思つて、きつとお父さんは私を憎むだらう。

豐之助　何も袖ちやんが特別優しい譯ぢやありやしねえんだ。お前さへ當前の女になつてくれりや好いんだ。

おつな　今迄にだつて何度も何度もあたしは當前の女になれるつもりで歸つては來るんだけれ共。なぜ外の女は私よりも優しいんだか。あたしはもう自分で自分に愛想がつきて居るんだよ。さうかと言つて、如何してもお前さんに別れちやア。あたしは淋しくつて淋しくつて、暮しちや行かれないんだから、お願ひだお金丈の事なら、私が又師匠をするなり何なりしてお父さんの世話はするから。さア直くに逃げておくれ。

豐之助　そんな事は出來やしねえよ。

おつな　それぢやア私は如何したら好いんだらうねえ。

豐之助　親父の言ふ事なら、どんな事でもするやうな女にならなくちや、とても添つて行く事は出來ねえのだ。

おつな　ぢやアお前さんは？……

（おつな、きつと豐之助の顏を見る。二階にてお袖の聲す。豐之助無理におつなを連れて上手露路に入る。お袖。奥より出づ。父親も續く。）

お袖　あたし見て來るわ。御母さん如何したんでせう。

父親　うむ。さうだな。豐も如何したのか。今聲がしたやうだつたがな。豐や、……返つたのかな。近處ぢやみんな祭に行つてしまつたし……豐や、豐ぢやねえのかな。

お袖　石鹼も手拭もあるのになんだか變ねえ。

（豐之助舌上手露路より出づ。おつな忍ぶ。）

父親　なんだお前、そんな處に居たのか。何をしてたんだ。

豐之助　なアに溝板が外れさうになつてたから、又誰か落ちでもすると不可ねえと思つてよ。

父親　さうか。（豐之助の顏を見て）したがお前、やつぱり顏色が惡いぜ、如何したんだらう？

豐之助　なアに、どうもしやあしねえがどうも肩が凝つて肩が凝つてしやうがねえのさ。

父親　其奴は不可ねえな。餘り氣分が惡いやうぢやお店へも行けめえな。

お袖　ぢやア私達も止しませうか。

豐之助　其奴ア不可ねえ。袖ちやんの爲に行くんですからね。ぢや斯うしませう濟まねえけれ共お父さんは己らの代理をして貰はうね、袖ちやん好いでせう？

お袖　でもをぢさんに惡かなくつて？

父親　なアにあつしやア構ひませんがね。

豐之助　ぢやア頼まア。別に面倒な事はねえから、よく己らの事を言つて、急に斯う斯うだからつてね。尤も直りしだいに己らも店を閉めて行くから、袖ちやんの御母さんを誘つて、兎も角も出かけて呉んねえ。

父親　ぢやアさうしようかな。然しお前一人で大丈夫か。

豐之助　大した事はありやアしねえんだ。

父親　夫ぢやア一寸羽織を引かけて來よう。

（父親奥へ入る。）

豐之助　袖ちやん。お店へ行つたら、お内儀さんへどうぞ宜しく言つておくんなさい。どんな人が來て居ないとも限らないから。餘り笑つたりなんかしちや不可ませんぜ。

お袖　あらさう？……でもあたし、もし笑つたら如何しませう。

豐之助　ハハハ、只笑ふ位構ひませんよ。

（おつな覗く。奥より父親出づ。おつな再び忍ぶ。父親奥より下駄を持ち出す。豐之助父親の下駄を取つて並べてやる。）

父親　どうも憚り。ぢや袖ちやん出かけませう。お前暫く横にでもなつて居ねえ。ゆつくり休んで夫から來ると可い。

豐之助　うむ、直きに行くから心配しないで行つてゝ呉んねえ。通りが隨分人が出てるから、氣を付けてつてお呉れ、樽みこしが危ねえからな。

父親　よし〳〵。

お袖　ぢや、お父へ。

父親　早く横になつた方が好いぜ。

（二人下手露路より去る。上手露路よりおつな出づ。）

おつな　如何してあゝあの人達は仲よく出來るんだらうねえ。憎らしい、石でも投つてやり度いよ。

豊之助　馬鹿な事をしちや不可ねえよ。その娘に怪我でもさしたら如何するんだ。

おつな　だつて餘りいま〳〵しいんだもの。

豊之助　いま〳〵しいのは手前の心ぢやねえか。如何してお前はさう氣が荒くなつたんだらうなア。

おつな　あたしの氣の荒くなつたのはお前さんの爲だよ。

豊之助　なんだと？己らがお前の氣を荒くしたんだつて？

おつな　あゝさうぢやないか。今更になつて叱言を言ふ位なら、なぜ始めつからやかましく言つて呉れなかつたの？　お父さんが來る前まではお前さんあたしに向つて氣が荒いなんて言つた事は無いぢやないか。あたしだつてこんなに氣のいら〳〵した女ぢやなかつたんだよ。氣が荒くなつたと言ふのならお前さんがさしたのだよ。あたしはお父さんが來る前までは少しも氣兼も入らなかつたし、思ふやうな事を云つて思ふやうな事をして居たのだよ。夫でもお前さんはいつでも機嫌よく叱言なんか言つた事はなかつたぢやないか。夫が、お父さんが來てからといふものは、あゝしちや不可ない、かうしちや不可ないつて、叱言は言ふし機嫌は惡し。朝から晩までお父さんお父さんで、あたしはもう居るんだか居ないんだか知れなくなつて終つたんだもの。たまにゆる〳〵話しがしたいと思つても、お父さんが一寸咳でもすりや、お前さんは直ぐ飛んでつて終ふんだもの。一處に行き度い處があつても、いつでもあのお父さんの爲めに駄目になつてしまふんだもの。……あたしはあの人の來るまでは一度もお前さんに押へつけられた事はないのに、あの人が來てからと言ふものは、あたしはいつが日にも自分が自分らしいと思つた事は一度もありやしない。いつでもいつでも小さくばかりされて居るんだもの。あたしは今更になつてそんなにされる位ならはじめつから押へつけて居て貰ひたかつたんだよ。あたしはお前さんの處へ來るまでは酒呑みの親父と、意地の惡い繼母にかゝつて居て、一日だつて一分だつて樂にした事はありやしない。年が年中くだと叱言の間に挾まつて小さく小さくなつて居たんだよ。夫がお前さんの處へ來てからは、急に大きくなつたやうな氣がしたのだ。全で、寒い荒野から、好い心持に暖かい綺麗な野原にでも來たやうな氣がしたんだよ。たまに寒い處へでも歸されでもする事なら、夫も運だと思つて絶念らめられない私でも無かつたのに、さん

ざん心持の好い野原に置いて置いてもう寥い味なんか忘れてしまつた時分に、また急に其處を追つぱらはうとしたつて、それは無理だよ。あたしは如何かしてお前さんと一處に居ようと思つたから、泣いても見た、怒つても見た。さうしてお父さんからお前さんを取戻さうとしたけれども、お前さんはお父さんの方ばかり見てゝ振り向いても吳れない。あたしは如何かしてお父さんが出て行つてくれゝば好いと思つては、思入れお父さんに辛く當つて見た。けれ共、お父さんは少しもあたしに逆らつては吳れないんだもの。あたしもうぢれつたくてぢれつたくつて、ねえお前さん、それもこれもみんなお前さんの心を取り戻さうと思つたからした事だよ。だものあたしは少しも惡いとは思つて居ない、夫だのにお前さんは少しもあたしの心を察してくれないで、あたしばかりを責めるのだもの。そんなにあたしを責めたければ、何故はじめからあたしを責めて吳れなかつたの？！　……あのお父さんが居さへしなければこんな事になりはしなかつたのだよ、だからあたしはお父さんが憎らしくてたまらない。あたしは誰にも彼にもみんなあのお父さんをいぢめさしてやり度い、優しくなんかして貰ひたくないのだよ……

（おつな、急に聲を放つて泣く。）

豐之助　お前のいふ事にも理窟はある。けれども、お前は自分の言ふ事ばかりを耳に入れて人の言ふ事には少しも身を入れてくれないのだ。なぜさうお前は片寄つた心ばかりを持つて居るのだ。お前は少しもお父さんを如何いふ人だと思つて見た事もねえんだ。

おつな　少しも無いよ。お前さんを取つてしまつたやうな人に優しくする譯が無いんだもの。

豐之助　又さう言ふ分らねえ事を言ふ。お前がいつまでもさう言ふ心で居るんぢや、己らはいつまでゝもお前と一處になる事は出來ねえ。

おつな　お前さんは如何してお父さんが來てからつてもの、そんなに強つ氣になつてしまつたの？　どうしてもあたしにや、お前さんが前のやうにあたしの事を思つてるとは思はれないよ。

豐之助　お前は己らの心をみぢんも察しちやくれねえのだ。分らねえのだ。

おつな　あゝ分らないよ。分らない。分らない。

（おつな。首を激しく振つて泣く。）

豐之助　シッ。誰か來る。來い。

（二人再び上手の露路へ隱る。下手の露路より小僧爲吉出づ。）

爲吉　（店へ來て）ヘイ御免。豐さん。豐さんお内儀さん

がね、待つてますよ、早く來て下さいつて。豐さん、豐さん。（店へ手を突きて奥を覗き紙に包みたる以前の櫛を拾ふ）さつきの櫛だな、三十三枚か。（思ひ出したやうに）豐さんは居ませんか。死んだんですかい。いやになつちまふなア。お嫁さんを早く連れて來て下さいつて待つてますよ。……（店へ上りて奥の障子を開けて見る）誰も居ないや。ぢや出かけたんだらう。やれ／＼御苦勞さまだ。

（櫛を店へ放り出して下手へ去る。暫くして豐之助顔色蒼ざめて上手露路より出づ。おつな其袂に縋り居る。）

豐之助　放して呉れ。もうお店へ行かなきやならないんだ。

おつな　いやだ／＼。袖ちやんにまで馬鹿にされるのは嫌だ。

豐之助　なぜお前はさう分らねえんだらう。ありや若旦那のお嫁さんになる人だつてあんなに言つたぢやねえか。嫉妬も好い加減にしねえな。放せ。

（豐之助振り拂ふ。おつな轉びながら なほ袂を離さず。）

おつな　豐さん。後世だ詫まるから今日はお店へ行かないでお呉れ。今日丈行かないでゝ呉れゝば、あたしきつと優しくして見せる。死ぬ苦しみをして も優しくするから……。

豐之助　夫はお前の奥の手だ。夫にやアもう幾度も騙されて居るんだ駄目だ。

おつな　そんな事を言はないで豐さん。詫まるから詫まるから。

（大地へ頭をつける。）

豐之助　おつな。そんな事はしねえで呉れ。己は情けなくなつて如何する事も出來やしねえ。

（豐之助勞れはてゝ店へ腰を下す。ふと其處にありたる櫛をとりて。）

豐之助　さア之で愛想でも盡いて今日丈は歸つてくれ。さうしてお前もかう云ふ縁だと絶念めて、お前が己れを思つてるなら、どうぞ己れが迎ひに行くまで待つてゝ呉れ。さうだ。この櫛は近頭になく己れの氣に入つた出來なんだ。之をお前に預けて置くから。な。夫を己れだと思つて大切にしてゝ呉んな。え、おつな。

おつな　なんだいこんな櫛。

豐之助　（くわつとして）何だと。

（豐之助。おつなの腕を掴む。）

おつな　（泣きながら）いやだ／＼あたしは。今日は死んでも歸らない。

豐之助　死んでも？

おつな　あゝ！　覺悟はして來たんだよ。

豐之助　（思ひ直して、やさしく）な、賴むから今日は歸つて時を待つてゝ吳れ。もう己れはお前に無理にお父さんの守をして吳れとは賴まねえ。夫を無理にさせようとしたのは己れが間違つて居たんだ。お前が無理な賴みを聞いて吳れなくてもいゝ時が來たらきつと迎ひにゆく、己れだつて位牌になつた親父にまで優しくしろとは言やしねえんだから。

おつな　そんな事言はないで豐さん。決してもう手は出さないよ。もし出したら七生まで緣を切られても言分は無い。もしも右の手でお父さんの身體へ觸つたら、左の手であたしは死んで見せるよ。決して嘘は言はないから、ねえ豐さん。

豐之助　駄目だ。今更そんな事を言つてももう遲いのだ。なぜ、今詫まると言ふ心をあの時に出して吳れなかつたのだ。お前はあの時己れが泣いて賴んでも、親父を突いたその手を疊へ衝いてはくれなかつたぢやねえか。己れは好い、己れは夫でも好い。お前が惡い事をしたと思つてる事を知つてるから夫でも好いけれ共。親父に怪我をさせるやうな女を、幾ら己れが好きだからと言つて家に置いとく事が出來るか。夫でなくてさへ鷄の目鷹の目の兄弟の耳に、もしそんな事でも這入つて見ねえ。威張つて親父を引とつて來た己れの男が何處で立つんだ。

おつな　いゝえ。詫まる、詫まる。きつとから手をついて詫まる。

（おつな口惜しげに地へ手をつく。）

豐之助　もう遲い。

おつな　豐さん。

（行かむとする豐之助におつな縋りつく。）

おつな　お前さんは如何してさう氣が強くなつてしまつたんだい？

（泣く。）

豐之助　如何してなつたのだか考へて見ろ、己れはもうお前に何度騙されて居るんだ。その度に己らは親父には苦勞をかけ、兄弟にやア笑はれて居るんだ。夫でも今迄は我慢もして居たんだ。兄貴も姉さんも夫は親父を酷い目に合した。けれ共まだ一度だつて親父の身體に手を出した事は無いのだよ。立派に世話をすると言つて引取つた己れの女房が、親父の身體に疵をつけても己れに氣に入つた女房だからと言つてお前を家へ置いて、己れは何處へ向いて己れの頭をあげる處があるんだ。己れは強くなり度い。さうしてお前を押へつけてやりたいと思つてゐるのだ。お前の氣を荒くしたが己れなら、己れをこんなに強くしたのもお前だ、己達はお互になり度くもない身

の上になつてるんだ。親父を無事に見送つてしまはねえ中は如何しても己れはお前と一處になる事は出來ねえ。

（おつな、乾度頭を上げて帶の剃刀を握み、走り出さんとす。）

豐之助　お前血相を變へて、何處へ行くんだ。刃物なんか持ちやがつて。

おつな　お父さんさへ居なけりや二人は一處に居られるんだもの。

豐之助　（ひしと捕へて）手前は氣でもふれたのか。

おつな　あゝ氣もふれる、鬼にもなる、あたしはもうお前の家を三度も出て居るぢやないか。その度んびに家の母親やお父さんはもう／＼勝手な事ばかりいふぢやないか。夫でも私はお前さんのお父さんと睨めくらしてるよりは我慢も出來たんだよ。でももう三度にもなつちや、だれもなんとも言つちや呉れないのだ。あたしやアもう家にも居られなくなつてしまつたんだよ。もうどうせお前さんが置いてくれなきや死んでしまふあたしだ。お父さんを殺してゞも好い、一日でも一時間でもお前さんと元のやうに二人きり暮してからあたしは死ぬ。男に捨てられたみぢめな女で死たくはないのだよ。

豐之助　人を殺して手前一分でも安穩に暮せると思つて居るのか。

おつな　？……

豐之助　たとへ、夫が知れないにした處が、親を殺した女と一秒でも己れが一處に住めると思ふのか。

おつな　あゝ……

豐之助　放せ、人が來ると惡い。之を放せ。

（豐之助剃刀を取らんとすれどもおつな必死となつて離さず、ぢつと豐之助の顏を見詰む。遠くにみこしを揉む聲す。）

豐之助　如何したんだ。氣を落つけてくんねえ。如何とも話をつけるから、な、おつな、人聲がする、おい放さねえか。

（だん／＼に人聲近くなる。）

豐之助　おい。みこしが來るんだ。危ないから放せ。人が見る。

（おつな瞬きもせず豐之助を見詰む。）

おつな　豐さん。

豐之助　なんだ。

おつな　二人でお父さんの居ない處へ行かう。

豐之助　え？

（おつな突然豐之助を抱へて脇腹をさす。二人で重なりて倒る。一段近くなりたるみこしの聲、再び遠くなる。二人半ば起き上る。）

おつな　豐さん、勘忍しておくれ。

（おつな、豐之助を抱きたるまゝ乳の下を貫く。みこしの聲やゝ遠くなる。）

――静かに　幕――

靜夜（一幕）

人物

玉木豐　病身な主人（五十位）
同　園子　その妻（二十七八）
園田雪枝　園子の妹（二十二三）
青木俊夫　豐の從弟（二十四五）
おたに　婆アや（五十五六）
六兵衞　爺イや（六十位）
濱吉　その孫（十五六）
おしづ　女中（二十位）
お里　手傳の婦（二十位）
お粂　同（同）
仁藏　手傳の男（二十四五）
勘助　同（同）

場所

東京近在

時候

秋

時代

現今

大いなる農家づくりの茅葺の一部。正面やゝ奧へ斜めに暗く廣き土間（現在は用ゐざる竈、臺所道具など）、續いて右手一段高くなりて薄べりを敷きたる雇人の部屋（右手夜戸の出入口、曲りて正面戸棚）同じく左手納屋の心（藁、農具など）。その前に大いなる銀杏の立木、その下に手づくりの腰かけ、ずつと下手に生垣（木戸あり）。平舞臺一面は廣き土間の心にて、納屋の下手、生垣のあたりなどに鷄頭の花咲き、二三羽の鷄遊べり。眞中に筵を敷き豆穀を並べ、手傳ひの男女、爺イや、濱吉、俊夫も混りて丸くなり連枷にて打ちゐる。男部屋より土間へかけて大小五六個の藁包あり。秋の午後の日差す。鄙びたる歌にて幕開く。

えゝ、わしのかゝさは好いかゝさ、
機を織つたり、つむいだり。

えゝ、己らが息子は好え息子、
親のすること、みな我れがする。

えゝ姉の娘は吉原に、

妹娘はえゝお邸に。

（穀打の一廻り廻りし時、雪枝（晴れやかなる顔をしたる美人。束髪、白地の荒き手織縞の單衣、藤色の襦袢の襟、紫地の羽二重絞の帶。）菓子を盛りたる盆と、茶碗を載せたる盆とを持ち、婆アやおたに、大土瓶を持ちて出づ。）

おたに　さあ〳〵爺イやさん。一休みして皆さんにお茶を差上げて下さいましよ。

雪枝　お菓子も足りなければまだ澤山あつてよ。

（これにて人々連枷を置き、口々に「ありがたうございます」「はゞかりさまでごぜえます」など言ひて、女連は茶菓子などを受けとり、男連は納屋よりむしろを出し上手寄りの土間へ敷き、夫へみな〳〵車座になりて、茶を呑み菓子を食ふ。俊夫、銀杏の木の下の腰かけに腰を下し、濱吉は一人離れて、懐中より銀笛を出し袖で拭いてゐる。おたに、人々に茶を汲み、濱吉、俊夫にも持ち來りし後引込む。）

雪枝　（俊夫に近よりつゝ）ほんとに貴方ものの好きね、手が痛くなつたでせう。

俊夫　（病後のやつれはあれど血色美しく眉目秀でたる好青年、紺絣に厭味なき羽二重絞の兵兒帶、ヅボン下を穿き、尻端折り草履穿き、連枷を持つたまゝ手の平を見て）なあに、さうでもありません。

（雪枝、俊夫に並んで腰かける、人々は之に構はず、物を食ひ雜談の心。）

雪枝　何だつて貴方は今日に限つてそんな眞似を遊ばしたの？

俊夫　でももうお名殘ですからね。なんだか總てのものに手を觸れて置きたいやうな氣がするのです。

雪枝　（俊夫の顔を覗いて）例の貴方のセンチメンタリズムからでせう、詰らないことだわ。貴方がそんな穢ない連枷に手をお觸れになつたからつて、夫を誰も思ひ出になんかするものはなくてよ。

俊夫　（少ししよげて）さうですか、來年の秋が來ても貴女は何とも思つて呉れませんか。

雪枝　（わざと平氣に）多分思はないでせう、だつて私はまだ若いんですもの。これからの一年の間にどんな大きな事に打つからないとも限りませんわ。

俊夫　相變らず貴女は空想家ですね。

雪枝　えゝ、貴方がセンチメンタリストであるごとくにね。

俊夫　（憂鬱な顔）

雪枝　あゝ　（思ひ出して立上り）忘れてゐた、姉えさまがね、お茶を入れてお待ちしてゝよ。入らつしやい。（立

ちかける）

俊夫　さう、園子さんお一人？

雪枝　いゝえ兄さまもゐらしてよ。

俊夫　さう？　（暗い顔）

雪枝　さ、早く。（俊夫の靜かに立つて納屋の方へ穀竿を片づけにゆく間に人々の方へ向きて）爺イや、今日は皆さんに之だけで止めて頂いて、又明日にして下さいつて姉えさまが言つてらしてよ。そしてね、爺イやに御苦勞だけれど、俊夫さんのお荷物を早目に停車場へ運んでお呉れつて。好くつて？　田舍の驛はのんきで氣永だから早くしないと駄目よ。

六兵衛　（車座の中から）畏まりましたゞ。直きに持つてめえります。

俊夫　（連枷を片づけ來りて雪枝に）さあ、行きませう。（人々の方を向きて）ぢやあ皆さんさやうなら。僕はもう今日東京へ歸ります。御機嫌よろしう。

仁藏　（車座の中から）さうかね。だら、いよ〳〵立つかね。

勘助　又來て下せえ。

俊夫　有難う、さやうなら。

皆々　さやうなら。

（雪枝、俊夫の感傷的になり居るを笑ひて俊夫を促がして上手へ入る。車座の中よりお里立つて見送る。人人も其儘見送る。）

勘助　お里さ。

お里　（其儘）なんだね。

勘助　お前あの人が居なくなつちや淋しかんべえ。

お里　（赤くなりて）厭だよ。

（お里元の處へ戻る。勘助なほ目顏にてからかふ。）

仁藏　（六兵衛に向ひて）あの御客樣アもうすつかり病氣癒つたゞかね。

六兵衛　ア、好えあんばいにすつかり丈夫になつたゞから、今日はもういよ〳〵東京さ歸えるだ。

勘助　さうかね。もうやがてあの人來てから一年にもなるだね。

六兵衛　大方そんなもんだよ。

お里　お孃樣も一處に歸えるのかね。

六兵衛　一處ぢやあるめえ。

お粂　青木樣はお孃樣に惚れてるだね。

お里　あにそんな事があるもんで、青木樣は誰にでも優しいだよ。

勘助　おのしにも優しいだか。

お里　知らねえよ。

仁藏　お里ッ子は其處に惚れたゞね。

お里　知らねえつてばよ。

勘助　さういへば、此處の奥様ア大變に青木樣を可愛がるちう話でねえか。

仁藏　さうだ／＼己らも聞いた。

お粂　己らも聞いたゞ。あんでもよく此背戸で二人仲好く話してるつてな。

六兵衛　（ぼんやり話を聞きながら銀笛を玩んでゐる濱吉に）おのし鳥小屋へ行つて五番小屋のレグホン見て來う。二三日前から羽替えでエラ工合悪いぞ。

濱吉　（直ぐ立上りて）さうかね。五番小屋だね。

六兵衛　さうだ。

（濱吉下手奥へ入る。）

仁藏　六兵衛さん、その噂アほんの事かね。

六兵衛　（とぼけて）あにがよ。

仁藏　今の奥様と青木樣の事よ。その爲めに旦那アやきもち焼いて、えらく奥様を酷い日に合はせるちうで無えか。

六兵衛　（うち消すやうに）噂ア勝手な事言うだ。こつちの奥様ア旦那様に合して年が若えし美しいだから種々の事言はれるだ。奥様にそんな事あつて好えものか。

仁藏　さうだらう。己らもそんな事ねえ筈だと思つてるだ。

六兵衛　旦那様ア病身だで、心が曲むだ。何でも無えことも氣に觸るだ。だがもうお客様もいよ／＼今日は歸るだから。もう明日つからは靜かになるだ。

お粂　もう青木樣も身體好えだから早く東京さ歸るが好えだ。

仁藏　さうだ／＼夫が一番だ。どら己達も無駄話しねえで歸るべえ。

勘助　爺イさん、停車場へ行ぐなら手傳つて行ぐべえ。

六兵衛　さうかね。そんならあつちへ車廻すで、向うまで運んで呉れろよ。

兩人　好えだ。

（仁藏、勘助、爺イやに手傳ひて荷を運ぶ。女達四邊を片づける。一度荷を運びたる六兵衛、再び歸り來りて最後の荷を持ち行かんとする時、濱吉玉子を一ツ手に持ちて入り來る。）

濱吉　（仔細らしく小首をひねりて）とつさん五番小屋のレグホン見込みがねえだね。

六兵衛　さうか可哀さうに。

濱吉　此玉子は七番小屋のミノルカが生んだゞよ、十五匁はあるだね。

六兵衛　さうか、えら大けえな。あの小屋の奴も一羽弱つてるだ。氣をつけろよ。おらこれから停車場へ行くだでしつかり頼んだよ。

濱吉　好えだ。

（六兵衞下手へ入る。濱吉玉子を弄びながら上手へ入る。直ぐに二重の出入口より雪枝急ぎ足に出る。）

雪枝　（奥へ向ひて）俊夫さん、俊夫さん。あのお荷物がね、（大きく）一寸入らして頂戴。

（雪枝、云ひ捨てゝ庭へ出づ。俊夫も同じ出入口より出づ。）

俊夫　え、荷物が如何しました。

雪枝　後をしめて此處へ入らつしやい。

俊夫　（板戸をしめて同じく庭へ下りる）荷物はないぢやありませんか。

雪枝　（笑ひて）お荷物はもう六兵衞が持つて行つたわ。

俊夫　だつて今、荷物がどうとか言つたでせう。

雪枝　えゝ。でもね、兄さまが又妙に貴方に突つかゝつて入らしたから、夫でお呼びしたのよ。

俊夫　さう、どうもありがたう。僕もね、今又どうしようかと思つてゐたんです。

雪枝　あれで又姉えさまが何とか言はうものなら直ぐ破裂するわ。あんな時にはお逃げになるに限つてよ。

俊夫　えゝ有難う。ですけれど僕はほんとに閑子さんにお氣の毒でならないのです。けど豐さんも如何したんでせう。あの人昔はあんな人ぢや無かつたのですけれど……僕は何か恨みを受けてゐるのでせうか。

雪枝　恨みといふ譯でもないけれど、何となく、貴方を見るといら／＼なさるらしいわ。

俊夫　どうしてゞせう。だつて僕が病氣の時は、あんなにも親切にして呉れて、何んでも此田舍へ來て養生するが好いつて、無理に僕を此處へ呼びよせた人ぢやありませんか。――だのに僕がだん／＼身體がよくなつて來ると、不思議に豐さんの機嫌が惡くなつて此頃では全で手もつけられないやうになつて來たんです。どうしたつて言ふのでせう。

雪枝　私は暑中休みになつてこつちへ來たので能くは分らないけれど、私の思ふのには、貴方のお身體のお惡かつた頃は兄いさまもあゝして自分も病身なので、大變お氣の毒に思つたのでせう。けれ共、貴方が斯うしてずん／＼健康を囘復なさるのを見ると、急に羨ましくなつてそれでいら／＼するのぢやないかと思ひますわ。しかし、兄いさまも根は好い人なのよ。けれども病身に生れた不幸があの人の身體の中に喰ひ込んでゐるので、若い上に直ぐ健康を取り返すことの出來た貴方と、とても囘復の出來ない自分の健康と年とを比べて殘念で殘念で堪らないのぢやないかと思つてよ。それに姉えさまはあんなに若いし……。そんなことで、兄いさまは自分一人が別者かなんぞのやうに思はれて仕方が無いのぢやないかと思

ふわ。けど、もう貴方が立つておしまひになれば兄いさまも自分の外に何の對照も無くなる譯ですから、きつと心が落ちつくでせう。（考へて）――でも姉えさまはこれから先きどんなに淋しくなるか……それに私ももう直き歸つてしまひますしね、何だか後の事を考へると、兄にしろ姉にしろ、なんだか氣の毒ですわ。

俊夫　（引き入れられるやうに）僕だつて、こんなに長く御厄介になつた皆さんにお別れして歸るのはほんとに厭なんです。でも貴女には又東京でお目にかゝる折がないとも言へませんけれど、もう園子さんにはいつお目にかかれるか……。夫に豐さんがあんな風だから僕はほんとに姉えさまがお氣の毒でならないのです。僕がこつちにゐれば又どんなにか御相談相手にもなりますけれど、僕も今日は立つてしまふし、貴女も居なくなつてしまつた後の園子さんを考へると、何だか恐いやうにも思ひますよ。

雪枝　貴方が考へて入らつしやるほどの事はありやアしないことよ、姉えさまは、これが自分の運命だと絶念らめられる人ですものね。私たちがゐる中は少しは苦しいと思ふ事もあるでせうけれど、やつぱり昔のやうに兄と二人つきりになつてしまへば、何とか又過して行く事よ。それに姉には自覺なんてものはないのだから。あんな兄の爲めに一生苦勞して働いて死んでしまつても仕方がないと思つてゐるのでせう。自分がよその人と比べてどれ程善良な心を持つてゐるのか、どれ程美しい容貌を持つてゐるのか、夫さへもあの人は知つてゐないことよ。

俊夫　（疑はしげに）さうでせうか。そんな事は無いでせう。殊に此頃は元氣が無くて考へ込んで入らつしやるぢやありませんか。それが僕には心配なのです。あんまり沈み過ぎて入らつしやるのですもの。

雪枝　（やゝ嘲りの調子を含みて）大方姉にも少し世の中が見え出して來たのかもしれませんね。（皮肉に）貴方のおかげで。

俊夫　えゝ僕のおかげですつて。雪枝さん、なぜです。

雪枝　なぜでも好くつてよ。夫よりも貴方が早く東京へ歸つて大學を續けて立派におなりになるのがあの人の喜びだわ。

俊夫　（物たらぬげに）さうでせうか。

雪枝　えゝ、さうですわ。

俊夫　（少し言ひ惜げに）貴女はどう思つて下さるのです。

雪枝　（とぼけて）私？

俊夫　（熱心に）えゝ。

雪枝　（冷やかに）どうも思ひませんわ。當り前の事ですもの。

俊夫　（一生懸命に）　しかし僕は貴女に喜んで頂き度いのです。

雪枝　（俊夫をぢつと見る）

俊夫　（やゝ恥らひながらも）　僕はそんな風に考へては惡いでせうか。さういふ風に言ふことを貴方はお咎めになるでせうか。貴方は僕に許して下さらないでせうか、僕と一生を共にして……。

（俊夫思はず雪枝の手を取る。雪枝夫を拂つて立ち離れる。）

雪枝　（或る喜びを感じながら、又ある一種の誇を持つて）ホヽ、私は姉えさまとは違ひますわ。私には自覺がございますもの。私は人の妻になるやうなそんなもの優しい心持なんぞは持合してをりませんわ。私の暮し方はその日その日――といふよりも、その時、その時と言ふ方が好いかもしれませんわね、その時の調子で行くのですものね。貞操と言ふやうなものに縛られて、一生良人の手先きに使はれるやうなことは出來ませんわ。私は自分で自分に心が許せないとさへ思つてゐる位ですもの。只かうして自由に一生を過して行つて、その中で一番好きな日の多かつた人が私の戀人でもあり良人でもあるのですわ。私は姉のやうな他人に支配される身になり度いとは思ひません。私は強い人になるのです。自分が他人を支配し度いと思ひますわ、……貴方はどうして今になつて急にそんな事をおつしやるの。なぜ貴方は之まで通り姉えさまだけを好いて入らつしやらないの。

俊夫　（或る失望を感じながら）　え、園子さんを？　あの方は豐さんの細君ぢやありませんか、貴女は飛んでもない事を言ふのですね。

雪枝　さう？　兄さまの細君ならどうなの。

俊夫　どうなのつて、假にも人の妻を……。

雪枝　人の妻なら戀する事は出來ませんの。

俊夫　そんな不德義な。――

雪枝　不德義？　では俊夫さん。貴方は人の妻を戀するのは不德義で、處女に戀するのは不德義でないとでも思つて入らつしやいますの。心から女を尊敬してゐるのならば、どちらだつて同じ事ぢやないの。むしろ、處女に戀する方が餘程大膽で、よつぽど横着だとはお思ひにならなくて？　もし私の方から、そんなら貴方は童貞で入らつしやいますかと伺つたらどうなさるおつもり？……（或る悲しみにおそはれながら）　ホヽ、男の人といふものは直きに戀とか熱とかおつしやるけれど、もし其女に嫌はれると、一時は何とか思つても、或る時間が經つてしまへば直きに忘れてしまつて、又外の女の心を引いて見るか、さもなくはあり合せの女を妻に持つておしま

ひになるだけでせう。兎もかく女が戀に傷つく程には痛手を負はないものですわね。けれ共人妻に戀する場合は時とすると生命がけでございますからね、うつかり發表は出來ませんわ。でも貴方の場合には好い按排に私といふものが出て參りましたから、貴方には御都合が好かつたかもしれませんわ。姉の爲めにお動かしになつた心を、其儘私の方へふり向けさへなされば好いのですものね。そして其方が最も安全な方法ですわ。

俊夫　しかし僕は……

雪枝　（遮つて）私は男が「しかし」とか「だが」と言ふのは嫌ひ！　男は男らしく、下らない接續詞や間投詞などはお用ひにならない方が好くつてよ。――夫よりも貴方は姉えさまを思つてゐるとはつきりおつしやつた方がお宜しいぢやないの。貴方は人妻に戀するのは不德義だとおつしやるけれど、若し姉えさまの方で知らぬ中に貴方の爲めに動かされてゐたとしたらどうなすつて？　その罪は誰が負ふのでせう。

俊夫　でも夫は僕の故ではありません。

雪枝　では誰の故？

俊夫　………

雪枝　貴方は嘘つきね。貴方よりは姉さまの方が餘程眞面目よ。姉えさまの此頃の樣子を御覽なさい、あのほどんなに苦しんでゐるか知れませんよ。姉えさまは貴方がどう思つて入らつしやるかに係はらず、自分が貴方の爲めに動かされた心の罪を兄に對してどうつぐのつて好いかと、それの爲めに夜も晝も苦しみ通してゐるのですわ。夫でも好うございます、夫でも貴方が姉えさまを思つてゐるとでも言つて下さればどんなに私だつて嬉しいか分りません。夫だのに夫だのに（次第に熱して）……その貴方が……

（この時裏手より園子出づ。丸髷、水の垂るゝばかり美しき人なれど、やゝ疲れて淋しき風情あり。紺地の單衣綠地の帶、藤色の帶上げ、雪白のレグホン種の鷄を抱く。）

雪枝　（すぐ心づきて冷やかになる）まあ姉えさま、いつの間に入らして？

園子　（さみしく）えゝ鳥が工合が惡いといふから見に出たのよ。（妹の顏を見て）あら、貴女涙が……（一寸俊夫を見て目を返し）どうしたの。（輕き嫉妬）

雪枝　（姉の心を見拔きてわざと笑ひて）えゝ俊夫さんとお別れするのが悲しくて泣いたのよ。兄いさまは？

園子　あゝ俊夫さんにお目にかゝり度がつてゐてよ。俊夫さん、行つて見て上げて下さらない？　すつかり鬱ぎ込んでしまつて奥の書齋に居りますよ。

俊夫　然し又僕が會つて氣に觸ると不可ませんから。
雪枝　又俊夫さんのしかしが出ましたね。大丈夫よ。兄いさまは神經衰弱ですからね、一人一人で話してゐれば無事なのですよ。あんまり廻りに大勢人が居たり、まるで一人つきりで置いたりすると不可ないのよ。
園子　ほんとにさうなんですよ。先刻(きつき)あれからも何故俊さんは己れを見捨てゝ歸つてしまふのだらうの、きつと己れに愛想をつかしてしまつたのだらうつて、駄々をこねて困りましたわ。貴方入らして慰めて上げて下さいましな。
俊夫　では行つて見ませう。まだ時間はありますかしら。
園子　まだ一時間位はたつぷりありますわ。
俊夫　では失禮、一寸行つて來ます。
雪枝　(ぢつと姉を見てゐたが俄かに)あゝ一寸俊夫さん、貴方兄いさまに捉まると又いつお話が出來るか分らないから、その前に私達にお別れの挨拶をして入らつしやいよ。
俊夫　お別れの挨拶?
雪枝　さ、(右の手をつと延して俊夫の方へ出し)握手をして頂だい。
園子　(呆れて)まあ雪枝さん。
雪枝　姉えさまは見て入らつしやい。さ、俊夫さん。
俊夫　(餘儀なげに手を出す)
雪枝　(握手しつゝ)俊夫さん、これが今日までの貴方と私とのお別れよ。だから今日までの私の失禮も我儘もこれで帳消しにして頂戴ね。そして貴方も今日からは別の目で私を見て頂戴。
俊夫　(悲しげに默す)
雪枝　(俊夫の手を離して)さ、私のお別れは濟みました。今度は姉えさまの番よ。
園子　(やゝ恐れて)私?
雪枝　さあ、そんな鳥なんかは離しておしまひなさいよ。濱吉。濱吉。
(裏手にて「あゝ」といふ返事して濱吉出づ。洗ひたる銀笛の水を切りゐる。)
濱吉　なんだね孃さま。
雪枝　あら、お前何をしてゐるの。
濱吉　孃さまに貰つた銀笛洗つてゐたゞ。
雪枝　そんな事よりね。(姉の手より鳥をとりて)此鳥を小屋へ入れてお前見てゝおやり。
濱吉　(銀笛を腰へ差し鳥を受けて)へえ、夫だけかね。
雪枝　あゝ、早くお行きよ。
濱吉　(向うへ行きながら)孃さま、晩に又銀笛聞かせるべえ。

雪枝　吹けもしないくせに。
濱吉　吹けるだ。
（濱吉入る。）
雪枝　（姉の手を取りて）さ、姉えさま、貴方も俊夫さんとお別れをして頂戴。
園子　まあ。そんな事を……。
雪枝　（俊夫の手を取りて）さ、俊夫さん、貴方も。
（雪枝二人の手を握らす。）
雪枝　（二人の握手の上に自分の手を置きて）さ、俊夫さん、貴方は其處で姉えさまにお詫びなさい。貴女のお心を動かして濟みませんて。
園子　まあ、雪枝さん。
（園子困じて俊夫の手を離さうとする。）
雪枝　（なほ堅く押へて）いゝえ姉えさま。さ俊夫さんあなた何とかお言ひなさいな。
俊夫　（觀念したる體にて）僕が至らなかつたのです。若しそんな事がありましたら、それは園子さんの誤解でした。
園子　（恥らひより失望に入りて、やゝ蒼白となる）誤解？
俊夫　僕は雪枝さんに戀してゐたのです。
雪枝　（驚きて二人の手を離し）まあ、（混亂したる心を紛らさんとして）嘘つき！
俊夫　（むつとして園子の手を離し）嘘つきですつて？
園子　（力なく）まあ、俊夫さん。雪枝さんは若いのですから勘忍して上げて下さいまし。夫よりもどうぞ貴方は主人の處へ入らして。
俊夫　でも僕は。
（雪枝、俊夫の言葉を聞かぬやうに立ち離れてゐる。女中しづ板戸より出づ。）
しづ　青木樣、旦那樣が呼ばつてますよ。
俊夫　今直ぐ行く。
しづ　へえ。（去る）
俊夫　（暫く默して立ちたる後、突然）失禮します。
（俊夫去る。雪枝、園子默して見送る。）
園子　（突然膝を衝き兩手にて顏を押へ）あゝ。
雪枝　（驚き側へ寄りて）如何なすつたの。姉えさま、姉えさま。
園子　あゝ私は惡い事をした、惡い事をした。
雪枝　まあ、姉えさま。貴女は俊夫さんのおつしやつた事を氣になすつて入らつしやるのね。さうでせう。
園子　私は惡い事をした、惡い事をした。
雪枝　馬鹿々々しいわ姉えさま。貴女はもつと心を廣くお持ち遊ばせよ。すればもつと〳〵世の中が樂に暮せます

わ。姉えさまのやうにさうしてきちやうめんに世の中を渡らうとしたつて夫は無理よ。夫を押し通さうとすれば氣狂ひになるか自殺でもする外はないわ。

園子　氣狂にならうと自殺をしようと私にはかういふ風にしか暮せないのですもの。夫よりも何よりも私は俊夫さんに少しも早く立つて頂かなくては心配でならない。かうしてゐる中にも……あゝ私は奥へ行つて見なくてはならない。

雪枝　（園子を止めて）まあ、姉えさま。少し落ちついて入らつしやいましよ。俊夫さんは貴女が勧めて、奥へ行つて頂いたのぢやありませんか。

園子　だからなほ心配なの。もし俊夫さんに失禮でもあると……。

雪枝　兄いさまに何が出來るものですか、大丈夫よ。

園子　いゝえ、若し間違ひでもあつては濟まないから、私は少しも早く俊夫さんに立つて貰ひますわ。

雪枝　それは貴女あんまり絶念が早いと言ふものよ。そんなに俊夫さんを急いで立たして後で淋しいとはお思ひにならなくて？

園子　（揺ぐ心を押へて）いゝえ、そんな事はありませんわ。もと／＼あの方は家の人では無かつたのですものね。

雪枝　さう言へばさうですけれど……。此一年近くの間といふもの、姉えさまは俊夫さんの爲めにどんなにか助けられて入らしたか知れませんよ。

園子　それはさうよ。兄いさまもね、毎日毎日同じ人の顔を見て同じ事をして暮すのは、どんなに退屈だつたか知れないわ。其處へ俊夫さんが來て下すつた時には、私達はほんとに暗黒から明るみへ出たやうに思ひましたわ。でも夫も僅かの間で、直きに家の中は昔の單調に戻つてしまつて、兄いさまはぢれる――怒る、私もなまじ慰め手の無かつた時は、夫もなんとも思はなかつたのだけれど、俊夫さんが來てからといふものは今迄我慢して居られた事が、大變無理のやうに思はれて、悲しくも情けなくも思はれましたわ。でも夫だけに私にとつては俊夫さんは力強い慰め手だつたに違ひはないわ。（絶望的に）でも、一生居て戴ける譯ではなかつたのですものね、今になつて考へて見ればなまじ俊夫さんなんかゞ來てくれなかつた方が幸福だつたかもしれないわねえ。

雪枝　まあ、姉えさまはそんな風におつしやるの。

園子　（涙を含みて）でも仕方が無いわ。あの方にしてももう早く立ちたいでせう。それに貴方ももう直き東京へ歸る人だし、あの方だつてさう長くこんな田舎にゐても仕様がないでせう。いくら私が淋しいからと言つて、私の爲めに留まつて下さる方ではなかつたのだわ。

雪枝　夫は姉えさま酷いわ。そんな風におつしやつちやア俊夫さんにお氣の毒ですわ。あの方だつてどんなに姉えさまに心を引かれて入らつしやるか……。

園子　まあ、貴女は何を言つてるのよ。現在俊夫さんだつてはちつとも嬉しかないことよ。そんな慰めは私に

雪枝　あゝ、あなたは、さつき俊夫さんが姉えさまが俊夫さんの心を誤解してると言つたのをお聞きになつて心持を悪くして入らつしやるのね、でもあれは俊夫さんの嘘ですよ、私は此後俊夫さんなしに暮す姉えさまの淋しさを思ふと何とも言へない心持よ。

園子　まあ、貴女は變な事を言ふのね、俊夫さんなしにどうのかうのつて可笑しいわ、俊夫さんは、あたしの爲めに此處に居た方だつたのぢやないわ、現在御自分の口から……。

雪枝　そんな事をおつしやるのは止めて頂戴。俊夫さんと私とは、もう先刻、立派に姉えさまの前でお別れをしたぢやないの。夫よりも私は姉えさまのほんとのお心が知り度いのよ。貴女は此一年の間に今までに御存じなかつた世の中をお知りになつたのよ。今まで兄いさまとの間に感じた事のない戀を知つたのよ。貴女は俊夫さんを思つて入らつしやる……。

園子　まあ貴女は、貴女は恐ろしい事を平氣で言ふ。（耳をふさぐ）

雪枝　姉えさま、耳などを押へないで聞いて頂だい。私だつて常識のある人間ですから言つて好いことゝ、悪いことゝは知つてゐます。私だつて決して平氣でこんな事を言つてゐるのではないわ。言はなくてはならないから言ふのです、貴女をほんとにお氣の毒に思ふから言ふのです。けれ共姉えさま、あなたは御自分をいつはつて入らつしやるのよ、そのくせ、そのいつはつてゐる感情をどうしてものぞく事が出來ないのです。

園子　（遮つて）もう何も言はないで、貴女は私を苦しめようとなさる。貴女は私の折角大切にしてゐる私の純白な胸の中にしみをつけようとなさるのね。

雪枝　いゝえ姉えさま、しみは私がつけるのでは無くて、貴女自らがおつけになるのよ。

園子　いゝえ私は知らない、知らない、知らない。

雪枝　まあ姉えさまお聞きなさい。貴女はもう運命に從つてゐられない人間になつて入らつしやるのよ、貴女は今運命と戰ひ出したのです。貴女はさうして自分は純白だ、自分は何にも知らないと口では言つて入らつしやるけれ共、一方では、貴女は其純白さから、今の自分をどうしたら救ひ出されるかと思つて苦しんで入らつしやるのです。貴女は兄いさまの支配の許に居なくてはならない自

分が、他の者に支配されてはならないと思つて入らつしやるのです。位置を代へて貴女が若し私だつたらどうなすつて、夫でも貴女は俊夫さんを思ふ心をそんなにも押隱さうとなさるの、貴女は今現に人の妻でなくても、俊夫さんを六爺イやや清吉と同じやうな、只單に異性であるといふ事だけに考へられて？

園子 ………。

雪枝 同じことぢやないの。「人の妻」であると「人の妹」であるとの差だけぢやありませんか。その「人の妹」には戀が出來て、「人の妻」には戀が出來ないなんて言ふ法はないのです。そんなに貴女が夫を恐れる事も恥ぢることもないのです。自然なのです。貴女が夜の目も寢ずにさうして疲れ果てゝまで苦しむ事は無いのです。ましてや貴女は人の妻として道に外れた行爲はして入らつしやりやしないぢやありませんか。なぜ貴女はもつと心を廣く、人間が美しいものを見て醉ふやうな心持で此戀を扱かふことが出來ないのでせう。貴女のやうな狹い心だと、姉えさま、貴女は死んでしまひますよ。そんな事を無理に堪へて行つて、私のやうな無味乾燥な人間が出來上つたらどうなすつて？　私はほんとに夫を恐れますわ。

園子 (感激して) どうも有難う。能く分りましたわ。私は只運命に從つてゐれば好かつたのに、つい油斷が出たのです。私はもう決して貴女の言ふ事に逆らはなくてよ。私は全く貴女のいふ通り俊夫さんの爲に心を動かしましたわ、だから私は兄いさまに濟まないと思つて、どんなに苦しんだか知れはしないのよ。けれ共ね、ちつとも兄いさまは私の心を汲んで下さらないで、どこまでも夫を俊夫さんの敵かなんぞのやうに當てつけてあの方を苦しめるでせう。私は夫を見てゐるのが辛くて、俊夫さんにも濟まない濟まないと思つてゐたのだけれど、つい歸つて下さいとは言ひ切れないで、今日までになつてしまつたの。けれ共、私も今日といふ今日俊夫さんのお心を聞いたのでさつぱりしましたわ。何もかも只私が惡かつたのですわ。やつぱり私の胸へしみをつけたのは私自身だつたのね。(考へ込む) 俊夫さんには何の罪もない、みんな私一人が勝手に考へちがひをしてゐたのですわ。

雪枝 姉えさま、貴女は夫がお惡いのよ。貴女のお心はあんまり美し過ぎるのですわ。ですから、詰らない、世間にはざら一面にある事でも何か大きな影のやうに映るのですわ。

園子 さうでせうか……つまり心が弱いのね。只平凡な人の同情でさへ私にはさも大きな人の情けのやうに感じられるのかも知れない。

雪枝 でも姉えさま、さうばかりも言はれませんわ。感じる方でも罪はあるかもしれないけれど。感じさせる方にも罪が無いとは言へませんわ。だから俊夫さんにだつて決して罪がないとは云へません。

園子 あゝもうその事は分つてますわ。折角私が其思ひから逃れようとしてゐるのに貴女は追ひかけて私を苦しませようとするの……。

雪枝 でも、これから姉えさまがお一人で――。

園子 (さみしく) いゝえ、私は一人で淋しいだけ心がまつて好いのですよ。

濱吉 奥様、どうも鷄の工合が惡いだ。一寸見に來て下せえ。

園子 あゝ行つて見ませうね。雪枝さん、もう貴女なんにも心配しないで好いから、あの方を早く立たして下さいね。

雪枝 えゝ。

園子 頼んでよ。そして貴女も近い中に東京へお歸りなさい。私はやつぱり獨の方が性に合つてゐるらしいから……

……。

(園子、濱吉と共に去る。雪枝、淋しげにぢつと考へてゐる。上手から大學の制服に着かへた俊夫が足早に出る。後から撞木杖を衝きたる豐(年よりは老けて見ゆる男。輪廓正しけれど氣むづかしげなる顔立、セルの着付縮緬の兵兒帶)之を追ふやうにして出づ。雪枝納屋の後に隱る。)

豐 君、兎も角も、其問題を極めてから立つ事にして呉れたまへ。

俊夫 しかし僕にはそんな事は出來ませんよ。そんな問題を僕達で勝手に極めてしまふ事は出來ませんよ。夫にもう僕には時間がありません。

豐 何も今になつてそんなに急がないでも好いぢやないか。もう少し位延ばしたつて好いぢやないか。

俊夫 えゝ僕もいつまでだつて置いて頂き度いのですけれど、今歸ればまだ追試驗に間に合ふかも知れませんし、身體もおかげで丈夫になつたのだから、一時も早く歸り度いのです。

豐 (人の言葉は半以上耳に入れず) そりや君の都合も都合だらうけれど、僕の淋しくなることも考へて見てくれたまへ。ぢやア長くは止めない、もう二三日。

雪枝 (この時、間に入りて) 兄いさま。貴方、二三日、二三日つてもう三度も俊夫さんを止めて入らつしやるぢやございませんか。俊夫さんにも御都合がおありでせうから、もう好い加減に歸してお上げ遊ばせよ。

豐 (不機嫌になりて) まあ貴方は默つてお出で。

雪枝　でも俊夫さんがお困りですよ。

俊夫　夫にもう荷物も出してしまつたのです、――。

豐　荷物なんぞ爺イやを取りにやればどうにでもなる。ぢやア君は僕がこんなに賴んでも止めては呉れないのだね。

俊夫　………。

豐　さうかい。では君は僕に不滿な所があるのだね。僕が下らないことを言つたのを根に持つてゐるのだね。

俊夫　そんな事はありやしませんよ。君に不滿を持つてる位なら僕は疾うに立つてゐますよ。だけれど君があんまり淋しがるから、今までにも僕は君の言ふまゝに幾度も延ばしてゐるぢやありませんか。

豐　では其事は夫れで宜いとして、今の問題はどうして呉れる。改めて雪枝の前で君の返事を聞かして貰はうぢやないか。君は雪枝と結婚して呉れるかどうか。

雪枝　（驚きて）まあ。

豐　貴女は默つてお出で。さあ、君雪枝の前でも立派に斷はるか。

俊夫　………。

雪枝　兄いさまは何をおつしやるの。私の意志も確めずに、亂暴なことをおつしやつちや困ります。

豐　貴女の意志。（冷笑して）女に意志なんかありにしない。女は長者に任して置けば好いのだ。

雪枝　私にそんな女とは違ひます。

豐　でも貴女は兼ねてから俊夫さんを好きだと言つて居たのだから、夫で好いぢやないか。

雪枝　けれ共兄いさま、好きだから良人にしても好いとは限つてゐません。

俊夫　僕は失敬します。

（俊夫足早に裏手へ入る、豐追はんとする。）

雪枝　（豐を止めて）兄いさま、待つて頂戴、貴方は何故さう自分勝手に物を極めておしまひになるの。あんな事をおつしやつて、若し俊夫さんが承知なすつたらどうなさるおつもり？

豐　こんな結構な事は無いぢやないか。

雪枝　馬鹿な事をおつしやつちや困ります。たとへ私に若し俊夫さんと結婚したいと言ふ意志があつたにしても、今のやうな貴方のなさり方では私は自分の心を變へてしまひますわ。結婚や御馳走は强ひられる程味の無くなるものですからね。

豐　（苦々しげに）今の若い者は口が達者だ。若い女と議とは無暗に喋づらない方が奥床しいものだ。

雪枝　何とでもおつしやいまし。夫れより貴方は俊夫さんを歸しておあげなさいよ。貴方は心の底で俊夫さんを歸

し度いと思ひながら、詰らぬ虚榮の爲めにあの方を止めて入らつしやるのですよ。その爲めに私も姉えさまも迷惑いたしますわ。

豐　なに、迷惑をする？　何故だ。僕は園子が俊夫を止めて置き度いと思つてゐるだらうと思ふから止めるのだ。それが何で迷惑になるのです。僕は園子を淋しがらせまいと思つて止めるのです。

雪枝　姉えさまの淋しがるのは姉えさまの勝手ですわ。其勝手を通させようとして、兄いさまが強ひて己れを苦しめてまであの方を止めるには及ばないぢやございませんか。男は男らしく遊ばせよ。そんな事よりもあの方を早く歸してしまへば、貴方も姉えさまもお心が靜かになりますわ。

豐　何故俊夫を歸へせば僕や園子の心が靜かになるのです。

雪枝　貴方のお心を騷がせるものが無くなるからです。

豐　（意地惡く）なぜ俊夫が居ては、僕や園子の心が騷ぐのです。

雪枝　（煩さげに）存じません。

豐　貴女も俊夫の不埒を認めてゐる一人だね。

雪枝　不埒なんか認めてゐません。けれ共あの方は確かに靜かな池の面に小波を立てた人です。池へ飛び込んだものは速やかに出してしまはないと池が濁つて參りますわ。

豐　己れもそれを思つてゐるのだ。だから己れは極めて靜かに極めて平凡に事を運ばうとしてゐるのに、お前の姉えさまは餘り己れを恐れ過ぎてゐる。己れが何とも思つてゐない事をまで苦勞してゐる。己れはそんなにも自分が恐ろしい者に見えるかと思ふとつい腹が立つ、情けなくなる。己れは身體が弱く心が曲けてゐる。夫を思はないで園子は只己れを恐れてゐる。己れはこんな不具な身體である爲めに愛の力を調節してゆくことが出來ないのだ。だから己れの愛は片よつてゐるかもしれない。だから己れの愛は時として憎しみとなつて表はれる事があるかも知れない。（雪枝ほゝ笑む）己れは少しも園子を疑つてはゐないのに、姉さまは只己れを恐れてゐるのだ。だから己れは貴女と俊夫とを結婚さして、永久に己れ達の側へ近づけて置きたいのだ。そして己れの心には嫉妬はないといふ事を知つて貰ひたいのだ。

雪枝　私にも兄いさまのお心は能く分つてをりますわ。けれ共、そんな事を遊ばすのは餘計姉えさまを苦しめるやうなものですわ。

豐　（聞きとがめて）何故貴女と俊夫と結婚するのが園子を苦しめる事になるのだ。夫れではやつぱり園子は俊夫

の爲めにまどはされてゐるのだね。

雪枝　兄いさまは何もかも承知して入らつしやりながらそんな事をわざとおつしやるのですね。

豐　（顏色次第に險惡になりて）さうか、やつぱりさうなのか。

雪枝　兄いさまだつて、さう思つてゐらつしやればこそ姉えさまをおいぢめになるのぢやありませんか。夫を今始めて知りでも遊ばしたやうに可笑しうございますわ。

豐　さうだらう、可笑しいだらう、間抜けに見えるだらう。だが己れは己れの力でどうしても園子を征服して見せる。

雪枝　また兄いさまはそんな見得をおつしやる。歸るといふ俊夫さんを立たして上げてしまへは夫で宜しいのぢやございませんか。貴方々はお互ひに見得坊過ぎますよ。姉えさまも兄いさまも俊夫さんもみんなさうです。

豐　さうだ。見得坊かもしれない、慘忍かもしれない。けれ共、己れは詰問して見る。

（豐立ち上る。雪枝、わざと止めずにゐる。園子裏手より馳け出づ。）

園子　あゝ貴方、此處に入らつしたのですか。とう／＼あのレグホンが死んでしまひました。あんなに大切にしてやつたのにやつぱり死んでしまひました。

豐　大切にしてやつても死ぬ者は死ぬのだ。死なゝいものでも殺す力は己れにだつてある。

（豐、撞木を倒し突然足許に遊んでゐる鶏を捕へて絞め殺す。雪枝、園子思はず手を取り合つて恐れる。豐、二人を暫し凝視したる後、家の中へ入らんとす。）

園子　（驚きすがり）何處へ入らつしやるのです。

豐　俊夫を詰問するのだ。

園子　まあ、そんな事を。どうぞお待ち遊ばして。

豐　えゝ俊夫をかばふのだな。

（豐、園子を撞木で拂ふ。園子倒れながらも縋る。）

豐　駄目だ、もう駄目だ。お前は汚れてゐるのだ。もうお前は潔白だとは言はせないぞ。離せ！

園子　いゝえ、離しません。私は貴方にそんな事を言はれる覺えはございません。雪枝さん貴女ね、私を助けると思つて俊夫さんと結婚してお呉れ。ねえ貴方、さうしたら貴方のお氣も安まり俊夫さんも喜ぶのです。俊夫さんは雪枝を思つて居るのです。

雪枝　まあ、無暗なことをおつしやつちやア困ります。

園子　いゝえ、私は知つてゐる、知つてゐる、知つてゐる。

豐　好いから離せ。

園子　私はその返事を雪枝から聞かない中は離しません。

雪枝　姉えさま、夫は貴女の思ひ違ひですよ。俊夫さんは

どんなにか姉えさまのことを思つてゐるかしれないのです。

豊　離せ。お前達は揃つて已れを侮辱するのだな。

雪枝　いゝえさうではございません。本統の事を言ひ合はうとしてゐるのです。

園子　貴方、どうぞ雪枝と俊夫さんとを結婚さして下さい。

雪枝　厭でございます。いくら姉の難儀を救ふ爲めだからと言つて、私は自分を犧牲にする譯には參りません。

豊　あゝ已れは頭が割れさうだ。何も彼もが分らなくなつて來た。離して吳れ、已れを少し靜かにさして吳れ。

（豊、二人を振り離してよろめきつゝ家の中に入る。）

園子　（倒れながら）雪枝さん。兄さんを、兄さんを止めて下さい。

雪枝　（園子を止めて）姉えさま、行かしてお上げ遊ばせよ。兄いさまに何が出來るものですか。兄さまは虛勢をはつてゐるのよ。

園子　いゝえ、いゝえ、俊夫さんに怪我でもあつては私が濟まない。

雪枝　大丈夫ですつたら姉えさま。

園子　いゝえ不可ない。不可ない。

（豊の入りし板戸より忙たゞしく婆ァや出づ。）

おたに　奥樣、旦那樣が今蒼白になつて御緣のところでお倒れ遊ばしましたよ。どうぞ直に入らして。醫者を醫者を。

園子　（おど〱して）（園子婆ァやに助けられつゝ入る。）雪枝さん、醫者を

雪枝　濱吉、濱吉。

（濱吉、鷄の死骸を下げて出る。）

雪枝　濱吉。兄いさまがね卒倒遊ばしたさうだからね、急いでお醫者を呼んで來てお吳れ。

濱吉　あれ、今靑木樣と雞の葬式しるべえと思つてゐたに、（舞臺の雞を見て）おや此處にも死んでるぞ。

雪枝　そんな事は後にしてさ、お醫者樣を呼んでおいでよ。兄いさまが倒れたのだといふのに。

濱吉　いつものこんだ。水打つかければ生返るだ。

雪枝　あらさう、いつもの事なの。

濱吉　さうだ。少し揉め事があると直ぐやるだ。

雪枝　ぢやあ藥だけでも取つて來てお吳れよ。姉えさまが心配してゐるからさ。

濱吉　奥樣ァ心配しすぎるだ。どら行つて來べえから雞の死骸犬に取られねえやうに番してゝお吳れ。

雪枝　あゝ見てゝ上げるよ。

濱吉　ちつよつくら行つてくら。

（濱吉下手へ入る。上手より六兵衞汗を拭き〱出で來る。）

六兵衞　お孃樣。青木樣どうしたゞね、もう汽車が出るちうに來なさらねえから迎ひに來たゞ。

雪枝　きつと雞小屋の方に入らつしやるだらうよ。

（六兵衞裏の方へ行かんとする時、俊夫帽子をあみだに冠り手鍬を持つて出づ。）

六兵衞　おゝ青木樣あにしてるだね、汽車が出るちうに。

俊夫　あゝ種々な事でつい遲くなつてしまつた。ついでにもう一汽車遲らせよう。今度は幾時だね。

六兵衞　この次は七時三十分でござります。

俊夫　ぢやア其積りで待つてゐて吳れ。（懷中のガマ口より金を出して渡し）これで麥酒でも飮つて待つてゝ吳れ。

六兵衞　これは有難うござります。孃樣、御禮申して下せえまし。では、次の列車までお待ち申しますだ。

俊夫　あゝさうしてお吳れ。そして若し夫にも間に合はないやうだつたら、荷物を預けて歸つて來て吳れたまへ。

六兵衞　畏まりました。孃樣、奧樣に宜しく申上げといて下せえまし。

雪枝　あゝ、御苦勞ね。

六兵衞　御免下せえまし。

（六兵衞去る。）

雪枝　俊夫さん一寸御覽遊ばせ。（俊夫を雞の側へ連れ行きて）一羽は病氣の爲めに死に、一羽は兄いさまに殺されたのです。

俊夫（や、恐怖を覺えて）えゝ殺された？

雪枝　えゝ。先刻姉えさまが、鷄の死んだ事を報せに來ましたらね、己れにも殺す力があると申しましてね、どうもないものを慘いぢやありませんか。

俊夫（雞を見て涙を流す）

雪枝　私はつくづく嫉妬の力の恐ろしい事を知りましたわ。――けれ共、兄いさまは夫でもまだ自分には嫉妬心の無いといふ證據に私達に結婚さして、永久に貴方と姉えさまとを離れないものにして置かうとなさるのね。すると姉えさまも又一方には兄いさまの前をつくらふ爲め一方には自分には自分の心を瞞す爲めに私を無理に貴方と結婚させようとするのですよ。其爲めに私たちは傀儡の人形同樣、あの人達の勝手次第に踊らせられようとしてゐるのです。

俊夫（默す）

雪枝　さうして二人はお互ひに隱し合ひ、お互ひに安め合はうとする爲めに平氣で私達を犧牲にしようとするのですわ。姉は自然に湧いて來る清水のやうな美しい戀を、無理から罪惡らしく取り扱つて大騷ぎをやるくせに、何の罪もない人間二人を自分勝手に取り扱ふ事は何とも思

はないのですわ。考へて見れば兄も氣の毒、姉も可哀さうですわね。

俊夫　（默す）

雪枝　二人は今まで知らなかつた事に打つかつて狼狽へてゐるのでせう。けれ共、その今まで靜かだつた家庭に波亂を起した源は、つまりは俊夫さん貴方ですのね――。貴方はどうなさるお積り。あの人達の爲めに犧牲になつて私と結婚しようとでも思つて入らつしやいますの。

俊夫　（冷靜になりて）　僕はもう世の中が厭になつて來ました、する事なす事に極印を打たなければならないやうな世の中が厭になつたのです。誰にも構はれない、誰にも心の引かれない何處か靜かな島のやうな處へ一人で行つて居たいやうな氣になりました。ほんとかうそとか言はないでも其儘に信じられるやうな處へ行つて、此雛のやうに默つて死んでしまふ人間になり度いと思ひますよ。

雪枝　姉えさまの事も私の事も忘れて？

俊夫　（動かされずに）　僕もおかげで今までよりももつと大きな眼が開いたのです。男が知らぬ間に造る罪の淺ましさも知りました。女が已れの弱さを隱す爲めにどんなに大童になるかといふ事も分りました。僕にはもう何の執着も無くなつてしまひました。

雪枝　（默す）

俊夫　若し僕と貴女と結婚をする事が豐さんなり園子さんなりを本統に救ふ事になるならば、貴女の所謂犧牲になることも僕は厭ひません。しかし豐さんはとても夫で救はれるとは思へません。して見ればやつぱり園子さんは永久に苦しまなくてはならないのです。して見れば二人の結婚は何の役にも立たないのですからね。ましてやもう貴女に冷めてしまつた僕は、貴女の爲めには到底好い良人となる自信がありませんよ。僕は美しく此家を去る可きです。

俊夫　あゝ私はやつぱり貴方が好きですわ。そして、其好きが一層深くなつた今日、貴方と私とは永久にお別れす可きですわね。そして、此後、一生お目にかゝらないで此心持丈を持ち續けて行き度いと思ひますわ。

雪枝　それも一時の事ですよ。お互に白髪になつてもさうした心持を持ち續けてゐられるかどうかは疑はしいものですね。僕は世の中になんにも憎むものはないけれど、只「時」といふものが憎い。總てを抹殺してしまふ「時」が憎いと思ひます。――あゝ歸りませう歸りませう。若いものはこんな田舍にゐて、ぐづ〳〵下らぬ事にこだはつてゐる可きぢやありませんね。僕は立ちます。どなたにもお目にかゝらずに行きませう。では御機嫌好う。

（俊夫は手鍬を捨てゝ行かうとする。）

雪枝　まあ俊夫さん、夫れではあんまり執着が無さ過ぎますわ。兄いさまも姉えさまも貴方が此儘お立になつたと聞いたら、どんなにか御名殘をしく思ふか知れませんわ。私だつて一生のお別れと思へば……。

俊夫　アハヽ、弱いぢやありませんか雪枝さん。お互ひに「時」に征服されないで暮しませうね。夫れがあなたの本意でせう。

雪枝　？

俊夫　あゝこれで僕も安心しましたよ、女は弱いのが好いのです、強くならうとして皆失敗するのです、貴方ももつと弱くなつて成功なさい。さやうなら。

（俊夫、雪枝と固く握手せし後、出て行く。濱吉出づ。）

雪枝　（ぢつと佇ずんでゐる）

濱吉　藥を取つて來ましたよ。

雪枝　さう？

濱吉　今奥様に上げて來た……。

雪枝　旦那様はどうして入らして。

濱吉　靜かに寢てるだ。

雪枝　奥様は。

濱吉　側に坐つてる。

雪枝　（フツと思ひついて）　夫ではね、私はあの俊夫さんがお立になると言ふから停車場まで行つて來るからね、兄いさまや姉えさまがお聞きになつたらさう言つといてお呉れ。あゝ夫れから其の雛の死骸をお片づけよ。

（雪枝急ぎ足に出る。）

濱吉　かみさんの雛が死んだでお前も交際つたゞね。一所に葬つて銀笛でも吹いてやるべえ。

（濱吉、俊夫の置いて行つた手鍬と雛とをぶら下げて去る。）

（舞臺暫く空虚。だん〳〵に夕ぐれの色迫る。遠く銀笛の音起る。おたに婆やトヽヽとといひながら上手の方より一羽の鷄を追ひて裏へ入る。）

（暫くありて上手より豐、園子に助けられながら出で、銀杏の木の下に腰かける。園子も並んでかける。無言。）

（暫くありて汽笛の音に續いて汽車の過ぐる音す。兩人思ひ〳〵の心にて之を聞く。）

豐　（汽車の音の全く聞えずなりし後）　俊夫もとう〳〵立つてしまつたのか。

（園子良人の心を計りかねて默す。）

豐　（後悔を覺ゆるもの、如く）　俊夫は心持を惡くして立つたらうな。

園子　（良人の言葉の穩やかなるに安んじて）　いゝえそん

な事はございますまい。

豐　折角永くゐて呉れたのに、出立間際に機嫌好く別れなかつたのは已れが惡かつた……。(園子に) お前にも濟まないと思つてゐる。此四五日は又馬鹿に身體の工合が惡いもんだから、大變皆々に心配をかけてしまつた。

園子　いゝえ皆私が至らなかつたからでございます。私も妹のやうに少してきぱきすると宜しいのですけれど………。

豐　いや／＼人間はもう持ち前のまゝで結構だ。已れは雪枝のやうに露骨な女は嫌ひだよ。

園子　いゝえ、あの人もあゝでは無かつたのですけれど、どうしたのか急に此頃あんなになつてしまひまして………。

豐　さうだねえ。去年位までは酷く物柔らかな娘だつたがア……。

園子　さうでございます――。

(銀笛の音やゝ近く起る。)

豐　又濱吉がやつてるな。

園子　靜かな田舍らしい音ぢやございませんか。

豐　(深くうなづいて) うむ。

(暫く間。靜な雨降り來る。)

園子　おや雨になりました。

(兩人銀杏の木の下へ身を寄す。雪枝走り出でゝ二人の側に寄る。)

園子　あゝ雪枝さん。濡れやしなかつて?

雪枝　いゝえ。其處へ來て降られたんですから好うございましたわ。兄いさまはもう宜しくて?

豐　(機嫌よく) 有難う、もう好い。俊夫はどうだつたい、機嫌よく立つたかい。

雪枝　えゝ兄いさまにも姉えさまにもくれ／＼も宜しく申上げて呉れつてお立になりましたわ。そして今度は兄いさまに東京へ入らつしやいましつて。

(雨止む。三人腰をかける。)

豐　(嬉しげに) さうかい。さう言つて立つたかい?

雪枝　えゝやつぱり都會のものは停車場に行くと急に都か戀しくなると見えて、俊夫さんも何だか嬉しさうでしたわ。そしたら、私も急に歸り度くなりましたから明日立たうと思つて爺イやに札を買ふ事を頼んで參りましたわ。

豐｝
園子｝(同時に) 明日?

雪枝　えゝ。

園子　まあ急ね。

豐　しかし……。

（豐止めようとする心で何か言はむとするのを、園子目にて止む。）

園子　それも好いでせう。母アさまも淋しがつて入らつしやるでせうから。

雪枝　（園子の樣子を目ざとく見て）あら、姉えさま、私を邪魔に遊ばすの。

園子　あら、そんな事は無いわ。

豐　いやさうかも知れないぞ。

園子　ほゝゝ。

雪枝　隨分ね……。

（爺イや手拭を冠りて裸足にて出づ。雪枝、出迎へる。）

雪枝　御苦勞樣。濡れたらう。

爺イや　なアに大した事ぢやあございましねえ。もうお月樣がお上りでごぜえます。

豐　今日は八日位かな。

爺イヤ　左樣でございます。十五夜樣ももう近うございます、では御嬢樣、札を。（懷中に持ちし札を渡す）足を洗つて參ります。御免下さい。

（爺イや裏手へ去る。）

（日暮れて月の色となる。）

豐　（立ち上りて空を見る靜かに）あゝもう秋だな。

（姉妹身を寄せて月を見る。やゝ長き間。）

（板戶より婆や出づ。）

おたに　旦那樣奧樣。御飯の御仕度が出來ました。

園子　あゝさう、直ぐ行くよ。

（おたに板戶を開けしまゝに入る。板戶の奧より灯かげ洩す。）

豐　さあ、今度は雪枝さんとお別の晚餐だ。行かう。

雪枝　えゝ。

（三人靜かに立ち上り、雪枝、園子兩方より豐を助けて奧へ入る。板戶を閉め切る。）

（月段々に明らかになる。）

（暫くありて、濱吉、銀笛を吹きながら出で、眞中に腰かけていよ〳〵吹きすさむ。）

――靜かに　幕――

（大正十四年七月廿日）

敗北者（一幕）

登場人物

A子　女流畫家
B子　同
C子　同
D子　同
E子　同
森花江　同
中井とき緒　同
先生と呼ばれる男
雜貨店の支配人
外に、店員　甲、乙、小僧

場所

某大雜貨店の一室

時代

現今

時

春

東京市内の大雜貨店の一室——女流繪畫展覽會の事務所に當てられたる溫かき感じの部屋、右手暖爐、火口の前に日本刺繡をしたるスクリーン立てあり、暖爐の上に花瓶壺、其他の裝飾品、に續きて左手展覽會場への出入口、正面の上部は廊下に面したる窓、窓かけたれあり、（後に開閉あり）その左手、此店の賣品部への出入口、左手壁、南畫の三幅對掛けあり。部屋の眞中上に立派なるシャンデリヤや其他の裝飾品宜しく、部屋の眞中に大卓、卓の上に茶器、菓子器、風呂敷包など雜然と置きある其周圍に椅子五六脚、窓際の壁に寄せて事務用の小卓、上に帳簿、インキ壺、ペン、其側にも椅子二三脚、不用の椅子の背に幾つもの肩掛コートなど掛けあり、遠く此店音樂部の管絃樂聞ゆ、幕開く。

A子、事務用の机の上でしきりに帳簿を調べてゐる。

B子、大卓の右側に掛けて、白粉紙で顏を直してゐる。

C子、同じく向う側で正面向きに掛けてサンドウキッチを食べてゐる。

D子、其側に左向きに掛けて忙しさうに編物をしてゐる。

E子、右手のスクリーンの前へ掛けて暖爐の上の花瓶をスケッチブックに寫生してゐる、何れも女學生風。

Ａ子　（誰に言ふともなしに）　あゝ嬉しい、ねえ、一寸、賣約がもう千圓弱に上つて居てよ。

Ｂ子　まあ、ほんと？

Ａ子　えゝほんとですとも、聞いて御覽なさい、中井さんの富士が二百圓、吉野さんの港が七十圓に西川さんの百合が五十圓に秋草が百五十圓、河合さんの順禮が三十圓に岡田さんの夕づゝが八十五圓……一寸食べてる人聞いてるの。

Ｃ子　（口をもぐ〳〵やりながら）　聞いてゝよ。

Ａ子　鈴さんの鮮魚が五十圓、先生の歌合せが三百五十圓、合計金九百八十五圓也よ、今日が三日目だから、後の二日間に、もう千十五圓賣れゝば、豫定通りの二千圓になるわけだわ、有難いわねえ。

Ｄ子　さう上手く行けば好いけどねえ。

Ｂ子　でも今日までにそこまで行つたのだから出來るかも知れないわね。

Ａ子　そりや出來てよ、何しろ、此會には藤原さんと言ふパトロンが付いてるんですものね。

Ｃ子　あら、藤原さんて、中井さんの富士を買つた人でせう。

Ａ子　えゝさうよ、詰り中井さんがその人を連れて來て此會のパトロンにしたのよ。

Ｂ子　さればこそ、中井さんは先生のお覺えが目出度いと言ふわけね。

Ｄ子　（Ａ子を見て）　そりやアねえ……それのみにあらずだわねえ。（意味ありげに言ふ）

Ａ子　（受けて）　さうですとも、先生にお覺えが目出度ければこそ藤原さんを連れて來て、自分の畫を買はしたり、先生のを買はしたり……。

Ｂ子　ぢやあ此會のパトロンと言ふよりは中井さんの後援者ぢやないの。

Ａ子　さう言へば、さうだけれど、中井さんのパトロンは即ち、此會のパトロンに當るのよ。

Ａ子　ぢやあ、先生は中井さんの何なの。

Ｅ子　つまり先生は中井さんの精神的のパトロンで、藤原さんは物質的のパトロンよ。

Ａ子　其處が意味深長なのよ。

（一同笑ふ。）

（Ｅ子、スケッチブックを緘ひ、默つて出てゆく。）

Ａ子　何でも好いわ、畫が賣れさへすれば此會は成功よ。

Ｂ子　でも先生にとつちや痛し痒しでせうね。

Ｃ子　そりや、さうだわね、一寸、藤原さんてのは、中井さんの從兄だつていふけど、本統かしら。

Ｂ子　何だか分るもんですか。

D子　でも、中井さんは今が得意の絶頂ね、先生にはお氣に入りだし、藤原さんといふ人はあるし。

C子　でもねえ、何れか秋に逢はで果つ可きと言ふ歌もあるぢやないの。

B子　ほんとにさうだわ、近くは森さんが好い例ぢやないの、あの人の事を考へると、全く、厭になるわ。

D子　あゝさう言へばね、何だか、森さんらしい人が、先刻會の中をうろついて居たと言ふ話よ。

A子　まさか、いくら何でもあの人、此會へは來ないでせう。

D子　でも、あの人、もう先生の處へ來なくなつてから、一、二、（と數へて）三年にもなるから如何かして、懐かしくなつて出て來ないとも限らないわ、それにどつちかと云へば、あの人お人好しですものね。

B子　さう言へばさうね、夫丈に氣の毒ね。

C子　本統だわ、一時はあの人が今の中井さんの地位にゐた人なんですものね。

A子　（まん中の卓へ出て來て掛ける）あの當時の事を考へると、私、中井さんが憎らしくなるわ。

D子　全くよ、夫に、中井さんは、初めつから金づかひは荒いし、男子部の方の氣受けも好いし、性質だつて、あんな風にてきぱきしてゐるし、あの人に比べれば、森さんは、ほんとに日蔭に咲いた花のやうに弱々しい優しい人でしたものね。

C子　あの頃の先生の繪と言つたら、どれもこれも森さん生うつしで、あの帝國美術展覽會で一等賞をおとりになつた「花の狂女」なども森さんそつくりだつたぢやないの。

D子　あの時分の森さんは陰に先生がゐるので隨分、みんなからも恐がられてゐたけれど、あの人位おとなしくて優しい人は無かつたわ、夫に、あの人、先生の愛を受けるやうになつてから、隨分幸福らしかつたわね。自分でもそりや喜んでゐたのよ。

C子　ところが、中井さんが這入つて來てから全で、手の裏を返すやうに先生の態度が違つてしまつたんですもの、悲觀するのは當然だわ。

D子　でもあの人、始めの中は、少しもそんな事氣がつかなかつたのね、だから平氣で、先生の側にゐると、森さん、今中井さんのお稽古ですよ、あなたは、あつちへ行つてらつしやいなんて言ふんでせう、私、ほんとに氣の毒で堪らなかつたわ。

A子　ほんとにさうだつたわね、でも私達は、只一圖に先生の藝術丈を尊敬してゐるのだから、そんな處を見ても、森さんには氣の毒だとは思つても、自分達に何の煩悶も

無かつたけれど、先生の藝術以外の手腕に魅せられてゐる人達は、あんな事のあるたんびに動かされたり惱まされたりしてゐたらしいわね。

B子　今だつて、みんなさうよ、今其處に、寫生をしてゐた人ね、あの人なんかもそのお仲間よ、をかしい位、先生の事となるといら／＼してるわ。

C子　ほんとに、あんな人達を見てると、をかしいやうね、繪を習ひに來るのか先生を爭ひ合ひに來るのか知れないんですものね。

D子　あんな若い人も、また、森さんや中井さんのてつを踏むのかと思ふと、馬鹿々々しくなるわ。

（この時、展覽會の出入口が開いてE子が顏を出す、一同振り返る。）

E子　あの、豫約の事で、一寸どなたか入らつして下さいつて。

A子　さう、誰か行つて頂戴。

C子　ぢや、私行くわ。そしてね、一と通り廻つて、若し森さんが居たら連れて來るわ。

A子　およしなさいよ、そうつとしてお置きなさいよ。

C子　まあ、兎に角行つて來てよ。

B子　御苦勞樣。

（E子、C子、扉の向うへ隱れる。）

A子　だけど、私達は、先生のあんな樣なところを知りながら、どうして先生を離れる事が出來ないのかしら。

B子　つまり、先生の藝術が、先生の生活以上に出てるからぢやないの。

D子　夫とも、私達も、知らず／＼先生の魅力に引つかゝつてゐるのかもしれないわね。

B子　考へると何だか厭ね。一層何かの事から先生の藝術が一旦地に落ちたら私達も思ひ切つて先生から離れられるかもしれないわね。

A子　その時ほんとに先生の力が分るのね、人格的に崇拜出來ないものなら、藝術的に卑しくなつて下さる方が助かると思ふ事があるわ。

B子　だけど、兎に角、森さん丈は、私どういふものか氣の毒で仕方がないのよ、今どうしてゐるでせうね。

A子　きつと困つてゐるでせうね。

D子　誰かが言つてたぢやないの。隨分みすぼらしい姿で歩いてたつて、そして、酷くやつれてゐたつて事よ。

A子　元々あの方樂に暮しちやゐなかつたんですものね。夫が一旦先生に救はれて又捨てられたのだから一層氣の毒なのよ。

B子　何だか流産をしたつて話ぢやないの

A子　そんな事を聞いたわ。

D子　だつて誰のお子さん？

B子　夫がね、先生のなら、まだ好いけれど、何でもさうぢや無いやうな話よ。

D子　あら厭だ、ぢや、先生のとこを出てからまた何かあつたの。

A子　夫がね先生のとこであんな事になつたので、お家では怒つてしまつて、勘當同樣になつてゐたのに、その先生のとこも出なくちやならないやうになつたので隨分困つたらしいわね。

B子　夫にあの人、氣持がやさしくて、人を疑ふなんて事がないからつい騙されてしまふらしいわね。

A子　夫といふのも、第一に先生が悪いわよ。

D子　何にしても女つてみぢめなものね。

A子　信じてゐるものに裏切られる程厭な事は無いでせうからね。

（三人暗然とする。）

（突然正面の扉が開いてC子が這入つて來る。）

C子　一寸、とう〳〵森さんを見つけて來てよ。

A子　まあ、ぢやあ、やつぱりゐたのね。

D子　そして、どんな樣子だつて？

C子　夫がね、あんまり變つてるので驚いてしまつたわ。あなた方の事聞いてたから此處にゐると言つたら、此處へ來ると言つてゐたわ。

A子　此處へ？

C子　えゝ、今化粧室で、一寸顏を直して行くつて言つてゐたわ。

B子　で、どんな風をしてるの。

C子　隨分ひどい風をしてゐたの。

D子　わたし、何だか厭だから向うへ行つてよ。

（D子、急いで部屋を出てゆく。）

B子　私も行かう。

（B子もD子の後を追ふ。）

A子　いやな人達ね。

C子　何と言つてもやつぱり中井さんや先生に遠慮するのね。

A子　兎に角、折角來るといふのだから、私は逢つて見るわ。

C子　さうなさいよ、全で前の森さんとは思へないことよ。

A子　けど、どんな風に？

C子　全で、捨鉢になつてるのね、綺麗は綺麗よ、それ丈は昔通りよ。

（正面の扉をノックする音聞ゆ。）

A子　どうぞお這入り。

（正面の扉靜かに開きて、花江顏を出す。）

A子　まあ、森さん。

花江　這入つても好くつて？

A子　どうぞ。

（花江入り來る。縮緬着なれど甚だ見すぼらしき姿、束髮。）

A子　（側へ行きて）まあよく入らしつたわねえ。

花江　あつかましくよく出かけて來たでせう。

A子　そんな事は無いわ、まあお掛けなさいな。

花江　こんな處に居るところを見られると、あなた方御迷惑なさりはしない？

A子　そんな事は無いわ。

花江　（見廻して）外の方は？

C子　あの……今面會人ですつて。

花江　あゝさう。

A子　だけれど、あなた、その後どうなすつて……

花江　どうもかうも無いわ、目茶苦茶よ、私も三年も隱れてたんですものね。今度の此會の噂を聞いて堪らなくなつて飛び出して來たのよ。

A子　會場を御覽になつて？

花江　えゝ見たわ。

A子　先生にお逢ひになりやしなかつて？

花江　逢つてよ、ひどくまごついて入らしたわ。けれど、まさか默つて見てるものを退場もさせられないでせうからね。

A子　………

花江　でも私が御挨拶したら、あゝ森さんでしたねつておつしやつてよ、森さんでしたねがをかしいぢやないの、はゝゝゝ。

（花江ヒステリカルに笑ふ。）

（A子チツト見てゐる。）

花江　御免なさい、大きな聲で笑つたりして。

A子　構やしなくてよ、夫よか、あなた、此頃何處に入らつしやるの。

花江　私？　何處だるまの縁の下よ、犬見たいな人間には相應なところもあるものよ。

C子　まあ、花江さんお掛けなさいな。

花江　ありがたう、犬が腰かけても、追ひ拂はれないこと？

A子　そんな事をいふもんぢやないわ、私達はみんな古いお友達ぢやないの、ねえ。

C子　今も皆であなたのお噂してゐたのよ。

（三人椅子を竝べて掛ける。）

花江　どうせろくな噂ぢやないでせう。

A子　否、みんなあなたを懷かしがつて居たのよ、だけどあなた、ほんとにお變りになつたわ。

花江　變つたでせう、私ね、此頃つく〴〵考へたんですよ、人間生きてる以上はね、小ひさくなつてこそ〳〵生きてゐるよりは、何かから人のびつくりするやうな惡い事でもして見たいと思ふわ。

Ａ子　まあ、どうしてそんな事をおつしやるの。

花江　だつてね、敗北者だからと言つて何もこそ〳〵打死してしまはなくても好いでせう、どうせ倒れるなら華々しくやり度いと思ふのよ、私今日此店へ始めて這入つて見たのよ、そしてブラ〳〵してゐる中に、萬引でもして見ようかしらといふ氣になつてよ。

Ｃ子　まあ。

花江　あなた方そんな事お思ひになつたことなくつて？反物や半襟のところだつて時計や指輪のところだつて、取らうと思へば、いくらでも取れさうに並んでゐるぢやないの、取れさうに並んでゐるものを取らないなんてのは馬鹿だと思つたのよ、取つては不可ないの、取るものぢやないといふのは、只、昔からの言ひ習はせで、今ぢや取れるものは取らない方が馬鹿なんぢやないか、騙すのが惡いのなんのと言つたつて、譯もなく騙せるものが目の前に轉がつて居て見りや、騙さないでゐるものが餘程馬鹿だと思へて來たのよ。

Ａ子　まあそんな事をいふのはおよしなさいよ、あなたには似合はなくてよ、あなたはやつぱし普通りおとなしい方が好いわ。

花江　でもおとなしくしてると終ひに世の中に食ひ殺されてしまひさうよ、私ね何だかこの頃恐くて〳〵仕方がないの、だから自分が惡い事でもしたら、少しは自分をはげます事が出來るかと思ふのよ、だから第一に萬引でもやらうと思ふのよ、手近ですからね、そしたら、自分は惡い奴だ、惡い奴だからひどい目に逢ふのだとあきらめる事が出來ると思ふわ。

Ｃ子　まあ、森さんあなたそんな事考へるのおよしなさいよ。

Ａ子　本統にあなた夫はつまらない事よ、……夫が詰りあなたが弱いからよ、もつと強く強くおなんなさいよ。

花江　だから私は、強く、強く、強く……

（花江興奮して突然泣き出す。）

（右手の扉から店の小僧、顔を出す。）

（Ａ子つゝと花江の前へ立つ。）

小僧　あの、今新聞社の人が來て寫眞ですつて、直ぐ來て下さい、外の方は皆揃つてますから。

Ａ子　今直き行くわ。

小僧　直ぐですよ。

Ｃ子　直ぐ行つてよ。

（小僧引きこむ。）

A子　花江さん私達直ぐ來ますからね、此處に待つてゐらしつて頂戴な、まだいろ〳〵お話しもあるから。

花江　（靜かに）でも、誰か來ると惡いわ。

C子　今寫眞だといふから、誰も來はしなくてよ。

花江　でも外の人が。

A子　ぢや此處にゐれば一寸誰か這入つて來ても見えないから好いわ。（右手のスクリーンの端を持ちて斜めに暖爐から離す）

A子　（C子に）椅子。

（C子椅子をスクリーンと暖爐の間（卽ち、見物よりは明らかに見え、登場人物には、一寸見えぬ陰）に右向に置く。）

C子　此處なら、一寸見えませんわ。

A子　直ぐ來ますから、一寸待つてらしてね。

花江　（靜かにうなづく）

（A子C子出てゆく、花江、椅子に掛けて勞れた樣にぢつとなつてゐる。）

（暫くして懷中鏡を出して顏を直す、正面の扉より、中井とき緒、靜かに忍ぶ樣に入り來る。花江心づきて身を殺してゐる。とき緒、人を恐れるやうに四邊を見廻したる後暖爐の上の壺に目をつけ、スクリーンの方へ寄り來る。そして靜かに壺を取り下したる後袂より取り出したる綠色の指輪のサックをその中へ忍ばせて元の處へ置く。此間、花江、總ての樣子を見る、同時に、窓かけの透きより店員乙一寸のぞいて隱れる。間もなく右手、正面の扉に鍵の音す、とき緒心づかず直ぐに元の口より出て行かうとして考へ直し、右手扉より出ようとする、扉の鍵のかゝりたる體、仕方なしに元の正面の扉へ行かうとする、これも鍵のしまりたる體、とき緒何かしらぬ恐ろしき豫感に打たれて立ちすくむ。）

花江　（スクリーンの陰にて）中井さん。

とき緒　（愕然として花江を見る）まあ森さん。どうしてこゝに入らしたの。

花江　昔が戀しくなつて遊びに參りましたの。

とき緒　（冷淡に）それはよくねえ。

花江　あの、あなたは寫眞をお寫しになりませんの。

とき緒　寫眞？

花江　今皆さん新聞社だとかおつしやつて寫眞をうつしに入らつしやいましたよ、きつとあなたを探して入らつしやるでせう。肝心のあなたが入らつしやらなくちや仕方がありせまんからね。

とき緒　…………

花江　私お留守番をしてをりますから、行つてゐらつしやいましな。

とき緒　ぢやあ失禮いたします。

（ときを右手の扉へゆき、ハンドルに手をかけるが以前の通り開かないので又正面へ行き扉を開けようとする時、外から開かれて此店の支配人黒木、店員甲、入り來る、とき緒入れ違ひに出て行かうとする。）

支配人　あゝ一寸お待ち下さいまし。

とき緒　（強ひて落着きを見せて）何か御用ですか、私は急ぎの用があるのです。

支配人　御尤もでございますが、只今、一寸面倒な事が起りましたので、甚だ御迷惑でございますけれど、暫く此室から出て頂くわけには參りませんので。

とき緒　まあどうしてゞございますの、此部屋には私一人だけではありませんよ、あの方も入らつしやいます。

支配人　（初めて心づきて）あの方は？　やはり會の方で。

とき緒　いゝえ。

支配人　ではあなたのお知合で。

とき緒　えゝ以前に一寸。

支配人　で、あの方は先刻からお出でゝございましたか。

とき緒　さあ、先刻は入らつしやらなかつたのですから、今しがたでせう。

支配人　今しがた、あゝさうでございますか、あの方が今しがた此部屋へお這入りになつたのですか。

とき緒　多分さうでせう。

支配人　あゝさうですか、どうも失禮いたしました。

とき緒　では私は出ても宜しいのですか。

支配人　どうも……申かねましたが、只今直き先生がお見えになりますから、夫までのところどうぞ。

とき緒　先生が入らつしやるのですつて？

支配人　先生がお見えになりさへすれば、もう、あなた樣はみんなお顏も存じてをりますのですから。

（支配人一寸店員に目配して花江の方へ行く、店員出入口の扉へ立つ、とき緒勞れたやうに手近の椅子に腰を下す。）

支配人　（うさん臭げに花江の姿を見ながら）失禮でございますがあなたは只今此處へお出でになりましたので。

花江　（平然と）いゝえ、先刻參りました。

支配人　此會に何か御關係の方で。

花江　いゝえ。

支配人　ではどなたかに御面會で。

花江　えゝ。

支配人　どなたをお尋ねなさいますので。

花江　どうしてそんな事を私にお聞きになりますの、あな

たはどなたですの。
支配人　あゝ、どうも失禮いたしました。私は當店の支配人ですが實は、只今指輪をお求めになりまして、代金をお拂ひ忘れになりました方がこの部屋へお這入りになりましたので。
花江　夫が私だとおつしやるの。
支配人　否、確といふ事は分りませんのですけれど、もしも……
（この時、右手の扉をノックする音聞ゆ、支配人、店員甲に目配せする、店員甲、右手へ行き扉を開ける、先生と言はれる男、店員乙に導かれて入り來る。）
先生　（つか〳〵とき緒の側へ行く）とき緒さんあなた心得違ひをしたのぢやあるまいね。
とき緒　（ぼんやりと）え？
先生　あなたは寶石部のところから、指輪を持つて來たと云ふぢやないか、さうならさうと云つて下さい、私が拂ひますから……。
支配人　（つか〳〵と寄つて來て）あの、先生、それは店員が見違へたのではないかと存じます。實はあの方もこの部屋に入らつしやるので。
（先生花江を見る、店員乙、支配人の袖を引き、花江ではないと云ふ意を示す。）
先生　あ、花江さん、あなたですか、代を拂はずに指輪を持つて來たといふのは。
花江　（冷たく）私も一つぺんそんな事がして見度いと思ひます。
先生　あなたは、そんな事をしても、平氣だといふのですね。
花江　もし私がしましたら、先生お拂ひ下さいますか。
先生　馬鹿な事をおつしやい。
花江　でもあなたは、今、とき緒さんに拂つてやるとおつしやつたぢやありませんか。
先生　とき緒さんなら、拂つても好い義務が私にあるのです、けれ共あなたの爲めに何で私が拂ふのです。
花江　でも先生がお拂ひになれば罪人が出ないわけではありませんか、ねえ支配人さんお代さへ拂へば好いのでせう。
支配人　それは無論でございます、店では、罪人を出すのは望みではありませんから。
花江　夫なら、先生、お拂ひになつた方が好うございますわ。夫とも先生は、もし夫が私だつたら私を罪人にしようとあ思ひになりますの。
先生　仕方がありません。
花江　指輪を持つて來た事を見屆けた方はどなたですの。

店員乙　私です。
花江　夫で、その本人が私だとおつしやるの。
店員乙　私の見ましたのは……
先生　（乙に）兎も角も證明は見たといふあなたより外に無いのだが、もし夫が此中井さんで、本人が指輪を持つてるのでしたら、私がお支拂ひはいたします。私は此中井さんがそんな淺ましい罪を犯す人とは思はれませんし、又そんな必要が此方にあらう筈がありませんから。
店員乙　然し……
先生　然し、森さんは、さつき自分でもあゝいふ風に言つてお居でゝすから。殘念ですが、その筋の方に調べて頂くより仕方がありません。とき緒さん、あなた、指輪を持つて御出でゝすか。
とき緒　どうぞ何處でも、お調べ下さいまし。
支配人　然しあの、お支拂ひさへ下されば結構なのですから、成可くは穩便にして頂き度いので。
（店員乙、支配人に小さきハンカチを出して渡し何かさゝやく。）
支配人　あの此ハンケチはどなたのですかしら、角に、Nの字が縫つてあります。
（とき緒はつとした樣に顏をそむく。）
花江　（手早く夫をとつて）これは私のよ。
支配人　然しそれの落主が指輪をお持ちになつた方になりますか。
花江　えゝ構ひません。
店員乙　でも、私は……あちらのお方のお持ちになるのを見ましたので。
花江　駄目よ、あなたがいくらさう言つたつて、もし、あの方なら拂ふ方があるのだし、私だつたら無いのだから、そんな事は證據にも何にもなりはしないわ。私は強ひられて罪人になるよりいさぎよく自分で名のつて出ますわ。夫が敗北者の運命ですものね、夫に、あの方は品物は持つてないとおつしやるのだし、私はちやんと持つてゐるのですから。
（とき緒思はず花江を見る。店員達も顏を見合せる。）
（花江立つて、以前とき緒が隱した壺の中からサックを出す。）
花江　ね、驚いたでせう、どうぞ私を連れて行つて下さい。
支配人　然し。
先生　遠慮には及ばない、連れてつてよく調べ給へよ。
支配人　然し私共の趣旨は、……
先生　兎に角、僕は、この人の爲めに、支拂ひをしなければならない義理はないのだ。君達にしても品物さへ出れば好いと言ふらしい事では店の秩序が立つまい。

支配人　然し其處は……。

先生　第一、僕は、この人が此部屋に居ると言ふのからして氣に入らないのだ。一體誰が僕に斷つて此處へ入れたのだ。

花江　否、先生、夫は私が無斷で這入つて參りましたんです。ですから、出て行くのをお斷りには及ばないでせう。御挨拶もいたしますまい、さ、支配人さん私を何處へでもお連れ下さい。

支配人　では兎に角、私の部屋まで。

花江　何處へなりと。

（支配人丁寧に花江を導びく、他の店員も默々とついてゆく。先生と、とき緒と默つて見送る。カーテンの外から、以前のＢ子Ａ子Ｃ子見てゐる。遠く閉店を報せるベルの音にて。）

――幕――

者北敗

野上彌生子篇

縛られた者（對話）

兄　巨人プラミシユース
弟　巨人エピミシユース
女　パンドラ
愛の神　キユーピツト

兄と弟

兄　エピミシユース、お前はヂユピターが我々兄弟に贈るため、何か珍らしいものを拵へてゐると云ふ噂について、聞き込んだことはないか？

弟　委しくは知りませんが、サターたちがよくそんなことを云つてゐます。

兄　どんなことを？

弟　なんでもそれは「女」と云ふ新しい人間だと云ふことです。

兄　新しい人間と云ふと、我々の造つた人間とは違つた種類の生物ででもあるのか？

弟　さうだらうと思ひます。さうして非常に美しいものだと云ふ評判です。モデルはヴィーナスださうですから。僕には幾分その新しい被造物の想像もつくと思ひますね。僕等の造つた人間に似て、もつと優しい、もつと美しいもの、神々よりは女神に近いものと云ふのではないでせうか？

兄　さうかも知れない。

弟　兄さんはどうお考へになります？　若し本統にヂユピターがそれを僕等に呉れるのなら、僕は樂しみですね。白狀すると僕は兄さんと二人きりでは淋しくなる時があります。いらいらしたり、またその反動で陰鬱になつたりします。僕は兄さんを愛し、尊敬してをります。兄さんと一緒に人間たちのために働くのを悦んでをります。それでゐてこの感情の變化をどうすることも出來ないのです。雨で狩獵に出られなかつたり、仕事が旨く行かなかつたり、下等なサターたちの惡ふざけに惱まされたりした後は、屹度この發作が起ります。斯んな時にさう云ふ美しい話相手があつて、面白い話をしたり、一緒に優しい歌をうたつたり、踊つたり、同じ食卓でものを食べたりしたら非常に愉快だらうと思ひます。

兄　併しね、弟、美しいものが常に必ず愉快を齎らすとは限らないよ。且つおれはヴィーナスがモデルだと云ふのが氣に喰はぬ。この頃のオリンパスの神々の生活に對し

て、おれは激しい反感を持つてゐるが、中でもあの女神なぞは一番たまらない型なのだからな。美しい姿だけを寫したのだと云へばそれまでだが。――併しそんなことより、ヂュピターがこの際何の必要があつて「女」なぞと云ふ新しい生物をわざ／＼造つて我々に贈つて來るか？　と云ふことがおれには問題なのだ。彼の純粹な厚意からだとは受取れない。決してさうではない。寧ろこれには乾度何か惡い意味が附隨してゐるに相違ないと信ずる。さうは思はないか？

弟　と云ふと？

兄　ヂュピターは我々が以前程彼に信頼してないことを知つてゐる。可哀相な人間たちの味方になつて、彼の專横に對抗してゐることを知つてゐる。若しおれにヂュピターの大事な祕密を握つてゐると云ふ強味がなかつたら、我々兄弟は疾くに彼に殺されてゐたかも知れない。併し彼はその祕密を聞き出すまでは殺し度くも殺されない。それで表面平氣な顏をして我々にお愛想を云つたり機嫌を取つたりしながら、蔭では我々の邪魔ばかりしてゐるのだ。おれをお前に反かせ、お前をおれに裏切らせようとしてゐる。その離間を利用して祕密を嗅ぎつけようとしてゐる。今度の贈物に關してだつて、おれにはそれ以外の意味は認められないのだ。――惡くすると彼はおれの計畫を感づいてゐるのではないかと思ふ。

弟　さあ。――兎に角、そのために僕等があゝ云ふ二輪車まで作つてゐるとは夢にも知らないでせう。

兄　おれはそれが出來上るのが待ち遠しい！　出來上りさへすれば、おれは直ぐにおれの冒險を決行するのだ。――人間たちのために甘んじて盜人になる。「天の火」を盜み出してやる。ヂュピターが人間をおれに造らしておきながら、大切な一つの賜物を拒むのは卑怯だとおれは信ずる。「火」を持たないでは人間は何をすることも出來ない。たゞ造られた儘の動く人形で、永久に發達することも出來なければ、進歩することも出來ない。況しておれの望んでゐるやうな立派な「文明」を將來この世界に築き上げさせることは思ひも寄らない。製作者の責任として、おれは度々ヂュピターとそれに就いて爭つた。氣の毒な人間たちのために熱心に歎願した。それを彼は肯かないのだ。おれは終に最後の決心をした。よし、呉れなければ取つてやるまでだと。

弟　ヂュピターは怖ち氣づいたのだと思ひますよ。人間が彼の豫期以上に出來過ぎたのです。彼等は實際元氣で、すばしつこくて、飲み込みが早いのですから。あれで神神同樣にすべての能力を傳授して仕舞つたら、最後にはどんな眞似をしでかすかも知れない、とヂュピターはそ

れで濟つてゐるに相違ありません。タイフォーンやプライアリュースの例もありますからね。

兄　彼奴等は暴力以外は何んにも持たない野蠻人だから駄目だ。ヂュピターに反抗するたつて、高が山の二つも積み重ねてオリンパスに這ひ上らうとした位が落ぢやないか。併しおれの造つた人間は彼奴等とは本質的に違つた物だと云ふことを、ヂュピターは先づ知る必要がある。人間には智慧がある。造られた儘では滿足しきれない向上心と、輝やかしい未來に對する憧憬の心を持つてゐる。正しい生活の欲望に燃えてゐる。假令ヂュピターに反抗しなければならぬ場合が生じたとしても、決してあの運中のしたやうな馬鹿げた眞似をする筈はない。おれはヂュピターが將來彼等を味方にするかしないかは、これからのやり方一つで極まることだと思ふ。それは彼等を自由に發達させることだ。出來得る限りの進步を遂げさせることだ。何故ならば、おれは、ヂュピターの新しい奴隷を造つたのではなく、彼の子供、彼の兄弟、彼の弟子、彼の友人、彼の助力者、彼の批判者として人間を造つたのだから。さうだとも！　奴隷が要るなら今までのサターやサイクロプスで澤山だからな。――人間を正當に發達させることは、ヂュピター彼自身を發達させることだ。オリンパスの榮光を增し、彼の王國の富と文明を輝やかせることだ。彼は決してこのことを忘れてはならない。然るにあの驕慢な暴君にはおれの云ふことが分らない。すでに束縛と威壓がはじまつてゐる。やつと出來上つたばかりの瑞々しい人間が、彼の暴虐の下に早くも萎縮しようとしてゐる。彼は一つの火をさへ與へることを拒んでゐるのだ。エピミシュース、お前はおれの怒りを不當と思ふか？

弟　決して！　僕は兄さんの正しい精神があらゆる不合理を傍觀出來ないことを知つてゐます。またその美しい義憤があればこそ、人間たちはます／＼兄さんに悅服するのです。兄さんのやうな方に造られ育てられる彼等は幸福です。

兄　いや、彼等はまだ幸福には遠い。今の儘なら造られない方がいつそ增しな位だ。この狀態を變へ得るものは只「火」のみしかない。「火」は闇を明るくすると同じく、彼等の現在の生活に光明を投げる。それに依つて彼等の智慧は今の千倍にも運用されるだらう。先づ地の底に隱れてゐる金と銀と鐵と銅が掘り出される。煮て煉り堅められた金屬は、彼等の現在の武器を鋼鐵に變へ、美しい黃金で飾るだらう。鋭くなつた鏃と槍は一層夥しい獲物を彼等に與へるやうになる。鹿でも、猪でも、もう生肉ではない。彼等は新しく作つた大鍋で味よく煮たり、長い

鐵串で香ばしく燒いたりするだらう。夜も晝のやうに明るくなつた部屋の中で樂しい饗宴を開く事を知るだらう。斯うして彼等は初めて穴の中の獸や木の枝の鳥と違つた生活を學ぶのだ。それが彼等の新たな智慧の始まりだ。彼等の目は本統に目を覺ます。手も足も本統の働をし始める。心臟の鼓動が變はる。一切の發達、一切の躍進がその日を境界として起るのだ。おれは屹度それをさせないでは置かぬ。おれの使命だ！ そのためにはチュピターと雖も容赦はしない。悦んで爭ふ。素直に渡さないから奪ふのだ。「火」が要るから「火」を奪ふのだ。それが假令彼の怖ろしい武器の雷電であるとしても、後へは引かぬ積りだ。よしそのためにどんな嚴罰を受けようとも、そんなことで屈しはしない。愛する人間たちのために受ける苦痛なら悦んで受けてやる。――エピミシュース、この大事な時機に際して、チュピターからの贈物を警戒なしに貰へると思ふか？

弟　仰しやる通りです。併し一方から考へれば、僕等が理由なしに彼の贈物を拒絕するのも、却つて疑惑を招きはしないでせうか？ 僕は貰ふだけは平氣で貰つた方がよいかと思ひます。チュピターを油斷さす方便としても、それが得策でせう。

兄　お前は欲しいのだな。

弟　兄さん――

兄　辯解しなくともよい。お前の目はお前の望みを白狀してゐる。

弟　僕はたゞ「女」と云ふものがどんな物だか見度いだけです。知り度いだけなのです。

兄　――

弟　皆んな打ち明けませう。その贈物の話を初めてサター達に聞いた時、僕の心は慄へました。實際それは今までにない不思議な經驗でした。その日から僕の前には非常に待ち遠しい樂しみなものが生じたのです。女、女、女――どんな物だ？ どんな物だ？ ――僕は寐ても覺めてもそのことのみを思ひ續けました。それが完全に仕上げられて僕等のところへ贈り屆けられる瞬間を想像すると、ぢつとしてゐられなくなりました。

兄　それで分つた。この間からお前の顏は不思議な輝やきに包まれてゐた。お前の身體は步く時も躍つてゐた。お前の歌ふ聲は悅びの叫びであり、唸きであり、何物かを待ち悶える呼びかけであつた。お前の矢は的を外づしてばかりゐた。

弟　自分で自分が制しきれなかつたのです。

兄　では、エピミシュース、その事はお前の自由に任せよう。おれは何事に限らず人から强ひられることが嫌ひだ

から、人にも强ひることはしない。

弟　誤解しないで下さい、兄さん。僕はたゞ正直に自分の心持を告白しただけで、必ずさうしなければならないと云ふ譯ではありません。兄さんが何處までも拒絶する積りなら、僕もそれに從ひます。

兄　いや、それではお前の感情に無理が出來る。乾度自然でないものが生じてお前を苦しめるに相違ない。それは避けなければならぬ。エピミシュース、お前は遠慮なく欲しいものは貰つた方がよい。見度いものは見た方がよい。知り度いものは知つた方がよい。それから超越するには先づさうするより外に道はない。

弟　それでは僕等がチュピターの贈物を受取る ことを兄さんは承知なさるのですね？

兄　さうだ。而してそれはお前のものだ。

弟　僕のもの！　――僕一人の？

兄　一つの弓を二人で射ることは出來ない。――おれはそんな贈物には何等の好奇心もなければ、好奇心を持つ時間もない。おれは頭も胸も常に仕事のことで一杯なのだ。

弟　兄さんにさう云はれると僕は恥かしくなる。

兄　いや、お前はまだ若いのだから、おれと何もかも同じ行動をしろと云ふのはむづかしいことだ。――併しね、エピミシュース、その「女」なるものがどれほど愉快なものであるにしても、決して警戒を解いてはならないよ。夢中になつてはならないよ。我々に惡意を持つたチュピターの贈物だと云ふことを一刻も忘れてはならないよ。おれの此の忠告は忘れないでくれるだらうな？

弟　大丈夫です！　僕はそれを自分のものにして、一と通りどう云ふものだと云ふことが分つたら、直ぐ興味はなくなると思ひます。

兄　或はさうかも知れない。それから今一つ約束して貰ひ度い。――我々の冒險をば、贈物の「女」が來たその日の夕方決行することにしよう。異存はないだらうね？

弟　よろしいですとも！

兄　それで安心した。たゞその「女」なるものが、まだ見もしない前から何故お前をそれ程引きつけてゐるかと思ふと、おれは氣がゝりになる。決して尋常一樣の贈物ではないと云ふ怖れに打たれる。お前がおれに反對してまで何かを持たうとしたことは、曾つてないことだからな。

弟　さう云はれると僕も少し氣味惡くなります。怖い氣もします。それだけ併し強い好奇心となつて僕を引きつけるのです。

兄　たゞ腑脱けになるなよ！　それだけが肝腎だ。摑むならしつかりと急所を摑め。さうすれば蛇だつて嚙みつきはしない。

弟　僕を信じて下さい！

兄　よし、その話はそれですんだ。今度はたゞ冒険さへ成功すればよいのだ。どうにかして旨くやり度いものだ。

弟　兄さんの計畫したことで成功しなかつたことはこれまで一つだつてないぢやありませんか。

兄　それはお前がゐておれを助けてくれたからだ。「人間」を造つた時だつて半分はお前の力だつた。おれがどんなにお前を頼みにしてゐるか分つてゐるか？

弟　僕の手足は兄さんの手足です。いつでも呼んで下さい。何でも命じて下さい。それが僕の名譽だと信じて下さい。

兄　分つた。二人で協力してうんとやるぞ！

弟　やります！　やります！

兄　屹度成功して見せる。おれの子供たち、待つてゐろ！「燃ゆる火」は頓てお前たちのものだ。あの天上の輝きが地上に降るのだ。お前たちの家の竈が一軒々々ヴァルカンの工場の熔鐵爐のやうにまつ赤になる日が來るのだ。

弟　と　女

弟　パンドラ、もつと傍へ來い。おれの膝の上に抱かれてくれ。而してお前をもつとよく見せてくれ。お前の噂を初めて聞いた日以來、何百遍お前の姿を想像したか知れない。併し今となつて見ると結局なんにも想像しなかつたと同じだ。お前はおれの想像力を超絶してゐた。モデルのヴィーナスだつておれはお前より美しいとは思はない。何んと云ふ可愛らしい顔をしてゐるのだ！　何んと云ふ優しい姿をしてゐるのだ！　――お前の髪毛に顔を埋めると、金色の靄に包まれたやうに目が眩む。お前の熱い息はおれを窒息させさうだ。さあ、もつと強く抱きしめさしてくれ。抱擁でおれのしびれた神經をはつきりさしてくれ。お前の額、お前の頰、お前の口、お前の顎お前の咽喉、お前の頸、またおれの肩に絡みついたお前のふくよかな白い腕が、決して夢でも幻でもない實在のものだと云ふ事を、この燃ゆる唇でたしかめさしてくれ。

女　おゝ、私のエピミシュース、可愛い私のエピミシュース！

弟　おれのパンドラ、パンドラ、パンドラ、パンドラ！――何んと云ふ可愛い名前だ！　何んと云ふ幸福だ！何んと云ふ樂しさだ！　――パンドラ、着物を取つて了へ。ミューズ達が丹精を凝らした織物だつて、お前の薔薇色の皮膚より美しい筈はない。裸かになれ。月が雲を拂つて完全な光輝と輪廓を現はすやうに、お前の全身を輝やかせ。おれは何物にも汚されない造られたまゝのお前の本體が見度い。その忌々しい蔽ひの下に隠された肉

の色がどんなに匂やかに美しいか、四肢五體を限る線の流れがどんなにしなやかに優しいか、場所に依つて高まり、場所に依つて窪む肉置の縺れが、どんなに珍らしい陰影を隈取るか、おれに見せてくれ。この手に觸らしてくれ。――おゝ、何んと云ふ形だらう！　――何んと云ふ均齊だらう！　――何んと云ふ調和だらう！　――お前の全身は白く燃ゆる焔の柱だ。――香ばしい肉の殿堂だ。不思議な夢の塔だ。――オリンパスの廣間の圓天井だつて、お前の肩ほど圓くはない。サモスの島を繞る波の白い泡だつて、お前の胸ほど白くはない。ヘスペリディースの園の葡萄の房だつて、お前の乳房ほど豐かではない。またその乳房の左右から辷り落ちて、腰の上部で深くつぼまり、其處から再び新たにふくらみ出て、一雙の美しい弧を描きながら、自然とふくよかな二つの腿の間に流れ込む曲線のうねりと、その交錯の美妙な陰影を、おれは何に譬へたらよいのだらう。ミナーヴァの左手に輝いてゐる黄金の楯だつて、これほど見事な圓味はない。これほど誇りがな豐滿さはない。またお前の兩脚が優美なしなやかさと共にまつ直ぐな力強い直線で造られてゐることは、貴重な肉盤の支柱として最善の設計だ。でなければお前は大きな白い鳥となつて空に飛んで行くかも知れない。或はまた八月の夕方の虹のやうに、突然消えてなくなるかも知れない。その位お前は美し過ぎる。――何處へやるものか！そんなことは考へられもしない。お前はおれのものだ。永久におれのものだ。斯うしてしつかりとお前を抱いてゐる時ほど、眞實におれのものを抱いてゐると云ふ氣のすることはこれまで何物にも感じなかつた。――パンドラ、おれの此の心持が分るかい？

女　それが自然なのよ。だつて、私は初めからあなたのものとして造られて、他の誰のものでもないのですもの。

弟　それは本統か、パンドラ？

女　何故そんなことを心配なさるの？

弟　お前はオリンパスでおれの兄のことを何か聞きはしなかつたか？

女　いゝえ、そんな方があるつて事さへ知りませんわ。ヂュピターが私に話してくれたのは、たゞあなたのことばかりですもの。あなたがどんなに若くて、どんなに美しくて、どんなに優しいかと云ふことばかりよ。

弟　ヂュピターは矢張りおれを愛してくれてゐるのだ。

女　それから、私はヂュピターがあなたの花嫁として造つた最初の女だから、この結婚が無事にすむことは何より滿足だと申しましたの。

弟　それは何のことだ？「花嫁」？「結婚」？――おれには分らない。

女　私だつて分りはしないわ。でもあなたのところへ來させへすれば、自分に分る事だと申しました。そしてそれを祝つてやると云つて、ヂュピターからも、他の神たちや女神たちからも、色んなものを貰ひましたわ。

弟　みんな話してくれ、その時の樣子を。それから貰つたものを、何もかも。

女　ヂュピターは大層上機嫌で、さあ、おれが一番に「産む力」をやる。それでお前は最初の女であると共に最初の母親になるのだと云ひました。するとヂューノーは、では私はお前の夫が他の女に心を移さぬやうに妻の權威をやらうと云ひました。ミナーヴァは智慧をくれました。ヴィーナスは美をくれました。ダイアナは貞操をくれました。アポローとマーキュリとマーズは音樂の才能と、家事を執つてのはしつこさと、事に臨んでの勇氣をくれました。おしまひにヴァルカンは、それならおれは贈物を皆んな纏めてしまつて置ける物をやらうと云つて一つの箱をくれました。

弟　それだな、お前が大事に持つて來た箱は？

女　えゝ。でもね、箱は神樣の贈物だけでは、まだ隙間がありすぎてがた〳〵して困りましたの。――一番おしまひの、一番大切なものが入るまでは。

弟　それは何だ？

女　あなたの愛よ。

弟　おゝ、可愛いパンドラ！それでお前の箱は一杯かい？

女　えゝ、えゝ、きつちり一杯よ。

（その時表の戸が叩く音がする。）

聲　エピミシュース！――エピミシュース！約束の時だ。出て出い！

弟　おゝ、おれは忘れてゐた。お前の美しい身體の中にすべてを忘れてゐた。

女　あの聲は誰？誰が呼んでゐるの？

弟　パンドラ、ぢつとしておゐで。起きてはいけない。

聲　エピミシュース、どうした？おれの聲が聞こえないのか？

女　あら、あんなに叩いて！何か云つてゐるやうだけれどもよく分らないわ。――行つて開けてあげませうか？

弟　いけない、いけない！――開けてはいけない。――おゝ、それを思ふとおれは不安に襲はれる。おれの怖れてゐたことが早くも現はれたのではないか。――エピミシュース、しつかりしろ！お前の使命を思へ。おれとの約束を思ひ出せ。

聲　お前の若い眠りがおれの聲のとゞかぬほど深いとしても、此の叩く音に目覺めない筈はない。――何故戸を開けないのだ？何がお前を躊躇さしてゐるのだ？――

弟　おゝ、おれを確かり抱いてゐてくれ、パンドラ！　おれがわれを忘れて飛び出さないやうに、お前の腕で寢床に縛りつけておいてくれ、若しおれのこの手が、表の聲に誘はれて、ちよつとでも戶口の鍵に觸れたが最後、おれはヂュピターの謀叛人にならなければならぬのだ。―今まではおれは勇んでそれをなし得ると信じてゐた。―併しその決心はお前を見た瞬間に消滅した。お前ほどの美しいもの、お前ほどの價値あるものを造り得たヂュピターの榮光よ、永遠であれ！　――おれは決して彼に反抗することは出來ない。却つて彼の創造力の絕大と無限を讃美しないではゐられない。お前を抱くことに依つておれの心は謙虛を感じ、恥と怖が身を戰かす。殊にお前が他の誰のためでもなく、たゞおれだけの物として造られたのが事實とすれば、おれはヂュピターの特別の恩に感謝しないではゐられないのだ。

女　チュピターがどんなにあなたを愛してゐるかつてことは、誰よりも私が一番知つてゐますわ。――まあ、あの戶は破れはしなくつて？　あんなに叩いて！　また何か云つてゝよ。――私よく聞いて見るわ。

弟　おれから離れてはいけないよ、パンドラ！　――あの怖ろしい聲がおれの鼓膜を脅かさないやうに、お前の髮毛でおれの耳を塞いでゐてくれ。

聲　エピミシュース、アポローの二輪車は既に西の空に沒し去つた。後には「明星」の幽かな瞬きがあるのみで、天は今が一番ひつそりした空虛な時だ。ぐづ／＼してゐるうちにダイアナが星の處女軍を引き連れて現はれる。ヂュピターの饗宴からネクターに醉ひしれた神々の車が歸つて來る。さうなると幾ら注意しても我々は直ぐ見つけられてしまふ。天の道は眞直ぐで隱れ場がない上に、星の娘たちは鋭い目を持つてゐるから。それを考へると、斯うしてお前を呼びかけてゐる間も氣が急くのだ。エピミシュース、お前の正しい意識を呼び覺ませ！　理性に絡みついてゐる毒蛇を振り落せ。この冒險のために我々が今日までどんなに苦心して來たかを思ひ出して見よ。我々は乘物からして新しく造つた。どの神の二輪車よりも强い、ヂュピターの雷電にさへ挫かれない自信を以つて造つた。またそれを曳かせるためには森の王なる六頭の黑い豹を選んだ。あの手に負へない獸たちを、今のやうにおとなしく轅に添はせるまでの怖ろしい訓練を忘れたか？　我々は朝早くから夕方握つた手綱の見えなくなるまで、彼等を荒野に引きずり廻した。屈服させるか食ひ裂かれるかの試みを每日續けた。やつとすべての用意が終つた。時は來た！　二輪車は二つの大きな輪を飛ばうとする時の鳥の翼のやうに立てゝ我々の乘り込むのを

待つてゐる。六頭の豹は馴れきつた足並みで今にも駈け出さうと身構へてゐる。彼等の吼り聲と足踏みの音がお前の耳にも聞こえぬ筈はない。待ち遠しがつて怒つてゐるのだ。今あの毛深い背中に一と鞭當てれば、彼等はペガサスよりももつと早く飛び去るだらう。――おゝ、夕暮の銀色の雲は我々に道案内をしようとして長い旗を靡かしてゐる。エピミシュース、お前はこの豹の二輪車に打ち乘つて、渺茫たる大空の灝氣の道を、あの雲の旗に圍まれて天駈ける愉快を思はないのか？　且つその勇ましい冒險は、慰みでも遊戲でもなく、我々の造つた人間の完成のために、製作者としての我々が必ず決行しなければならない神聖な遠征だと云ふことを思はないのか？　若しお前が本統に人間を愛することを知つてゐるなら、おれをこれ以上待たせる筈はない。

弟　さうだ！　おれは矢張り行かなければならない。――パンドラ、お前の腕を離してくれ。お前の蠟のやうな厚い髮毛も、あの聲をおれの耳から防ぐことは出來ぬ。おれはたとひヂュピターの謀叛人と呼ばれ、愛に報いるに讎を以つてする忘恩者と卑められても、あの聲に反くことは出來ない。それがおれの悲しい義務だ。

女　あら、どうなさるの？　起きて何處へ行つておしまひになるの？　――ヂュピターの謀叛人だの忘恩者だのつて、聞くだけでも氣がゝりなのに、あなたが行つて了つて私はどうなると思つて？　あなたの頼りないパンドラを忘れないで下さい。私はあなたのために造られたので、あなたなしには生きて行く當てのないものだと云ふことを考へて下さい。まだ半日と御一緒にはゐないのですもの。それでもう別れて仕舞ふのでせうか？　いゝえ、いいえ、そんな筈はないわ！　ねえ、どうぞお願ひです、何處へも行かないで下さい。あなたのパンドラをひとり殘さないで下さい。

弟　おゝ、可愛いパンドラ、泣かないでくれ。お前の涙はおれを氣狂ひにする。

女　約束して頂戴、何處へも行かないつて。――いつまでも二人で斯うしてゐるつて。

弟　それが出來さへしたら――

聲　エピミシュース、西の方が再びうす赤く輝き出したのは、兄に代つて夜の天を警固するダイアナの出現の近いことを示すのだ。さあ、もう一刻も猶豫は出來ない。――出て來い！　その戸を打ち破つて飛び出せ！　お前の平生の勇氣と誠實が、何物にも損はれてゐないことを見せてくれ。この冒險に於て、おれがどれ程お前の助力を必要としてゐるかを少しでも思ひ出してくれたら、決しておれを失望させる筈はない。

弟　おゝ、どうすればよいのだ！　おれはおれのすべき事が分らなくなつた。

女　あんな、誰とも知れない人の聲なぞに、あなたが迷はされるからいけないのよ。あの人が何處へ何をしに行かうと、一人で勝手にさせて置けばよいわ。私たちの係り合つたことぢやないのですもの。私たちは私たちだけで十分樂しく此處で暮らして行けますわ。ねえ、さうでせう？　私たちの生活はこれから始まるのよ。本當に幸福な、樂しみの多い一日一日が、――私たちは二人を一緒にして下すつたヂュピターに感謝しながら、仲よくこの生活を守つて行きさへすれば、それで他のことは何んにも考へる必要はないわ。あなたは毎朝早くから狩獵にいらつしやる。さうして獣たちを追つて勇ましく野山を駈け廻つてゐる間、私は家で絲を紡いだり、機を織つたりしますわ。私がどんなに美しく帛を織れるか、あなたはまだ御存じないのね。仕事に飽きれば私は花摘みに行きますわ。向うの野原まで行くと、綺麗な花が澤山咲いてゐますもの。私は摘めるだけ籠一杯摘んで來てよ。而してみんな私たちの寢床に撒いて置きますわ。夕方あなたが狩獵から歸つていらした時、私たちの寢床が美しい花片と匂ひで包まれてゐるやうにね。

弟　それはおれが夢見てゐた通りの生活だ。――その儘の實現だ。――何んと云ふ美しさだらう！　何んと云ふ樂しさだらう！

聲　エピミシュース、もうこれ以上は待てないぞ！　これがおれの最後の呼びかけだと思へ。――おれとの約束を破つたお前、あの可哀相な人間を愛することを忘れたお前、卑怯な裏切り者、屹度今日の日を後悔する日が來るぞ。苦しい悔恨がお前の髓を挫く日を覺悟しろ。――併しおれはお前を憎みはしない。この破約と裏切が決してお前の本來の意志でないことは分つてゐるから。原因はデュピターの贈物だ。すべての惡と背德が彼女と共に來たのだ。おれはそれを豫感してゐた。お前に與へられたおれの警告は、どうかしてそれを避けさせ度いためであつた。併し今はこれ以上立入つてお前の反省を促す時間がない。さあ、お別れだ。左樣なら！　――毒された憐むべきエピミシュース、氣をつけろ！　お前に背德と裏切を教へた女から心を離すな！　人に教へたことは彼女自身からも實行するに相違ない。而かも師匠は弟子よりも巧妙にしてのけるぞ！

女　何か私の惡口を云つてるのね？

弟　おつ――二輪車が動き出した！　――豹の群の咆哮に交つて勇ましい轟きが聞こえる。――高く、高く、天をさして駈けて行く――許して下さい、許して下さい！

この裏切者を許して下さい！

人間の群の祈禱

天地の造り主にして、神と人間との王なるゼウスよ！

宇宙に於ける唯一の支配者よ！

どうぞあなたの尊い耳を、哀れなプラミシュースのためにする私共の哀願に暫くお借し下さい。

今や天の禁斷の火を盗んだ咎に依つて、コーカサスの嶮しい岩に繋がれた彼、重い鎖に身體を捲かれ、鋭い鋲に手足を釘付けられ、あなたから送られた禿鷲のために日夜その肝臓を食ひ裂かれてゐる彼を思ふ時、私共の身體は同じ苦痛に打ちひしがれ、心は同じ嘆き、同じ怖れに戰くのを感じます。

チュピターよ、私共はあなたの絶對を信じます。あなたの名に於てなされること、すべては眞理であり、犯し得ない律法であることを思ひ、如何なる場合に於ても服從と奉仕を怠らないものであることを誓ひます。併しながらチュピターよ、私共は同時にあなたの寛大なお心を信じます。あなたの無邊際の愛は、どんな厚かましい訴へをも斥けはなさらぬことを知る故に、今プラミシュースのためにしようとする私共の例外な辯解をもどうかお許し下さるやうに願ひます。――プラミシュースがあなたの掟を犯してまで燃ゆる火を盗んだのは、あなたを蔑ろにしたのでもなければ、故意にあなたの權能を攪亂しようとしたのでもありません。彼の罪はたゞ彼があなたの命令を奉じて造つたもの――私共人間を餘り多く愛し過ぎたに外ならないのでございます。待てばあなたが悦んで下されたものを、待ちきれなくて掴んだだけでございます。

チュピターよ。どうかその一つのことをお心に留めて下さい。且つ彼が今日まで盡して來た數々の忠誠は、あなたの怒を和げるに役立たぬ筈はございません。あなたが造り上げたばかりの天と地に、良き形と良き生物を排置した彼の智慧、木には枝を、草には花を、鳥には翼を、獸には牙を、蟲には蟲らしい小さい脚を、それ〳〵に考案した細かい注意、また反對に巨人軍との戰に於ては、誰よりも大膽で花々しかつたその功績、殊にその時には彼は自分の一族を敵にして戰つたのでございます。最後にあなたの命令を奉じて私共人間を製作するまで、一つとして彼自身のためになされたものはなく、すべての仕事が悉くあなたに捧げた義務であり、あなたのために働くのを悦ぶ慎ましい奉仕に外ならなかつたのでございます。チュピターよ、この名譽ある功勞者が、ほんの僅かな性急から惹き起した過失のために、鎖に身を縛られ、鋲に血を流し、怖ろしい鳥のついばみに打ち任されてゐることが、彼の受くべき正當な報

いでありませうか？　且つ如何なる殘酷な刑罰も、死ぬ身にはプルトーの領へ下るまでの苦痛として忍ばれませう。たゞ不死に生れたプラミシュースこそは、今の苛責が永久の苛責であり、嘆きも悶えも盡くる時なく打ち纏はる運命を思ひやつて下さい。

おゝ、チュピターよ！　偉き主よ！

あなたとても、これ程無慘な目に彼を逢はせる積りはなかつたに極まつてをります。どうぞあなたの怒を憐みに變へて下さい。今一度彼を自由にして、鎖も鋲もなくなつたその手足が、今後もあなたのために立派な仕事をなし得るやうにして下さい。彼の聲が今の痛ましい呻きの代りに、平生の晴々した響に返つて、今一度私共に呼びかけて來るのを聞かせて下さい。

弟　と　女

女　人間たちがまたお祈りをしてゐますわ。あの人たちはあれでもチュピターを憚つて思ふだけの十分一も口に出してはゐないのね。でもあの眞劍な様子を見ただけで、あの人たちがどんなにプラミシュースを崇拜してゐるかよく分りますわ。皆んなの眞心が溢れてゐてよ。ぢつと聞いてゐると引き込まれて一緒に祈り度くなるのですもの。チュピターの禁斷の「火」を盜むなんて、想像されもしない怖ろしい罪が、不思議と美しい、何か偉大な仕事のやうに感じられて來ますわ。考へて見ると、本統にえらいことをしたものですわね。

弟　さうだ。それだけは確かだ。――おれはプラミシュースとは意見が違つてゐる。チュピターに對しては絶對の服從と信頼を捧げることが、我々に取つても、あの人間たちに取つても必要だと云ふ信仰を持つてはゐるが、と云つてプラミシュースの偉大が分らなくはない。實際彼は彼でなければ出來ないことをしたのだ。何處までもプラミシュースらしいことをやつてのけたのだ。

女　さう云へば、あなたはプラミシュースのことをまだ一度も話して下さらなかつたのね。――彼があなたとどう云ふ關係でどうなつたと云ふことを。――この話になるとあなたはいつも避けようとなさるのを、私に氣がつかないと思つて？

弟　――

女　エピミシュース、あの晩――チュピターから私が初めてあなたのところへ贈られた晩、裏の戸をあんなに激しく叩いたのは、あれは誰でしたの？

弟　パンドラ、お前の想像してるだらう通りあれはプラミシュースだつた。――おれの兄だつた。

女　お兄さんですつて――プラミシュースが？　――あなたの？　――まあ！　――それでみんな分りましたわ。プラミシュースのことが問題になる度に、あなたが切なさうになすつた譯が。――また今日までどう考へても腑に落ちなかつたあの晩の不思議な訪問者のことが。

弟　さうだ。あの時は兄がおれを誘ひに來たのだ。我々はあの冒險を一緒に企てた。おれはプラミシュースと共に豹の二輪車を驅つて、「天の火」を盗みに行く約束をした。おれはその仕事を名譽だと思つた。人類の幸福と將來の發達のために必要な冒險だと信じてゐた。おゝ――その信仰を一變させたのはお前だ！

女　堪忍して頂戴、エピミシュース！　私はあの時は何にも知らなかつたのですもの。チュピターに反抗すると云ふことが、たゞもう怖ろしくてたまらなかつたのですわ。そしてあなたにお別れするのが辛かつたのですわ。――でも今の私はもうあの時ほど幼稚でもなければ臆病でもありません。あなた方の企がどんなに美しい動機から生じたか、チュピターがどんなに我儘か、判斷することが出來ます。プラミシュースの勇ましい冒險の價値が分ります。本統に、誰が聞いたつて胸の躍るやうな英雄らしい仕事ですもの。――あの人間たちの群があんなに氣狂ひのやうにプラミシュースを崇拜してゐるのも決して無理ではありませんわ。――あの人たちはあゝやつてコーカサスのお山まで巡禮に行くのですつて。あのお山が新しくプラミシュースの聖壇になるのね。デルファイやドドーナにはこれから誰もお詣りするものはなくなりますね。――エピミシュース、あなたは私を憎んでやしなくて？

弟　飛んでもない！　何だつてそんな氣紛れを云ひ出したのだ！

女　岩に鎖で縛られ、禿鷹に肝臟をむしられる刑罰が幾ら怖ろしいにしても、プラミシュースが今受けてゐるやうな崇拜や名譽が、男の心を動かさぬ筈はありませんもの。

弟　パンドラ、それならお前はおれを知らなかつたのだ。おれはお前のために變へられた信仰を決して後悔してはゐない。チュピターの權威を尊びながら、お前と愛し合つて生きて行く。――現在のおれにはこれが最も自然な正しい生き方だと信じてゐる。以前のおれは餘りに兄に卽き過ぎてゐた。兄の思想がおれの思想であり、兄の生活がおれの生活であつた。それがお前に依つて、初めておれ自身のもの、おれ自身の道、おれ自身の世界が生じたのだ。これはおれに取つては如何なる名譽や崇拜にも代へられない大事な進歩だ。それにどうしてそんな下らないことで兄と競爭する氣なぞ起すものか！　單に崇拜

の點ならば、おれの方が彼等以上に兄を崇拜してゐるんだから。今度の冒險は別としても、兄は實際どれ程崇拜されてもよいだけの價値を持つてゐるのだ。

女　そんなに偉い方なの？

弟　チュピターは例外だが、そのほかのすべての神々とタイタン族と人間を通じて、プラミシュースほどの者をおれはまだ見たことがない。

女　みんな話して頂戴。あなたに似てゐらつしやるの？

弟　おれよりはもつと大きい。

女　ぢや、もつと强いのね？

弟　もつともつと强い、而してもつと激しい。

女　上手に射て？

弟　兄の矢はおれよりも五寸がた長い。

女　二輪車は？

弟　他に誰なら六頭の豹を御せるものか？

女　それで醜くはないの？

弟　美しさならアポローにも負けない。

女　そんな人つて、あられるものか知ら？　――私そのお兄さんを見度いわ！

弟　おれの一番苦しいのは、それ程のプラミシュースが、彼に取つては名譽の刑罰であるとは云へ、奴隷のやうに鎖で捲かれ、手足を血にして岩に繫がれてゐるのを知つてゐながら、おれの力でどうすることも出來ないと云ふことだ。殊にそのおれは何んと云つても彼から見れば裏切者だ。彼が戸を叩いた時、おれは逃げ隱れた。彼と一緒に行つて同じやうに岩に繫がれ、血を流し、禿鷹に肝臟を裂かれてあるべき筈を、お前と此處で平和に暮らしてゐる。――眞晝の山の日光が、鎖の喰ひ込んだ彼の裸身を焦がす時、おれは涼しい木蔭でお前の白い身體を樂しみながら水浴をしてゐる。山の夜の豪雨と嵐が彼の傷ついた手足を打ち叩く時、おれは安らかな寢床でお前の傍に眠つてゐる。――パンドラ、これを思ふとおれは堪へられない。いや、いや、もつと怖ろしい日が頓て來る。山の木の葉が落ち盡して、雪と氷がそれに代はる日が來る。我々の寢床が幾枚もの毛皮で暖められる時に、兄はすかも知れない。霜は彼の髮毛を氷柱にし、雪は彼の身體を埋め盡吹雪の寒風に曝されながら尙ほ岩に繫がれなければならない。おゝ、それでもまだ彼の刑罰は終らないのだ。一千億度の霜氷を迎へても、決してその鎖の絕たれる日は來ないのだ。

女　いゝえ、いゝえ。エピミシュース、あなたは知らないのよ。プラミシュースさへその氣になれば、あの鎖は今でも絕たれるのですつて。

弟　どうして、パンドラ、そんなことがあり得る筈はな

いー

女　でも、あの人間たちは皆んなさう云つてゐますわ、ヂュピターはその條件として、プラミシュースから何か大事な祕密を聞き出さうとしてゐるのですつて。

弟　それならあの祕密のことだ。ヂュピターの王位に關する重大な豫言で、この世界ではたゞプラミシュースのみ知つてゐると信じられてゐるものだ。

女　乾度それなのよ。ヂュピターはそれを聞かしてくれさへすれば今直ぐにも鎖を解いてやるつて、何度もマーキュリを使にやつたけれども、プラミシュースが承知しないのだつて云ひましたわ。――エピミシュース、あなたが勸めにいらして見たら？

弟　おれに――このおれに行つて兄に逢へと云ふのか？――彼が誘ひに來た時には、あれほど卑怯な遁げ方をして置きながら、今無力な囚人になつてゐるからと云つて、平氣に訪ねて行けると思ふのか？　おれは假令裏切者でもまだそれ程恥知らずにはなれない。

女　あら、さうお思ひになるからいけないのよ。みんなお兄さんのためだと云ふ風に考へなければ。――若し、プラミシュースが何處までもヂュピターに祕密を明かすまいとするなら、せめてあなただけにまで話してお貰ひなさいな。而してあなたがプラミシュースの代りにヂュピターにそれを敎へて、お兄さんの赦免を願へばよいわ。さうすれば、プラミシュースは何んにも自尊心を傷つけないで、大威張であの鎖の岩から下りられるのだし、人間たちだつてどれ程悅ぶか知れないわ。

弟　いや、いや、それは不可能だ。兄は決して祕密を洩らしはしない。若し洩らしたとしても、おれがそれをヂュピターに賣つたことを知るなら、どれ程怒るか知れない。そんな卑怯な手段で救される位なら、彼は一層強い鎖で一層險しい岩に繫がれよう、と公言するだらう。兄はさう云ふ氣性なのだ。

女　でも結局それでプラミシュースが放たれさへすれば、皆んなは大悅びをするのでせう。お兄さんを怒らすことが救ふことになり、逆ふことが守ることになるのですわ。

弟　これ程彼を愛してゐるおれが、彼の一番厭がることをしなければならないのか？　――一つの裏切りにさへあれほど苦しんだおれが、今一度彼に背くのか？

女　今一度プラミシュースを自由にするために。――今一度プラミシュースの智慧と勇氣を役立たせるために。

弟　今一度――今一度――今のおれには何より辛い言葉だ。それで唯一の希望の潛む言葉だ。

女　エピミシュース、その言葉を本統の悅びに變へることの出來るのはあなた一人ですわ。

弟　おゝ——クロソーよ、ラキシスよ、アトロポスよ。お前たちは餘りに無慈悲な運命を負はせてくれた。でもおれはお前たちを恨みはしない。これがおれの當然の分け前なら從順に忍んで行かう。それよりもおれがお前たちに訴へ度いのは兄の身の上だ。どうぞ彼の運命を今以上に悲慘にはしてくれるな。おれが彼のためになさうとしてゐる苦しい努力にお前たちの手を借してくれ。おれはお前たちの嚴かな力の價値を知つてゐる。お前たちの承認なしでは、假令チュピターと雖、プラミシュースの鎖の一つさへ解き得ないことを知つてゐる。その點ではお前たちは神以上の神、支配者以上の支配者だ。プラミシュースの運命を紡ぐ時、お前たちの神聖な絲に氣をつけてくれ。特別の愛と同情を忘れないでくれ。現在の不幸な黑い絲枠を、今一度明るい絲に捲き代へてくれ。解放の喜びで赤く染めてくれ。自由の黃金の色で塗つてくれ。

—兄　と　弟

兄　やつと朝になる。オーロラは太陽の二輪車を通すために、彼女の紅い門を東の空に開けはじめた。心の優しいあの女神は、每朝おれの淺間しい姿を見る度に氣の毒がつて泣いてくれる。おれはこの繫がれてゐる岩の肌や、頭の上の木の葉や、足下の野原の草に明らかに彼女の涙を見る。けれども彼女は同情の言葉もかけなければ、慰めも云つてはくれない。何故だ？　——チュピターが怖ろしいのだ。今少しするとアポローの二輪車がおれの傍に近づいて來る。彼の車の明るい輝はおれの殘酷な刑罰の光景を、いやでも彼の目の前に照らし出さないでは置かない。この太い鐵の鎖がどんなにおれの骨身を縛つてゐるか！　鋭い鋲がどんなにむごたらしい血を手足に流さしてゐるか！　——彼はオリンパスの廣間でたまに出逢つた時によくしたやうに碧い大きな目を瞠つてぢつとおれを凝視する。一瞬間、痛ましいと云ふ表情が彼の美しい額を暗くする。が、それつきりだ。彼は默つて、手綱を引き締めて、急いで車をやつてしまふ。何故だ？　——チュピターが怖ろしいのだ。オーロラにしろ、アポローにしろ、又その他の神々にしろ、おれの冒險が決して私意に基いたものでないことを知つてゐる。またおれの受けつゝある刑罰が受くべき以上に過重である事を知つてゐる。併しながらそれに對して誰一人おれを辯護し、チュピターの不法な横暴を正さうとする者はない。彼等は正義を說いて怒を買ふよりも、傍觀と阿諛で一身の安易を貪るに急なのだ。——いや、馬鹿々々しい！　あんな連中の同情や助力を夢想するほど、おれもたはけ者ではなかつた積りだが。この頃は餘程どうかしてゐる

わい！　この皮膚に喰ひ入つてゐる鐵の輪が、おれの魂まで囚人根性にしようとしてゐるのではないか？——おゝ、おれの強い精神よ、堅い意志よ、不撓の氣魄よ、おれを見捨てるな！　不滅に生れついたおれの身體には最後と云ふものがないのだから、お前たちとの結合も永遠無窮でなければならない。お前たちの城をしつかり守れ！　屈從や、怯懦や、さもしい妥協が忍び込む隙間のないやうに見張つてをれ！——世界が皆んなやつと目を覺ましかけたな。空の雲は一齊に輝く日で瞬き出し、大地は夜の蔽ひ物をはねのけた。狹霧の床の中から次々に起き出して來た小山よ、森よ、野よ、河よ、お早う！　また誰よりも一番に驅け出して來て、山の上からおれに飛びついて來る早起きの朝風よ、お早う！　皆んな何んと云ふ可愛らしさだ！　何んと云ふ上機嫌だ！　一日のよい營みが、今日もお前たちすべての上にあれ。——ヂュピターが初めて世界を造つた時、彼に力を借してお前たちの立つところ、擴がるところ、流れるところを工夫したのはおれだ。おれは最善を惜みはしなかつた。併しあの排置が斯うまで調和し、お前たちがこれ程まで美しく成長しようとは想像しなかつた。お前たちを見、お前たちと共に暮らすことは、今のおれには唯一の救ひだ。ヂュピターはおれを人間から隔離させるためにわざと遠い刑場を選んだ。彼は飢と寒の痛み以外に、尙ほ孤獨と遠流の悲しみをおれに味はせようとしてゐる。氣の毒だが彼の企ては失敗だ。お前たちと在る間、おれは決して淋しくはない。愛し得るものは樂しみ得るのだから。——でもお前たちとしては、チュピターの協力者であつたおれが、急に彼の囚人としてお前たちの前に繋がれてゐることは、非常な驚であるに相違ない。併し沈默の中にすべてを理解するお前たちは、何がおれを斯んな淺間しい姿にしたか、この急激な運命の轉落がおれの受くべき正しい報酬かどうか、分つてくれる筈だから、おれは安心してゐる。恥ぢも怖れもしない。お前たちも嘆かないでよい。決して醜い悲しみや騒ぎをしてはくれまいぞ。それよりはお前たちに適當な役目がある。おれの證人になつて貰ひたいことだ。この刑罰をおれがどんなに男らしく引き受けてゐるか、毎日の激しい苦痛をどんなに強く堪へ忍んでゐるか、おれの口が呻き聲の外に一言でも弱い音を吐いたか、苦しい叫び聲の代りにさもしい憐みでも求めたか、それさへ見てゐてくれればおれは満足だ。——さあ、頂上の岩に巣くつてゐる禿鷹奴が、目を覺まして舞ひ下りない内に、今一度お前たちの晴れやかな眺望でおれの目を慰ましてくれ、すがすがしい朝の大氣でおれの心を勇氣づけてくれ。——おゝ！——やつて來

るな。あの物凄い羽撃きの音はどうだ！　巣を舞ひ立つのだ。彼奴等はおれの胸の肝で、生血に濡れた暖い朝飯をするのを悦んでゐるのだ。さあ來い。皆んな群らがつて來い。貴様たちの貪婪な嘴が終日むしり盡したつて、おれの肝臟は減りも痩せもせぬ。一夜に完全な形と肉を取り戻すのだから遠慮は要らない。總がかりで飛びつけ。爪を打ち立てろ。齒の根に覺えがなくなるほど、存分に食つて見ろ。――おゝ！　――禿鷹の忌はしい叫びに交つて、聞き覺えのある懷しい聲がおれを呼んでゐる。――いや、そんな筈はない。斯んなところまで囚人のおれを訪ねて來る氣紛れ者があらうとは思はれない。

弟　プラミシュース――プラミシュース！

兄　おゝ――あの聲は？　――誰だ？

弟　私です。兄さん！　エピミシュースです。

兄　エピミシュースだと？　――おれはそんな者は知らない。――そんな者がおれのところへ來る筈はない。

弟　どうぞさう云はないで下さい、兄さん。來られる筈のない私が恥ぢを忍んであなたの前に來たのは、よく／＼來なければならない用事があるのだと思つて下さい。――それにしても何と云ふ變り果てたあなたの姿でせう！　あの額に渦卷いてゐた金色の卷毛は！　――美しさと健かさで輝いてゐたあの立派な身體は！　敏捷その物であつたあの手足は！　岩の裂目の茨よ、お前の刺の引き纏らしてゐる髮毛がどんな賢い頭を飾つてゐたかお前は知つてゐるか？　無情な鎖よ、お前がパイソンのやうに絡みついてゐる囚人が、誰であるかを思はないのか？　銳い鋲よ。お前が岩に釘づけてゐる手足が、今日までどんな偉大な仕事をして來た手足だかを考へようとはしないのか？　假令チュピターの命令であるとは云へ、お前たちに少しでも尊いものを知る明があつたならば、自分たちの冒瀆に慄へ上る筈だ。――あつ――禿鷹の群が胸に舞ひ下りた。まるで黑雲の一團だ。あの羽撃き！　――あの叫び聲！　――彼等は肉食の飽滿で氣狂ひになつたと見える。血の滴る嘴を爭つて臟腑に打ち込むあの有樣はどうだ！　引き裂かれる肉片のあの散亂はどうだ！　――それを自分の目で見たものでなくして、どうしてプラミシュースの刑罰の苦痛を知る事が出來よう！　兄さん、あなたならばこそよくも忍んでゐられるのです。家から思ひやつた事や、道々想像して來た事は、暢氣な暇潰しに過ぎなかつた。

兄　お前の用事から聞かう。

弟　私は二つのお願を持つて來ました。――一つは恥づべき裏切にも拘はらず、私の變らない愛と尊敬を兄さんに認めて頂きたいのです。今一つは私の身の上にさしかゝ

つてゐる、怖ろしい破滅から私を救つて頂き度いのです。これがどんなに我儘なお願であるかは知つてをります。けれども兄さんの寛大な心は、この裏切者をも決して見殺しになさらないと信じます。どうぞ許して下さい。而して私を救つてやると仰しやつて下さい。

兄　話をはつきりしてくれ。

弟　問題はヂュピターの王位の祕密として知られてゐる、あの豫言に關することです。――ヂュピターはあなたから聞かれなかつたことを私に話させようとしてゐるのです。

兄　何だと？

弟　同じタイタン族の兄弟と生れた中でも、取り分け一心同體の親しさで生きて來た以上、プラミシュースの知つてゐる祕密を、弟の私が知らない筈はないと云ふのです。何んと辯解してもヂュピターは信じません。あなたから拒絶された彼の怒は今みんな私の上に落ちてゐます。兄さん、彼の威嚇を想像して下さい。私は彼の追求から遁れる道はありません。と云つて、私がその祕密を知る道理のないことは、あなたが誰よりもよく御存じの筈です。

兄　それでおれに祕密を話させようと云ふのだな？

弟　私を助けて下さい。あなたの無力な弟を憐んで下さい。――今になつてヂュピターに祕密を洩らすと思へば、あなたの自尊心が忍びきれないことは分ります。けれども私に話して下さる分にはさし支へないではありませんか。私はそれを最初から知つてゐたものとしてヂュピターに告げませう。でなければ腹立ち紛れに私はどんな目に逢はされるか知れないのです。

兄　ふん、旨く巧らんだな。ヂュピターのもくろみさうな仕事だ。いや、いや、ヂュピターの性格を最もよく飲み込んだもののやりさうな細工だ。――だがまあよい。エピミシュース、ヂュピターの祕密がお前に取つてそれほど必要なら話してやるのは何んでもないよ。

弟　えつ、聞かして下さいますか？――兄さん、有り難う！

兄　一般にはその豫言はヂュピターの結婚と王位との重大な關係を說いたものだと信じられてゐるが、本統の祕密はさうではない。

弟　――續けて下さい。皆んな話して下さい！

兄　今後十三の世紀を重ねないうちに、ヂュピターは必ず彼の王座から追はれる運命を有つてゐる。而かも彼を滅ぼすものは神でも巨人でもない人間の末裔で、東方の國に住む貧しい大工の息子だと云ふのだ。

弟　何んと云ふ豫言だ！　信じられない冒瀆の言葉だ。

兄　信じる信じないは別として、お前はそれをヂュピター

に傳へてやりさへすれば救はれるのだらう、お前の云ふ通りだとすれば。

弟　さうでした。私はそれだけでよいのでした。――併し私は自分自身を救ふと共に、兄さんをもこの儘にしては置きません。兄さん、どうぞ私の最後のお願を拒まないで下さい。この祕密を洩らす條件として、あなたの鎖を絶ち切ることを私にチュピターと約束させて下さい。あなたがチュピターに降るのでもなければ、和睦を求めるのでもありません。すべては私とチュピターの交渉ですむのです。私が私の手であなたを償ふのです。弟が兄を救ふだけなのです。あなたはたゞ時の來た時平氣でこの岩から下りて下さればよいのです。

兄　狡猾い奴は一番大事な用事を一番後で云ひ出す。――エピミシュース、お前はその相談がし度いばかりにおれのところへ來たのだらう？　而して出鱈目を云つておれから祕密を聞かうとした。それを賭物にしておれの鎖を解かうとしてゐる。――何を驚くのだ。そんな事位おれに分らないと思つてゐるのか？　併し心配しないでよい。おれは怒つてはゐないから。お前の嘘は却つてお前の深い友愛を證明するものとして禮を云ふよ。

弟　兄さんにさういはれると僕は何んと云つてよいか分からない。あなたを瞞せるものだと思つた自分が恥かしくなります。あなたの寛大過ぎるのが苦しい。――それよりは何故いつそ私の不正を責めては下さらないのです？　怒つても罵られても、その方が僕には樂です。

兄　失つた一人の弟が今一度おれに歸つた悦の中で、何を責めたり怒つたりすることがあらう？　エピミシュース、お前の先の裏切から得た絶望や悲しみは、これで完全におれから去つたと思つてくれ。

弟　おゝ、私はたゞその裏切が償ひたかつたのです。その裏切のために自由に動いてゐる自分の手足が私を惱ませました。私はあなたの手足と同じやうにそれを岩に縛られる機會を無くした代りに、あなたの鎖をも必ず絶たうと決心したのです。私は白狀します。あなたの想像通り私の云つたことは皆んな嘘です。チュピターが威嚇したの、怒つたのと、そんなことは途方もないことです。それであなたを釣らうとしたに過ぎません。チュピターの祕密が聞きたいばかりに、あなたを僞はつたのです。

兄　併しエピミシュース、お前はおれから聞き出した祕密を、實際チュピターに洩らす勇氣があるかい？

弟　その豫言にどれ程不敬な意味があるにしろ、私はたゞ傳へる者に過ぎないのですから、何も恐れることはありません。チュピターにしろ、豫言の言葉に對する怒りを直ちに私に移すほど偏狹ではない筈です。

兄　おれはそんな積りで聞いたのではない。エピミシュース、お前は自分のしようとしてゐることの正しい結果を考へて見たことはないのか？　假りにヂュピターがお前の取引に乘つておれを許し、おれがまたそれを受け容れてこの岩から下りるとして、後はどうなると思ふ？　冒險を企てなかつた前と同樣に我々二人が仲よくやつて行けると信じてゐるか？

弟　兄さんはそれを疑ふのですね。どうしてでせう？　私は私の裏切、私の虛僞、その他私の過つた過去の一切を許して下さると云ふ兄さんの言葉に希望をかけます。それで何故元のやうに暮らして行けないと仰しやるのですか？

兄　お前自身が既に元のエピミシュースではないから。——おれの弟であるよりはパンドラの夫であるから。——今一つの理由は、假令ヂュピターにこの鎖を絶たれたとしても、おれは永久に彼と仲直りは出來ないからだ。——彼の不正と暴虐が止まない限り、おれはいつまでも彼の敵だ。爭ふべきことは爭ひ、責むべきは責め、取るべきものは取る。「火」の冒險よりもつと怖ろしい冒險を企てないとも限らない。お前はその時おれのためにヂュピターを捨て得ると思ふか？　彼の忠實な信者となり切つてゐる現在のお前が？

弟　兄さん、私はあなたとヂュピターとの今後の關係をそれ程悲觀してはをりません。寧ろこの忌むべき事件はあなた方を前よりも強く結びつける機緣になるだらうと信じます。ヂュピターの仕事にとつて、殊に人間たちの支配に於て、あなたの力がどれだけ必要かと云ふことは、この際誰よりもよくヂュピターにわかつた筈ですから。あなたが囚はれた後の人間たちの狀態は、ヂュピターを手こずらしてゐます。彼等は自分たちのために得たあなたの罪を悲しんで、赦免の祈禱で氣狂ひのやうになつてゐるのです。誰一人仕事をする者もありません。野に出て働く者もなければ、畑に種子を下す者もなく、山へ狩りに行く者もありません。ヂュピターの羊を追うてゐた羊飼たちまで、羊を捨てて巡禮の群に入る始末です。この儘にしておけば人間の國の破滅は勿論、オリンパスの富まで失はれるのは目に見えてゐます。ヂュピターは威嚴の上から決して弱つた風は示さなくも、あなたと仲直りし度い意志は十分にあるのですから、今後は決してあなたの獻策を輕んじたり、要求を斥けたりする筈はありません。その點はどうぞ暫く私に任せて下さい。ヂュピターに從ふことがあなたに從ふことになり、あなたを愛することがヂュピターの崇拜に悖らないやうになる日を、私は屹度來させて見ます。可哀相な人間たちを今一

度幸福にするためにも、是非その日を作り出さなければならないのです。

兄　お前は詩人だ。併し詩の夢が實現するものではない。おれはヂュピターが本質的に暴君であることを知つてゐる。自分で權勢を握るためには、親をさへ平氣に追ひ出した男ではないか。幾ら困つたと云つても、どうしておれに讓歩するものか？　それ位ならあんな人間たちなんぞは皆んな滅ぼし盡しても構はないと云ふだらう。最初おれは彼奴を買ひ被つた、狂暴を勇氣と誤り、專横を英斷と解し、狡猾を智慧と考へた。巨人軍から攻撃されて、彼が牡牛の姿にまでなつてイシオピヤを逃げ廻つた時には、妙な俠氣から今一度彼を救ひ出してやり度くなつた。おれは同族とさへ戰つて彼を勝たしてやつた。それ以來の惡緣が我々を繋いでゐる。たゞそれだけだ。それ以上の交渉がこの後二人の間に起らうとは信じられない。いや、ヂュピターはその羈絆さへ今ではうるさくなつたのかも知れはい。成り上り者に取つては、昔の恩人は兎角目障りなものだ。彼のあらゆる陰謀は其處に原因を發してゐる。おれを孤立させ、手も足も出ないやうにして追つ拂はなければ安心されないのだ。丁度彼が父親のクロノスを王位から追つ拂つた傳で。——あんな魅力のある贈物を工夫したのも、それでお前を誘惑しておれに裏切らせたのも、みんなその爲だ。エピミシュース、この次はお前の順番だ。

弟　幾ら何んでも、それは兄さんの邪推がひど過ぎます。ヂュピターがさうまで我々を憎む筈は決してありません。この頃の彼を見ればよくわかります。兄さんの處刑以來彼は非常た氣が折れて來たのです。

兄　すつかり目を眩まされてゐるな。まあ、さう思ひたければそれにして置くさ。併しタイタン族では我々二人のみがたゞ僅かに殘されてるるのだと云ふことは忘れないね？　兄弟のアトラスは重い荷物で身動きもならぬ位置に立たされてゐる以上、ヂュピターに取つては居ないも同然なのだから、問題はたゞ我々二人だ。我々さへ片付けてしまへば、ヂュピターの煙たい不死體の者はもう一人もこの地上には存在しなくなる。タイタン族の完全な滅亡が來るのだ。ヂュピターがそれを望まないとお前は思ふのか？　——愛する弟よ、氣をつけろ！　おれの鎖を解かうとあせつてゐるお前自身が、いつか何處かの沙漠の底へでも生埋めにされない用心をしろ。ヂュピターは巧妙にそれを實行するに相違ない。——おれの忠告を今一度繰り返す。曲者はあの女だ。パンドラに氣を許してはならないぞ！

弟　兄さん、外のことは何んでもあなたの言葉に從ひます。

たゞ、パンドラのことだけはどうぞさう仰しやらないで下さい。自分を愛する者の悪口を、殊にあなたの口から聞くことが、私にどんなに辛いか想像して下さい。パンドラは決してあなたの考へてゐるやうな女ではありません。あなたは何んにも御存じないのです。彼女の美しい心は美しい姿に劣つてはをりません。パンドラはあの晩私を引き留めたことを今では後悔してゐます。智慧は彼女に正しい批判を敎へたのです。而してどんなにあなたの冒険に感動してゐるか、またどんなにあなたの今日までの功績を讃美してゐるかを知つたなら、あなたは決してあの女を傷けるやうなことは仰しやらないでせう。

兄　そんな筈はない。――チュピターに造られた者がおれの肩を持つ筈はない。

弟　私は辯解する代りにお願ひします。あなたが自由な身體になつたらばどうぞ一番にパンドラに逢つてやつて下さい。私の新しい家庭生活を見て下さい。而してあなたの傷ついた手足を私たちの柔らかい毛皮で休めて下さい。あの女がどう云ふ女であるかは、その時初めてあなたに分かりませう。パンドラの美しさと優しさは、私を樂しませてゐると同じやうに、あなたをも樂しませませう。あの從順を裏付けてゐる鋭い機智、愼ましさと共にあつてそれを損はない快活は、いつも私を笑はす通りにあなたをも笑はせませう。それにパンドラは料理が非常に巧いのです。私が狩獵から持つて歸つた獲物で、あの女はあなたの舌を悦ばせるやうなどんなおいしい御馳走でも拵へませう。パンドラの酒はまた獨得です。バッカス自身が絞つても、あれ程見事な風味はありますまい。實際その時の私たちの食事を想ふと、今から考へただけでも愉快です。兄さん、あなたは私のこれ程の嘆願を斥けはしないでせう。あなたの想像の通り、チュピターが我我を陷れようとしてゐるのが事實なら尚更です。あなたは私を見捨ててはいけません。我々は共に住み、共に力を合せることが何より必要です。

兄　エピミシュース、それではパンドラがチュピターの反逆者であるおれを憎んでゐないと云ふのは本統か？

弟　そんな事で僕が嘘をついて何になります。憎むどころではない、パンドラはあなたを崇拜してゐます。

兄　おれの話をしたのか？

弟　パンドラは丁度人間たちがオリンパスの神々の話を聞く時のやうな興味であなたのことを聞いて悦んだのです。あの女は美しいこと、勇ましいことに對しては、驚くべき敏感を持つてゐます。あなたを見る機會は一度もなかつたに拘はらず、知つてゐることはすべてを知つてゐます。あなたが今日までどんな立派な仕事をして來た

か、どんな優れた智慧と勇氣を持つてゐるか、どんなに強くどんなに美しいか……

兄　よし、それではつきり返事をする。――おれはお前がパンドラと一緒にゐる間は、お前と住むことは御免だ。

弟　おゝ――それはまた何故です？

兄　ヂュピターの陷穽が足許にかゝつてゐるのに氣がつかないのか？

弟　ヂュピターの陷穽？

兄　パンドラがおれを愛し出したらお前はどうする？

弟　兄さん――

兄　お前を捨てておれを取ると云ひ出したらどうする？

弟　おゝ――

兄　お前はあの女をおれに讓つてまで、おれと共に住む覺悟があるか？

弟　いや、いや、パンドラは決してそんな女ぢやありません。幾ら兄さんを崇拜してゐるにしても、私を捨ててまで心を移すなんて、そんな大膽なことを思ふ筈はありません。あなたはもつとあの女の氣高い感情を信じて下すつてよいのです。

兄　おれはパンドラを信じないと云ふよりはヂュピターを信じないのだと云はう。あの女に依つてヂュピターのたくらんだ事に一つとしてよいことがあつたか？　その目的のために造られた以上、あの女は何事に對してもヂュピターの意志通り動かされるのだ。知らずして惡を導き、思はずして罪を釀すやうになる。どうだ？　おれを救ひ出すことをお前に勸めたのも恐らくあの女だらう。

弟　さうです、さうです。おゝ！――

兄　おれから祕密を聞き出せと云つたのも乾度あの女だ。それをヂュピターに覺らせようとしたのもまたその女だ。おれの鎖を賄物にしてな。どうだ？　ヂュピターの陷穽は二重にも三重にもかゝつてゐるぢやないか。結局どの陷穽にかゝれば、タイタン族の根は立派に絶てると云ふ魂膽だ。――最初パンドラを寄越した時のことから思つて見ろ。おれに吳れると云ふのでもなければ、お前一人を指したのでもない。わざと我々兄弟を名指して來た。不和の女神が面白半分に投げる林檎、丁度あれだ。ヂュピターはあの時おれたちが所有權に就いて爭ふのを待ち構へてゐたに相違ない。エピミシュース、お前はその危險な機會を今一度作らうと骨折るのか？――

弟　そんなことがあり得るだらうか？――

兄　おれを信じろ。

弟　兄さん、あなたの怖ろしい言葉は私を打ち挫いてしまひます。私の希望は消え、悦びは去り、在るものは絶望と悲しみのみです。若し不死體でなかつたら、私は死を

選ぶでせう。併しその運命さへ惠まれてない私が今後どうして生きて行くか、それを敎へて下さい、命じて下さい。

兄　お前はお前の家へ歸ればよい。パンドラはおれよりもずつとよくお前を慰める方法を知つてゐる。

弟　おゝ――パンドラ！　パンドラ！　パンドラ！　――昨日まであれ程快く響いてゐたこの言葉が、急に毒針のやうにおれの耳を刺すのはどうだ！　――それでまだおれはお前を疑ふことは出來ない。お前の愛の中に、お前の美しさの中に、そんな邪惡の潜む場所があらうとは信じられない。いや、假令それが本當だと云つても、おれはお前を手離さうとは思はない。お前が怖ろしければ怖ろしい程一層お前が戀しくなりさうだ。

兄　安心してお歸り、エピミシュース、お前がおれを救はうとしなければ、お前の幸福も當分破壞されないですむだらう。この上はたゞヂュピターに乘ぜられる隙を作りさへせねばよいのだ。

弟　それであなたの事なぞ構はずに、いつまでもこの岩に打つちやつておけと仰しやるのですね？　兄さん、私は自分の幸福さへ再び歸つて來れば、あなたのことなぞ直ぐ忘れてしまつて、パンドラと今まで通り暢氣に暮らして行けると思ふのですか？　それでは私をあんまり見くびり過ぎます。どんな幸福もどんな歡樂も、この岩に縛られてゐるあなたを思ひ出す瞬間、今後は皆んな私から去つてしまふでせう。殘るのは永久の嘆きと悲しみばかりです。――いや、いや、私は決心しました。その嘆きも悲しみも私は決して他處ではしない。あなたと一緒に此處でします。歸らないであなたと二人でゐるのです。幾世紀か、幾百世紀か、幾千世紀か、それは知らない。あなたの望み通りの自然な機會がこの鎖を解く日まで、私はあなたを離れないでゐます。

兄　愛するエピミシュース、お前の誠實に禮を云ふよ。併しお前は歸つてくれ。此處にゐることは出來ない。

弟　それはまた何故です、兄さん？　それさへあなたは僕に許さないのですか？

兄　おれのゐない間、お前はおれに代つて人間たちを指導する義務がある。さあ、落ちついて歸つてくれ。而しておれから訪ねて行く日を待つてゐてくれ。おれは乾度その日の來るのを信じてゐる。お前の所謂自然な望み通りの機會が到來するに相違ない。その時おれの鎖を絕つ者は、おれの不正に下らぬ意志と、苦痛に屈せぬ克己心を認めてくれるだらう。而して多分その者の手に落ちるに相違ない人間たちを、おれがどんなに精巧に造つたか、どんなに強く愛したか、またどんなに困難と戰つて敎育

したか、分つてくれるだらう。おれはその時滿足してこの岩から下りればよいのだ。

弟　あゝ――その日が來さへすれば！――

兄　デュピターの王位の沒落の日がそれだ。――おれは豫言の中の大工の息子の手に希望をかける。若し若者がおれの鎖に氣がつかないで行き過ぎたとしても失望はしない。その後に來る者を氣永く待つだけだ。屹度……。誰か知ら來る。おれはそれを信じて待つ。

兄と愛の神

兄　エピミシュースは、悲しみながらたうとう歸つて行つた。結局彼は落ちゐくところへ落ちつくだらう。おれには我慢されないことでも、彼には我慢が出來る。おれなら怒つて仕舞ふことでも、彼は微笑で見過せる。心の卑しさからでなく、素直さから自然に出來る。鈍感でなしに謙虚から出來る。この後の運さへ悪くなければ、彼だけはヂュピターの毒手を免れるかも知れない。却つて彼の忠實な幕僚として重寶がられるだらう。それでパンドラと仲よく暮らして行く。――結構だ。エピミシュースに取つては決してわるい生活ではない。たゞおれにはそんな眞似は頼まれても出來ないだけだ。……

（その時突然頭の上で大きな笑聲が起る。）

兄　何者だ？　おれの頭の上でそんな無遠慮な笑ひ方をするのは？

愛の神　僕だ。僕が君を笑つたのだよ。

兄　ヴィーナスの小さいいたづら子だな。何を笑ふのだ？　おれの半分食ひほがれた胸の洞穴でもをかしいのか？

愛の神　ふん。手足を縛りつけられて、何處までが岩だか、何處までが身體だか見當もつかない化物見たいな君の胴體に、横穴の一つ位開いてゐるのは、いつそ似合つて見える位ぢやないか？　僕はそんなことを笑つたのぢやない。君があんまり偉らさうな大法螺を吹いてゐるのが滑稽だから、それでつい吹き出したのだ。君は今までエピミシュースと話してゐたことを、僕が何んにも聞かなかつたと思ふのか？

兄　聞かれたのなら仕方がない。併しそれなら此處で道草を食つてゐる隙に、何故オリンパスへは飛んで行かないのだ？　今偶然君の耳が拾つたものをその儘ヂュピターの耳に屆けてやれば、おれは受け合ふ、彼が大事にしてゐる黄金の三脚器をよこせと云つても君は拒絶されはしない。

愛の神　安心し給へ。僕は僕の弓と矢に直接關係のないことには何等の興味も持たないし、また手出しもしないことに極めてあるのだから。ヂュピターに王位の祕密を賣

りに行くより、此處で君の氣のつかない君自身の秘密を發き出してやる方が僕の天賦に近い仕事だ。――プラミシユース、君は何故あの人のよい弟に嘘ばかりついたのだ？

兄　エピミシユースこそおれに嘘はついたが、おれがエピミシユースに嘘をついた覺えはない。

愛の神　反對だ。僕に云はせれば君こそ大嘘つきだ。――君は先刻エピミシユースがパンドラに逢つてやつてくれと頼んだ時、それこそ望んでゐたところだとは何故云はなかつた？　どうだ？　そんな變な顔をするなら、もつと先のことから、順序立てて云つてやらうか。ヂュピターがあの女を贈物にすると云つた時、君はエピミシユース以上に興味があつたに拘はらず、大きな事を云つて弟に讓つた君は野心のために――君の言を藉りて云へば、人間を愛する爲に――ヂュピターの不正と戰ふために――出し度い手を引つ込ましたのだ。それなら男らしく諦らめをつけたのかと思へば、わざとあの女の贈られた晩を選んで冒險をやらうとした。あの皮肉なやり方は何だ？　エピミシユースを怖ろしい「女」の誘惑から防ぐためだとばかり云へるか？　防がうとしたのは寧ろ君自身の身體ではなかつたか？　君は自分では手を出すのを怖れてゐる物を、エピミシユースが自然に無邪氣に取らうとしてゐるのを見ると、知らん顔が出來なかつた。そのさもしい嫉妬と強い誘惑、同時にそれを大びらに露はし得ない僞善が、あの狡猾い手段を君に工夫させたのだ。

兄　そんな馬鹿なことはない。君は何か成心を持つておれを惡く見ようとしてゐる。

愛の神　まあ續けて聞き給へ。どうせ褒めはしないのだが。これで、エピミシユースの裏切は見事に君を失敗さした。パンドラは完全に弟の手に、嚴しい刑罰はひとり君の上に落ちたわけだからね。これでも君は僕に嘲笑される理由はないと云ひ張るか？　また鎖に繫がれて岩から宙にぶら下つた儘眠る時、エピミシユースの暖い寢床を一度でも羨みはしなかつたと云へるか？　――それから善良なエピミシユースが眞劍になつて君を救ひ出さうと骨折るのを見ると、今度は氣が咎め出した。どうにかして彼の手を借るまいとした。またそれを正直に白狀する代りに、持ち前の大言壯語で彼を煙に卷いた。正しい解き手が來て鎖を切るまでは決して下りてやらないと公言した。序だから聞くが、その大工の息子とか左官の倅とか云ふのは、實際來る當があるのかい？

兄　此度來る。間違ひなく來る。

愛の神　さうか、それならよいが、併しちよつとの事ではなささうだな。僕ならそんな者をぐづ〳〵待つてはゐな

い。下りられさへすればどんな機會でも捕へてやる。それを君が何とか理窟をこねて躊躇してゐるのは、下りるのが怖くて無理にもかじりつかうとしてゐるとしか見えないよ。更に一層卑怯なことは君がパンドラについて云つた言葉だ。君は、若しパンドラがおれを愛し出したらどうする、と云つてあの可哀相なエピミシュースを慄ひ上らしたが、あれは何故おれがパンドラを愛し出したらとは云はなかつたのだ？　それがあの際は自然な云ひ方ではなかつたか？　――さあ、それ位云つてやつたら、幾ら誇大妄想狂の君だつて、自分がどれだけ嘘つきで、どれだけ大法螺吹きだか分つた筈だ。又さうやつて世界に於ける正義の唯一の戰士のやうな顏して岩にぶら下つてゐることが、どれだけ滑稽な韜晦だか思ひ知つた筈だ、それでもわからぬと抗辯するなら、僕はまだ他にはつきり分らしてやる方法を知らなくはないよ。（キューピットは弓と矢を取り出して覘ふ）　言葉は胸に落ちないことがあつても、僕の鏃で刻みつけてそれで感じない胸はない筈だからな。

兄　いたづらつ子、止せ！　何の眞似だ！　君は的を誤まつてゐる。君の弓矢は洒落者の神々やニンフ達の胸を的にして射る時が、一番似合はしい遊び道具なのを忘れたのか？

愛の神　ハヽハヽハ、怖くなつたな。

兄　いや、君の武器の名譽を思ふためだ。それは一番六づかしい的を射るのが誇ではなかつたのか？　射難い胸を射拔いてこそ値打ちだ。初めて名譽だとも云へる。面白い遊びだとも云へる。それをおれのやうに岩に縛られて、動きの取れなくなつた的を射れば何になる？　當らないのが不思議な位だ。それとも斯んな標的でも弓矢の手柄にしなければならぬほど君の獲物が乏しくなつたのなら別だが。――

愛の神　旨い！　さう云はれると僕はいやでもこの弓矢を使ふわけには行かなくなる。――それでは君が待つてゐると云つた日まで僕も待つてやらうよ。先刻の話の男が君の望み通り鎖を切る日が來さへすれば、その時こそ君は自由な的なのだからね。

兄　勿論だ。併しその男の出現とヂュピターの凋落とは同時だと云ふことを聞き洩らしはしなかつたらうな。オリンパスの神の一員たる君が、その時になつても暢氣にそんな弓矢の樂しみが續けてゐられたら結構だ。

愛の神　大丈夫、ヂュピターの凋落は僕と關係はない。僕の仕事は少くとも他の神々の仕事とは變つてゐるのだから。僕は永遠の子供だ。永遠に遊ぶことが特權だ。豫言の大工の息子だつて、ヂュピターの玉座は奪つても子供

の僕の遊び道具まで取り上げはしないに極まつてゐる。――おや左様なら、プラミシュース！　その時にまた逢はう。――併しそれまでに僕の言葉が當つてゐるかどうか、ゆつくり考へて見るのも惡くはないよ。君の退屈を紛らすには丁度よい考案だ。（去る）

兄　母親のヴィーナスに似て、それで全然違つた性格を持つてゐるのはあの小倅だ。オリンパスの神々の中でも、變り者だと云へばあの小倅が一番かも知れない。あの小生意氣な口のきき方はどうだ！　それで不思議と憎氣がない。私心といふものが微塵も見えない。何をしても、何を云つても、他の連中の持たない純な自由が溢れてゐる。生き〳〵していつ逢つても氣持がよい。併し彼奴が今日パンドラに就いてしやべつて行つたことは徹頭徹尾見當違ひだ。ひどい妄言だ。何んでも物事をヴィーナスの力に結びつけて考へたがる傾向は、流石にあの女神の子で仕方がないとしても、おれがエピミシュースと同様パンドラに心を動かしたなんて、飛んでもない邪推だ。オリンパスの連中がやるやうに、あの怖ろしい湖にかけて誓つてもよい。おれはあの時は製作中の二輪車のことで夢中で、外の物に頭を向ける餘裕はなかつた。――それは、どんなものだらう位は時々考へても見た。併しそれとてチュピターが「女」なるものをどんな風に拵へ上げたか、それを見度いといふに外ならなかつた。單なる製作上の興味に過ぎなかつた。おれは從來の人間ばかりでは、世界は早晩困ることになる事のあるのを感じてゐた。彼等は餘りに力に富み過ぎて來た。牧場の仕事にも、畑の骨折にも、狩獵にも、その他の遊業にも、使ひきれない剩餘力が生じて來た。この儘放任しておけば彼等はこれをお互ひ同士に注ぎかけて浪費するに極まつてゐる。爭ひに爭ひが續き、叩き合ひ、殺し合ひが始まる。結局は種族全體の滅亡に終る。その危險を救ふためには、彼等の有り餘る力を受け容れて、他の親しい無害な勢力に變へるやうな役目を務める何かの生物が必要だと信じた。併しその存在にどんな組織と表現を與ふべきかに就いてはまだ定見がなかつた。神と女神との對立は當然一つの見本ではあつたが、近來のオリンパスの生活に對する反感がそれを否定させた。彼等を眞似度くはない氣がした。では何が最も望ましい典型か？　――チュピターが「女」を造つてゐると云ふ噂を耳にした時も、丁度その疑惑があつたから、別種の好奇心でおれは聞いたのだ。少くともおれ自身は今日までさうとしか考へなかつた。それをあの小倅はあんな風な云ひ方で批評した。――假りにあの興味が單なる製作上の興味のみでなかつたとするチュピターの陷穽は成功したのだ。――いや、

おれは見事にそれを外づし得たではないか？　おれはエピミシュースと爭ひはしなかつた。パンドラは初めから彼の物として讓つたではないか？　――併しおれがあの「女」の事を其後も意識から消し得なかつたのは事實だ。エピミシュースを考へることは、パンドラを考へることであつた。あの晩、開かぬ戸の外に立つてエピミシュースを待つた間の心持は今でも說明がつかぬ。おれは弟の遲疑に依つて冒險の手筈の狂ふのを怖れながら、戸一重向うの光景を想像しないではゐられなかつた。彼に天職と義務を思ひ出させ、パンドラの誘惑から遁れることを勸告しながら、名狀の出來ない戰慄を感じてゐた。また裏切に對する危惧と絕望の中には一つの不明な激しい感情が交つてゐた。おれはそれを、パンドラに對する怒であり、憎であり、罵であり、呪であり、それ等のすべての混合であると、今日まで信じてゐた。然るにあの小僧はそれを明白に嫉妬と呼んだ。――おゝ、若しそれが事實だとすれば、あの小僧はおれ自身にも知らなかつたおれを知つてゐるのか？　おれの意識し得ない意識を洞察し得たのか？　――なんだか彼奴の云つた事が段々氣味が惡くなつて來た。相手にもならない子供の惡口だとばかり聞き流した事が、強く胸を刺すやうに感じるのは何故だらう？　――若し彼奴のしやべつたことを皆んな是認するとしたなら、そんなことがあり得ようか？　斷じてあるべきではない。あの小僧が何んと云はうとも、おれの意識に明瞭に現はれないものが、眞におれの思考である筈はない。憚りなくおれはさう云ふ。――だがこの種類の感情にかけては、彼奴はあの弓矢の武器と共に母親讓りの不思議な力を持つてゐるのだ。あの小僧は蟲が林檎の皮の下に、水が河岸の砂の間に、潛り込むやうに安々と誰の胸の奥へでも潛り込める。その點ではヂュピターと雖、彼奴の敵ではない。たゞ僅かにミナーヴァの銀の鎧のみが防げると云はれてゐる以上、いつの間にかおれの胸にも這ひ込んで、おれ自身でも氣のつかない、おれの曖昧な意識の祕密を皆んな嗅ぎつけたのだとしたら――それであんな輕蔑しきつた笑ひ方で笑つたのだとしたら――云ひ度い放題の惡たれ口を利いたのだとしたら――何と云ふ恥辱だ！――何と云ふ不名譽だ！――誰でもよい、あの小僧の饒舌つた言葉を皆んな嘘だと云つてくれる者はないか？　ユクザインの海の潮の遠鳴のやうに、永久におれの耳から離れないであらうあの笑聲をぴつたり塞いでくれる者はないか？　サイクロプスであつても構はない、おれは彼の一つの目の前に、出來たらこの膝を折つて賴むだらう。疑惑と昏迷に比べれば、どんな卑しい哀願でも增しだ。すべての誇と勇氣は失はれ

かけたゝ鎖は急に千倍の重さを加へ、鋲は新たな苦痛で肉を苛責なみ出した。一時間前までは誰にも恥ぢない、また何物にも怖れない名譽ある囚人だと信じてゐた自分が、世界で一番醜い無力な奴隷に成り下つた氣がする。――禿鷹の群れよ。おれはおれの肉で赤くなるお前達の嘴を、アンブロジアで養はれるヂュピターの鷲のそれよりも惠まれたものだと信じてゐたが、今は適當な肉を適當なものが食つてゐるのかも知れないぞ。斯うなれば遠慮は要らない。思ふ樣引き裂いてくれ。おれは寧ろそれを賴む。肉の苦しみは心の苦しみを幾らか紛らしてくれるかも知れない。――さうだ。おれの待つてゐる解き手が現はれるまで、おれはこの儘此處でこの苦しみを續けなければならないのだ。長い世紀の間、神と人間とはおれの淺間しい姿を見るだらう。偶にはおれの鎖と鋲のために憐れみの涙を催すものがあるかも知れない。併し彼等にはおれの苦痛と悲しみが今は何處にあるかを知ることは出來ないだらう。おれを解く者よ、お前だけはそれを悟つてくれるかも知れない。だがその事の爲におれを輕蔑しないでくれ。おれは誰よりも一番お前の輕蔑が辛い。――いや、いや、お前はおれを輕蔑する前に、屹度おれの善い裁き手になつてくれると思ふ。この岩の鎖を解くと共に、新しくおれの心を縛りつけた今一つの鎖からも、おれを解き放して吳れると思ふ。おゝ早く來い！　おれの待つてゐる若者よ。待ち遠しいその日よ！　苦しみの多いその日までの世紀よ！　（終）

（大正十年三月）

藤戸（一場）

人

佐々木三郎盛綱
老嫗
老臣
太刀持
兵士

所

備前兒島

時

源氏勃興の頃

佐々木三郎盛綱は直垂に梨子打烏帽子の姿で、一人の太刀持を隨へて、正面の床几にかけてゐる。老臣の左衛門がその右に坐つてゐる。一人の兵士が入つて來る。

兵士　申上げます。――また昨日の婆が參りました。幾ら追つても歸りません。

盛綱　昨日の婆が來た？　――それは何のことだ？

老臣　殿樣はまだ御存じないことでございます。實は昨日、漁村の者らしい一人の婆が參りまして、今度お國入をなされた殿樣は、人民の訴訟、公事一切を御自分でお裁きになるに就いて、訴のある者は何人に限らず申出るがよいと云ふ高札が村々へ立つたさうな。自分も是非直々殿樣へ御訴訟申上げ度いことがあるから取り次いでくれと申すのでございます。見ればひどく年を取つて、足腰も利かぬほどの年寄でございます。さう云ふ者が殿樣へ直直御訴訟申すやうなことがあらうとは思はれませんし、乾度老いぼれて氣でも狂うてゐるものだと存じまして、追拂はせました。これがまた參つたものと見えます。

兵士　左樣でございます。今日こそはどうしても殿樣にお目にかゝる。取り次いでくれなければ日が暮れても、夜が明けても此處を退かぬ、と云つて、お玄關前の砂利石の上へ坐り込んで動きません。恐ろしくしぶとい婆でございます。

盛綱　連れて來い。

一人の家來　お逢ひになるのでございますか？

盛綱　うむ。

一人の家來　それは餘り御寛大に過ぎはいたしませんか？愛も度も超えると御威光にかゝはります。

盛綱　逢つてはいけないと云ふのか？

一人の家來　殿樣のなさることを、家來の私がとやかく申

す譯ではございません。たゞ考へて頂き度いのでございます。

盛綱　併し、何人の訴訟をも悦んで聞かうと云ふわしの宣言はもう國ぢうに知れてゐる。現に、その年寄もそれを聞いて來たのだと云ふ以上、逢つてやらないのは間違つてゐる。それがどんな賤しい身分のものであらうと、老いぼれであらうと、その人は正當にわしに面會を要求する權利がある。――さうだ、この國のものでさへあれば。

老臣　併しこの國は以前は敵の根據地であつたことをお忘れになつては大變でございます。勿論人民たちは殿様を崇拜いたしてはをりませう。左様でございます。あの藤戸の先陣と云ふ功名だけでも、彼等を怖れさせ、嘆美させるに十分でございます。が、神様のやうに云はれてゐる人でも、十人の中に一人は批評家を持つてゐるものでございます。今が大事な場合でございます。輕々しいお振舞があつてはなりません。

盛綱　お前の云ふことはよく分つてゐるよ。併しわしは自分の宣言に忠實であり度い。この國の政治と云ふことに就いては、わしは非常な興味と決心を持つてゐる。それだけこの半島の一國はわしの氣に入つてゐる。氣候もよければ、景色もよく、産物も豐富だ。山には植林が行き屆いてゐるし、海には魚介が夥しい。また軍事上の見地から見る時は、後に山を負うて、三方は海と云ふ要害堅固の地だ。京へも遠くはない。斯う云ふ土地がさう澤山あらうとは思はれない。わしは此處で出來るだけ善い政治、出來るだけ正しい政治をして見度いのだ。この國の美しい天然に負けない位、美しい制度、法律、典禮、風俗を揃へあげ度いのだ。人民が身分に應じて滿足し合ひ、樂しみ合ひ、尊敬し合ひ、どの家も一軒一軒に平和あり、愛あり、富あり、悦びありと云ふ生活を造り上げ度いのだ。さうだ、この半島をその儘で龍宮にするのだ。それがわしの計畫なのだ。武器と血の間から、長く長く夢みてゐたわしの理想なのだ。劍を執つて第一の武將であつたわしは、文の人となつても亦第一の政治家であることが必要だ。まあ、兎に角その婆さんを連れて來るがよい。わしはその訴訟を聞かなければならぬ。その年寄の胸にたゞ一つの小さい不平が、取り除かれないで殘つてゐても、わしの計畫に取つては怖ろしい破綻だ。よいから、直ぐ連れて來い！

（兵士退いて、一人の老嫗を連れて來る。）

盛綱　お婆さん、心配は要らないからずつとこつちへおいで。

老嫗　有難うございます。

盛綱　お前はわしに訴訟し度いことがあるさうだね？

老媼　はい。
盛綱　何でも聞いてあげるから遠慮なく云ひなさい。
老媼　どうかお人拂ひを願ひます。
盛綱　人拂ひを？　いや、そんな必要はない。此處に居る者は皆んなわしの信じてゐる近臣ばかりだから、何を云つても構はない。
老媼　本當によろしうございますか？
盛綱　いゝとも、いゝとも。――一體どう云ふ話だね？
老媼　實は、私の亡くなりました息子のことにつきまして御訴訟申度いのでございます。
盛綱　亡くなつた息子？――
老媼　はい。一言で申しますと、息子が或る場所の大事な祕密を知つてをりまして、それを或人に敎へたのでござります。その人は息子に報酬を約束なさいました。それに祕密を敎はつてしまふと、報酬の違約をしたばかりではございません、話すも殘酷な程の方法で、恩を仇に返したのでございます。私はその人を罰して頂き度いのでございます。
盛綱　――その人を罰してくれ？
老媼　その人のことはお殿樣が一番よく御存じの筈でございますから？
盛綱　分らないことを云ひ出したね。――
老媼　お人拂ひをなさらないからお分りなさらないのでございます？
盛綱　いよいよ妙なことを云ふ。――(家來たちを顧みて)矢張りお前たちの想像した通り、老いぼれて、氣が變になつて居るらしい。兎に角遠慮してやつたらよからう。
(家來たちは退く。)
老媼　お殿樣、私をどう云ふものたとお思ひになりますか？
盛綱　――わしには分らない。
老媼　――あなたに殺されたあの若い漁夫の、私は母親でございます。
盛綱　何だと？――
老媼　――去年三月二十六日の合戰の前の晩に、あなたに藤戸の淺瀨をお敎へ申して、さうして殺されたあの漁夫は私の一人息子でございます。
盛綱　あ、聲が高い、聲が高い！
老媼　びつくりなさいましたか？　さうでございませう。あなたは誰も知らないと思つて、安心してゐらしつたのでせうから。
盛綱　いや、わしにはちつとも覺えのない話だ。藤戸の淺瀨を敎へたとか、殺されたとか、そんな漁夫のことなぞをわしが知つて居る筈はないではないか？

老媼　まだそんなことを仰しやるお積りでございますか？　それは卑怯と申すものでございます。私は何もかも存じて居るのでございますよ。息子があなたに何をお教へ申したか、その恩義ある若者をあなたがどんな殘酷な目にあはしたか——藤戸の先陣と云ふ、あの名高いあなたの功名は、誰のために得られたのか、その花々しい名譽の底には何が隱されて埋まつてゐるか、あなたは考へて見たことはないのでございますか？　——あなたの主君なる兵衞ノ佐樣は、あなたに正しい報い方をなさいました。あなたは藤戸の先陣をなされたその功名で、此の國の主となられました。それに、あなた御自身は、その功名をあなたに與へたものに對して、どんな報いをなさつたでせう？　それを聞かして下さいまし。

盛綱　——

老媼　それとも、まだ藤戸の浦の漁夫のことなぞ知らう筈はない、と仰しやるのでございますか？

盛綱　あゝ、どうして、どこから洩れたらう？

老媼　さあ、何處から洩れたでせう？　誰が見たとも、聞いたとも分らぬなりに、たゞひとりでに知られてゐるから怖ろしいではございませんか。浦の者は皆んな存じてをります。

盛綱　——皆んな知つてゐる！

老媼　私の息子を殺した下手人は、今度のお殿樣だと皆んなが申して居ります。

盛綱　——あゝ！　——わしを人殺だと云ふ者共が、わしのあの宣言を讀むのだな！　——訴訟、公事一切、わしがわし自身の手で公平に取り裁くと云ふことを、善い事は善く報はれ、惡いことは惡く報はれると云ふことを。何と云ふ恥だらう！　死んでも足りない、醜い恥だ！　——お婆さん、許してくれ。わしが間違つてゐた。何もかも白狀しよう。お前の息子を殺したのは、お前の云ふ通り此のわしだ。——わしは何處までもその罪を負ふ事を誓つてよい。——が、たゞ意味なしに殺したのでないことだけは知つて貰ひ度い。殺さずにすんだら何んで殺さう。悧巧さうな、よい若者であつた。——それを殺さなければならなかつた。あの場合、その一人の人間を殺すことが、わしの運命からの必然の命令であつたのだ。恩を仇に報いることが、避け難い必要であつたのだ——

老媼　皆んなお聞かせ下さい。殺さなければならなくと殺したと仰しやる、その譯をお聞かせ下さい。

盛綱　その譯を云つて聞かさう。——さうだ皆んな何もかも話してやらう。——去年の三月二十五日の晩のことだ。明日こそいよ／＼兒島に據つてゐる平家の一軍と勝負を決する日となつた。敵は、大將の行盛が中々しつかりした

男である上に、要害の地を占めてゐる。後は山、前は海、守るに易く、攻むるに難しと云ふ好陣地である。明日の合戰は骨が折れるぞと思つてゐるところへ、ふと思ひついたのがあの海の淺瀨のことだ。わしは誰にも知れぬやうに陣屋を忍び出で、たつた一人で海岸傳ひに浦手の方へ行つて見た。すると其處で一人の若い漁夫に出會つた。――お前の息子も運が惡かつたのだ！　――「この海に淺瀨はないか？」と尋ねたら「ございます」と答へた。「南無、八幡！」わしは心の中で神に謝した。「どうかその淺瀨をわしに教へてくれ。褒美は望み次第だ。」さう云ふと、「淺瀨は川の瀨のやうになつて唯一ヶ所ありますが、時に依つて位置を變へます。月の初めに東となり、月の末には西へ移ります」と云ふ。小舟を出させて、二人で乘込んで、實地について水路を調べあげた。「これで大丈夫、明日の合戰の先陣は佐々木三郎盛綱だぞ！」と斯う叫び出し度いほどにわしの心は躍つた。岸に着くとわしは若者の手を取つて云つた。「わしの功名は、悉くお前の功名だ。恩返しをするぞ。」その瞬間、惡魔がわしを生擒にした。いや、油斷は出來ない、わしが海を渡ることに目をつけたと同樣に、味方の中にも淺瀨を探るものがないとは限らない、その男が若しこの若者を手に入れたら？　――でなくともこの男の口から、源氏方に海の淺瀨の祕密を知らせたと云ふことが、海の向の敵軍の耳に這入つたら？　――大變だ！　わしは震へた。と同時に、決心は直ぐについた。――軍人の素早い、最後のたつた一つの決心だ。――わしは無言で若者を摑んで、引寄せた。左の乳の下を二刀刺すと倒れた。それをその儘海に沈めて歸つたのだ。

老嫗　海は何處のどの邊に沈めたのでございます？

盛綱　――あの向に見えてゐる浮洲の岩の、少し手前になつた水の深みに沈めたのだ。

老嫗　――廣い海の中で、死骸一つ沈める場所にことは缺かぬ筈が、それはまた何と云ふ悲しい選び方でせう！　あの岩の蔭は、息子が何處よりも好いて釣をしてゐたところでございます。夏はあの岩の上から、強い、男らしい身體を海に躍らして、泳ぎました。釣をすれば誰よりも多く釣りました。泳げば誰よりも上手に泳ぎました。――皆んなから愛せられ、褒められて、母に孝行を盡してくれたあの可愛い息子、たつた一人の息子、不運な息子、もう一度歸つて來ておくれ！　その岩の下から歸つて來ておくれ！　水の底から現はれてもう一度姿を見せておくれ！　顏を見せておくれ！　聲を聞かせておくれ！　――これ程呼んでも歸つて來ないのは、水が深くてわたしの聲が聞こえぬためか？　それとも惡龍の餌食

になつて、お前はもう其處にはゐないのか？　いや、そんな筈はない、そんな筈はない。お前のあの強い美しい鐵のやうな身體はどの鰐の牙が立たう？　――お前はきつと浮洲の岩と岩の間に足をしめつけられて、歩くことが出來なくなつてゐるのだらう。胸に刺された刀の創の痛みで口を塞がれてゐるのだらう。――よしよし、お前が來られなければわたしが行きます。わたしが行つて介抱してあげます。お殿樣、さあ私をも息子と同じやうに殺して下さいませ！　而してあの浮洲の岩かげの深みに沈めて下さいませ！

盛綱　――お前は本當に氣が狂うたな。

老媼　氣は狂ひはいたしません。正氣のお願ひでございます――いゝえ、矢張り氣が狂うたのかも知れません。さうでございますとも！　氣が狂ふのも當り前でございます。自分の可愛い息子を殺した憎い人殺し奴は殿樣となり、殺された息子は――その憎い人殺し奴を殿樣にしてやつた當の本人は、何の御恩賞にも預らないで、怨み死にに海の底に沈んでゐると云ふ怖ろしい目に逢うて、氣の狂はぬ母がございませうか？　さあ、息子を返して下さい！　元の通りの姿にして返して下さい！　――でなければこの私を殺して下さい！

盛綱　――どうか、賴むから息子のことは諦めてくれ！佛家の云ふ因緣ごとだと思つて諦めてくれ！　――その代り、償ひはどんなことでもしよう。息子に約束した恩賞は、勿論お前のものだ。その他何なりと望んでくれ。わしの富を傾けても、誓つてお前を滿足させて上げるから。

老媼　子供を失うた母のうつろな胸が、富や、榮華で充されるものなら！　――私には何んにも欲しいものはございません。

盛綱　――ではわしはあの若者のために寺を建てよう。出來るだけ立派な寺を。高い塔も築かう。さうしてあらゆる有難い佛像と經文をその中に一杯に納めよう。さうして都方から高德の坊さんを迎へて、お前の息子の冥福を祈つて貰はう。

老媼　――私には千人の坊樣の有難いお經より、あの息子のおつ母さんと呼ぶ一と聲が聞き度いのでございます。――

盛綱　では、わしはどうすればよいと云ふのだ？　どんな償ひをすればお前は滿足するのだ。

老媼　――人の生命の償ひを、生命より外のもので償つてすまさうとなさるのが、間違ひでございます。

盛綱　――わしに死ねと云ふのだな？

老媼　あなたの死ぬことはあなたの御自由でございます。

――

盛綱　――いや、わしにはもう死ぬる自由はない。わしの生命は、わしの仕事のために必要なのだ。運命から選ばれた仕事のために。――わしは長く生きなければならぬ。健康で、富んで、豐かな土地と、聰明な家來と、善良な人民を有つて生きなければならぬ。――お婆さん、まあ聞いてくれ！　わしは餘り戰爭に馴れすぎた氣がする。近頃頻りにそんな氣がする。敵と戰ふことが、忠義の一念からでもなければ、强い功名心からでもなければ、戰爭そのものに有つ興味からでもなければ、敵愾心からでもなければ、單に血に勇む興奮からでもなくなつた。ただ習慣で戰つてゐるやうな氣がして來た。生活の方便としてだけで戰つてゐる樣な氣がして來た。自分と同じ仲間の人間を、一人でも多く殺し、一人でも多く傷つけることのみを考へてゐる生活、それが自分自身の生活であることを思ふと、わしは怖ろしくなつて來た。陣屋で一人きりぽつねんとしてゐる時なぞ、わしは不思議な淋しさに襲はれ出した。その後ではまた反動で、ひどくいらいらして來る。堪らなくなつて敵の中へ突進すると、敵はその勢ひに怖れて逦げ出す。世間はいよ／＼わしを勇敢な武將とした。わしの心は一層憂鬱になつた。わしは幾度落着いた休養の生活を望んだらう！　武器と血の間から遁れて、犯すこともなければ、犯されることもない、自分の領地の靜かな城の上から、美しい山河や、實りのよい田畑や、繁昌してゐる城下町を見下ろして樂しむと云ふことを、何遍空想しただらう！　この兒島の一國は、その夢の國だ、運命に選ばれた約束の地だ。わしは此處でわしの長い夢想を實現させなければならぬ。地上に存在する國の中でも、最も優れた、最も美しい、最も平和な、最も完全な國を造りあげなければならぬ。それが完成されるまでは、わしは死ねない。その目的のためにわしの生命は貴い生命だ。――

老嫗　あなたの生命が貴いなら、私の息子の生命も貴いのでございます。あなたに生きる目的があれば、私の息子にも生きる目的はあつたのでございます。

盛綱　さうだ、違ふのはたゞその目的が大きいか、小さいか、だけのことだつた。

老嫗　大きいと、小さいの問題ではございません。問題は目的に對するその人の態度でございます。私の息子は正直で、素直で、神樣を崇め、人を愛して參りました。漁をも一生懸命いたしました。何一つ邪念も有たぬ。眞面目な、まつ直な人間として生きようとしてをりました。この息子の打ちはまつた心は、あなたの夢の國に有つ心と同じ心ではございませんか？　劣りも、優りもない心で

はございませんか？

盛綱　──心と心──生命と生命──

老媼　その心をあなたはどんなに無造作に引き裂いたか、またその生命をどんなに殘酷に絶ち切つたか、今一度考へて御覽なさいませ。いゝえ、いゝえ、一人の心、一人の生命ではございません。何百人、何千人、何萬人の心と生命が、これまで到るところの戰場で、あなたの手にかゝつて亡ぼされたかと云ふことを考へて御覽なさいませ。それも悉くあなたの目的のために必要であつたと仰しやるのでございますか？　さう云ひ切つて、うしろめたくはないのでございますか？　怖ろしくはないのでございますか？

盛綱　──怖ろしい必要──

老媼　──どんな美しい國をお拵へになつても、どんな立派な町をお建てになつても、どんな見事な政治をお布きになつても、その礎石一つの下には、それだけの死骸が血身泥の儘で埋まつてゐることをお忘れなさいますな。またその死骸の一つ一つに、私のやうな母親があり、妻があり、子供が有ることを、お忘れなさいますな。さうして、この私が呼ぶと同じ聲で、人殺し！　とあなたのことを呼んでゐることを、お忘れなさいますな。──ああ、呼んでをります！　あの通り呼んで居るのがあなたのお耳には聞こえないのでございますか？　人殺し！──人殺し！　夥しい聲で呼んでゐるではございませんか？　あゝ、息子の聲がはつきり聞こえます！　──あの誰よりも悲しさうな、誰よりも切なさうな聲で呼んでゐるのが、私の息子でございます。三月の二十五日の晩、浮洲の岩かげで刺し殺された時も、幾度あの通りの聲をあげたのでございませう！　何と云ふ苦しさうな叫び聲でせう！　──息子や、息子や、其處で迷うて身を苦しめて居るより、早く出ておいで！　水の底から出ておいで！　お前の淺間しい、血まみれな姿をこの人に見せておやり！　その酷い傷口をこの人の手に觸らしておやり！　さうしてお前の心臟の下を、この人の刺した二刀がどう貫いたか、血がどう流れたか、話しておやり！　でなければこの人は自分の罪を本當に思ひ知らうとはしないのです。──さあ現はれて來て、母に力を借しておくれ！　一緒に責めておくれ！　呪つておくれ！　──修羅道のまん中に呪ひ落しておやり！

盛綱　──怖ろしいことを云ふな！　怖ろしいことを云ふな！　──南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

老媼　人殺し！　──人殺し！──

盛綱　──誰か居らぬか？　──この氣ちがひ婆を引つ立てろ。

（老臣と數名の兵士が出て來る。兵士は老婆を奥へ連れて行かうとする。）

盛綱　手荒いことはするな。――病氣なのだから。女たちに優しく介抱させてやれ。

（兵士と老媼退場。）

盛綱　――左衞門、聞いたか？

老臣　はい。

盛綱　――わしにはもう何んにも聞いてくれるな。批評もしてくれるな。たゞわしの命ずることだけしてくれ。

老臣　何なりとも。

盛綱　――わしの宣言の高札を皆んな取り捨てるのだ。一つの町、一つの村も洩らされてはならぬ。一本の高札も殘されてはならぬ。取り捨てた杭の後も埋め度い。――わしはまた戰に行くよ。

老臣　何日、何時でもお伴ができます。――馬は既で威勢よく嘶いて居ります。武器は研かれてきら／＼してゐます。――兵士たちも大分退屈いたして居るやうでございます。――

盛綱　――さうか？　――今度こそ誰かわしの首を取らぬかなあ！　――一つ、若い、氣持のよい奴に功名をさせてやりたい。

――幕――

大村嘉代子篇

みだれ金春（二幕四場）

登場人物

金春氏清　能役者
繁野　藝子
お房　氏清の妻
清之助　氏清倅
太一郎　氏清弟子
大丸屋彥右衞門
丈右衞門　番頭
金十郎　同
富五郎　同手代
左四郎　幇間
市助　同
孝八　同
芝山七郎左衞門　儒者
お近　三味線彈
お綱　同
お品　仲居

其他佐野屋の若い者、仲居、大丸屋の出入りの者、町の人等大勢。

序幕

德川時代、安永四年正月十九日の夕ぐれ。
京都下河原の茶屋佐野屋の奧二階。平舞臺の上の方は床の間。正面は窓、窓の向うに京の町見ゆ。下の方障子の外は緣にて、緣の端に階子の上り口あり。
（藝子繁野、懷中鏡を出して、髮をなでつけて居る。下手の階子口から幇間左四郎出づ。）

左四郎　おゝ繁野樣、これにお出でなされましたか。寒い風が吹き出しました。
繁野　左四郎さんか。ほんにお正月になつてもこんなに寒い年は珍らしうござんすな。
左四郎　云ふうちにも、京は底冷えがすると申しまする。こんな寒い年は病人も多いでございませう。時に繁野樣、先刻から大丸屋の旦那樣が下座敷できついお待兼。さあ、お出でなされませ。
繁野　最前から幾度もの迎へ、行かずばすまぬ事なれど、どうも氣分が惡い故、あちらの座敷へ行くことは、どうぞ宥して下さんせ。

左四郎　今日は大丸屋様がお下屋敷の建前の日、追付け其のお下屋敷におはいりになる繁野様さうつれなくなさつては餘り冥加がつきませう、それに此の茶屋までお出でなさつた事を旦那も御存じでございますから、顔出しをなさらねば、お爲にわるうございます。

繁野　でも私は此處に待つ人があつて、今日はどうでも大丸屋のお座敷には出られませぬ。左四郎さん、ふだんからの馴染甲斐に、旦那の前をよいやうに頼みます。（手を合せて）と云うたら、何も彼も合點でござんせう。粋を通して下さんせ。

左四郎　では何でございますな。今日は戀しい清様のお出で。それ故、大丸屋様のお座敷はお斷りで……。

繁野　あゝこれ、大きな聲で野暮らしい。判つたら、頼みますぞえ。

左四郎　宜しうございます。お前様と清様とは清之助様と云ふお子様まである久しい仲。斯う見えても、頼むと云はれて、後へ引く左四郎ではござりませぬ。大船に乘つた氣で、ごゆるりと清様にお逢ひなされませ。大丸屋の旦那の前は、よい様に私が取りつくらうて置きまする。

繁野　忝なうござんす。

左四郎　その代り繁野様。清様がお見えになりましたら、たんまりと御褒美を……。

繁野　承知でござんす。

左四郎　どうも有難うござりまする。

繁野　その禮は、あとで云ひなさんせ。

（左四郎は階子を降りて行く。下座敷より賑やかな騒ぎ唄きこゆ。）

繁野　あの騒ぎは下座敷、皆なの衆は今日の建前を祝うて、面白さうに唄うて居るが、あたしには辛い悲しい日ぢや。大丸屋の下屋敷が出來上れば、わたしをひかせて住まはせるとやら。若さうなつた曉は生きては居らぬ覺悟なれど、清様と二人が仲のあの清之助、三つの年に拍子の緣を切り、本腹の子と披露して、金春家の世嗣となつたが、お内儀の見張りが嚴しうて八年の間つひぞ顔見る折もなく、離れて居れど片時も忘るゝ暇もない。命のうちに一と目でも、わが子の顔が見たいものぢや。

（階子口より、金春氏清の弟子太一郎、出づ。片手に氏清の伜清之助の手を引き、片手に風呂敷包を持つ。）

太一郎　繁野様。これへお出でゝござりまするか。

繁野　誰ぞと思へば太一郎さん。

太一郎　もし、清之助様をお連れ申しました。

繁野　おゝ、あなたが清之助……様か。ようまあ連れて來て下さんした。逢ひたい逢ひたいと思ふ念が屆いて、嬉しや命のうちに逢はれました。太一郎さん、一生の恩に

被ますぞえ。さあ。おはいりなさんせ。（熟となりて、廊下に立てる清之助を見つめて居る） したが、大事ござんせぬかえ。

太一郎　その御心配には及びませぬ。お師匠樣のお使で（包を示して）之をこちらへお屆け申さうとて參る途中、茶の湯のお稽古からお戻りなさる清之助樣にお出合ひ申し、よい處へお連れ申しませうと申して、こゝまで御供致しました。さあ、清之助樣、おはいりなされませ。

清之助　いやぢや。わしははいらぬ。これ、太一郎。よい處へ連れて行くと私をだまして、何故此の樣な處へは連れて來た。この人が母樣の憎んでござる繁野とやら云ふ人か。私を此處へ連れて來たは、どういふ譯ぢや。

太一郎　さあ、別に譯と云つてござりませぬが、お前樣が可愛らしい坊樣ぢやと云ふ事を、繁野樣がお聞きなされて、一度見たいとおつしやりましたので、お連れ申しました迄でござりまする。

清之助　お前は私をなぶる氣か。これから歸つて母樣に云ひつけるぞよ。

太一郎　めつさうもない事をおつしやりませ。お前樣を此處へお連れ申した事がお內儀樣へ知れますと、お內儀樣の御心配の種。またお師匠樣と私の難儀。どうぞお內儀樣には內々になされて下さりませ。

清之助　母樣の御心配の種とあれば、決して私は今日此處へ來た事を云はぬが、母樣の憎んでござる人は、私には矢張り憎い。あふのは忌やぢや。

（清之助は後をも見ずに階子口より去る。）

太一郎　もし、お待ちなされませ。（清之助の後を追はんとしてまた立戻る） えゝ、もう、寧そお打明けなされては……。

繁野　いや、いや。何も彼もあの子のため。わたしは死ぬまで母とはなのらぬ覺悟。さあ、日も暮れよう。風もきつい。一緒に歸つて、お家の首尾をたのみます。

太一郎　では繁野樣。これは此處へおきまする。

（太一郎は持ち來りし包を其處に置き、清之助のあとを追うて去る。繁野は立つて緣の手摺に縋りて往來を見下ろす。）

繁野　太一郎さんが親切に折角つれてきて下されたに……えゝ、もう寧そ呼留めて母ぢや子ぢやと名乘らうか。いや、いや。それではお內儀樣へ義理がたつまい。

（階子口より、能役者金春氏清出で、だまつて繁野の後に立つ。）

氏清　（暫して） 何をそんなに見惚れて居るのぢや。

繁野　清樣でござんすか。わたしは誰かと思うて、びつくりしました。

氏清　美しい男でも通つたか。（と繁野の顔をさしのぞく）

繁野　えゝ、も、それどころではござんせぬ。

（繁野顔をあげる。）

氏清　そなた、泣いて居たのか。此のめでたい正月に涙は不吉。さ、ちやつと機嫌を直しや。

（二人は連れだちて、座敷のうちに入る。障子口より仲居お品、燭臺を持ちて出づ。時の鐘きこゆ。）

お品　春とは申せ、まだ日が短かうござります。七つぢやと申すに、暗くなりました。それにきつい風が吹き出してお寒くなりました。お火を持つてまゐりませうか。

繁野　お火は澤山にござんす。

お品　では、御用がござりましたら、および下さりませ。

（お品は去る。繁野は案じ顔にうつむいて居る。）

氏清　はて何を何時まで案じて居る。話してきかしや。

繁野　常から逢ひたいと思うて居た清之助……様の顔をなまじ見て、わたしや悲しうなりました。

氏清　なに、清之助の顔を見て……清之助が此處に來たのか。あの此處へ。

繁野　せめて他所ながらでも清之助様の成人の様子を見たいと、常からわたしが云うて居たを太一郎さんが聞いて居て、今日此處へ連れて來て下さんした。

氏清　太一郎が連れて來たのか。

繁野　お前が届けなさんした後の包を持つて來る途中、お茶の湯の稽古がへりの清之助様に行きあうて、よい處へ連れて行くとだまして此處へ。

氏清　して、そなたが實の母ぢやと云ふ事を覺りはしなかつたか。

繁野　否（いえ）。否（いえ）。わたしを見ると、母様の憎んでござる繁野とは此の人かとおつしやつて、その緣に立つた儘で、太一郎さんの留めるも肯かずに歸つておしまひなさんした。

氏清　家へ歸つて話したら、嘸や女房が怒つて居よう。

繁野　此處へお連れ申した事が母様のお耳に入れば母様の御心配の種、今日のことは內密にしてと、太一郎さんが云ひましたら、では母様へは何にも云はぬとおつしやいました。

氏清　それで私も安心した。

繁野　お前は安心なされても、わたしや悲しうてなりませぬ。もとより緣を切つた子に母と呼ばれる筈はなけれども、あの様に憎まれても、打開けて母ぢやと云はれぬ世の義理が、切なうてなりませぬ。

氏清　清之助には私がついて居る。末始終は悪い様には計らはぬ。きな〳〵思うて患ふな。それよりも、清之助の事など忘れて一つ唄でもうたはぬか。

繁野　えゝ、おかんせ。わたしが泣いて居るに、うき〳〵として居なさんすお前は、ほんにたよりないお人ぢや喃。

氏清　いや、その筈、その筈。今日は浮々として居る筈ぢや。嬉しい事がたんとあつて、そなたに知らせに來たのぢや。その包を解いて見やれ。（前に太一郎の置いて行きし包を顧みる）

繁野　あい。

（繁野、包をとく。包の中より美しき葵の上の能裝束出づ。）

繁野　こりや、まあ、美しい能衣裳。

氏清　そなたが豫ねて見たいと云うて居た葵の上の能衣裳ぢや。誰よりも先にそなたに見せたく、裝束屋から持つて來ると、女房にも見せずに、直ぐと太一郎にとゞけさせたのぢや。鳥渡肩に掛けて見や。（後から繁野に被せかけて）よう似合ふなあ。

繁野　その樣に見詰められては恥かしうござんす。汚れをいとふと云ふ能舞臺に舞初めの衣裳。わたしのやうな卑しい女子の肩にかけて汚してはなりませぬ。

（氏清、はつと顏色を變へる。）

繁野　それよりも、これを着たお前の姿を見たうござんすが、卑しい勤めの身では、御能拜見は所詮叶はぬこと。せめて肩へかけて、立つて見せて下さんせ。（衣裳を氏清の肩にかける）

氏清　（衣裳を掛けて立起り）これでよいか。そなたの移り香を身にしめて、新しく建てられた能舞臺を踏むのも此の廿九日。（坐る）

繁野　では、いよ〳〵舞臺びらきを。

氏清　此の廿九日に取りきめた。私の役は一番目の翁高砂と、四目番の葵の上ぢや。翁高砂を勤めるにつき、明後日から七日の間は潔齋ぢや。それ故此處へ通ふことも出來ねば、當分の名殘りに今日は來たのぢや。（能衣裳をぬぐ）

繁野　嘸本望でござんせう。わたしも、とも〳〵嬉しう思ひます。（能衣裳をたゝむ）

氏清　あの舞臺が出來、此の衣裳が出來たのも一つには、そなたのお蔭。嬉しう禮を云ひまする。

繁野　女房が夫の爲に貢ぐのは、あたりまへの事。水臭い事を云うて下さんすな。お前故ならどんな苦勞も厭ひませぬ。嫌やな大丸屋の座敷も勤め通して來ましたが、もし、清樣、先斗町の下屋敷は、今日建前ぢやと云ひまする。

氏清　そなたをひかせて住はせると云ふ彼の大丸屋の下屋敷が、いよ〳〵今日建前と云やるのか。

繁野　あい、あの下座敷の騷ぎは大丸屋。大勢の取卷きを

連れて、建前の祝酒に醉うて居るのでござりまする。私は一生斯うして居ても、お前と逢ひとほしてさへ居れば本望でござんすが、大丸屋にひかされてはお前に逢ふ事も出來なからうと悲しうてなりませぬ。あの下屋敷が出來上る日と私の命の終る日とは、大かた一緒でござんせう。

氏清　そなたに無理な工夫をたのみ、あの能舞臺さへ建てねば、そなたに斯うした歎きはかけまいに……。私もそなたの男、そなたが大丸屋へ行かねばならぬ破目となつたら。

繁野　何ぞ思案がござんすか。

氏清　相手は京に指折りの分限者、こなたは身の皮剝いでも高のしれた能役者、金で面は張られぬわ。

繁野　わたしや覺悟を極めて居ります。

氏清　そなた一人に覺悟をさせて、わしが默つて見て居ようか。

繁野　そんならお前も。

氏清　死ぬも生きるも二人一緒ぢや。

繁野　嬉しうござんす。……でも、それではあの子が悲しからう。矢張りお前は生き殘つて居て下さんせ。

氏清　はて、さうなつたら、清之助をさし殺し、親子三人一緒に果てるまでぢや。

繁野　すりや、眞實、それほどに。

氏清　念には及ばぬ。地獄へも極樂へも、手をひいて行かう。心を強う持つて居やれ。

繁野　まさかの時は、お前の手にかゝつて死ぬばかり、さう思案をきめたからは、もう泣く事もない、歎くこともない。

氏清　あの素町人の大丸屋づれが銀勘定をする手では、二人の仲は裂かれぬわ。

（障子口より左四郎出づ。）

左四郎　これはこれは清樣、寄り道でもなされましたか。大盡お出でが遲うござりました。繁野樣が、いやもう、えらいお待兼ねで。

氏清　まあ、こつちへはいれ。

繁野　さうして左四郎さん。あちらの首尾は。

左四郎　へえ。大丸屋の旦那は、もう醉ひつぶれて他愛もござりませぬ。御心配は御無用でござります。

氏清　（懷より紙入れを出し、紙に包みし銀を出して）左四郎祝儀ぢや。

左四郎　有難うござります。繁野樣頂戴いたしまする。（懷に銀包をいれる）

（大勢の人の騷ぐ聲して、障子口より大丸屋彥右衛門血相變へて出づ。續いて番頭次右衛門出づ。）

丈右衛門　もし、おまちなされませ。
（彦右衛門、座敷の入口に立つ。）
左四郎　おゝ、こりや大丸屋の旦那様。……こんな筈では
なかつたが。
（左四郎羽織を被りて逃げ去る。佐野屋の仲居、大丸
屋の店の者、幇間等階子口より出づ。）
繁野（葵の上の衣裳を氏清に被せてかこふ）
彦右衛門（繁野を押へて）おのれ、此處に居たか。此の
佐野屋まで來るほどで、氣分が悪いなどとは云はれまい。
こしらへごとを云うて、よくも男と忍んで居た。さあ、
大丸屋の顔ふみつけにした男を此れへ出せ。袋叩きにし
て呉れう。
繁野　まあ、まあ、待つて下さんせ。お前の座敷へ行きま
す程に、どうぞ勘忍して下さんせ。
彦右衛門　いや、勘忍ならぬ。さあ、男を出せ。えゝ、男
を出さぬか。
繁野　もし此の様にあやまります。それはつかりは勘忍し
て。（と手を合せる）
彦右衛門　いくらあやまつても勘忍ならぬ。えゝ、放せ、
放せ。
丈右衛門　あゝ、もし、旦那様、繁野様があんなに詫びて
居ます。
幇間　勘忍して上げて下さりませ。
仲居達　わたし達も御願ひ致しまする。
彦右衛門　男を冇すかはりには、繁野を男の名代に此の場
で折檻して呉れう。
（彦右衛門、繁野の襟がみをつかむ。氏清たまり兼て、
葵の上の衣裳をはねて前に出づ。）
氏清　男は、わしぢや。
彦右衛門　こりや能役者の氏清。幸、今日は下屋敷の建前
ぢや。祝うて一番舞うて貰はう。さ、座敷へまゐれ。
氏清　はゝ、戯言を云ふまい。素町人の分際では、十千萬
兩の黄金を積んでも、拜見は叶はぬ能を、斯かる遊里で
見たい等とは身の程しらぬ僣上沙汰。町人風情が袴を下
屋敷等と大名顔する法もあれ。禁裏公方の御前でもおめ
ずおくせず舞ふ能役者、山と黄金を積まうとも、素町人
の前で舞ふ様な金春氏清でないわ。
彦右衛門　やあ、云はしておけば云ひたい三昧の雜言。や
い、皆、此奴を座敷へ引ずつて行け。
氏清　おもしろい。何處へでも引ずつて行て貰はう。
（一同がためらふ處へ、大丸屋の手代富五郎、飛ぶ様
に階子を上り來る。階下にては騒ぐ聲きこゆ。）
富五郎　もし、旦那様。か、火事でござりまする。
彦右衛門　何、火事ぢや。

丈右衛門　何處が燒けて居るのぢや。

富五郎　先斗町のお下屋敷が燒けて居りまする。

彥右衛門　えゝ、どいつも、此奴も、氣にいらぬ事ばかりしてのける。棟梁の久太を呼べ。座敷守の金十郎を呼べ。えゝ、私が行く。

（彥右衛門去る。一同も續いて去る。氏淸と繁野の二人は、ほつと顏を見合せる。）

繁野　淸樣。

氏淸　繁野。

繁野　さぞ、無念でござんせう。勘忍して下さんせ。

氏淸　お互に怪我がなうて重疊であつた。

繁野　それにしても大丸屋の下屋敷が燒けて居るとは、わたしが爲には地獄で佛。一寸のびれば尋とやら。また建直すとて手間どるうちに、よい思案もつきませう。

（二人は窓によりて向うを見る。火の手紅く見ゆ。）

氏淸　おゝ、すさまじい比叡おろしにあふられて、火の手は南へ南へと廣がつて行く。

繁野　あの憎らしい大丸屋が、火よりも赤い顏をして、さぞくやしがつて居ようと思ふと、笑止な樣でも氣の毒な。

氏淸　おゝ、燃えるわ、燃えるわ。

（二人は、暫く眺めて居る。）

氏淸　（驚きの聲をあげて）　お。ありや木屋町。四條の方へ燃えて行く。それでは今度建てられた能舞臺にも火がつかう。

繁野　え。それでは今度建てられた能舞臺にも……。

氏淸　あれ、あれ、夜目にもしるき彼の高い銀杏の木が火の中に靈りと立つて居る。あの木の下の屋根が能舞臺ぢや。あゝ、火の手がそつちへ、そつちへと廣がつて行く。

（氏淸、失心したるが如く、撲と其處に坐る。）

繁野　これ、淸樣。氣を確かにして下さんせ。能舞臺が燒けたとて、また建直す法もあらう。力を落さずと、氣を確りと持つて下さんせ。お內儀樣や淸之助樣に怪我のない樣に、誰ぞに一走り行て貰ひませうか。それともお前が行きなさんすか。はて、どうしなさんす。もし、落着いて居る處ではござんせぬ。

氏淸　……。

繁野　もし、どうぞしましたか。

氏淸　罰があつたのぢや。

繁野　何と云はしやんす。罰があたつたとはえ。

氏淸　藝を粗末にした罰が當つたのぢや。（葵の上の衣裳を手にとつて）　晴れの舞臺ひらきに舞初めの衣裳、淸い上にも淸くせにやならぬ衣裳を、汚れた遊里に持つて來たばかりか、女の肩に懸けたは、私が一期のあやまり。天道の怒りにふれて、あの能舞臺は、私が足にふませまいと、火に燒かれるのぢや。

繁野　すりや、それ程に、汚れを厭ふ能衣裳を……。

氏清　そなたの肩にかけて、家の藝を粗末にした。罰が當つた。罰があたつたのぢや。

（氏清、窓によりて、火の手を見詰める。）

氏清　あ、能舞臺に火がついた。

繁野　え、能舞臺に火が。

氏清　棟が焼け落ちた。

繁野　わたしの苦勞も水の泡となつてしまうた。

（氏清は呆然と坐り、しばらくして起上つて、窓より向うを見て狂ふが如く。）

氏清　あゝ、あの屋根の上で翁高砂を舞うて居る。はつ、翁が火をふき散らして鐘馗となつた。

繁野　もし、氣を落ちつけて下さんせ。

氏清　鐘馗が劍を拔いて飛んで來る、何、わしを殺しに來るのか。

（氏清は怖ろしさうに突伏す。）

――幕――

二幕目

（一）

前幕より三月後の春の末。四條通りの金春氏清の住居。

板葺きのさゝやかなる假住居の庭には、半焼けし櫻の大樹あり。その下に井戸あり。そこらに焼けし材木など横たはり、庭の上手は粗末なる板圍ひをなし、下手に小さき門あり。二重の正面は襖。上手は床の間にて違棚に鼓を置く。下の方に戸棚あり。

（二重の中央に清之助と太一郎とは謠本を中に謠ひの稽古をなす。妻のお房は上手の縁近く縫ひ終りし着物を疊み居る。謠の聲終りし處にて幕あく。）

清之助　これ、太一郎。そなた今日は少しも身にしみて教へてくれぬ。どうぞしたのか。

お房　ほんに清之助の云ふ通り、今日は間も拍子もしどろもどろ。氣分でも惡うござんすか。

太一郎　さう云ふ譯ではござりませぬ……。

お房　でも、近頃は何やら浮かぬ顔ばかりして居るが、何か心配なことでもござんすか。そりやもう、こちの人も火事に遭うてから、あの通りな氣ぬけとなり、いつなほるやら、なほらぬやら。行末の見込みもない處に居るのは、さぞ張合のない事でござんせうが、數多い弟子達も皆な氣ぬけになつた師匠を見すてゝ行つてしまうた今、清之助が行末のたよりはそなた一人どうぞ私達が杖とも柱ともなつて下さんせ。

太一郎　（云ひにくさうに）それ程迄におつしやつて下さ

りますに、中にくうはござりますが、私はお暇がいたゞきたうござりまする。

お房　え。あの暇が欲しい。暇が欲しいと云ひなさんすか。

太一郎　とうから申上げようと存じて居りましたが、氣の挫けた樣になつてしまはれた、お師匠樣の御樣子を見るにつけ、たより少ない清之助樣のお顏を見るにつけ、申上げかねてをりました。實は國の父親が三月越しの患ひ、昨日今日は命の瀬戸ぢやと申しまする。息あるうちに一目逢ひたう存じますれば、どうぞ暫くの間、お暇をいただきたうござりまする。

お房　暇が欲しいと云ふ者に、無理に居て貰ひたうはござんせぬ。

太一郎　え。

お房　人の落目を見捨てゝ行くやうな薄情者。それとは知らず大勢の弟子の中にも珍らしいものたのもしいものと心で拜んでゐたが怨めしい。えゝ、も、どこへなと行つて貰ひませう。

（疊み終りし着物と針箱を戸棚にしまふ。）

太一郎　お内儀さま。それは餘りのお思ひ違ひ、父のわづらひつきましたは、お師匠樣がおわづらひなされた後でござりまする。それ故御心配を掛けるのが心苦しく何にも申上げませなんだが、父の病氣さへよくなりますれば、直ぐにも引返して參りまする。また萬一の事がござりますれば、あと／＼の事を弟に頼み、私は再び京へ參り、一生お師匠樣のお傍は離れぬ覺悟、人は兎もあれ私は、夢更お師匠樣を見捨てゝ行くやうな心は持ちませぬ。

お房　それはさうなうてはならぬ筈ぢやが、國の父さんの病氣とやらも、今聞くが初めて。三月越しの患ひであつたなら、今までに少しは私達の耳にも聞えるであらうに。今日になつて、今日明日も知れぬ病氣などとは、私はこしらへ事と思ひまする。

太一郎　拵へ事でない證據、今朝飛脚屋が持つて參りし國元よりの書面。御覽下さりませ。（懷より書狀を出して下に置く）

お房　僞手紙、拵へ手紙は讀まずとも判つてゐます。……薄情な弟子。恩知らず、義理知らず、後とも云はずたつた今、出て行つて貰ひませう。

太一郎　どうぞお思ひ違ひをなさらずに、暫時のお暇を。

お房　えゝ、くどうござんす。

太一郎　此の中開きは、重ねて京へまゐりし節……。それでは、やつていたゞきまする。

（立上りて戸棚より風呂敷包と手箱とを持つて出づる）

太一郎　では暫くの間お暇をいたゞきまする。

お房　とうから包まで拵へて、逃げて行く仕度をして居ま

したのか。
太一郎　いえ、いえ。決してさういふ譯ではござりませぬ。ではお師匠樣にお暇申してまゐりまする。
（太一郎、手箱を持ちて奥に入らんとする時、正面襖をあけて、瘦れたる氏清出づ。）
氏清　太一郎。どこへ行く。
太一郎　おゝ、お師匠樣。氣拔けになられたお前樣のお耳にも、太一郎のお暇をねがふ聲がきこえましたか。……私は今から暫くお暇をいたゞきまして、國まで行つてまゐりまする。
氏清　おゝ、然うか。國へ行くのか。久しく逢はねば繁野の顏を見忘れた。歸りに佐野屋に寄つて連れてまゐれ。
お房　もし、こちの人、何を云ひなさんす。その樣な氣拔けになつても、まだ繁野の名は忘れずに……。
太一郎　困つたことでござりまする。
お房　（太一郎に向ひ）今になつて何の繰り言。師匠の身持放埒をよい事にして、そなたは始終佐野屋に行つたではないか。えゝ、も、顏見るも嫌やぢや。早くいんで下され。
（太一郎は氏清の前に手箱を置いて。）
太一郎　お師匠樣、かね〴〵お預り致して置きました手箱を、お返し申上げまする。

（氏清うなづく。）
太一郎　それでは、お師匠樣。お內儀樣。淸之助樣。永い間お世話になりました。
淸之助　道中氣をつけて、父御の病氣がなほつたら、早く歸つて來て下され。
太一郎　必ず歸つてまゐりまする。お前樣もおからだをお大事になされませ。もし、お師匠樣、くよくよとなさらずに、氣を確りとお持ちなされて下さりませ。山川遥かに隔てゝ居ても、御全快を私は明暮祈つて居りまする。では、お內儀樣。淸之助樣。
淸之助　もう、行くのか。
お房　おゝ、くどい。早う去んで下され。
（太一郎風呂敷包を持ちて顧みがちに去る。淸之助名殘り惜しげに見送る。お房は氏清の前に置かれたる手箱を手にとつて。）
お房　封印した嚴重な手箱。これはお前のでござんすかえ。
氏清　大方さうであらう。
お房　つひぞ私は見たこともない手箱。氣拔けにならぬうちから、太一郎に預けて置いたものと見えるが、何ぞ大切な品でも入れておきなさんしたか。（封印を切つて、開けて見る。中より紙の書付を出して）おゝ、こりや何でござんす。もし、此の紙切れは何でござんす。

氏清　何であつたか。よう見て呉れ。

お房　えゝ、しら〳〵しい。こりや彼の佐野屋の繁野の起請ぢやござんせぬか。腐つた女の書いた紙屑の樣な起請を大事にして女房の私には見せまいと、太一郎にあづけて置きなさんしたか。手にとるも汚うはしい。火に燻べて灰にせう。もし、こちの人、此の紙屑は私が貰ひました。

氏清　おゝ、紙屑ならいらぬ。やらう。

（お房は起請を火鉢の火の中に入れる。炎ひらひらと上がる。）

氏清　あ、火、火が燃える。火事ぢや、火事ぢや。

之助　もし、父樣。火事ではござりませぬ。氣を確にして下さりませ。

氏清　（目の前に怖しきものゝ見ゆる如く）おゝ、すまぬ。私は家の寶を粗末にした。えゝなぜ衣裳を女の肩へかけたか。大切な能衣裳を女の肩へかけたか。何。火責にする。おゝ。（怖しさうにする）

お房　女とは言はずと知れた繁野の事。能の衣裳を繁野の肩へかけたと見える。苦しむも心から蒔いた種は刈らねばならぬ。私が今まで耐へて來た胸の炎だけでもお前の身は燒き盡されよう。（火箸にて火勢を猶盛んにする）

氏清　おゝ、あつい、あつい。斯かる火責の苦しさも繁野故には忍ばねばならぬ、繁野が尋ねて來るまでは、私は熱つと忍んで居る。たとひ地獄の底までも、手を引いて行かうと云うた詞は忘れぬ。繁野、そなたも忘れはすまい。おゝ、あつ、あつ、あつ、あついぞよ。宥せ、宥せ。宥して呉れ。（悶える）

清之助　母樣。父樣が火を見てあのやうに苦しんで居られます。もう火を消して下さりませ。

お房　そなたまでが父樣の味方をしやるか。父樣の今の苦しみは、私が今までの苦しみの萬分の一。そなたは默つて見て居なんせ。

（お房は又火を盛んにす。氏清は苦しんで突伏す。お房は心地よげに見てゐる。その間に清之助庭に下りて井戸の水を汲み、茶碗に入れて持つて來る。）

清之助　父樣。水でござりまする。

（清之助は茶碗を差出せば、氏清水をのむ。火鉢の炎消ゆ。）

清之助　すこしは落ちつきましたか。

氏清　これ、火の手が見えるか。

清之助　火はもう消えてしまひました。

お房　お前と繁野との起請。これ、この通り灰にしました。

氏清　灰になつたか。それでやう〳〵安心した。

（氏清安心したるが如く横になる。）

お房　（氏清を顧みながら）　氣が狂うたかと思へば正氣であり、正氣かと思へば氣抜けのやうにもなる。醫者は大酒が原因の氣抜けぢやと云はれるが、患うてから丁度三月。何時なほるやら、なほらぬやら。

清之助　これと申すも、あの大丸屋の普請場から出た火事の折、住居はもとより建てたばかりの能舞臺まで燒けたので、氣落ちをなされた爲でござりませう。火事にさへ遭はなんだら、斯ういふことにはなりますまいに。あの燒跡を見るにつけ、此の正月の火事が思ひ出されてなりませぬ。

お房　いや、いや、火事に燒けても、父樣があの繁野にさへ迷はずば、斯うした破目には、よもなるまい。ありあまる身代ではなし、久しい間の放埒に加へてあの火事ぢや。父樣を迷はせ、お酒をすゝめ、此の金春家を斯ういふ落目にさせたのも、皆な彼の繁野の業ぢや。

清之助　憎い女でござりまする。

お房　そなたもあの女を憎う思やるか。……もう此の上は、そなたが確りとせねばなりませぬ。太一郎が暇くれと云うた時、私は胸が煮えるやうで忘れてゐたが、明日は廣橋大納言樣のお能の日、太一郎が父樣に代つて勤める筈であつた葵の上は、そなたが勤めねばなるまい。

清之助　あの私が。

お房　葵の上は金春の家の藝。太一郎が歸つてしまうては、此の金春の家で、そなたの外に代るものはない。……葵の上の型を知つて居やるか。

清之助　數ある中でも許しものゝ葵の上。わたしは父樣から、まだ教へていたゞきませぬ。太一郎も行つてしまつた今、型を聞く人もござりませぬ。母樣。どうしたら、ようござりませう。

お房　私に聞いたとて、思案のあらう筈もない。父樣に教へていたゞくより外に仕方はあるまい。

清之助　その父樣が、あの御樣子では……。

お房　型を尊ぶ金春家の世嗣が、葵の上の型を知らぬやうでは、あとはつがれませぬ。私は此れから丸太町の伯母樣の所まで行つて來る程に、よう父樣から葵の上の型を伺うておきなされませ。廣橋樣のお能は明日。どうでも父樣に正氣に返つていたゞいて、今日は型をうかゞつておかねばなりませぬぞ。

（お房は戸棚より包を出して持ち庭に下りる。）

お房　明日の葵の上が勤まらぬやうでは、世間の手前、此の金春の家に置くことはなりませぬ。能役者の家では、晴れの舞臺に、一間、違うて家斷絶となつた例もある。まして型を尊ぶ金春の葵の上、型をよう伺うておきや。

清之助　はい。

（お房は門をあけて去る。清之助、氏清をゆり起す。）

清之助　父様。もし、父様。

氏清　何か用か。

清之助　葵の上の型をお教へなされて下さりませ。

氏清　何。葵の上の型ぢや。わしはもう忘れてしまつた。考へ出すのは面倒ぢや。太一郎に聞け。

清之助　その太一郎は、もう國へ歸りました。

氏清　では、母様に聽け。

清之助　母様は知らぬとおつしやります。父様が教へて下さらねば、外に聞く人がござりませぬ。どうぞ教へて下さりませ。もし父様。今日中に教へていたゞかねば私は此處に居られませぬ。

氏清　すこし默つて居て呉れ。葵の上の型を私は考へてゐる。考へごとをして居る時、しつこく物を云ふものではないぞ。

清之助　（やゝありて）もし、おもひ出して下さりましたか。

氏清　はゝ、忘れてしまうた。

清之助　父様。私が一生の大事でござりまする。明日の廣橋様のお能に、葵の上をつとめることが出來ねば、私はこの家に居る事が出來なくなりまする。どうぞ父様。葵の上の型を思ひ出して下さりませ。

氏清　えゝ、しつこい。思ひ出せぬ。忘れてしまうた。

清之助　物忘れなぞなさつた事のない父様であつたが……父様がこんなにおなりなされたのも、あの佐野屋の紫野故ぢや。思へば思へば怨めしいは紫野奴ぢや。

（清之助泣く。）

氏清　はゝ、何を泣く。何が悲しい。はゝ、はははは。（笑ふ）

——道具廻る——

（二）

前の場と同時刻。先斗町大丸屋下屋敷。數寄を凝らせし庭を前にせし座敷にて、二重の上手は床の間にて刀掛に刀を掛く。正面は襖、下手の障子は文字張りにて、腰に大雅堂の畫、欄間には額を懸けたり。

（大丸屋彦右衛門、番頭金十郎、出入小道具屋六三郎、七藏、幇間左四郎、市助、孝八、三味線引お近、お絹其他店の者、出入の者等居並び酒宴の體。お近、お絹の三味線にて、市助、孝八は踊り、踊り終りし處にて道具留る。）

彦右衛門　よせ、よせ。もう、よせ。お前達の踊りは何時も極まつて居る。

市助　これはどうも恐れいりました。

お綱　では、何ぞおもしろいものでも彈きませうか。
彥右衞門　三味も唄も、もう飽きた。皆なもう廢せ。
市助　實の處私達も踊りくたびれました。では息つぎに一つ飮ませていたゞきます。
金十郞　今日は此のお下屋敷の新築祝ひぢや。皆な思ひ切つて飮むがいゝ。
孝八　有難うございます。
市助　私は此の京へは昨今で、よく存じませんが、此の御下屋敷は、一度火事でお燒けになりましたのですか。
孝八　まあ、さう云つた樣なものだが、旦那樣が、あの繁野樣をひかせて圍ふ爲に、お內儀も御承知の上で、此の先斗町にお下屋敷をお建てになることになつたのだが、その建前と云ふ日になつて、普請場から火事が出たのぢや。
左四郞　今から丁度三月前、今年の正月の事だつた。
彥右衞門　あの折の火事さへなけりやあ、とつくに繁野は此屋敷に手活の花。
お近　繁野さんが、粹な藝子髷を高尙な髷に結ひかへた堅氣づくりは。
お綱　無一段と美しい事でござんせう。
お近　わたしも達もあやかりたうござんすな。
お綱　富五郞さんと丈右衞門さんが繁野さんのお迎へに行つたのは、もうさつきのこと。
お近　もう、おつゝけ見える時刻でござんせう。
左四郞　旦那樣と繁野さんとがお竝びなされたお睦じい處を、早く拜みたいものでございます。
（庭口より丁稚長松、儒者芝山七郞左衞門を案內して出づ。）
長松　芝山先生がお越しになりました。
彥右衞門　これはこれは先生には、ようこそお越し下されました。さあ、ずつと此れへ。
芝山　では御免下され。
（七郞左衞門二重に上る。長松去る。）
芝山　今日はお下屋敷の御新築祝にお招ぎにあづかり有難く存じまする。
彥右衞門　その樣に御叮嚀の御挨拶では痛みいりまする。見らるゝ通りの雜普請、御覽に入れる程ではござりませずぬが、粗酒一獻さし上げたくお招ぎ申しました。
芝山　誠に善美を盡くせし結構。おゝあの喜見閣と書かれた額は、近衞左大臣のお筆、こちらの樂といふ額は烏石先生のお筆でござるな。おゝ、お障子の腰は大雅堂の畫。何さま京にきこえた大丸屋のお下屋敷、見事なものでござりまするな。
彥右衞門　さうお褒めに預つては痛みいりまする。さあお

くつろぎ下され。一獻獻じまする。

（彦右衛門盃を七郎左衛門にさす。）

芝山　（盃をうけて）これはこれは恐れいりまする。然らば頂戴致しまする。

六三郎　芝山先生は、さすがに學者だけあつて、直ぐに書や畫にお目がとまりますな。

七藏　わたくし共は、さういふ事は少しも判りませんが、床の間の沈香には驚きました。

芝山　おゝ、床板は沈香でござるよな。違棚は黒檀と拜見致した。

六三郎　（庭の中門を指して）中門の柱は檳榔子、扉は紫檀白檀の寄せ木。

芝山　何處から何處まで結構づくめ。此正月建前の日に火事にお遭ひなされてからたつた三月の間に、これ程の御普請がよく運ばれました喃。

彦右衛門　大工どもをせかしたてゝの假普請、幸、天氣つづきであつたので、思ひの外はかどりました。

六三郎　これと申すも大丸屋の御威光。大工左官は夜晝なしに手斧や鏝を動かして、出來を急ぎました。

お近　此の立派な御普請を見なさんしたら、嘸、紫野さんがお喜びでござりませう。

彦右衛門　その紫野は、もうまゐりさうなものぢや喃。

（庭口より、手代富五郎出づ。）

富五郎　唯今歸りました。

彦右衛門　おゝ、富五郎か。待兼ねた。して、紫野を連れてまゐつたか。

富五郎　……

彦右衛門　どうぞしたか。

富五郎　紫野樣は御病氣でござりまする。

彦右衛門　何。病氣ぢや。風邪でもひいたか。

富五郎　はい。

彦右衛門　寒氣でもするか。

富五郎　やすんで居られまする。

彦右衛門　そなた紫野に逢うて來たのか。

富五郎　はい。

彦右衛門　醫者は誰ぢや。熱があるか。顏色が惡いか。

富五郎　實は紫野樣には、お目にかゝらずに歸つてまゐりました。

彦右衛門　えゝ、おのれ、何を云ふぞ。逢うたかときけば、逢はぬと云ひ、又、醫者の名を聞かずに歸つて來るとは何事ぢや。えゝ、人頼みでは埒があかぬ。わしが行つて來る。（起つ）

富五郎　（留めて）いえ、いえ。旦那樣がお出でなされては、却つて惡うござりまする。

彦右衞門　繁野の病氣見舞に、わしが行くのが、なぜ悪い。
富五郎　なぜでも悪うございます。どうでもお留め申しまする。
彦右衞門　おのれ、最前より辻褄の合はぬ事を云ふ。これには必ず仔細があらう。包まずと云へ包まずと申せ。
富五郎　何も別に仔細とては、ございませねど。
彦右衞門　なら、なぜ見舞に行くのを留めるか。
富五郎　外でもございませぬ。大丸屋の旦那ともあらうお方がお一人で、佐野屋の取込みの處へお出でなされては、御身分と申し、人目もあればお留め申しまする。
彦右衞門　いや、初めて行く佐野屋ではなし、毎日通ふ下河原。人の大勢入込むは今日初めての事でない。はて、合點のゆかぬ。何にもせよ。
（彦右衞門、庭に下りんとす。富五郎袖をひかへて。）
富五郎　もう此の上は何をお匿し申しませう。繁野様は佐野屋におゐでなさりませぬ。
彦右衞門　な、な、なんと云ふ。
富五郎　繁野様は佐野屋におゐでなさりませぬ。
彦右衞門　繁野が居らぬと申すか。して、何處へ行つたのぢや。
富五郎　さあ何處へお出でなされたやら行方しれず。高臺寺門前の親元か、豫ねて馴染の能役者の家にかと、佐野屋は上を下へとの騒ぎでございまする。
（彦右衞門、煙管にて富五郎を打つ。）
彦右衞門　えゝ、おのれ、何を云ふ。大金出して此の彦右衞門が請出した繁野、行方知れずときいて、何故其儘に戻つて來た。
富五郎　一緒にまゐつた丈右衞門が跡に殘つて、掛合うて居りますれば、私は一足先きに戻りました。在りの儘を旦那様に申上げましては、さだめしお怒りと存じまして、嘘を申上げました。おゆるしなされて下さりませ。
彦右衞門　えゝ。おのれ如きものがあればこそ、主人が人中で恥をかく。堪忍ならぬ。それへ出い。（煙管を振上げる）
金十郎　まあ、まあ、お待ちなされませ。
左四郎　繁野様のお行方は、私達も探しまする。
彦右衞門　退け、退け。
芝山　はて、まあ、堪忍しておやりなされ。
（彦右衞門、七郎左衞門の頭を煙管で打つ。七郎左衞門、頭を抱へて逃る。彦右衞門は支へる一同を突退けて富五郎を滅多打に打つ。番頭丈右衞門庭口より飛んで歸り、それと見るより彦右衞門の手にすがつて）
丈右衞門　こりや、もし、旦那様。お前様氣でもお違ひなされましたか。日頃お氣に入りの富五郎。なぜ、その様

に手荒らな事をなさりまする。

彦右衛門　おのれは丈右衛門、紫野はどうした。紫野は如何いたした。

丈右衛門　まだ行方が知れませぬ。佐野屋では所々方々へ人を出して、探して居りますれば、追つけ判るでござりませう。

彦右衛門　えゝ、今日の酒宴は誰の爲ぢや。座敷びらきは、つけたりで、實は紫野の引祝ひではあるまいか。紫野を此處へ連れて來ねば、大丸屋の顏が潰れる。直ぐ引返して行つてどうでも紫野を連れて戻れ。

丈右衛門　それは探しにも參りませうが、旦那様、よくまあお考へ下さりませ。今日の事も皆彼の女奴の不身持より起りし事。たとひ紫野様の在所が知れませうとも、性根の腐つた畜生女。思切つておしまひなされませ。

彦右衛門　性根が腐つて居ようと居まいと、私の女ぢや。汝の知つた事ではないぞ。汝は紫野を連れてまゐれば可いのぢや。連れて參れ。連れて參れ。紫野を此處へ連れてまゐれ。

丈右衛門　それ程までに彼の狐奴にだまされてお出でなさるか。もし、旦那様。先達而もお内儀様のお里から、彦右衛門は蕩子狂ひをなし、家内不取締の由、屹度異見を致せよとの仰せ。又御親類紅屋の旦那様も、お前様お身持に就ては、いろ〳〵氣をもんで居られまする。只今まで大丸屋へ蕩子など請出した例はござりませぬ。彼の女奴が逃亡したは勿怪の幸、これを機會に、思切つておしまひなされませ。

彦右衛門　えゝ、主人に向つて無禮の雜言、憎い奴ぢや。

（床の間の刀掛の刀を取つて鞘の儘ふりあげ打たんとするを、丈右衛門、確りと掴み。）

丈右衛門　そのお怒りは、御了見違ひでござりまするぞ。

（彦右衛門、刀を再び振上ぐる時、刀は鞘走りして丈右衛門は肩先より切られて死ぬ。）

富五郎　こりや、旦那様、とんだ事をなされました。

（彦右衛門刀の血を見ておどろく。やがて血相かへて起上り。）

彦右衛門　刀は村正、大丸屋三代に傳はる名刀。どいつ此奴の用捨はないぞ。（刀を振上ぐ）

（一同逃げて庭に下りる。彦右衛門も庭へ飛下り、皆を追うて向へ馳去る。）

―― 道具廻る ――

（二）

もとの氏清の住居。

（氏清茫然と椽の柱により庭を眺めて居る。清之助手

をついて縁に控へる。)

清之助　父樣。もう思出して下さりましたか。

氏清　おゝ、何であつたな。

清之助　葵の上の型を思ひ出して下さりましたか。

氏清　忘れてしまうたよ。

(向うより包を抱へて繁野出で門口で内の樣子をうかゞふ。)

清之助　父樣。くどい樣ではござりまするが、明日は廣橋樣のお能の日、太一郎に代つて私が勤める葵の上の型を、どうぞ思ひ出して敎へて下さりませ。もし、父樣。

氏清　……。

清之助　母がお歸りなさるまでに覺えて置かねば、私は此の家を追ひ出されます。太一郎は國に歸り、父樣の外に敎へて貰ふ人はござりませぬ。思出して下さりませ。

(繁野は、父子の外に誰も居らぬを見定めて、門の前に立つ。)

繁野　御免下さりませ。

清之助　どなたでござりまする。(門の傍に行き繁野と顔を見合せて)おゝ、お前は佐野屋の女。(と、一旦開きし門の戸を閉めて)お歸り下され。父樣はお前故に氣拔けになられた。母樣も、私も、お前を怨みまする。

繁野　その怨みは尤も。したが今日は心急きの事があつて、鳥渡でも清樣に逢ひたく佐野屋をぬけて、此處まで來ました。鳥渡此處を閉けて下さんせ。

清之助　いやぢや。母樣の留守に、お前を家へ入れては叱られる。早く歸つて下され。

(繁野は斷られて思案に暮れしが、やがて思ひついて。)

繁野　今此處で聞いて居れば、葵の上の型を父樣に聞いて居た樣子、もし、清之助樣。私が葵の上の型を敎へて上げませう。

清之助　何。葵の上の型を、お前が知つて居るのか。

繁野　知つて居ります。敎へて上げるのは易い事、さあ、此の門をあけて下さんせ。

清之助　(門を開けて)では、おはいりなされ。

(繁野は、はいると、氏清の傍に馳寄る。)

繁野　おゝ、清樣。逢へた。逢はれた。何にも云はぬ。これ、地獄へでも、極樂へでも一緒に連れて下さんせ。

(氏清は繁野にとりすがられても、茫然と其の顔を見て居る。)

繁野　もし、よう來たと何故に云うては下さんせぬ。此の正月の火事からこのかた、思うてぢやと聞いて居たれど、はれて來られぬ勤めの身。時々、太一郎さんにお前の樣子をきいて、蔭で案じて居りました。もし、きつう瘦れ

なさんしたなあ。

氏清　……。

繁野　もし、お前、私が判りますかえ。

氏清　誰であつたか、忘れてしまうた。

繁野　お前は繁野を見忘れてか……。これ、私の云ふことを、よくきいて下さんせ。建前の日に焼けた大丸屋の下屋敷は、其後改めて建直し、今日新築の祝ひ日に、私の身體は大丸屋に請出されてしまひました。私は死んでも、あの大丸屋にひかされる氣は微塵ござんせぬ。親方さんには濟まねど、覺悟を極めて、佐野屋をぬけて來ました。かうして居るうちにも追手が來よう。もし、切迫つまつた今日の破目、かねての約束を違へずに……。えゝ、もし。

（氏清默然として居る。）

繁野　これ程までに氣ぬけになつて居ようとは、わたしや少しも知らなんだ。同じ火事に遭うても、あの憎らしい大丸屋では、以前にまさる家を建て、此處では焼跡にかすかな住居、まだ其の上にぬしは此の様な氣ぬけとなつた。今更佐野屋へは歸られず、死ぬにも死なれぬ。（泣く）

清之助　もし、繁野殿。

繁野　（清之助を見て）おゝ、わが子の……いえお前様の見る前も恥かしい繰り言、どうぞ聞きながして下さんせ。

清之助　約束の葵の上の型を教へて下され。

繁野　さあ、葵の上の型を知つて居ると云うたは、あの門を閉けて貰ひたさの私が詐り。葵の上の謡や鼓は主に教へて貰うた事もあれど、舞は少しも知りませぬ。でも、わたしの一心でも、父様は思ひ出して下さらう。もし、清様、我が子が一期の大事、葵の上の型を思ひ出して下さんせ。

氏清　あゝ、何も彼も私は忘れてしまうた。葵野、繁野と先刻から、そなたが云ふので、佐野屋の繁野を思ひ出し、戀しいあの女の面影を忍ばうと思うても、どうも思ひ出されぬ。あゝ、わしは女の顔さへ忘れてしまうた。

繁野　その繁野が尋ねて來たのが判りませぬか。

氏清　おゝ、そなたは繁野に似た様な、似ぬ様な……。あゝ、久しく逢はねば繁野の顔さへ忘れはてた。……思ひ出せぬ。思ひ出せぬ。あゝ。

繁野　もし、氣を落着けて、とつくりと、わたしが顔を見て下さんせ。もし……。

氏清　（繁野の顔を熟と見て後）おゝ、そなたは繁野。嬉しや逢ひに來て呉れたか。家の藝を粗末にして、神にも佛にも見放されし氏清が、今まで火責の苦しさを忍んで斯くはながらへしも、切迫つまりし破目とならば、共に地獄の底へも手を引き行かん約束のあればこそ。

繁野　氣拔けになりし心にも、うれしや其の約束を忘れずに。

氏清　その約束を忘れてよいものか。さあ、行かう、一緒に行かうぞ。

（氏淸は繁野の手を取り庭に下り、井戸の處まで行き、井戸の中をさしのぞく。）

淸之助　もし、あぶなうござりまする。

（淸之助も庭に下りて、氏淸の側に行く。繁野は淸之助に案じるなと眼まぜでしらす。）

繁野　はて、何をその樣に見詰めて居なさんす。

（と、繁野も井戸の中をのぞく。）

氏淸　おゝ、繁野。なぜそんな處で悲しい顏をして居るのぢや。（井戸の中を熟と見つめて居る）

（繁野は、はつとして顏をあげる。）

氏淸　（井戸の中を見詰めた儘で）はて、今のは幻か。私を捨てゝ何處へ行く。これ、繁野。何處へ行くのぢや。

（井戸の中を更に深くのぞきて、水に寫る我が顏を見て）おゝ、おのれは大丸屋彥右衞門、はて氏淸が何處へ行かう。知れた事ぢや。繁野が許へ通ふのぢや。（井戸の底より我聲の反響するが聞ゆる心にて）なに、繁野が許へ通ふのぢや。繁野が許へ。おのれ、通ふのか。はゝゝゝはゝ。たとひ、百夜を繁野が許に通はうとも、繁野が魂は奪はれまい。おのれ、家も燒け。恥もかゝせよ。地獄の底の底までも、私は繁野の魂を確りと抱へて行くのぢや。（井戸の側を離れて）神にも、佛にも、見放され、我が魂さへ失うた氏淸は、繁野が戀の嬉しさに、斯うして生きて居るのぢや。生きてさへ居れば、いつか繁野が、たづねて來よう。繁野が尋ねて來るまでは、火責のくるしさも忍んで居るのぢや。

（氏淸はふら〳〵と步きて、二重の緣に腰を掛け、眼を閉づ。）

繁野　私が顏が判つたかと思へば、判らぬやうな。もし、淸之助樣。

淸之助　悲しい事でござりまする。

（繁野と淸之助とは泣く。氏淸は緣の上に、ごろりと橫になる。繁野はそれを見るより近寄りて。）

繁野　お。その樣な處に橫になつては、身體に障りませう。もし、淸樣。淸樣。おゝ、眠つておしまひなさんしたか。

（繁野と淸之助とは二重に上り、氏淸の顏をのぞく。）

繁野　どこぞ氣合でも、惡うござんすか。（暫く顏を見て後、前に持ち來りて隅に置きし包より葵の上の衣裳を出して）これはお前があの火事の折、置いて行かれた能衣裳。私は今までお前と思うて、肌身放さず持つて居ました。いまはの時には此の上でと思うて持つて來ましたが、

お前が其様子では、死ぬにも死なれぬ……。床に寝て、冷えると悪い。これでも、かけて。(と、葵の上の衣裳を、氏清に懸けて清之助を顧みて) 清之助様。所詮此の様子では、葵の上傳授の望みは絶えました喃。

清之助　私は家を出されねばなりませぬか。

(繁野は涙を拭ふ。)

氏清　(眼を開いて衣裳を見詰め) お丶、こりや葵の上の衣裳ぢや。

繁野　嬉しや、それが判りましたか。

氏清　お丶、判る。これは葵の上の衣裳ぢや。

繁野　では、それを着けて舞うて下さんせ。

氏清　お丶。

繁野　(氏清に葵の上の衣裳を着せながら) さすがは藝の家の生まれ、藝に育つた人程あつて病の爲に何も彼も忘れ果て丶しまうた心にも、舞の手振はおぼえて居た。わたしの顏は見忘れても、能の衣裳は忘れてしまはなんだ。悲しい様でもたのもしい。もとより斯うした氣抜け同様の病ひであれば、わづらはぬ前の様に、心の籠つた舞振りはむづかしからうが、永い年月身についた舞の型は崩れまい。(衣裳を着せながら清之助にむかひ) 鼓はわたしが打ちまする。

(清之助は、違棚の鼓を持ち來り、繁野の側に置く。)

清之助　お前様のお蔭で、父様が型を見せて下されば、わたしは此家を追ひ出されずに、明日のお能が勤められます。有難うござりまする。

繁野　わたしも一心に鼓を打ちます程に、名人上手とよばれる父様の葵の上、よう覺えてお置きなさんせ。(衣裳を氏清に着せ終りて鼓を持ち上手に控へる)

氏清　(構へて)

謠　(恨めしの心や。あら恨めしの心や。

(起つて舞ふ。)

(繁野鼓を打つ。清之助下手に控へて熱心に見る。)

謠　(人の恨みの深くして、憂き音に泣かせ給ふとも、
生きて此の世にましまさば、水闇き澤邊の螢の影
よりも、光る君とぞ契らん。

(此の謠の終る頃、お房下手より出で木戸の外より内の樣子をうかゞふ。下手より彦右衞門血刀をさげて走り出で、後よりお房を斬り倒して内に入る。繁野はそれを見て驚きしが、今は大事の場合と觀念して鼓を打ちつゞけ、うたひつゞく。氏清は虚心にて舞ひつゞ

く。

謠へ妾は蓮生の、もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへことに恨めしや。夢にだに、かへらぬ物を我契り、昔語りになりぬれば、猶も思ひは増鏡。

(以上の謠の間に彦右衞門は繁野に斬りつけんとす。繁野は一度鼓にて受けとめ、二度目の太刀にて肩先を斬らる。清之助おどろきてうろ／＼なす。彦右衞門は氏清に斬りつけんと身構ふ。繁野痛手を負ひながら鼓を打ちつゞけつゝ、その間に割つて入る。氏清は平然と舞ひつゞく。下手より大丸屋の店の者達大勢金十郎を先に立て彦右衞門のあとを追うて來り門内に入る。一同彦右衞門を取つて押へんとす。彦右衞門大勢をつきのけて向うに走り去る。)

金十郎　やあ、主人とは云へ他人に怪我させてはならぬ。刀を早く打落せ。

(金十郎初め一同は彦右衞門のあとを追うて向うへ去る。)

謠へその面影もはづかしや、枕にたてる破車。

(繁野は痛手を耐へて謠ひつゞける。氏清は舞ひつゞける。清之助は今の騷動に怖れながらも氏清の舞を見て居る。)

謠へ打ちのせかくれ行かうよ。かくれ行かうよ。

(謠ひ終りて、繁野がつくりとなる。同時に氏清は能衣裝の儘糸の斷れし操人形のやうに横になる。お房は門の處まではひよる。此時迄一心に氏清の舞を見て居たりし清之助は、それと見て庭に下りお房の傍に駈け寄る。)

清之助　もし、母樣。(泣く)

(繁野は鼓を力に首をあげ何か云はんとして云ひ得ず落入る。氏清衣裝をぬいで起上る。)

氏清　はは、はゝゝゝ。

(氏清は大きく他愛なく笑ふ。)

――幕――

木村富子篇

玉菊（二幕三場）

登場人物

中萬字屋玉菊
奈良屋茂左衛門
伊勢屋與兵衛
與之助　同倅
おふみ　與之助嫁
二朱判の吉兵衛
近江屋半四郎
おみつ　近半女房
綾衣　遊女
三吉野　同
白玉　同
誰袖　新造
露芝　同
しげみ　禿
しのぶ　同
お玉　女中
お梅　同
お袖　同
おまん　藝者
お葉　同
おきん　同
其他、番新、やり手、禿、茶屋女、按摩、駕屋、臺屋の若者、竹村の若い者、そばや、辻占賣、子守、太鼓持、素見客など。

第一幕

第一場

享保十年七月七日の夕暮。江戸吉原角町中萬字屋二階。遊女玉菊の部屋。床の間に懸物、花瓶に時の花、屏風衣桁、鏡臺、其他の調度はすべて上品なる好み。

（よき處に遊女、綾衣、三吉野、白玉、新造誰袖。傍に七夕竹を立掛け、これに銀紙にて種々の定紋を切抜いて結ひつけてある。盆の上には、色紙、鋏、小がたななど取散らしあり。少しはなれて鏡臺の前に、禿しのぶ、しげみの兩人。しげみは紅き紙を丸く切抜きておのが頰に貼りつけ、（椿頰紅の意）しのぶは茄子の皮を

口に含みて、これも茄子鐵漿をよそほひ、代る／＼鏡を覗いて興じてゐる。奥の方より河東節の唄が聞えて來る。）

河東へしやんと小づまをとりかぶと、それにはあらぬ編笠も、男欲しさの星祭り、七夕の夜も仇に見ん、小袖をかりの狩衣と、着流しながし長羽織、結べば笹の枝たれて。

綾衣　ほんに禿しゆが仲の町の菖蒲打ちも、昨日のやうに思ひイしたが、今宵は斯うして七夕まつり。

三吉　綾衣さんの云ひなます通り、月日の立つのは今更に早いものでムんすな。

白玉　勤の習ひと云ひながら、思ふお人に逢ひたさゆゑ、牽牛や織女にあやかるやうと、お星さんに願ひをかけ、戀しい殿御の紋所を斯うして笹の葉につなぐものの、此の思ひが何時叶はうやら叶はぬやら、果敢ない事でムんすな。

綾衣　それとは引替へ花魁は、彼の奈良茂さんの贔屓を受け、此中からの揚詰に飛ぶ鳥もおとす勢ひ。

三吉　夏の雪見や冬の花見と、人目を驚かす遊びにも飽いて、今宵は奥の大廣間へ、蘭洲さんと半太夫さんを呼び、好な河東や江戸節を代る／＼語らせながら、父治をさせて居なますとは、羨ましいではござんせぬか。

白玉　あの淨瑠璃の催しは、此の間からの評判で、廓中のきつい評判……今宵は家中を總仕舞にしなまして、其の上聽人には手厚い御馳走……阿彌陀様より何とやら、全盛な事でござんすな。

（ト廊下の正面より太鼓持吉兵衛出づ。）

吉兵衛　もし誰袖さん。今此處へ花魁に逢ひたいといふお人が來なさるから、奥へ行つて、密と知らせて上げてお吳んなさいまし。はて案じるには及びません。此の吉兵衛の古馴染、しかも胡麻の親仁さんでございますよ。

誰袖　それでも若しやお大盡さまから、御小言が出た其時は。

吉兵衛　はて、其時はお前さんの口前で、候べく候にやつてお置きなさいまし。

誰袖　わちきには如何してそんな。

吉兵衛　そこがそれ、立引といふものでごぜえやすよ。

誰袖　そんならお呼び申して來やうわいな。

（誰袖は正面の襖へ入る。綾衣は禿達を顧る。）

綾衣　しげみどんも、しのぶどんも、お客さんがお出でなさんすゆゑ、そこらを片附けて下さんせ。あれ此の子とした事が、今から鐵漿つけろ事習うて何うしなさんすぞ。

白玉　もしや今日が庚申さんなら、七庚申つけねばならぬぞえ。

（禿達はあたりを片附けて去らんとす。）

吉兵衛　あゝこれ。今花魁を此處へ內證で呼ぶ事は、奥へ行つても、それ今の庚申さんのやうに、かならず、見ざる、聞かざる、言はざる、といふ事に賴みましたぞ。

禿　あい、あい。

（禿二人に續いて他の遊女たちも奥へ入る。吉兵衛は後を見送りて廊下の正面のひらき戸をあけ手招ぎすれば、伊勢屋與兵衛、ふけたる扮裝にて、一つの包みを持ち、あたりに氣を兼ねつゝ入り來たる。）

吉兵衛　もし、これで暫くお待ち下さいまし。花魁は何も彼も呑み込んでお二人に逢はうとおつしやいます。好い頃を見計らつて、若旦那は私が密とお連れ申しますから、必ずお案じなされまするな。

與兵衛　何から何まで吉兵衛さんのお心つかひ、忝う思ひまするぞ。

吉兵衛　では御隱居樣。御ゆつくりとお茂りなさいまし。はゝゝゝゝ。

河東〽正月遊び戀草の、手まづさへぎる手道具を、並べた琴の雁金も、二つ連れぬを恨みとや、三つ四つ手まりつくばねの。

（ト此の文句の中に吉兵衛は廊下の正面へ入る。後に與兵衛は床の掛物など見て感心する體。此時正面の襖の中にて。）

玉菊　伊勢與さんがお出でなんしたか。いまそれへいて逢はうわいな。

河東〽品をやり羽子はねうちかはす乙鳥、雀の飛ぶさにも。

（トしのぶは菓子を持出で與兵衛の前におく。玉菊は露芝に手をとらせ出る。そのあとよりしげみは袱紗を添へし抹茶の茶碗を持出で少し後にひかへる。玉菊はふとんの上にすまふ。）

玉菊　本町の呉服問屋伊勢與さんと、お名はかねがね聞きイしたが、お目にかゝるは今が初めて……妾が中萬字の玉菊ざます。どうぞ是から贔屓にしてお呉んなまし。

與兵衛　そんならお前さまが、廓に名高い玉菊さんの花魁でムりまするか。

（座を下り手を仕へて何事か言はんとするを、玉菊は手でとめる。）

玉菊　あゝ、もし、何事も吉兵衛さんから聞きイした。不束な姿の手前、まあ一つお上りなんし。

（ト禿に持たせたる茶碗をとりてすゝめる。）

與兵衛　花魁から折角の御馳走、御遠慮なしに頂きまする。

河東〽にくい〳〵は可愛の裏よ、厭ぢや〳〵は又その裏よ、泣いておどすはソレ裏の裏、ヨイヤナ。

（此の内に與兵衛は菓子を喫し、茶をのむ事。）

與兵衛　あゝ結構なお服加減でムりまするな。又焚物は軒の月と覺えまするが、お茶の味にふさはしい香りといひ……廓の中にも此のやうな侘びが有らうとは、奥ゆかしい事でムりまするな。

（ト感心せし思入。）

玉菊　これ、露芝。伊勢與さんとは內證の話。用があれば呼ぶほどに、二人をつれて奥へ行きや。其の茶碗も……。

（露芝は心得て茶碗を引き、禿を連れて正面の襖へ入る。）

玉菊　吉兵衛さんから樣子を聞き、見ぬ戀にあこがるゝとやら……心待ちにして居りイしたが、好う訪ねてお出でなんした。

與兵衛　（面目なげに）以前の身代なら兎も角も、今では田町に小商する伊勢與が作づれへ、當時吉原で名うての花魁が、揚詰の座敷を投け、逢うて下さると聞いた時は、夢では無いかと思ひさした、とは云へ、六十の坂を越えた身体で大門をくゞり、華美な花魁へしがないお頼み……恥しいとも、厚かましいとも、總身に冷汗が流れまする。

玉菊　何のそれは要らぬ御遠慮、ものの心を知り初めて間もなく兩親の手許をはなれ、辛い、悲しい、味氣ない、色の世界に人と成り、肉身の愛しさといふものを知らぬ妾、月とも花とも一人子を思ひなさんす親御の慈悲は、果敢ない遊女の身に染みて、いつそもう此の胸が切なう成りイした。

與兵衛　斯う申せば定めてお笑ひなされませうが、あの與之助は私の命綱でムりまする。世にある時のふところ子、千貫目の釜の湯氣で育て上げ、うき世の汐が染みませねば、今日に成りましても、心は生無垢一本氣で、ふとお前さまを見染めてからも其れとは言はず、腕限り根かぎり丹精凝らして書き上げた墨繪の小袖を、一度でも花魁に手を通して貰うたら望みは足りる。それでさつぱり思ひ切るとの誓言が不便さに、昔馴染の吉兵衛さんを頼んだ今夜の仕儀。もし花魁、親の心はおろかなもの、子故の暗には後も先も滅茶苦茶でムりますわい喃。

（包の中より一枚の白小袖を一寸見せる。）

玉菊　言ひ憎い殿御の意地を捨てゝ、よう打明けて下さんした。傾城冥利嬉しうムんす、嘘僞は手管なれど、此の小袖のぬしさんには、眞實誠に逢ひたうムんす。逢うての上で御得心のゆくやうに、意見もして上げイせう。早う逢はせてお異んなんし。

與兵衛　おゝ。そんなら花魁から異見をなされて下さりまするか。あゝ、それで漸う心が落付きまする。何をおかくし申しませう。幼馴染の從兄同士、嫁も引取つてムりまする。その又嫁も孝行、貞女。倅の心を悋氣もせず、此の小袖も我から進んで縫ひ上げました。どうぞ御らうじて下さりませ。

（ト白小袖を玉菊の前へ出す。）

玉菊　おゝ。外の女子はその樣に心の優しいものでありんすか。揃ひも揃うて羨しい……。

與兵衛　どれ吉兵衛どんに禮をいうて行きませうか。そんなら花魁。もうお暇申しまする。

玉菊　モウおかへりでムんすか。一寸お待ちなされませ。

（ト奥へ向ひ）誰袖……。（ト呼ぶ）

（これにて奥より、はいと答へて誰袖出づ。）

玉菊　あのお歸りぢやほどに一寸……。

誰袖　ようざます。（とあたりへ心をつける）

玉菊　あなた、お菓子を……。

與兵衛　有難うぞんじまする。（トよろしく白身で包む）

玉菊　それでは氣をつけてお出でなんし。

與兵衛　有難うぞんじまする。

（ト獨吟に成る。）

獨吟〽戀の關守誰がすゑおきた、思ふ顔には逢はでぞ歸る……

（與兵衛は誰袖に送られていそ〳〵と歸りゆく、やがて正面の廊下口より、禿二人は恥しがる與之助の袖を引きてともなひ出づ。與之助は十八九歳。黑き袖頭巾を被りたり。）

しげみ　花魁が先刻から、主を待つて居なますから。

しのぶ　早う行つてお上げなんし。

獨吟〽つらき人目や彼の業平の、歌の心にいかなる君も……。

（此の獨吟のうちに、部屋の中へ突きやりしまゝ二人はすぐに姿をかくす。與之助は頭巾を取り、つぎほなげに部屋の隅にうづくまる。）

玉菊　與之助さんとやらでありんすか。まあ、これへおいでなんし。八朔の白小袖に墨で書き繪とは、いつそ新しくて氣に入りイした。主の情の染み透つた此の白無垢は、來る紋日の晴小袖……たんとお禮を言ひますぞえ。

（與之助は漸く胸を据ゑ、其儘手をつく。）

與之助　此の三月仲の町の近江屋さんへ、商用で參りましたが、其時花魁の姿を見たのが迷の初め、我が心で我が心を押へましても、それからそれと煩惱の覊絆は伸びるばかり、夜毎の夢は廓へかよひ、はては山谷の土手の露に打たれ、道哲の鉦の音に責められて、立ち明かす夜も重なり、我ながら不甲斐なさに。いつそ此の身を……と思うた事も厶りましたが、一人の親の情に縛られ、此樣な恥しい目に逢ひまする。

（詞さへ消入るやうに、面目なげにさしうつむく。玉菊は身にしめて聞く。）

玉菊　一心こもつた筆の綾に主の心も分りイした。多くの人に馴れた姿も、眞實殿御の赤心に觸れたのは今が初めて……ほんに世に傾城ほど果敢ないものはありイせん。みぢん誠の無い客しゆから、何の彼のと手管を言はれてさへ身のほまれとも喜びともしまするぞえ。まして業平さんを見るやうな主さんから、死ぬるほどに思はれた玉菊は果報者。今宵はさらりと打解けてまあ一ぷくお上りなんし。

獨吟（逢はばゆるしやれ名も立たじ。

（玉菊は煙草を吸ひつけて與之助の手に渡し、そのまま寄り添うてこなし。與之助は今さら夢見る心地して、只玉菊のなすがまゝに任せてゐる。折から新造誰袖、あわたゞしく襖を明けて出づ。）

誰袖　もし花魁。奈良茂さんが今此處へお出でなさんすぞえ。

玉菊　え。奈良茂さんが此の座敷へ。

（與之助も驚きに度を失ふ。玉菊は取りあへず、誰袖にいひつけ、衣桁のかけを取り冠せて與之助を屏風のかげへかくす。正面の廊下より、吉兵衞の聲高くきこゆ。）

吉兵衞　お大盡さま。お危う厶りまする。

唄（清少納言がよまれたる春曙とは面白や、なんなんたる清掻きに、かん〳〵たる買手衆が、花を飾りて初買に、寄せくる廓はどんとめく〳〵。

（ト廊下より、酒に醉ひたる奈良茂。太鼓末社はこれ

を支へながら大勢出づ。)

奈良茂　おゝ。花魁は此處に居たのか。何時の間にか廣間を拔け出し、此の座敷で又飮直さうといふ洒落か。さあ、みんな、此處で酒だ、酒だ。

(奈良茂は陽氣に手を叩く。太鼓持は奥より酒肴を運び出づ。)

玉菊　ああもし。妾は逆上せて頭が痛うてなりイせん。此處で少しの間、靜にさせておいてお呉んなんし。

しげみ　そんなら花魁、袖の梅でも上げイせうかえ。

奈良茂　いや、花魁の藥には何よりも酒が好いはずだ。私が相手をする。誰か大きなものへ注いでやるが好い。

(人々は顏見合はせて躊躇する。玉菊は心を決し、臺の上の盃洗を取つて差出す。)

玉菊　なるほど、妾には藥よりも酒が好い、さあ、波々と注いでお呉んなんし。

誰袖　あれ、花魁としたことが、そんなものでお上りなんしたら、如何に大酒のお前でも、後で難儀に成らうぞえ。

奈良茂　ほう。流石は玉菊、小氣味のよい事ぢや。さあ注いでやれ。注げ。早う注がぬか。

(激しき詞に詮方なく、吉兵衛は波々と注ぐ。玉菊取つて一息に飮みほす。)

奈良茂　おゝ。見事だ。もう一つ重ねたがよい。

綾衣　(見かねて)　花魁は強う醉うてお出でなさんす。もう勘忍してお上げなんし。

玉菊　いえ／＼構うて下さんすな。さあ注いでお呉んなんし。

(ト盃洗を差出す。吉兵衛は再び恐々注ぐ。玉菊半ば飮みほして、苦しげに息をつく。)

玉菊　あい。玉菊は醉ひいんした。醉うてゐるうちが妾の世界……もう斯う成つたら、妾の前に恐いお人は誰も居りイせん。さあ、是からは心の底を口まかせに、言ひたい事を言ひますぞえ。

(人々は、はら／＼する。)

奈良茂　面白い。何なりと言へ。先づ第一に、揚詰の座敷を拔け出し、どんな忍び男に逢うて居たか。それから先に聞かして貰はう。

玉菊　ほんに主の言はんす通り、此處で醉ひざましとは眞赤な嘘。

奈良茂　なに、嘘と言うたな。(屹と睨付ける)

玉菊　あい。嘘を言ふのは勤めの慣ひ。

奈良茂　むゝ。

玉菊　さあ、嘘の皮は誠、誠の骨は嘘でありんす。迷へば嘘も誠となり、悟れば誠も嘘と成る、言はゞ遊女の裏表。たとへ揚詰の身體でも、間夫は勤の憂さ晴し。又一人の

客しゆにせかれ、他の客しゆを離れるのは、親方さんへの大不眞實。主定まらぬ夜毎の枕かはるが勤の慣ゆゑ、うき川竹の身と言ひやんす。

白玉　もし花魁。其のやうに言うて、後に又附るお人もあらうぞえ。

玉菊　他の人は知らぬこと、此の玉菊は禿立から廓に育ち、勤のわけの一つや二つ、憚りながら知つてゐるぞえ。妾の忍び男といふのは、そも突出しの初から、深う逢ひそめた愛しいお人。奈良茂さんには又此の中から、しげしげと來なまして、此の玉菊に全盛をつくさせて下さんす大恩。そりや今さら妾が言はいでも廓中へ知れてゐる。なれどもそれゆゑに彼のお人を袖にする時は、慾にほだされ見代へる道理ゝな。人の落目を見捨てるは廓の恥と言ひやんす。傾城の勤の身は色を商ひ情を賣る。慾の爲に勤はせず、流れを立てる身の上に、張と意氣地が無うては遊女の名折。廓のしよわけが暗になりイすわいな。

奈良茂　むゝ。道理ある花魁の詞。此の上は奈良茂の顏を踏みつけにした相手の男を探し出せ。

（人々はためらふ。與之助は堪りかねて、かけを刎ねのけ屏風のかげより進み出づ。）

與之助　人目の逼を越えた花盗人。さあ御存分になされませ。

（奈良茂は之を見て扨はとうなづく。）

綾衣　お大盡の目を忍び、此の座敷へ入り込みなさんした、不敵のお人と思ひのほか。

白玉　まだ前髮の若しゆさんとは。

（皆々呆氣にとられる。與之助は悪びれたるさまもなく。）

與之助　傾城にこそ手管もあれ、人の花を手折らうと致しましたは私のあやまり。一代の男も廢りました。二度と廓の土は踏みますまい。口先で申さぬお詫びのしるし……。

（傍に落ちたる小刀を取り上げ、自ら前髮を切り落として奈良茂の前にさしおく。）

與之助　奈良茂さまとやらへ申譯の一品。これで御了見下さりませ。

奈良茂　成程、年若な町人には見上げた魂。女郎の座敷で、しかけを着て元服せうとは天晴れ粹め。氣に入つた。男は當つて碎けろぢや。改めて奈良茂から杯を進ぜまするぞ。

玉菊　そんなら主の心も解け、與之助さんへ杯を上げなさんすか。

奈良茂　おゝ。奈良茂も男ぢや。今夜は二人で心おきなく……奥の廣間で飲み直さうか。

（ト又もとの唄に成り、奈良茂は先に立つ。皆々つゞい

て入る。)

與之助　左樣ぢや。

(與之助は再び小刀を取り上げる。玉菊は其の手にとり縋る。)

玉菊　あゝもし短氣な事をしなますな。見得の場所といひ滿座の中で、髮まで切つて下さんした心中だて……浮草にも根はござんす。二世と誓ひのしるしには、此の指なりと切らうわいな。

(與之助おどろきて止む。)

與之助　まあ待つて下さりませ。生れついた一本氣に、後先の分別もなく前髮を切り落としましたが、よしない義理を立てすごして指などを切つて下さりまするな。(と無理にとめて)それでは心の廣い奈良茂さまへ、恩を仇でかへす道理。

玉菊　ほんに義理といふ字は野暮なものでありんすな。なるほど奈良茂さんは大切なお客。妾のためにはさしも金銀も石瓦でござんす。それを思へば我身も儘にはなりイせん。とはいひながら、金銀づくでは買はれぬ遊女の誠を、小袖と前髮とで買うた主は、此の廓一番の粹さまと言はれイせう。

與之助　せめてはそれを心ゆかしに……もうお別れ申しまする。

玉菊　そんなら聞き分けて下さんすか。

(ト玉菊は手を叩き、誰袖を呼出し。)

玉菊　あの最前の茶碗を……。

誰袖　はい。(トすぐ茶碗にふくさを添へて玉菊の手に渡して入る)

玉菊　此の茶碗は楢の葉とて、妾の爲には祕藏の道具。先刻ぬしの親御さんへ茶を立てゝ上げイしたが、今宵のお禮に主から屆けて上げてお吳んなんし。中の文字は、迷ふもよし原悟るもよし原……とかいてムんす。千貫目の黃金の匂ひも、一服の薄茶の泡も同じこと、朝夕手馴れて妾の心がこもつた茶碗……何卒途中で破さぬやう……(與之助へ掛けて云ふ)罅一つ入らせて下さんすな。

(與之助は詞の謎を悟りて面目なげにさし俯く。廊下の彼方に高き聲。)

夜廻　火の用心さつしやりませう。

(與之助はつと氣を取直し、頭巾を取りて立上る。玉菊は我にもあらず其の袂に手をかける。)

玉菊　あれ忙しない。秋の夜は長うざますよ。

(兩人顏を見合はせる。かすかに拍子木の音を聞かせ、しづかに道具まはる。)

第二場

中萬字屋の塀外。忍び返しをつけたる板塀。仲の町の遠見。月は傾き、引け過ぎの軒下には、誰そや行燈の灯かげ寂し。

（下手より、肩から斜に箱を下げた辻占賣りは、通ふ千鳥戀の辻占と呼びつゝ上手へ入る。入れ違ひに素見客二三人、もどり來て向へ入る。遠方に按摩の笛の音。犬の聲などきこゆ。）

河東へしら鷺は使に來たかたゞ來たか、使ひにも來ぬたども來ぬ、妻をたづねてしら濱こえて、逢うて戻れば千里も一里、あはで戻れば又千里、ほんにへ。

（上手より、頭巾まぶかに人目を避けたる與之助。魂のぬけたるごとく漂ふやうに歩み出づ。）

與之助　生なかに人の情が身に染みて……逢はぬ昔がましであつた。とはいへ此の姿で、親仁さまやおふみの手前、どう顔が合はされよう。

土手ぶしへ道の街のふたもと柳、風に吹かれてどちらへなびこ、とのごの方へなびこ。

（と後の方にて唄ふ。）

與之助　えゝ、どうともなれ。誰も捨てた、世も捨てた。

（そのまゝ、たそや行燈に身を凭せる。薄く風の音。折から上手より提灯を下げし男を先に、菅蓆ひの早桶、白布で巻き、上には薄鼠色のかけを乗て、男がかつぎ、與之助の前を過ぐ。後より禿一人悄然と袖を胸に合せたまゝ、涙ぐみて従いて向へ入る。與之助は、ふと面を上げて、之を見送る。）

與之助　おゝ。道哲へ送られて行く禿と見ゆる。ありし妻を夢にして……あれが未来をたのむ遊女の門出か。

（誘はるゝやうにふら／＼と、其のあとに從うて向へ入る。二階のすだれより廊下へ、同じ思ひに見おくる玉菊の淋しき姿。）

玉菊　今日は人の身。明日は誰が身に成らうやら。ほんにあはれな……。

河東へ露を命の置きどころ、命といふ字は誰が書いた……。

（玉菊はじつと成る。遠く拍子木の音……。木なしにて幕。）

第二幕

同じ年の八月一日の夕暮れ。仲の町近半の見世先。二重家體の正面に出入りの襖。よき所に燭臺をおき、門には近江屋とかきし行燈をかける。表には用水桶。毛氈をかけたる長床几など。下の方につゞきて灯入りの揚屋。三味線、太鼓、鼓など陽氣にきこゆ。

唄〽忍ぶ頭巾で宵から門口の身の毒、夜風身の毒、千代内ござれの身の毒夜風……。

(幕明くと、店先に女中お玉。お袖。お梅。腰をかけて往來を眺めてゐる。素見の客。提灯を下げたる茶屋女。半纏を着たる臺屋の若い者、按摩など。入りまじりてゆきかふ。)

お玉　日の中は暑いやうでござんすが、朝夕は大分しつとりして來たやうでござんす。

お袖　廓の賑ふのも之からでござんすな。

お梅　さう言へばもう道中が見える時分。ずゐぶん手落ちの無いやうに、煙草盆の火も直し、そこらも氣をつけて下さんせ。

(皆々あたりを取りつくろふ。此の時上手より、氣狂ひだ氣ちがひだといふ聲きこゆ。間もなく前幕の伊勢屋與兵衛。髪も亂れてしどけなき姿。玉菊の茶碗をふところに抱へ、足下もしどろに出づ。素見客三四人これを取りまく。)

與兵衛　(空を仰ぐ) おゝ好う咲いた喃。此の櫻も美しいが、まだ美しいのは玉菊ぢや。姿も心も美しいゆゑ……おゝ與之助は何處にゐる。玉菊のところへか。おゝ左樣か、左樣か。どれ私も行かう。(言ひかけて懷中の茶碗を見る) いや/\與之助は此處にゐる。此のやうに私の懷中に抱へてゐる。おゝ、乳が欲しうてせがむのか。よい、よい。いま澤山乳を貰うて飲ませうぞ。おゝ泣くな。誰がよ、誰がよ。

(子をあやすやうに、ゆすり上げつゝ下の方へ狂ひ行く。女中たちは痛ましげに其の後を見送る。やがて正面の奥にて、道中ちや/\といふ聲につれて、鐵棒の音につれ、男女うちまじりて出で來たり、上手下手に人垣をつくる。)

河東　〽外八文字おうように、足は千鳥か鶯の、月日星ぞと啼く時は。四方うら/\とうらやまし、よそのくぜつの手枕に……。

（ト名入りの提灯。つゞいて長柄の傘をさしかけさせて、遊女玉菊。前幕の白小袖をたをやかに着なし、八文字を踏みて出づ。禿、抱へ。新振り。番新。鴇婆など後にしたがふ。人々は口々に、玉菊、玉菊とさざめき合ふ。そのうちに道中の人々は近江屋の表へ足を止める。茶屋の主人半四郎夫婦は、女中ともぐ\出むかへる。）

半四郎　花魁、お芽出たうござりまする。

みつ　まづ御ゆるりとお休みなされませ。

（玉菊はじめ皆々床几へかける。玉菊は新造誰袖に、用意の目録をはなにやれと思入で知らせる。誰袖は心得て女房に渡す。おみつは女中にやる。半四郎初め一同にて。）

皆々　花魁有難うぞんじまする。（と禮を言ふ）

與兵衛　なに、玉菊ぢや。どれ……。

（ト與兵衛は下手より走り出づ。玉菊その姿を見てはつとする。人々も驚く。）

與兵衛　嬉しや、與之助を連れて來て下されたか。おゝ、此處に居る。此處に居る。

（走寄つて、目覺えのある玉菊の小袖に手をかけんとす。新造たちは慌てゝ之を遮る。與兵衛はけろりとして、四邊を見る。）

與兵衛　おゝ雪が降るわ。何處も此處もまッ白ぢや。白無垢の花嫁御さま……おゝ此の人の背の中まで、まッ白に透きとほる。（玉菊を指してからぐ\と笑ふ。）

みつ　えゝ縁起のわるい事を、言ひなさんすな。

半四郎　飛んでもない、氣ちがひ殿ぢや。

（皆々怒りて立ちかゝる。群集の中より嫁おふみが走り出でゝ與兵衛をかばふ。）

ふみ　何誰さまもどうぞ御了見なされて下さりませ。一寸目を放すうちに此のしまつ。私がつれて歸ります。（與兵衛の袖を引く）もし父さん。私の顏が判りませぬか。（父の目の先に我が面をよせて指す）さ、いつしよに歸りませう。

（なだめ賺して歸らんとす。玉菊は誰袖をさし招く。）

玉菊　彼のお二人を、これへ呼んでお呉んなんし。

半四郎　（不審さうに）花魁はあの人達に由縁でもありまするか。

玉菊　（うなづく）由縁も由縁、大切なお人でありんす。

（一座は白ける。互に眼と眼で囁き合ひなどす。此のうちに誰袖は、おふみの傍に行きて囁く。おふみはつと胸に堪へるさま……遂に心を定めて、玉菊の前にすゝみ出づ。）

ふみ　玉菊さまとやら。親子二人が此の姿で、千萬人に笑

はろゝより、たつた一人のお前さまに見らるゝが、恥しうございまする。（淺瀬なげに俯く。）

玉菊（やはり切なげに）思ひがけない伊勢與さんの今の御様子……譯を聞かしてお呉んなんし。

ふみ（恨めしげに玉菊の顔を見上げる）もし、玉菊さま。與之助どのは、先月七日から、かいくれ行衞が知れませぬ。

玉菊　え。

ふみ　父さんの持つて居なさんす、彼の茶碗一つを形見に殘して……それから斯うした物ぐるひ。明けても暮れても、わが子の名を呼びつゞけて……もう此の頃では私の顔さへ覺えませぬ。

玉菊　そんなら此の白小袖も、彼の茶碗も、ぬしの形見に成りイしたか。（何か心にうなづく）もし改めてお前さまへお目にかける品がござんす。

（ふところから紙に包みし切髪を取出して、おふみの手に渡す。）

玉菊　與之助さんの佛はこれ……死ぬるまで肌身に添へて行きたい品なれど、優しいお心にほだされて、お前さまへ返しまするぞ。

ふみ（手に取上げて驚く）そんならこれが……（胸せまつてはら／＼と落涙す）賴る人には捨てられて、世の中の女子の數にも洩れた私に悲しいお形見……一生泣けとて下さんしたか。

（切髪を抱へて泣き伏す。）

玉菊　廓に全盛を唄はれても、あの世へ行くには只一枚の白小袖。やがておわびは……おやぢ様の御介抱も、今と成つてはお前さまお一人。必ずお身を大切にしておくんなんし。

ふみ　生きたい望みはムんせぬが……（正體なき父を指す）死なうにも死なれませぬ。御推量なされて下さりませ。

（玉菊は泣顔を見せじと、懷紙で面をかくす。皆々同情して、しんみりとなる。此の時上手より奈良茂。たいこ持の吉兵衛、藝者、おきん、お葉を連れて出づ。）

半四郎　これは好うお出でなされました。

みつ　花魁が先刻からお待遠でござんする。

玉菊（泣顔を酔に紛らす）おゝ、奈良茂さん。よう早う來てお呉んなましたな。

奈良茂　花魁は相かはらずか。餘程めれんに見えまする喃。

（玉菊と並んで床几に腰をかける。左右をかへり見て機嫌よく。）

奈良茂　何にしても好い八朔だ喃。今年は花魁にねだられて、白小袖を添へて、みんなへ配らせられたが、

來年の秋には何樣な趣向にやるか喃。

玉菊　來年の秋……もし奈良茂さん。今から乾度約束をしておきイすが、來年の秋には、此の仲の町から五十間へかけ、お茶屋お茶屋の軒先へ、妾の名入りの燈籠を殘らず點けてお呉んなんし。

奈良茂　燈籠か。其れも好からう。奈良茂が乾度呑み込んだ。花魁の名が廓を離れて、世間へぱつと評判に成るやうに、隨分華美に拵へさせよう。

玉菊（莞爾として手を合せる）嬉しうござんす。それ聞いて安心しいした。（晴れやかに、又淋しげに）吉原の大路を見渡すかぎり、青い涼しい燈籠の灯が、秋の夕風にゆらめく時、世間の人は、玉菊燈籠ぢや。玉菊燈籠ぢやと、果敢ない遊女の一生が、何時の世までも語り草に殘りイせう。

（奈良茂も其の詞に醉へるが如く、滿足さうに笑みつつうなづく。をりしも空に渡り鳥が啼いて過ぐ。玉菊は軒端を仰いで淋しき顏色。……やがて又、鳥の聲……こたびは、やゝ遠くの空にきこゆ。與兵衛は耳を傾ける。ふと、何者かに誘ばるゝ如く。）

與兵衛　おゝ、與之助が呼んでゐる。

（走り寄らんとして、矢張り空の方へ心を取られてゐる奈良茂に突きあたる。拍子に懷中の茶碗が破れる。）

與兵衛　やあ、破れた、大切の茶碗が破れて仕舞うた。ハア……。

（ふところを押へた儘、手放しで泣きいだす。）

奈良茂　おゝ。こりや私の疎忽ぢや。ゆるさつしやれ。

玉菊　それは何時ぞや妾から、伊勢與さんへ上げた繡の萩の茶碗でありンせうが、女子の心と同じやうに……脆いものでござんすな。

（奈良茂は氣の毒さうに與兵衛を見る。やがて半四郎を見て。）

奈良茂　これ半四郎、こなたに預けた金のうちから、百兩此所へ持つて來てくれ。

半四郎　へえ、畏りました。

（ト半四郎は奥へ入る。）

奈良茂　玉菊から伊勢與へ、誠を立てゝ送つた戀の茶碗ぢや。其の破片ひとつを、奈良茂が小判一枚づゝで買ひませう。

吉兵衛　えゝ。その茶碗の破片一つが小判一枚。

皆々　えゝ。小判一枚……アノ小判一枚……。

（トあたりの人々は、與兵衛のまはりへ寄つて來る。）

與兵衛　えゝ何ぢや、何ぢや、何をするのぢや。あゝ此品が欲しいのか。よし〳〵、今撒いて遣りませう。

（與兵衛はふところへ手を入れ、茶碗の破片を片手に

摑んでふり上げる。）

與兵衞　それひろへ。露ぢや。露ぢや。

（ばら／＼と振り撒けば、人々は爭うて拾ひかゝる。以前の按摩も杖を投げ捨て、手探りに出でて這ひまはる。與兵衞は此の體を見て、他愛なく手を叩きて喜ぶ。おふみは後よりその體を支へて、ぢつと涙を呑む。玉菊は思ひに堪へかぬるごとく。）

玉菊　年ごろ手馴れた茶碗も破れた。やがて此の身も土くれに……。

（ト奈良茂、玉菊、それ／＼に思入。しづかに三味線と、遠くに鐵棒の音をきかせ、よろしく幕。）

舞踊劇 高野物狂（一幕）

人物

物狂ひ（實は高師四郎）

花若丸（實は平松春滿）

其の他、里の子、足利の家來。

時

春

場所

紀州高野山の麓路

（山颪の音で幕明くと、淺黄幕の前に、足利方の武士四人が弓矢をたづさへ立ちかゝり居る。）

武士の甲　いかに方々。今日斯くいかめしく出で立つたは、先年越前藤島にて、討死なせし新田方の大將、平松左近が忘れ形見の春滿が、都をのがれて此の山奧にひそみ居る由、密に告げ知らする者あつて、即ち我等は討手の爲。

武士の乙　其の春滿とやらは、稚兒姿に身をやつし、花若丸と名乘り居ると申すこと。

武士の丙　たとへ子供であらうとも、南朝くさいと見たならば、根を斷ち葉を枯らせよとは、我君からの嚴しい仰せ。

武士の丁　此上は八方へ眼を配り、もしそれらしき稚兒を見附けたら、有無を言はさず搦め取り、我君の見參に入れ奉らむ。

武士の甲　其時こそは我々も、重き御恩賞に預るは必定。殺生禁斷の靈場なりとて、決して容赦は致されな。

皆々　承知いたした。

武士の甲　然らば直に參ると致さう。

（しめし合はせて一同は下手へ入る。トすぐ竹本に成る。）

竹本〽ありし昔の花の袖、ありし昔の花の袖、今日墨染と匂ふかな。憚はしや花若丸、思はぬ嵐に散り殘る、我身一つを漸うと、故郷をはなれ紀の國や、高野の山にたらちねが、後の世願ふ菩提心。

（トこれにて淺黄幕を切つて落とすと、本舞臺は一面の所作舞臺にて、やゝ上の方に寄せ、山際より遠山を望みたる景色。中央に枝を伸したる大松。處々に櫻の立木。松の傍に一基の地藏尊など、すべて紀州高野山麓路の體よろしく、地藏尊の前に、稚兒花若丸は、水晶の珠數と花手桶とを持ちて、後向に立つ。）

竹本〽佛に供ふる閼伽の水、きよき双手に珠數つまぐり、

念佛なすこそ殊勝なれ。

花若丸　歸妙頂禮地藏尊。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

竹本〽たゞ頼め、み佛のおん惠み、ふかき山路も踏み馴れて、麓へ辿り行く春の、長き日脚に何がなと、遊び呆けた惡戯盛り、はぢき、石投げ、竹の馬、目んない千鳥のひと群が。

（ト花若丸は地藏尊へ禮拜をなし、花桶を下げたまゝ、下手の方へしづかに入る。よきほどに向より、里の子供が四五人駈け出づ。竹馬に乘るもの、棒の先へ蝶々を結びつけし者など。）

竹本〽紀州紀の川、荒川粉川(こかは)、おまん包むは竹の皮よ。

竹本〽まろくなれ〱、仲よい同士のまん圓く、十五夜お月樣ほどまろくなれ。

竹本〽山寺の坊樣(ばうさま)は、紙がないとて、無いとて木(こ)の葉へ字をなろた。散りぬる木の葉へ字をなろた。

（ト舞臺へ來たり振りあつて、やがて向を指す。）

甲の子供　あれ〱向から、子供好きの氣違ひが、後追うて來をるぞよ。

乙の子供　おゝ。ありや踊りの上手な、面白い氣違ひぢや。

丙の子供　みんなそこらへ隱れてゐて、嬲つて遣らうぢやあるまいか。

皆々　それが好い。それが好い。

竹本〽なぶつて遊ぼと腕白(わんぱく)共、囁きひしめく道の邊(べ)に、松吹く風のひとしきり。

（ト里の子らは木かげへ隱れる。うすく風の音がして、櫻の花少し散りかゝる。此時向より、高師(たかし)四郎は物狂ひの體にて、花やかなる小袿(こうちぎ)を肩にかけ、櫻の折枝を持ちて出づ。）

長唄〽陸奧(みちのく)の忍ぶ文字摺り誰ゆゑに、亂れそめにし思ひをも、いざ言づてん雁金の。

竹本〽歸る空さへうちかすみ、おぼつかなくも呼子鳥、花の行衞を辿りつゝ、風狂じたる心かな。

（ト花道にて愁の振り。やがて舞臺の方を見てフト思入。すぐ陽氣な合方に成る。）

唄〽さつても揃うた、今日の田の、太郎次の娘はどれがそぞ、錦の小袖、綾の帶。

（ト文句につれて、物狂ひは陽氣に狂ふ。）

物狂ひ　つばくろの、育ての親はこゝにゐる。あの雛鳥は奧山の、から竹藪の中にゐるとか。おゝ、どれ、どれ、どれ。

唄〽性度(しやうど)も菜種にくるふ蝶、翼もかろき小袿(こうちぎ)の、裾吹き返す春風や、とめ木がかをるみちもせに、忘れは草の名にあれど、忍ぶは君が面影と、松を目あてに來たりける。

（ト文句一ぱいに舞臺へ來る。）
竹本〽それと見るより、立ちふさがり。
（子供らは木かげを出でて、物狂ひを取卷く。）
甲の子供　これこれ、此處は女人禁制のお山ぢや。
乙の子供　女子の着る物を着て、上る事は成らぬ、成らぬ。
丙の子供　何うでも上りたいと言ふなら、其の美しい着物から。
竹本〽脫ぐなら通そと口々に、兩手ひろげて通せん坊。
甲の子供　どつこい遣らぬぞ。通れるものなら。
皆々　さあ通つて見さいな。
物狂ひ　何ぢや、取つて見よなら、おゝ、取らいでか。
竹本〽子を取ろ、子取ろ、どの子を取ろな、後の後の小法師を、ついと往て取つてくりよ。
（ト物狂ひは、子供らを相手に振り。）
唄〽さし出す手許足もとも、亂れ散り散る花もみぢ、
吉野初瀬のそれにもまして、戀しきものを。
（此のうちに物狂ひは、子を捕へては、一々その面を見て、又突きはなす。）
物狂ひ　えゝ、曲もなや。
唄〽あゝ陽炎の、面影ばかり。
竹本〽面かげばかり戀しやと、形見の衣を身に添へて、
正體涙に伏ししづむ。
（ト物狂ひは小袿を抱へて泣く。）
甲の子供　あれ〳〵、笑止や、氣違ひ殿がお泣きやる、お泣きやる。はゝゝゝゝ。
皆々　はゝゝゝ。
竹本〽手拍子打つてさゞめけば、梢の花の、はらはら〳〵、泣きつ。
（ト物狂ひは松の根方へ伏沈む。）
甲の子供　わあい。
乙の子供　わあい。
皆々　はつはつは。
唄〽笑ひつ、我先に、家路をさして逃げかへる。
（里の子らは向へ駈け入る。夕暮の鐘鳴りて、又一しきり花が散る。をりしも花若丸は下手の方より戻り來て、此の體を見る。）
竹本〽花若丸は歸り路に、はるかにそれを見るよりも。
花若丸　何處をさして旅人の、物に狂へる有樣は。
竹本〽氣の毒さよと立ちよりて、心も淨き閼伽桶の、水
ふくませて介抱なし。
（ト文句の如く、花若丸は物狂ひを介抱す。）
花若丸　喃、旅のお人。み心たしかに持ちたまへ。

竹本〽いふ顔つれ〲うちまもり、ふつと正氣に高師の
　四郎。
（ト物狂ひは、花若丸の顔をつく〲と見て、屹と成
　る。）
四郎　やゝ。正しくあなたは、春滿さま。
春滿　おゝ。汝は高師四郎ならずや。
四郎　おゝ。若君にて候ふか。
春滿　四郎にて有りけるか。
四郎　若君。
春滿　四郎。
　唄〽おなつかしやと手を取り合ひ、たゞ涙のみ先立て
　り。
竹本〽四郎は容を改めて。
四郎　さるにても、三とせぶりにて若君の、御機嫌よき御
　顔を拜するうれしさ。これもひとへにみ佛の。
竹本〽おん加護ぞやと伏しをがめば、涙のひまに春滿は、
　傍の衣に目をつけて。
春滿　おゝ。目覺えのある其の小袿。さては母上もろともに
竹本〽おん越しありしか懷しやと、早や立ちかゝる心根
　を、察して四郎は呑込む涙。
四郎　あいや。奥方には、是へはお出で遊ばされず。それ
　に就いて四郎より、きこえ上げたき一とほり。

竹本〽まづ〱御聞きあれかしと、松の根元に座をしめ
　て。
四郎　さてもおん父上平松殿、越前藤島にて、おん討死あ
　りしより、御一門には皆散り〲。所詮のがれぬ御運の
　末と、おん母若君のおん供なし、夜半に紛れてみ館を
　出で。
竹本〽心は暗き月かげの、落ち行く道さへあらけなき、
　追手の者に取りかこまれ。
四郎　若君をば見失ひ。心もそゞろ尋ぬる折しも、奥方に
　は流れ矢にて、其の場を去らせず、無慘の御最期。
春滿　すりや母上にも、御落命とな。
四郎　今さら申上ぐるも涙。思へばあるに甲斐なき四郎。
竹本〽共に冥府のおん供と、思へど今はの御一言。
四郎　汝此のまゝ死すならば、我が家もこれを限りぞ。春
　滿の行方尋ね出し、時節を待ちて平松の、家名を再興さ
　せくれよ、四郎たのむのおん仰せ。
竹本〽せひもなく〱御袿を、再び君へあひじるしと思
　ひ立つたる旅衣。
四郎　物狂ひと身を粧ひ、なほ遠近とさまよふうち、若君
　には菩提寺の、僧に負はれて此のみ山へ、上りたまふと
　洩れきくうれしさ。
竹本〽心の駒の勇み立ち、これまでまゐり候と、

物語れば春滿も、一しほ聲をくもらせて。

春滿　思へば果敢ない我が身の上。此のみ山は本朝の靈場。弓箭いまだ及ばねば、三とせの間師の御坊の、情の露に育まれ、今日まで過ぎしも今一度、母上にめぐり逢ひたき爲なるに。

竹本〽昔戀しきうつり香を、とめてかひなき袖ごろも。

春滿　おん形見とは情なや。南無幽靈出離生死頓生菩提。

（ト春滿は、小袖を松ヶ枝にかけて、稱名を唱へる。）

竹本〽合掌なすぞいたはしき、四郎は淚うちはらひ。

四郎　それにつけても敵方には、いまだ若君のおんゆくへを、嚴しく詮議致す由、片時も心許されず。此上は一先づみ山を下りたまへ。

竹本〽はや／＼常陸へ御供と、身ごしらへする折こそあれ、來かゝる以前の兵ども、斯くと見るより大音上げ。

武士の甲　やあ、あれぞ正しく平松の忘れ形見、春滿にきはまつたり。

竹本〽主從を押取卷き。

武士の乙　花若丸と名乘る稚兒こそ、かねて尋ぬる平松が小倅。

武士の丙　注進によつて、我々召捕りにむかうたり。

武士の丁　手向ひなさば、討ちとらん。

竹本〽はげしき詞に、きよろりくわん。

（ト四郎は再び、狂氣を粧ふ。）

四郎　はゝゝゝ。何ぢや。打てとはさつても小鼓か。花若とは、おゝ、さくらの花の、紅の。

唄〽しらべを千鳥にかけさせて、あかうの胴に加賀皮くれ。

（ト傍の花桶を取上げ、中の水を人々へ、さつとかける。これより手桶を鼓によそへて振り。）

唄〽殿はな、小鼓の上手よ、しつたんに、しつたん、しつたん、拍子に合はせ打つたるは、さつても扱も、打つたる小鼓、どつと褒めて通した。

（ト四郎は春滿を庇ひながら、振りにまぎれて、武士の持つたる弓矢をもぎ取る。）

竹本〽山路の花のふくよかに、につこりほやりの笑顔は誰ぞ、今日の日和に鳶とろゝや山の芋、つる／＼つる突つぺつた、籠の外の鳥を、弓でとらうか矢で取ろか。

（此のうちに、武士の一人は何か心づきたる如く、人に耳打ちする。）

武士の甲　さてこそ、此の氣違ひめは、噂に聞いた高師四郎か。それ油斷すな。

（ト今度は皆々、四郎へむかふ。）

四郎　なに、わしの事を案山子とは。
竹本〽山田の案山子が、小雨に濡れる、弓矢はあれど蓑ほしや、小笠小蓑が欲しとゆた。
唄〽言うても野馬の耳に風、吹くは梢のゆふ嵐。
竹本〽もとより鼓は浪の音、松吹くかぜに、とう〳〵とう。
（ト四郎は武士達にからんで振り。）
四郎　あら怖ろしや、亡き君の、修羅の妄執晴れ給はず。
竹本〽憎き敵を、疾う〳〵うてや、打てや〳〵と攻鼓。
唄〽瞋恚の焔は緋ざくらの、風にもまれて、ばらばら〳〵、こなたは狂氣のみだれ髮。
（ト吹きおろす山風につれて、櫻の花烈しく散る。四郎が狂氣の舞ひも次第に物すごく見ゆ。兵たちも此の有樣に氣味わるく、又あしらひかねて、たぢ〳〵と成る。）
武士の甲　やあ〳〵、俄に山が鳴動なすは。
武士の乙　こりや唯事では厶るまい。
武士の丙　察するところ、弓矢をおびたる我等のいでたちゆゑ、もしや佛罰ではあるまいか。
武士の甲　これは大事ぢや。南無大師遍照金剛、ゆるさせ給へ。許させたまへ。
武士の丁　くはばら、くはばら。
皆々　萬歳樂、萬歳樂。
竹本〽何が何やら、よしあしも、しどろもどろに兵ども、大地にひれ伏し震へゐる。
（ト皆々弓矢を投げ出し、大地へ打伏す。）
四郎　彼の嵐は靈地の加護。斯くなる上は、長居は無益。
春滿　師の御坊にも、はやおさらば。
唄〽やがて花咲く春滿も、名殘りはつきぬ御山の奧、聖が方へ暇乞ひ。
（ト四郎は小袿を取り、春滿は、手にせる珠數を地藏尊の首にかけ、はるか彼方へむかひ、暇乞ひをして立ち出づ。）
竹本〽しをるゝ心、はげます四郎。
唄〽疾く〳〵立たせ、立つか弓の。
竹本〽春を待ちえてふるさとへ、歸るぞうれしかりける、歸りゆくこそ。
（トこれにて幕外に成り、兩人はホッと息をつく。やがて名殘り惜しげに振りかへる春滿の身體へ、四郎は以前の小袿をさつと着せかけ、手をひきつれ、片手には矢張り、櫻の枝をふりかざしながら、狂ひ〳〵て向へかけ入る。）

弘津千代篇

吉田御殿（一幕）

登場人物

天樹院　徳川秀忠の女、本多美濃守の未亡人（二十七八歳）
花井繁之丞　用人（三十一歳）
關島　老女（四十五六歳）
明石　同（三十五六歳）
大和　侍女（二十四五歳）
八千代　同（二十歳）
竹尾　同（十七歳）
久助　庭番（七十歳位）
其の他侍女數名

場所
江戸番町吉田御殿

時代
元和の頃

正面三間高足二重屋體、三方三尺の縁側、勾欄付、正面は階段を以て庭に下りる様になしあり、座敷正面上手より一間床の間、續いて一間違ひ棚、掛軸、置物等よろしく、つゞいて一間二枚の襖銀無地にて緋房の引手、下手は掛橋を以て他の座敷と連絡す。屋體の下手勾欄に近く一本の楊貴妃櫻の大株あり。滿開の枝、庇に近く交錯してゐること。廊下にはすべて一間置に同じ形のつり燈籠を下げあり。上手は泉水築山を見晴した書割、すべて庭内八重櫻滿開の景色、雨後の黃昏時。

（幕開くと侍女一が下手より燈籠に灯を入れて歩く。座敷には明石と竹尾、竹尾は几帳、脇側、褥などの位置を正し、明石はそばに立つて何かと差圖してゐるが、縁側の侍女に向つて。）

明石　そなた、灯を入れて了うたら、早う燈臺を持つて參る様にいうてくりやれ。

侍女一　はい、かしこまりました。（と最後の燈籠に灯を入れて下手に去る）

明石　（獨り言の如く）ほんに上様の御氣まぐれにも……御胸中をお察し申せば、御無理もない、御いたはしい事乍ら困つたものぢやのう。

竹尾　（暫く躊躇した後）でも此宵は殊の外の御機嫌でいらせられる様でござりまするが。

明石　いや、その御機嫌のよい後がきまつた様にきつい御不興ぢや。粗相のない様に氣をつけねばなりませぬぞ。

竹尾　はい。

明石　それにしても氣にかゝるは繁之丞樣あんまり遲いは、こりやもしや上樣のひよんな噂が表向に……

（この時上手よりはるかに子供數人の聲にて『吉田通れば二階からまねく、しかも鹿の子の振袖が。』と唄ふ聲きこゆ。）

明石　いまはしい歌がはやるよのう。

（明石暫く上手をみて不快な表情をする。竹尾もぢつと上手を見て思ひ入る。）

明石　あ、いや、人の噂も七十五日とやら、町家の者さへお入れ遊ばさねば、噂も自づと消えるであらう。御殿の内のみの事ならば、どの樣にでも隱される。あんまりくよ〳〵思ふまい。（と氣をかへて）　これ竹尾、妾は御酒肴の用意をみに參る程にそなたはこの座敷がとゝのうたならば一寸知らせて下され。

竹尾　かしこまりました。

（明石下手に去る。上手より庭傳ひに花井繁之丞腕を拱き乍ら出づ。竹尾これを認めて急ぎ階段のそばに至り。）

竹尾　おゝ、繁之丞樣、お歸りなされましたか、たいそう遲うござりましたなあ。

繁之丞　おゝ、竹尾か。（とあたりを見廻した後近よつて）上樣には又此宵も御酒宴と見えるのう。

竹尾　はい。いつもの通り、七つ過ぎになつてからにはかの仰せ、妾共は目のまはる程いそがしい思ひを致しましたぞえ。

繁之丞　おゝ、さやうであつたか。これはいかい遲刻。（と階段を上り下手に去らんとす。竹尾は袖をとらへ）

竹尾　あれ、まあ待つて下されませ。この頃は上樣とさへいへばその樣にいそ〳〵と。

繁之丞　はて、又嫉妬がましいたは言。身共とて用人といふ役目をもつ身ぢや。御酒宴とあれば何かと用意もある。愚圖々々致して御間に合はず、御癇氣に觸れたならばどの樣な御難題が出ようも知れぬ。そこはなせ。

竹尾　えゝ、もう、その御用意はさき程から明石樣が何もかも取しきつてなされました。その樣にせかずとも、お顏をなりともたまさかにはゆつくりみせて下されませ。

繁之丞　えゝ、べん〳〵とかやうな所で……さゝ、人目にかゝらば一大事ぢや。そこはなして行かしてくれ。（と袖を振り離して行かんとす。）

竹尾　えゝ、これほどとめても、たゞ一刻もゐて下されぬ。それ程お嫌な妾ならこりやもうお止めだては致しませぬ。さあ〳〵少しも早う上樣のおそばへ上つて、可愛がつてお貰ひなされませ。

繁之丞　さりとは、淺墓な。かねて申しきかせし事、そち

は何と聞いてゐたのぢや。滿一年、御殿に町家の男子を入れず、上樣御亂行を防ぎ了せたらば必らず大目付に取立てやるとは三ヶ月以前身共當御殿の用人を仰付けられし際、大久保樣の堅く約せられし言葉ぢや。さすればその曉には必ずそちを迎へて宿の妻にするとは幾度身共誓ひし事ぞ。何事もそちとこの身の爲、役目を無事に濟す爲ではないか。たかゞ、十月に足らぬ日數、そちには辛抱出來ぬと申すのか。

竹尾　いえ〳〵妾は、十月はおろか一年でも二年でも忍ぶ覺悟でござりますれど、凄い程お美しい上樣と、うつとりする樣なお前樣の殿御振りとが……妾しや氣にかゝつて氣にかゝつて。

繁之丞　それが嫉妬と申すものぢや。上樣のお伽をなすは町家の男子を邸内に入れぬ餘儀ない方便ぢやといふ事は口が酸くなるほど申し聞かせてあるではないか。

竹尾　その方便が方便故。

繁之丞　えゝ、方便はあくまでも方便ぢや。身共とてまだ若い男ぢや。上樣の一時のおたはむれに溺れはてゝ、行先の出世の望みを捨てゝしまふ程のたはけではないぞ。

竹尾　必らず見捨てゝ下されますな。

繁之丞　はて、くどい、二世かけたそちぢや。

竹尾　そのお言葉が眞實なら、(と懷より文を出して)あの、これを　(と渡さんとする時下手より。)

八千代の聲　繁之丞樣……繁之丞樣……

繁之丞　おゝ、あの聲、竹尾、さらばぢや。

竹尾　あれ、(と以前の文を出して)必らず首尾して下されませ。(繁之丞の懷に入れる)

繁之丞　待つてゐやれ。

竹尾　お嬉しうござりまする。

(と手を合せる。繁之丞下手に去る。竹尾は茫然とその後姿をみて居る。八千代この時掛橋まで出で來りて竹尾の姿を認む。)

八千代　おゝ、竹尾樣、繁之丞樣をお見かけなされませぬか。

竹尾　えゝ、繁之丞樣。(とあわてゝ階段の許までかへり)繁之丞樣は存じませぬ。

八千代　はて、それではまだお歸りなされぬか、上樣がお待ちかねであるに。(と去る)

竹尾　おゝ、繁之丞樣……お顏をみてゐるといつかはればれとする心も、はなれて了へば、又雲が湧く樣に、心に疑がさして來る……　(間)　……えゝ、思ひそめたが戀の因果とやら、捨てられやうと、殺されやうと、もうこの心はどうにもならぬ。

(と状を胸に抱いて階段を上る時、下手掛橋より侍女

二、三の二人燈籠をもつて出づ。竹尾指圖して程よきところに置かせ、侍女等去りたる後座敷中を見廻して。）

竹尾　おゝ、これでもはやとゝのうた樣ぢや、どれ明石樣に御知らせして來ませう。

（と掛橋より去る。これと入れ代りに下手より庭づたひに久助鍬をかついで出づ。）

久助　宵の中から鬼火が見える。腰元衆が見付けたら又一さわぎぢや。どれ、土なとかけて來ようわい。

（と上手に去る。しばらく舞臺空虚、後、築山の彼方より朧月のぼり泉水より蛙の聲靜に起る。櫻花時々散り來る事。やがて掛橋より八千代手燭をもちて天樹院を案内し出づ。その後に老女關島、明石、侍女大和、八千代、竹尾つゞく。天樹院櫻の樹近く差進みたる時。）

天樹院　見事に咲いたなう。今がさかりとみえる。

關島　さやうでござりまする。今日の雨で又一際色が映えました樣に存じまする。

天樹院　なやましいまでに美しい花の色ぢや。楊貴妃櫻とは誰がつけしか。

關島　まことにふさはしい名と存じまする。

明石　あれ、御覽あそばしませ。朧月が花の梢にいざようて居りまする。

天樹院　美しい春の夜ぢや。片時も惜しまるるなう。

（と云ひながら縁の上に坐す。關島明石等皆々程よき場所に居並ぶ。とすぐに侍女一、二、三、四下手より酒肴の道具を持ちて出づ。）

明石　御意に召す程の事も出來かねましてござりますれど、上樣にはこの花を御肴と思召してまづ御一獻あそばされて下されませ。

天樹院　大儀であつた。

（明石酌をする。此の時下手掛橋より繁之丞出で、下座に平伏して。）

繁之丞　繁之丞、只今歸りましてござりまする。遲刻の儀は眞平御免下され度存じ上げまする。

天樹院　おゝ、繁之丞か。待ちわびたぞ、あまりに遲いは？……どこぞで隱した子にでもあうてゐやつたか。

繁之丞　これは滅相もない事を。恐れ入りましてござりまする。何樣大久保樣のお召にござりますれば一時あまりもお待ち致しました上、とやかくとお話が長業に亙り。

天樹院　うむ、彦左衛門が如何なる事を申したか。

繁之丞　聞え上げまするもかへつて畏れ多い事のみにござりますれば、

天樹院　いや、左樣な儀ならば尚更聞きたい。遠慮に及ばぬ。逐一申せ。

繁之丞　はつ。何樣あの御仁の事でござりますれば、御對

面早々より一口の御言葉を申さるゝでもなくじろ〳〵と私の頭の先より袴のあたり迄御覽なされた後『贅澤千萬なるお納戸獻上、如何致した？』とおとがめがございました故拜領の由を申立てましたる所『さては忠義に精を出し過ぐるのであらうな』と。

天樹院　その樣な事を申したか。

繁之丞　その申し開きに繁之丞ぐつしより汗になりましてございまする。

天樹院　僭上者めが。（獨白の如く）……彥左風情の皮肉、いや、大老ぢやとて、父上樣ぢやとて……この千姬にも申し分はあるのぢや。氣にかくるに及ばぬ。言ひたいだけの事言はせておけハ、、、、（ヒステリックに）さて繁之丞、にはかにこの酒宴を催したも他ではない。あれ、あの樣に泉水で蛙の鳴くを聞けば、もはや春も名殘と思はれる。花の散らぬ中に又そちの猿樂の舞でも見ながら、樂しい一夜を過したう思うた故ぢや。

繁之丞　有難き思召しにはござりますれど何樣私の拙い舞等、只今を盛りの花の前にはかへつて興さめる事かと存じますれば。

天樹院　さらば花をのみ見て酒を酌めと申すのか。そちは君子人ぢやのう。

關島　繁之丞樣、それではあまり曲がないと申すもの、折角上樣の思召し故、まづ御酒宴の幸先を祝うて一さしお舞ひなされませ。

大和　ほんに妾共も繁之丞樣の舞が拜見したうございまする。

天樹院　それ〳〵、皆もあの樣に申すではないか。

繁之丞　お言葉をかへしまするは畏れ多い次第にござりますれど、此節又例の持病の氣味にて足許もみだれがちにございますれば。

天樹院　病氣とあればたつて所望するも心ないわざぢや。それでは舞の代りに何か下樣の面白い話を、おゝさうぢや。此宵はそちの密事を語つて聞かせて與れ。そちの樣な美しい男が町方に居た間は、さぞかし多くの女子共に慕はれたであらう。下樣の者は殊更に情が深いとやら。何を申したとて、自らは決して昔の事をとやかくととがめ立ては致さぬ。さ、早う、語つて聞かせたがよい。

繁之丞　これはまた思ひも設けぬ御難題。繁之丞町方にひつそく致して居りました時分は、とかく病勝にて聞え上ぐべき情事もござりませぬ故。その代り、このほど一寸小耳に挾みました葭原とか申す廓の話を申し上げるでござりませう。

明石　ほう、此程さやうなものの出來しとやら、噂に聞きましたれど、こりや一段と珍らしいお話でござりまする

な。

天樹院　その廓とは何ぢや。

繁之丞　一夜の情を金子にて商ひまする女子ばかりを集めました町でござりまする。

天樹院　していづ方にあるのぢや。

繁之丞　御本丸より十町あまり東にあたりまするとか。

天樹院　すりや、やつぱり、江戸の内か。

繁之丞　左樣でござりまする。もとは汐入りの葭蘆等生じた沼同樣な地でござりましたを、此程甚右衞門と申す者が埋立てまして、遊女の商を願ひ出でました由にござりまするが、何を申すも、神代以來女なくては夜の明けませぬ國、そのさゞめきは格別にて、絃歌の聲は酒肴の香りともつれ、紅燈のかゞやく下に、粉黛をほどこした女子共の美しさは、さながら繪にかいた菩薩の樣にござりまするとやら、まことに龍宮にでも遊ぶ心地が致しまするさうでござりまする。されば武士といはず、町人といはず、皆煩惱の犬となつて、しばしの情をあがなひ、歡樂の夢を結ばむものと、葭原さして押しかけまする故、雜踏もはげしくその中にては喧嘩口論も生れ、遂には戀の恨みより刃傷沙汰も次第に多くなつて參りますとやら。

竹尾　あれ、恐ろしいところでござりまするなあ。

繁之丞　はて、戀は命をかければこそ面白いものでござる。

天樹院　味な事を申す。繁之丞、しかと左樣か。

繁之丞　武士に二言はござりませぬ。

天樹院　たのもしう思ふぞ。これへまゐれ。（と自分の褥の上を示す）

繁之丞　はつ、有難き御諚にはござりますれど、それではあまりに座が高うござりますれば。

天樹院　はて、苦しうない。近うまゐれ。

繁之丞　でも、（と竹尾の眼と合ひはつとして後へしさり）御老女樣方の手前あまりに。

岡島　いえ〱。繁之丞樣、何事も上樣への忠義、御躊躇には及びませぬぞ。

繁之丞　はつ、では御免蒙りまする。

（と天樹院の隣りに坐す。天樹院これを引きよせて。）

天樹院　明石、繁之丞に杯をつかはせ。

明石　はつ、竹尾お酌を。

竹尾　はい。

（とかすかに返事して繁之丞の前に到り震へ乍ら酌し遂に酒を繁之丞の袴の上にこぼす。）

竹尾　あれ、とんだ粗相を。

明石　おゝ、こりや、何としやつた。繁之丞樣お許しなされて下されませ。これ竹尾、何をぼんやり致して居る。そ

れ、お袴にしみが出來るではないか。早うお拭き申さぬか。

（天樹院これを見て繁之丞に鼻紙臺の紙をとつて渡す。）

繁之丞　いや〳〵おかまひ下さるな。

（といひ乍ら紙でふく。）

天樹院　ハヽヽ、こりや、みづからと繁之丞との様をみて目が眩んだか。若い者ぢや。無理もないのう。ハヽヽヽ。

竹尾　申し譯もなき不調法、呉々もお許しなされて下されませ。

天樹院　何の詫びるに及ばう。若い女子のこぼした酒、繁之丞は喜んでゐるぞ。この嬉しさうな顔はえ。

（と所持の扇にて繁之丞の頬を突く。）

繁之丞　これは上様のあまりなおたはむれ、竹尾が迷惑致すでございませう。

天樹院　何の〳〵そちと浮名のたつをよろこばぬ女子はあるまい。

竹尾　あれ、まあ。（と當惑した様子）

明石　これは〳〵、上様のきつい御思惑ちがひ、繁之丞様は上様お一人のもの、お仕へ申す者共が假りにも思ひをかけましては、冥罰の程が恐ろしうござりまする。

（といつて竹尾に眼で下手へと命ず。竹尾座にかへる。）

天樹院　さうすると繁之丞は、この切髪のみづからより他には女子を持つことならぬと申すのか、はてさて、不憫な男ぢやのう。

（と繁之丞を又引きよせる。）

繁之丞　その様に私ばかりをおなぶり遊ばさずにちと美濃守様との御睦言をでもお洩し遊ばされませ。繁之丞、あやかりたうござりまする。

天樹院　何？　あやかりたいと……美濃守などにあやかると出羽の死靈に取り殺されやうも知れぬぞ。ハヽヽ

（此時上手にて鴉一聲鳴く。）

天樹院　そちはそちであればよいのぢや。

繁之丞　でも美濃守様とは思ひ思はれてのお輿入れとうけたまはりましたので。

天樹院　ねたましいと申すのか。

繁之丞　何やらかうお羨やましう。

（この頃より鴉の聲益々多くなり、はげしく鳴きはじめる。）

天樹院　はて、かしましい。又鴉が鳴き出したか。美濃守の噂さへすればきまつた様に鳴き出す鴉、出羽の生れ代りかも知れぬのう。

關島　ほんに美濃守様のお噂を邪魔するところをみれば、

出羽守様が生れ代つてまでお嫉みなされるのかも知れませぬ。

天樹院　はて、出羽も鵜になるとは、あんまり意氣地ない男ぢや。それ故みづからに嫌はれたのぢや。はて、未練がましい。まだ鳴き居るか。誰ぞ、あの出羽を追うてまゐれ。

關島　はつ、では竹尾そなた行つて來や。

竹尾　はい、あのう一人で……

（と哀願する如く關島の顔をみる。）

關島　この月夜に一人では參れぬと申すのか。

竹尾　はい、あのう乾の井筒のあたりだけは。

關島　何？　乾の井筒と？　鵜はお泉水の中島ぢや。決して乾の井筒のあたりではありませぬぞ。

天樹院　これ、關島、今更もう隱し立いたさぬでもよい。繁之丞はあの井筒のほとりに何があるか、よう承知して居るわ。雨上りには鬼火が燃ゆるときけば女子一人では行くまい。これ繁之丞、そち追うてまゐれ。

繁之丞　かしこまりました。

（と中央の階段より下りんとする。）

天樹院　あゝ、これ〳〵、そちを片時も離しては興がさめる。おゝ、よい思ひ付があるわ。そちはかねて手だれの弓取りときいた。こゝから一矢で射止めてみい。

繁之丞　恐れ入りましてござりますれど、少し矢ごろも離れて居りまする故、もし射損じでも致しましたる時は、かへつて恥辱とも相なりますれば、

（と行きかゝらんとする。）

天樹院　待ちや。昔源三位頼政は闇夜にさへ鵺を射て帝の御感を蒙つたといふではないか。

繁之丞　でも、それは名にしおふ源氏の大將軍でござりますれば。

天樹院　はて、そちが女子のみづからに仕へる用人ぢやとて、月夜に數多なみ居る鵜の一羽位は射とめてもよいではないか。誰ぞ。弓を持て。

侍女四　はつ。（と掛橋を渡りて下手に去る）

繁之丞　これは恐れ入りました。では御免下されませ。

（と右の肩衣をぬぐ。侍女四弓と矢壺を持ちて出づ。繁之丞弓を受取り、矢を一つぬきて上手の叢側に到りねらひてはなつ。鵜急に鳴き止みはゞたきの音はげしくして靜まり、蛙の聲聞えはじむ。）

繁之丞　たしかに手ごたへがござりましたれば。

（とて階段より下りやうとする時、上手より久助片手に鍬片手に矢にさゝれたる二羽の鵜をもちて出で來る。）

久助　あぶない事をさつしやるものだ。もう片時もあそこ

にゐて土をかけてゐやうものならば鴉の代りにこの爺が串ざしになるところであつたわい。

（繁之丞これを認めて。）

繁之丞　おゝ、二羽までも打ちとめしか、えゝ、ありがたい。

（と久助の手より奪ふが如く取つて見る）

明石　え？　二羽までも。

明石　上様、二羽まで討ちとめましてござりまする。

天樹院　何？　二羽と？　それは出かした。どれ近う。

繁之丞　はつ。（と進んでみせる）

天樹院　おゝ、見事々々。

八千代　ほんに天晴れなお手際。

大和　今頼政の繁之丞様。

侍女等　お目出たうござりまする。

天樹院　その上繁之丞は業平をもかねてゐるわ。ハヽヽヽ

ささ、骨休めに今一献酌め。

繁之丞　ありがたうござりまする。

（と縁側より久助に件の鴉を投げやり。）

繁之丞　とり捨てい。

久助　はい。はい。

（と捨つて下手に行き乍ら。）

久助　罪もないものを可哀さうに。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、腰元衆の仕事とはいへ、あんまり掘り樣が淺いからぢや。少し雨が降ればすぐにどくろが掘り出されて、行水をし居る。それで鴉が集まるのぢや。

鬪島　久助、何を申し居る。御前ぢや。早う退り居らう。

久助　はい。はい。これは〳〵、御免下されませ。（と去る）

（この間に繁之丞は弓を侍女四に渡す。侍女四それを違ひ棚の上に置く。繁之丞下座に到り懐紙を出して手を拭かんとする時さきの竹尾の文を落す。天樹院それを認めて、さつと顏色かはる。）

天樹院　鬪島、あの書狀。これへもて。

鬪島　はつ。

（と近づく時繁之丞あわてゝとらんと手をかける。）

鬪島　繁之丞樣、御諚でござりまするぞ。

（と取る。竹尾此の後始終はら〳〵する思ひ入れ。）

繁之丞　あ、もし、それは。

天樹院　何と？

繁之丞　お目に入れる樣なたぐひのものではござりませぬ。

天樹院　では、何ぢや。

繁之丞　はつ。

天樹院　文であらう。

繁之丞　文にはござりますれど。

天樹院　文にはあれど？

榮之丞　伯母よりの文にござりまする。

天樹院　何、伯母よりの文と？　それでは披見しても差支へあるまい。

榮之丞　さあ、御說にはござりますれど、いさゝか私事に亙りまして、上聞をはばかる事もしたためござりますれば。

天樹院　さもあらう。若い伯母との私事なればのう。（と文をひらいて讀み）今宵はいつもの部屋にて待つとある。さては邸中にみづからの戀を盗む者があるとみた。關島、この手蹟は誰ぢや詮議いたせ。

關島　はつ。（と受取り）おゝ、これは。（と竹尾の方をみる。竹尾立ち去らんとす。）

天樹院　竹尾、待ちや。なぜ立つ？

竹尾　はい。（と震へてゐる）

天樹院　えゝ、先程の粗相といひ、さてはそちであつたるよな。

明石　いえ／＼これなる竹尾は只今急に眼眩が致す樣に申しまするので、大事な場合をもかへりみず、妾が立たせましてござりまする。何分にも病の儀にござりますれば。

天樹院　えゝ、今更になつてもや／＼と言譯。いらざるかばひ立致すものは同罪ぢやぞ。

明石　はつ。

天樹院　さあ竹尾、こゝへ出やれ。（と立つて竹尾のたぶさをつかみ引ずり出す。）

竹尾　あれ、お赦しなされて下されませ。

天樹院　何赦せと？　人の戀を盗んで赦せとは？　さてさて呆れ果てたたはけものめ！　その樣な心故平素の恩顧をまざ／＼と裏切つて、寵愛かくる榮之丞をふて／＼しく盗めたのであらう。えゝ憎い女子め、どうしてくれやう。

（とたぶさを二三度強くゆすぶつた後、かたはらの高杯を以て竹尾の額を亂打す。これにて竹尾の額凄くかはり、こめかみのあたりより血流れおつ。竹尾しばらく泣いた後きつとなつて。）

竹尾　えゝ、盗んだとはあんまりぢや。お情なうござりまする。

天樹院　はて、盗まぬ者がなぜあの樣な文かいた。證據のあるに、しぶとい女め。（と又打つ）

竹尾　いえ／＼決して盗みは致しませぬ。妾と榮之丞樣との仲は上樣お召よりも前からでござりました。まことをいへば上樣こそ。

天樹院　何と？

榮之丞　あ、もし、上樣、此の女子は氣が狂うたげにござ

りまする、いつそのこと。
（と刀の柄に手をかける。）
天樹院　待ちや。（間）この女子を殺してみづからを欺かうとてもうおそいわ。關島、繁之丞の腰の物をとりあげよ。
關島　はつ。（と繁之丞の刀を取る）
竹尾　おゝ、だまされた〳〵。男の心がこれほどまで不實なものとは知らなんだ。これ繁之丞樣、上樣へのお添伏は役目を無事にすませたいばかりの方便ぢやと。
天樹院　え？
竹尾　たつた今のさき仰つしやつたのは、ありや皆噓でござりましたか。ええ、お前樣は今更となつて上樣が怖しいのか。それともまだ大目付とやらに未練があるのか。二世かけてぢやとたのもしうお誓ひなされたそのお口で御前で四つにといふて下されう事か、妾を殺してこの場の仕儀を塗りつぶさうとはあんまりぢや。あんまりぢや。
（と顏をふりあげて繁之丞をみる）
天樹院　おゝ、その顏は出羽の火傷面にそのまゝ。醜い顏になつたものぢや。（といつて繁之丞の方に向ひ）繁之丞、そちもやつぱり男であつたのう。……えゝ、用人風情のそちまでがやつぱり女子を出世のきざはしの如く心得て、戀のまことをふみにじつても、己れのみをよしとしようとする心であつたのか。おゝさうぢや。竹尾そちの仇もとつてつかはすぞ。
（と違ひ棚の弓矢をとつて繁之丞に擬す。竹尾必死となつて天樹院の袖にすがり。）
竹尾　あ、もし、上樣、あざむかれても妾にはいとしい殿御でござりまする、その儀ばかりは呉々もお赦しなされて下されませ。
天樹院　繁之丞、あれあの樣に、此の期に及んでもなほそちをかばひ居る。何と女子の心はやさしいものであらうがのう。
明石　あ、こりや、繁之丞樣には口中より血をお吐きなされるは？
大和　おゝ、舌をでもおかみきりなされたか。
竹尾　あれ、繁之丞樣。
（とよりそふ。繁之丞、がつくりと伏す。）
天樹院　二枚にも三枚にも使うたその舌ぢや。よう噛まねば死にきれまいぞ。これ竹尾、繁之丞の興ざめた心にかへつてそちがふびんになつた。今日のところは赦してつかはす。これからは命をかけて男を想ふ事等ゆめ〳〵致すまいぞ。男には葭原とやらの遊女の樣に金で戀を賣つてつかはすのが、一番ふさはしい情ぢや。
竹尾　あ、もし、上樣、お言葉を返しまするは勿體ない事

乍ら妾の命は差上げまする。戀しい男のいまはのきはに、その樣な冥路のさはりになります事、中開けて下されますな、それが何よりのお慈悲でござりまする。これ繁之丞樣、未來はかならず……

（と、いつて繁之丞の上に懷劍にて自害し伏す。この頃より月かくれ、空合しだいに暗くなる。）

八千代　あつこりや竹尾樣にも。

天樹院　自害致したか。不愍な者め、その心柄故女子はいつもうき目をみるのぢや。關島この死骸取り片付けい。

關島　はつ。

（と侍女等に目配せする時稻光りする。）

侍女等　あれッ。

（といつた儘伏す。雷鳴とどろき、大粒の雨ばら〳〵と降り出づ。）

天樹院　臆病者めが、初雷ぢや。見苦しい。早う取かたづけぬか。

侍女等　はつ。

（と、とりかゝる。）

關島　左樣ならば上樣。

天樹院　おゝ、大儀ぢや。

（關島二つの死骸をもちたる侍女等を從へ下手に去る。）

天樹院　不所存者の出でし爲、いかう興をさまされた。明石、座敷をかへて又酒宴ぢや。

明石　かしこまりました。

天樹院　又、大和、八千代の兩名は、葭原とやらへ參つて、なるべく多くの女子をだました樣な男をつれてまゐれ。繁之丞の道連にいたして呉れやうわ。

大和　あの、これから。

八千代　葭原とやらへ。

天樹院　いやと申すのか。

大和／八千代　全くもちまして。

天樹院　すぐまゐれ。

大和／八千代　はつ。では御免下されませ。

（と下手に去る。これと入れ替りに同じく下手より久助鍬を持ちて出づ。）

久助　えゝ、又しても鬼火がもえくさるか。どれ土なとかけて消して來やうわい。

（と上手の方に獨り言の如くいひつゝ去る。この頃より雨霽れ又月出づ。天樹院ふと置忘れられた繁之丞の刀に目をとめてこれを取り上げ。）

天樹院　おゝ取るにも足らぬ男乍ら又一人殺して了うた。

……これ築之丞。そちも男の片端ならばようく聞いておけ。そちを死なせたは外でもない。この千姫が男にたてるかなしい意地がさせた事ぢや。男といへば祖父様はじめ父上様、いとしい孫よ娘よと仰つしやるお口で幼いみづからを豐臣へ人質同然の輿入れ、思ひ思はれたと噂に上りし美濃守でさへ、自らをいとしんだのはたゞ家門の榮を計らむ爲であつたのぢや。權勢利慾を得む爲の男の道具に使はれ通して親の慈悲もまことの戀も知らぬ女子が、男にたてたるかなしい意地から出た成行ぢや。

(と刀を落して、放心したるが如く楊貴妃櫻の株近く歩みより、花の梢をみつめてゐる。明石むせび泣きより次第に聲を立てゝ泣く、櫻散り來ること。間。)

天樹院　明石、何を泣く……楊貴妃櫻が美しう散つて居るぞ。面をあげて花の散るのを惜しまぬか。春の逝くのを惜しまぬか……。

(櫻益々はげしく散り來り、靜かに。)

――幕――

解説

岡鬼太郎篇

岡鬼太郎氏、本名は嘉太郎、明治五年八月一日、芝山内（今の芝公園内）に生れた。父君は舊佐賀藩士であつたといふ。

慶應義塾を卒業後、明治二十六年時事新報社に入り、後、轉じて報知、二六等の新聞社に社會部の編輯を擔任し、傍ら演藝記者たること實に前後十五年の久しきに亙つて居る。此間、文士俳優最初の鑑札を受けて、所謂文士劇を起し、たゞに筆硯の力に依るばかりでなく、親しく舞臺に立つて我國劇壇の革新のために盡されたこと多いのは著名な事實である。

明治四十一年、明治座大革新興行の際に聘せられて同座に入り、後年松竹合名社の顧問となられたが、大正十二年の大震災後辭任せられて今日に及んで居る。

鬼太郎氏はその名の如く實に劇界の鬼才である。その歌舞伎劇に於ける造詣の深さは、恐らく何人の追隨をも許さぬものであらう。その造詣を內に藏し、辛辣骨を刺すの才筆を弄して鋭利たる舞臺への觀察を忌憚なく表現した氏の劇評は、寧ろ梨園の人々を畏怖せしめて居るのではないかと思はれる。氏が曾て自作「濃與三玉兎横櫛」と「櫻存知東男」とに關して書かれた文章のうちに次の如き一節があるが、以て氏の氣質の一斑を知るに足るものがある。

名題に讀みにくい字を並べたのは、內容相應、昔のお芝居らしくする爲で、「おとみと與三郎」だの、「殺される與三郎」だのと、そんな智慧のない名を附けるくらゐなら、脚本書きなぞは始めません。私の脚本は、どうせ素人の道樂で、商賣などにしようたつて、とてもなるものぢやありません。世間の人に鼻ッ摘みにされても、自分は自分の勝手氣儘が本望なのです。

以上のやうに自ら素人戲曲家をもつて任ずる氏に（それを言葉の正面から取る取らないはさておいて）、四十篇の戲曲があり、その殆ど總てが上演されて居る。戲曲家としての氏は舊來の日本の傳統を最も忠實に受けついだ作家だと言はれ、最も嚴正に古格を守る人だといはれて居る。

次に個々の作品に就いて解說すべき筈であるが、幸、氏の御好意に依つて、詳細な初演年表を次に採錄することを得たから、すべてをそれに讓ることにする。なほ表中◎印に傍點を附したものが本篇中に收めた戲曲であることを一言して置く。

初演年月	外題	幕數	座名	重なる出勤俳優
明治四十二年九月	二(ふた)夫婦（喜劇）	一	明治	左團次、源之助、その他
同四十三年十月	大晦日(みそか)（喜劇）	一	明治	又五郎、壽美藏、莚若（今の松蔦）
大正元年十一月	慾（森田喜劇）	一	明治	伊井一座
同六年八月	昔噺文福茶釜（淨瑠璃）	一	帝國劇場	三津五郎、彦三郎、新之助
同九年一月	小猿七之助	二	明治	左團次、秀調、猿之助、壽美藏、松蔦、中車
同同五月	御存知東男	三	明治	壽美藏、松蔦、龜藏、壽三郎
同同十月	今様薩摩歌	二	新富	左團次、秀調、猿之助、松蔦、紅若、傳九郎、壽三郎、中車
同同十月	女魔術師	三	明治	河合一座
同同十一月	義貞の使者	一	明治	左團次、秀調、猿之助、壽美藏
同同十二月	淨瑠璃物語	一	歌舞伎	歌右衛門、中車、段四郎、秀調、福助
同十年四月	其(その)姿(すがた)團七縞	二	明治	左團次、猿之助、壽美藏、松蔦、左升
同同七月	慾(ぢんあい)鎌倉合戰	一	新富	中車、我童、福助
同同十月	赤星重三郎	二	歌舞伎	仁左衛門、羽左衛門、左團次、市藏、秀調、福助
同十一年一月	巷談龍釣瓶	二	明治	左團次、秀調、猿之助、壽美藏、松蔦、左升
同同二月	潯陽江（所作事）	一	帝國劇場	猿之助、福助、長十郎、翫右衛門
同同三月	深與三(ふけるよさ)玉兎(つきの)横櫛	二	新富	吉右衛門、秀調、時藏、紅若、勘彌
同同三月	踊供養（所作事）	一	明治	猿之助、壽美藏、松蔦、莚升
同同六月	散書紅(ちらしがきべに)のかしく	二	新富	歌右衛門、吉右衛門、秀調、福助、鶴藏、傳九郎、時藏、三津五郎
同同八月	敵討龜山噺	三	新富	中車、左團次、猿之助、壽美藏、松蔦
同同九月	釣天井	三	明治	左團次、秀調、松蔦、龜藏、傳九郎、壽三郎、中車
同十二年一月	天竺徳兵衛	二	明治	左團次、壽美藏、松蔦、壽三郎

同 同 三月	獨樂賣(所作事)	一	帝國劇場	三津五郎、富助
同 同 六月	人情一夕話	二	新富	歌右衛門、菊五郎、鬼丸(今の多賀之丞)龜三郎、仁左衛門
同 十三年三月	鷺(所作事)	一	京都南座	猿之助、八百藏、小太夫
同 同 十月	埴生村	一	松竹	市藏、松蔦、龜藏
同 同 十月	競鉦	一	松竹	三津五郎、松蔦、時藏、新十郎
同 十四年三月	庚申月夜話	一	歌舞伎	左團次、壽美藏、左升、芝鶴、延若
同 十五年三月	昔摸鼠小紋	二	新橋演舞場	左團次、市藏、猿之助、壽美藏、松蔦、芝鶴、龜三郎
同 同 八月	猪八戒(洋樂入り所作事)	一	歌舞伎	猿之助、八百藏、小太夫、芝鶴、龜藏、友右衛門
同 同 十二月	姿の借駕籠	一	歌舞伎	羽左衛門、秀調、松蔦、莚升、芝鶴、鶴藏、左團次
昭和二年九月	五段目(所作事)	一	新橋演舞場	猿之助、壽美藏、龜藏、吉之丞
同 十一月	女夫會我(所作事)	一	新橋演舞場	新橋藝妓連(東會)
同 三年三月	眠駱駝物語	一	本郷	吉右衛門、友右衛門、七三郎、吉之丞、しうか、勘彌
同 同 五月	當世鉦(所作事)	一	歌舞伎	幸四郎、福助、龜藏、友右衛門
同 同 六月	新てるて姫	一	本郷	猿之助、松蔦、左升、芝鶴
同 同 六月	鞍馬源氏(所作事)	一	明治	吉右衛門、三津五郎、簑助、新十郎、吉之丞
同 同 九月	昔繪暦	二	歌舞伎	菊五郎、猿之助、福助、伊三郎
同 同 十一月	鶴壽千歳(琴曲入り所作事)	一	歌舞伎	羽左衛門、菊五郎、福助、家橘、男女藏(今井慶松社中出演)
同 四年四月	源氏烏帽子(所作事)	一	帝國劇場	梅幸、幸四郎、宗十郎、勘彌、高麗藏

一、右の外、未上演のもの一種

雷神(所作事) 昭和三年一月發行「文藝春秋」所載

一、上演月年未詳のもの二種

大江山(所作事)

隅田川雨長吉舟

山崎紫紅篇

山崎紫紅氏、本名は小三、明治八年三月三日、横濱市戸部町に生れた。小學校卒業以外別に學歴を持たない。氏の戯曲的活動は隨分古いもので、明治の新史劇は坪内逍遙氏故森鷗外等と共に同氏などの助力で始まつたといつてよい。現在の歌舞伎俳優及新派の俳優で同氏の戯曲の演出に關係のないものは、東西何れにも一人としてないであらう。史劇「七の桔梗」「史劇十二種」「史劇十種」論集「日蓮上人」「大日蓮」等の著作がある。

なほ横濱市會議員、横濱取引所理事を勤められたことがある。

氏には上述の如く多數の史劇があるが本篇に掲げた數篇を以つて氏の傾向の大體を窺知することは敢て困難ではないと思ふ。

氏は震災のためその記錄の全部を燒失されたので、茲に詳細な年表を採錄することの出來ないのを遺憾とする。

以下本篇中に錄採した各戯曲を簡單に解説する。

「歌舞伎物語」。山崎氏の最初の長篇戯曲といはれるもの。多くの戯曲家に取扱はれて居る出雲のお國に不平不遇の秀康を絡らみ合せた複雜な史劇、市川左團次が歸朝後革新二回の興行に上演したといふから當時にあつては大いに新しい史劇だつたわけである。配役は左團次の秀康、女寅（後の門之助）のお國、小團次の名古屋、壽美藏の右京等であつた。特に大詰の場で、荒二郎の醫師の無言の演出が識者の賞讃を博したといふことである。

「その夜の石田」。やゝともすると柔佞な小人と見られる石田三成を、大望を抱いて乾坤一擲を關ヶ原に試みた英雄、自ら唾して天下を取るべしと立つた大野心家として描き出して居る。史上人物に新光線を放げかけた一つの試み、短い一幕のうちに、詩情も豐に、見事に纒められて居る。これは岡鬼太郎氏、岡本綺堂氏等の文士劇で演ぜられたことがある。

「亂れ笹」。新田方と足利方とに生れた男女の宿命的な結婚、其處に悲劇の素因があつた。子を殺す小笹も、親に殺される竹童も悲運の下に生れたものといはねばならぬ。その頃にあつては珍らしい神祕的宿命劇であつたらう。

「三七信孝」、紫紅氏の戯曲中傑作の一つだと思ふ。靜緒は屹度一つの新い性格の創造であつたに違ひない。此作品には確りした思想が明瞭に具體化されて居る。靜緒が、城を救ふために敵方へ行つて吳れと賴む信孝を責めるあたり近代の匂が特に強い。その頃として之だけの作品を書いたのは大したものだと思ふ。宗十郎、宗之助で上演して、宗之

助の靜緒が特に好評であつたといふが、當然なことである。

「甕破柴田」。氏の最も有名なる戲曲の一つ。敵味方の果敢なき戀に命を落した太郎と常夏との戀を詠嘆する柴田の臺詞など、大いに喝采を博したことゝ思はれる。初演は例の文士劇で、柴田が鬼太郎氏、太郎が栗島狹衣氏、常夏が葛城文子氏、劇場は東京座であつた。後に歌舞伎座で中車、猿之助、福助が演じ、更らに昭和二年には本郷座で友右衛門、龜藏、福之丞が演じた。今日では、此作などは近代の史劇のうちでは立派な古典の一つになつて居る。

「鴫の女」。出て來る人物はたゞの漁夫と濱の女、燈籠で島の女を招く優雅な戀、死んでも逃さじと定次の跡を追ふおみねの執念、時代は不定だといふ、何處までもロマンチツクな劇である。山崎氏の詩的傾向が最も端的に現はれて居る戲曲。有樂座女優劇の最初の脚本に選定され、その後各所に上演されたが、横濱座の壽美藏、松蔦の演出が最も好評であつた。

「松永彈正」。何處までも線の太く强い松永彈正、怖ろしいやうな智惠者島左近、平蜘蛛の釜を中心にして、龍姫と筒井定次の戀を配し、山崎氏一流の手の込んだ長篇戲曲である。此戲曲に讀者は氏の異常なる構成力を發見するであらう。

「千利休」。父の利休は藝術第一、茶道のために死にもすれば生きもする、娘のお吟は戀に生きる、父が生命にも替へがたしとする茶道のためにも宗巖を思ひ切ることは出來ぬ。いづれもわれと己れに立てる誠である。必然的に悲劇が生れた。利休のために斬られるまで、お吟が宗巖を諦めるといはぬところに此劇の意義がある。道に徹した利休の心境が浮彫のやうに描き出されて居ることも見落せない此戲曲の長所であらう。

伊原青々園篇

伊原青々園氏、本名は敏郎、明治三年四月二十日、松江市雜賀町に生れた。松江中學校を經て第一高等學校に入學したが、半途にして退學した。

その後、二六新報に劇評を擔當し、次いで早稻田文學記者となり、更らに都新聞記者に轉じ、今日では都新聞調査部長の重任を負うて居られる。

氏は、元來戲曲家としてよりも、劇評家及演劇學者として重きをなして居る。氏の行屆いた劇評は、今日もなほ都新聞紙上に於て常に觀劇家の好指針となつて居る。

特にその著「日本演劇史」「近世日本演劇史」及「市川團十郎の代々」は我國劇界に貢獻するところ甚大であつて、

氏を演劇學者の最高權威たらしめて居る。

かくの如く、氏は考證、理論の方面に於て日本演劇に寄與するところがあつたばかりでなく、多くの戯曲をもまた執筆されて居る。本篇載するところの「出雲の阿國」はそのうちの一篇である。

「出雲阿國」此戯曲は歌舞伎踊の始祖といはれる阿國に、豐公沒後の大坂城の不安、それに本邦史上最も戯曲的な女性といはれる淀君を配して結構されたものである。結局、山三が阿國と一緒に武士も世俗の欲望もすてゝ戀と藝とに生きようとするところに、藝の威嚴と德とが十分に語られて居る。

高安月郊篇

高安月郊氏、本名は三郎、明治二年二月二十六日、大阪市瓦町に生れた。父方の系統は安藝の藩士、母方のそれは南朝の遺臣であつたといふ。

氏は、坪内逍遙氏、故森鷗外等と同じく、早くから日本演劇の革新を志し、夙に西洋文學に親しみを持つて、率先してドストイエフスキ、イプセン等を我國に紹介し、また樂劇の筆を執つて新演劇の氣運を促進する等、わが文壇劇壇に貢献するところ實に多かつたが、不思議と華々しく世に騒がれるといふことがなかつた。

左に氏の手記に係る年譜を揚げる。讀者は之に依つて氏の功績の凡そを知ることが出來るであらう。年譜中傍點を附したものは本篇中に採錄した戯曲であつて、その作品に限り編者が一應の解說を附することにする。

明治二年　大阪に生まる。醫を學ぶべく、十三歳東京に出で始めて詩の味を解す。二十一歳京都の山寺に入り、歸阪し始めて詩を作る。

同二十六年　始めてイプセンの「社會の敵」を同志社文學へ、「人形の家」を一點紅へ出す。

同三十四年　右の二作に評傳を加へて「イプセン社會劇」として發行。

同二十八年　故鄕の家を出て京都に寓居、始めて戯曲「重盛」を作る。

同二十九年　東京へ出て、右の「重盛」を發行。

同三十年　戯曲「公暁」を新著月刊へ出す。

同三十三年　小說「金字塔」詩「夜濤集」發行。

同三十四年　此頃より國風音樂會、銀峰會、演劇改良會などに關して、京都文藝復興に努力す。

同三十五年　始めて戯曲「月照」、シエクスピアの「リア

王」飜案「闇と力」を南座に上演。月照に福井茂兵衞、リア王に村田正雄等。「大鹽平八郎」を夷谷座に上演。平八郎に福井茂兵衞。

同三十六年 「大鹽平八郎」を大阪辨天座に上演、單行本として發行。始めて樂劇「後の羽衣」を文藝界に發表。詩「春雪集」發行。此年、「江戸城明渡」を東京明治座に初演。勝安房に川上音次郎、西鄕吉之助に高田實、德川慶喜に藤澤淺二郎等。歌舞伎座派より大攻擊、川上等逆襲、典型主義と自然主義の衝突となる。歌舞伎派未だ立たず。次いで同篇を東京宮戸座に再演。勝に伊井蓉峰。

同三十八年 「江戸城明渡」大阪角座に三演。勝に片岡我當、德川に尾上多見之助。新派沈默。「落踊都風流」を京都明治座に上演。惟然坊に市川右團次(先代)。「櫻時雨」を京都南座に初演。吉野に中村芝雀、灰屋紹由と三郎兵衞に我當。

同三十九年 「櫻時雨」を大阪辨天座に上演。役割同前、應山に市川右團次。

「櫻時雨」を淨瑠璃につゞつて、大阪堀江座に上演。竹本伊達太夫等語る。

「嵯峨野の露」を大阪中座に上演。瀧口入道に中村鴈次郎、横笛に中村芝雀等。「嵯峨野の露」と詩とを合せて「寢覺草」として發行。「祇園の百合」を新小說に發表。

同四十年 「吉田寅次郎」を東京新富座に上演。吉田に岡鬼太郎、杉に荒川重秀、桂に岡本綺堂、岡部に杉贋阿彌等、當時の所謂文士劇である。

「櫻時雨」を大阪角座に上演。吉野に我當、紹由に仁左衞門、三郎兵衞に德三郎。

同四十二年 東京に移る。「櫻時雨」を明治座に上演。吉野に澤村宗之助、紹由と三郎兵衞に仁左衞門、應山に市川左團次。

同四十三年 「櫻時雨」を東京歌舞伎座に上演。吉野に中村歌右衞門、三郎兵衞に市村羽左衞門、紹由に仁左衞門。

同四十四年 小說「魔の曲」發行。

「地獄太夫」を趣味へ出す。

同四十五年 「自由王」を大阪中座に上演。山田長政に實川延二郎。

大正元年 「月照」を東京座に上演。月照に市川小團次等。

同三年 「櫻時雨」を本鄕座に上演。吉野に芝雀、三郎兵衞と紹由に仁左衞門。

同五年 「東西文學比較評論」と「脚本集」發行。

同六年「細香と山陽」始め「關ヶ原」等を「月郊集」として、次いで「文集」發行。
同七年「江戸城明渡」を歌舞伎座に上演。勝と小栗上野介に市川八百藏、西郷に左團次、德川に歌右衛門、伊庭に羽左衛門等。新派も此戯曲で立たんとして止む。
「詩集」發行。
同八年「櫻時雨」を歌舞伎座に上演。吉野に歌右衛門、三郎兵衛に羽左衛門、紹由に仁左衛門。
「小紫」を帝國劇場に上演。
「關ヶ原」を帝國劇場に上演。石田三成に澤村宗十郎、淀君に尾上梅幸、德川家康、大谷吉隆、圓鑑國師に松本幸四郎、前田利家に尾上松助等。
「關ヶ原」を京都南座に上演。石田に中村福助、淀君に雀右衛門、德川に多見藏。
同九年「月照」を大阪浪花座に上演。月照に多見藏、西郷に延若、平野に魁車。歌劇「余吾の天人」を寶塚と帝國劇場に上演。
同十年「醍醐の春」を新富座に上演。淀君に歌右衛門、三成に左團次、慶安に吉右衛門。
「辨の内侍」を市村座に上演。内侍に歌右衛門、四條隆資に左團次、里見主税に羽左衛門。
「櫻時雨」を帝國劇場に上演。吉野に梅幸、三郎兵衛に宗十郎、紹由に仁左衛門、光悦に幸四郎。
同十一年「盆踊」を新富座に上演。惟然坊に市藏等。
同十二年　震災のため大阪に移る。
「窖」をサンデイ毎日に發表。
此窖が發表されたのは十二年であつたが、執筆はそれよりも二三年前であつたらしい。書き卸してすぐ大阪へ送られたのであつたが上演には至らなかつた。「元祿の榮華と破滅に古今を象徵した」ものだと作者自身が語つて居る。此作品にも、名作「櫻時雨」に現はれて居る作者の趣味生活の一面がよく現はれて居る。
同十三年「福神舞」を大阪中座に上演。彌三郎に鴈次郎、高圓に歌右衛門、大黒屋に幸四郎等。
「八代目團十郎」を東京演技座、大阪浪花座に上演。團十郎に澤田正二郎、海老藏に中井哲、久代に久松喜世子。
此戯曲は作者が震災に追はれて大阪に移つて居る時に書かれたもの。大阪に生れて、京都大阪と上方の地にも住み、東京にも住んで見て、兩地方の住民をよく知つて居る氏にして始めて企て得る作品である。發表機關の乏しい大阪で、此作は先づ新聞紙上で發表された。すると澤田正二郎が東京から上演を申込

んで來た。このことも作者に取つては意外であつたが、上演して見ると立派に成功したのは更らに意外であつたといふ。公の義理と親に對する私情とに板挾みにされて主人公の團十郎が死ぬ。海老藏の沒理解と團十郎の弱さが歯痒い氣がされぬでもない。

「壇之浦」を演藝畫報で發表。

これもづつと前、「簪」を書く前あたりに執筆されたものである。歌舞伎座の俳優たちのためにと書かれたものであつたが遂に上演は見なかつた。壇之浦の戰を背景に宗盛の怯懦を描き出し、のち清水坂の傘屋法橋の場になつて、平相國の胤が傘屋の娘やどり木となり、傘屋の倅が宗盛卿となつて居るところに、運命の數奇と人生の無常とを發見しようと試みたものである。

「姨捨山」を邦樂座に上演。若柳派で。

同十四年　「關ヶ原」と「櫻時雨」を歌舞伎座に上演。三成に左團次、淀君に歌右衛門、吉隆に羽左衛門、吉野に福助、三郎兵衛に延若、應山と紹由に仁左衛門。

「大阪陣」を大阪中座に上演。安井九兵衛に延若、淀君に魁車。

東芦屋に移る。

「櫻時雨」を大阪八千代座に上演。應山と紹由に仁左衛門、三郎兵衛に千代之助、吉野に德三郎。

同十五年　「あじろ舟」を大阪中座、京都南座に上演。津之助に鴈治郎、お種に福助、浪江に魁車。

此戯曲は上演の前年の暮に執筆されたものである。此作の意圖に就いて、「紙治より覺めかけた大阪の町人、然も御舊習に捉はれて、心中もまゝならぬ悲劇、俳優の手と、見物の目にはそれで一杯で、私としても出來る丈接近したのであつた。」と作者自身が語つて居る。維新前の烈しい時勢の動きが、武士階級ばかりでなく、町人の間にも浸潤して行つて居る姿の描かれて居るのが面白い。

東京へ戻る。

昭和二年　「關ヶ原」を大阪中座に上演。三成に福助、淀君に我童。

「梁川紅蘭」を早稻田文學に發表。

舞踊「寂光院」を市村座に上演。若柳派で。

「江戸城明渡」を本郷座で上演。勝に中車、西郷に左團次、德川に壽美藏。

同三年　「櫻時雨」を大阪浪花座に上演。吉野に扇雀、三郎兵衛と紹由に我童。

「櫻時雨」を京都南座、名古屋に上演。吉野に秀調、三郎兵衛に延若、紹由に仁左衛門。

同四年「櫻時雨」を明治座に上演。吉野に福助、三郎兵衞に我當、應山に菊五郎、紹由に仁左衞門。
「東西文藝評傳」「日本文藝復興史」を發行。

高安氏の手記になる年表は以上で終つて居るが、此一見詳細を極めた年表中にも、本篇に收錄した戯曲のうち三篇までが脱落して居る。次にそれらの作品に簡單なる解説を書き加へる。

「平賀源内」。此作は大正の初年、氏が西片町の椎の木の東に寓居して居る時に出來た。「失意、癇癪は徐に凝結したが、それを轉化したのでもなく、古今に通じろ才人の悲劇「平賀源内」を作つた。」作者の此言葉から讀者は感ずべきものを感じ得るであらう。文藝協會でイプセンに手をつけ、ノラの名が喧傳されるやうになつた時に、「久々で姪にでもあふ樣であつた。」と述懷して居る氏が、時代に先走つて世に容れられなかつた源内に同感を持つたのはむしろ當然といはなければなるまい。

「狂小町」いつの頃の作か材料が不十分で分明しない。寄れば逃れ、逃れゝば追うて來る戀の微妙な相、それとうつろいやすい女の美しさの果敢なさとが描かれて居る。舞蹈味のある舞臺、全篇を貫く一脈の詩情、それが此作の生命であらう。

「崋山の魂」一種の象徴劇、此作の中にも目のない世俗に對する作者の怒が窺はれるやうに思はれる。

長谷川時雨篇

長谷川時雨氏、本名は康子、小説家三上於菟吉氏の夫人である。明治十二年、東京日本橋に於て生れた。

戯曲の研究に就ては坪内逍遙氏に師事し、曾て尾上菊五郎氏と共に狂言座を組織し、また舞臺研究會を起したことがある。

戯曲集「櫻ふぶき」「情熱の女」のほかに「美人傳」(二部)等多くの著作がある。

現在は雜誌「女人藝術」を主宰して大いに女流文學のために氣を吐いて居る。

本篇に收めたのは氏の戯曲三つ。

「犬」。は犬よりも劣つた生活を餘儀なくされて居る人間の一家族があらゆる虐げを受けつゝ滅んで行く姿、陰慘な戯曲であるが、さういふ生活者を產み出した社會制度の批判といふやうなものはまるで缺けて居る。

「氷の雨」年老いた淫賣女の末路、腐れた生活の果て業病

に瀕して居る彼女の心にも不思議と親ごゝろといふしほらしい氣持と、キヤプテンに憬れるロマンチシズムとが殘つて居た。然しまはりに殘る者たちの間には、病人が呼吸を引取らうとする瞬間にも彼女が殘して行く金を奪はうといふ醜い慾念が爭鬪する。極めて自然主義的な見方の上に立つ一篇である。

「北國藥研谷」。恩義と意地とに板挾みにされた村山半六が、餘儀ない經緯から恩義を絶つて意地を立てる。幕切れで、小雪と半六が刺し違へて三左衞門の跡を追ひさうなところを、逃げのびて生きるのが新しいといへば新しいのか。一種の所謂大衆戲曲である。

岡田八千代篇

岡田八千代氏は明治十六年十二月、廣島に生れた。東京富士見町小學校、女子職業學校を經て成女學校に學んだ。故小山内薫の令妹であつて、洋畫家岡田三郎助氏の夫人である。

令兄薫の影響もあつたのであらう、早くから戲曲の制作に志し、また劇場の實際に關係するところがあつた。「門の草」「新綠」「繪具箱」「八千代集」の著があり、現在では、劇團芽生座を主宰して居る。

本篇に採錄したのは三篇の一幕物である。

「黄楊の櫛」。これは、家族制度の桎梏の中に呻吟して居る日本女性の呪咀の聲である。古るい江戸情調の雰圍氣の中に、此近代的な社會問題が巧に取り扱はれて居る。作者が女性であり、女性の立場からその主人公に深甚な同情を寄せて書いて居るところから此作品の力が溢れて來て居る。おつなが、鐵之助にむかつて、父藤平が來てからの生活の味氣なさを口說くあたりに此作品の思想的主題が尤も色濃く出て居る。

「靜夜」。此作品にも、制度に縛られて精神の自由を活かし切れない女性の惱みが描かれて居る。これは家族制度に對してといふよりも、そのうちの一部分である結婚制度に對する否定的批判である。「貞操」といふ傳統的美德に對する疑問である。此作品で見ても、此作者が戲曲作法の上では古格を比較的に守りながらも思想的には常に一歩を進めんとして居る努力が窺はれる。然かも作品が少しも思想の骨をあらはにせず、乾燥に陷らぬあたり、作者の戲曲的手腕の凡手ならざることが證される。

「敗北者」の中では、洋畫家とそれをめぐる女弟子たちとの裏面の醜汚さとが忌憚なく抉剔されて居る。彼等の求めるものは藝術ではなくて、虛榮虛名であつた。敗北者花江

は果して眞の意味の敗北者であつたかどうか。其處に讀者の考へるべき問題が殘されて居る。

野上彌生子篇

野上彌生子氏は、明治十九年、大分縣臼杵町に生れた。臼川野上豐一郎氏の夫人である。

早くより小說家として立ち、「新しき生命」「小說六つ」「海神丸」等の著作のほかに、小說及び飜譯「傳說の時代」がある。

戲曲の著作には本篇に採錄したもののほかに、「腐れかけた家」等がある。

氏の作風は一言にして言へば重厚壯大、常に作品の底には儼たる思想が横たはつて居る。年に一作或は二作位しか發表しない寡作家で、片々たる小作には筆をいやしくもしないといふ趣がある。作品のいづれにも十分なる思索と、行屆いた洗錬とが裏づけられてゐるので、少數な女流作家中特に文壇に重きをなして居る一人である。

本篇に採錄されたるうち、最初の「縛られた者」はギリシヤ神話に材を假りて、正義と力と意志との旺な姿を描き出したもの、結末に至つてプラミシコースが、自分の心に疑を持ちはじめながらも、更らにその自分の卑しいところをも征服しようと誓ふあたり、特に意力に對する讃歎が高鳴つて居る概がある。形式は「對話」であつて、もとより上演を念として舞臺上の約束に注意を拂はれたものでないことはいふまでもない。

「藤戶」は、理想と現實との喰違ひである。主人公の盛綱は、自分の新領土に天晴れ理想的な政治を布いて、地上の天國を創造しようと志したが、その領土を手に入れるために、彼は自分にも氣づかずに大きな惡を犯して居たのであつた。短いながらも好箇の悲劇である。

大村嘉代子篇

大村嘉代子氏は明治十八年十二月二十三日、東京市麴町上二番町に、陸軍教授木野村政德を父として、基子を母として生れた。氏の生家は代々相模小田原の藩士であつたといふ。生母には早くから死別された。

麴町番町小學校、東京府立第一高等女學校を經て女子大學を卒業し、實業家大村和吉郞氏に嫁した。

女子大學卒業後、岡本綺堂氏に師事し、その薫陶を受くること、既に二十年に近いといふ。

たそがれ集（大正十三年九月、新作社發行）水調集（大正十四年九月、文成社發行）等の著書がある。

本篇に採錄した「みだれ金春」は、たそがれ集に集載された作品の一つで、藝の鍛嚴に遊女の誠を綯ひまぜたもの。どの一場を取つて見ても、立派に芝居になつて居るあたり、歌舞伎の傳統を活かした作者の戯曲的手腕の慥さを示して居る。

此戯曲は大正九年五月、宗十郎、宗之助、嘉久子、浪子等に依つて帝國劇場に上演されたのが初演である。

次に大村嘉代子氏の初演年表を添へて置く。

紫蓮譚　有樂座　大正二年一月
粟島狹衣、葛城文子、岩間櫻子。

みだれ金春　帝國劇場　大正九年五月
宗十郎、宗之助、嘉久子、浪子。

柳橋夜話　帝國劇場　大正十年一月
宗十郎、梅幸、幸四郎、勘彌、宗之助、松助。

白糸と主水　帝國劇場　大正十二年一月
梅幸、幸四郎、宗十郎、勘彌、宗之助、幸藏。

春日局　歌舞伎　大正十四年九月

本町糸屋の娘　帝國劇場　昭和二年一月
歌右衛門、幸四郎、壽美藏、福助、莚升、梅幸、幸四郎、宗十郎、勘彌、松助、幸藏。

木村富子篇

木村富子氏は明治二十三年十月十日、淺草區千束町に生れた。

明治四十年三月、日本高等女學校家政科を卒業、のち大正八年春より松居松翁氏に師事したが、日ならずして同氏は洋行せられたので、その後は獨力戯曲研究の道に精進して、大正十四年夏に至つて始めて戯曲創作の筆を執り、翌年二月、處女作「玉菊」一幕を早稲田文學誌上に發表した。

その後多くの劇作があるが、本篇には此處女作「玉菊」と舞踊劇「高野物狂」とを採錄した。

「玉菊」は、太夫らしい太夫玉菊の張りと意氣地、純情の青年與之助の戀、それに與兵衞の親心と、女房ふみのしほらしさを絡ませたもの、その思想は淨瑠璃の人情の範圍を出ぬもので、格別新味があるとは言へぬ。然し此戯曲の長所美點はさういふ思想的方面にあるのではなくて、寧ろ、舞臺の美しさ、臺詞の洗錬といふやうな技巧的方面にあるのである。一篇のうちに流れて居る昔ながらの廓情調、それをかくまで澁滞なく流麗に描き出し得る人は蓋し稀れで

あらうと思はれる。

此戲曲は發表の年五月、歌舞伎座に於て、歌右衛門、中車、左團次、福助、壽美藏等に依つて華々しく上演された。

「高野物狂」は近く昭和二年十一月演藝畫報誌上に發表された。樂譜と型とを生命とする舞踊劇であるから讀んだゞけでは、十分にその眞價を味ひ難いものであるが、特に此作の面白いところはシテ役の高師四郎が、元來佯狂なので本心と物狂とを舞臺上で踊り分ける點にある。かういふ作品は芝居の實際に通曉して居る氏の如き作家でなければ容易に企圖することの出來ぬものである。

此戲曲は發表の同年同月本鄉座に於て猿之助、兒太郎等に依つて上演された。

次に氏の著作並びに上演年表を書き加へて置く。

玉菊	早稲田文學	大正十五年二月
	歌舞伎座	大正十五年五月
	歌右衛門、中車、左團次、福助、壽美藏。	
大君來ませ	舞臺評論	大正十五年二月
勝家と勝助	戲曲集玉菊	大正十五年五月
市村竹之丞	同上	同上
局淺岡	同上	同上
津藤と默阿彌	同上	同上
心中雪夜話	同上	同上
	市村座	昭和四年二月
	伊井、河合、喜多村。	
與三郎命の月魄	歌舞伎	大正十五年十月
	歌舞伎座	大正十五年十月
	羽左衛門、仁左衛門、猿之助、松蔦。	
	昭和座	昭和四年五月
	友三郎、薪車、松五郎。	
雪女郎	サンデー毎日	大正十五年十月
	中座(大阪)	昭和二年三月
	家橘、秦次郎、梅幸、羽左衛門。	
	市村座	同上
	若柳流舞踊研究會	
	本鄉座	昭和二年五月
	家橘、壽美藏。	
信玄筒	早稲田文學	大正十五年十月
犀ヶ崖	舞臺評論	昭和二年一月
うちかけ	サンデー毎日	昭和二年五月
	朝日講堂	昭和二年六月
	花柳流舞踊研究會	
秀吉最期	演藝畫報	昭二年五月
河豚	早稲田文學	昭和二年五月

巳の吉殺しの船　演劇改造　昭和二年七月
仇吉と米八　同上　昭和二年九月
道行夢路駒　本郷座　昭和三年二月
　松蔦、時藏。
玉藻前　劇と評論　昭和三年一月
春怨　朝日グラフ　昭和三年四月
　本郷座　昭和三年四月
　猿之助、松蔦。
獨樂　歌舞伎　昭和三年九月
　歌舞伎座　昭和三年九月
　猿之助。
濱町音頭　明治座　昭和四年六月
　米吉、純藏。
寢臀　演藝畫報　昭和四年七月
　明治座　昭和四年七月
　吉右衛門、三津五郎、福助、友右衛門。

弘津千代篇

弘津千代氏は明治三十四年一月五日、山口縣熊毛郡伊保庄村に生れた。廣島女學校附屬小學校、廣島縣師範學校附屬小學校、廣島縣立廣島高等女學校を經て、日本女子大學校文科國文科を大正十一年に卒業した。早くより戯曲家たらんと志し、女子大學在學中既に中村吉藏氏に師事した。

氏は女子大學卒業の年、友人二氏と合作の「華子城物語」を出版したが、次いで大正十四年に氏自身の次の作「天樹院」一幕を舞臺評論誌上に發表した。これが本篇に採錄した「吉田御殿」であつて、氏の處女作と目すべきものである。此作品は同年九月帝國劇場に於て守田勘彌、森律子、河村菊江等に依つて上演、好評を博した。

此戯曲の主題は、有名なる千姫吉田御殿の亂業といふ傳說に加へられた新しい解釋にある。氏は千姫の亂業を好色な婦人の仕方のない放埓とだけ見ないで、その裏に女性の解放、男性の横暴に對する女性の復讎といふ意義を裏づけた。一見歌舞伎劇そのまゝの傳統を踏襲して居るかに思はれる此作品の生命は其處にあるのだ。

次に氏の作品年表を書き加へて置く。なほ「華子城物語」と「吉田御殿」は前文と重複するから、表中には省略する。

大姫　「演劇研究」　大正十五年二月號
女敵異聞　「演劇研究」　大正十五年十一月號
清盛と常盤　「舞臺評論」　昭和二年一月號
加賀の千代　「文化生活」　昭和二年六月號

忠信の戀人「演劇研究」昭和二年十一月號
繪島流謫秘話「演劇研究」昭和三年一月號
好色一代女「演劇研究」昭和四年一月號
加賀の千代（改訂）「女人藝術」昭和四年七月號

昭和四年六月
（編輯部編）

編輯及校訂
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第三十六巻
現代篇第四輯・第十五回配本

禁無斷上演

昭和四年七月二十日印刷
昭和四年七月二十三日發行　（非賣品）

著作者　岡鬼太郎、山崎紫紅、伊原青々園、高安月郊、長谷川時雨、岡田八千代、野上彌生子、大村嘉代子、木村富子、弘津千代、

發行者　和田利彥

印刷者　島源四郎

製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八
發行所　春陽堂
振替東京一六一七

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷



